

東方大魔王伝

黒太陽

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダイに敗れた大魔王バーン

生ける屍と化し宇宙をさまようバーンに謎の女が現れる……

ドラゴンクエストとダイの大冒険と東方projectとその他のクロスです。

ダイの大冒険は原作終了後で、東方なんですですが実は原作はやってなくて他のクロス作品を見たりした程度なので時系列や言動が滅茶苦茶になるかもしれません、なのでそう言った所を許容してください。

目次

プロローグ	1
第1話 紅い館	12
第2話 悪魔の妹	31
第3話 魔法使いと妖精	50
第4話 図書館異変	73
第5話 変化	95
第6話 大魔王 幻想を巡る	117
第7話 パーティーとチェス	137
上の決闘	155
第8話 不死鳥	181
第9話 未知との遭遇	181

第10話 八雲 紫	199
第11話 神魔邂逅	221
第12話 神さびた古戦場	237
第13話 悪夢	257
第14話 再会	286
第15話 忘却と花畑	306
第16話 和解	326
第17話 紅魔館籠城戦	346
第18話 最後の	365
第19話 序曲	399
第20話 復活	426
第21話 幻想大戦	461
第22話 敢然と立ち向かう	493

第23話	血路を開け	522
第24話	おおぞらに戦う	558
第25話	戦火を交えて	596
第26話	魔帝	629
第27話	大魔王	665
第28話	ただ友の為に	696
第29話	決戦	732
第30話	歩めぬとしても……	
761		
第31話	死を賭して	797
第32話	終曲	828
第33話	余韻	876
第34話	終わりの始まり	901

第35話	帰	932
第36話	夜に想う	959
第37話	半分	987
第38話	そこに居た証	1021
第39話	紅の狂想曲	1054
外伝く大の大冒険く		1082
第40話	運命	1119
第41話	前夜	1156
最終話	さらば……愛する幻想郷よ	
……		
エピローグ	く亡き王の為のレクイエム	1198
ム		1276

プロローグ

「さよなら……！大魔王バーン……！！」

それが敗れた余の聞いた最期の言葉

世界を震撼せしめた大魔王は竜の騎士の称号を持つ勇者によって倒された

世界から魔は薄れ、平和が訪れた世界

ただ、世界を救った勇者が戻らない世界……………

そんな世界を漂う者が一人……………

「……も違う……魔力に満ちた世界だからもしやと思ったのだけど……」

空を漂う女は溜め息混じりに一人愚痴る

（……もダメだった……もう何百年探し続けてるかしら……）

考え事をしながら上空へ飛翔する

「ん？」

飛翔を続けていた動きが止まり、女は自分のいる位置よりさらに上空を見る

（何かしら？強い魔力を感じる……でもこの先は宇宙……）

少しの間思案するが考えても埒の明かない事だと察した女は目の前に奇妙な空間を作り出し入って行った

「これね……魔力を放っていた物は」

女が宇宙空間で見つけた物

それは今や物言わぬ石像と化し宇宙をさまよう大魔王バーンの遺体

「死してなおこれほどの魔力を放っているなんて……いえ!? これは……」

漂うバーンの石像を凝視する女

(生きてる!?! 肉体は石像と化し魂も石の肉体に囚われながらも生きてる……そしてこの石化は呪い……自力で解くことが出来ない呪いの中生きている……でもこれでは死んでいるのと同義……)

バーンの石像を見つめながら女は思案を巡らせる、石化したバーンの顔を見つめてい

る内に女の思考が変わった

(石像の状態でこれほどの力を持つならアレに対する抑止力……いえ刃になり得るかも知れない……)

差し出した手をバーンの頬に添えた

「あなたにとつては不本意かも知れないけれど、第二の生を与えてあげるわ……枷は着けさせて貰うけどね……」

バーンの周りを怪しげな空間が覆う

(……こんな事をしても状況は変わらないかもしれない……早く探し出さないとね……)

唇を噛み、拳を握り締めながら女はうつむく

(幻想郷が減んでしまう前に……)

女はバーンの石像を空間に取り込むと空間を閉じ、この世界から消えた……

余は……負けたのだ……

魔界の全てを背負い、戦い……負けたのだ……

後はこの魂が朽ちるの待っただけ……

そう……その筈だったのだ……

「なぜ余は目覚めた……」

目覚めたバーンは信じられなかった、自分が目覚めた事が、動ける事が……

（目覚める事もあり得ぬ筈だがそれどころか肉体が鬼眼王ですらない、戻る事は叶わぬ

あの状態が何故……)

自身の肉体を確認しながら改めて今の自分の状態が異常である事を悟る
(何者かの仕業か……だが何の為に……)

今の状態を人為的な仕業と考えながらバーンは立ち上がり周囲を見渡す

「森の中……だが知らぬ土地、余の知る土地ではない」

周囲を見たバーンはおもむろに木に近付き、スツツと手刀を木に浴びせた、手刀を受けた木はなんの抵抗も無く真つ二つになり、地面へ落ちる

「これは……」

手刀を放った手を見ながらバーンは違和感を感じていた

(肉体に負荷が掛けられている……)

拳を握りながら肉体の変化を感じとる、本来なら木を切るぐらいなら全力であろうと

結果は変わらない、だが自身の肉体の事を一番知っているバーンはその変化を感じ取った

「……」

何かを考えながら切った木に指を突きだし呪文を唱える

「メラ」

指先から放たれたのは火球、バーンの指先程の大きさを持った火球と言うより火の粉が切られた木に当たる

当たった木は一瞬で燃え尽きた

「やはりか……」

残り火を見ながらバーンは呟く

（魔力の方もかなりの負荷を掛けられているな……）

自身の今の状態を確認しながら思索する

（全力の半分以下……まあ良い、余を目覚めさせた輩に解かせれば良い、真意の方も知ら

ねばならんしな)

「さて……」

思考が終わったバーンは上空へ飛翔する

「まずは情報か、この世界と下手人の情報……フツ……余が勇者の真似事をする羽目になるとは……」

苦笑したバーンは上空で辺りを見回す

(とりあえずはあの一際目立つ赤い館へ行ってみるとしよう)

バーンは遠目に見える赤い館へ向かい飛んでいった

謎の地で目覚めた大魔王、謎の女の目的とは？……かつて世界を震撼させた大魔王の

第1話 紅い館

赤い館へと向かうバーン、道中館の近くの湖を通り過ぎた

「あれ？誰か飛んでる……見たことない人……」

湖の側の森の中、茂みから顔を出した少女が呟いた

「あつちは紅魔館の方向……」

見知らぬ人物が飛び去るのを眺めながら呟いていると

「大ちゃん見ーつけ!!」

「うひゃあ!」

突如目の前に降り立った者と声で少女は茂みから跳び跳ねた

「大ちゃんバカだねえ、かくれんぼなのに顔だしてるなんて」

ケラケラと笑う少女は大ちゃんと呼ばれる少女に指を指す

「もう、チルノちゃんビツクリしたよお……」

恥ずかしそうに赤面しながらチルノと呼ばれる少女の傍に近付く

「あのねチルノちゃん、さつき……」

先ほどの人間の事を話そうとした口に出したのと同時に

「次は大ちゃんやんが鬼ね！ちゃんと100数えなさいよ〜！」

そう言ったチルノは飛び去って行った

「チルノちゃん！……まあ良いや後で」

一人呟いた後、木に顔を当て数えだした

「全てが赤い館か……これがこの世では美しいとされるのか？」

赤い館、普通の感性を持つなら大多数がいい趣味とは言えないと言うだろう、だが情報欲の強いバーンはどうしても良い事ではあるが推察する、聡明であるが故の弊害とも言える

空から眺めていたバーンは館の門前へと降り立った

「……………」

門前に降り立ったバーンは眼光鋭く睨み付ける

「……………zzzz」

バーンが睨み付けたのは門前で壁に持たれながら居眠りをしている女

「女……………起きろ」

「……………zzzz」

バーンの言葉を意に返さず居眠りを続ける女

(舐められたものだ……………)

女を素通りし門に手を掛けた

ドンッ

爆発でもしたかのような音が響いた

「カツ……………!?ハッ……………グウ……………!?」

「女……余を舐めるのは大概にせよ」

音の出所は門の側の壁、バーンが女の首を捕まえ壁に叩きつけていた

バーンが門に手を掛けた瞬間、女はバーンに攻撃を仕掛けていた、だがバーンは攻撃を知っていたかの様に避け、首を捕まえ壁に叩きつけたのだ

「お前が眠るフリをし余を謀っていた事はわかっていた、相手が悪すぎたな女」

そう言うのと掴んでいた首を放した

「カハツ……ゲホツ………あなたの様な外来人が紅魔館に何の御用ですか？」
息を整えつつバーンに問う

「お前に話す事では無い、通らせて貰うぞ」
身を門に向け歩き出すバーン

「待て！許可無く入らせる訳にはいきません、排除させて貰います！」
構えを取りバーンを睨み付けた

「力の差を感じつつも挑むか……」

女へ向き直し、微笑する

「…………これが仕事なので」

苦笑しながら答えた女、だがその顔には冷や汗をかいている
(と、とんでもない化物を相手にしちゃった……)

今更遅い後悔をしながら女は叫んだ

「紅 美鈴、参る！」

啖呵が終わると同時に駆けた

「武道家か、余の体の具合をみるのに丁度良いな」

バーンが呟いた瞬間、眼前に拳が飛んできた

「フン……」

拳を軽くないなしたバーンに次々と攻撃が襲う

「ハッ！」

攻撃を続ける美鈴、その顔は必死

(技量はあのマアムと同程度か、だが力が強い……人間か?)

攻撃を捌きながら力量を確認する

「ムッ!？」

繰り出された蹴脚を払おうとしたバーンの手は空を切る

(フェイントか！)

そう思った時には遅かった、体勢を立て直そうとするバーンの目前には既に美鈴が居た

「ハアッ！」

渾身の拳がバーンの胸を捉えた

「フウー……フウー……」

地面を抉りながら後退したバーンを見据えながら息を整える

(わかつてはいましたがこれほどとは……)

渾身の一撃を決めた割には美鈴の顔は優れない、何故なら

「良い一撃だった」

効いていないから……

(申し訳ありませんお嬢様、私はここで死んでしまうかもしれません……)

心の中で詫びた美鈴は死を覚悟した

(防御力はあまり落ちていない、だが力の減少と速さが落ちている……本来ならあの程度のフェイントなど見てからでも対処出来る)

死を覚悟した美鈴とは違いバーンはこの戦いを肉体の確認程度としか思っていない

「美鈴と言ったな、もう少し付き合ってもらおう」

そう言うとうとバーンは身構える美鈴に攻撃を仕掛けた

「クツ……!?!」

攻守逆転し攻撃を捌く美鈴、その表情はやはり必死

(攻撃は単調、でも速く、そして強い!!)

矢継ぎ早に繰り出される攻撃、武術的な駆け引きこそ無いがその息をつかせぬ怒涛の攻めに守勢を余儀無くされる

(意外に良くやる、これほどなら耐えられるか?)

直後バーンの攻撃がさらに速さを増した

(嘘?!さ、捌き切れな……)

守りを掻い潜った掌底が美鈴を打ち、地面に叩きつけられた

「グウウ……………!!」

咄嗟に防御したものの防御を無視するかのような強烈な一撃

(ヤバイ!動かないと……………)

追撃を避ける為に体を動かそうとするが痛みで動きが鈍る

「……………」

視線をバーンに戻した美鈴が見たのは自分を見下ろしてはいるものの何もしようとしてこないバーンの姿

「……………ハッ!」

一瞬呆けたがすぐ気を取り直し、痛み慣れた体を跳ねさせ距離を取る

(この技に全てを掛けるしかない!)

気合いを込めた美鈴の体から何かが吹き上がる

(これは闘気……………いや、闘気の他に魔力も混ざっている、この世界の人間は闘気と魔力の両立が出来るのか……………)

バーンは美鈴のしようとする事に警戒はしない、寧ろ珍しい物を見る目で観察している

「食らえ!彩符「極彩颱風」!!」

技名と共に出されたその技は美鈴の体から放たれた

「面白い……この世界の者はこのような芸当が出来るのか」

眼前に展開されたのは高密度の弾幕、美鈴の姿すら見えなくなりそうな程の量

「行けえ!!」

美鈴の掛け声に呼応し弾幕がバーンに向かう

だが目前に迫る弾幕にバーンの表情は些かの変化も無い

迫り来る弾幕に向かいその手をかざし、バーンは唱えた

「イオナズン」

一瞬、強烈な閃光が辺りを照らした瞬間、轟音と共に大爆発が起こった

その爆発は美鈴の弾幕を飲み込み、瞬時に広がった

「館を壊さぬよう抑えはしたが、さてあの女は生きていれば良いが……」

周囲を舞う砂埃を掌の風圧で吹き飛ばす

「流石武道家なだけはある、だが力を抑えたとは言え余のイオナズンを受けてその程度で済むとはやはり……」

美鈴の姿を確認したバーンはその健在振りに感心した、美鈴はかなりのダメージを負っているもののその場に立っていた

「あ、あんなの……反則ですよ……」

今にも倒れそうな美鈴は思わず口にする、弾幕を飲み込み更に術者にもダメージを与える技、言ってみればボムである、回数もバーンの魔力によって決まるが今のバーンでさえ軽く50は余裕で撃てる、大幅な負荷を与えられてなおその魔力は常軌を逸している

「……」

無言で美鈴に歩むバーン

(し、死んだ……)

美鈴はその姿に自分の死を悟った

「……ッ!?!」

眼前にバーンが迫った瞬間、美鈴は目を閉じた

「美鈴」

トドメは来なかった、代わりに名を呼ばれた美鈴はゆっくり目を開けバーンを見る

「もう良いだろう？通らせて貰うぞ」

「えっ？」

美鈴は呆けた、トドメを刺されるものとはかり思ったのにトドメは刺されず門を通ると言われたから

「と、トドメは刺さないんですか？」

「お前が人間なら躊躇無くトドメを刺しただろう、だがお前は人間ではないのであろう？魔族でも無いが少なくとも人間ではない、それゆえだ」

バーンの推理は当たっている、美鈴は妖怪であり人間では無い、姿は人間と大差無いが肉体の強さ等は人間と比べ遥かに高い

「お、お嬢様達に乱暴はしませんよね？」

「安心するがいい、危害を加えに来た訳では無い、だが出方次第だ、お前の様な応対ならどうなるかは保証出来ん」

「あー……えつとその……」

不意打ちをかました美鈴は言葉を詰まらせた

「門番の応対を改めるんだな、その怪我はお前の責として受け入れろ」

「はい……」

歩いていくバーンの後ろ姿を見ながら項垂れた、門を開け中に入ったバーンを見送った後、緊張の切れた美鈴はその場に倒れた

「助かった……もう動けないよ……あ！取り次ぎしてない……それにさっきの爆発……絶対あの人侵入者扱いになつてるだろうなあ……うーヤバイなあでも動けないしなあ……」

その場で一人喋る美鈴、あれこれ不安な事を口に出す

「考えてもしようがない、一旦休んで回復してから向かいますか……イテテ……はい、応対を改めます」

「何よ今の音……」

「凄い音だったねお姉様」

紅魔館の一室で寝ていた姉妹が目を覚ました

「……咲夜」

姉がメイドの名を呼ぶ

「はい、何でしょうか？」

何も無かった空間に突如メイド姿の女性が現れる

「今の音は何？」

「美鈴と交戦した者の仕業でしょう、紅魔館には被害はありません、先ほど門を開き入ってくる者を確認しました、おそらくその者かと……」

「フン……侵入者ね、咲夜、始末して来なさい、美鈴を倒した位で調子に乗っている愚か者をね」

「かしこまりました」

そう返事をするメイドは一瞬でその場から消え去った

「ねーお姉様、あたしも遊びたい！」

「あんまり我が儘言わないの、でももしその侵入者がここに来れたなら遊んでも良いわよ」

「やった！咲夜負けないかなー」

「だからって負けを願うのはダメよ」

「出迎えは無しか」

館に入ったバーンは玄関から内部を見渡す

(内部も赤……………それよりもこの館、何か内部に施してある、空間の歪みを感じる)

バーンが歩を進めようとしたその瞬間

「!!」

ナイフが突如目の前に現れる

ナイフが刺さる瞬間にナイフを掴んだバーン

(何の施しも無いナイフ……………突如表れたのはどうやった？空間に干渉した様子も無い)

手にしたナイフを見ながら謎の攻撃方法に思案しているバーンに声が掛かる

「やるわね、美鈴を倒しただけはあるみたいね」

物陰から表れたメイド姿の女がバーンの前に立つ

「……………お前の仕業か」

手にしていたナイフを握り潰し床に捨てる

「やめて下さらない？ 掃除も大変なのよ？ それにナイフだってタダじゃないんだし」

「フン……ここに住む者は不意討ちが挨拶なのか？」

「そんな訳ないじゃない、この紅魔館の主からあなたの始末を受けたから攻撃したのよ」

「お前はここの主の居場所を知っているのか？」

「ええ、勿論よ」

バーンの顔が薄く笑う

「なら好都合だ、お前に案内してもらおうとしよう」

「やってみなさい！」

咲夜はバックステップをすると弾幕を展開しバーンを攻撃する

「フン」

迫った弾幕を掌底で弾きながら進んで行く

「弾幕を弾きながら進んでくる……」

咲夜はその光景に驚きを見せる、今まで弾幕を弾いた者などいなかったから

「もう終わりか？」

バーンが咲夜の眼前に立ち、捕まえようと手を出す

「!？」

手は何も掴まなかった

(これは……まさか)

起こった現象にバーンはある考えに行き着いた

「普通の弾幕では無理見たいね、ならー！」

バーンの後方に表れた咲夜が再び弾幕を展開する

「……」

先ほどと同じように弾きながら進むバーン

両の手を使い弾いたその瞬間

(今！)

「!？」

弾いた隙を狙いナイフがバーンの胸の前に数本現れる

(やはりか……)

「終わりね……」

咲夜が吹きと同時にナイフがバーンに突き刺さる

キンッ

キキキンッ キンッ

事は無かった、バーンに当たったナイフは金属音を出し全て弾かれた

「えっ?」

思わず声が出た、刺さる所か傷すら付けられないその光景に

「無駄だ、余の肉体にそんなナイフごときで傷は付けれん、余を切りたくば伝説のナイフでも持つてくるんだな、そんな代物がこの世界にあるならばな」

笑みを浮かべ咲夜を皮肉る

「それとこんな話をしてやろう、余の世界には凍れる時の秘法と言う魔法がある」
「何を……」

「まあ聞け、その魔法は皆既日食の日にしか行えぬ時の魔法、つまり……」

「それがどうしたの? ナイフが効かないなら弾幕で……」

咲夜がその能力を発動した瞬間

「余も時を止められる」

時の止まった世界でバーンは咲夜を捕まえた

「う、嘘!? そんなっ!」

捕まえられた咲夜は驚愕の様子でバーンを見て能力を解除した

「さてどうする? 大人しく主の元に案内するか? ひとつ言っておくが断るならお前は死ぬ事になる、外の女は人間では無いため生かしたがお前は違う……慈悲は無いぞ……人

間

「うっ……わかったわ……案内する、でもお嬢様達には手を出さないで！危害を加えるなら絶対に行かせない」

案内するとは言ったがもし危害を加えるなら刺し違えるもいとわない、そう咲夜の言葉からは聞こえた

「……外の女もそうだがお前達は勘違いしている、余は戦いに来たのでは無い、色々知りたい事があるからここに訪ねたのだ」

「……その言葉本当でしょうね？」

「疑う気持ちはわかるがな、だが今の余にお前を信用させる術は無い、信用しろとしか言えぬ」

「……わかったわ、貴方が危害を加えに来たなら私なんてとつくに死んでるものね……
こっちよ」

踵を返した咲夜は歩き出す、その後を追うバーンは薄く笑っていた

（余に時を止める力は無い、時の秘法とは確かに時を操る魔法、だが皆既日食の力を借り、余の魔力を持ってしてようやく一人分の肉体の時を操れる、先ほどのはお前の能力が皆既日食の代わりになったから可能だった事、それを応用しただけの事よ）

（とは言え本来の皆既日食では無い上に余の魔力の低下、今の余の魔力では2〜3分が

良いところだろう)

(しかし……人間が時を止めるとは……この世界は存外楽しめるかもしれんな)

咲夜の後に続きながら大魔王はこの世界に興味を感じていた

第2話 悪魔の妹

「お嬢様、失礼します」

主の居る部屋に着いた咲夜はノックの後に部屋に入った

「早かったわね、大した相手じゃ無かったようね」

「えー！咲夜勝っちゃったの？ツマンナイー！」

笑顔で話す主、不満気な妹、だが咲夜は苦笑い

(大した相手じゃ無いのは私だったんですよ……)

「申し訳ありませんお嬢様、私では荷が重い仕事でした、それでお嬢様に面会です」

頭を下げた咲夜の言葉に呼応し部屋に入るバーン

「あら、負けちゃったの咲夜」

「やった！ね！お姉様！」

「まあ待ちなさいフラン」

せがむ妹を抑え、主は話し出した

「ようこそ紅魔館へ、私が紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ、こっちは妹のフラン

ドール・スカーレット」

「余の名はバーン、大魔……いや、何でもない」
「？」

言いかけた言葉を訂正したバーンの真意がわからず首を傾げるレミリア
(ヨ?ヨって何?)

フランは違う事で首を傾げる

「本題に入らせてもらいう前に1つ言っておく事がある、余は戦いに来たのでは無い、まずはそこを理解してもらいたい」

「へえ、なら美鈴を攻撃したのは何故？」

「余の問いに答えず眠りを装い攻撃してきた為だ」

「ふうん……咲夜！美鈴をここに」

「かしこまりました」

レミリアが咲夜に命令を下し、咲夜が応えた瞬間

「あ、お嬢様」

美鈴が現れる

「美鈴、あなた門番の仕事をせずに訪ねてきた客人を攻撃したって本当？」

レミリアの言葉には少しばかりの怒気が混じっている

「あ、えつと……はい、申し訳ありません、凄いい気を持っていたので賊かと……」
しゅんとしながら美鈴は答えた

「どうやら本当のようね、今回はこちらの不手際、謝りますわ」

「いや、良い、余も必要以上に怪我をさせた、誤解が解けたならそれで構わん、それで本題に入りたいのだがよろしいか？」

「ええ、どうぞ話して」

………大魔王説明中………

「なるほどね、幻想郷の情報と貴方を召喚し体に枷を着けた犯人の情報が知りたいと」

「そういう事だ、情報を得た後に今後の身の振り方を考えるつもりだ」

「犯人については心当たりはあるわね」

「何？」

バーンはピクリと反応した

「ええ、そんな事が出来るのはおそらく八雲紫の仕業だと思っわ、……幻想郷の賢者なんて言われているわね」

「八雲紫……」

「でもアイツは神出鬼没だから会おうと思っても会えないのよ……だから八雲紫については運に任せるしかないわね……それと幻想郷について知りたいなら紅魔館にある図書館を使うと良いわ、あそこには色々置いてあるから、今回の非礼のお詫びも兼ねてね」

「感謝するレミリア・スカーレット」

「レミリアで良いわ、だから貴方の事もバーンと呼んでよろしいかしら？」

「構わぬ、今の余は肩書きを持たぬ身だ、好きに呼ぶと良い」

「わかったわ、咲夜、バーンを図書館に、パチエにも説明しといてね」

「かしこまりました、ではバーン様こちらへ」

咲夜につられ椅子を立った瞬間

「えー！お姉様！約束だよ！！咲夜が負けたら遊んでも良いって言ったじゃん！！」

フランのカン高い声が部屋に響いた

「？」

バーンは状況が掴めずフランを見た後レミリアに視線を移す

「フラン！バーンは戦いに来たんじゃないのよ、だから諦めなさい」

「ヤダよ！お姉様約束したじゃん！ここに来たら遊んでも良いって!!」

「確かにそう言ったけど……でも今回はダメよフラン」

なだめるレミリアを見ながらバーンは問う

「行っても良いのか？」

「ダメー！バーンはフランと遊ぶの！」

バーンの問いにフランが答えた

「もう！フラン！……わかったわ、バーンに聞いてみるから少し待ちなさい」

「むー……わかった……」

「……と言う訳なの、バーンが良ければ相手をして貰えないかしら？勿論お礼はするわ」

レミリアの願いにバーンは少し考えた後答えた

「確認するが遊びとは子守りではあるまい？」

「察しが良くて助かるわ、そう、弾幕ごっこで相手をして欲しいの」

（弾幕……なるほど、美鈴や咲夜が使用していた攻撃方法か）

「それで貴方のお礼は……貴方の居住、つまり貴方の住む所を提供するわ、どうかしら

「？」

フランの相手をするだけでこの幻想郷での居住が得られる、バーンにとって悪くない話だ

「フ……良いだろう、受けよう」

「バーンはその提案を受け入れた

「ありがとうバーン、では早速………」

レミリアの言葉を遮りバーンが告げた

「裏があることはわかっている、その上で乗ってやったのだ、余を落胆させるなよ？」

バーンの言葉に一瞬呆けたレミリアだがバーンの言葉の意味を理解し笑みを浮かべた

「フフ……安心して、少なくとも貴方を落胆させる事にはならないと思うわ」

二人の人外が互いに微笑し合う

「じゃあ行きましようか、まだ夜ではないから地下でやりましよう、行くわよフラン」

「ハーイお姉様！ほらバーンも早くう！」

フランに急かされバーン達は地下へ向かった

「さて、じゃあ始めなさい、わかってると思うけど壊しちゃダメよ?」

地下室へやってきたバーンとフランにレミアから開始の催促が飛ぶ

「壊すなどは館の事か?それとも妹に対してか?」

「さあ?どうでしょうね?」

「またも互いに笑い合う二人」

「もおー!早くやろうよお!」

「フ……すまん、では始めるか」

バーンがフランと相對した瞬間、弾ける様にフランは跳ねた

「いっくよー!うりやりやりりりり!!」

掛け声と共に大量の弾幕が放たれバーンを襲う

「フウ……」

迫る弾幕にバーンはまたかと言うようなため息をつく、そして弾幕を弾いた

「凄いわね、当然の様に弾いてるわ」

「私の弾幕所かナイフも刺さらなかったんですよ」

「中々の化物のようね、さあフランはどうでしょうねえ?」

「妹様大丈夫かなあ?」

観戦する三名をよそに戦いは激しさを増していった

「どうしたの？ 避けたりするだけじゃ勝てないよお！」

飛びながら絶え間なく放たれる弾幕を避け、弾き続けるバーンにフランが挑発する
「確かに……ならば見るが良い……余の魔力を」

バーンは構えた手刀を振り抜き唱えた

「バギクロス」

放たれた真空の刃が弾幕の軌道をずらし、相殺する

「スッゴーい!! ねえ! もつと見せてよ!」

嬉しそうにねだるフラン、自分の弾幕が相殺された事など気にもしない

「……何よアレ? 簡単にしてるけど……」

驚いたのはレミリアと咲夜

「あんなものじゃないですよお嬢様! あの人のもつと凄い事が出来るんですよ!」

美鈴が付け加える

「もしかして私、とんでもない化物とフランを戦わせてる?」

「そのようですねお嬢様、ですがバーン様なら流石に無茶はしないかと……」

「だと良いけどねえ……」

「ねえー！もつと本気出してよー！」

弾幕を放ちながらフランはバーンにせがむ

「フツ……幼いお前には過ぎた事だ、どうしてもと言うなら余に出させて見るがいい」

「よおーし！なら絶対本気にしちゃうからねー！」

そう直後、フランの魔力が高まった

「ムッー！」

魔力の高まりを感じたバーンの前でフランの体が四体に分裂した

「禁忌「フォーオブアカインド」!!」

「面白い芸だ、それでそれからどうするのだ？一斉に攻撃するのか？」

バーンの表情に変化は無い、余裕の表情はフランが四体になっても変わらなかった

「そうだよ！避けれるかなあ？」

四方に散らばったフラン達から大量の弾幕が放たれた

「1つ教えておいてやる、戦いとはフィーリングでするものではない、相手の力量を見誤ると痛い目を見る……」

バーンは手を上に掲げ唱える

「イオナズン」

バーンを中心とした大爆発は弾幕とフランを飲み込み地下室を目映く照らした

「……美鈴、あなたが言っていたのってこれ？」

「そ、そうです……」

「決着……ですかね？」

爆風を感じながら三人は小声で話し合う

「この様にな」

爆風が収まった場所でバーンは分裂が解け、床に倒れるフランに喋りかける

「もう良いだろうフラン？」

倒れたフランに遊びの終わりを告げる、だがフランから返ってきたのは返事ではな

かった

「アハッ！ イッターイ……フフ……スゴイネ……ウフフ……」

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

地下室に狂気を混じらせたカン高い声が響いた

「不味いですよ！ 妹様が暴走しちゃいましたよ！」

「危険です！ 止めてきます！」

慌てたのは美鈴と咲夜、フランの暴走の危険性を知っている二人はフランを止めようと駆け出そうとする

「待ちなさい、様子を見ましょう」

だがレミリアにより止められる

「ですがお嬢様！ いくらバーン様でも今の妹様は危険です！」

「良いから見てなさい、見てみたいのよこの結末を……」

レミリアの言葉に無言で応えた二人は視線を二人に戻した

（狂気に囚われている……これは術ではなく元から存在していたものか）

「キャハハハハ!!」

質量の高い弾と低い弾を織り交ぜ弾幕を展開する、その弾幕を弾くバーン

（攻撃に規則性が無くなった……狂気に身を任せたか）

フランを観察しながら弾き続けるバーンは隙を見てメラを数発放つ

「アハハハハ!!」

笑い声を上げながらメラを回避したフランは不規則に飛びながら弾幕を打ち続ける

「ムウ!?!」

気付けばバーンの回りには弾幕が高密度に展開され逃げ場が無かった

「フン……」

再びイオナズンを唱え回りの弾幕を消滅させる、爆風を払ったバーンにフランの宣言が響く

「禁忌「レーヴァテイン」!!」

魔力で作られた剣がバーンに向けられて投合された

「カラミティエンド!!」

剣に合わせてバーンはその手刀で迎え撃つ

ガガガガ

削るような、打ち合うような音を響かせ剣と手刀はせめぎ合う

「ハアツ!!」

バーンが力を込め振り抜くと剣は破壊され空中に消えた

「アハ！スゴイネ！デモ、コレハドウカナ？」

狂気の表情を更にひきつらせフランは次の攻撃の準備をする

「面倒な奴だ……少し荒くなるが気絶させるほかあるまい」

バーンがフランに向かい歩を進めた、だがその歩みはすぐに止まる

「それは……なんだ？」

バーンが歩みを止めた理由はフラン、フランの手に異様な物が握られていたからだ

(アレは……マズイ！)

そう感じたバーンは直ぐ様構えを取り呪文を放とうとした

「きゅつとしてドカーン」

「ウグオ!?」

苦痛の声を上げた後、バーンはその場に倒れた

「えっ? バーンさん? えっ?」

「どうやら使ったみたいねフランの奴」

「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力……ですか」

何が起こったか理解したレミリアは少し残念そうに倒れるバーンを見ていた
「バーン程の実力者でもあの子の能力の前では無力……か、咲夜、死んでしまったのはしょうがないわ、せめて丁重に吊ってやりなさい、フランは私が抑えるわ」

「はい……わかりました……」

咲夜がバーンを遠目で見つめる先にはフランがバーンに何かを話していた
「モウオワリイ? デモタノシカッタヨバーン!」

狂気的笑顔で話すフランだが返事の無いバーンに興味を無くし背を向けた

「驚かされたわ……よもや余がこれ程のダメージを受けるとはな……」

「エツ?」

振り向いたフランが見たのは立ち上がり悠然とフランを見据えるバーンの姿

「アハツ！スゴイネ！ドウヤツタノ？シンゾウヲコワシタノニ！」

「答える義務は無い」

「ソウダネ！ジャアツギハバラバラにシテアゲル！」

フランの手に再び異様な物が握られる

「きゅつとして……」

物を握り潰す刹那

「もうその手は食わぬ」

フランの腕を掴んだバーンはその細い腕を握り潰した

「アアアアアア!？」

苦痛で喚き暴れるフラン、しかしバーンはその手を離さない

「……」

バーンは指先に黒い気を圧縮した弾を作り出し、フランの胸に目掛け撃ち込んだ

「ギャツ!？」

吹き飛んだフランはその場で倒れ動かなくなる、そこへ歩み寄るバーン

「……」

（余を殺す事が出来る力……厄介だ、殺すか……）

フランを見下すその瞳は暗く、殺意に満ちていく、手刀を胸まで上げ、トドメを刺す準備をする

「……………!?!」

(殺す……………そうだ……………余は一度既に死んで……………)

暫しの硬直の後バーンはゆっくりと手刀を下ろした

「妹様!」

そこへ美鈴と咲夜が走り込んで来る

「案ずるな、気絶しているだけだ……………かなりのダメージはあるがな……………」

「良かった……………」

フランの安否を確認し安堵する二人、そこにレミリアがやってくる

「聞かせてくれないかしら? 貴方、何故生きてるの?」

疑問をバーンに問う

「フランは余の心臓を破壊したのだ、だが余には心臓が3つある、1つを破壊されただけでは余は死なん、力の低下はあるがな」

「……………貴方って本当に化物ね」

「フ……………あながち間違いでは無い」

笑う二人に咲夜が割り込む

「妹様を治療してきます」

「待て咲夜、フランをここに……」

連れてこられたフランに手をかざしバーンは唱えた

「ベホマ」

淡い光がフランを包み肉体の怪我はみるみる良くなつて行く

「これは……？」

「回復魔法だ、肉体の治癒は終わった、だが疲労は治せん、休ませておくんだな」

「はい！」

返事をした咲夜はフランを抱え地下室を出ていった

「貴方何でも出来るのね」

「余の居た世界では珍しい事では無い、力の差はあるがな」

「あのーバーンさん……出来れば私もお願いしたいかなーなんて……」

「それはお前の責だと言っただろう」

「そうよ！ 門番の仕事をちゃんとしな貴方が悪いんだから受け入れなさい！」

「はい……」

「楽しめたかしらバーン？」

「思った以上に楽しめた、フランも満足だと良いがな」

「フフ……約束通りバーンをこの紅魔館に客人として迎え入れるわ、何かある時は咲夜に言つて」

「感謝するレミリア」

部屋に戻つた二人は紅茶を飲みながら談笑する、美鈴は門番の仕事に戻つた

「レミリアよ、この幻想郷にはフランや咲夜のように能力を持つ者が多いのか？」

「多くは居ないわね、能力を持たない者も大勢居る、能力の強さもピンキリだしね」

「ほお、ならばお前はどうかのだ？」

「私は持つているわ、運命を操る程度の能力よ」

「運命を操る？」

「ええ、血を吸えば未来を知ることが出来るの、その未来、運命を変えられるかどうかは私にはわからないけどね……吸つて見ましようか？」

「……いや、遠慮しておこう、お前に見てもらわなくてもわかる、余の運命は変わったのだ、結末は余が決める」

「そう……もうすぐ夕食の時間ね、悪いけど図書館は明日で良いかしら？」

「構わん、急ぐ事でも無いのでな」

「じゃあ行きましようか、紅魔館へようこそバーン」

紅魔館で住む事になったバーン、その運命は何に向かうのか……

第3話 魔法使いと妖精

紅魔館の近くにある湖の回りに広がる森の中

「ヤッホー大ちゃん！今日は何して遊ぶ？」

「おはようチルノちゃん、そうだね……チルノちゃんはしたいことある？」

「久々に弾幕ごっこがしたいな！でも大ちゃん弱いからね〜」

「アハハ……ゴメンねチルノちゃん」

「良いのよ、最強過ぎるあたいが悪いのよ！大ちゃんは悪くないよ！」

「あ！そう言えば昨日、紅魔館に見たこと無い人が飛んでいったよ、凄く強そうだったなあ……」

チルノの目がカツと見開いた

「なんでそれを昨日教えてくれなかったの!？」

「ご、ゴメンね、かくれんぼしてたら忘れてて……」

申し訳なさそうな顔でモジモジしている大妖精

「まあ良いわ、じゃあ早速ぶっ飛ばしに行くわよ！」

「ええ!?今から行くの?」

「当然よ！あ、でもやっぱりご飯食べてからにするわ」
妖精達は森の中へ消えていった

「バーン様、こちらです」

朝食を終えたバーンは咲夜に案内され紅魔館の図書館へ来ていた

「これは想像以上だ……」

目前に広がる壮大な本の数々に感嘆の声を出す

それもその筈、広げられた空間はバーンの目を持ってしても全容を把握出来ない広さ、その空間に自身の何倍もある高さの本棚が数えきれぬ程並んでおりどの本棚もビツシリと本が詰まっている

(魔導書の割合が多いな、これだけの魔導書を管理する者、はたして如何なる者か……)
管理者に興味を示すバーンに先導する咲夜から声が掛かる

「バーン様、お身体の方は大丈夫ですか？心臓を潰されたと聞きましたが？」

「心配いらぬ、心臓の1つなら一晩あれば再生出来る」

「そ、そうですか……」

簡単に言い放つバーンに咲夜は相槌しかうてなかった

「フランの方はどうなのだ？流石にもう目覚めたのだろうか？」

「あ、はい、朝食の前に起きられてお嬢様に説教を受けた後に機嫌を悪くされてまた寝てしまわれました」

「フ……そうか」

そんな話をする内にある程度進んだ咲夜は足を止め呼び掛けた

「パチュリー様あ！どこですかー？」

「ハイー！」

返事がした本棚の裏から赤毛に羽の生えた少女が本を持ち出てきた

「咲夜さん、何か御用ですか？」

少女が咲夜に話した直後

「お前がパチュリー・ノーレッジか、なるほど魔族に近いな」

少女の前に大男が立った

「あわわ……」

（大きい……それに凄い魔力……）

自分を見下ろす大男にたじろぐ

「いえ、バーン様、そちらはパチュリー様の使い魔の小悪魔です」

咲夜の訂正が入った

「む、そうか……」

「フフ……」

勘違いをしても表情を変えず目を閉じたバーンが可笑しくて咲夜は微笑む

「小悪魔、パチュリー様はどちらに？」

「あ、はいッ！こちらです」

小悪魔の先導に着いていく二人、先導の先には机一杯に本を置き、貪る様に本を読む少女が居た

「パチュリー様あ！お客様です！」

「咲夜……何？」

本を下ろしたパチュリーは不機嫌そうに聞いた

「こちらの方が図書館を利用したいとの事でお連れしました」

「そう……妙な事をしないなら構わないわよ」

バーンを一瞬見た後、本を読みながら答えた

「……!?!」

何かに気付いたパチュリーは本を下ろしバーンを凝視した

「貴方……何者？その異常な魔力はどうやって……」

バーンのその身から感じる強大な魔力を察知したパチュリーはバーンに問い掛ける

「余の名はバーン、魔に長けた者よ、お前は魔法使いか？」

「そうよ、それより答えて」

「……余は生まれながらに強大な魔力を持っていた、そして悠久の年月を掛け大魔王と呼ばれる程の魔力を得たのだ、もっとも今は王でも無い上に力は抑えられているがな」

「大魔王……大いなる魔の王……道理でそれほどの魔力を持っているのね」

「もう良いか？無ければ勝手にさせて貰うが？」

「待つて、貴方に私の仕事を手伝って欲しい、貴方の知識を借して」

「断る、余はそこまで暇ではない」

そう答えたバーンは身を翻す

「ごめんなさい、言い方が悪かったわ、貴方がここを利用しての間だけ知識を借りたいの、私も魔を扱う者、貴方に指導を受けたいの」

「……………」

（魔法使いとしては高いレベルにありながら慢心する事無くなお高みを目指すか……：フ……………）

「良いだろう、その志に余の知識を貸そう、その代わり精進せよ、魔の深淵は広く、そして深いゆえにな」

「わかったわ、ありがとうバーン」

嬉しそうに笑顔を作り感謝した

「まずはバーンの用を済ませましょうか」

「幻想郷の全容が知れる物と八雲紫について知れる物、それと幻想郷の魔導書を頼む」

「わかったわ、こあー!」

「はい!少しお待ち下さいバーン様」

パチュリーの指示を受けた小悪魔はパタパタと飛んでいった

「では私は仕事があるので失礼します」

咲夜もそれにつられ図書館から出ていった

「パチュリーよ、お前はどの程度まで魔力を扱えるのだ?」

本が届くまでの間にパチュリーの力量を確認する

「私が使えるのは五行に2つ足した七曜の魔法よ」

「ほう、その若さで大したものだ?火の魔法を全力で出してみろ」

頷いたパチュリーは掌に巨大な火球を作り出した

(魔力の法式に違いはあるが平均的なメラゾーマと同程度と言った所か)

「レベルは高いと言える、余の居た世界ではメラ、メラミ、メラゾーマと言われる火炎呪

文がある、これはメラゾーマと呼ばれる上位呪文と同じ位だ」

そう言うのとバーンは掌に火球を作り出す、パチュリーの火球の半分程度

「……………これが貴方のメラゾーマ？」

少し不思議そうなパチュリーにバーンは続ける

「これはメラゾーマでは無い……………メラだ、同じ呪文といえども使う者の魔法力の絶対量によつて、その威力は大きく異なる」

「へ、このレベルで下位呪文……………凄い……………」

感嘆の声を洩らすパチュリーにバーンの追い打ちが飛ぶ

「今の余は負荷を掛けられ魔力を大幅に抑えられている、それでも全力の半分以下だ」

「……………」

パチュリーは絶句していた、その余りにも違いすぎるレベルの差に

「……………もう一度聞こう、お前はこれを知つても高みへ……………魔の深淵へ来るか？良いのだぞお前は魔法使いとしては十分に強い、残る余生を他の事に生きるのも良からう……………」

火球を消したバーンがパチュリーに問う

「やるわよ！私にはこの生き方が気に入つてこの生き方しか出来ない、貴方の言う魔の深淵、そこに辿り着くその為にずっと魔導書の解説を続けていたのよ」

強いパチュリーの目と言葉にバーンは笑みを向ける

「よくぞ言った、その言葉忘れるなよ」

「ええ、わかったわ」

（長大な道、そして遙か高く聳える壁、それに臆せず向かうか……似ている……余を倒したあの勇者達に……）

パチュリー目の目に宿敵達の面影を感じ、また微笑んだ

「持つてきましたよバーン様！」

パチュリーの机に隣り合う様につけられた机に大量の本が並べられる

「これが幻想郷の本と八雲紫の本です、後は魔導書ですね、まだまだあるので持つてきます」

そう言うときまたパタパタと本棚に消えていった

「まずは幻想郷からか」

幻想郷の歴史等、幻想郷についての本を手に取り読み始める

その間にパチュリーからの質問に応じ助言や指導を行う、その間にも次々と運ばれてくる魔導書

机が本で満たされ、バーンが一冊読み終えた時、紅魔館に来訪者は来た

「ここに匿っているのはわかってるわ！出しなさい！」

「ちよ、ちよつとチルノちゃん！喧嘩腰は良くないよ……」

「いきなり何ですか氷精さん……」

門の前で問答をしているのは2体の妖精と美鈴

「良いから出しなさいよ！あたいがぶつ飛ばしてやるんだから！」

「そう言われても……」

喚くチルノに美鈴は困惑気味だ

「あの、すいません、昨日見た大きい人を探してるんです、紅魔館の方向へ飛んでたのでここにかなって」

「ああなるほど、バーンさんを探していたんですか、どうかされたんですか？」

話のわかる大妖精のおかげで用件を把握した美鈴は詳細を尋ねる

「それがチルノちゃんが弾幕ごっこするって言って聞かないんです……」

「貴方も大変ですね……」

大妖精の苦労を察し同情した

「もおー！良いから早く出しなさいよー！」

「あーわかりました、取り次ぎはしますけどバーンさんが来るはわかりませんよ？」

「はい、お願ひします、ダメなら諦めますので」

「早くしなさいよー！」

（無理だと思っけどなあ……）

館に入りながら美鈴は難易度の高さを感じていた

「バーン様、お客様がみえています」

美鈴から取り次いだ咲夜がバーンに伝える

「余に客だと？」

読んでいた本を下ろし咲夜に詳細を促す

「湖の側の森に住む妖精です、何やらバーン様との弾幕勝負を希望していますが……心当たりは？」

「昨日目覚めた余に心当たりなど無い、だが湖なら通った、その時見られていたのだから」

「どうされますか？無用なら追い払いますが？」

「いや良い、ちょうど妖精についての項目を読んでいた所だ実物が来たなら興味がある」

立ち上がるバーンは魔導書と格闘するパチユリーに告げる

「すぐ戻る」

頷いたパチユリーを確認するとバーンは歩き出し咲夜は追従し図書館を出た

「許可が出たようです、どうぞこちらへ」

美鈴に案内され中庭に通される妖精達、それと同時に入口からバーンが現れる

「大ちゃん、アレ？」

「そうだよチルノちゃん！うわあ近くで見ると余計大きく見えるなあ……強そう……」

「大丈夫だよ大ちゃん！なんだってあたいは最強だからね！」

妖精達の会話は近付いたバーンの声に終わりを告げる

「これが妖精か……どちらが相手だ？両方か？」

「あんたなんかあたいたい一人で十分よ！食らえ……」

「メラ」

ピチューン

「チルノちゃーん!!」

バーンの放った火球でチルノは霧散した

「よ、容赦無いですね……」

一切の手心無く瞬殺したバーンを見て美鈴は動揺する

「妖精とは自然が維持される限り蘇るのだろうか？ 違うか？」

「ええ、まあその通り何ですけど……」

（だからって瞬殺は酷いですよ……可哀想に……）

「さて、お前は どうするのだ？」

美鈴以上に激しく動揺している大妖精に戦うかを問う

「ア、ハイッ！ いやっあのっ……か、帰ります……」

トボトボと帰って行った

「では余は戻る、仕事に精を出すのだな美鈴」

「はーい……」

「本当に早かったわね」

「大した事では無いのでな」

図書館に戻ったバーンに変わらず魔導書と格闘するパチュリーが迎える

「貴方に大した事なんてそうそう無いわよ……あ、バーン、ここなんだけど……」

再び読書と指導に戻った

そして次の日

「バーン様、また昨日の妖精が現れました」

変わらず読書に勤しむバーンに咲夜から告げられる

「書物には一晩で蘇るとあったが事実だったか……わかった、会いに行こう」

「ちよつと！昨日はよくも不意討ちかましてくれたわね！許さないからね！」

いきり立つチルノ、昨日の事がよっぽど頭に來たらしい、側の大妖精は申し訳なさそうにペコペコしている

「特に蘇生時の弊害は無いのか、どれ……」

「食らえー！氷符「アイシクル……」

ピチューン

「チルノちゃん……」

バーンのイオを受けてまたチルノは霧散した

「戻る、もし明日も来る様なら伝えろ」

「えっ？！相手をするんですか？」

バーンの意外な言葉に美鈴は目をパチクリさせる

「昨日、今日だけでは判断がつかぬからな、明日も来るなら余も対応を改めるつもりだ」

「？はあ……わかりました」

バーンの真意がわからない美鈴は空返事をして見送った

そして次の日

「バーン遊ぼうよお！ねえってば！」

読書続けるバーンはフランのおねだりを無視していた

「ねえバーン、出来れば貴方の世界の呪文について教えて欲しいのだけど、私の魔法に応用出来ればと思つて」

「フム……可能だろうな、だが扱いは更に難しくなるだろう」

「構わないわ、それぐらい出来なきや魔の深淵なんて辿り着けないわ」

「よかろう、ならば教えてやろう……と言いたいが先客が来たようだ」

バーンの視線の先には咲夜が立っていた

「来たのか？」

「はい、昨日より元気ですよ」

待ち人の来訪にバーンは薄く笑い立ち上がった

「えー！バーンズルいよ！フランと遊んでよー！」

「相手をしてやっても良いが条件がある、お前の中にある狂気を制御しろ、それが出来たら遊んでやろう」

「えー……難しいよそれ……」

「レミアアから聞いたがお前はそれが出来ないから友人が出来ないのだろうか？ならば制御するしか術はあるまい」

「むう……わかつた……」

上手くフランを言いくるめたバーンは出口に向かい歩き始めた

「……パチュリー、お前も来るのだ、勉強になるやもしれん」

「……？わかったわ」

「あたしも行く！」

「では日傘を用意しますね」

バーンの後をゾロゾロとついていった

「来やがったわね！何よ今日は随分多いじゃない！ははーん、さてはこの私に恐れをなして助っ人と呼んだ訳ね！良いわ！全員纏めてかかってきなさい！」

ビシツツと指差すチルノの横には呆れ果てた大妖精が居た

「チルノちゃんもうやめようよお……また一瞬でやられるだけだよ……」

この先の展開を予想している大妖精は無駄と分かりつつもチルノを止める

「何度蘇つても弊害は無しか……妖精、名は？」

「何よ急に……チルノよ！これからあんたをぶっ飛ばす奴の名前よ、覚えときなさい」

「余の名はバーンだ、チルノよ何故余に挑み続ける？」

「決まってんじゃない！あたいは最強なんだから勝つからよ！」

「もう2回も負けてるよチルノちゃん……」

「あ、あれは不意打ちを受けたからよ！あたいが本気出したらあんな奴簡単よ！」

（面白い奴だ、実力差がわかっていない上に余に勝つ気である、知恵が足らぬだけのようだがそれでもこの気概は……）

「チルノよ、今回は不意討ちは無しだ、思う存分その力を振るうがいい……さあ来るがいい」

「フン！後悔しない事ね！行くわよ！氷符「アイシクルフォール」!!」

チルノから発射された無数の氷弾

「フツ……」

笑みを浮かべたバーンは氷弾の前に真つ直ぐ歩いて行つた

「スゴイ！歩いてるだけなのにバーンに弾が当たらないよ！」

弾幕の中を悠然と歩くバーンの姿にフランが驚き声に出す

「安全地帯ね」

パチュリーがその光景を見て呟いた

「ああ！たまにありますよね当たらない場所が」

スペルカードとは攻撃を重視した物では無い、その弾幕の美しさに重きを置いているので弾幕の配列によってはこういうった事もしばし起こりうる

「それにしてもあれは分かりやす過ぎるわ、点数にしたら赤点ね」

パチュリーの辛口の評価が下される

「お前はもう少し考える努力をするんだな」

歩き抜け、チルノの前に辿り着く

「フフン！中々やるみたいね！これならどう？」

飛んだチルノから大量の氷弾幕が放たれる

「では余も氷を見せてやろう……ヒヤダイン」

バーンの放った氷弾がチルノの氷弾を砕き貫通する、だがチルノには氷弾は向かわず弾幕だけを綺麗に処理した

「や、やるじゃない！あたいの真似をするなんて！でもまだまだー！」

一瞬怯んだチルノだがすぐ気を取り直し弾幕を展開する

「まるで子どもと大人の勝負ですね……」

「そうね、あれでもあの氷精は普通の人間より長生きしてるのに」

余りの実力差に観戦する二人の感想が一致する

（勉強になるなんて言ってたけどこれの何処が……）

見る価値を感じない勝負にパチュリーが不満を露にし始めたその時、バーンが動いた

「!?あれはー！」

バーンは自身から大量の火球を生み出し周囲に滞空させた

（あれは弾幕!?さっき私が聞いた事の逆！バーンの魔法に弾幕の法式を応用した！）

迫る弾幕に火球を放ち全て打ち砕く、チルノも負けじと更に弾幕を放つが全てをバーンの弾幕が砕いた

(こんな短時間で弾幕の法式を組み入れるなんて……バーン、大魔王の肩書きに偽りは無し……か、師事して正解だったわね)

戦慄すら覚えるその能力にパチュリーは喜びを感じていた

「はあ……はあ……クツソー！」

弾幕を放ち続けたチルノは疲れを見せ始めていた、身体だけでなく精神的にも疲れていた、放つ弾幕は全て砕かれ、挑発してくる、その繰り返しだったからだ

「どうした？もう終わりか？なんだ案外呆気ないものだ、この程度で最強とはな……」

小馬鹿にするように言い放つ

「あたいをバカにすんなー！」

怒気を爆発させ弾幕を放つ

「そろそろ終りにさせて貰おう」

バーンはその手をチルノにかざし魔力を込め唱えた

「マヒャド」

詠唱と同時にチルノの弾幕を氷らせながらチルノへ侵食していく

「ううう?!」

自身の能力を使い氷結に抵抗するチルノ、だが徐々に氷結はチルノへ迫っていった
「氷精の力を上回る氷の呪文……私じゃ不可能……これはバーンだから可能な事……」

本来ならパチュリー程の魔法使いでも氷の化身とも言えるチルノに氷の魔法で対抗
すれば歯が立たない、それほど冷気に關してはチルノの力は高いのだ、それを真つ向か
ら振じ伏せるバーンの力にパチュリーは今日何度目かわからぬ感心をした

「どうした?もう後が無いぞ最強?このまま氷精のお前を氷らせればどうなる?復活出
来ずに氷に封印されるのか?試してやろう」

更に呪文に魔力を込める

「うううー!!もう……ダメエ……!?!」

氷結がチルノの体を侵食していく、下半身を侵食したその時バーンの声がチルノを刺
した

「どうした!お前の最強とはその程度か!」

「バーン……?」

突然叫ばれた言葉に困惑する観戦者、誰もバーンが相手に激励を飛ばすとは思って見
なかつたから

「最強を名乗ったのはただの自己満足か!お前が最強を名乗るならこの程度破って見せ

ろー！」

「うー……!!ギギギギ……!!ダアアアア!!」

ガアン！

氷結は砕かれバーンのマヒャドは破られた

「嘘……」

バーンの呪文の勝利を確信していたパチュリーはその結果を信じられない

「あ……」

力を使い果たしたチルノはゆっくりと落下する

「やれば出来るではないか、見事だったぞチルノ」

受け止めたバーンは称賛の言葉を送る

「……でも勝てなかった」

目に涙を浮かべチルノは悔しがる

「当然だ……余は大魔王だった者、お前とは格が違う」

「大魔王って何よ！いつか絶対倒してやるんだから！」

涙を拭いながら宣戦布告する

「ならば余の配下になるが良い、余の配下になり弱点を探すなり己を磨くなりすれば良い、お前が力をつけた時にはいつでも相手をしてやろう」

「……良くわかんないけど友達になるって事？」

「フツ……まあ良いお前の好きに思うが良い」

そう言うのとチルノにベホマを唱え、回復したチルノを下ろした

「紅魔館へ自由に入りに出入り出来るようレミリアに掛け合っておく、いつでも来るがいい」

バーンは身を翻し紅魔館へ戻って行った

「チルノちゃん、どうするの？」

隠れていた大妖精が現れチルノに話しかける

「良くわかんないけどとりあえずバーンはあたいと友達になったのよ！でもいつかぶっ飛ばしてやるんだから！」

「まだ勝つ気でいるのチルノちゃん……とりあえず今日は帰ろう？」

「そうね！お腹も減ったしね！行こつ！大ちゃん！」

妖精達は紅魔館を去っていった

「勉強になったわ……ねえ教えてくれない？あんな氷精を配下にしようとした訳を」

図書館に遅れて到着したパチユリーは既に読書を再開していたバーンに問う

「……余は強い者が好きなのだ、そして強くなろうとする者も好きなのだ、そこに頭の良し悪しは関係無い、確かにチルノの頭脳は悪い、だがどんな強大な敵にも臆せず越えようとする気概がチルノにはあった、そこが気に入ったのよ、現にチルノは本気に近い余のマヒヤドを破った」

「そう……でも氷精は貴方を友達と思ってるわよ？」

「良いのだ、先程は配下と言ったが余は軍を作るつもりは無い、軍を率いていた頃の癖の様な物よ、余を友とし越えようとする、好敵手……それもまた一興よ」

フツツと笑ったバーンは読みかけの幻想郷縁起を再び読み出した

第4話 図書館異変

バーンとチルノの戦いから4日、バーンが幻想郷で目覚めて一週間が経った

「バーン…本ばかり読んでないで遊ぼうよお！」

「弾幕ごっこじゃなくていいから一緒に遊ぼうよお！」

子どもが増えていた

厳密には子どもと言える歳では無いが外見と精神は無邪気な子どもそのもの、大妖精はパチュリーの隣に座り行儀良く本を読んでいる

この4日間でチルノは毎日挑んできた、だがその度に返り討ちに合うチルノだったがその内にバーンになついてしまい毎日紅魔館に大妖精と遊びに来ていた、その過程でフランが誤つてチルノを一回休みにしたりする内にフランとも仲良くなり今に至る

「……」

二人を無視しながら読書をするバーン、この一週間で幻想郷と八雲紫に関しての書物は読み終え、今は魔導書を読み、解読していた、強大な魔力を持つバーンには必要無い事と思うかもしれない、なら何故読むのか？

それはバーン自身も魔の深淵の全てを知る訳ではないから

いや、バーンは理解している、魔の深淵に底など無いと……だからバーンは読むのだ、魔の深淵を決めるのは己、潜るのを止めた時、そこが魔の深淵と決まってしまうから。それにバーンに取っても興味深いのは確か、バーンの居た世界とは異なる魔法式であるためだ、それを取り入れ昇華したのが先日バーンが出した弾幕、今は魔導書を読み更に精錬されている

力を更に高める、その意味では様々な魔導書がある図書館はバーンに取って良い環境と言えた、もつとも……

(目的の無い余には無意味かも知れんがな……)

バーン自身は余り意義を感じていなかった

バーンの言う目的とは自身を召喚したと思われる八雲紫に会い、その真意を知ったその後の事、八雲紫次第でバーンの行動は変わるが現時点ではわからない、再び石に戻される可能性もあれば利用するつもりかもしれない、気紛れの可能性もある

それに……

(敗れ……死ぬ運命だった余には無用かも知れぬな……)

一度敗北し、死の運命を受け入れていたバーンは自身に虚無感を感じていた、それ故に自身を殺す事が出来るフランにトドメは刺さなかったのだ

(……)

本を下ろし目を閉じる、数秒の沈黙の後、バーンは目を開き告げた

「チルノ、フラン、この幻想郷が危険に晒されたらどうする?」

「異変の事? 霊夢が解決しちゃうよ!」

「博霊の巫女か……そうではない、お前達がどうするかだ」

「やつけるに決まってんじゃない!」

「あたしもやつけるよ!」

「それが余でもか?」

一瞬、場に緊張が走った、パチュリーも読んでいた本を下ろし不安気にバーンを見る
「あ、あつたり前よ! バーンでもあたいは戦うわ!」

「フランだつて同じだよ! お姉様や咲夜も美鈴もパチュリーだつて戦うよ!」

(私も!?)

仰天するパチュリー、バーンの力を一番知っている彼女はバーンに対峙するその難易度を想像し冷や汗をかく

「今のお前達が余に勝つのは不可能だ、ならば勝つにはどうすれば良いか解るか?」

「あたしの能力を使う!」

手を上げたフランが答えた

「確かにお前の能力なら可能だろう、余だけでは無く恐らく概念以外なら壊せるである

う、だが余なら使わせる前に倒す、今ならお前が能力を使う前に倒すのは容易だ」
「むう……………」

不正解を言い渡されたフランはむくれる

「あたいがもつと最強になつて倒す！」

次にチルノが元気良く答えた

（単純ね……………あ！もしかしてこれ……………）

呆れたパチュリーだがすぐ気付く、そしてバーンの返答を待った

「そう、その通りだ、強大な敵が出たのならそれより強くなれば良いのだ」

（やはりね……………至極単純な事なだけで貴方が言えば説得力が凄いわね）

「やった！やっぱりあたいたい！天才ね！」

納得するパチュリーと跳ねるチルノ、先に答えられてむくれるフラン

「余はこの幻想郷とは無縁ゆえに手は出さん、だがお前達が望むなら余が鍛えてやろう、お前達は幼いゆえ時間は掛かるだろうがな」

そこにバーンの提案、チルノとフランを鍛えると言い出した

「えー！時間掛かるのお？もつと早く出来ないの？」

フランが不満を露に聞く、聞き入れたバーンは薄い笑いを浮かべて話し出す

「出来ん事も無い、余の鬼眼の力を使えば今すぐにも力はある手に入る、代わりにその体は

異形となり戻りはせん、更に精神に変調を来す可能性もある……だがお前が望むなら力を与えよう……さあ来るのだフラン、その願い叶えてやろう」

笑みを浮かべたまま手を差し出すバーン

「ウソウソ！ヤだよそんなの！あたしがんばるからやめて！」

首をブンブン振りながら拒絶した

「チルノはどうするのだ？」

「あ、あたかも遠慮しとくわ！そんなことしなくてもあたひ最強だし……」

チルノも動揺しながら拒絶する

「フツ……それで良い」

（これって大魔王ジョーク？全然笑えないけど……）

唾然としているパチュリーの横には同じく唾然とした大妖精の姿があったどうやら同じ事を考えていたらしい

「では始めるか、チルノはまずその冷気の力を安定させろ、お前は感情でムラがあり過ぎる、フランは先に狂気の制御だ」

二人の返事と同時に修行が始まった

（何だか……親子みたいね、バーンにそんなつもりは無いでしょうけど）

異様な、されどその微笑ましい光景に思わず口元が緩んだ

それは単なる気紛れなのかもしれない、1つ言える事は幻想郷に来たバーンの心境に変化が生まれたのだ

その変化がバーンに……幻想郷にどの様に影響するのか……それはまだ誰にもわからない……

修行が始まって数時間が過ぎていた、昼間は就寝するフランは途中で眠気がピークになったため途中で抜けていた、その為今はチルノ1人で修行中、その間のパチュリーの指導にも抜かりはない

「広域に冷気を出すのでは無い、一点に冷気を集中させるのだ」

「い、いっ……」

「そこから更に絞れ、お前がやっているのと言うならば全身を凍らせている状態だ、そうではなく指だけを凍らせるのだ、そこまで出来て初めて能力を扱えていると言える」

「む、難しい……」

（ちよつと無茶じゃない？今まで何となくで能力を使っていたその子には難し過ぎると思うんだけど……）

修行風景を観察していたパチュリーは思っていた

「力を絞れと言っただろう、さあやるのだ」

「そんな事言ったって……難しいよ」

「余は泣き言を聞くためにしているのではない、さあやるのだ」

厳しい指導にチルノの目から涙が滲んできた

「バーン、その子には難易度が高過ぎるわ」

みかねたパチュリーの助け船が出される

「だがお前には出来るのだろうか？ならば可能な筈だ」

「確かに私は出来るけど……私や貴方のレベルで考えてはダメよ、それに私だって初め

から出来た訳じゃないのよ」

そう言ううちチルノの傍に向かい手を取った

「いい？一気に絞ろうとするからダメなのゆっくりでもいいから少しずつ絞っていく

の」

「う、こんな感じ？」

僅かにだが氷は縮小する

「ええ、その感じよ、良く出来たじゃない、後は練習してもっと絞るだけよ」

「やったあ！やっぱりあたい天才ね！」

誉められたチルノはペアッと笑顔を見せる

「……」

その様子を無言で見つめるバーンに振り向いたパチュリーが話した

「わかるかしら？ 誰もが貴方の様に最初から出来る訳ではないの、こんな小さな積み重ねで強くなるのよ」

パチュリーの言葉にバーンは答えず二人を見つめる

(奴等なら出来そうなものだが……いや、奴等がおかしいだけか……)

記憶を辿り、チルノは自分の居た世界の者とは違うのだと改めて認識する

「その通りだな……許せチルノ、余は誰かをこうして鍛えた事が無いのだ、以後気を付けよう」

「しようがないなあ、許してあげるわ！」

調子の戻ったチルノは笑いながら生意気にもバーンを許した、その光景に微笑んだパチュリーにいつの間にか居た小悪魔が顔をニヤつかせ話しかけた

「似合わない事しますねパチュリー様、拝見してましたが家族の様でしたよ？」

「んなっ!？」

その瞬間パチュリーの顔が真っ赤に茹で上がる、果たしてそれは似合わぬ事をしたからなのか、家族に対してなのか……

「申し訳ありませんパチュリー様、お邪魔の様ですので仕事に戻りますね」

パチュリーの返事を待たずパタパタと飛んでいく小悪魔、その顔はととてもとても愉快
気

「ちよつと待ちなさいこあー……あつ!？」

追いかけようとしたパチュリーは足を絡ませ転けてしまう

「むきゅー……」

可愛らしい呻き声が響いた

「お菓子だあ!」

「チルノちゃん全部食べちゃダメだよ!」

あの後しばらくしてから咲夜が休憩にとお菓子と飲み物を持ってきたので休憩することになったバーン達

「バーンいらなの? 食べても良い?」

「構わん、余はあまり物を食べぬ、好きにすると良い」

「やった! 大ちゃん半分こしよつ!」

(ホントに親子見たいね……)

ワイワイとお菓子を食べているその時にそれは来た

バーン

「邪魔するぜ！」

勢い良く開けられたドアと共に白黒の少女が乱暴に挨拶した
「？」

「あ、魔理沙じゃん」

「何しに来たんでしょう？」

「また来たのね……」

謎の来訪者をバーン以外は知っている様子

「何者だ？」

パチュリーに問う

「霧雨 魔理沙、私と同じ魔法使いよ、そして本泥棒」

「えっ!?!本を盗んじやうんですか？」

驚いたのは大妖精

「違うな、死ぬまで借りるだけなんだぜ！」

本を物色しながら魔理沙は答えた

「それって変わらないんじゃない？」

「霧雨 魔理沙か読んだ書物に書いてあったな、あれがそうか」

物色を続ける魔理沙を観察しながらバーンは紅茶を飲む

「良いのか？放つて置いて」

「良いわけ無いじゃない、もうどれだけ盗まれたか覚えて無いわ」

呆れ顔のパチュリーは紅茶を飲む

「最初は撃退出来てたんだけど異変を解決して行く内に実力を上げられてね、今じゃ私の体力が先に尽きちゃうのよ、喘息持ちだしね私」

「フム……」

詳細を聞いたバーンは飲み終えたティーカップを静かに置くとパチュリーに告げた

「ならば余が相手をしよう」

「えっ？」

パチュリーの返事を待たず席を立ち魔理沙へ近付いて行った

「フンフーン♪おっ！これ読みたかった奴だ！頂きだぜ！」

既に数冊の魔導書を抱えている魔理沙

「霧雨 魔理沙、その魔導書は返して貰おう」

「なんだあオツサン？見たとこ外来人みたいだが……」

知らぬとは言え大魔王をオツサン呼ばわりする魔理沙、それは自分の力に自信がある故でもある、そしてその自信故にバーンを注意深く観察する事は無かった

「お前には関係無い事だ、魔導書を返して貰おうか」

「ハッ！そんなに返して欲しけりゃ力付くでやるんだぜ！まっトンズラこかせて貰うけどな！」

手に持った箒に跨がると凄まじいスピードでバーンから遠ざかる

「……ピオリム」

バーンの体を魔法力が包むと風圧を発生させその場から消えた

「なんだ口だけだったか、まっ私が相手じゃしようがないんだぜ」

追跡者が来ないのを振り向きながら確認した魔理沙は得意顔で前に向き直した
「!?」

扉まで後少しの所で魔理沙が見たのはドアの前に先に着いたバーンの姿
「痛い目に合う前に返すのが懸命だぞ？」

ドアに立ち塞がるバーンの忠告

「中々やるみたいだな……でも返すのは無いな、押し通らせてもらおうぜ！」
魔理沙から大量の弾幕がバーンに放たれる

「泥棒では無く強盗だったか……ならばお前に慈悲は無い」
弾幕を前にバーンの気が変わった

「ねえチルノちゃん？どつちが勝つと思う？」

「バーンじゃない？でも魔理沙も中々なのよね、まっあたいの次くらいにだけどね」

「チルノちゃん負けた様な……まあ良いや」

「……」

お菓子を食べながら予想をする妖精達に読書を再開した魔女、バーンと魔理沙の事は深く考えていない

「ねえパチュリーさん？パチュリーさんにとって魔導書ってとても大切な物なんですよね？」

「そうよ、私が時間を掛けて解説したり苦勞して手に入れた物だからね」

「やつぱり……だからバーンさん怒ってたんだ」

「どういう事？」

「私にはそう感じたんですけど……」

「……」

（何か嫌な予感がするわね……）

大妖精の言葉に不安を感じたパチュリーは本を置き急いで飛んでいった

「ぜえ……はあ……ぜえ……な、何なんだお前！」

魔理沙は苦戦していた、すぐにバーンの実力の高さを察知し、異変を解決する時の様に集中するがバーンには全く敵わない

「お前に名乗る名は無いが代わりに褒めてやろう、余の体に弾幕を当てられた事をな、異変を解決してきただけはあ、経験値は高い様だ」

バーンの服に焦げ跡と破れた跡が数ヶ所出来ていた、無論効いてはいないが

「へっ！お褒めの言葉サンキューだぜ！お褒めついでに通してくれたらもつと嬉しいんだけどな」

「それは出来ぬ相談だ」

睨むバーンに魔理沙は意を決した

「お前程頑丈なら大丈夫だろ！こいつを食らいやがれー！」

懐から取り出したミニ八卦炉をバーンにかざして宣言する

「恋符「マスタースパーク」!!」

八卦炉から放たれた凄まじいエネルギーの波動、極太のビームとも言えるそれがバーンに迫る

「フン……面白い、ならば余も応えよう」

迫るマスタースパークに手をかざす、バーンの体から異様な黒い気「暗黒闘気」が吹き出しかざした手に収束していく

「受けるが良い!」

言葉と共に掌からドス黒いエネルギーが放出される、バーンは暗黒闘気をビームの様に撃ち出したのだ

「ハア!?何なんだよアイツ!私のマスパとそっくりだ!ふざけんな!」

魔理沙は自身が撃てる最高の技に簡単に拮抗する技を撃てるバーンに思わず悪態をつく

「もしやとは思うがまさか自分の技と同等……等と思っているのではあるまいな?」

暗黒闘気を放ちながらバーンは笑みを浮かべ魔理沙に尋ねる

「んぎぎ……!そ、そうだろ!痩せ我慢してるのは見え見えだぜ!」

押されまいと必死の魔理沙のこの言葉は強がりもあるが希望でもある

「余を前にして希望を抱くのは仕方ないと言える、だが戦闘において希望を抱くのは愚かな行為よ……ハアッ！」

そう言い放つと暗黒闘気の力を更に上げた

「!!…………お、押されっ…………!?!」

勢いを増した暗黒闘気は魔理沙のマスタースパークを押し出し魔理沙を飲み込んだ

「…………スペルカード風に命名すれば魔符「闘魔滅砕砲」と言った所か、さて…………」

バーンが見たのは闘魔滅砕砲によって空いた壁の穴

「イテテテ…………何なんだよこの化物は…………」

の横にいるボロボロの魔理沙、闘魔滅砕砲を受けた魔理沙は飲み込まれた瞬間に全力で横へ飛び出しダメージを最小限に抑えていた、しかし最小限と言えども強烈な暗黒闘気を受けた魔理沙のダメージは逃げるのも困難なほどだった

「終わりだ霧雨 魔理沙、すぐ楽にしてやろう」

ゆっくり床に降りる魔理沙に歩み寄りながらバーンは手刀に力を込める

(あー…………これは詰んじまったぜ…………悔しいけどもうダメだ…………)

「…………」

諦めた魔理沙は目を閉じ運命を受け入れた

「その潔さ、見事よ」

掲げた手刀を振り抜いた

「待つてバーン!!」

パチュリーが間一髪で間に合い、バーンの手刀は魔理沙の首に薄い切り傷を残し止まった

「ハア……ハア……良かった……間に合った……はあ……」

間に合った事を確認したパチュリーは安堵しその場にへたりこんだ

「……何故止める?」

バーンの怒りを含んだ言葉がパチュリーに向けられる

「何もそこまでする必要は無いわ、追い返すだけで充分よ」

「……魔導書はお前にとつて大切な物なのだろう?それを奪われたのだ、余の世界では殺されても文句は言えぬ、幻想郷は違うのか?」

「……幻想郷では殺害はご法度なのよ、あなたの読んだ本には書かれていない事だし説明もしてなかったけどそなのよ、だからこの場は納めてくれないかしら?それに魔導書はもう私が解読して理解した物ばかりだから構わないと言えば構わないのよ」

パチュリーの説明に暫し沈黙したバーンは手刀を首から離し魔理沙に告げた

「パチュリーに感謝するのだな……この幻想郷でなければお前は生きてはいなかった……」

身を翻したバーンはチルノ達のいる所へ戻って行った

「……助かったぜパチュリー、流石に今回ばかりは諦めたよ」

ボロボロの魔理沙は素直に感謝を送る

「ホントにね、後1秒でも遅れてたら貴方死んでたんだから」

深い溜め息をつきながらパチュリーは喋る

「しっかしアイツ何者なんだぜ？強過ぎだろ！」

「そうね……だって彼は大魔王だもの」

「大魔王!?それって称号みたいな物だろ？名乗る奴は大概名前負けしてるけどな」

「彼は名前負けしてたかしら？」

「うっ!?してないな……」

ばつの悪い顔で鼻を掻く魔理沙

「それに彼、まだ本気じゃ無いのよ？負荷を掛けられてて今は全力の半分以下らしいわ」

「ゲッ!?マジかよ……」

今更ながらとんでもない奴を相手にしたんだなと魔理沙はゾツとしていた

「……ねえ魔理沙、貴方が良ければ何時でもここに読みに来てくれても構わないわ、流石に持ち帰りはダメだけど」

「どうしたんだよ今更？ 紅霧異変の後、読ませてくれって言ったたら断ったくせに、だから借りてたんだぜ？」

「そうね、まあ心境の変化……ね、本音を言うと貴方に嫉妬してたのよ私」

「えっ？ なんで？」

突然の告白に魔理沙は混乱している

「貴方と初めて会った時は私と貴方に差は殆ど無かったわ、でも貴方は異変を解決する内にどんどん強くなっていった、その点私は魔法の扱いこそ上がったけど体が弱いから貴方との差は開いていったわ」

「……」

パチュリーの告白に黙って耳を傾ける魔理沙

「それが貴方を良く思わなかった理由……でもね、彼の力を見たらそんな事がどうでも良くなってね」

「あー……確かにアレはなあ……」

「まあそういう事よ、そういう訳だからいつでも来てくれて構わないわ」

「……じゃあお言葉に甘えさせて貰おうかな、それとさ、お前明るくなったな！ 楽しそう

に見えるぜ」

「そうね、彼のお陰で楽しい生活が出来ているわ……じゃあ私は行くわ、またね」

立ち上がったパチュリーは戦闘の最中に落とされた魔導書を拾い上げゆっくりと浮遊して戻って行く

「おーい、アイツの名前はなんて言うんだ？」

箒を肩に乗せ立ち上がる魔理沙が問う

「バーンよ、大魔王バーン」

振り向かず答える

「バーンか……さあ今日は帰るか、イテテ……アイツが異変の犯人じゃなくて良かったぜ……」

箒に跨がった魔理沙は壁の穴から紅魔館を後にした

その日の夕食の後、バルコニーで椅子に座り景色を眺めるバーンにレミリアが話しかけた

「パチエに聞いたわ、魔理沙を殺しかけたんですってね、私が見た限りじゃ貴方は決めたら殺害も躊躇しないと思っただけけれど？」

レミリアの傍に居る咲夜が紅茶を入れてバーンに差し出す

「……余はこの幻想郷では何者でも無い、そして何者にもなろうと思わぬし法を弄ろうとも考えていない、ただ幻想郷の法に従ったまでの事だ」

出された紅茶を飲みながら答えた

「そう……でも壁を壊すのはやり過ぎよ」

レミリアも紅茶を飲みながら指を差す

「その事は余も悪く思っている、気を付けよう」

微笑みながら紅茶を口にする

「まあ美鈴の仕事が増えるだけだから良いんだけどね」

同じく微笑むレミリア

「月が綺麗ね……」

「ああ、綺麗だな……」

月灯りが二人の談笑を優しく照らしていた

「良い感じよ、その調子よチルノ」

「よーし！あたいがもつと最強になるのも近いわね！」

「わあ！チルノちゃんスゴイ！」

「ねえ？制御ってこんな感じ？」

「それは抑えただけだ、制御とは使いこなし己の力として昇華させる事だ、焦る必要は無い
い少しずつ慣れていくのだ」

「うーん……難しいなあ……」

「これ片付けときますねー」

もうそこに昔の図書館の静けさは無い、妖精と吸血鬼、魔女と使い魔、そして大魔王
のいる図書館に……

「おーす！パチュリーー！また読みに来たぜー！」

「あら魔理沙、いらつしやい」

「丁度良い所に来た魔理沙、余と代われ読みかけの魔導書を片付けておきたいのだ」

「えー？しようがねえな……」

また一人加わる、それはバーンに惹かれて集まるのか運命なのか……これはある意味
図書館の異変とも言える……

第5話 変化

幻想郷の空を一人の妖怪が飛んでいた

「最近良いネタがありませんねえ……」

ゆっくりと飛ぶ妖怪は誰に聞かれる事も無く一人愚痴る

「後で博麗神社にでも行ってみましようか……」

手にしたネタ帳を見ながらまた呟く

「よし！山のパトロールが終わったら行きますか！」

そう意気込むと妖怪はスピードを上げ幻想郷の山の中へ消えていった

「少し出かけてくる、休んでおくと良い」

すっかり修行風景が染み付いた図書館でバーンは突然告げた

「どうしたバーン？急に出かけるなんてよ？」

答えたのは魔導書を読みふける魔理沙、パチュリーも本を下ろしバーンを見た

「博麗神社へ行ってくる、少し気になる事があるのでな」

「霊夢のところ？あたいも行く！」

ピヨンピヨン跳ねるチルノ、ちなみにフランはお休み状態

「霊夢のところか、んじゃあ私も着いてつてやるよ！最近会ってなかったし私から紹介してやるぜー！」

「では任せるとしよう、パチュリー、留守は任せた」

「ええわかつたわ、貴方はどうするの？」

傍の大妖精に尋ねる

「私は今この本が良いところなんで遠慮しときます」

手に持った本を見せる、題名から察するに恋愛小説のようだ、パチュリーの手に入れた本は魔導書が殆どだが幻想郷の書物やこう言った嗜好品も紛れていたりする

「じゃー大ちゃん行ってくるわ！」

（普通に返事しちゃったけどこことって私の図書館よね？貫禄が有り過ぎてどつちが主かわからないわね……）

二人を引き連れるバーンをパチュリーは頬杖をついて見送った

「ここが博麗神社だぜ！相変わらず参拝客はいないみたいだけどな」

博麗神社に着いた三人、着いたとたんにチルノは母屋へ飛んでいった

「なるほど、神社とは神殿に近い物か、ここからは光の力を感じる、弱々しいがな」

神社を眺めながらバーンは自分の居た世界には無い物への感想を洩らす

「あー、ここ幻想郷には色々な物があるからなあ、バーンにとつては珍しい物が沢山あるだろうさ、つか弱々しいって……信仰が少なすぎるんだぜ！」

笑う魔理沙は母屋へ向かい歩き出し名を呼んだ

「おーい！霊夢ー！いるかー！客が来たぜー！」

「霊夢いないみたい、出掛けてるみたいだよ」

母屋から出てきたチルノが返事した

「なんだ留守か……どうするバーン？帰るか？」

「いや……どうやら帰って来たようだ」

バーンが視線を向けた先には遠目に誰かが飛んで来ていた

「おっ！ありや確かに霊夢だ！おーい！」

確認した魔理沙が手を振って存在を知らせる

「あら、来てたのね」

素っ気なく答える霊夢、賽銭を入れない相手には顔見知りであろうと冷たい

「どこ行つてたんだぜ？」

「ええまあ……ちよつとした野暮用にね、それよりこの人は？参拝客？」

言葉を濁した霊夢がバーンをさした

「残念ながら違うんだぜ、こいつはバーン、大魔王だ」

「はあ？大魔王？魔理沙あんた変なキノコ食べておかしくなつたんじゃない？」

霊夢のキツイ口撃が魔理沙に突き刺さる

「バカ！そんな訳ないだろ！そりやまあたまに調査間違えておかしくなつたりするけど

よ……つてそうじゃねえ！ホントに大魔王なんだよバーンは！」

「ハイハイ、わかつたわ、それでバーンつて言つたつけ？何か用？」

呆れ顔で聞き流した霊夢はバーンに目的を尋ねた

「単刀直入に聞く、余を元居た世界に帰せるか？」

「無理ね」

即座に一蹴された

（わかつてはいたがな……）

「なんだよ、無理なのか、つーか帰リたかつたのかバーン」

「そういう訳では無い、余はもう戻ろうとは考えていない、戻れるかどうかを確認の意味で聞いたのだ、博麗の巫女よ、余が戻れぬのは戻る場所がわからぬからだろう？」

「そうよ、あんた頭良さそうだからわかってるんでしょ？おそらく紫の仕業でしょうからね」

「なるほどな、出所がわからないんじゃない？霊夢でも無理か」

「外から来た人間なら訳ないんだけどね、あんたみたいな明らかな人外は私の管轄外よ、どうしても帰りたいなら紫を探す事ね」

「そうか、充分だ博麗の巫女、時間を取らせた、帰るぞ」

話を終えたバーンは二人に促した

「あいよー！じゃあな霊夢、また来るぜ！」

「うん……」

何故かチルノの返事だけが低かった

「ええ、またね」

霊夢が身を翻したその時、空気を切り裂く音が聞こえ辺りを強い風が舞った

「どうも霊夢さんお久しぶりです」

黒い羽を生やした少女がそこには居た

「あら文、賽銭入れに来たの？言っとくけどネタなんて無いわよ？」

「やだなあ霊夢さん、賽銭なんてあるわけじゃないじゃないですかあ、おっと！おやおや？今日は参拝客がいるみたいですねえ！」

霊夢に挨拶した後、振り向いた少女、その目はバーンに向けられる

「わざとらしいんだぜ文、分かってただろが」

「ええまあ……それよりそちらの方は？ 外来人と見受けましたが？ あ、申し遅れました、私、清く正しい射命丸です」

興味津々なその瞳でバーンを凝視している

「……余の名は……」

「ちよつと待つんだぜバーン！」

名を答えようとしたバーンを魔理沙が止める、代わりに名を言ってしまったが……

「バーン、ちよつと耳貸せ」

魔理沙の言葉にバーンは動かなかつた

「ああもうー！」

箒に乗り、バーンと同じ高さまで浮遊した魔理沙はバーンに耳打ちする

「あいつの事はお前も少しは知ってるだろ？ ブン屋だよ、あいつはな事実を大幅に誇張したりある事ない事でつち上げてそれを幻想郷にバラ撒くんだ、外来人のお前なんて格好のネタだ、滅多な事は言わない方が良いぞ！」

「ほお……」

魔理沙の助言にバーンは意味深に笑った

「えー、話は終わりましたか？それでよろしかったらバーンさんの取材をしたいのですがよろしいですか？」

「!?もう名前を調べてやがったか！」

「いや、さつき魔理沙さんが言つてたじゃないですか」

「あつ！」

自分のミスに気付き魔理沙は赤面した

「射命丸、受けてやっても良い、だが条件がある」

「何でしょう？」

「聞けばお前は幻想郷最速らしいではないか、そこで余と勝負をせんか？余も速さに自信があるのでな」

「えっ？速さ比べ……ですか？」

条件に身構えていた文は思わず聞き返す、自身の最も得意とする事で勝負を挑まれたから

「……紅魔館の菜園にある薔薇を取って戻つて来るのだ、どうだ？受けるか？」

「勿論ですよ！」

ルールを聞いた文は二つ返事で受けた、そして顔を下げ笑う

(貰った……!!面白そうなネタゲットです……!!)

「よし、では魔理沙、合図を頼む」

「ホントに良いのかよバーン？文はマジで速いぜ？」

「まあ見ておろがが良い」

開始位置についた二人、構える文に対しバーンは立っただけで構えようとしな
い

「じゃ行くぞー！ヨーイ……ドン！」

ゴウツ

辺りを凄まじい風が暴れた瞬間、文は目にも止まらぬスピードでスタートを切った
「おいおいバーン！何やってんだよ！早く行けよ！」

その場で立ち尽くすバーンに魔理沙の野次が飛ぶ

「最速と呼ばれるだけある……ラーハルト並み……いやそれ以上か？」

文のスピードに感想を述べた後、その呪文を唱えた

「ルーラ」

バーンを魔法力が包むと魔法力の残光を残し一瞬で消え去った
「あー……：そういうやそんな呪文があるって言ってたな」

空を見上げながら魔理沙が一人話した

「あ、バーンさん！お帰りなさい、お二人は帰られたんですか？」

門に居る美鈴が突然現れたバーンを迎えた、普通なら驚くはずなのだが、なんだバーンさんか、バーンさんなら当然か……と美鈴は特に驚かなかつた、感覚が麻痺してきているようだ

「いや、すぐ戻る、薔薇を一輪頂いていくぞ」

「えっ？あつはい……どうぞ……」

頭に？を浮かべた美鈴は門を開け、様子を観察する、薔薇を一輪摘んだバーンは再びルーラを唱え一瞬で紅魔館から消える

「良くわかりませんが、やっぱりバーンさんは凄いですね……」

バーンが居た後を眺めながら呟く美鈴に凄まじい風が襲う

「すいません！薔薇を一輪貰って行きますね！」

風が通り過ぎ、花卉を散らした庭を見て美鈴は納得した

「今のは文さんですね……なるほど、勝負ですか……それは構わないですが……」

「これ掃除するの私なんですよお……?」

庭に散らばった大量の花弁に美鈴はガツクリと肩を落としたり

「ゴール!!ふふーん♪私の勝ちの様ですねバーンさん!」

博麗神社に戻ってきた文は勝利を確信し手に持つ薔薇を魔理沙達に見せつけた、だが魔理沙達の様子がおかしい事にすぐ気付いた

「何を笑ってるんですか魔理沙さん?」

ニヤけている魔理沙に尋ねた

「あー……文?後ろ見てみなさい」

霊夢が言いづらそうに文の後ろを指す

「えっ?後ろですか霊夢さん?……嘘っ!」

「読み通り今着いたか、勝ったのは余だ」

木陰から出てきたバーンは証である薔薇を見せながら歩いてきた

「そんな……一体どうやって……」

「そうよバーン、文も来たんだし説明してちょうだい」

負けた理由がわからない文に霊夢も同意しバーンに説明を求めた

「ルーラと言う移動魔法を使ったのだ、この魔法は一度行った事のある地域や場所に高

速で行くことが出来る魔法だ、一瞬とまではいかぬが場所さえわかっただけであればお前よりルーラの方が速いのだ」

「は、反則じゃないですか……」

「余は薔薇を取り、戻ると言ったのだ、単純な速さ比べをするとは言っていない」

「確かにそうですけど……」

「そう悲観するな、お前は確かに速かった、最速の名は伊達ではないな、だが約束は守って貰おう」

「はい……わかりました……取材は諦めます」

しゅんと項垂れる文

「魔理沙……確かに彼スゴいわね」

「だろ？ わかってくれたなら良いんだぜ」

満足気に頷く魔理沙を他所に霊夢は静かにバーンを見つめていた

（今のだけでは判断しかねるけど、とても強い事はわかる……本当に紫が連れてきたのだとしたら……アレに対して？）

（もしそうだとしても本当にアレに勝てるの？ 勝算はあるの？）

独白を続ける霊夢、その目は悲しげに虚空を睥む

（いえ……今まで紫が誰かを連れてきた事なんて無かった、ずっと探し続けている紫に

とって彼は可能性なのかもしれない……確かにもしかしたら彼なら……)

バーンに何かを感じながら空を見上げる

(紫……貴方……今どこにいるの？もう余り時間は残されていないかもしれないわよ……?)

バーン達を見送った霊夢は暗い表情のまま母屋に戻って行った

「今戻った、変わりはあつたか？」

「あつ！お帰りなさい！」

「特に無いわ、強いて言えば美鈴の仕事が増えただけね」

「フツ……そうか……おそらく天狗の作業だろうな」

「その天狗をそそのかしたのは貴方でしょう？」

「フツ……どうだろうな」

戻ったバーンにパチュリーの辛い言葉が飛ぶ

「今日も楽しかったぜ！なつチルノ！」

「うん……」

「どうしたチルノ？ 霊夢に会った辺りからそんな感じだけだよ？」

魔理沙の言う通りチルノの表情はずっと暗いまま下を向いている

「どうかしたのかチルノ？」

ここに来てようやくバーンがチルノに話し掛けた

「バーンは……バーンはいつか帰っちゃうの？」

バーンの言葉を待っていた様にチルノはその言葉を出した

「……言った筈だ、余に戻る気は無いと」

「じゃあ……これからずっとここに居てくれるの？」

「……」

バーンは答えなかった

「やっぱり帰るんだ！ 帰っちゃヤダ!!」

涙をこぼしながらチルノは叫ぶ、しかしバーンは答えない

「チルノ……」

「チルノちゃん……」

（完全になつかれちゃったわね……どうするのバーン？）

数秒の沈黙の後、バーンは静かに話始めた

「チルノ……余は……この幻想郷でいつまで居られるかわからんだ……明日かも知れ

ぬし100年先かも知れん……それゆえにお前の願いに答えられるとは限らんのだ
……お前には難しい話かもしれないがな……」

「ヤダ！ わかんないそんなこと！ バーンはずつとあたいと友達で！ ずつと！ ずつと……
！」

流れる涙で顔を濡らし、想いを口にするチルノ

「……」

問答を止めたバーンは優しくチルノの頭を撫でる

「その時が来る迄はお前達と共に居よう……それで許せチルノ……」

「うう……約束……だからね！」

「ああ、わかった」

顔中涙まみれのまま笑顔を見せるチルノ

「……今夜の夕食にはお前達も来るが良い、みなで食卓を囲むのもたまには悪くなかる
う」

「おっ！ 良いのか！ やったぜ！」

「ありがとうございます！」

「やった！ あたいが一番食べてやるわ！」

バーンの約束と夕食の招待にその場は一応の収まりを得た

「ほら……涙を拭きなさい」

「うん！」

パチュリーから渡されたハンカチを受け取り顔を拭くチルノ

「……全然拭けてないわ、貸して」

チルノからハンカチを受け取ったパチュリーはチルノの涙まみれの顔を綺麗に拭いていく

「これで良いわ」

「ありがとパチュリー！」

お互いに笑う二人を魔理沙と大妖精が唾然として見ていた

「……ねえ魔理沙さん？」

「……ああ……お前もそう思うよな？」

「な、何よ？」

二人の視線にパチュリーはたじろぎながら聞く

「いやまあ……その……母親みたいだな……つて思ったんだぜ」

「ええ……そうです……綺麗なお母さんですね」

「むきゅ!？」

二人の発言に顔を真っ赤に良くわからない声を出すパチュリー

「べ、別にそんなつもりじゃ……!？」

「いやあ中々様になつてゐるぜ? して事は父親はバーンか!」

「チルノちゃんの事、よろしくお願ひしますね」

「ちよ、ちよつと! 何言つてゐるのよ!」

「? なになに?」

慌てふためくパチュリーに状況の掴めぬチルノ

「パチュリー様あ! 見てましたよお? とーつてもお似合いですよお!」

「こあまで!？」

「アハハハ! 本が恋人と思つてたけどバーンがいたか! こいつは修羅場だぜ! アハハ

!」

「うふふ……」

「……むきゅー……」

反論が無意味と知つたパチュリーは真っ赤な顔のまま本で顔を隠した

「フツ……」

その光景を見て笑うバーン、彼は今この状況に以前は感じなかつた感情を覚え始めて

いた

「夕食に招待するのは構わないけど……これは流石に……」

始まった夕食の光景を見たレミリアは口に洩らした

「品が無さ過ぎるわ……」

その食卓はチルノ、フラン、魔理沙の決戦場だった

チルノと魔理沙が大食い対決を始め食卓を荒らす、飛び入り参加したフランが大妖精と美鈴のおかずを奪う、元々少食のパチュリーの食事は全て奪われテーブルの真ん中にある肉の山を奪い合い咲夜が追加を持ってくればまた三人が奪い合う

「もつと持つてこいコラー!!」

「コラー!!それはあたいの肉よ!」

「もう遅いもんね!あたしの物!」

喧嘩が始まりそうな程その日の夕食は盛り上がっていた

「バーン……貴方良く平然と食事が出来るわね?」

呆れ返っていたレミリアがバーンに話し掛けた

「フツ……フフ……」

「バーン………?」

「フハハハハハ！」

突然バーンが笑いだした、バーンの笑いに一同は驚きバーンを見る

「いやすまぬ……何故か可笑しくてな、食事を続けるか」

その後も食卓に笑いが絶える事は無かった

その日、夕食が終わった後レミアアの提案で宿泊を許可された3人はフランと4人で様々な遊びをした後に疲れて寝てしまった

「……」

また1人バルコニーに出て月を眺めているバーン、月を眺めながら物思いにふける

(余に芽生えつつある妙な感情……これは何だ? 何故余は笑ったのだ……理解出来ない……)

自身に芽生え始めた謎の感情に思考を巡らすが答えが出せずただ時は過ぎる

「真の友をもてないのはまったく惨めな孤独である、友人が無ければ世界は荒野に過ぎない」

夜の沈黙を崩し、彼女は現れた

「フランシス・ベーコンだったかしらね、フフ……本で読んだのよ」

「レミリアか……」

相席した者の名はレミリア、今日は咲夜はいない

「貴方が困惑しているその答え教えてあげるわ」

「気付いていたのか……」

「まあね、貴方が笑った時に確信したわ」

楽しいな笑みを浮かべ、テーブルに肘を着き指を絡ませる

「貴方のそれは愛よ、わかるかしら？」

「愛……」

「まあ貴方にはわからないでしょうね、愛にも色々あるのよ、男女の愛、家族の愛、友の

愛、貴方の愛は友の愛、友愛と呼ばれる物ね」

「友愛……この余が？」

「貴方友人なんていた事無かったですでしょう？」

「当然だ、余の世界は互いに命を狙い合い、騙し、利用し合う弱肉強食の魔界、友情など

と言う不確かな物は無い」

「でもここにはそれは無い、命を狙う者もないし狙われる事も無い、まあ騙したり利用

し合う事はあるけどそれも常識の範囲内、貴方は敵の居ない幻想郷に来て変わったのよ」

「……」

レミリアの言葉を素直に聞くバーンにレミリアは続ける

「フランやパチエ、魔理沙、そしてチルノに大妖精、彼女達に関わってから貴方は変わったわ、孤独だった貴方に友人が出来たからね、貴方に自覚は無いでしょうけど」

「……」

「貴方の心には荒野が拡がっていた、幻想郷に来てから荒野は更に荒んでいった……でもそこに花が生まれたの、貴方はその花の名前どころか花かすら解らなかつた……でも今はわかるでしょう？」

「ああ……詩人だなお前は」

「フフ……ありがと、じゃあ私は部屋に戻るわ」

「礼を言うレミリア」

「気にしないで、それよりその花は摘んじゃダメよ？大事に育てなさい……おやすみバーン」

「ああ……」

ヒラヒラと手を振りながら部屋に戻るレミリアを見送ったバーンは再び目を眺めな

がら一人呟く

「友人と言う種の愛と言う花……」

呟きに呼応する様に一筋の流星が夜空を割いた

「どうかしら様子は？」

「紫様！ええ、また少しですが力が上がりました、博麗霊夢が封印を張り直しましたがやはり余り時間は残されていないと思います」

「そう……」

怪しげな空間で話すのは八雲紫とその式神、八雲藍

「今回も見付かりませんでしたが紫様」

「ええ……手掛かりすら見つからないわ……それより彼はどうか？幻想郷に上手く馴染め

てるかしら?..」

「思った以上に馴染めていきます、殺害手前まで行った時は焦りましたがもう大丈夫かと思えます」

「そう、じゃあ引き続き彼とアレの監視はお願いね、何かあったらすぐに知らせて」
「わかりました、お気を付けて紫様」

八雲紫は空間を開きまた何処かへ消えて行った

第6話 大魔王 幻想を巡る

「良くなってきたフラン、まだまだ……だがな」

楽しいお泊まり会の翌日でも修行は休まない、自身の疑問に解答を得たバーンだが特に様子は変わらない

「ねえバーン？これをみて欲しいのだけど」

「む？何だパチュリー？」

指導を続けるバーンにパチュリーが寄ってきた、そして掌に巨大な火球を作り出す

「まだまだ……!!」

更に魔力を集中させる

「ほお……」

それを見たバーンから感嘆の声が漏れる、パチュリーが行ったのは火球の大きさを維持した状態で更に同じ大きさの火球を3つ作り出す、合計4つの火球を作り出したのだ

「ふう……どうかしら？貴方から聞いた魔法式を応用してみたんだけど？」

「フィンガーフレアボムズ……か」

火球を見ながら呟いた

「それはフィンガーフレアボムズと呼ばれる技だ、未完成だがな、圧縮したメラゾーマを5つ指先に作り出すのが完成された姿だ」

「5つ……ね、今はこれで精一杯……」

「本来は禁呪なのだ……呪文の反動に体の弱いお前が耐えられるものでは無いが……幻想郷の魔法式を応用する事で反動が無くなったのだろう」

説明したバーンは薄く笑うと

「見事だ、尚研鑽に励むが良い」

その成長を褒め、激励した

「フウ……わかつてるわ」

火球を消したパチュリーは少し満足気に答えた

(案外ポップの様に化けるかも知れんな……フム……)

「パチュリー、魔の極致の1つを教えてやろう、もつとも余には使えぬため知識のみになるがな」

「貴方にも使えない魔法を？それを私に？」

大魔王にも使えない魔法、それを聞いて大魔王に遠く及ばないパチュリーは聞き返す、そんな魔法が今の自分に使えるのかと

「案ずるな、その魔法は人の手で作り出されたものだ、余の居た世界ではお前より若い魔

法使いも扱えていた、いや……大魔導士か」

「興味あるわ、その魔法教えて」

「私も興味あるぜ！」

魔導書を読んでいた魔理沙も加わる

「その魔法は対象を必ず消滅させる魔法、直撃すれば余ですらその運命からは逃れられぬその魔法……人の作り出した魔の極致、名を極大消滅呪文「メドロア」と言う」

「極大消滅呪文……メドロア……」

「ヤバそうな呪文だな……」

教えられたその呪文の名はメドロア、かつてバーンの居た世界で大魔導士マトリフが創り出し、その弟子ポップに継承された魔法、竜魔人になったダイを除き唯一バーンを倒す事の出来る魔の深淵の1つ

「この魔法はメラ系とヒャド系、その2つの魔法を同じ魔法力で融合させる事で出来る、火と氷の組み合わせでは無い、融合だ」

「そこまでわかつているなら貴方は何故出来ないの？ 貴方は火も氷も扱えるでしょう？」

「余の鬼眼だ、鬼眼の力が余の魔法力を微妙に狂わすのだ、故に余には扱えぬ……融合は

出来なくとも合体は可能かも知れんがな……お前にその気があるなら慎重に行え、下手をすれば消滅するのは自分になる」

「そう……火と氷の魔法力の融合……こうかしら？」

掌に拳よりふた回り程大きい火と氷の魔力を生み出し融合を試みる

「な、何これ!?!魔力が暴れて……!?!」

合わせられた魔法力が互いに弾き合い、暴れる、魔法力が収まる事を拒否し膨張していく

「おい!パチュリー!」

危険を感じた魔理沙が叫んだ

「……ハア!」

一瞬でパチュリーに詰め寄ったバーンは掌底で暴れる魔法力を天に弾き上げた

「……慎重に行えと言った筈だ、余が弾かねばお前は消滅していたぞ」

僅かな怒りを含ませパチュリーを叱責する

「……ごめんさい、確かに注意が足らなかつたわ……あそこまで危険とは思わなくて……」

非を認め、危険性を正しく理解したパチュリー、だがその顔は少し嬉しそうに笑っていた、魔法使いの好奇心がその難解な、されど挑み甲斐のある壁にパチュリーを笑わせて

たのだ

「続けるなら初めは羽虫程の魔力でやるのだな、それならば失敗しても体に穴が空く程度で済む」

余りシヤレになっっていないが練習方法を示す

「そうね、私もそうしようと思ってたわ」

「私はやめとくぜ、そういう細かいのは苦手だからさ」

その練習方法にパチュリーは賛同し、魔理沙は辞退した

「その前に……アレは美鈴に謝っておくがいい」

天井に出来た穴に向かってバーンは話した、だが返事を返したのはパチュリーではなかった

「後で美鈴に言っておくわ、全く……その内紅魔館を全壊させるんじゃないかしら……」

返したのはレミリア手に何かを持ちながら歩いてくる

「その内と言わず余なら今すぐ全壊させるのは容易いが？」

「笑えない冗談ね、それよりこれを見なさい」

レミリアがバーンに渡したのは紙

「………文文。新聞？」

「貴方が昨日あしらった天狗の書いた新聞よ、中々愉快な事が書かれているわ」

笑みを浮かべ、バーンに読むことを促す

「……………フツ……………あの女……………遅い事よ」

新聞に目を通したバーンは笑みを浮かべ新聞を机に置く

「何が書いてあるんだぜ?……………何々?……………幻想郷の危機?!突如幻想郷に現れた大魔王を自称するバーンと名乗る外来人!霧雨魔理沙とチルノを配下に置き、幻想郷の支配に乗り出したか?!……………この記事は清く正しい射命丸文が御送りしました……………」

「あんのヤロー!誰が配下だ!誰が!」

怒りを隠さず怒鳴り散らす

「あら違うの?」

「違う!」

レミリアのジョークに魔理沙は怒って否定する

「確かに取材は受けぬと言ったが記事にするなどは言っておらん……………大魔王は霊夢から聞いたのであろう……………本当に遅い奴よ」

文の記者魂に感心する

「御丁寧イラストまで書かれてるしね……………これで幻想郷に広く知られちゃったわね……………内容は皆信じないけど貴方の存在は知られたわ、どうするの?」

「特にどうするつもりも余には無い、だが幻想郷に居る血気盛んな者を相手にするのもまた一興か」

「……相手に同情するわ……」

「その血気盛んな同情する相手が来られました」

話に割って入ったのは突然現れた咲夜

「早速ね……誰かしら？」

「白玉楼の魂魄妖夢です」

「確か……半人半霊の剣士……だったか」

「その通りですバーン様、実力は高い部類ですね」

「フム……ならば相手をしてやるか」

バーンが立ち上がり歩き始めた時にレミリアから提案が入る

「それ、私も興味あるわ、中に案内して皆で観戦しましょう」

咲夜に指示を出した後、一行は図書館を後にした

「お招き頂き感謝します、魂魄妖夢と申します」

広い廻廊に通された妖夢は深々と御辞儀する

「余の名はバーンだ、妖夢よ余に何用だ？」

「新聞を読みまして……大魔王と自称されるバーンさんに興味を持ったのです……もし本当ならば是非とも御相手を願えないかと思ひまして」

礼儀正しく、バーンの問いに答える妖夢

「1つ訂正がある、余は今は大魔王ではない、幻想郷において余はただの外来人よ」

「今は……と言う事はやはり大魔王だったのですね！是非！是非御相手を！」

(言い方を間違えたか、まあ良い)

更にその気にさせてしまったバーンだが動じはしない、妖夢の言う通り幻想郷に来る以前は大魔王だったから

「妖夢よ、余に挑みたくば条件がある、余も力無き者を相手にする気は無いのだ」

「……何でしょうか？」

試されている事を理解した妖夢は逸る気を抑えて条件の詳細を尋ねる

「……来いチルノ」

「えっ？あたいたい？」

突然呼ばれたチルノはよくわからないままバーンの傍に向かう

「このチルノを倒せれば相手をしてやろう……チルノにも勝てぬ者を相手にする気は無

いのでな」

「……わかりました」

「えっ？あたいがやるの？」

チルノの了承を得ないまま話は進む

「チルノよ、今日までの成果を見せてみよ」

「わかったわ！もつと最強になったあたいの力見せてあげるわ！」

「……よろしくお願ひしますチルノさん」

指差すチルノに御辞儀をする、妖夢、顔を上げ自身の獲物を構える

「魂魄妖夢、参ります！」

そして駆けた

「あたしも遊びたかったのに！なんでチルノなのー！」

観戦場に戻ったバーンにフランが喚く

「まだ制御出来ぬお前は暴走する可能性がある、今回は我慢しろ」

「むー！」

むくれるフランだがすぐに諦めてチルノの応援を始める

「貴方、ファンタジーに出てくる敵の親玉みたいよ？」

「私もそう思ってたんだぜ」

レミリアと魔理沙の発言に周りはウンウンと頷く

「確かにバーンさんが親玉なら納得できますね、なら私は紅魔館四天王の妖怪武道家ですかね」

「なら咲夜は時のメイドでどうだぜ？」

「私は七曜魔女かしら」

「フランちゃんは狂喜の妹とかどうですか？」

何やら違う話で盛り上がっている様子

「ちよつと！私は!?て言うか紅魔館の主は私よ！」

レミリアが参加した

「レミリアは操られてる設定で良いんじゃないか？」

「何よそれ！魔理沙みたいな村人Aに決められたくないわよ！」

「はあ!?私が村人Aって何だよ！お前なんてれみりやになってカリスマブレイクしてりや良いんだぜ！」

口論をよそに、バーンとフランだけはチルノの戦いを真剣に見ていた

「うりゃー!」

掛け声と共に放たれる大量の氷弾が妖夢を襲う

「ハッ!」

手にした二刀で氷弾を切り避けながら妖夢も弾幕を放つ

一進一退の様に見えるが本気のチルノと違い妖夢には余裕が感じられる

(……考えながら戦うにはまだ幼過ぎるか)

戦いを観賞しながら内心呟く、その幼さ故に攻撃が単調なチルノの弾幕は実力者の妖夢には読み易く、避けづらい弾のみを切り避ける、攻撃も様子見程度で今はチルノの實力を正確に把握している状態

「くっそー!このっ!このお!」

思うように攻撃が当たらないチルノの攻撃は更に大雑把になり妖夢にとって有利な状況になっていく

(三手といった所か)

バーンが予測したと同時に妖夢は仕掛けた

「幽鬼剣「妖童餓鬼の断食」!!」

刀の一閃と共に放射状の楔弾が放たれチルノの弾幕を縫うように進む

「うわっ!？」

突然の弾幕に驚くチルノは弾幕を撃つ手を緩め回避に急ぐ

「天上剣「天人の五衰」!!」

更に放たれた五色の楔弾がチルノを襲う、弾幕を撃つ事を忘れひたすら回避に専念するチルノに向かい妖夢は一気に距離を詰める

「餓王剣「餓鬼十王の報い」!!」

至近距離から放たれた斬撃がチルノを捉えた

「!!」

筈だった、斬撃はチルノを掠め後方に消える

（ほお……）

逸早く気付いたのはバーン、そして妖夢

「くっ……!？」

妖夢は凍りついた腕を見て顔を歪める、妖夢の腕は中程から先まで薄い氷に覆われていた

（咄嗟に腕を凍らせて斬撃をずらしたか、あの状況で決めるとは中々……だが……）
成長したチルノに少し唇が上がったがまた直ぐに戻る

「はあ……はあ……で、出来た……へ、へへーん!どうだ!謝るなら今の内よ!」

「少し貴方を低く見すぎた様ですわ……」

余裕のあつた表情はいつの間にか真剣になっていた

(……)までの様だな……)

妖夢の表情にバーンはこの戦いの決着を見た

「はあ……はあ……イテ!?……ううう……」

「もういいでしょう? 貴方では私に勝てません」

優劣は明らかだった、真剣になった妖夢に隙は無かったチルノの攻撃は避けられ、氷結も警戒され通じない、後は地力の差で追い詰められチルノはボロボロだった

「うるさい! 負けないもん……! あたいはあんたなんかには負けないもん!」

「……仕方ありませんわ、貴方には眠って貰います」

刀の峰をチルノに向け妖夢は構え全身に力を集中させる

「……………めんなさい」

謝罪と共に瞬時に詰め寄った妖夢の峰打ちはチルノの銅を打っていた……

「……)までだ」

バーンが居なければ……

!?

刀が止められた事を理解した妖夢は素早く距離を取る

「うう……バーン……」

ボロボロのチルノが涙ぐんでバーンを見上げる

「良くやった、後は余に任せておけ」

チルノにベホマを掛けるとレミリア達の場合へ行かせる

（今のでわかりました……強い……とてつもなく!）

一度の交戦でバーンの力量を察知する妖夢、強敵と戦える事に心臓は高鳴り、笑みを浮かべる

「お前の実力は証明された、約束通り余が相手をしよう」

「光荣ですバーンさん、失礼の無い様、全力で行かせて貰います!」

刀を構え精神を落ち着かせる

「……妖怪が鍛えたこの楼観剣に斬れぬものなど、あんまり無い!魂魄妖夢参ります!」

口上の終わりと同時に動いた妖夢は弾幕を展開しバーンの様子を伺う

「そんな生温い弾幕では話にならぬ、弾幕とはこうするのだ」

バーンが魔力を高めると体から五色の大量の弾幕を展開する

「あれは……火、氷、風、熱、爆発の弾幕！ それにあの量……五つの属性を扱い尚且つあの量……もう驚くのも疲れるわね彼を見てると……」

観戦するパチュリーの諦めた様な説明を受けて他の観戦者達はバーンが凄い事をしていると理解した

「ウツ！クツ!？」

弾幕を相殺された妖夢に残る弾幕が押し寄せる、切り払うも量が多過ぎ身を掠める

「弾幕はもうよいだろう？ お前は剣術を扱うのだろうか？ ならばその刀で掛かってくるが良い」

弾幕を放つのを止めたバーンが妖夢に近接戦闘を提案する

「……私としては嬉しいですがよろしいのですか？」

「何度も言わせるな、峰を返す必要は無い……殺す気来い」

「……後悔しないでください」

素早く距離を詰めた妖夢の斬撃がバーンを捉える

「そんな……」

斬撃はバーンの掌で止まる

「くっ……!!」

連撃を放ち手数で押そうとする妖夢の刀は全てバーンの掌で踊らされる

「……ハアツ!!」

渾身の力を込め胴に目掛け切りこむ

「カラミティエンド!」

バーンの手刀が迎え撃ち刀は抵抗無くその刀身を割った

「そ、そんな! 楼観剣が!」

折られた刀を見て信じられない妖夢が声に出す

「良い刀なのだろう、だが余の手刀は余の世界で最も強いとされる剣、妖怪が鍛えた刀に

遅れはとらぬ」

「……くう……」

距離を取った妖夢は折れた楼観剣にシヨックを受けながら納刀し一刀流になる

「まだやるのか……その意気込みは買うが……これでも来るか?」

スウーつとバーンの両手が動き、定位置で止まる

「……!!」

妖夢はその構えに全く動けない

(隙が……隙が全く無い……)

剣術を扱う故に妖夢はバーンの構えの完成度に戦慄する

(打ち込めばやられるのは間違いなく私……でも!!)

均衡状態が十数秒経った時に妖夢は意を決した

(敵わなくても私の全力をぶつける!!)

「フウー……」

息を吐き、精神を集中させ自身の最高の時を作り出す

「……ハッー」

そこに妖夢は居なかった、妖夢の出せる最高のスピードは一瞬ではあるが幻想郷最速と呼ばれる射命丸文の最高速を越えるスピードを叩き出せる、そのスピードがバーンの構えを上回ると信じて突っ込んだ

地

「カハッ……!?!」

一瞬の交差の後、妖夢は地面に叩き付けられていた

(な、何が……)

苦痛に悶えながらも自分が何をされたかがわからない妖夢は考える

「臆せずに向かつて来たのは誉めてやろう、そして素晴らしい速さだった、この結果は余が相手だったから故に悲観する事は無い」

「あ、ありがとうございます……」

刀を杖がわりに立ち上がる妖夢は礼を述べる

「あの！何をされたんですか私？」

「ただのカウンターだ、お前の速さを見切り斬撃を受け流した反動を利用してお前を地に叩き付けたのだ」

「全くわからなかった……」

「その気になれば更に攻撃も1回可能なのだが今回は必要無かったのだな」

「更に攻撃も!?!」

簡単に言うバーンに驚きを隠せない妖夢、自分の最高速を易々と受け流し尚且つ攻撃も出来ると告げられショックを受けた

「楽しめた……さらばだ」

（あんな人がいるなんて……もつと修業しなくちゃ!）

戻るバーンに深々と御辞儀をする妖夢、そして折れた楼観剣の刀身を見つけショックで項垂れた

「お疲れ様、ホント苦戦しないわね貴方」

「その気持ちわかるわレミイ」

「バーンさん！さっきの教えてください！門番の仕事に役立ってます！」

「門番に関係無いだろ美鈴」

「あたしにも教えてー！」

「紅茶を用意してます、どうぞお部屋へ」

賑やかな迎えがバーンを囲む

「うう……バーン……あの、その……」

もじもじと話づらそうにチルノがバーンを見る、負けてしまったのが申し訳なく思っているのだろう

「……怒ってはおらん、行くぞチルノ」

「！……うん!!」

平和な紅魔館の1日が終わる

とある竹林の亭

「あら？新聞来てたのね」

居間に置いてある新聞を見つけ彼女は読み始めた

「へえ……バーンって言うのね彼は……」

新聞を読みながら一人呟いた

第7話 パーティーとチエス 〱 盤上の決闘〱

「うへえ……またですかあ……」

そう洩らしたのは美鈴

（今月で何回目ですか？まあ暇潰しにはなりますけど……）

うんざりしながら目の前の妖怪を見ている

「良いからバーンつてのに会わせろ！ベコベコにしてやんぜえ！」

いきり立つ妖怪に美鈴は告げる

「バーンさんに会いたければ私を倒してからにしてもらいましょう」

目を閉じながら応対する

「そりゃ簡単で良い！行く……ポハアツ！」

美鈴の脚を受け彼方へ消える

「妖夢さんを倒したのが知られてからひつきりなしに来ますね……まあ珍し物見たさにくる人もいますが」

独り言を話ながらまた門に構える美鈴

バーンが妖夢を倒した事は次の日には幻想郷に知れ渡っていた、そう射命丸文であ

る、妖夢が挑んだ事を知った文は妖夢に詳細を聞き、妖夢はそれに真面目に答えたのだ。バーンが実力者の妖夢を倒した事で信憑性を得た記事に幻想郷の民は興味を示し、倒して名を上げようとする妖怪や実物の大魔王見たさに紅魔館にやって来る者が絶えなかった、多過ぎる来客にバーンはその品定めを美鈴に任せたので美鈴の眼鏡にかなわぬいは今の様に門前払いを受けるのだ

(お嬢様怒ってるだろうなあ……)

不安な顔で空を見上げた

「気に入らないわね」

図書館に来たレミリアは魔導書を読むバーンに言い放つ

「紅魔館の主は私なのよ？…なのに来る客来る客みんな貴方ばかり、貴方は客人なのよ？少しは控えて欲しいわね」

怒りを含み話すレミリア、だがバーンは動じない

「余のせいでは無い、怒るなら射命丸文に向ければよからう」

「確かにそうね、でも貴方も原因の1つでもあるのよ？」

「確かに……ここを去れと言いたいのか？」

「そうじゃないわ、ただ控えて欲しいのよ、貴方は客人、主である私に配慮して欲しいの」
レミリアはバーンを追い出すつもりは無い、だが面白く無いのだ、紅魔館に来る者がバーンにしか関心を持っていない事が……

「……お前の言う通りだ、すまなかつた配慮しよう」

「わかつてくれれば良いのよ、それより貴方が来てからもう一ヶ月ね」

器量が小さいと思われるのはわかつている、これはバーンと対等でありたいと思うレミリアの嫉妬も含まれていた、それに配慮すると言つても現状が今すぐ変わるものでもない、そのためバーンの謝罪を聞いてこの話は終わる

「そうか……もうそんなに経つか……早いものだ」

幻想郷にバーンが来てから一ヶ月が経っていた

「それでパーティーを開こうと思うの、遅い貴方の歓迎会つて名目でね」

「歓迎など必要無い」

レミリアの提案は拒否されてしまう

「あら？早速配慮してくれたの？良いのよ、紅魔館ではたまにパーティーをしてるから、名目に使うだけよ、それに招待するのは顔見知りだけだしね」

「……好きにするが良い」

再び魔導書を読み始めるバーンに笑みを浮かべたレミリア

「そう……どちらにしる準備は進めてたの、パーティーは明日よ、もつと友人が増えると良いわね」

そう言うのとレミリアは図書館を後にした

(気を使われていたのは余の方だったか……)

魔導書を読みながら微笑した

「アリス！明日のパーティー行くんだろ？」

「ええ魔理沙……大魔王も気になるしね」

友人にパーティーに来るか確認にしに行った魔理沙、友人は来るみたいだ

「他人に無関心なお前が珍しいな！あいつはマジでスゴいぜ？私なんて殺されかけたんだぜ」

「そんなに強いなら私も挑んでみようかしら？」

アリスは微笑みながら言った

「止めとけ、人形が壊されて返り討ちが関の山だぜ」

その言葉はすぐ返される

「随分買っているのね、魔理沙がそこまで言うなら止めとくわ」

「それが賢明だぜ、じゃアリスまた明日な！」

「ええまた明日ね」

箒に跨がると魔理沙は飛んでいった

「幽々子様、明日ですよパーティーは？」

「あらあそうだったわね、すっかり忘れてたわ、楽しみね」

白玉楼の妖夢は主人に確認を取る

「私も楽しみです、バーンさんに会いたいと思っていましたので」

「私も気になってたのよ、妖夢が負けちゃったって言うし」

「次は負けません！修業して次は必ず勝ちます！」

意気込む妖夢を前に幽々子は違う事を考えている

(紫は彼に何を感じたのでしょうか……)

「ルーミアちゃんは明日のパーティー来るの？」

「私は招待されてないのだー」

チルノと大妖精が友達の妖怪に聞く

「あたいの友達なら大丈夫よ！バーンだつて許してくれるわ！」

「バーンつて誰なのだー？」

「ルーミアちゃんは知らないんだ、えーと……大魔王だよ！」

「大魔王つて美味しいのかー？」

「食べ物じゃないよルーミアちゃん、それに歯が立たないと思うなあ……」

苦笑いしながら答えた

「じゃ明日紅魔館に来なさいよ！」

「わかつたのだー」

ルーミアに約束を取りつけて二人は飛び立った

「霊夢さーん！」

「どうしたの文？」

「明日の紅魔館のパーティーに参加されるんですか？」

「ええ勿論よ、文は？」

「それが私は貰ってないんですよ……」

ガツクリ肩を落とした文

「そりやあんたバーンの歓迎会だからねえ、あんな記事書いたあんたは呼ばれないわよね」

「あやや……それでですね潜入取材をしようと思ってるんですけど協力してくれませんか霊夢さん？」

「イヤよ面倒くさい、あんたが焼き鳥になつて潜入するなら協力するけど？」

「あやや!?それは勘弁してください」

「まっ今回は諦めなさい、あんまり彼を怒らすとホントに焼き鳥になるわよ？」

「わかりました……今回は諦めます、楽しんで来てください霊夢さん」

そう言うとなやけながら文は飛んで行った

「姫様、明日は何を着ていけますか？」

「そうね……面倒だからいつもので良いわ、それにしても久しぶりに外に出るわね」

とある亭で彼女等は招待された明日のパーティーについて話している

「師匠も行くんですか？」

「行くわよ、気になる人がいるから……ね」

「もしかして大魔王バーンですか？」

「そうよ、前にちよつとね」

そこへ姫様が口を挟む

「てゐは留守番？」

「そうです姫様、今回は良いって言っていました」

「そう、じゃあ私はそろそろ寝るわ、おやすみなさい」

そう言うのと姫様は襖を開け自分の部屋に戻った

「じゃあ私も寝ます、師匠おやすみなさい」

「ええ、おやすみなさい」

一人残された部屋で彼女は考える

（貴方の見込んだ可能性……見せて貰いましょうか八雲紫……）

パーティー当日

「ではみんな乾杯しましょう、バーンの幻想郷来訪を歓迎して……乾杯！」

「カンパニー！」

バーンの歓迎会と言う名目のパーティーは始まった、歓迎会なのだが主賓のバーンが動かないのを予測していたレミリアは自ら先導してパーティーを進める

パーティーにはレミリアの顔見知りの妖怪や妖精、気に入った人間等も沢山いる、皆が立食を始め活気づいたその場で

「バーンさんお久しぶりです！」

真つ先に妖夢が挨拶しにくる、後ろには幽々子が覗いている

「久しいな、腕を上げたか？」

「いえ……まだまだです」

「そうか……鍛練に励むが良い」

「ハイ！」

（ふうん……紫も苦し紛れで連れてきたって訳じゃなさそうね）

二人の会話の間にバーンを観察した幽々子はバーンの力を感じていた

（問題はアレがどれだけの力を持つてるか分からない事ね、私の能力も効かなかったし……ホント何なのかしらねえアレ）

そう考えながら妖夢を置いて食事を始めた

「……化物ね」

「呟いたのはアリス、遠目にバーンを観察していたアリスはバーンの魔力を感じていた
「みんなそう言うぜ、どうだアリス？挑むか？」

悪戯顔の魔理沙の冗談、返答はわかっている

「イヤよ、今の私じゃ命を掛けても傷を付けられるかどうかかな相手よ？冗談じゃ無いわ」
「だよな、私も死ぬまでには バーン位になりたいぜ」

「笑うところ？」

「うっせー！」

悪態ついた魔理沙は飲み物を含みながら思う

（魔法使いなら憧れるだろ……あれ位になりたいって……）

アリスと共に人混みに消える

「バーン！紹介するわ！あたいの友達のルーミアよ！」

チルノがルーミアと大妖精を連れて挨拶に来る

「ルーミアなのだよよろしくなのだー」

「バーンだ……ルーミア、こちらに来い」

「？何なのだよ？」

バーンはルーミアのリボンに触れる

「ほお……強力な封印がなされているな、お前の力を大幅に抑えそして精神にも影響を与えている……強力な力だ、解いてやろう」

「別に良いのだー、このリボンはお気に入りなのだー」

「フツ……そうか……楽しむと良い」

「ありがとうなのだー」

嬉しそうに3人ではしゃぐ

「馴染んでるみたいじゃない、どうかしら幻想郷は？」

そこへ霊夢がやってくる

「余が居た世界と比べれば異な事よ、人と妖怪が共存する世界……余の世界の人間からすれば幻想の様に感じるだろう……幻想郷とは良く言ったものだ」

目を閉じ手にしたワインを一口飲みながらバーンは答える

「幻想郷は全てを受け入れる……」

「八雲紫の言葉か……」

「ええ、でもね……受け入れた後に拒否される者も居るの、あんたは大丈夫みたいだね、今は少しでも幻想郷の生活を楽しむと良いわ……」

そう言うパーティーの喧騒の中へ消えていった

（含みのある物言いよ……何かを知っているようだが……無理に聞く必要は無い、いず

れ分かるだろう)

パーティーは半ばまで進み、様々な催し物が出される、会場のボルテージが最高潮になろうかというその時、かの亭の姫がバーンの前に現れた

「ようやく見つけられたわ、あら中々男前じゃない」

「……何者だ?」

姫からただならぬ物を感じたバーンは警戒する

「蓬莱山輝夜、そう警戒しなくても良いわ見に来てただけよ、大魔王がどんな者か……ね、確かに力は高いみたいだけどまだまだまだ若いわね」

「……お前こそ妙な力を持っているが礼儀は知らぬようだな、それで姫とは……歳を取っても礼節は覚えられぬか」

「言うわね若僧が……」

舌戦に火花が散る

「ならば掛かってくるが良い、月人を地に伏せるのも催しには面白からう……」

「増長した若僧を捻るのは容易い……けどそれじゃ面白く無いわ、貴方は一応主賓だしね……貴方ボードゲーム、盤上遊戯をやった事はあるかしら?」

「チェスならばある」

「チェスね……困甚なら一番なんだけどしょうがないわね、若僧にはちようど良いハンデかしら……チェスで勝負といきましょう、構わないかしら？」

「良いだろう……咲夜、チェス盤を持つてくるのだ」

互いに邪悪な笑みを浮かべ、大魔王と姫、そのチェスは始まった

「何やつてるのよバーンは？……チェス？」

主賓であるバーンの様子を見に来たレミリア、バーンと輝夜の周りには数名の観戦客がその頭脳戦を見守っている

「相手は輝夜なんだぜ、私はチェス出来ないから良くわかんないんだけど戦況はどうなんだぜ？」

観戦している魔理沙がレミリアに聞く

「面白い組み合わせね……まだ始まって間もないわ、今はお互いに牽制しあっている状態よ」

チェス盤を見たレミリアが答える

「いえ……もう10分以上経ってるわレミイ」

パチュリーが訂正する

「……どれだけ先を読み合っているのよこいつらは……」

呆れながら咲夜が出した椅子に座り観戦を始めた

「……挑発には乗らんか……伊達に歳は取っておらんようだな」

「若僧の見え透いた挑発に乗るほど若くはないわ」

盤上のみならず舌戦も繰り広げられる

「だがこのままでは埒が開かぬのも確か……余から打つてよう」

勝負の一手を打つ

「……殴り合いがお好みのようなね」

打たれた一手を見て頬を上げる輝夜

「ギャラリーを盛り上げるのも主賓の務めよ、来い輝夜」

「……面白くなりそうね」

笑みを浮かべ合う二人に周りは息を飲んだ

「……互角ね、ミスも無くお互いに最善手を出してる……でも場は煮えきった、勝つのはより老獪な方ね」

レミリアが終局を感じたその時バーンが動いた

「……」

無造作に切った一手に輝夜の唇が上がる

(そりや悪手じゃろ……大魔王！)

返しの一手を放った輝夜にバーンは笑みを向けた

「ようやく誘いに乗ったか……」

「?……あつ!？」

盤面を見た輝夜の表情が歪む

「もう遅い……蹂躪させてもらう」

バーンが駒を進める

「くう……」

(手を吟味せずに勝ちに逸った私のミス……巻き返すにはバーンのミスが……)

苦い顔つきで僅かな希望に賭けた

「……チエツク」

「……これ以上は無駄な足掻きね……負けたわ」

長い戦いに遂に決着が着いた

「力量は互角、勝負を分けたのは一瞬の気の逸りだ、あれが無ければ余の負けだったかも

知れぬ」

「その僅かな逸りが貴方と私の差ね……埋めるには歳を取りすぎてゐるわ、もう向上心が無いのよ私」

溜め息を着いた輝夜はバーンに精神の成長を望めぬ事を吐露する

「精神の成長に終わりは無い、環境や他人との関わりで精神は如何様にも形を変える……この一戦で何かが変わることもあるだろう」

「そうね……楽しかったわ、次は囲碁で勝負しましょう」

「その時までには覚えておこう」

人混みに消えた輝夜の後ろ姿を見送りながらバーンはワインを飲んだ

「ちよつと貴方、もうパーティーは終わるわよ？何やつてるのよ」

「チェスに興じていただけよ、それに……それなりに盛況だったようだ」

レミリアとバーンの周りに居る観客は口々に今のチェス勝負について話し込んでいく

「まあ良いわ、貴方も楽しんでくれたみたいだし、じゃあそろそろ御開きにしましょうか」

パーティーの終わりを宣言し、チェス勝負を最後に歓迎会は幕を閉じた

「……」

部屋に戻ろうとするバーンに彼女は近付き話し掛けた

「……………体調は如何かしら？」

「……………八雲紫の協力者か」

「知りたいなら永遠亭に来なさい……………待ってるわ」

そう言うのと彼女は輝夜達と共に会場から消えて行つた

(毘……………ではなさそうだな、フン……………行つてみるとするか永遠亭とやらに)

意味深に告げられた言葉に興味を持ちながらバーンは部屋へ戻つて行つた

「あやや……………これは面白い記事に出来そうですねえ♪」

隠れていた鴉天狗がコソコソと紅魔館から脱出した

「おっ！帰つたか輝夜！……………どうしたんだよ浮かない顔で？」

永遠亭に帰つた輝夜達を迎える少女

「ちよつと落ち込んでるのよ……………負けたからね」

「はあ？負けたつて……………お前があ？誰にだよ！」

声を荒げて相手を尋ねる

「あの大魔王って呼ばれてるバーンよ……疲れてるからもう寝るわ、じゃあね」

「待てよ輝夜！お前が負けるってどういう事だよ！」

輝夜は返事をせずに部屋に入って行ってしまふ

「あの輝夜が負けたあ？んな事あり得ねえ！どうせ不意討ちかなんかだ！私が化けの皮剥いでやる！」

怒り心頭の少女にウサ耳の少女が詳細を告げようとしたが少女は永遠亭を飛び出して行ってしまふ

（彼が来る前に一悶着ありそうね）

彼女は少女の様子を見て直感した……

第8話 不死鳥

その日は雨だった、それもただの雨ではない雷を伴った豪雨が幻想郷に降り続いていた

「忌々しいわね……」

窓から外を覗くレミリアは呟く、彼女は吸血鬼ゆえに弱点が多い、雨……流水もその
1つだ

（パーティーの次の日に豪雨なんて……せつかくの気分が台無しよ……昨日じゃなかったのが幸いね）

カーテンを閉めたレミリアは倦怠感を纏わせ咲夜を呼ぶ

「こんな日に誰も来ないでしょう、美鈴を中に入れて」

「わかりましたお嬢様」

咲夜が部屋を出たのを見てベッドに横たわる

（暇ね……何か面白い事が起きないかしら……）

その数時間後、彼女の希望は半分現実になる

「ねえバーン、貴方八雲紫を探しているんでしょ？探さなくて良いの？」

フランの制御を見ているバーンにパチュリーが聞いた、今日はチルノも大妖精も魔理沙も居ない、今図書館には4人しか居ない

「居場所が分かっているならな、居場所の分からぬ者を宛もなく探す程余は急いではおらん、それに余を呼んだのが八雲紫ならその内現れるだろう」

「それもそうね、私としても貴方には居て欲しいし」

「あたしもあたしもー！」

手を挙げ跳ねるフラン

「フツ……」

思わず笑みが浮かぶ

「フラン、制御の完成はもうすぐだ、続けるぞ」

「はーいー！」

そしてまた修業が再開される、そこへ

「バーンさん！暇なので組手してもらえませんか？」

暇を持て余した美鈴が図書館へやってくる

「良かろう、余も少し退屈していた所だ」

「ありがとうございます！鍛練しないと体が鈍っちゃうんですよえ」

ストレッチを始める美鈴にバーンは告げた

「構えるのと構えないのではどちらがよい？」

本気か否かの選択を与える

「えっ!?あ、いやー……組手にならないので構えは無しでお願いします！」

あたふたと慌てる美鈴

「フツ……わかった」

意地の悪い選択を与えたバーンは微笑んだ

「ハッ！」

美鈴の鋭い拳がバーンの顔を狙う

「……」

拳はほんの少し体を傾けたバーンの顔を避け空を切る

「イヤァー！」

即座に反転した肘打ちが胴に向かう

「……」

肘打ちはバーンの手によって止められる

「ハアッ！」

美鈴の胴回し回転蹴り

「フン……」

蹴りを掴んだバーンはそのまま上へ弾く様に投げる

「くっ……」

回転しながら着地し直ぐ様構える

「……ふうー、ありがとうございます」

構えを解いた美鈴は礼を述べる

「動きは良くなった、鍛練に励め」

「ハイ！ありがとうございます！」

お辞儀をして改めて礼を述べる

「いやー良い運動になりました、所で気になったんですが私はバーンさんの世界ではどれ位の強さなんですか？」

「マアムと言う武道家が居る、技量で言えば同じ程だ、弾幕も加味すれば上の下と言った所か……」

「え？私で上の下ですか？」

予想外の高い評価に驚く美鈴

「余の世界でも強い力を持つものはそう多くない、お前程の力を持つ者は少ないのだ」
「私でそれならお嬢様なんかは最上位ですか？」

「そうでもない、幻想郷の力を持つ者は能力で大きく差がでる、一概には言えん、お前は他の者と違つて余の世界に近い力を持つている、それ故だ」

「はあ……そうなんですか」

そんなささやかな疑問について話している時にパチュリーが割つて入つた

「ねえ？上から凄い力を感じない？誰か来たんじゃないかしら？」

「確かに……激しく力を暴れさせている」

「ちよつと様子を見てきます」

「余も行こう」

「あたしも行く！」

謎の来訪者に興味を持ったバーンは美鈴らと共に図書館から出た

「バーン！出て来いコラア！」

少女は怒り喚き散らす、抑えようともしないその力をたぎらせ私怨と言える怨敵を呼ぶ

「五月蠅いわよ侵入者！……妹紅じゃない、いくら貴方でもこれは失礼よ？」

先に応対したのはレミリアと咲夜、雨のせいで気が立っている

「ここにバーンつてのが居るんだろ？連れてこい！」

レミリアの事など気にも止めず命令する妹紅にレミリアの怒気が更に高まる

「……消えなさい……ぶつとばされないうちにね……」

中指を立ててお帰りを促す

「いいから連れてこい！」

聞く耳を持たない妹紅、完全に怒りで我を忘れている

「そう……なら仕方ないわね……月も出てないけど、本気で殺すわよ？」

臨戦態勢に入ったレミリア、飛び出すその時

「何事だ？」

幸か不幸かバーンがやってくる

「お前かバーンつてのは！」

「そっだが……なんだお前は？」

「勝負だ！表に出ろ！」

バーンの問いに答えず外に出る事を促す、そこに……

「あたしが遊ぶ！」

フランが妹紅に駆け寄る

「引っ込んでろ！」

「フラン！」

レミリアが叫んだ時には遅かった、フランに妖術を込めた拳を打ち込みフランを気絶させる

「……外で待つ、逃げるなよ」

玄関を明け外へ出ていく

「あいつ……!!」

フランに駆け寄ったレミリアは怒りを露に齒噛みする、外は大雨、レミリアにはどうする事も出来ない

「レミリア……余に任せろ」

そう言うのとバーンも外へ出ていく

「フランは大丈夫ね、ここはバーンに任せましょうレミイ」

「バーンさん……怒ってましたね……」

「あんなに怒るバーン様初めてです……お嬢様どうされますか？」

「フランを寝かせたら私も見に行くわ、傘を用意して」
「わかりました、すぐ用意します」

「余がお前に何かをしたか？」

雨の降るなか対峙したバーンは疑問を聞く

「何にもしてねえさ……ただ……気に入らないんだよ！」

雨の冷たさなど感じないほどその怒りは高まっている

「奇遇だ……余もお前が気に入らなかつたのだ、報いは受けて貰う」

「やってみやがれ！」

大量の弾幕を放つと同時に距離を詰める

蓬萊「瑞江浦嶋子と五色の瑞亀」!!」

近距離から放たれた全方位を埋め尽くす弾幕

「ハアツ！」

バーンから放たれた五色の全方位弾幕が妹紅の弾幕を相殺し、なおも放たれる弾幕が

妹紅を襲う

「オラア！」

「!?…………ぬう！」

弾幕を食らいながら突撃してきた妹紅の強烈な拳を受けたバーンは大きく後退する
 (怯まず来るとはな…………)

「まだまだあ！」

後退したバーンに追撃の弾幕を放つ妹紅

「滅罪「正直者の死」!!」

放射線状に放たれた弾幕がバーンの逃げ場を狭める、そこに薙ぎ払う様にビームを放つ

「魔符「闘魔滅砕砲」」

バーンの放つ暗黒闘気が弾幕を歪めビームをはね除け妹紅の左半身に直撃する
 「つあつ!?!…………この野郎!!」

痛みに怯む事なく再び弾幕を放つ、既に怒りは痛みを越えていた

弾幕を張り、近接戦闘を交えながらバーンに攻撃を続ける、自身のダメージを省みない戦いにバーンは数度の攻撃を受けながら戦いは更に熾烈を増す

「蓬莱「凱風快晴—フジヤマヴォルケイノ—」!!」

バーンを爆発する大量の弾幕が襲う

「イオナズン！」

それを更なる爆発が飲み込み広がっていく

「ウラア!!」

爆発を突っ切って来た妹紅の拳バーンに届く寸前で払われる

「ぐっ!?!」

裏拳で弾き飛ばされるもすぐ立ち上がりまた向かって行く

「……負けるかあ！」

何度も向かってくる妹紅にバーンは少しずつ印象が変化していく

(折れぬ意思……強いな)

「うおおおお！」

雄叫びをあげ弾幕を放つ、大小混じらせた弾幕はバーンに弾かれ、相殺されるが構わず打ち続ける

「メラミ」

バーンの放った巨大な火球が弾幕を押し退け妹紅に直撃する

「ギギギギ……!?……ッラア!!」

火球は壊され空中に霧散する

(加減したとは言え余のメラミを破るとは……)

妹紅の強さを認め、更に戦いは続く

「はあ……はあ……クソオ!!」

そして激しい応酬の末、遂に妹紅に疲れが見え始める、体はボロボロ、特に左半身に酷いダメージを負っており常人なら、いや妖怪でさえとつくに倒れている傷を負っている

それでも体を動かすのは怒りに加えその強靱な意思、勝つと言う気概が妹紅をここまでする

「まだだ……まだまだあ!」

妹紅は飛んだ、雨の降りしきる上空に飛んだ妹紅は全ての力を集中させる

「パゼストバイフェニックス!!」

宣言と同時に妹紅の体を鳥を模した炎が纏う

「不死鳥……」

その姿を見たバーンは呟いた、妹紅の纏う炎は永遠を生きるとされる伝説の火の鳥を

連想させた、妹紅の纏う不死鳥は雨を蒸発させ水蒸気が周りを覆う

「これで終わらせてやる！」

不死鳥の羽を羽ばたかせ妹紅は最後のスペルの宣言をした

「不死「火の鳥―鳳翼天翔―」!!」

不死鳥と共にバーンに炎翼を羽ばたかせ翔る、その炎は生命を全て焼き付くさんとする勢いで燃え上がり、天を翔た

「その気概と美しき不死鳥に余も応えよう！」

手に魔力を集中させる、高まった火の魔力がバーンの制止を振り切り炎上する

「…………これが…………余のメラゾーマ、その想像を絶する威力と優雅なる姿から太古より魔界ではこう呼ぶ…………」

燃えるその手をかざし、その極炎を放つ

「カイザーフェニックス!!」

凄まじい豪炎と共にそれは姿を現す、フェニックス、強大な火の魔力が自然と鳥の形を成し全てを焼き払う魔炎となる

不死鳥とフェニックス、奇しくも二人の最も得意とする属性は火でありそして模した姿も同じだった

ズドオ!!

轟音をあげ2体のフェニックスはぶつかり合う、その熱は周りに広がり雨を瞬時に蒸発させるドームを作るほどの熱量

「グギギギ……!!ま……けるかあ!!」

力を込め押し込む、反動で全身から血が吹き出て炎によって蒸発する、それでも力は一切緩めない

「……ぬう!?!」

バーンも妹紅の予想以上の力に気を抜いていない、一瞬でも緩めれば押しきられてしまいうから

「うおお……お……」

「……くっ!?!」

一瞬、時が止まったかのように2体の不死鳥は動きを止めた

「ウオオオオ!!」

バーンのカイザーフェニックスを破り妹紅のフェニックスがバーンに向かい突進する

「……………か……………あ……………」

だがその不死鳥がバーンに届く事は無かった……炎はみるみる小さくなりバーンを目の前にして地面に落ちてしまう

「見事だ……………その力、その気概に尊敬を感じる程にな」

目の前に倒れる妹紅に賛辞を贈る、聞こえてはいないのは知っているが言わずにはいられなかった

「!!」

「……………か……………」

バーンが目を見開いて見たのは立ち上がる妹紅の姿、虚ろな目で足を引きずり血を滴らせながら近づいてくる

「……………ま……………け……………」

置くように打たれた拳をバーンは避けなかった、打った妹紅はその場に崩れ落ち、もう立ち上がる事はなかった、そして終結を待っていたかの様に雨は止み日が射して来た

……………

「やり過ぎよ……まあこいつならいくらやっても大丈夫だけど……」

遠くで観戦していたレミリア達がやってくる

「バーン、貴方初めて苦戦したんじゃない？」

「確かに……魔力が抑えられたとは言え真つ向から余のカイザーフェニックスを破つたのはこやつが初めてだ」

「鬼気迫るって感じでしたもんね……一体何が原因何でしょうかね？」

「こやつから聞けば良からう、回復させるが良いかレミリア？」

「ええ、これだけやられたら充分過ぎるわ」

レミリアの了承を得たバーンは妹紅にベホマを掛ける

「……効かないわね」

ベホマは妹紅の傷を癒す事なく癒しの光を弾いた

「……多分、蓬莱人だからじゃないかしら？」

「蓬莱の薬を飲んだ不老不死か……」

「なら永遠亭に連れて行ったら良いのよ、元々こいつは永遠亭の周りの竹林に住んでるんだから丁度良いわ」

「余もそこに用がある、ついでに済ませて来よう……場所は分かる、今日には帰らぬかも

知れん、留守と……フランは任せた」

そう言うのと妹紅を抱き抱え飛んでいった

「ハイハイ任せました……」

「嬉しそうですねレミイ」

「まあね……バーンがフランの為に怒ったのが……ね」

雨も止み、暇も解消された彼女は笑顔で紅魔館へ戻っていった

「はーい！どちら様ですかー？」

来客に鈴仙は永遠亭の戸を開ける

「八意永琳は居るか？」

「あつバーンさん……妹紅さん!?大丈夫ですか!!」

バーンを確認した鈴仙は直ぐにポロポロの妹紅に気づき声を荒げる

「八意永琳は居るか？」

「あつ！すいません、案内します此方へどうぞ」

鈴仙に早足で先導され医務室へ向かう

「師匠！妹紅さんが重体です！」

「やっぱりこうなつたわね……その傷じゃ治すより一回殺した方が早いわよう！」

残酷な事を言っている様だが妹紅は蓬萊の薬を飲んだ不老不死、死ねば肉体は滅ぶが魂ある限り新しい肉体を作り甦る、その姿はまさに不死鳥のそれと同じ

「そういう訳にはいかん、これは報い、噛み締めて貰わねばならん」

「へえ……貴方つてそうゆう人なのね、わかつたわ、勘違いだけど妹紅を止めなかつた責任もあるしね……そこへ寝かせて」

寝かせた妹紅を鈴仙と共に治療を始めた

「……」

居間に通されたバーンは出されたお茶に手をつけず、その和風の永遠亭の内装を眺めている

（どう表現するべきか……趣はあるが……）

和を感じていたバーンの部屋から見える竹林が風によって揺れるのをバーンは見逃さなかつた

（熱心な天狗よ……雨にも負けず……な）

笑みを浮かべたバーンは庭への戸を閉めた

「あやや……気付かれちゃいましたか……」

カメラを構えていた天狗は残念そうに呟いた

「応急処置は終わったわ、その内目を覚ますでしょう」

処置を終えた永琳が居間へ入ってくる

「そうか……さて……」

「そうね……まず貴方と私の関係、そこから行きましょうか」

座った永琳は一呼吸置いて話始めた

「私が貴方を知っているのは貴方の体をその状態にしたのが私だからよ」

「何？お前が鬼眼王を……だと？」

「ええ、方法は企業秘密よ、こう見えて私は貴方より長生きしてるのよ、貴方の知らない事を知っている……それだけよ」

(一体何者だ……ただの月人では無い)

「肉体に制限を掛けたのも私、それなりに強く掛けたんだけど貴方には緩すぎたようね、貴方の力の全容を把握出来なかったからしょうがないんだけどね」

「……では魔力は八雲紫か？」

「そうよ、貴方が眠っている間にね……勝手な事をして悪かったわ、肉体だけ解きましようか？」

「いや良い、当初は忌々しかったが今となっては心地好いのでな」

「そう……」

「明日また来る、その時には奴も目覚めているだろう……」

立ち去ろうとするバーンに

「貴方を連れてきた目的知りたくないの？」

永琳が尋ねる

「お前が話さぬ事は分かっている、それにいずれ分かる事なのだろう？」

「お見通しね……じゃあ幻想郷の暮らしを楽しんでね」

バーンが居間を出よう戸に手をかけたその時、その戸は触れる事無く開いた

「永琳いるのお？……おお!? バーン! どうした? 囲碁を習いに来たの?」

輝夜と鉢合わせる

「いや……今帰る所だ」

「まあまあそう言わず、なんなら泊まって行けば良い! さあ一緒に神の一手を極めるわ

よー」

(レミリア達には言っている……まあ良いか)

バーンは永遠亭に泊まる事にした

そしてその日の夜、輝夜の相手を終えたバーンは永遠亭の庭で立っていた

「……起きたか」

月に照らされバーンに寄る者を映し出す

「あ……いやー……そのよ……」

映されたのは妹紅、包帯だらけで歩行も満足に行えない体でやって来ていた

「輝夜達から聞いたよ……あいつが負けたのはチエスだって……私の勘違いで迷惑掛けちまった……悪かった……」

そして謝罪を述べる

「余に謝る必要は無い、謝るなら紅魔館の者に謝るのだな」

「わかってる！明日必ず謝りに行くさ！」

「……聞かせて貰おう、何故周りが見えぬ程の怒りを持つて余と戦ったのかを」

バーンの問いに口ごもった妹紅だがバーンの瞳の圧に観念して話始めた

「私と輝夜はさ、私の一方的な理由で殺し合いをしてるんだ、でもあいつは強くてさ……」

私が勝つ事もあるけどあいつが本気を出した時はいつも勝てなかった……」

うつむきながら喋る妹紅は続ける

「越えたかったんだよ……本気のあいつをさ……お前の歓迎会から帰ったあいつの落ち込み様で本気だったって分かった、だから信じられなかった……本気のあいつが負けるなんて事が……」

「まあ……勘違いだったんだけどな！」

そう言うのと苦笑する

「生き甲斐を奪われた様な気がしたんだ……だから頭に血が昇り過ぎてさ……本当に迷惑を掛けた……謝って済む事じゃ無いんだけどさ……」

「……」

何も返してこないバーンに妹紅は非難を覚悟していた

そして妹紅の理由を聞き終えてバーンはその口を開いた

「……名は何と言う？」

「えっ!?!私か？」

「そうだ、お前の名は何と言うのだ？」

非難では無かった、予期せぬ質問に妹紅は慌てる

「……妹紅だ……藤原妹紅……」

「藤原妹紅……か、妹紅よ今日はもう休め、明日余が紅魔館へ連れて行ってやろう、お前の処断はレミリア達に任せるつもりなのでな」

そう言うのとバーンは永遠亭に入って行った

「バーンか……強かったな……悔しいけど完敗だ……」

空を見上げ呟く妹紅

「勝ちたかったなあ……」

小さく漏らしたその呟きを聞いたのは月だけだった……

「本当にすまなかった！」

翌日、バーンに連れられて紅魔館に来た妹紅は集められた皆の前で深く謝罪した

「あたしは大丈夫だよ！」

殴られた事など全く気にしていないフランは笑う

「だから今度はあたしと遊んでね！」

「ああ……わかった！」

フランの許しの笑顔に微笑み返す

「私も許してあげるわ、お陰で良いものが見れたしね」

「ありがとうレミリア」

その会話を割って、来ていたチルノが声を荒げた

「あたいの友達をぶったんだから土下座よ土下座！せーいを見せて欲しいわせーいをして！」

「お前は関係無いだろ……」

「なんだとー！」

呆れる妹紅に怒るチルノ

「あら、良いこと言うわねチルノ！私も誠意を見せて欲しいわ、誠意を……ね？」

邪悪な笑みを浮かべたレミリア妹紅を見る

「えっ!? おい……マジで？」

「……冗談よ、まあフランのお願いを聞くぐらいはやってもらいましょうか」

「あ、ああ！それぐらいなら御安い御用だ！」

「ですって、フランどうする？」

「んー？あたしさつき約束したからチルノが決めて良いよ！」

「あたい？んーそうねーやっぱり土下……」

「土下座は無しで頼む……」

「じゃあんたあたいの子分ね！」

「えっ!?!」

「何?イヤなの?じゃあやつぱり土下……」

「よろしく頼むぜ親分！」

妹紅が仲間になった

「来ると思ってた……待ってたわバーン」

「レミリア……」

その日の夜、既に日課になっているバルコニーでの一時、今日は先客が居た様だ

「……」

「……」

お互いに何も話さず緩やかに時は過ぎる、虫の奏でる音色と月光が二人の時に彩りを与える

「……花は育ってるみたいね」

「…………ああ」

一言、そう呟きあつた二人はお互いに微笑み、バルコニーを後にした……

それは脆い花、些細な事で枯れるし摘まれてしまう、その花をどうするかは彼次第、そして彼の荒野にまた一輪……

第9話 未知との遭遇

「なあバーン、香霖堂に行ってみないか？」

言い出したのは魔理沙

「道具屋か」

「そうだけ、あそこには色んな物があるからお前も楽しめると思うぜ！」

「異界のアイテムも扱う道具屋だったな、フム……ならば行ってみるか」

「ダニイ!? あたいも行く! 大ちゃんも行こ!」

「良いよチルノちゃん!」

お出掛けに上機嫌な二人、ぴよんぴよんとバーンの周囲を跳ねている

「私は遠慮しとく……ツカレタヨ……」

そう言うのは妹紅、チルノに振り回され大分お疲れの様子

「早速伝説のアイテムを購入しに出掛ける! 後に続けもこたん!」

「へあつ!? ……わかったぜ親分……後もこたんは止めてくれ……」

「チルノさん! 闇雲に購入するのは危険です! もっと情報を集めてからでも……」

小悪魔が乗った

「臆病者は着いてこなくともよい！もこたん早くしろ！」

「だからもこたんは止めてくれ……」

「フフ……行つてらっしゃい」

パチュリーの見送りを受けて一行は紅魔館を後にした

「そういやバーンに挑んでくるやつ居なくなつたな」

香霖堂に向かう途中、魔理沙が話し出した

「流石に記事の度が過ぎた様だな」

バーンと妹紅の戦いを雨にも負けず観戦していた文はやはり次の日には新聞を発行し幻想郷にバラ撒いていた、しかし度重なる誇張とでつち上げに幻想郷の民の関心は薄れていきバーンは幻想郷で知名度のある人、程度の扱いになつていた

「だな、でもそれはそれで寂しいな、紅魔館の名物みたいになつてたもんなバーンは」

レミリアが怒りそうな事をさらりと言い放つ魔理沙

「フツ……これで良いのだ」

「そうなのかもな……おっ！見えた！あれだぜ！」

遠目に見える香霖堂を指差した

「邪魔するぜー!」

勢いよく香霖堂のドアを開けた魔理沙に主人の森近霖之助が無愛想に答えた

「また来たのかい……そろそろツケを払って欲しいんだが……」

「まあまあ、その内利子付けて返してやるぜー!」

「その言葉程信用出来ない物は無いね……ああ、今日はお友達も一緒なのか……」

魔理沙の後から入ってくるバーン達に視線を送る

「いらつしやい、ここは道具屋だよ、おや……噂の大魔王バーンじゃないか、会えて光栄だよ」

「……書物で知ってはいたが本物の男の様だな」

バーンがそう思うのも無理は無い、今まで出会った妖怪や人間は全て女性だったからだ、幻想郷に男性がない訳では無いのだが不思議とバーンは女性としか会わなかった「ハハハ、まあそうだろうね、幻想郷は妖怪にしる人間にしる女性の方が活発だからね」
「確かにな」

そう言つて笑うと店内の商品を見始めた

「なにこれ? 変な杖ね?」

チルノが手にした杖を見て眩く

「それはマグマの杖だよ、念じる事で強力な炎が出せる、危険だから反応しないようにしてるけどね、ちなみに非売品だよ」

「ふーん……」

手にしたマグマの杖を戻しチルノは他の品を物色する

「霖之助さん、これはなんですか？綺麗です……」

大妖精がショーケースに入った黄金の武器を指差す

「それは黄金のツメだね、ただの武器なんだが呪われているんだ、それを装備すると2歩歩く度に妖怪に襲われるんだ、あの時は参ったよ」

「こ、恐いですね……」

大妖精は怯えながらショーケースを離れた

「この剣は？えらく厳つい剣だけだよ……」

妹紅が壁に飾られた剣を指して尋ねた

「アラストルと言う魔剣だ、それは切る剣では無く殺す剣、落ちてたのを拾ったんだがどうやらそいつには意思があるみたいだね、主人の元に帰りたいがってる」

「付喪神みたいなものか？」

「いや、また別の存在の様だ、そこまではわからないけどね」

「へー……」

妹紅は飾られた剣を興味深げに見つめている

「……………!?……………これは……………」

バーンがショーケースに飾られる物に眼を止め凝視している

(非常に強力な光の力を感じる……………神々のアイテムか?忌々しい……………)

その掌大の大きさの物から感じる聖なる力にバーンは破壊衝動を感じていた

(何故これに因果を感じるのだ……………何だ!これは!)

「何か気に障ったかい?それはロトの紋章、用途はオメガルーラを発動させる物らしい」

「オメガ……………ルーラだと?」

思わず聞き返す、もし聞き間違いでなければ自分の使う魔法と同種だからだ

「そう、オメガルーラだ、僕にはそれがどんなものかわからないけどね……………知っているのかい?」

「いや……………余にもわからぬが、ルーラに関するならばシルーラに近いかもしれん、相手を強制的に飛ばす呪文だ」

「それだけとは思えんがな……………」

(なるほどね……………ありがとう、気になってた事が1つ解決したよ)」

「なるほどね……………ありがとう、気になってた事が1つ解決したよ」

霖之助が礼を述べた時に店の奥から魔理沙が嬉しそうにやって来た

「なあ！この珍しい妖精どこに居たんだ？」

その手には拳程の大きさの妖精を捕まえていた

「Hey! Listen!」

捕まえられた妖精は必死に呼び掛けている

「離してやってくれ、彼女の名はナビィ、異世界の妖精だよ、幻想郷に迷い混んだ彼女を保護して一緒に暮らしてるんだよ」

「外来人ならぬ外来妖精って訳か、悪かったな、ホイ」

「もう！やつと離してくれたわ！話も聞いてくれないのよ彼女！」

解放されたナビィは霖之助に愚痴る

「許してやってくれ、確かに魔理沙はがさつだけど優しい子なんだ」

「がさつは余計だぜ！」

その後も多様な商品を見ながら時は過ぎる

「中々楽しめた……帰るぞ」

「結局何も買ってくれなかったね、まあいいんだけどね」

「じゃあまたくるぜ！」

帰ろうとしたその時、霖之助が思い出した様にバーンに話し掛けた

「そうだバーン、君なら知っているかも知れないな、少し待っていてくれ」

そう言うのと店の奥に入った霖之助は物体を抱えて現れた

「これの名はナイトメア、用途は物騒だが地上の侵攻だ」

霖之助の半分もあるうかという大きさのそれは異様な雰囲気を漂わせている、球体だったのだろうが破損して欠けている

「侵攻……」

「ホントに物騒だな……」

大妖精と妹紅が不安気にナイトメアを見る

「壊れている様だが……それがどうした？」

「君に聞きたいのはこれの起動方法だよ」

「……幻想郷でも侵略するつもりか？」

「そうじゃない、危険な代物だろうから誰かが起動しないように方法を知っておきたいんだ、もし簡単に起動出来るなら隔離しとこうと思っただけ」

「なるほど……」

納得したバーンはナイトメアに手を添える

「……これはコア、魔力によって動く様だな……今は魔力が空ゆえ動かないのだ、魔力を

与えなければ安全だろう」

ナイトメアから読み取った情報を霖之助に伝える

「簡単だった様だね……わかったありがとう、これは厳重に保管しておくよ」

苦い顔をしながら霖之助はナイトメアを睨んだ

「おい帰んないのかー？チルノが待ちくたびれてるぜー？」

先に外で待っていた魔理沙が呼びに来た

「おっ？なんだそれ？見たところ魔道具みたいだけど？」

ナイトメアを見つけた魔理沙、興味で目でナイトメアを見ている

「いやそうじゃない、ただのガラクタだよ」

そう言っつてナイトメアを背で隠した

「待たせたな……帰るぞ」

「あ、ああ……」

バーンに促されて外へ歩く

(いや……あれはガラクタじゃないぜ……多分あれは……)

魔理沙の魔法使いの観察眼が霖之助の嘘を見抜いていた

「なあバーン、人里に寄って行かないか？」

空を飛んでいた妹紅が聞いた

「……何故だ？」

「折角みんなで外出したんだからさ食事なんてどうかなって」

「おっ！妹紅の奢りか！」

「良い心掛けね！さすがあたいの子分！」

「ごちそうになります」

「なんでそうなる……良いけどさ……ってな訳でどうだ？」

少し間を置いてバーンは答えた

「……よかろう」

バーン達は人里へと向かっていった

人里に着いたバーン達は食事処に向け歩いている

「あれが大魔王か………怖い顔してるぜ……」

「チルノと魔理沙が配下らしいけど増えてるわね……」

「おいおい、ヤバイんじゃないか？」

ヒソヒソと話される会話がバーンの耳に入る

(わかつてはいたが……慣れるものではないな……)

色々と大きな事をやらかしたバーンが人里に来ればこうなるのは当たり前だ、大魔王時代は畏怖こそされていたがこういった興味の対象にされるのはバーンには無かった事、それがわかつていたから返事に少し間を置いたのだ

「人気者だからなバーンはしょうがないさ」

「そうそう！ 気にすんなバーン！」

バーンの様子を察した妹紅と魔理沙がフオローする

「気になどしていいない、店は何処にあるのだ？」

「ああ、ここだ！ 中々旨いから期待してくれ」

着いた店に一行は入っていった

「美味しいねチルノちゃん！」

「そうね！ あたいの子分にしちゃ出来ね！」

「だろ？ 親分の口に合って良かったぜ」

食事を始めた一行は談笑を交えながら食を進める

「バーン食べないのか？」

手付かずのバーンの皿を見た魔理沙が聞いた

「余は本来物を食さずとも生きていけるのだ、それにこの箸と言う物を使う気にならぬのでな」

「そういやパーティーの時もワインしか飲んでなかったもんな、ふうん……大魔王ってそんなもんなのか、まあでも食べれるんだろ？ 旨いから食べてみろって！ 箸も良い経験だぜー！」

「確かにそうだな……どれ……」

そう言うのと箸を持ったバーンは数秒構えると流暢に箸を扱い品を食した

「……お前箸が初めてって嘘だろ？」

「初めてだが……お前達の使い方を見れば造作も無い事だ」

「……可愛い気が無い奴だよなお前って……」

そんなやり取りをしながら食事は進む

「!!」

バーンがピクリと反応し側の窓を見た

「……何用だ？」

誰も居ない場所に向かい話すバーンに全員首を傾げる

「おやおや……気付かれたか、久しぶりに降りて来たら面白そうな奴がいるねえ……私に気付くとはやるじゃないかあんだ」

「その酔っぱらった声……萃香か！」

声に反応した魔理沙が名を呼んだ、良く見ると何も無い場所に見えたそこには薄い霧が漂っていた

「久しぶりだね魔理沙、天界は暇だったから散歩に来たんだよ」

「天界に住み着いて帰って来ないと思ってたぜ」

「流石に飽きたのさ、それよりさこの……妖怪？じゃないわね……こいつは？」

萃香と呼ばれる霧がバーンの事を尋ねた時に妹紅が喋った

「あー……悪いんだが今食事中だから後にしてくれと嬉しいんだが……回りの目も痛いからさ……」

妹紅が顎で指した先には他の客が何やってんだあいつら？といった顔で凝視していた、萃香に気付いていない客からすれば当然である

「おおーこれはすまないねえ、じゃあ命蓮寺に居るから食べ終わったらおいで」

そう言うのと萃香は霧散して行った

「……だつてよ？行くのかバーン？」

「余の方に用は無、捨て置いても問題あるまい」

妹紅の問いにバーンが答えた

「そう言わず会ってやってくれないか？ 酔っぱらいのあんな奴だけど悪い奴じゃないんだぜ」

魔理沙は申し訳なさそうに頼んだ

「……良いだろう」

「ありがとうだぜバーン！」

会うことを承諾したバーン達は食事を再開した

「おう来たかい！ 待ってたよ！」

命蓮寺の庭で座って待っていた萃香が酔い顔で手を振る、待ってる間に更に飲んだのか溢した酒が萃香の服を濡らしている

「さあ聞かせて貰おうか、あんたは誰だい？」

「先にお前の名を聞かせて貰おうか」

「おっと、これは失礼したね、私は伊吹萃香、鬼だよ」

「余はバーンだ、萃香よ、幻想郷で高い力を持つ鬼が余に何用だ？」

「あんた強いだろ？見ただけでわかったさ、だから興味を持ったんだ」

酒を飲みながら愉快地話す萃香

「そりゃあ大魔王だからなバーンは」

「大魔王？へえ……って事はあんた魔族な訳か！納得したよ」

魔理沙の発言に納得のいっただ萃香は嬉しそうに酒を飲む

「ねえあんた、私と勝負しない？あんたが勝つたら……そうね……酒を奢ろうー」

いきなりの勝負の提案、勝負事が好きな鬼の性質がバーンを前に沸騰したのだ、だが賞品が酒というのは萃香にとって痛くも痒くも無い物、何故なら彼女の持つ伊吹瓢は酒を無限に出せるからだ、少々セコいながらも良いので賞品を付けてバーンと勝負をしたかったのだ

「……帰るぞ」

しかしバーンは受けなかった、酒を飲みながら勝負を挑んでくる萃香に酔っぱらいの戯言の様に感じ身を翻した

「ふむ……ならこれならどうだい？」

フラレた萃香は立ち上がり強烈な殺気をバーンに向ける

(ほお……)

殺気を感じたバーンはその殺気の高さに感心し萃香に向き直す

「!!」

「そらあー!」

向き直したバーンに飛び込んだ萃香の拳がバーンを打つ、咄嗟に反応したバーンは掌で受けるがその威力はバーンの体を浮かし斜めに飛ばした

「おいおい何やってんだよ!」

「そうよそうよ!」

突然の奇襲に抗議する妹紅とチルノ

「名刺みたいなもんさ、私の力はわかったかい?大魔王?」

殴り飛ばしたバーンを見て愉快に笑う

「これが幻想郷で最強の妖怪と言われる鬼の力か……」

着地したバーンは手の痺れを感じながら萃香を睨む

「強い……だがやはりお前とは戦う気にならん」

「……どうして?」

奇襲を受けてそれでもなお勝負を拒否するバーンに萃香は少し苛立ちを含みバーンに問う

「確かに強い力を持っているが酔ったお前は全力を出せんだろう……全力で無いお前は

戦うに値しない、どうしても戦いたいなら酒を止めるのだな」

出された理由は酒、勝負の条件は禁酒だった

「……それは無理かな……はあ……嫌って言うんならしょうがない、諦めるわ」

力を抜いてポンつとその場に座り込んだ萃香はまた酒を飲み始める

「数日止めるだけだろう？ 出来ないのか？」

妹紅が萃香に聞く

「もう習慣と言うか癖と言うか……1時間も我慢出来ないねえ……数日なんて狂っちゃ
うわ」

「アル中ってレベルじゃねーぞ……流石酒好きの鬼……」

その異常な飲酒レベルに妹紅は呆れ果ててしまう

「私が鬼の中でも異常な酒好きってのもあるんだけどね、あー……つまんないから霊夢
の所に行こうかな」

眩いた萃香は霧になり辺りを漂う

「じゃあ私は行くわ、またねバーン、酔ってる私との勝負できたら考えといてね」

そう言うのと萃香は霧散して行った

「行っちゃった……大丈夫バーン？ 痛くない？」

「大丈夫だ……帰るぞ」

飛び立とうとしたその時、突然声が掛かる

「あら魔理沙、来ていたんですか、どうしたんですかそんな所で？」

「白蓮！久しぶりだぜ！まあちよつとあつてな」

現れたのは聖白蓮、命蓮寺の住職

事の次第を説明した魔理沙と白蓮は世間話に花を咲かす

「ああ！そうだ！紹介しとくぜ、こいつはバーン、聞いた事あるだろ？あの大魔王だよ」
「ええ、知っています、彼が……私は聖白蓮と申します、貴方ではありませんが魔法使いです」

「白蓮はスゴいんだぜ？大魔法使いなんだぜ！」

「大魔導士に近い物か……だがお前はその魔力を強化に使っている様だな」

「ええ、貴方に比べればまだまだ未熟者ですが……それより……」

言葉を止めた白蓮はバーンを見つめる

「……なんだ？」

「いえ……何でもありません、私はこれから用事があるので失礼します、それでは皆さん
また……」

そう言つて命蓮寺を出ていった

（あやつも八雲紫の関係者か……）

見送りながらバーンは直感した

(余を利用する程の事……この幻想郷に何かがある?)

疑問を胸にしまいながらバーン達は紅魔館へ帰って行った

命蓮寺の石段を白蓮は神妙な顔つきで降りていた

(やはり魔族ですね……それも規格外の怪物……その気になれば幻想郷など簡単に滅ぼせる程の力……今ああして仲良くいるのが奇跡と感ずる程に……)

(いや……それよりも今はアレの方をどうにかしなければ……魔界に封印を移したのは良いのですが力が漏れて魔界が少しづつ幻想郷に拡がり始めた……今はまだ数センチ程ですがこのまま拡がればそう遠くない内にアレは封印を破るでしょう……)

「……急いで下さい、八雲紫……」

不安を抑え込み、願うしか無かった

第10話 八雲 紫

ここも違う……

この世界も違う……

ここにも居ない……

もう何百年……どれ程の世界を廻ったのか……

もう存在しないのかも知れない……それでも……

それでも私は探し続ける……

何故なら……幻想郷を愛しているから……

「何故……何故見つからないの!」

八雲紫は怒りに身を震わせていた

「紫様……心中察しますが諦めてはいけません……」

傍の八雲藍が労りの声を掛ける

「貴方に私の何がわかるの!ただの式神が主である私の心が理解出来るなんて調子に乗らないで!」

「も、申し訳ありません……」

声を荒げ藍に怒鳴る、刻限が迫っている紫にいつもの余裕は感じられない

「……封印は後どれくらい持ちそう？」

「断言は出来ませんが今のアレの力の増加を考えると良くて2年……悪くて1年以内かと……」

「1年……くう……」

刻限の詳細を聞いた紫は歯痒く爪を噛む

「……彼……バーンって言ったわね、彼は？」

「八意永琳と接触しましたが彼女は話していません、自分の体の事だけを知ったようです」

「そう……でも気付くのは時間の問題ね、彼が幻想郷を回ればいずれ気付く……もし間に合わなかった時に彼が素直に協力してくれば良いのだけど……」

「そうですね……今は幻想郷の人々と上手くやっているようなので協力を取り付けれる公算は高いと思います」

(でもそれは希望……アレをどうにかするにはやはり私が見付けなければ……)

ふう、と息を吐いた紫は数秒の沈黙の後藍に口を開いた

「さつきは怒鳴って悪かったわ、見つからないのに苛々して貴方に当たってしまったて

……」

「いえ、お気になさらず……私は紫様の式ですので」

「ありがと……私は探しに行くわ、引き続き監視をお願い、何かあったら伝えて」

「わかりました紫様、お気をつけて……」

スキマを開いた紫は立ち尽くす

(おそらくこれが最後の搜索……必ず見付けなければ……存在すると信じて……)

決意と希望を胸にスキマへと入りその口を閉じた……

「チルノ、フラン、お前達はもう少し考えて戦う事を覚えよ」

「そんな事言われても……」

「もー！考えてるよー！」

戦闘訓練を行う3人、2対1だがバーンは難なく二人をあしらう、狂気の制御を完成させたフランは戦闘を許可されチルノと共に訓練に励む

「次は私達に代わってくれ、ここらでバーン無双はいい加減にしろって所を見せてやりたい」

「やああつてやるぜ！」

妹紅と魔理沙がバーンとの訓練を希望する

「良からう、掛かってくるがいい！」

チルノとフラン相手に相当やり合ったにも関わらずバーンは息すら切らしていない、ライフポイントで言えば5000以上は確実だろうか……

「元気ねあいつら……」

「そうですねレミリアさん、チルノちゃんも楽しそうです」

「バーンも楽しそうよね、最初の頃が嘘の様……」

その光景を眺めながらレミリア、大妖精、パチュリーの3人は談笑する

「無理だと思ってたフランの制御も成し遂げちゃったしね、彼本当に大魔王なのね……出来ない事あるのかしら？」

「力を抑えられてあれだものね、多分全力のバーンは鬼すら凌駕するんじゃないかしら？」

「はあく……バーンさんが敵じゃなくてホント良かったです」

いつもと変わらぬ紅魔館の日々、バーンが幻想郷に来てから半年が経っていた……

(……)まで音沙汰が何も無いのは気になるな……)

妹紅と魔理沙を叩きのめし、休憩していたバーンはこの半年で八雲紫どころか何も起きない幻想郷に疑問を感じていた

(そろそろ動いてみるか……)

スツと立ち上がったバーンは休憩しているメンバーに告げた

「少し幻想郷を回ってくる、供は要らん、余だけで行く」

「えー！ズルいよバーン！あたしだって昼間出掛けたいの我慢してるのに！」

「あたいがついていっっちゃいけないって何よー！」

フランとチルノの抗議を受けるがバーンは聞かぬ振りをしてレミリアとパチュリーに視線を向ける

「わかったけど……大事な事なの？」

「いや、それを確かめに行つてくるつもりだ」

「ふうん……わかつたわ、行つてらっしゃい」

レミリアの承諾とパチュリーの行つてらっしゃいと言う手の振りを見たバーンは妹紅と魔理沙を見る

「おー……行つてらっしゃい……」

「気をつけて行くんだぜ……つてバーンにはデカイお世話か……」
寝るように倒れている二人はそのまま手だけを振つて見送つた

(さて……まずは未踏の地へ行くとするか)

紅魔館を飛び立ったバーンはゆっくりと飛びながら探索場所の思案をする

(八雲紫の関係者はいずれも強い力を持ち知識を持つ者か幻想郷の名所の長ばかりだつた……それを考えれば……)

図書館で読んだ幻想郷の書物を思い出す

(白玉楼か守矢神社……地霊灘と言つた所か)

候補を出したバーンは少し考へて行き先を決めた

(白玉楼へ向かうか)

行き先を決めたバーンはスピードを上げ白玉楼へと向かった

冥界にある長い階段を登った先に白玉楼は佇む、そこは死者の住処、魂となった幽霊が暮らす場所

(白玉楼……長の名は西行寺幽々子だったな)

階段を登り白玉楼へ続く門の前に辿り着いたバーンに突然謎の影が攻撃を仕掛ける

「……久しいな妖夢」

仕掛けられた刀を受け止めたバーンは襲撃者の名を呼ぶ

「……あつーバーンさん!? すす、すいません! 強い力を感じたので敵かと思ひまして……」

襲撃者は妖夢、バーンの隠そうともしないその力を賊と勘違いして奇襲した妖夢は直ぐ様刀を退き深々と謝罪した

「よい、それほどの警戒心を持っているのは良い事よ……西行寺幽々子はいろのか?」

「幽々子様ですか? はい、中にいますよ!」

「少し話をしたい、取り次ぎを頼む」

「わかりました、御一緒します、どうぞ！」

妖夢に先導され門を通ったバーンは白玉楼へと入って行った

「幽々子様、お客様です」

「あらあ？貴方……大魔王のバーンじゃない！どうしたの？」

部屋でお菓子を食べていた幽々子は大魔王の来訪に少し驚きながら用件を聞いた
「まず確認したい、お前は八雲紫の関係者か？」

「……妖夢、出てなさい」

「？……はい、わかりました」

バーンの言葉に表情を変えた幽々子の退室命令に妖夢はすぐに出ていった
「ごめんなさいね、まだ関係者以外知られては不味いのよ」

「……やはり八雲紫の関係者か」

緊迫した空気を漂わせて二人の会話は始まった

「……と言っても貴方にも話せないんだけどね、紫との約束なの」

「それは構わん、余が知りたいのは時間、後どれ程の時間が残されている？」

「……本当は話したらいけないんだけど……別に良いかしらそれぐらいなら、今から遅くて2年早くて1年らしいわよ」

「……まだそれだけの猶予があるのか」

「そうでもないの、これはずっと昔……遙か昔からある幻想郷の秘部、それを考えれば1年なんて一瞬で過ぎるわ」

「……八雲紫はその為に余を幻想郷に？」

「そこまでは知らないわ、私は口止めされてるだけだから……ただ紫は今も頑張ってる、彼女は幻想郷を愛しているからね、それだけはわかっておいて？」

「……良いだろう、知りたい事は得た、帰らせて貰う」

「またいらしてね、妖夢も貴方との再戦を糧に頑張っているから」

「その時を乗り越えればな……」

そして白玉楼の会談は終わりを告げた

同時刻・紅魔館

「あー！強すぎるぜバーンは！勝てる気がしねえ……」

「私達も強くなつたのに向に差が詰まらないぜ……しかもあれで全力じゃ無いって……ええい！外の大魔王は化物か！」

愚痴りながらお菓子を食べる留守番組、強すぎるバーンの力に愚痴は止まらない、こ

れまでの戦績は全敗、2対1になってからバーンに有効打を与えられる様にはなったがそれでも勝つには至っていないかった

「私の魔法も効かなかったしね、ロイヤルフレアが簡単に相殺されたのは啞然としたわ……」

「たまにパチュリーも魔法で勝負を挑むが違い過ぎるレベルに簡単にあしらわれている」

「あいつって負けた事あるのか？」

「いや、知らないけど少なくとも幻想郷に来てからは負けて無いぜ、萃香はあの時やりあつてたらしかししたら……って感じだったけど」

「そういえば私もバーンの過去を知らないわね、彼、昔の事語らないし」

「バーンの過去について話し合う3人、そこに黙って聞いていたレミリアが口を挟んだ
「負けたんだと思うわ……多分ね」

「レミィ……それは勘？」

「そう……勘ね、彼の時々見せる瞳がそう感じさせるのよ」

紅茶を飲みながら見解を話す、バーンの事を力ではなく内面を一番理解しているのはレミリアだ、だがそのレミリアでもバーンの内面のほんの上部だけで理解しきれている訳ではない

「ふーん……もしそうならさ？バーンは幻想郷に来る前は力が抑えられてなかった訳だろ？それを倒せるなんて化物を越えた化物って事になるよなあ……」

「確かにそうなるよな……何者だよ！ってなるぜ……」

「想像もつかないわね……バーンの全力を越える者……」

バーンを倒した者の想像をしている3人にまたレミリアが口を挟む

「あら簡単じゃない？大魔王を倒せる者……それは勇者しかいないんじゃないかしら？」

「それは漫画とか小説の話だろ？バーン程の大魔王を倒せる勇者なんか都合良くいるかよ」

「私もそう思うぜ、きつと暗黒神だとか破壊神みたいな奴に負けたんだと思うぜ、多分ラプソーンとかシドーみたいな名前のさ」

「何よそれ……」

呆れるレミリア、だがレミリアの回答は正解だった、バーンは勇者であり竜の騎士でもあるダイに倒されたのだ、もっともそれをレミリアが知つての発言ではないのだが……

「考えても仕方ないか……よし！私達もせめて今のバーンくらいは倒せるように頑張るか！」

「そうだな……わかったぜ！」

意気込んでまた修行を開始する二人

「パチエはしないの？」

「私は魔法で彼を越えるつもりだから……」

「そう……頑張つてね」

そう言つてまた紅茶を飲んだ

（八雲紫が呼んだのだとしたら彼に何をさせたいのかしら……）

飲み終えたティーカップを眺めながらレミリアは思う

（こんな日々がずっと続けば良いのだけど……）

白玉楼を出たバーンは幻想郷の空を飛んでいた

（早くて1年……か、幻想郷に干渉する気は無い、その時を乗り越えれないのなら幻想郷は最悪滅ぶのだろうか）

（……その時は余は……受け入れるのみ……か？）

1人考えながら飛ぶバーン、考え事をしながら飛んでいた故か軌道は何処へ向かう訳

でもなく人気を離れ飛び進む

それが偶然か必然か無縁塚と呼ばれる場所である人物を見つける

(あれは……博麗の巫女)

無縁塚の奥地で霊夢を発見する、何かの前に降り立った彼女を追いバーンも降り立つ
「あら？バーンじゃない、どうしたのこんな所で？」

「お前を見つけたものでな……これは何だ？強力な結界を張って隠している様だが？」

バーンが指したのは霊夢の前にある結界、不可視になっており中の様子はわからない、バーンが結界に触れるとバチツつと音をさせ侵入を拒んだ

(強力な結界……並の妖怪などに使うレベルでは無い……)

「無理よ、いくらあんたでも簡単に通れる代物じゃないわ」

「そのようだな、して……この中には何がある？」

「……」

霊夢は答えない

(話さぬか……と言うことはこれが八雲紫の目的か?)

黙りを決め込む霊夢に八雲紫との繋がりを感じたバーンは結界を眺める

(バーンなら……知っておいても良いかも知れない、いえ、知る権利があるわ……紫、悪
いけど教えるわね……)

結界を眺めるバーンに約束を破り話す事を決めた霊夢はバーンを呼んだ

「……………話しても良いけどこの事は……………」

「他言無用……………なのだろうか？わかつている」

バーンに出鼻を挫かれた霊夢は面白くなさそうに結界へ近付く

「中へ入れてあげる、でもあんたに一時的に力を抑える封印をさせてもらうわ、妙な事をされたら困るのよ、構わないかしら？」

「良いだろう」

バーンに封印を掛けた後、結界に一人分の穴を開けて入っていく

「ここはね……………化物が封印されてるの、あんた以上の……………ね」

結界を閉じた霊夢は歩きながら話す

「余以上の……………化物だと？」

「そう、私なんか生まれるもつと前、幻想郷の黎明期に次元の壁を越えて現れたらしいわ」

結界の中を地下へ進む霊夢は続ける

「死にかけだったらしいんだけどそれは妖怪達を吸収して力を回復しようとしていたの、そして妖怪を大量に吸収した時に紫が立ち向かった……………」

「でも……………倒せなかった、紫の能力で他の世界へ送ろうともしたんだけどダメだったら

しいわ、そこで苦肉の策で封印する事にしたらしいわ」

「その後も封印を維持して来たんだけど日に日に力を増すそれに紫は危機感を覚えて歴代の博麗の巫女や封印術に長けた妖怪に協力を求めて封印を強化していったの」

「その間にも色々試したらしいんだけどどれもダメだったみたい……月の姉妹に協力を頼んだ事もあったけど断られたらしいわ……そこで紫はアレを死の淵まで追い込んだ者が居ると考えて探し続けているの……宛の無い探し人を何百年も……そして今も……」

ふう……と溜め息をついた霊夢はバーンに振り返る

「あんたはその紫の旅の中で唯一連れてこられた人なのよ、あんたに紫は可能性を感じたのかもしれないわね」

「……」

バーンは何も言わずただ霊夢に着いていくのみ、その表情にも変化は無い

「着いたわ、……よ」

地下の先には広い空間が拡がっていた、その中央には幾重にも重ねられた封印の中に球体が見える

「最近……魔界に封印を移したの、白蓮の協力だね、でも力が封印から漏れて周囲に影響を与え始めてるの……」

その球体から発せられる瘴気が幻想郷の魔界をおぞましい異様な空間に変えている
「これが……」

球体に近付いたバーンは球体の中身を感じてみる

(……!!凄まじい魔力!全力の余と同等……いやそれ以上の……)

球体から感じた自身に匹敵する程の魔力にバーンは驚愕する

(これ程の者が幻想郷に隠されていたのか……確かに隠さざるをえんなこれでは……コレからは己の種族以外全てを殺そうとする殺意を感じる)

「わかった?これが紫の、幻想郷の敵よ、受け入れた後に拒絶された者……さっ!封印を張り直すから退いて」

バーンを退けた霊夢が封印を張り直し始めるのを見ながらバーンは考えていた

(もし……コレと戦う事になれば余は勝てるか?……いや、どうでもよい事か……)
幻想郷への不干渉を決めていたバーンは考えるのを止め霊夢の封印を待った……

「まっ、そう言う事よ、わかったかしら?」

結界の外に出た霊夢はバーンの封印を解除しながら話す

「八雲紫の真意は理解した、だがその時が来ても余に変わりはない、賢いだけの妖怪に

踊らされるつもりは無い」

「そうよね……あんたは紫の身勝手に連れてこられたんですもんね、無理も無いわ……別に良いわ、その時が来れば私も命を掛けて戦うだけだから」

「それで良い、己の居場所は己で守れ」

「……わかつてるわよ!」

二人の会話を遮りそこに風切り音を聞かせ来訪者が現れる

「霊夢さーん! あやや!?! パーンさんも一緒にしたか!」

「文……何回来てもコレは教えないわよ?」

結界を指さして文に告げる

「そう言わずにそろそろ教えて下さい霊夢さん! 何があるんですか? お宝ですか? 伝説の剣みたいなの?」

「うるさいわねえ……教えない物は教えないの! 帰った帰った!」

しっしっしと手を払い帰りを促す霊夢に文は笑みを浮かべる

「では明日の記事は博麗の巫女、無縁塚で大魔王と白昼デート!? にしますかねえ!」

「はあ!?! 何言ってるのよ! デートな訳ないじゃない!」

慌てる霊夢、彼女もやはり年頃の女の子なのだろう顔こそ赤く無いが声を荒げて否定する

「バーンさんのネタも匂が過ぎましたからねえ……ここらで新しい風を入れて文文。新聞の増刊を図りましょうか！」

「……どうやら焼き鳥になりたい様ね……ちようどお腹が空いてたのよ、ラッキーね、バーンあんたも手伝いなさい」

鬼と化した霊夢が文に詰め寄る

「おお、こわいこわい！ではまたです霊夢さんバーンさん！」

鬼巫女が文を掴む寸前に飛び去る文

「あの鳥野郎！バーン！捕まえて！」

怒り浸透の霊夢はバーンに文の捕獲を命じる

「……お前が行けば良かろう」

「何眠たい事言ってるのよ！あんな記事書かれたら赤っ恥よ！あんただってそうでしょう！」

「……確かに、良いだろう」

バーンは了承すると飛翔しながら呪文を唱えた

「ピオリム」

文より凄まじい風圧を発生させてバーンは文の後を追った

「フフン♪今回はいくらバーンさんでも無理ですねえ……さあて早速帰って新聞の作成といきますか!」

文が笑顔で高速で逃げていると突然後方から突風に煽られバランスを崩す文

「あやや……何ですか一体?」

体勢を立て直した文が前方に顔を向ける

「え……嘘……何で……?」

バーンが立ちほだかっていた、全力で逃げていた文はメダパニを受けたように混乱する、混乱する文にバーンは静かに告げた

「……知らなかったのか?」

ゆつくりと諭す様に文に告げる

「大魔王からは逃げられない……!」

その絶望の言葉と共に文の視界は薄れていった

その後、彼女の姿を見たものは誰もいない……

「記事にしないと誓うわね?」

「はい……ですから命だけは……焼き鳥は勘弁してください……」

捕まえられた文は霊夢の前で土下座中、頭を地面に擦り付け必死に許しを乞う

「……ですつて、バーン？どうする？」

「……余もいい加減、鬱陶しいと思っていたのだ……」

そう言うとうバーンは手に魔力を集中させ手を炎上させる

「これが……余のメラゾーマ、その想像を絶する……」

「ごめんなさーい！許してくださいさーい！」

文は一応許された

「紫様！博麗霊夢がバーンに話した様です！」

「そう……いずれわかる事だけ……困った子ね霊夢は……」

式を通じて紫に連絡をした藍に応答する紫

「まあ良いわ、彼の様子は？」

「特に変化は見られません、流石にその胸中まではわかりませんが……」

「わかったわ、また何かあったら伝えて」

「わかりました、お気をつけて紫様……」

通信が切れた後、紫は溜め息をついてその世界の虚空を睨む

(彼に期待してはダメね……私が何とかしないと……)

そして彼女は夜の闇に消えて行った……

第11話 神魔邂逅

「ここは幻想郷にある妖怪の山にある守矢神社

「何ですか神奈子様？」

守矢神社の巫女、東風谷早苗は自分が祀る神、八坂神奈子に呼び出されて神奈子の部屋へ入った

「来たわね早苗、ちよつと貴方に頼みがあるのよ」

「何でしょう？」

早苗が頼み事の詳細を尋ねると神奈子と一緒にいた洩矢諏訪子が口を開いた

「見えて欲しい人がいるの」

「見えて欲しい人……ですか？」

諏訪子の言葉に首を傾げる早苗、彼女はこの幻想郷に見るに値する人物が想像つかないからだと

「早苗も知ってるでしょう？あの大魔王なんて言われてるバーンの事よ」

「ああ！あの大魔王の！凄く強いらしいですねえ！」

「それを確めて来て欲しいの、それで本当に強いならここに連れてきて」

「確かめるって……どうやってですか？」

また首を傾げる早苗、彼女には神の確かめると言う方法が想像がつかないから「そんなに難しく考えなくて良いの、普通に勝負したら良いのよ、弾幕勝負でね、弱っちいなら連れて来なくて良いわ、早苗の修行の成果も試せるでしょう？」

「わかりました！……でもどうして今更大魔王の力を見るんですか？」

早苗の問いに若干顔を苦くする二人

「……余り時間が残されて無いからね、利用出来る物は利用しないと……ね」

「はあ……良くわかりませんがバーンさんの力を見てくれば良いんですね、行ってきます」

「任せたわ早苗」

自分の部屋に戻り身支度を整えながら早苗はワクワクしている

（弱かったら連れて来なくて良いって事は退治しても良いって事ですよね！最近妖怪退治してないからウズウズしてたのよね〜楽しみ！）

身支度を終えた早苗はウキウキしながら守矢神社を出ていった……

「ねえバーン、貴方ってここに来る前は何をしようとしてたの？」

図書館で紅茶を飲みながらレミリアが不意にバーンに聞いた、今日はパチュリーは魔導書を集めに外出中、図書館は狭いと紅魔館の回廊で四人が特訓しているので図書館には今二人

「知りたいのか？」

「嫌ならいいんだけどね」

レミリアのどちらでも良いと言う言葉に数秒沈黙した後バーンは話し出した

「……………神になろうとしたのだ」

「……………神？それは格を上げようとしたの？」

「いや、名だ……………余が居たのは地底の魔界、その魔界に太陽を与え魔界の神になろうとした、その為に地上を破壊しようとしたのだ……………失敗だったかな」

そう語るバーンにレミリアはバーンから何か虚しさにも似た物を感じる、表情に変化は無いが言葉から普段と違う物を感じていた

「魔界を魔界に押し込んだ神々の罪を償う為の計画だったが……………今となってはどうでも

よい事よ……………」

「……………悔いは無いの？」

「無いと言えば嘘になる、数千年を掛けた悲願とも言うべき計画だったのだ……それに神々への憎しみもある」

「……！」

レミリアはバーンが拳を握っているのを見た

如何にももう無意味と分かっていようとバーンの神々への憎しみは消えない、それ程までにバーンの神々への憎しみは深い

「……やり直したいと思つた事ある？」

レミリアの質問にバーンはいつもの様子に戻り返答した

「そんな事を考えて何になるというのだ……遊技ではない」

「わかっているわよ、そんなに難しく考えずに答えてくれないかしら？」

「無い……だが……敗れた時の事は忘れる事は出来んだろうな……」

虚空を睨みながらバーンは呟く様に返答する

「そう……いつか復讐が出来ると良いわね……」

「気休めはいらん、それにもう叶わぬ事よ……」

その言葉を最後に二人が沈黙を保っているとドアを開き咲夜が現れる

「東風谷早苗が見えています、バーン様に面会を希望しています」

「……バーン、もしかしたら貴方の願い叶うかも知れないわよ？」

「何?」

邪悪な笑みを浮かべるレミリアに真意の読めないバーンは問う

「早苗の用件次第だけでもしかすれば……フフ……行きましょバーン」

問いに答えず歩き出すレミリアにバーンは敢えて聞かず図書館を出た

「おおー！実物は迫力が違いますねえ……流石大魔王！早速ですがバーンさん！私と勝負して貰いますー！」

「……レミリア?」

バーンを見るや直ぐ様勝負を希望する早苗にバーンは怪訝な顔でレミリアに説明を促す

「アレは東風谷早苗、守矢神社の巫女よ、貴方幻想郷の本を読んでたから知ってるんじゃない?」

「博麗の巫女のような重要な者は記憶しているが守矢の巫女は知らぬな」

「あらそうなの、博麗神社と違って守矢神社には神が居るのは知ってるでしょ?分かりやすく言えばあいつは神の配下ってとこね」

「ほお……」

レミリアの説明に神の存在を感じたバーンは早苗の前に歩いていく

「単なる力試しではあるまい？目的は何だ？」

「それは私を倒せたら教えましょう！」

早苗の上からの態度にバーンの表情は冷たくなっていく

「……後悔せぬ様にな」

（あーあ……怒らせちゃった……勝つ気なんでしょうけど相手が悪過ぎるわ早苗……）
バーンの力を知るレミリアは早苗に強く同情した……

「はあ……はあ……」

早苗はボロボロだった、倒せたら発言からこの間、僅か5分

（つ、強過ぎる……）

満身創痍の早苗は肩で息をしながら余裕の直立姿勢のバーンを苦悶の表情で見ている

（弱かったら退治なんてとんでもない……強過ぎですよ……それに容赦無いし……なんか怒らせちゃったかな？）

自分の発言が今の状況を作ったと思っていない早苗

「まだ話すつもりは無いか？」

周囲に大量の弾幕を浮かべたバーンが聞く、話さないならコレを撃つぞと脅しを込めて

「ま、待つてください！参りました！」

大量の弾幕とバーンの本気の表情に早苗は直ぐ様負けを認め話し出した

「神奈子様と諏訪子様がバーンさんの力を試して来いって仰られて……まあ私も退治する気だったんですが」

笑顔でバーンを退治するつもりだったと話す早苗

「……ならばもう一度掛かって来るが良い」

早苗の余計な発言にバーンが凄む

「あ、いや……そのお……ごめんなさい……」

「話が進まないじゃない、早苗あなた口の利き方に気を付けなさい、バーンも腹立つのはわかるけど抑えて」

レミリアが仲裁に入り話は進む

「えー……それですね、バーンさんに神奈子様と諏訪子様に会って貰えないでしょうか？」

「帰って伝えるがいい、会いたいのなら自ら来い……とな」

「あーうー……それは困ります、どうかお願ひします」

頼み込む早苗にバーンは身を翻し告げる

「帰るがいい」

そのまま図書館に戻り帰る事は無かった

「どうしよう……お仕置きされちゃう……」

困った早苗は頭を抱えてうずくまる、度々お仕置きされている早苗は怖くてしようがないのだ

「早苗の態度が悪かったんでしようね……もう少し言葉を選んだ方が良いわよ早苗」
「神奈子様と諏訪子様になんて言えばいいか……」

レミリアの助言など耳に入らず主への恐怖で頭が一杯の早苗

「バーンの言葉をそのまま伝えるしか無いわね、早苗には少し気の毒だけどね……少しだけ……そうほんの少しだけ……ね」

気の毒と言うがレミリアの顔は笑っている、早苗のお仕置きを想像してそれはそれは愉快そうに

「……はい……わかりました、伝えて来ますう……お邪魔しました……」

トボトボと出ていく早苗を笑顔で見送るレミリア
(さて……どうなるかしらね……)

笑みを浮かべたまま図書館へ戻って行った

守矢神社

「何？私に出向けと言ったのか？」

「は、はい……」

守矢神社に帰った早苗の報告を受けて神奈子の表情が変わる

「神に出向けと？フン……魔族風情が粹がるわね」

「私達に出向けとは……流石大魔王って所だね」

「お、お気を鎮めて下さい……」

二人の滲み出す怒りに慌てる早苗、神を呼び出すという所業は二人にとって侮辱にあたる、いくらフランクな神と言えど神は神、他種族の命令は面白くない

「大魔王などと呼ばれ舞い上がる者には少しばかり力の差を見せねばなるまい」

「そうね、大魔王が来たくなるような力を見せ付けようか」

「あ、余り危険な事はおやめくださいね……」

「なあに、驚かすだけさ……少しだけ……ね」

「紅魔館の人には悪いけど仕方無いね、やろうか神奈子」

そして二人は早苗を置いて外へ出て行った

「これ……私のせいじゃない……よね？」

残された早苗は一人呟いた

紅魔館

「あれ？急に雨降ってきたよ？さっきまで晴れてたのに」

不意に降ってきた雨に気付いたチルノは窓を覗く

「本当だぜ……なんか……強くなってないか？」

小降りだった雨は勢いを増し豪雨になる

「えー……あたし雨嫌いなのにー……」

フランが不満気に窓を覗く

「雷まで落ちてきやがった……ん？なんかおかしくないかこれ？」

妹紅が異常に気付いた

「本当です……紅魔館にしか降ってないですね」

大妖精が指差した先には拡がる快晴、雷雲は紅魔館のみを覆っている様だ
「どういう事だぜ？」

「ただの異常気象じゃなさそうだな、取り敢えずレミリアに知らせるか」
異常を感じた5人は図書館へ走っていった

「……紅魔館の周囲を力が覆っている」

「えっ？……妖怪退治の集団の仕業かしら？」

外の異変を感じ取っていたバーン、とても不愉快な顔をしている

「いや、神気を感じる……おそらく守矢の神の仕業だろう」

「あの二柱の仕業？何をされてるの？」

詳細を尋ねたと同時に図書館のドアが開き5人が入って来る

「レミリア！なんか紅魔館の回りだけ大雨と雷が……」

魔理沙が外の異変を伝えようとしたその時、凄まじい地鳴りと共に紅魔館を地震が襲
う

「あわわわ……」

激しい揺れが本棚を揺らし小悪魔を本で埋める

時間にして10秒程で地震は収まったが無残にも図書館は落ちた本が散乱しゴミ屋敷の様になっている

「……やつてくれるわね、あの農業神！」

レミリアは怒りを露に身を震わす、自身の居城を攻撃された上に親友の図書館を滅茶苦茶にされた事への怒りで

「まあまあ落ち着けよレミリア……」

「黙ってなさい妹紅……」

「怖っ！……マジで頭に来てるなこれ……」

気圧された妹紅達はレミリアとバーンから離れ様子を窺う

「バーン！あのふざけた農業神共を凝らしめて来なさい！」

バーンに二柱の討伐命令を与える

「それは構わんが……よいのか？余が行っても」

攻撃を受けたのは紅魔館、なのでバーンは一応館の主に確認を取る

「バーンが売られた喧嘩でしょう！紅魔館を巻き込んだんだから責任取って二度とこんな真似が出来ないようにして来なさい！」

命令に変更はなかった

「……よかろう、余も気分の良いものではないのでな」

そう言うとバーンは図書館を出ていった、気分の良いものではないのは当然だが紅魔館に住ませて貰っている恩義もある、だからバーンはレミアアの命令を素直に聞いた「……さっ！用意しなさいあんた達！観戦に行くわよ！」

バーンが図書館を出て数秒後に急に笑顔になり魔理沙達に告げた

「は？」

レミアアの急変振りにみんな目を丸くさせている

「何ポーっとしてるのよ！早くしなさい！」

「……お前怒ってないのか？」

「怒ってるわよ！それよりも今はバーンと神奈子達の勝負が見たいのよ！」

そう語るレミアアの目はキラキラと輝いている

「……それにもしかしたらバーンの悔いも解消出来るかもしれないしね……バーンの望む形じゃないけどね」

「何だかよくわからないけど確かにバーンと神奈子の勝負は気になるぜ……よし！行くぜ！」

魔理沙の言葉に頷いた小悪魔を除く図書館メンバーは少し遅れて紅魔館を出発した

守矢神社へ向かうバーンに障害は無かった

神奈子達がバーンが来るのを予期し妖怪の山に住む妖怪達にバーンを通すよう通達してあったからだ、そのため発見されても襲われる事は無かった、もつとも並みの妖怪ではバーンにキズすら与えられはしないが……

「……お前達が守矢の神か」

守矢神社に着いたバーンは神社の敷地に佇む二人の女性に問う

「そう、私達がこの守矢神社の神、八坂神奈子と洩矢諏訪子よ」

神奈子は普通に名乗る、紅魔館への悪戯で溜飲が下がったのかいつも通りの口調に戻っている

「フン……その守矢の神とやらが余に何用だ？」

「早苗を容易く退けるその力を借りたいのよ、貴方も知ってるでしょう？アレを」

「お前はアレが何かを知っているのか？」

アレ、もちろん無縁塚に封印される者の事、不干渉を決めているバーンにも興味はある者なので神奈子の口振りから何かを知っていると感じたバーンは神奈子に問う

「いや、私にもわからない者よアレは、ただ分かるのは途方も無い力を持ち封印が破れる

と幻想郷が滅ぶ事だけね」

意識すれば分かるのは強いだけで正体は分からない、それを聞いたバーンは苦笑する
「……何か可笑しいかしら？」

「神にも分からぬ事があるのか……フフフ……それで神とは笑わせる……と思つてな」
「……私達は全知全能では無いからね、分からない事もあるわ」

バーンの嘲笑に神奈子の表情は変わり始める

「ほお……では分からないから魔族である余に助けを求めめるのか？ フン……所詮は些細な天候や大地を操るだけの下級神か」

「魔族風情が調子に乗らない事ね……お前は黙つて私達に協力すれば良いのよ……」

既に神奈子から神の余裕は消えていた、神を恐れぬバーンの発言に神奈子の怒りが表情を通して伝わる

「断る、八雲紫もそうだがお前達の掌で踊るつもりは無いのでな」

神奈子の威圧を受けても表情一つ変わらぬバーンは更に続ける

「そして……魔族を卑下するお前達が気に入らんだ！」

鋭い眼光と共に神奈子へ言い放つ

「……ならば私の力で屈服させてやろうぞ」

神への宣戦布告とも取れるその言動に遂に神奈子はその力を開放する

「そうだ……」

力を開放した神奈子に同調し同じく力を開放したバーンは告げる
「余を踊らせたいと言うなら、言葉ではなくあくまで……」

「力で語れっ!!」

大魔王と神の戦いが始まる……

第12話 神さびた古戦場

妖怪の山は震えていた

神と大魔王の放つ神力と魔力がぶつかり合い山を震わせているのだ

「天へ来よ、ここでは大地に影響を与えてしまうのでな」

「良いだろう」

対峙する二人は空へ飛翔していく

「……神奈子って凄かったのね、ねえ諏訪子？」

「そりゃあ神だからね、霊夢達とやりあつた時も本気を出していないよ、当然ね、本気を出してたら霊夢や魔理沙に勝ち目なんてないのよ」

二人が飛翔したのを見計らって出てきたレミリアを筆頭とする紅魔館メンバー、日傘の姉妹に魔理沙、妹紅、チルノ、大妖精の6人

「ホントにあの時は遊びと言うか手加減してたんだな……あの時本気出されてたらと思うとゾツとするぜ……」

天空の神奈子を眺めながら交戦経験のある魔理沙が呟く

「こう見ると本当に神様なんだなって思うよな、普段があんなだから余計に」

妹紅が続いて呟く、普段のフランクな様子とはかけ離れた神奈子に少し唾然としてい
る

「……今回ばかりはバーンさんも危ないんじゃない……」

「何言ってるの大ちゃん！バーンが負ける訳ないじゃん！」

「そうだよ！神様なんてバーンがすぐやつつけちゃうよ！」

バーンの身を案じる大妖精にチルノとフランが力強く話す、力の事で言っているでは
ない、二人はバーンが勝つと信じて言っている

そしてその横でバーンを見つめるレミリアは心でバーンに語る

(さあバーン……望んだ形じゃないけれど貴方の力を神に味会わせてやりなさい……)

猛る叫びが天を震わす

「ハアアアアッ!!」

二人の対決は始まった、神力と魔力を放ち合い、弾けた力が二人の周囲に力場を作り出す

「神符「エクспанデッド・オンバシラ」!!」

神奈子から凄まじい力を込められた御柱がレーザーの様に放たれる

「ちい……!?!」

バーンの放つ弾幕を打ち砕きながら迫る御柱に舌打ちするバーン、御柱がバーンの目に迫ったその時

「フェニックスウイング!」

摩擦で手が炎上する程の速度で出された掌底が御柱を弾き返す

「神というだけある、予想以上の力よ」

御柱の威力を感じながら神奈子に笑みを向ける

「我也驚いたぞ、井の中の蛙と思うたが中々どうして……」

返された御柱を携えながら神奈子も笑う

互いにまだ様子見といった所、余裕の表情は崩れない

「フフツ……この程度ではあるまい？のう大魔王？」

「フン……その程度では話にならんぞ？なあ神よ？」

凄まじい力を天に走らせ二人はまたぶつかり合う

「……これが神奈子の……バーンの力……」

天で繰り広げられる想像を絶する戦いにレミリアは息を飲む

「イケー！そこだー！」

「やっちやえー！」

そんなレミリアに構わず応援するチルノとフラン、大妖精はその横でハラハラしている

「……なあ妹紅？私達アレに勝とうとしてたんだよな？」

「……そうだな、それにあいつ今まで全力じゃなかったのか……」

バーンを見ながら二人が唾然としながら話す

「……勝てる気がしないぜ……」

「……奇遇だな、私もそう思ってた所だ……でも……」

妹紅は拳を握り、魔理沙に顔を向ける

「いつか勝つつもりだよ！私は！」

「!!……そうだな、いつかやってやろうぜ！」

互いに微笑み合った二人は戦いの観戦に戻った

「イオナズン！」

爆発球を神奈子へ放ち爆発させる

「ハア！」

神気を爆発させイオナズンの爆発を相殺し弾幕を放つ

「筒粥「神の粥」!!」

放たれた大量の弾幕がバーンに迫る

「その程度では余に当てる事も叶わぬぞ！」

自分に向かう弾幕にフェニックススイッチングを繰り返す
「ムッ!？」

弾幕はバーンに当たる直前で急激に速度を落としフェニックススイッチングは弾幕に当たらず空を切る

「そら……当たったのう」

無数の弾幕がバーンに直撃し煙を上げる

「まさか……もう終わりとは言えない?」

煙で姿の見えぬバーンに問いかける

「!？」

直後、煙から放たれた黒色の禍々しいビームが神奈子を襲う

「……おのれ……我に穢らわしい魔気を当てるとは!!」

ビームは神奈子を飲み込んだが直ぐ様脱出した神奈子は忌々しく吠える

「魔符「闘魔滅砕砲」……如何なる気分だ?自分の卑下する魔族の気を身に浴びた気分は?」

煙から姿を表したバーン、その体も神奈子の弾幕によりダメージを受けている

「良い訳があるまい、この罪はヌシの体で贖うてやろうぞ!」

力を集中させた神奈子はそれを解き放つ

「マウンテン・オブ・フェイス!!」

神奈子の周囲に花型の高密度弾幕が形成される

「させると思うか?……ベギラゴン!」

バーンの放った閃熱呪文が神奈子の弾幕を攻撃する

「何!?!」

ベギラゴンは神奈子の弾幕を消せなかった

「その程度で消せると思ったか!ゆけ!」

神奈子の号令でバーンに襲いかかる弾幕、バーンは弾くもその圧倒的な物量に次々と被弾する

「グウ……!?!」

1発1発に強い力を込めている弾はバーンの体に着実にダメージを与えていく

「神花の幕に包まれて落ちるがよい!」

神奈子は残る全ての弾を放つ、バーンの姿が見えなくなる程の量の弾幕がバーンに押し寄せるその時、バーンの体の周囲に突如壁が出現し弾幕を擦り潰しながら広がっていく

「カラミティウォール……この技を防御に使わせるとはな……」

神奈子の弾幕を全て擦り潰したカラミティウォールを消し姿を見せるバーン、その体

には傷痕が無数に出来、血を流している

「今のでやられていればこれ以上力の差を見ずに済んだものを……そこまでして我等……神が憎いか？」

「……お前が余の居た世界の神では無い事はわかっておる、だが世界は違えど神は神、余の憎しみを食らわせるには充分な事よ」

「フム……ならば次を持って終わりとしようぞ！」

神気を更に高める神奈子のそれは天候にも影響し、雲を吹き飛ばし遥か下の大地を小さく震わす程の力を放っている

そんな絶望しそうな力を目の当たりにしながらバーンは笑っていた

「一つ……言っておく事がある」

指を立て神奈子に話し出した

「お前は余の居た世界の神より強い……少しだけ……な」

「……我に何が言いたい？」

突然の発言に真意の読めない神奈子は問う

「そして余は数千年を掛け神々の力を越えた……だが今は枷を付けられその力を大きく下げている……しかし！それでもなお……」

神奈子を見据えながら告げる

「余は神を越えている……!!」

力強く宣言されるバーンの発言に神奈子の表情は怒りで歪む

「たかが魔族が……思い上がりも大概にせよ！神を越えたとほざくのなら我に勝って見せよ！」

バーンに一喝した神奈子はその迸る力を御柱に集中させる

「その力、使うてやろうかと思っただがもうよい！幻想の彼方に消えよ大魔王！」

力を全て注いだ御柱を構えた神奈子はバーンの死を宣告する

「……刮目せよっ！神を越えた力を！」

バーンの体から魔力が渦を巻いて溢れだす、その凄まじき魔力は目では見えぬ魔力を可視化させる程高まっていく

「ハアアアアア!!」

「オオオオオオ!!」

放たれた御柱とバーンがぶつかり合う、衝撃が空に広がり妖怪の山を揺らす、ぶつか

り合う音が不協和音を響かせ、その場所だけ不可侵の領域を作り出す

「グウウ……!!ハアツ!!」

バーンの力に押されるも力を振り絞り押し返す

「オオオ……!!ハアアツ!!」

バーンの体を御柱の力が傷付けるが構わず押し続ける

「……フン……ハアアアア!!」

一瞬笑ったバーンは力を最大限に高め御柱を押ししていく

「お、おのれえ……!!」

押されていく御柱、徐々に神奈子に近付いて行く、ヒビを入れながら

（こうなれば……!!）

目の前まで押し込まれた神奈子はヒビの入った御柱に最後の力を与える

「!?」

バーンが気付くと同時に御柱は神奈子もろとも大爆発を起こす、普通の爆発と違い神気の爆発はエネルギーの奔流を起こすように荒れ狂う

「バーン!!」

守矢神社に居たメンバーが全員叫んだ、バーンでも無事で済む様な爆発には見えな
い、それ程の威力

爆発は数十秒続きやがて収まり威力も落ちてきた、爆発が消えそうなその時、爆発から弾かれる様に影が守矢神社へ落ちてくる

「神奈子……!!」

受け止めた諏訪子が叫んだ、神奈子の体は激しく損傷している、死闘の証明かその脇腹には大きな穴が空いており戦いの凄まじさを如実に表していた、だが死んではおらず気絶している、何とか息はある様だ

「バーンは……!?!」

神奈子から視線を切ったレミリアはまだ収まらない爆発を見る、収束していく爆発は一定の大ききで止まると一気に弾けた

「バーンだ！生きてるよー！」

フランが大声で叫んだ、健在のバーンはゆっくりと守矢神社に降りてくる

「やった！バーンの勝ちね！」

「勝っちゃったぜ……やっぱり凄いやバーンは……」

「あいつに対して凄いはなんかチープなセリフだな……凄いつて言うより……やっぱり凄いな」

降り立ったバーンに話ながら近づくメンバーはバーンの姿を見て言葉を止め息を飲んだ

「本当に生きてるのかバーン？」

妹紅が思わずそう口にする程バーンは傷付いていた、至るところから血が溢れ、肉は抉れ、御柱に触れていた右腕は手首から先が無くなっていた

「……来ていたのか」

「生きてる……」

バーンの返事に不思議そうな顔で妹紅は呟く

「流石の貴方もかなり苦戦したみたいね、どうかしら神を倒した気分は？」

「フツ……これを見越していたかレミリアよ」

レミリアの紅魔館で聞かなかった真意を理解したバーンは笑みを向ける

「無意味とは分かっていたが……良い気分だ」

「そう、それは良かったわ……さっ！その体魔法で早く治しなさいよ、痛々しくて見られないのよ」

「そういう訳にはいかぬのだ、神気を含んだダメージに回復魔法は効かぬ、余の生命力で治す他に術は無い、もつとも神も同じだろうがな」

「そうなの？面倒ねえ……まあ神奈子は大丈夫でしょ、諏訪子もいるしね、じゃあ帰りましようか！」

妖怪の山を震わせた幻想郷における神と大魔王の戦いは終わりを迎える、大魔王の勝利に終わったがその傷は浅いものではない、まさに死闘だったのだ

そしてその日の夜

「レミリア……待っていた」

バルコニーで佇むバーンは待ち人が来たことで顔を上げる

「待たせたわね、フフツ……どうしたの？」

悪戯な笑顔をバーンに向け相席する

「お前のお陰で幾分気が晴れた、礼を言う」

「良いのよ気にしないで、楽しい物が見れたしね」

「レミリアよ、お前は何故そこまで余に構う？」

「あら、決まってるじゃない、貴方が好きだからよ」

「そうか……」

「それだけ？ つまらない反応ね」

「フツ……」

「フフツ……」

月は雲に遮られ夜の闇を一層暗くし二人を闇の中へ隠した

「そんな事があつたなんて……」

翌日、傷だらけのバーンを見たパチュリーは事の詳細を聞き啞然としていた

「だからこんな散らかっているのね……」

昨日に引き続きせつせと本を片付ける小悪魔を見て溜め息をつく

（出掛けなければ良かったわ……）

観戦出来なかった事を悔しがる、彼女、いや幻想郷の者達からすれば神と大魔王の戦

いは特級の極上戦だからだ

「でも嬉しそうねバーン？」

傷付いてはいるが機嫌の良さそうなバーン、その顔は成し遂げた様な達成感があつた

「そうだな……どれ……」

魔力を放ち散らかる本を浮かせ、綺麗に本棚へ戻していく

「うわわわわ！」

突然の出来事に慌てふためく小悪魔をよそに次々と本を整頓する

「珍しい事もあるのね……貴方がこんな事をするなんて」

本の整頓や片付けを全て小悪魔に任せていたバーンにパチュリーは少し驚いた

「たまにはよかろう……余が片付けるのも、それにこの程度造作も無い事よ」

「もお！出来るなら最初からやってくださいよー！」

プンプン怒る小悪魔がバーンに突つかかる、昨日から片付けている小悪魔にこの反応は当然だろう

「良いじゃない綺麗になったんだから、仕事が減って嬉しいでしょ？」

「それはそうですけど……もうちょつと早くして欲しかったです……」

しよんぼりしながら仕事に戻る小悪魔をパチュリーが笑顔で見送り、またバーンも微笑する、そこへチルノ達が現れた

「バーン！あの神様が来たわよ！またやつつけちゃえ！」

「違うよー！あたしがやつつけるの！」

「おいおいチルノ、フラン、神奈子達は戦いに来たんじゃないぜ？バーンに会いに来ただけだぜ」

チルノとフランの誤解を魔理沙が訂正し、妹紅が聞いた

「つて訳だけど、どうするバーン？」

「……よかろう、会いに来いと伝えたのは余だ、行くとしよう」

小悪魔以外の紅魔館メンバーを引き連れ神奈子等が待つ上階へ向かった

「来たわね大魔王！お望み通り来てやったわよ！」

「……何用だ神？」

回廊で居合わせた二人は威圧感を出しながら互いを睨む

「け、喧嘩は止めてくださいねバーンさん……」

「返り討ちにしちゃえー！」

「もう！チルノちゃんも煽らない！」

その雰囲気には怯えながら煽るチルノを抑える大妖精

「神奈子様もお止めください、まだ治癒も出来ていないのですから……」

「忌々しいのは分かるけど今日は喧嘩に来たわけじゃないでしょ？」

神奈子と共に来ている早苗と諏訪子も制止する

「……そうね、悪かったわバーン」

「フン……」

互いに溜飲を下げ落ち着いた神奈子は話し出した

「バーンと話がしたいの、私と諏訪子の3人でね、悪いけど会話が聞こえない様に結界を張らせて貰うわ」

張らせて貰うわ」

そう言ううと早苗を下がらせた神奈子は諏訪子と共にバーンに近付き結界を張る

「……これじゃ聞けないわね」

結界の強さを感じたパチュリーが呟く

「私も興味あつただけど仕方ないわね……」

「レミイ……」

階段から降りてくるレミリア、残念そうに溜め息をついている

「……おそらくあの無縁塚の事だと思うけど……ここまでして隠すのは気になるわね」

「そうねレミイ……あそこには何があるのかしら……」

二人が予想をしている時には既に密談は始まっていた

「すまないわね、貴方も知ってる様にまだ幻想郷に知らせるつもりは無いのよ……ギリ

ギリまでね」

「構わん、それより用件はなんだ？」

「……その力を幻想郷の為に貸して欲しいの」

二人の会話に諏訪子が割り込む

「……断る」

「お願い……アレが解き放たれたら幻想郷は滅ぶ……それだけは防がないとダメなの！

貴方の力を貸して！」

頭を下げる諏訪子に神奈子が続ける

「私からも頼む、誰も幻想郷が滅ぶ様を見たくないの……私達からは貴方に何も出来ないけど……お願い！」

「……」

バーンは喋らない

二人の神が大魔王に頭を下げるその光景、あり得る事では無い、しかし幻想郷を想う二人の気持ちちが神の頭を下げさせた

「頭を上げよ……それでは神の面目が立つまい」

頭を上げた二人はバーンの返答を待つ、期待を込めて……

「お前達の幻想郷を想う気は充分理解できた、だが……余の力を貸す事は出来ん」

バーンは承諾しなかった

「……わかつてはいたんだけどね……藁をも掴む気持ちだったんだけど……断られちゃしょうがないわね」

肩を落とし落胆する神奈子、バーンの協力を得る事は無理と知りつつも頼まずにはいられなかったのだ

「1つ……聞かせてくれない？もしアレが貴方に牙を向いたらどうするつもり？」

協力の取り付けが不可能と悟った諏訪子は封印されし者がバーンと対峙した時の事を聞いた

「……幻想郷が滅ぼされた後、それに満足せず余に牙を向けるといふなら……」
「その時は相手をしよう」

バーンは告げた、幻想郷の滅びの後ならと

「そう……貴方は異世界の者だもんね……幻想郷を守る義理なんてありはしないわよね」

悲しく俯く諏訪子の肩に手を置き神奈子が話し出した

「貴方がその気ならこれ以上何も言わないわ、でも心に刻んでおくといいわ、幻想郷が滅んだ時には既に貴方と親しい者は全て死んでいる事を……」

「……わかっておる」

静かに言い放つバーンの瞳に神奈子は何のブレも感じられなかった

「……覚悟しとくのね、時間は余り残されていないわ、もしかしたら予想出来ない事で早まるかもしれない……その時までには幻想郷を楽しんで……」

「……」

バーンの無言の返事に力を抜いた神奈子は結界を解き、早苗を呼んで紅魔館を後にする

「何を話していたの？」

帰った3人を見送りながらレミリアが聞く

「なに……宣戦布告だ、次に勝ちは無いぞ……とな」

「ふーん……もう少し……」

レミリアの言葉を遮りチルノとフランがバーンに飛びかかる

「バーンに勝つのはあたいだー!」

「あたしだよ!バーンに勝つのは!」

二人に引つ張られ遠ざかるバーンを見てレミリアは眩いた

「……もう少しマシな嘘をつきなさい……」

再び穏やかな時間が訪れる、しかしそれは確実に終わりに近付いていく……

第13話 悪夢

神奈子との決戦から一ヶ月後、傷もとつくに癒えたバーンと変わらぬ紅魔館の日々を過ぐす紅魔館のメンバー達

「あたいの勝ちね！やっぱりあたいてば最強ね！」

「むー！でもあたしが勝ち越してるもんねー！」

試合を行っていた二人、今回はチルノが勝ったようだ

「イッテー！反則だろ妹紅！含み弾幕なんてズルいぜ！」

「勝てば良い！それが全てよ！……ワリイ、思い付いたからちよつと試したかったんだよ」

「小細工なんてするなよな！弾幕はパワーだぜ！」

同じく試合をしている魔理沙と妹紅、今日も変わらず研鑽に励む

「……魔力の力が完全に同じじゃ無いわね……氷が少し強い……」

ブツブツと独り言を言っているのはパチュリー、魔法の修行の様だ

（頼もしい事よ……）

その光景を見ながら魔導書を読むバーン、今は鍛練を各々に任せ必要があれば助言を

したり相手をしたりしている

(我が主よ応えよ……我はここにいる！)

「むっ……」

突然バーンに謎の声が語りかける

(魔力を使った念話……)

謎の声は魔力を使った念話と察したバーンはその念に応答を試みるがバーンの魔力に反応を示さない

(……応えぬか、主の魔力のみに応える様だな)

バーンの魔力に応えないその魔力は主の反応が無いのを知ったのか去っていった

(魔力の出所は……)

去った魔力の後を魔力で追う、暫くした後、魔力はある場所で収まった

(……出所は香霖堂からか)

魔力は香霖堂から発せられた物だと確認したバーンは立ち上がり告げる

「香霖堂へゆく、鍛練に励め」

そう言うのと誰の返事も待たずに歩き出すバーンに魔理沙が話し掛けた

「すぐ戻ってくるんだろ？帰ったら相手してくれないか？」

「よかろう」

承諾すると図書館を出ていった

「いきなりどうしたんだ？パチュリーわかるか？」

いきなり香霖堂に向かうと言い出したバーンの意図が分からない妹紅はパチュリーに首を傾げる

「私にも分からないわね、まあ良いじゃない、たまにはバーンだって一人で何かしたいのよ」

「ふーん……まあ良いか」

とりあえず納得した妹紅はバーンだけズルイと喚くチルノとフランを宥め始めた

香霖堂

「邪魔をする」

ルーラで香霖堂へ来たバーンは店内へ入った

「いらつしやい、ここは道具屋だよ……バーンじゃないか、どうしたんだい？」

「少し気になる物がある」

霖之助へ軽く返事をしたバーンは迷いなくその物へ向かう

(主を呼んでいたのはこの剣か……)

バーンが向かったのは壁に飾られている大剣、翼の生えた悪魔の様な柄、口から吐き出す様に鋭利な両刃が生えている

「アラストルがどうかしたのかい?」

アラストルと呼ばれる剣を凝視するバーンに霖之助が聞いた

「……この剣が主を呼ぶ声を聞いてな」

「へえ、君の所にも来たのか、ずっと呼んでいるんだよこの剣は……持ち主が来ないって事は多分異世界にいるんだらうけど」

霖之助の考察を聞きながらアラストルを凝視するバーンはある事に気付き目を見開いた

(こ、この刃に着いた魔力は……これはまさか……)

アラストルの刃から滲む僅かな魔力に気付く

「どうしたんだい?」

バーンの変化に気付いた霖之助が尋ねる

「……良い剣だと思つてな、この剣は強い力を持つ魔が自身を剣に変えたのだらう……まさか魔剣」

「流石大魔王だ、見ただけで分かるなんてね」

能力を使っても名前と用途しか分からない霖之助はバーンの説明に感心する

「……邪魔をしたな」

直ぐ様踵を返し店を出ていくバーン

「……見に来ただけかい？」

出ていったバーンがルーラで帰るのを見て霖之助は一人呟いた

「おっ！帰って来たな！勝負だぜ！」

図書館に戻ったバーンに魔理沙が箒を突き立てる

「よかろう、来い魔理沙」

「頑張れよ魔理沙ー！」

妹紅が応援する中、二人の試合は始まった

同時刻・レミリアの部屋

「何を読んでおられるのですかお嬢様？」

レミリアの私室を掃除しながら咲夜が尋ねた

「……これはね、力が全てと考える者がより強大な力に倒されてしまうお話、ありきたりな物語だけど中々面白いわ」

本を片手に紅茶を飲みながら答える

「面白そうですね、私にも読ませて貰ってもよろしいですか？」

「もうすぐ読み終わるからその後でね……アツツ!？」

本に気をやり過ぎて紅茶を服に溢してしまう

「大丈夫ですかお嬢様！」

「え、ええ大丈夫よ咲夜……」

レミリアの服を大慌てで拭く咲夜に答える

(熱がるお嬢様カワイイ!!)

鼻から忠誠心を出すのを必死で堪えながら拭く咲夜

「替えを持ってまいります」

何故か鼻を押さええながら小走りで咲夜は部屋を出ていった

「ふう……」

咲夜が着替えを持ってくるまでの間、再び本を読み始める

(なーんかバーンに似てるのよねこの話に出てくる奴……)

レミリアがそんな事を思っている時に図書館ではバーンと魔理沙の試合は終わっていた

「ぜえ……ぜえ……クツソー勝てないぜ……」

倒されて床に寝ている魔理沙は天井を見ながら悔しがる

「そう悲観せずともよい、お前は強くなった」

椅子に座るバーンが魔理沙の成長を認める

「手加減されて全く敵わないのかあ？」

機嫌悪そうに話す魔理沙、神奈子との戦いで今のバーンの全力を知る魔理沙は嫌味を言われているように感じている

「それでもお前は余に勝とうとしている、今は敵わなくとも力を蓄えればいずれ余に肉薄する事も可能だろう」

(あの者達の様……)

記憶に残る者達を思い出す、バーンにとって忘れられぬ記憶

バーンがそんな昔の事を思い出していたその時に魔理沙が聞いた

「バーンって私達の相手をしてくれるけどさ、バーンは楽しいのか？ 私達じゃ相手にならないだろ？」

魔理沙の問いにバーンは一瞬だけ間を置いて答えた

「楽しいね」

バーンが出した言葉に魔理沙は凍りついた、バーンの言葉もそうだがその冷たい表情に

「ハ……ハハ……全然面白くないぜ？ バーン……」

何とか軽口を捻り出した魔理沙にバーンが語り出す

「お前は面白くないのか？ 鍛え上げて身に付けた強大な力で弱者を思うようにあしらう時、気持ちよくなるのか？ 優越感を感じないのか？」

「わ、私はそんなつもりじゃ……」

否定の言葉を出すにバーンの語りは止まらない

「お前は異変をスペルカードルールにより解決するまでやり直すのだろう？ 挑む度に鍛え、越えていく、そして越えた瞬間にその者はお前にとって弱者となる、そこに優越感はないのか？」

「うっ……」

魔理沙は反論出来なかった、神奈子達や鬼の様な例外はあるが魔理沙が挑み、勝って

きた者は魔理沙にとって弱者になる、そして勝った事に喜びを感じている事も事実だから魔理沙は口ごもるしか無かった

「じ、じゃあお前は弱い私達をあしらうのが楽しいから今まで相手をしてくれてたって事か？」

魔理沙は聞いた、いつもなら冗談混じりに笑いながら魔理沙は話すだろう、だが今回はいつもの陽気な会話とは違う

「それを知ってどうする？」

「良いから答えろ！」

いつの間にか魔理沙に怒りが見えている

「……そうだ、だが余が……」

「もういい!!」

バーンの言葉を遮り魔理沙が叫んだ

「お前がそうゆう奴だつてのに気付くのが遅かったぜ！もうここへは来ない！」

バンツと床を叩いた魔理沙はバーンに告げた

「次に来る時はお前を倒す時だぜ！」

バーンに怒鳴った魔理沙はそのまま紅魔館を出ていった

「……」

無言で魔理沙が出ていったドアを見つめたバーンは気にする素振りを見せず魔導書を読み始めた

「バーン……聞いてたけどさ、ちよつとあれは酷いと思うぞ」

様子を見ていた妹紅が苦い顔でバーンに近寄る

「……お前は違うのか？」

「そりゃあ……確かに私にその気持ちが無いとは言えないさ、でもさ、言い方って物があ
るだろう？あれじゃあ私達はバーンの遊び道具みたいじゃないか」

「その様な意味で言っただけもりは無いのだがな」

「……魔理沙が出て行ったのが結果だよ」

「……」

バーンが何も返さないのを見た妹紅は溜め息をついて出口に向かい歩き出した

「魔理沙を探して来る、あいつに謝る言葉を考えてとくんだね」

そして妹紅も紅魔館を出ていった

「はあ……不器用ね貴方って」

「……」

返事をせずに魔導書を読み続けるバーンに呆れた様にパチュリーが言った

「最後……何か言おうとしてたわね、言いたい事は分かっているつもり、せめて順番が逆だったらこうはならなかったかもね」

「……かもしれんな」

魔導書を読みながら呟くバーン、彼も思うところがある様だ

「もおー！喧嘩しちゃダメだよバーン！」

「帰って来たらちやんと魔理沙に謝りなさいよ！」

フランとチルノがバーンに言い寄る

「あの……みんな仲良くしたいです……」

大妖精が涙を滲ませバーンに訴える

「……わかっておる、泣くな大妖精」

大妖精の頭を撫でたバーンは静かに魔理沙の帰りを待つ事にした

「……やっちゃまったぜ……」

空を飛びながら魔理沙は後悔していた

「喧嘩する気は無かったんだけどなあ……でもあの言い方は無いよなあ……誰だって怒る、私は怒った」

どこへ行くわけでもなくブラブラと空を漂いながら一人呟きは続く

「まあ啖呵切つちやつたもんはしようがないぜ！絶対にはバーンをギャフンと言わしてやるぜ！」

前向きに考えた魔理沙はバーンを倒す方向へシフトした、どうやら彼女に謝るつもりは無いらしい

「となれば修行だけど……先にミニ八卦炉を調整して貰うか、使い過ぎてガタが来てるからなあ……」

懐から取り出したミニ八卦炉を見ながら呟く魔理沙、彼女のミニ八卦炉はバーン達との修行で酷使し過ぎた為に色々と不具合が出ていた

「よっし！香霖堂に行くぜ！」

魔理沙は香霖堂へ向け箒を飛ばした

「あら、魔理沙と妹紅は帰ったの？」

図書館へやって来たレミリアが皆に聞く

「喧嘩した家出少女を姉が探しに行ったって所よレミイ」

「何それ？」

パチュリーの例えに疑問符の浮かばず

「どうゆうことバーン？」

「……」

返事がない、ただの読書家の様だ……

「はーん、喧嘩したのはバーンと……魔理沙って所かしらね、それを妹紅が探しに行つたと」

「正解よレミイ、それで今は妹紅が連れて帰って来るのを待つてる訳」

「原因はどうでも良いけどバーン、貴方に言っておく事があるわ」

「……なんだ？」

「花は大切にね」

ニコリと笑うレミリアはパチュリーと談笑を始める、そこから少し離れたバーンは魔導書を読みながら返事をする

(……わかっておる)

香霖堂

「酷いなこれは……」

渡されたミニ八卦炉を見た霖之助が思わず呟いた

「よくもまあここまで痛めたものだよ、後少しでバラバラになる所だ」

ミニ八卦炉を分解しながら損傷具合を見た霖之助はまた呟く

「使いまくったからな、私もよく持ったと思うぜ！」

ミニ八卦炉の状態を聞いて面白そうに笑う魔理沙

「状態を全部見るから商品でも見てると良い」

「直せそうか？」

「ギリギリだけど大丈夫そうだ」

「わかったぜ」

そう言おうと魔理沙は店の奥に向かう

「おっ！ナビイじゃないか！久しぶりだぜ！」

「あ、魔理沙！いらっしやい、どうしたの？」

店の奥で異世界の妖精ナビイを見つけ挨拶する

「ちよつとミニ八卦炉の修理にな、なんか面白い物とかあるか？」

「うーん……面白い物ねえ……」

ナビイが思案していると魔理沙が何かを見つけ指差した

「あれは何だぜ？えらく嚴重にしてあるけどさ？」

魔理沙が見つけた物は大きい箱、箱を鎖で覆いかぎを掛け魔術の封印をしている

「危ない物らしいわ、危険だから触っちゃダメだつて言われてるの」

「ふーん……」

「何か無いか探して来るわ、ちよつと待ってて」

ナビイは店の表へ飛んでいった、一人残された魔理沙は封印してある箱に近付き触る

「……結構強力な封印だな、でもこれぐらいなら……!!」

魔理沙が魔力を込めると封印は解かれてしまう、以前の魔理沙なら解く事は出来な

かったがバーン達との修行で強くなった魔理沙は強力な封印をわりと簡単に解いてしま
う程になっていた

「鍵はバーンから習った魔法でと……アバカム！」

箱を覆う鍵付き鎖と箱の鍵をバーンから習った解錠呪文で開ける

「何が入っているかなあ？……これって……」

箱の中に入っていたものそれはナイトメアと呼ばれる兵器のコア、破損してしまい更に動力の魔力が無いので今は停止している状態

「前に見た魔道具じゃん……」

以前バーン達と香霖堂に来た際に見た物体、霖之助がバーンに地上を侵攻する為の物と説明した物だが説明の場に魔理沙は居なかつたので魔道具と誤解したままの物

「……これだけ嚴重に封印してあるって事は凄いい魔道具って事だよな！三種の神器並みだつたりして！」

良く観察せずに期待だけを膨らませていく魔理沙、危険な物だとは考えていない
「決めた！これを使いこなしてバーンをギャフンと言わせてやるぜ！」

ナイトメアを魔道具と決めつけた魔理沙はバーンへの対抗心も手伝い、ナイトメアを持ち上げた

「ミニ八卦炉は……また今度にするか、さあてバレないように裏口からオサラバだぜ！」
香霖堂の裏口から出た魔理沙はナイトメアを抱え飛んでいく、そしてそのすぐ後にナビィが店の奥に戻つて来る

「良い物があつたわつて……あれ？魔理沙？」

辺りを見回しても魔理沙は居ない、そこに霧之助が現れる

「調整に2日程貰うよ……魔理沙はどこに行ったんだい？」

「私も分からないの、さっきあの箱の……あつ!!」

ナビィが驚愕の声をあげた

「開いてる……」

「何だつて!?!」

気付いた霖之助が箱に近付き中身を確認するが既にもぬけの殻

「大変な事になった……妖怪ならまだしもよりによつて魔法使いの魔理沙が持つていくなんて……」

焦りを見せながら立ち上がる

「ど、どうするの?」

「決まってる魔理沙を止めないと!魔理沙の家に行つてみる、ナビィは留守番を頼む!」
ナビィに留守番を任せると霖之助は急いで魔理沙を探しに出で行つた

「おーす!久しぶりだぜアリス!」

「いらつしやい魔理沙、あら?何なのそれ?」

ナイトメアを持った魔理沙は家に帰らずにアリスの家に来ていた

「魔道具なんだけどもまだよく分からなくてさ、一緒に調べてくれないか？」

「それが魔道具？わかったわ、見てみましょう」

机にナイトメアを置き二人は色々と調べて見たがよくわからない

「これ本当に魔道具？確かに材質は魔道具特有のだけど……壊れてるみたいだしガラクタじゃないかしら？」

ナイトメアをコンコンと小突きながら疑問気と言う

「うーん……大事に保管してあったからそれはないと思うんだけどなあ……」

魔理沙もナイトメアを見つめながら呟く

「……魔力込めてみるか」

ふと思い立った魔理沙が呟きナイトメアに手を添える

「無駄だと思うけど……」

魔力を込め始めた魔理沙を眺めているとナイトメアが反応を示した

「おっ！動いたぜ！」

「あら本当ね」

ナイトメアがカタカタと動き出したのを見て喜ぶ魔理沙

「……何か出してるわね」

アリスがナイトメアの変化に呟く、ナイトメアのコアから灰色の液体が生成され少し

ずつ広がっていく

「何だあ？汚いな……アリス、外に出そうぜ」

ナイトメアのコアを持ち上げると魔理沙は外へアリスと共に出ていく、ナイトメアから生成された液体はコアから離れずにぶら下がったまま付いていく

「……結構変な液体出したけどそれだけだぜ、何なんだコレ？」

コアを覆い尽くし、二回り程大きくなったナイトメアを見ながら魔理沙は益々疑問に思う

「コレ……魔力を自己生成してない？少しずつだけど」

アリスがナイトメアの魔力の生成を感じ魔理沙へ告げる

「えっ？本当かアリス？」

魔理沙がアリスへ顔を向けた瞬間、アリスの表情が変わった

「魔理沙!!」

アリスが叫んだ時にはナイトメアは魔理沙の体に液体を覆う様に被さっていた
「な、何だ!」

被さって来た液体を振り払おうとするが液体は離れない

「コイツ……私の魔力を吸い取ってる!？」

自身の魔力を吸い取られている事に気付いた魔理沙はアリスに助けを求める

「アリス！コイツを吹っ飛ばしてくれ！」

「わかったわ！」

アリスがコア目掛けて魔法弾を当てるとナイトメアは魔理沙から引き剥がされて地面に落ちる

「大丈夫魔理沙？」

「ああ、結構吸われたけど大丈夫だぜ、それより……変な液体がかなり増えたな」

魔力を吸われたが怪我は無い魔理沙は吹き飛んだナイトメアを見て徐々に危険を感じ始める、魔理沙から奪った魔力を元に更に自己生成を行っており、5メートル程の量のゲル状の液体を広げていた

「もう完全に球は隠れちゃったしね……どうするのアレ？壊す？」

アリスも危険を感じ処理方法を持ってきた魔理沙に尋ねる

「……そうだな、危なそうだから壊そうぜ！」

「わかったわ！」

二人同時に弾幕をナイトメアに浴びせる

「効いてない!？」

放った弾幕を液体が飲み込んだのを見てアリスが驚く

「あの球をどうにかしないとイケないみたいだぜ……」

「でもあの液体で守られているのにどうやって?」

「それは……」

液体をどうにかしようと思案しているとナイトメアが液体を魔理沙達に数滴飛ばしてきた

「……避けるアリス!」

「えっ?」

払い除けようとしたアリスに魔理沙が叫んだ

「ツ!!イタツ!!」

液体はアリスに触れた瞬間、一瞬で凝固し氷柱の様に刺を出しアリスの腕を引き裂く

「大丈夫かアリス!」

牽制の弾幕を放ちながらアリスの安否を確認する魔理沙

「大丈夫よ、少し切れたただだから、それより攻撃が効かないのが問題ね、どうするの?」

「普通の弾幕じゃダメみたいだな、じゃあパワーで球ごと吹き飛ばしてやるぜ!私のマスタースパークでな!」

ミニ八卦炉を取り出そうとした魔理沙は懐に手を入れて青ざめた

(そうだった……調整に出してたんだったぜ……)

霧之助に調整を頼んでいた事を思いだした魔理沙はナイトメアをどうするか別の方

法を考え始める

「!?魔理沙見て!」

アリスに促されナイトメアを見た魔理沙はその様子に叫んだ

「逃げる気か!」

地面に同化していき消えていくナイトメア

「逃がすか!」

弾幕を放つもナイトメアには効かず逃走を許してしまう

「……逃げられたわね、追うんでしょ魔理沙?」

「当たり前だぜ、アレが人里でも襲ったら危険だからな」

すぐさま箒に跨がった魔理沙は浮きながらアリスに告げる

「アリスは魔法の森を探してくれないか?私は広く探してみる」

「わかったわ、気を付けてね魔理沙」

「アリスもな!」

飛んでいった魔理沙を見送ったアリスは愛用の人形を持ち搜索に向かった

「家にも居ない……どこに居るんだ魔理沙」

魔理沙の家を訪ねた霖之助が呟く、急いで来たので息を切らしながらも魔理沙の行き先を考え始める

(友人のアリスの所か……バーンの居る紅魔館かだな)

今までの傾向から行き先を予想した霖之助は走り出そうと足を出す

「霖之助じゃないか、霖之助も魔理沙に用事か？」

そこへ妹紅がやってくる

「ちようど良かった！魔理沙を探してるんだ、どこにいるか知ってるかい？」

「……どうしたんだそんなに慌ててさ？何があつたんだ？」

霖之助の慌てようにただならぬ物を感じた妹紅

「……君も前に見たナイトメアを覚えてるかい？」

「えーと……確か地上の侵攻のやつだったな、それがどうしたんだ？」

「……魔理沙がそれを持ち出したんだ、封印を解いてね」

「何だつて!?!」

霖之助から詳細を聞いた妹紅は驚愕する、本当に地上を侵攻する為の物なら危険極まりない代物だからだ、そして霖之助の本気表情がそれが本当だと思わせた

「どこにいるか分かるかい？」

「いや、私も魔理沙を探してたんだ、今ちよつと事情があつて魔理沙は紅魔館に戻らないんだ……」

「だとすればアリスの所か、それか霊夢の所といった所だね……僕はアリスの所に向かう、君はバーンにこの事を伝えてくれないか？彼の知恵を借りる事になるかもしれない」

「わかつた！気を付けろよ！」

そして二人はすぐに別れて駆けて行つた

「クツソー！どこに行きやがつた！」

上空から搜索する魔理沙は魔法の森の近辺を探していた

（早く何とかしないとヤバイ事になる！クツソー！バーンがいたら……）

ハツと気付いた魔理沙は頭を振り思い出した

（何言つてんだ！バーンに頼つてどうするんだ！あいつとは喧嘩してるんだ、あいつ無しでもやつてやるぜ！）

ヨシと意気込んだ魔理沙に遠くから声が聞こえる

「何だ……悲鳴？……まさか!」

ナイトメアが誰かを襲っていると直感した魔理沙は声のする方へ急ぎ箒を飛ばした
「おわああああ! な、何だコイツは!」

ナイトメアに襲われていた少女は逃げ惑っていた

「ゲツ!?!行き止まり!?!」

岩壁が少女の逃げ道を塞ぎ、少女をナイトメアが追い詰めた

「わ、私とやろうつてののか? 良いののか? ぎったんぎったんにしてやるぞ?」

強がるが腰が引けている上にナイトメアに言葉は通じない、ナイトメアが問答無用とばかりに液体を放つ

「ひゅい!?!」

ナイトメアの攻撃に少女は目を閉じ身構えた

「大丈夫か!」

そこへ間一髪魔理沙が間に合う、飛ばした液体とナイトメアに弾幕を放ち攻撃を抑える

「……魔理沙?」

目を開けた少女は助けに来た魔理沙を見て呟いた

「にとりか! こんな所で何してる!」

魔理沙も少女を知っていた、少女は河城にとり、妖怪の山に住む妖怪エンジニアの児童である

「あた、あたしは何か面白い物が無いか探索してたらこの変なドロドロに襲われたんだ！」

「!!にとり隠れてろ！」

ナイトメアが魔理沙達に攻撃を放つたのを見て魔理沙が応戦しながらにとりを逃がす

「何なんだよアレは……魔力で生成したゲル状の液体に、それからアレは……」

隠れながら魔理沙の戦いを観戦するにとりはナイトメアを分析する

「クソツッ！やっぱりダメか！」

やはり弾幕が効かない事に歯噛みする魔理沙、それでも攻撃を止めない、攻撃が効かないナイトメアは弱る事は無い、だが魔理沙の体力と魔力は確実に減っていく……

紅魔館

「バーン！大変な事になった！」

紅魔館へ戻った妹紅がバーンに駆け寄る

「どうした？」

魔導書を読むバーンは慌てる様子も無く詳細を尋ねる

「魔理沙が香霖堂にあったナイトメアを持ち出したんだ！起動したらマズイ事になる！」

「……それで？余にどうしろと言うのだ？」

ナイトメアが起動した際の危険性を訴える妹紅にバーンは冷静に聞く

「決まってるだろ！魔理沙を止めに行くんだよ！もしナイトメアが起動したら止めない」とー」

早く行くぞと促す妹紅だがバーンは動かない

「お前達で何とかするのだな、余が出る必要は無い」

魔導書を読みながら冷徹に告げる、力は貸さないと

「あー！もういい！チルノ！手伝ってくれ！行くぞ！」

「あたいの力が必要なのね！わかったわ！」

バーンの協力を諦めた妹紅はチルノを連れて出て行くこうとする

「待て妹紅……」

それをバーンが呼び止めた

「何だよ！急いでるんだ！」

協力を拒んだバーンにイラつきながら聞き返す

「博麗の巫女を連れて行くが良い」

「……霊夢を？何でだ？」

霊夢を連れて行けと言うバーンの意図がわからない妹紅は説明を要求する

「おそらく奴の力が必要になるだろう」

それ以上は話さなかった

「……わかった」

それ以上話さないバーンに問答を諦めた妹紅は一先ず助言に従う事にしてチルノと共に博麗神社へと向かった

「貴方は行かないの？」

傍に居たパチュリーがバーンに聞いた

「お前も行かぬではないか」

「私には興味無い物だからね、傍観するの？」

「……」

バーンは答えない、魔導書に目を向けたまま指だけがページをめくる為に動く

「放っておきなさいパチエ、バーンに何もかも押し付けるのは良くないわ」

「そうね……レミイの言う通り、幻想郷の事は幻想郷の者が解決しないといけないわね」
納得したパチュリーはそれ以上バーンに言う事はなかった

「あの……バーンさん……」

「……どうした大妖精？」

もじもじと話しづらそうに大妖精とフランがバーンに寄る

「その……出来ればチルノちゃん達を助けてあげてください……私の力じゃ無理なので……」

「あたしはお昼は出れないから無理なの、日傘したままじゃ戦えないし……行ってあげてよバーン！」

「……」

「お願いします！」

答えないバーンにお願いすると二人ははすぐ離れていった

「……」

変わらず魔導書を読むバーン

その指は次のページをめくる事無く止まったまま……

第14話 再会

博麗神社

「霊夢！居るか!？」

博麗神社へ来た妹紅は霊夢を探して母屋へ向かう

「何よ慌てて……今至福の時なんだから邪魔しないでよ」

縁側でお茶を啜る霊夢がうつとうしそうに妹紅を睨む

「今はそんな事してる場合じゃないんだ！頼む！協力してくれ！」

「何いきりたつてんのよ妹紅……」

変わらずお茶を啜る霊夢

「私にも良くわかんないけどバーンが霊夢を連れていけつて言うんだ！」

「バーンが……?」

何かトラブルなのは容易に想像出来る、しかしそれに対してバーンが自分を指名したのが霊夢は解せない

「とにかく一緒に来てくれ！魔理沙が危ないんだ！」

「魔理沙が？」

トラブルの渦中に友人の魔理沙がいる事を知った霊夢は重い腰を上げる

「わかったわ、協力してあげる、急いでるんでしょ？何があったか行きながら話して」
「わかった！でも今は魔理沙を探している所なんだ、だから探しながら話す！」

「いいわ、じゃあ行くわよ！」

3人は博麗神社を飛び出していった

「はあ……はあ……クソツツ！無敵かよコイツは……」

肩で息をしながら悪態つく魔理沙、ナイトメアの攻撃は避け続け被弾はしていないが体力と魔力の減少が著しく、今は防戦一方

「……こんのお！」

弾幕を放つも魔力の減少で威力は落ち量も少ない、そしてナイトメアの液体には通じず魔理沙の限界だけが近付いていく

「……それじゃダメなんだ魔理沙、多分あの液体には弾幕はおろか物理攻撃も効かないだろうな……」

物陰から様子を見ているにとり、ナイトメアを分析し弱点が無い事を悟る

(でも制御装置みたいなのがあるはずなんだ……あたしなら絶対付ける、でもそれらしいのは見当たらない……)

ナイトメアを兵器として見ているにとりはナイトメアを制御する装置の存在を予想したがにとりの目にはそれらしい物が見当たらない

そしてにとりの予想は当たっている、ナイトメアには制御装置としてナイトメアを縛る拘束文様とセットで運用される兵器、だが幻想郷に落ちたのはナイトメアのコアのみで拘束文様は無い

(マズイな……魔理沙も限界近いみたいだし)

徐々に追い詰められていく魔理沙に敗北を感じ始める

「ツッテーなーこの野郎！」

ナイトメアの攻撃がかすり、怒りのままに動き弾幕を放つ

「魔理沙！そっちはダメだ！」

にとりが叫んだ、回りが見えていなかった魔理沙は箒を木に当ててしまいバランスを崩し地面に落ちてしまう

「くっ!？」

落ちた魔理沙にナイトメアの放つ大量の液体の礫が迫り魔理沙は顔を防御するため腕で守った

「…………？」

身構えたものの攻撃は来なかった、魔理沙が腕をおろし前を見ると魔理沙を庇う様に立ちはだかる者がいた

「い、香霖……」

魔理沙を庇ったのは霖之助だった、礫が刺の形に凝固し霖之助の腕と脇腹を貫通している

「なんで……」

安否を確かめるより先に聞いた、なぜナイトメアを勝手に持ち出した私を庇うのかと「…………無事で良かった」

一言、そう言った霖之助はその場に倒れた

「香霖！」

霖之助に駆け寄った魔理沙だがナイトメアは止まらない二人もろとも葬ろうと攻撃を仕掛けようとする

「させない！」

そこにアリスが表れナイトメアを攻撃し注意を自分に向けさせる、ナイトメアは二人を攻撃する事を止めアリスと交戦状態に入る

「香霖……」

霖之助を抱き抱え名を呼ぶが返事は無い、気絶しているようにも見える

(このキズはヤバイ……永琳の所かバーンの所に連れていかないと)

霖之助が危険な状態にあると知った魔理沙は霖之助を抱え飛び立とうとするがナイトメアが逃がすまいとアリスを無視して攻撃を仕掛けてくる

「クソッ！急いでるのに……」

攻撃が激しく迂闊に飛び立てない、霖之助の血が魔理沙の服を染め、血の温もりを感じた魔理沙を更に焦らす

「こうなったら一か八かだぜ！」

意を決し攻撃の中を飛び立とうとした魔理沙にナイトメアが集中放火を浴びせようとしたその時、上空から弾幕の雨がナイトメアを襲いナイトメアの攻撃が止まる

「魔理沙！大丈夫か！」

ナイトメアに攻撃したのは妹紅達3人、探し回っている途中に魔理沙を攻撃する寸前のナイトメアを発見し攻撃したのだ

「妹紅……チルノ……それに霊夢まで」

窮地を救ってくれた3人を見つめる魔理沙に妹紅が怒鳴る

「霖之助ケガしてるじゃねえか！早く連れていけ！」

「あ……ああ！ここは任せたぜ！」

ハッと我にかえった魔理沙は急ぎ飛び立ちその場から離れていった
「気をつけて！コイツには攻撃が通じないの！」

交戦中のアリスから助言が飛ぶ

「みたいだな、さっきの弾幕も効いてないみたいだ」

全く堪えていないナイトメアを睨みながら妹紅が確認する

「あたいが凍らせてやる！」

飛び出したチルノが能力を使いナイトメアを凍らせようとする、冷気がナイトメアの周囲に漂い液体を凍らせようと温度を下げる

「……あれ？凍らない……」

チルノの能力を持つてしてもナイトメアを凍らす事は出来なかった

「無駄無駄、あの液体はあらゆる耐性を持つてる、正攻法じゃ倒せないよ」

物陰から観戦するにとりが呟く、にとりの見立てでは物理はおろか魔力、妖力に耐性があるとしている、つまり何人集まろうとナイトメアを倒す事は出来ない

「どうすりゃいいんだ！」

ナイトメアの攻撃を避ける妹紅は焦る、攻撃が効かないのであれば止めようがないから

(バーンはなぜ私を呼んだのかしら……)

応戦しながら霊夢は自分が呼ばれた意味を考えていた

紅魔館

「……少し出掛けてくる、留守は任せた」

不意に立ち上がったバーンは図書館の出口に向かい歩いて行く

「クスクス……行つてらっしゃい」

小さく笑いながらレミリアがバーンを見送る

「素直じゃないわねえ本当」

バーンが出ていった後にレミリアは眩き、パチュリーは微笑みながら本を読み、フランと大妖精は跳び跳ねて喜んだ

「もう！いい加減にしなさいよ！」

止まないナイトメアの攻撃にチルノが怒る、攻撃が効かず防戦一方の4人は解決策が見つからず膠着状態に陥っていた

「マジでヤバイぞ！どうやってたらコイツを止められる!？」

避けながら妹紅がナイトメアを観察するが何も得られない

「あーもう！鬱陶しいのよー！」

自分が呼ばれた意味を考えていた霊夢はナイトメアの攻撃にイラつき霊力を高める
「じつとしてなさい！夢符「二重結界」!!」

霊夢から放たれた結界がナイトメアを縛る

「やったな霊夢！これで取り合えず動けないから対策を練ろう」

動かなくなったナイトメアを見た妹紅が霊夢に寄っていくが霊夢の表情は冴えない

「どうした？」

「なに……あれ？」

霊夢が結界内のナイトメアを指差す

「形が……変わっていく……」

液体が1ヶ所に集まっていき形を成していく、縦に2メートル横に5メートル程の曲

線を帯びたなんとも形容しがたい巨大な姿になる

「なんなのよ一体……キヤツ!!」

結界を維持していた霊夢が突然押された様に踏ん張る

「結界を壊そうとしてる……なんて力……!?」

ナイトメアが魔力を放ち結界を壊そうともがく、同時に攻撃を仕掛ける

「攻撃が激しくなってるじゃねえか!」

激しさを増した攻撃に妹紅が叫んだ、ナイトメアの周囲に拳程の大きさの物体が数個浮遊しマシンガンの様に魔力弾を放ってくる、更に液体の攻撃も継続している

「まさかあれは……」

隠れているにとりが気付いた

(結界で抑えているのにあの形態変化……まさか霊夢の結界が制御装置の役割をしてい
る?)

ナイトメアの変化に仮説を立てている最中、またナイトメアに変化が起きる、ボディの一部が開閉し物体が出てくる

「それが本体よ!」

出てきた物体にアリスが叫んだ、出てきた物体はナイトメアのコア、結界が制御装置の役割を果たしナイトメアの弱点を露出させたのだ

(これがバーンが私を呼んだ理由ね……!!)

結界に力を込めながら霊夢が呼ばれた意味を理解する

「早くやって!」

結界の維持が厳しくなってきた霊夢がコアへの攻撃を促す

「任せろ!」

「食らえー!」

妹紅とチルノに加えアリスも攻撃を仕掛けようとした時、ナイトメアの前面に魔力が

結集していき、それは放たれた

「うおおっ!」

「うわあ!」

「……っ!」

ナイトメアの前面にある砲台から高出力のビームが放たれ辺りを薙ぎ払った

「なんでもん出さなんだコイツは……」

なんとか回避した妹紅はビームの威力に戦慄する、辺りの木や岩を半径数十メートル薙ぎ払ったビームのせいで地形が変わってしまったている

「アリス!大丈夫?」

チルノがアリスへ駆け寄る、アリスは避けきれずに少し被弾してしまっていた

「うっ……なんとかね……でももう戦えそうにないわ、足手まといになるわねこのケガじゃ……」

右足と右腕をやられたアリスは申し訳なきように継戦を辞退する

「気にしないでいいわ！後はあたい達に任せてあんたは休んどきなさい！」

「ごめんなさい……後はお願いなね」

戦列から離れるアリスを見送りチルノはまたナイトメアへ向かう

「おい!?戻ってるぞアイツ！」

チルノが戻ると妹紅が焦りを見せながら指差していた、ナイトメアは再びドロドロの液体に戻っていく

「結界が切れたからね……あんな物騒なビーム急に出来たら結界なんて維持出来ないわよ」

ビームを避ける為に結界を解いた霊夢が忌々しそうに話す

「また結界を張れるか？」

「アイツを抑えられる力を溜めるのに少し時間が掛かるわ、それまで耐えて」

「わかった！行くぞチルノ！」

「わかってるわよ！親分に命令するな！」

霊夢の結界を張る為の時間を稼ぐ為に二人はナイトメアに向かっていく

「こつちだドロドロ！」

「うりゃー！」

注意をそらせる為に二人は弾幕を放ちながらナイトメアの周囲を飛び回る

「もう少し……」

力を溜める霊夢は急ぐ

「へっへーんだ！あたいにそんな攻撃当たらないよ！」

ナイトメアの攻撃を避けたチルノが地面に足を着け得意気に語る

「ん？何かしようとしてる……？」

ナイトメアの様子が違う事に気付いた妹紅は上昇し様子を見る

「悔しかったら捕まえてみなさい！」

チルノがナイトメアにビシツと指をさした瞬間、チルノの足元にナイトメアの液体が

浮かび上がってくる

「しまった！チルノ！下だ！」

「ほえ……？」

妹紅の叫びにチルノが下を向いたが既にナイトメアの攻撃は始まっていた、液体が包

み込む様にチルノに飛びかかる

「あ……」

突然の出来事にチルノは啞然として自分を覆う液体を見ているしかなかった

「チルノー!!」

妹紅は急ぎ動きだしたが場所が悪かった、ナイトメアの様子を見る為に上昇していた事でチルノの救助に間に合わない距離を作っていた

「……ッ!?!」

チルノのが液体に飲み込まれる瞬間、反射的に妹紅は目を閉じてしまう、そして目を開いた時にはチルノはそこにはいなかった

「チルノ……この野郎!!」

チルノをやられた妹紅は怒り、ナイトメアへ向く、仮にチルノが殺されても妖精であるチルノは復活できる、しかしそれをわかっていても目の前で友人を殺されたのだ、怒るのは当然の事だった

「仇は取ってやるからな!」

復讐を誓う妹紅は身構える、闘志満々で攻撃をしようとする彼女に

「チルノは無事だ」

声 が 掛 っ っ た

「……バーン!!」

声のする方向に顔を向けた妹紅は嬉しさを顔に出し友の名を呼んだ

「気を抜くな妹紅、攻撃が来ているぞ」

チルノを抱き抱えているバーンは妹紅が攻撃されている事を伝える

「おっとー……バーン！来てくれたんだな！」

攻撃を回避しながら妹紅が笑顔で聞く

「……余はこのナイトメアに興味があつたのだ、それで来たまでの事……チルノを助けたのは余の通り道に偶然いた故についてにな」

チルノが飲み込まれる寸前、間一髪間に合ったバーンはチルノを救いだしていた

「ちえ……素直じゃないなあ」

妹紅が呆れているとバーンは恐怖で気絶しているチルノを魔力で覆い上空に避難させ霊夢に問う

「準備は出来ているか博麗の巫女よ？」

「出来てるわよ！遅れて来たくせに態度がデカイわね！」

力を溜め終わった霊夢は再び二重結界でナイトメアを拘束する

「気を付けろよバーン！コイツはこうなつてからが厄介なんだ！」

再び拘束形態にされたナイトメアは魔球を生成し弾幕を放ちコアへの接近を拒む

「……コイツさつきより力が上がってる!？」

霊夢の結界を解こうとするナイトメアの力が上がっている事を体感した霊夢は結界

の維持に神経を集中させる

「あまり持たないわ！早くやって！」

「わかっている！……けど攻撃が激し過ぎるんだよ！」

凄まじい弾幕を張るナイトメアに妹紅は避けるのに手一杯、ナイトメアに接近すら許されない

「どいていろ妹紅」

妹紅を退かせたバーンがナイトメア立ちほだかる

「ちよつとバーン！結界ごとやるのは止めてよ！結界が壊されたら次は無理かも知れないわー！」

「わかっておる」

霊夢の忠告に返事をしたバーンは手に魔力を集めナイトメアのコアに狙いを定める

「カイザーフェニックス！」

放たれた炎鳥がナイトメアの弾幕を燃やし尽くしながらコアに直撃しコアを炎上させる

「むっ……」

炎上するコアを見たバーンが気付き、妹紅も気付いた

「効いてない……バーンのカイザーフェニックスが……嘘だろ……」

ナイトメアのコアは炎上こそしているもののダメージを感じさせていなかった
「全く効いていない訳では無い、おそらく魔力系統の遠距離攻撃に強い耐性があるのだ
ろう……ならば直接叩けばよからう」

コアの魔法や弾幕に対する防衛力の高さを知ったバーンは継続するナイトメアの攻
撃を避け、弾きながらコアに接近する

「ハアッ！」

バーンの正拳がコアに炸裂する、強烈な拳を受けたコアは微細な破片を飛ばす

(なんとという堅牢なコア……余の拳を受けて壊れぬとは)

「ハアアアッ！」

拳を連打しコアを殴りつける、コアは更に破片を飛ばし物理攻撃が有効である事を物
語る

「終わりだ……カラミティエンド！」

破片を散らしヒビの入ったコアに更に力を込めた手刀が振り落とされる

「ぬう……!!？」

手刀がコアに当たる直前、拘束形態のナイトメアが崩れ始めバランスを崩したバーン
の手刀はコアを僅かに切り飛ばすだけに終わる

「ごめんバーン、持たなかったわ……」

霊夢が肩で息をしながら謝る、結界をトドメまで維持出来なかったのだ

「……もう一度やれ」

「無茶言わないで……コイツを抑えるのにどれだけ霊力を使うかわかっているの？もう限界よ……」

「ちい……」

霊夢の限界と仕留め損なった事に舌打ちする

「バーン！逃げる気だぞー！」

ナイトメアが逃走しようと地面に同化しようとしているのに気付いた妹紅が叫ぶ

「余が追う、チルノを任せたぞ妹紅」

チルノを妹紅に任せたバーンはナイトメアを追う為に浮き上がる

「霊夢の結界無しでどうするんだよー」

妹紅の言葉に返事を返さずバーンはナイトメアを追いかけていった

幻想郷のとある花畑

「出てこい、余から逃げられると思っっているのか？」

ナイトメアを追ったバーンは花畑に立ち、告げる

バーンの言葉に反応したのかナイトメアが地面から滲み出し花畑の花を腐敗させながら姿を現した

「結界など無くとも余の魔力でその液体ごと粉碎してくれよう」

バーンの魔力の高まりに呼応するようにナイトメアもバーンに攻撃を仕掛ける

「余の最大魔力のイオナズン……受けるがいい！」

液体に向け放った最大魔力のイオナズンは凄まじい大爆発を起こし辺りの花を多量に散らす

「余のイオナズンは既にイオナズンのレベルを遥かに越えている……イオグランデでも……いや……よいか」

花びらの舞うその場所で呟いたバーンはナイトメアの破壊確認の為に爆発が収まるのを待つ

「!?!」

一瞬の油断だった

自分の魔力に絶対の自信を持つバーンは仕留めていると思いい込み警戒を解いていた、それ故に足元からの奇襲に反応が遅れてしまい対処が出来なかった

「ぬう!?!」

足元から出てきた液体がバーンを包み込み地面に引き込む、バーンを引き込んだナイ

トメアは何故か動かさず沈黙を保っていた

「まさか余のイオナズンを受けて壊れぬとは……なんという魔力耐性よ……」

ナイトメアに引き込まれたバーンは異質な場所に立っていた

(ここは……奴の作り出した異空間か)

引き込まれた場所がナイトメアの作り出した空間だと把握したバーンは魔力をまた高める

「この程度の異空間など余の魔力を持ってすれば抜けるのは容易い」

異空間に魔力で干渉し出口を作ろうとしたバーンに突如、巨大な頭部だけの骸骨の集団が襲いかかる

「フン……」

遅いくる骸骨を手刀で薙ぎ払う

「悪魔か……その程度では束になった所で余には敵わん」

バラバラになった骸骨に言い放ったバーンは再び出口を作り出そうと魔力を集中させる

「むっ……」

背後に気配を感じる

「止めておけ……死にたくないならな……」

背中越しに忠告するが気配は消えない

「死に急ぐか……なっ!？」

振り向いたバーンが驚愕の表情でその者を見た

「お、お前は……」

驚きと汗をかきながらその忘れぬ名を呼んだ

「ダイ……!!」

第15話 忘却と花畑

永遠亭

「早く治してくれ永琳!」

診察台に霖之助を寝かせた魔理沙は永琳に治療を促す

「静かになさい、傷に響くわ」

霖之助の傷を確認しながら永琳が落ち着くよう話す

「わかってる!……でも香霖が……」

不安な眼差しで霖之助を見つめながら呟く

「心配なのはわかるけど今貴方に出来る事はここで私達の邪魔をする事ではないでしょ?」

う?」

「でも……」

永琳にキツイ言葉をかけられるがそれでも霖之助が心配な魔理沙は部屋から出ない

「ふう……」

溜め息をついた永琳が呆れる様に話した

「そんなに心配なら何故バーンに治療して貰わないの?回復魔法使えるんでしょ彼?」

霖之助に麻酔を打ちながら話す、バーンにベホマを掛けて貰えば傷はすぐに治るのにわざわざ自分の所に来た魔理沙に聞いた

「バーンとは……その……喧嘩……してるんだ……」

バツの悪そうに魔理沙が目を反らし答えた

「呆れるわね……そんな貴方のバカな意地の為に霖之助は死にかけているのよ？ 私が貴方の立場なら迷わずバーンの所へ行くわ、意地なんて捨ててね」

「私は……悪い、永琳の言う通りだぜ……」

反論しようとした魔理沙だが止める、彼女もわかっているのだ、自分のつまらない意地のせいで霖之助の助かる可能性を下げている事に

「わかっているなら早くバーンを連れて来なさい、大丈夫とは思うけど何かがあるかわからないからね」

「……わかったぜ！」

今自分のするべき事を理解した魔理沙はすぐに永遠亭を飛び出して行く

「鈴仙！急いで！」

「はい！師匠！」

魔理沙が出ていった診察室で永琳と鈴仙が治療を開始した

ナイトメアの異空間

「何故……何故お前がここに……!!」

目の前に現れた者にバーンは怒鳴る

現れた者、それは勇者ダイ、バーンの居た世界で最も力を持つ人間でありバーンを倒した者

「答えろダイ!」

ナイトメアの作り出した異空間に存在する筈の無いダイがいる事が理解出来ない
バーンは理由を問う

「……」

ダイは何も言わずバーンを見つめるのみ

「うっ!?……くっ……!?!」

ただ見つめるダイにバーンはうろたえる、答えを返さないからでは無い、見つめられたからでもない、うろたえたのはダイのその姿だった

(りゅ……竜魔人……)

ダイの姿は通常では無く竜魔人だった、ダイが竜の騎士としての力を全て解放した形態、その力は枷の無い全力のバーンを上回る程の力を持つ

(何故ダイがここにいるかはわからん、だがそれより今、余がダイと戦えば……確実に勝ち目は無い……)

今のバーンは枷を付けられ力を大きく落としている、枷の無い状態で自分より実力が上の相手に力を落としている現状では勝てる見込みなど全く無い

「……」

ダイが鞘から剣を抜き構える

「くっ……!?!」

バーンも構えるが焦りが表情に表れている

ダイが地面を蹴りバーンに斬りかかる、手刀で剣を受けたバーンにダイの拳が胴を打ちバーンを吹き飛ばす

「かつ!?!」

苦痛の声をあげたバーンにダイは直ぐ様接近してくる

「ぬう!?!……カイザーフェニックス!!」

炎鳥を放ちダイを迎撃する

「があっ!？」

カイザーフェニックスを突き破り、身を焦がしながら放たれた斬撃をまた手刀で受けたバーンをダイが蹴り飛ばす

「おのれえ……」

忌々しく呟いたバーンは弾幕を展開し一斉にダイに向けて放つ

「……」

「なにい!？」

ダイの無言の行動に驚愕するバーン、ダイは弾幕をその身で受けながら突進してきたのだ

「うおお!!」

突進してきたダイを手刀で迎え撃ったバーンの手刀はダイの腕に止められる

「ぐあっ!？」

胸に一閃を受けたバーンは堪らず足元にイオラを放ち距離を取る

「ぐうう……」

傷をベホマで治しながらバーンはダイに違和感を感じていた

(おかしい……ダイらしい戦い方では無い、あのような身を顧みぬ攻めをする奴では無い……それに……)

傷の治癒が終わったバーンは再び構えながら考える

（余がまだこの程度のダメージしか受けていない事がおかしいのだ……竜魔人の強さはこんなものではない）

ダイと攻防を繰り返すバーンの違和感は更に確実になっていく

（弱い……弱過ぎる……）

数度の攻防を経てバーンの違和感は確証に変わる

（これはダイでは無い……余りに弱過ぎる）

ダイの攻撃を捌きながら次にバーンはこのダイが何者かを考え始めた

（落ち着いて考えてみればダイが魔力の切れていたナイトメアの異空間に居る事が既におかしいのだ……そう、これはダイに似て非なる者……!!……そうか……ナイトメア……）

剣と手刀を弾き合い距離を取ったバーンが納得の表情で語り出す

「なるほどな、ナイトメア……悪夢という訳か、この異空間は取り込んだ者の悪夢を具現化し襲う様に出来ている訳だ」

「所詮は悪夢を魔力で精巧に具現化しただけ……見た目だけで中身は劣化か……」

斬りかかるダイを殴り飛ばす、落ち着きを取り戻したバーンはダイの悪夢と互角の勝負を繰り返す、先程までの劣勢は驚きと竜魔人への畏怖があったからこそその劣勢、全

てを理解したバーンは若干の余裕すらある

「ぐっ……」

ダイの剣がバーンの肩を斬る

(かと言つて一筋縄でいく相手でもないか)

そう、劣化していようと相手はダイ、簡単に倒せる相手では無い、ナイトメアの作り出す悪夢はオリジナルより劣化する、バーンに枷が無ければ簡単に倒せただろう、枷が付いている故にこの状況なのだ

「おおおおお!!」

「……」

雄々しく咆哮するバーンと無言のダイはまたぶつかり合う、互角かと思われた戦況は徐々にバーンが有利になっていく

「フフ……」

攻防の最中バーンが笑みを溢す

「フハハハハハ!!」

高笑いするバーンはしだいにダイを押ししていく

(愉快だ……あの畏怖すら覚えた竜魔人を……ダイを……余が打ちのめしている……!!)

ダイを拳で打ち、手刀で切り裂き、魔法で痛める、かつて自分に敗北をもたらした者を打ちのめす高揚感がバーンに声を出し笑わせる

「ククク……ハアッ!!」

拳で胴を打ち、怯んだダイの剣を持つ腕を掴み持ち上げる

「ハアアアア!」

胴を滅多打ちにし、最後に手を離すと同時に渾身の力を込めた拳で吹き飛ばす

「むっ……」

立ち上がったダイの剣の構えが変わる、逆手に持ち体勢を低くし背に剣を構える

「アバンストラッシュ……」

見覚えのある構えにバーンが呟いた、アバンストラッシュ、アバン流刀殺法の奥義とも言える技

「来い!その技を破り、お前と言う悪夢を払拭してくれよう!」

言葉と共に手刀を構え、手刀に全ての力を込める

「……」

「カラミティエンドオ!!」

アバンストラッシュとカラミティエンドがぶつかり合う、エネルギーの余波が稲妻の様に弾ける

「ぬううう……!!」

「……」

互いに押し合う二人、凄まじい衝撃音を響かせ最強の手刀と奥義はせめぎ合う

「ぐう……!?」

ダイの剣がバーンの手刀の肉に食い込む

ピシッ

同時にダイの剣にヒビが入った

「おおおお!!」

猛りと共に今一番の力を込めた手刀はダイの剣をへし折り、ダイの首の動脈を切り裂いた

「……」

首から血を噴き出しながらヨロヨロと立ち上がるダイ

「……もう充分だ」

ダイに指を差す

「消え失せろ！」

放たれたカイザーフェニックスがダイを炎鳥の中に包み、燃え上がらせる

「フフフ……」

燃えていくダイを楽しげに鑑賞するバーン

「ハーツハツハツハ!!」

やがて炎は収まり、燃え尽きたダイの灰が宙を舞う

「……」

宙に舞う灰を眺めていたバーンだがその表情は先程までの楽しげな表情では無かった

（そうだ、あれは決してダイでは無い……本物ではないダイに勝った所で何になると言うのだ……）

既に高揚感は失せ、その胸中に残ったのはただただ虚しさだけ……

（……本来ならもう会う事は無かった事……丁度良い機会なのだろう）

高く舞い上がる灰を見上げながら呟いた

「これを持つてお前という悪夢を忘れよう……さらばだ……ダイ……!!」

灰に背を向けると目の前に異空間の出口が出来ていた、悪夢を倒す事で異空間に出口

を作らせる構造なのだろう

出口と理解したバーンはその中へ入っていく、振り向く事無く……

「大丈夫かみんな！」

ナイトメアと交戦していた場所に戻った魔理沙が安否を確認する

「私と霊夢は大丈夫、チルノは気絶してるだけだ、ただアリスが少し怪我をしたよ」

チルノを介抱する妹紅が答える

「そうか……あのドロドロは？それとバーンは？」

「ナイトメアは逃げた、それで今バーンが追いかけてる、バーンなら大丈夫だろうさ……それより霖之助はどうだった？」

「永琳の所に連れていったけど絶対助かる訳じゃない状態なんだ……それでバーンの回復魔法を掛けて貰う為に来たんだぜ」

落ち込みながら話す魔理沙に妹紅が素っ気なく言った

「あつちだ」

「えっ？」

「ナイトメアはあつちに向かった、バーンもそこにいるだろうさ、早く行ってこい」
チルノの頭を撫でながら妹紅は笑った

「ついでに仲直りもな、私もお前が紅魔館に来なくなるのは寂しいからさ」

「……わかったぜ！」

嬉しきで一瞬涙が出そうになった魔理沙だがこらえて頷いた

「行ってくる！」

魔理沙は笑顔で飛んでいった、霖之助が危険な状態なのに笑うのは不謹慎だと自分でもわかってはいる、それでも笑顔は溢れてしまった

「ふう……やれやれ、ナイトメアはまだわからないけどとりあえず魔理沙とバーンは大丈夫そうかな」

問題の1つの解決を予感した妹紅は顔が緩む、そんな妹紅に霊夢が新たな問題を示唆した

「ねえ……あつちつて結構近い所に畑があるんじゃない？」

「畑え？……あつ!？」

問題に気付いた妹紅に冷や汗が垂れる

「太陽の畑……ヤバイな、下手すりゃ究極のサディスト妖怪に目をつけられるな……」

太陽の畑と呼ばれる場所に危険な妖怪がいる事を知っている妹紅はもしバーンとそ

の妖怪が出会った時の事を考え焦る

「私は関係無いからね」

「……祈るしか無いな、バーンが花を散らしたりしない事を……」

霊夢の言葉など聞こえないほど妹紅は不安だった、しかしその祈りが遅すぎた事を妹紅は知るよしも無かった……

?太陽の畑

「?!?!」

ナイトメアが苦しいのか金属を擦り合わせた様な声で哭き、液体を暴れさせる

その直後、液体が膨れ上がり一気に爆ぜた

「フン……」

異空間から脱出したバーンが鼻をならしダメージで嘶くナイトメアを睨む

「いつまでおぞましい姿を見せるつもりだ?不愉快だ……消えよ!」

力に任せた魔力で強引にナイトメアの液体をコアごと球体の形に圧縮する、逃げようと魔力を放つが脱出出来ない

「無駄だ、こうなってしまうてからではもう遅い、コアごと潰してやろう」

更に魔力を高め徐々に球体を圧縮していく、ビシビシとコアの割れる音が聞こえナイトメアの最期を予感させる

「砕け散れ！」

魔力を一気に高め、手に力を込め握り潰す動作を行おうとする

「ねえ貴方」

握り潰す瞬間、背後から声を掛けられる

「……」

球体を維持したまま振り返ったバーン、そこには緑髪の女性が立っていた

「何か用か？」

バーンが尋ねると女性はニコリと笑顔を作り手に持つ傘をバーンに突き立てた

「!？」

傘から放たれた弾幕がバーンに命中する、ナイトメアに注意を向けていた事と女性の虚を突いた攻撃がバーンの反応を遅らせたのだ

「貴様……」

不意打ちにダメージを受けたバーンは女性を睨む、だがバーンの睨みを受けても女性は笑顔のまま

「へえ……頑丈なのね貴方、まあ良いわ、花畑を荒らしたのは貴方達？」

「仕掛けておいて聞くのか？ 順序が逆であろう？ 女……」

「どう見ても貴方達が犯人でしょうからね、体が頑丈で良かったわね」

不意打ちに怒りを滲ませるバーンだが女性も負けてはいない、笑顔の中に殺意が見えるのをバーンは見逃さなかった

「この兵器を仕留める為なら花など塵芥に過ぎん存在……寧ろ感謝して欲しい所なのだがな、余がコレを仕留めねば花所では無かったのだからな」

「塵芥……？」

バーンの発言に女性の表情が変わった、笑顔は消え失せ、明確な殺意を全面に押し出しバーンを睨みつける

「……この子達はね、私にとって家族であり親友でもあり恋人でもある存在なの、それを散らされて更に塵芥なんて言われた私の気持ち……貴方にわかるかしら？」

強烈な妖気と威圧感をバーンにぶつける、並の妖怪や人間なら怯え、竦む程の物なのだが相手はバーン、強烈な妖気と威圧感にも全く動じない

「わからんな、余に家族や恋人など居ないのでな、ましてや友など……」

途中、バーンの言葉は途切れる、何か思い当たる事があり言葉を途切れさせた
「そう……ならその身に刻んであげる……この子達の無念を……私の怒りを……」

言葉の終わりと同時に傘からビームが放たれた

「ちっ……」

避けたバーンに高密度の弾幕が放たれ逃げ場を無くす

「イオナズン！」

バーンの爆発呪文が弾幕を消し去る

「……何それ？」

弾幕は全て消し去れず一部だけを消し去る、爆発のハデさの割に威力の伴わない魔法
に女性は呆れた様に言う

（ナイトメアを抑えたままではこれが限界か……）

魔力に耐性のあるナイトメアを強大な魔力で強引に抑えているせいで他に回す魔力
が足らず威力が激減している、その為イオナズンといえど弾幕の一部を消すだけに留
まってしまっている

「頑丈なだけで大した事無いのね、良いわ、頑丈に生まれた事を後悔するようにいたぶつ
て殺してあげる、良かったわね嬉しいでしょ？」

「ぬっ……!!？」

激しくなる攻撃にバーンは防戦を余儀無くされる、弾幕を弾き、消していくが被弾が増えていく

(ちい……攻め方が上手い、それに弾幕にも充分な力を込められている、名のある妖怪か)

ハンデもあるが女性の熟練した攻め方と力に強者だと認識する

「弱いわねえ……どう？じわじわいたぶられる気分は？少しは私の痛みがわかったかしら？」

弾幕を放ちながら楽しそうにバーンに声を掛ける

(調子に乗りおって……)

怒るバーンだが状況は変わらない、被弾が増え、バーンの体に鈍い痛みを蓄え始める
「じゃあそろそろ終わらせるわ、あー！そうそう、冥土の土産に教えてあげる、私の名前は風見幽香、誰に殺されたか地獄の閻魔に聞かれたら答えると良いわ」

風見幽香と名乗った女性は弾幕をバーンの周囲に大量に展開する、先程より更に高密度により力を込めて

「くっ……」

とても消しきれない量の弾幕を目にしバーンに焦りが生まれる

「じゃあね……」

幽香の合図で一斉に弾幕がバーンに注がれる

「うおおおお……!?!」

全ての弾をその身で受けるバーン、おびただし量の弾幕がバーンに集中し大爆発を起す

「ぐはっ……」

煙の中、大ダメージを受けながらもバーンはナイトメアを離さなかった

(今の内にコイツを始末せねば……)

幽香より先にナイトメアを片付けようと魔力を高めた瞬間、煙を払い幽香が目前に現れる

「!!」

「頑丈な貴方があれぐらいで死ぬわけ無いじゃない、でもこれで終わりね」

傘をバーンに構え、極大のビームを放つ

「うおおっ!?!」

ビームに飲まれたバーンは思わずナイトメアを抑える魔力を弱めてしまう

「!?!」

バアンと言う音と共にバーンの魔力拘束を外したナイトメアが地面に落ちる

「ちい!」

再びナイトメアを拘束しようとしたバーンを見た幽香はビームの威力を更に高める
「くっ……」

威力の上があったビームのせいで思うように魔力を操作出来ないバーンの目の前でナイトメアはかなり弱った動きを見せゆつくりと地面と同化し逃げてしまう

「……呆れるくらい頑丈ね、まだ生きてるなんて」

ビームの照射を止めた幽香

「……」

うつむき、無言のバーン

「あの变なのは逃げちゃったわね、でも安心しなさい、私がちゃんと壊しておくから、だから貴方は安心して死になさい」

再び傘を構えた幽香は力を集中させる

「!？」

その傘はバーンに掴まれる

「調子に乗るなよ……」

凄まじい形相で幽香を睨みつける

「うっ……!？」

(なんて力……)

掴まれた傘越しにバーンの力を感じとる幽香、ナイトメアを拘束する魔力が戻った
バーンは魔力をたぎらせ幽香を威圧する

「かはっ……………!?!」

バーンの掌から放たれた掌圧で幽香は後方に飛ばされる

「お前のせいで破壊出来たナイトメアを逃がしてしまった……………そして余に対する数々の
狼藉……………覚悟は出来ているのであろうな？」

「……………狼藉? 当然の行為よ、貴方がした事を私は許さない、覚悟するのは貴方じゃないか
しらっ?」

「ならば問答は無用……………」

「その通りね……………行くわよ!」

過去と決別し、ナイトメアを後一步の所まで追い詰めたバーンだったが風見幽香の攻
撃により逃がしてしまう

逃がしたナイトメアと風見幽香との出逢い、これがバーンの運命をまた終着へと導く
……………

第16話

和解

「ハアッ！」

「フン……」

二人が放つ弾幕がぶつかり合う

「ちっ……」

力負けする弾幕に幽香が舌打ちし、弾幕を回避しながら後方に下がる

（侮りは禁物ね）

一度の接触でバーンの真の実力を感じた幽香は気を引き締める

（あの頑丈さに加えてこの攻撃力……少し癪だけど搦め手でいきましようか、力を借りるわよ）

作戦を決めた幽香が弾幕を撒き散らしながら高速で動き始める

（何か仕掛けてくるな）

先程と変わらぬ弾幕を放ってくる幽香に直感ではあるが感付くバーンは警戒する

「せめて余を楽しませるがいい……」

迫る弾幕に弾幕で迎え撃つ、幽香の弾幕を振り伏せた弾幕が幽香を襲うが華麗に回避

する

「そこだ！」

回避する幽香に向かいメラを高速で放つ、回避の間に合わないタイミングで放たれたメラは幽香を正確に捉えた

「フン……ハッ!!」

メラを傘で弾き幽香は更に飛び回り弾幕を張る

（ほお……アレに反応するのも驚きだが余のメラを軽く弾く身体能力、大言を吐くだけはあるようだな）

バーンも幽香の力量に関心を示し弾幕を処理する、だが弾幕と同時に放たれたとても小さい物体が足下に埋まったのをバーンは気付けなかった

「むっ!？」

突然、幽香が弾幕を掻い潜りバーンに突進してくる

（何か仕掛けて来ると思ったが……身体能力に任せた突撃か）

「甘いわ！」

幽香をギリギリまで引き付けたバーンは暗黒闘気を圧縮し闘魔滅砕砲を放つ

「!？」

その時足に異変を感じる

(花の……鳶!?)

足に絡まる鳶に反射的に注意を向けた瞬間、暗黒闘気は発射される

(これが狙いか!)

鳶に注意を向けたせいで僅かに暗黒闘気の狙いが狂う

「掛かったわね! 貴方程の者なら些細な事でも注意を払う……僅かに逸らす……それで……充分よ!」

闘魔滅碎砲を身に掠めながら回避しバーンに接近した幽香は傘を捨て殴り掛かる

「くっ……」

怯むバーンに更なる殴打で反撃の隙を与えない

「ハアアアッ!」

ゼロ距離で放たれた弾幕が爆発を起こし砂埃を巻き上げバーンの様子を隠す

「ふう……呆れるわね本当に……頑丈さは鬼以上かしら?」

爆発の瞬間に後方へ下がった幽香が砂埃から姿を現すバーンに面倒そうに呟く

「驚いたわ……傷ついているとはいえ余にここまで善戦出来る者がいるとはな、褒めてやろう風見幽香……よくやった」

埃を払いながら賛辞を送る、実際、少々の傷を負っていた所で並の妖怪ではバーンに命を掛けても善戦すら出来ない、力を上げた魔理沙や妹紅でようやく善戦出来る程の力

量を持つバーンに幽香は渡り合っているからこそその賛辞

「……舐められたものね私も」

殺そうとしている相手に褒められる屈辱が幽香を苛立たせる

「死ぬまでイジメてあげるわ……」

傘を拾った幽香の宣言にバーンは目を閉じ返した

「いや……お前ではもう余に傷を付ける事すら叶わん」

「根拠の無い強がりには言わない事ね……その男前の顔を吹き飛ばしてあげる」

幽香が飛び出しバーンの顔面に殴り掛かる、拳が触れる刹那、バーンの体を魔法力が包む

ガアン！

金属を叩いた様な音を響かせ幽香の拳はバーンの顔面を歪める事無く止まる

「!?」

続けざまに殴打を繰り返すが金属音を響かせるばかりで無防備のバーンを動かす事すら出来ず逆に殴る手を痛める

「……何をしたの？」

後退した幽香が手を労りつつ聞いた

「スカラと言う呪文を使用した、これは対象の防御力を高める呪文、対象の防御力が高い程その効果は高まる、余に使えばこの通りオリハルコン以上の防御力を得る事が出来る」

「……小癩な真似を」

悠々と説明するバーンに幽香の顔が怒りで歪む、自分を前に余裕を持つバーンが気に入らないのだ

「膂力に自信がある様だったのでな、普段はこのような呪文を使わずとも充分なのだが……お前の反応が見たくてな、どうだ？ 自慢の力が効かぬ気分は如何かな？」

「……殺す」

バーンの馬鹿にするかの言葉に完全にキレた幽香は妖力を全て開放しバーンを睨みつける

「ハハハ！ 更に怒らせてしまったか、だが余を殺すなどと大層な事をほざいた割にはその程度か」

「舐めるなあ!!」

バーンへ突進し殴り掛かる幽香

「がっ!？」

幽香の拳より先にバーンの掌底が当たる

「かつ……はっ……!?!」

体勢を立て直し動き出そうとした初動を抑えたバーンの掌底が幽香の腹を打ち前屈みになる

「このっ……うがつ?!」

反撃しようと頭を上げた所を掌底が襲い、顎を打たれ、飛ぶ

「この……!!」

着地した幽香は口から流れる血を拭いながら睨む

「わかったか?これが実力の差だ、身体能力においても余の方が上だ、諦めろ」

「……諦めろですって?黙ってやられるとやりたいの?笑えないわね」

差を見せ付けてなお戦う気の幽香に数瞬間を置いてバーンは話し出した

「……お前の力と言うプライドを砕いた、わかっておるのだろうか?勝ち目は無いと」

「……」

幽香は肯定も否定もしない、だがその胸中にはバーンの言う通り敗北を感じていた

(確かにね……でもただでは終わらないわ!)

一矢報いようと決意する幽香にバーンが告げた

「殺しはせん、そのプライドを砕いただけで余は満足よ」

「…………何が言いたいのかしら?」

予想はついている、だが聞いてしまった

「許してやる…………と言っているのだ、良かったな、余が寛大な心を持つ者で」

「…………許…………す?私を…………?」

許してやる、その一言が幽香に最後の一線を越えさせた

「フザケルナアアアアア!!」

理性を飛ばし、限界を越えた妖力を爆発させる幽香、リミッターを怒りで外した幽香の妖力は離れた花に干渉し瞬時に枯らせてしまう

「…………花が枯れてしまっているぞ?」

声を掛けるが幽香に返事は無い、一心に妖力を高め続けている

そこへ

「何だ!どうしたんだぜこれは!」

魔理沙がやってくる

「幽香!?!いったい何がどうなってるんだぜ!」

状況の掴めない魔理沙だがただ事ではない雰囲気慌てる

「魔理沙か……何をしに来た？」

「バーン！それよりこれは!？」

「すぐに済む、下がっている」

魔理沙を下がらせたバーンは幽香に向かい歩を進める

「うう……!!」

迫るバーンに傘を突き立て妖力を集中させる

「なんて力だ……山くらい軽く吹き飛ばせるぜあれは……」

傘に集まる力に戦慄する魔理沙をよそにバーンは更に歩を進め幽香の目の前に立つ

「ガアアアア!!」

傘からビームが放たれた瞬間、フェニックスウイングで傘を弾き銃口は空に向かされる、巨大なビームは雲を突き抜け空に光の柱を作り出す

「アアアアア!!」

第二射を放とうと妖力を再び傘に集め出す幽香の額に指を当て唱えた

「ラリホーマ」

眠りを誘う呪文を幽香に掛ける、本来なら幽香程のレベルの者にラリホーマはかなり効きづらいが幽香に与えたダメージと理性を飛ばした事による抵抗力の減少、そして今のビームで力を落とした幽香には効果的だった

「うっ……うっ……!？」

ふらつきながら妖力は徐々に収まっていく、そして妖力が完全に収まった所で幽香は倒れた

「眠らせたのか……何してたんだよ……って原因はコレか……」

バーンに近寄って来た魔理沙が花畑にあるイオナズンの爆発痕を見て納得する

「その原因を作った元凶はお前であろう？」

「ああ、ナイトメア……だったな……あ！そうだった！それどころじゃないんだ！バーン！香霖……霖之助が怪我をしたんだ！助けてくれないか！」

「……」

反省より先に霖之助を助ける事を優先する魔理沙の頼みにバーンは応えない

（ダメか……）

落胆し顔を下げた魔理沙は振り向こうと足を動かす

「……余に掴まれ、場所は永遠亭だろう？」

「バーン！」

バーンの承諾にとびきりの笑顔を向け、手を掴む

「幽香はどうするんだぜ？」

地面に横たわる幽香を見て魔理沙が聞いた

「放っておけ、ダメージも大きい物では無い、直に目を覚ますだろう」

「そうか……わかったぜ」

そして幽香を置いて二人はルーラで永遠亭に向かった

永遠亭

永遠亭に着いたバーンは早速 霖之助にベホマを掛ける

「大丈夫なのか!？」

バーンの回復魔法の効果を知ってはいるがそれでも不安は拭えない魔理沙

「安心しろ、死ぬことは無い」

霖之助の傷が完全に治癒したのを確認したバーンの言葉が魔理沙を安堵の溜め息をつかせる

「良かった……」

魔理沙の安堵の言葉に、治癒を見ていた永琳がバーンに話し掛けた

「便利ね……医者要らずじゃないかしら? 貴方が医者なら私の商売上がったね」

嫌味たらしく話す永琳、彼女に悪意は無い、医者としてのプライドなど長き時の果てに昇華されている彼女は助かるなら医者である私が必ず治す必要は無いと思っっているのだ、だからこれはジョーク

「余が治せるのは肉体の傷のみだ、病や精神的な物は治す事は出来ん」

「あら……じゃあ私の商売はまだ安泰のようね」

フフンと鼻を鳴らした永琳はいつもの様に依頼された薬の調合を始める

「用は済んだ……帰らせて貰う」

霖之助の傍にいる魔理沙に告げるとすぐに永遠亭を出る

「バーン！待ってくれ！」

ルーラを唱えようとしたバーンを魔理沙が引き止めた

「どうした？」

いつもと変わらない表情で問う

「ありがとうバーン！香霖を助けてくれて……」

「よい……たまには褒美をやらねばならんからな」

「何だよそれ……」

二人は苦笑する

「あのさ……バーン……その、悪かったよ……お前と喧嘩する気なんて無かったんだ……ただ私達をオモチャみたいに思ってるんだと感じてさ……」

謝罪と共に理由を語る、自分がオモチャの様な扱いをされたら誰でも怒るのは当たり前だ、それが友人と思っていたバーンだから余計に

「……余も言い方が悪かった」

頭を下げる魔理沙に近付きながら話す

「確かに余は弱者を倒すのに愉悦を感じている、お前達に対しても同じだ……」
「やっぱりそうなのか……」

裏切られた思いが魔理沙の目に涙を浮かべさせる、帽子でバーンからは見えないが肩が震えているのはバーンにはわかる

「だが……それだけでお前達を鍛えたりはせん、何故だかわかるか？」
「わからねえよ……!!」

下を向いたまま搾る様に出した言葉、魔理沙は口論はすまいと誓っていたのに叫んでしまった

「私は!!お前の事を友達だと思ってた!なんで……なんでなんだよ……」

二人の時は止まる……そして、バーンの一言で時は動き出した

「わかっておるではないか……そうゆう事だ」

「えっ……？」

驚いた魔理沙は顔を上げバーンを見つめる

「余もお前と同じ思いだと言ったのだ」

「えっ……って事はつまり……？」

「……二度言わせるな」

魔理沙の涙を指ですくいながら語るバーンの表情はいつもより少しだけ柔らかい、共に過ごしていた者だけがわかる程の小さい……小さい変化

「へへ……わかったぜバーン！」

鼻を吸る笑顔の魔理沙、とても……とても良い笑顔で笑った

二人のわだかまりは解けたのだ、その証拠に二人は笑い合う

「魔理沙……一つ、頼みがある」

「そりゃあもちろん良いけど……珍しいな、バーンが頼み事なんて……何だぜ？」

頼み事の詳細を聞いた魔理沙は嬉しそうに承知し、バーンが帰った後、霖之助を永琳に任せ飛び立っていった

「はあー！散々な目にあつたぜ……」

山道を歩くにとりが呟いた、巻き添えを食らわずに済んだにとりはテクテクと帰り道を歩く

「死ぬかと思ったけどなんとかなったな……霊夢がいたからなんとかなってるだろ」

一人呟きながら歩くにとりは突然足を止め耳をすます

「なんか……聞こえるな……葉音？動物にしちやデカイ音だな……」

音のする方へゆっくり向かうにとり、音が段々近付いていき、木の陰から覗く

「!!」

慌てて顔を隠し木に寄り掛かる

（ゲッ!?さっきのドロドロじゃねえか！仕留め損なつたのかよ！）

にとりが見つけたのはナイトメアだった、気持ちを落ち着かせもう一度様子を確認してみる

（……コアがポロポロ……修復してるのか……なんにせよ危険だね、退散退散）

ナイトメアに気取られぬ様にその場から逃げるにとり

(つて事は作つといた方が良さそうだな、フム……一肌脱いでやるかね)

そうしてにとりは妖怪の山へ帰っていった

太陽の畑

「……ッ!？」

目が覚めた幽香は飛び上がり周囲を確認する

(あいつは……いや、今は夜……)

身構えていた手を下ろしもう一度周囲を見る

(負けたのね……負けて気絶させられていたから昼間から夜に……)

自分の敗北を悟る

「……クソッ!!」

拳を握り締め怒りに震える、強者たる自負が、プライドが敗北を受け入れがたい物として幽香を震わせる

(許さない……絶対に……!!)

バーンへの復讐に燃える幽香、その幽香に背後から声が掛かった

「おー！起きてたか、間に合って良かったぜ」

「魔理沙……」

話し掛けたのは魔理沙、手に大きな袋をいくつか持っている

「……何の用？消えてくれないかしら？」

顔見知りの魔理沙だが今は誰とも会いたくない

「まあそう言うなよ、ほら！コレ！バーンからだ！」

手にしている袋を差し出す

「バーン……？」

「お前を倒した奴だよ、良いから開けてみろって」

自分を倒した者の名を聞いてムツとするが袋を手にし開けてみる

「これは……花の種……」

袋に詰まっていたのは大量の花の種、何十種類もの花の種を魔理沙は持ってきていたのだ

「バーンから頼まれたんだぜ、金を出したのは私だけだな！」

バーンが魔理沙への頼み事とはこの事だった、当初は紅魔館につけておけと言ったのだが霖之助の治療のお返しにと魔理沙は自腹で花屋から大量の花の種を購入し幽香の

所に持ってきたのだ

「……憐れみのつもり？」

敗北した上に生き永らえ、そして贈り物、プライドの高い幽香にはそう感じられ魔理沙を睨む

「そんなんじゃないぜ、あいつはさ……悪いと思っただろ、お前の大事にしている花を散らしてしまったのをさ」

「……」

聞き入る幽香に魔理沙は続ける

「あいつはさ、不器用なんだよ、だから私とも喧嘩したしお前とも殺しあった……照れ臭いんじゃないかなあ……まっそうゆう奴なんだよ幽香」

へへっつと笑う魔理沙

「でもあの子達はもう戻ってこない……種をやるから許せと？じゃあ私はこの怒りは誰にぶつければ良いの？」

それでも復讐を諦めない幽香

「あいつさ……強かっただろ？」

魔理沙が聞いた

「……それがどうしたのよ？」

突然の質問に意図の掴めない幽香は問い返す

「勝つまで挑むと良いぜ！」

「……何言ってるの？」

訳のわからない事を……と言った顔で見る幽香

「だから気の済むまでバーンに挑んだら良いんだよ、あいつは逃げない、何度でも挑めば良いんだぜ！私達はそうしてる！」

「……」

魔理沙の意図を理解した幽香は暫し考える

「……そこまで気楽には出来ないわね」

勝つまで何度も挑む、そんな遊び感覚で気楽に挑むには幽香のプライドは高過ぎた

「そっか……じゃあどうするんだぜ？」

「……今回の事は保留にしようとしてあげる、でもいつか必ず報いを受けさせるから覚悟しておく事ね」

「アハハ！お前も不器用だよなあ……わかった！伝えておくぜ！じゃあな幽香！」

飛びさつていく魔理沙を見送り花の種を持ち畑を歩く

「!!」

幽香は見つけた、自分の妖力で枯れた花を

「ごめんなさい……」

もう答えてはくれないそれに頭を下げた

「私も人の事言えないわね……」

枯れた花を供養しながら1人呟いた……

紅魔館・バルコニー

「……」

1人椅子に座るバーンは物思いに耽っていた

(力こそが全てを司る真理……正義……そう、そうなのだ……だが……)

自身の信条とも言える考えを思いながらバーンはかつて聞いたある言葉を思い出していた

(力が正義……常にそう言っていたな……バーン!!)

(これがッ!!これがッ!!これが正義かつ!!?より強い力でぶちのめされればおまえは満足なのかッ!!?)

(こんなものがっ……!!こんなものが正義であつてたまるかっ!!)

それは竜魔人となりバーンを越えた力を持ったダイの言葉、その言葉はバーンに深く残る否定の言葉

「……」

目を閉じ暫し考える

(今でもその考えは変わらん……だが……)

目を開き月を見上げる

(お前が仲間を守ろうとした気持ち……今なら少し理解出来る)

スツと立ち上がり部屋に戻る、そして夜の静けさだけがそこには残った……

第17話 紅魔館籠城戦

「妹紅ー！居たー？」

「こつちは手掛かり無しだ親分」

ナイトメアと幽香との戦いから翌日、ナイトメアを逃がした事を知ったチルノと妹紅は大妖精と3人で捜索に出ている

「どこも襲われて無いみたいだな、早いとこどうにかしないと」

「そうですね、私も頑張つて探します！」

「大丈夫よ！見つけたらあたいがぶっ飛ばしてやるから！」

「良く言うよ、油断して1回休みになりかけたくせに」

「なんだとー！親分に向かつてー！」

些細な言い合いをしながら3人は休憩する

「1回、紅魔館へ戻るか、人里は慧音に言つといたからいざとなつたら隠せるし他の所はそんなすぐにやられる奴はいないだろうしな」

「そうね、じゃあ戻る途中にミスティアの所でごはん食べない？あんたの奢りで」

「また私の奢りかよー！……良いけどさ……」

「決まりね！行くわよ！」

「御馳走になります妹紅さん」

「大妖精は良い子なのになあ……それに比べてヒデエ親分だよ……子分は財布じゃあないんだぜえ……」

「なんか言った!?!」

「いーえ、なんでもございませぬ親分、私が奢らせて貰います、さあ行きましょう」

3人は紅魔館に戻る前に食事に向かった

紅魔館・図書館

「貴方は探しに行かないの?」

魔導書を読むバーンにパチュリーが聞いた

「余から探すのは性に合わん……博麗の巫女もいる、あいつらでも何とかなるだろう、いざとなれば余が出向く」

「そう、なら少し付き合ってくれないかしら?」

「どうした?」

「チエスよ、たまには息抜きも良いでしょ？」

「良いだろう、手加減はせんぞ？」

「望む所よ！」

チエスを始めた二人、憩いの時間が始まった

霧の湖の側の森の中

「はあ……はあ……!!」

木に寄り掛かり少女息を切っていた

「はあ……はあ……しつこいな！」

何やら追われている様子

（このままじゃいずれ殺される……どうしたものか……）

追っ手をいったん撒いた少女が打開策を考えながら空を見上げると頭上を誰かが過ぎ去っていった

「あれは魔理沙……」

通り過ぎたの魔理沙を目で追う

（紅魔館へ向かったのか……いや！そんな事より逃げないと！）

足を一步踏み出した少女はそこで止まる

(待てよ……確か紅魔館にはバーンってとんでもなく強い奴がいるって新聞で読んだな、あの魂魄妖夢に勝つたり眉唾だけど八坂神奈子にも勝つたらしい奴……)

体を紅魔館の方へ向ける

(そんな強い奴に取り入れれば安全かもしれない……このまま逃亡生活をするよりは一か八か試してみる価値はある……それに上手くいけば……)

「……よしー」

少女は紅魔館へ向け走りだした

紅魔館・図書館

「……チェック」

「くっ……」

バーンのチェックにパチュリーが顔を歪めながらキングを逃がす

「期待しても無駄だぞ？チェック」

「貴方のミスを待つ……淡い期待だけど可能性はゼロではないわ」

またキングを逃がす

「……今、ゼロになった……チェックメイトだパチュリー」

「また負けた……3回やって全敗……強すぎよバーン……」

項垂れるパチュリー、チェスでも勝つことは出来ない、魔法勝負程の圧倒的な実力差があるわけではないがバーンには1度も勝てなかった

「フフフ……お前も中々だったぞ、輝夜ほどではないがな」

「遊びでも勝てないなんて、貴方と居たら自信無くしちゃうわ」

少しふてくされてパチュリーが話した直後に図書館のドアが開き魔理沙が入ってくる

「いらつしやい魔理沙……どうしたの？浮かない顔しちやつて？」

「ちよつと香霖に説教を食らつてさ……」

落ち込む魔理沙が答えた、目を覚ました霖之助を見舞いに行つた魔理沙だったがナイトメアを勝手に持ち出した件についてお説教を受けたのだ、2時間程……

「フフ……しようがないわよ、貴方が悪いんだから」

「わかつてるぜ……でも2時間は長すぎだぜ……」

椅子にドカッと座り机に置いてある茶菓子を食べる

「チルノと妹紅はまだ帰ってないのか、フランは寝ててそんで二人はチェスと……」

「全敗だけどね」

「ふーん……」

魔理沙はチエスの事は良く知らないのもあるが相手がバーンなら当然か……と言つた顔で茶菓子を食べる

「面会希望者ですバーン様」

突如現れた咲夜が客人の来訪を告げる

「誰だ？」

「……鬼人正邪です」

「鬼人正邪……確か余の来る少し前に異変を起こした首謀者だったか」

「その通りですバーン様」

「まだ生きてたのかあいつ」

茶菓子を食べながら魔理沙が呟いた

「とつくの昔に退治されたと思つてたんだが……しつこい奴だぜ」

「知つているのか魔理沙？」

「ああ、私と霊夢で解決した異変だからな、会うのは止しといた方がいいぜ？ 大方バーンを利用しに来たんだろうさ」

「私も面会はされない方がよろしいかと……」

咲夜も同意見だった

「確か……大した力は持っていないが幻想郷に革命を起こそうとした者……だったな、
フム……」

暫し考えたバーンは咲夜に伝えた

「会おう……連れてくるがよい」

「本気ですか!?!」

魔理沙と二人で論じたのに会うと言うバーンに咲夜は驚いた

「しかし……」

「何度も言わせるな、連れてくるのだ」

「……わかりました」

食い下がって見たが無駄だと悟った咲夜は図書館の出口へ歩き出す

(お嬢様にも伝えておいた方が良さそうね……)

そう考えながら客人を迎えに行った

「お招きして頂き感謝します！私、鬼人正邪と申します大魔王様」

「……余がバーンだ、鬼人正邪よ、余に何用だ？」

跪く正邪にバーンが問う

「……貴方様も知っておられる様に私は幻想郷の民に追われております、そこで大魔王様の御力で守っては貰えないかと思ひ面会を希望しました」

「……いつもの口調でよい、それより正直に答えよ、お前の邪心に余が気づかぬとでも思ったか？」

バーンは正邪が本当の理由を語っていない事を見抜いていた

「……もうバレたか……流石大魔王と褒めてやりたい所だよ」

許しを得た瞬間にいつもの軽い口調に戻る

「余を舐めるな……お前は幻想郷に殺害を許された存在……灰になりたくなければ正直に答えるのだな」

威圧を含んだ眼差しで正邪を睨む

(なんて迫力だよ……化物め……)

怯む正邪は間をおいた後話し出した

「あんたの力で幻想郷を変えたい、弱者がより良く生きれる為に強者を排し、弱者の理想

郷を作る、力を貸してくれないか？」

正邪は正直に語った、未だに幻想郷をひっくり返すつもりなのだ、以前は打出の小槌で、今回はバーンで

「ふざけんな！ 帰れバカヤロー！」

一緒に聞いていた魔理沙が叫んだ

「……あんたには聞いてないよ、黙ってな」

「んだとお!! またぶつ飛ばされたいのか!!」

正邪の眼前まで近付き睨み合う

「よせ魔理沙」

バーンが魔理沙を下がらせる

「ちっ……さっさと追い返したら良いんだぞこんな奴」

不機嫌を前面に押し出し椅子に座る

「……それで、どうかしら？」

「……下らんな」

目を閉じたバーンが答えた

「小物の考えそうな事よ……そこまで強者が邪魔ならお前が強者を倒せばよいではないか」

「私は弱い妖怪なんだ……そんな事は無理だ……」

「ならば鍛えよ、数百、数千年を掛けてでも力をつければ良い筈だ、それすらせずに他人にすぎるな愚か者！」

バーンの一喝で正邪はまた怯む

「確かに……確かにあんたの言う通りだ、でも……お尋ね者の私には時間はおろか場所も……」

「フム……なるほど場所か……」

正邪の返答に思考している所にレミリアが咲夜と共に現れる

「バーン！お尋ね者を紅魔館に入れてどうゆうつもり？」

バーンを見るなり食い掛かるレミリア、彼女からすれば正邪は厄介事の種でしかない
「今、紅魔館にもコイツを探してるハンターが訪ねて来ているわ！美鈴が抑えてるけどしつこいみたいだからおそろく紅魔館に入る所を見られてたのね、面倒になる前にさっさと追い出して！」

「まあ待てレミリア」

レミリアを抑え暫しバーンは考える

「レミリア、少し余興に付き合ってくれんか？」

「……何をする気？」

「それを言っではつまらん、どうだ？付き合ってくれるか？」

詳細を話さないバーンにレミリアは苛つきながらぶつきらぼうに答えた

「わかったわよ！何をやるのよ！」

「よし……咲夜、美鈴を中へ入れろ」

レミリアの承諾にバーンは動いた、まず美鈴を呼び戻す、レミリアを見た咲夜はレミリアの領きに応え時を止め美鈴を連れてくる

「ですから今確認中でして……ってアレ？なんで私中に入れられたんですか？」

美鈴の疑問が響いたと同時にバーンは魔力を強く拡散させる

「魔力が紅魔館を……まさかバーン！」

気付いたレミリアが叫んだ、パチュリーも魔理沙も気付いた様子

「紅魔館に魔力の防壁を張った、これで余程の事が無い限り限り紅魔館に侵入は不可能だ」

「何やってんのよ！ハンターや賞金稼ぎ達を敵に回すつもり！」

「そうだが？」

驚くレミリアにバーンは軽く答える、他のメンバーは事態の深刻さに汗をかいている
「そうだが？じゃないわよ！どうするのよ！すぐに大勢のハンター達が紅魔館を囲むわ
！これじゃ私達幻想郷に喧嘩売ってるようなものよ！」

捲し立てるレミリアに余裕のバーンは笑みを浮かべつつ告げた

「かつて幻想郷に紅霧異変をもたらしたレミリアも一度退治されれば二度目は恐ろしいか……」

「……何ですって?」

バーンの一言にレミリアがピクリと反応する

「ちよつとレミイ落ち着いて……」

危険を感じたパチュリーが声を掛けるが

「すまなかつたなレミリア、そこまで恐怖を感じているとは思わなかつたのだ、恐怖は吸血鬼の誇りをも凌駕するとはな……すぐに防壁を消そう」

バーンが追い打ちを掛けた

「私が……恐れていると……?」

その冷徹な瞳で睨み付ける

「違うのか?」

「ちよつとレミリア!落ち着けて!」

悪い予感がした魔理沙がレミリアを抑えようとするが……

「良いわ、上等じゃない……」

レミリアは止まらなかつた

「あちゃー……どうなつても知らないぜ私は……」

止められない事を悟った魔理沙は呆れて茶菓子を食べ始めた

「えーと……アレ？ 私おいてけぼり？」

トントン拍子で進む事態に正邪はついていけず呆然とするばかり

「このままじゃ戦い辛いわね……ハッ！」

レミリアから出された紅い霧が外へ放たれる

「紅魔館から半径2キロほど霧を放ったわ、これで私も戦えるわ、咲夜、フランを起こして来なさい」

もう諦めた咲夜がフランを起こしに行く

「チルノと妹紅と大妖精はまあ良いわ、パチエー！ 魔理沙！ 戦闘の準備をしなさい！」

「はあ!? 私はやらないぜ！ 協力なんて誰がするか！」

既に戦力の1人として数えられている魔理沙はこれを拒否

「わかってないわね、バーンが防壁を張って私が霧を出した、もう紅魔館は敵として見られてるのよ？ 紅魔館にいる貴方も同じよ」

「フン！ 話せばわかってくれるぜ！ 無理矢理手伝わされたとか言ったら大丈夫だぜ！」

そう言いながら出口に向かい歩き始めた

「ねえ正邪……貴方を追っているハンターって聞く耳持たない冷酷な奴等って話だけど
そうなの？」

「あ、ああ……最初は投降を勧める奴と半々くらいだったんだけど私が反撃したりしてたらいつの間にか全員……今じゃ問答無用で殺しにくるよあいつらは……例え魔理沙でも敵と認識したら何も聞いてくれないと思う」

「……ですって、出ていっいたら攻撃されちゃうわねえ……困ったわねえ魔理沙？」

ニヤリと笑いながらプルプル震える魔理沙の背中に聞く

「あーもう！わかったよ！好きにしゃがれ！」

観念し戻ってきた魔理沙が椅子にドカツと座る

「どうしたのお姉様あ……」

そこへ寝起きのフランが現れる、まだ寝てから少ししか経っていないので眠そうに目を擦っている

「喜びなさいフラン、我等吸血鬼の力を今一度知らしめる時が来たのよ！」

「……!!」

レミリアの力を知らしめると言う言葉に戦いを予感したフランの目は見開いた
「思いつきり暴れて良いのお姉様!?!」

眠気が吹っ飛んだフランが目を輝かせながら聞く

「ええ……存分にその力を振るいなさい、ただし！能力は無しょ？」

「わかってるよお姉様！やったー！」

楽しそうにはしやぎ回るフランに笑みを向けた後、バーンに向き直す

「役者は揃ったわ、それで……どうするのかしら？ 外の奴等蹴散らすの？」

「まあ待て……余の読みではそろそろ……」

バーンの言葉の終わりと同時に大音声が紅魔館に響いた

「紅魔館に告ぐ、お前達が鬼人正邪を匿うのならこちらも相応の対応を取らせてもらう、お前達の選択を後悔するんだな」

紅魔館を囲うハンター達の通告、紅魔館住人諸とも片付けるつもりらしい

「……どれ」

バーンが空間に紅魔館の周囲の映像を映し出す

「へえー便利だなそれ、うわっ！ 50……いやそれ以上か？」

映し出された映像を見ながら魔理沙が呟く、紅魔館の周囲には応援を呼んだのか大量のハンター達に混じり野次馬的な妖怪や個人で正邪を追う妖怪も集まっていた

「思ったより居るわね……正邪……貴方怨み買いきよ」

映像を見たパチュリーが正邪に呆れて言った

「私としては嬉しいんだけど……流石にこれは手に余る」

苦笑しながら正邪が答えた、彼女の性格は天の邪鬼、喜んだら不機嫌に不愉快になると上機嫌になる、長い逃亡生活の間に彼女の敵はかなり増えていた

「一先ずは奴等の手並みを拝見するとうしよう、レミリアよ紅魔館の主として返事を返してやるのだ」

「良いでしょう」

承諾したレミリアは紅魔館の周囲に向かい魔力に言葉を載せ放った

紅魔館・周辺

「下等種族に告ぐ、我が紅魔館は貴様等の侵入を一切認めない、攻めいるならば来るが良い、格の違いを思い知らせてやろう」

レミリアの返答にその場の空気が変わった

「舐めやがって！」

「吸血鬼だからって調子にのってんじゃねえ！」

「久々に……キレちまったぜ……」

「退かぬ！媚びぬ！省みぬ！」

怒りが戦意を高揚させ士気が上昇する

「オラア！」

魔力防壁に攻撃を仕掛けた一匹の妖怪の攻撃をきっかけに総攻撃は開始された

紅魔館・図書館

「始まったわね……どうバーン？防壁の感じは？」

映像を見ながらレミリアが問う

「今攻撃しているのはまだ雑魚ばかりだ問題は無い、ある程度力のある者が出てくればいずれ破壊されるだろう」

「そう……なら今の内にエントランスまで移動しましょう、ここからじゃ外に出るのには遠いからね」

レミリアを先頭に小悪魔を残し図書館を出るメンバー達、彼女達はこの時はまだ予想していなかった、紅魔館を覆う紅霧が強者を連れてくる事になるとは

博麗神社

「んー？なんだいアレ？」

博麗神社に居た少女が遠目に見える紅魔館の異変に気付いた

「おい霊夢ー！なんか紅魔館が赤い霧出しててるぞー！」

境内の掃き掃除している霊夢に教える

「……どうせレミリアがバーンと何か遊んでるんでしょ？気にする程の事じゃ無いわ」

掃除の手を止め遠目の紅魔館を眺めながら霊夢は掃除を再開する

「あー……レミリアとバーンがねえ……」

少女は盃の酒を飲み干し立ち上がった

「よしっ！面白そうだから行ってくるよー」

少女は体を霧に変えながら霊夢に告げた

「はいはい、行ってらっしゃい萃香」

萃香を見る事なく言葉だけで送った

紅魔館・周辺

「おいおい……何だよこれ？」

戻って来た妹紅が紅魔館の状況を見て呟いた

「紅魔館が……攻撃されてます……」

大妖精が続けて眩く

「えっ？何々？お祭り？」

チルノだけ勘違い

「……なんか魔力で結界みたいなの張ってるし……よくわからんから様子見るか」

「そうですね、私はあの中に飛び込む勇気無いです……」

「えっ？お祭りじゃないの？」

少し離れた場所で様子を見守る3人

余興はまだ始まったばかり……

第18話 最後の

「ぶっ壊せー!!」

「吸血鬼と大魔王がなんぼのもんじやい！いてこましたれー！」

大勢の妖怪達がバーンの魔力防壁を壊そうと攻撃を繰り返す、魔力、妖力をぶっつけ物
理で叩き壊そうとする、紅魔館は今凄まじい数の暴力に囲まれていた

紅魔館

「弱いわねえ……あの程度の防壁に手間取るなんて」

バーンの映し出す映像を見ながらレミリアが呆れ顔で呟く

「ここで待機するのも疲れて来たわ」

パチュリーも長い待機に飽きてきたようだ

「出番まだー？私もう行っていい？」

フランも退屈そうにしている

「まあ待てフラン、もうそろそろだ」

今にも飛び出しそうなフランを抑えるバーン

「お、お前達……本気でやるのか？」

狂人を見るかのような目で正邪が問う

「覚悟を決めろ正邪、もう賽は投げられたんだぜ、もうやるしかないんだぜ」

魔理沙が正邪に濁を入れる

「でもさあ……」

煮え切らない正邪にレミリアが言い放った

「正邪は戦わなくて良いわ、はつきり言つてこの戦いについてこれないでしょ貴方じゃ」

言い渡される戦力外通知、お前は紅魔館で震えていろとのお達し

「えっ！本当に!? やった！」

戦力外通知に喜ぶ正邪、力の弱い彼女にとつてはこの通知は非常に嬉しかった

喜ぶ正邪を余所に映像を見続けていたバーンが呟いた

「来たか……そろそろ準備をしておけ」

紅魔館の周囲を囲う最前列の妖怪達を押し退け、力のある雰囲気醸し出す者が前列に現れた

紅魔館・周辺

「また増えちゃいましたね……全部で何人くらいでしょう？1000人近くは居そうです」

離れた場所で観戦する大妖精が呟く

「おっ！あいつ知ってるぞ！私と同じ妖怪退治の同業者だ、他にもそれなりに名の知れた奴等が参戦してるな」

妹紅が知人や有名な妖怪を見つけ二人に教える

「あつ……そいつらが攻撃しだしたよ」

攻撃を開始したのを確認したチルノが指差した

紅魔館

「ムッ……」

防壁に攻撃を加えられバーンがその強さを感じとる

「あっ！ヒビが入ったよ！」

映像を見ながらフランが叫んだ、防壁の2ヶ所にヒビが入り広がっていく、正門の前と東付近に1つずつ

「そろそろね……行くわよ！」

レミアアの合図で紅魔館の外に出る正邪を除いたメンバー達

「出てきたぞ！レミアアとバーンだ！」

紅魔館から姿を現した永遠に幼い月と大魔王に妖怪達が叫ぶ

「覚悟しろよレミアア！」

「何が大魔王だ！ガタガタにしてやる！」

防壁越しに罵声を浴びせる妖怪達にレミアアがうんざりする様に言い放った

「ハッ……有象無象ごときが吠えるわねえ」

「所詮は数を集めねば粹がれん雑魚どもだ、一部を除き気にする事なからう」

会話をしながら門に向かい歩く、門を開きレミアアとバーンを中心にメンバーが並び、同時に防壁が限界を訴えるようにビシビシと音をたてる

「咲夜とパチエは紅魔館の直衛に回って、私とバーンが正門、フラン・魔理沙・美鈴は東を任せたわ」

「わかりましたお嬢様」 「わかったわレミィ」

「了解お姉様！」 「あいよー任されたぜ」 「頑張ります！」

動き始めようとした5人をバーンが呼び止め話した

「これは余興……命を奪う必要は無い、わかっておるな？特にフランよ」

「あつ……わ、わかつてるよ！」

慌てて取り繕うフランに苦笑したメンバーは散開し位置につく、そしてそれを待っていたかの様に防壁は割れ、1人がようやく入れる程度の穴をつくり妖怪達が突入を開始した

「行くわよバーン、足を引つ張らないでね」

「フン……誰に向かって言っている？あいにくベホマを使う予定は無い、お前こそ怪我をしても知らんぞ？」

お互いに笑い合い妖怪達を蹴散らしていった

「始まったな……」

「どうするの？あたい達も行く？」

戦闘を開始したレミリア達を見て呟く妹紅にチルノが聞く

「うーん……事情はわからないけどなんか私達は場違いっぽいなあ」

乗り遅れた妹紅が冷めた様に語る

「じゃああなたはそこで大ちゃんと待ってなさい、あたいは行くわ」

「助けに行くのチルノちゃん？」

「バーン達があんなのに負ける訳ないじゃない、あたいが行ったら尚更よ！だからあたいはバーンの敵に回るわ！」

「えー！チルノちゃん!？」

チルノの敵対宣言に驚く大妖精、それを聞いた妹紅も驚いたがすぐに笑顔を出した

「……良いなそれ！よし！私もお供するぜ親分！」

「妹紅さんまで!？」

チルノに乗った妹紅にまたも驚く大妖精

「よおし……」

チルノは深呼吸を行い妹紅に告げた

「早速、伝説の大魔王を成敗しに出掛ける！後に続けもこたん！」

「またそれか……」

ガクツと肩を落とす妹紅の隣の大妖精が叫ぶ

「チルノちゃん！闇雲に挑むの危険だよ！もつと様子を見てからでも……」

「臆病者は着いてこなくともよい！もこたん早くしろ！……じゃ無くて大ちゃんはここで待つてなさい！行くわよもこたん！」

「はいよー親分」

気だるく返事する妹紅にチルノは続ける

「もたもたしてるんじやないどー！」

同時にチルノは飛び立った

「へいへい……じゃ行つてくるな」

「うー……無茶しないで下さいよお……」

心配する大妖精に親指を立てた妹紅は飛び立っていった

「大丈夫かなあ……」

不安気に呟く大妖精、そこに突然霧が漂う

「おやおや……宴が始まつてるじゃないか、この私を置いて宴とは許せないねえ……フフ……」

漂う霧から声が聞こえる

「おやあんたは……丁度良い、こいつを持っててくれないかい？」

「えっ!? は、はいっ!」

霧から出てきた瓢を受け取る大妖精、そして霧は大妖精を通り過ぎ紅魔館へ向かって行く

「あ、あれってまさか……あわわ……大変な事になりましたあ……」

見覚えのある霧と声に恐れおののく大妖精

煮えたぎる戦場に予想外の来訪者が向かって行った

「お話にならないわねえ、これじゃ少しも楽しめないわ」

殴り掛かってくる妖怪を軽く蹴散らすレミリアは不満気に呟く

「向こうも問題無いみたいだし」

また向かってくる妖怪を振り伏せながら東の戦場を見る、3人は易々と妖怪を倒している

「戦い始める前までは気が乗ってたんだけどこれじゃあねえ……」

手応えの無さに熱が引いていく、そんなレミリアに声が掛かる

「じゃあ私が相手をしてやるよレミリア」

穴を通つて来た妹紅がレミリアの前に立つ

「あら……少しは楽しめそうな相手が来たわね、貴方は今回はそっち側なのね」

「まあな、こいつらに義理は無いけどこっちの方が楽しそうだったんでね」

「フフ……そう……手加減はしないわよ?」

「望む所だ!」

二人が戦い始めたと同時にバーンにも挑戦者が現れる

「バーン! あたいが相手よ! 覚悟しなさい!」

「ほお……そっちに着くかチルノ、良いだろう纏めて掛かつて来るが良い」

チルノと共にバーンに攻撃を仕掛ける妖怪達をバーンは向かえ撃つ

「なんであいつら戦つてんだ?」

「さあ……よくわかりませんが楽しそうなので良いんじゃないですか?」

「そうだな」

魔理沙と美鈴が妖怪をあしらいながら会話している中、フランは暴れまわる

「うりやりやりやりやりー!」

次々と妖怪を戦闘不能にしていく、ちゃんと殺さないように力を抑え急所を外して

妖怪達の数が3分の1程減ったその時、彼女は来た

「つれないねえ……こんな楽しそうな宴に私を呼んでくれないなんて……」

防壁の前に萃香が立っていた

「萃香?!なんでここに!?!」

驚く魔理沙の問いに萃香は指を上に向けて話し出す

「これだよ、この赤い霧がえらく目立ってたから来てみたのさ、そしたらこのお祭り騒ぎ、参加しない訳にはいかないねえ」

魔理沙への返事を返した萃香は次に交戦中のレミアとバーンに向き聞いた

「てな訳で参加させてもらうよ?構わないだろ?」

「フツ……好きにするがいい」

「フン……妹紅が終わったら次にお前に格の違いを見せてあげるわ……それと紅魔館を壊さないようにね」

二人の承諾に萃香は嬉しそうに笑う、そして防壁に近付き構えた

「せっかくの宴なんだ、こんなつまらん防壁は要らんだらう?」

萃香の拳が防壁に炸裂する

「ぬう!?!」

交戦中も防壁を維持していたバーンの顔が歪む、防壁に与えられた衝撃はヒビとなり

全体に広がっていく

「そもそもひとつ!」

もう一発放たれた拳に防壁はガラスを割ったような音を出し崩れ去った

「さあ! 派手にやろう!」

萃香の叫びに呼応し待機していた妖怪達が紅魔館へ雪崩れ込み乱戦を作り出した

「楽出来ると思つてたのに……」

「パチュリー様、油断しないでくださいね」

防壁のお陰で敷地内に入ってくる者がいなかったのも本を読んでいたパチュリーだったが防壁が破壊されたせいで四方八方から妖怪達が紅魔館の中に居る正邪を殺そうと浸入してくるのを迎え撃つ

「私は南へ行く! 美鈴は西へ行つてくれ! フラン! ここは任せた!」

「わかりました!」

「了解!」

魔理沙が二人に指示を飛ばし魔理沙は南へ美鈴は西へ迎撃に向かいフランは東の迎撃を続ける

「うんうん! 宴はこうでなくちやいかん、さあて……」

満足に頷いた萃香は乱戦をすり抜け、勘違いで襲ってくる妖怪をぶっ飛ばしながら目

的の場所を目指す

「どこに行くの？少し待つてなさい、すぐに相手をしてあげるわ」

妹紅と交戦中のレミリアが萃香を呼び止める

「あー……悪いねレミリア、吸血鬼には興味無いんだ、私の興味は別にある、だから今回は我慢しなさいな」

「貴様……」

眼中に無いと言われ怒り心頭のレミリア、プライドの高い彼女には耐え難い屈辱

「おいおい、余所見とは余裕だなレミリア！」

「ッ!？」

妹紅の弾幕がレミリアの頬を掠める

「私で我慢してくれよ、退屈はさせないからさ」

「……そうね、貴方で我慢してあげる！」

妹紅から感じる手応えに怒りを収めたレミリアは笑みを浮かべ戦いを再開した

「ハッハッハッ！気の済むまでやると良いさ」

飄々と笑いながら歩を進める

「何が起きるかわからんもんだねえ……一度フラれたのにこうして機会が生まれた、案外戦う運命だったのかねえ……」

目的の場所に着いた萃香は歩を止める

「あんたはどう思うね？大魔王バーン？」

チルノと妖怪達の攻撃を余裕で捌いているバーンに萃香は問うた

「かも知れんな……」

笑みを浮かべたバーンは攻撃を仕掛けているチルノ達を薙ぎ払う

「約束の酒は辞めれていない……それでも戦つてくれるかい？」

「こうなった以上、仕方あるまい、幻想郷で最上位の種族、鬼、その力を見せて貰おうか」

「ッ!!」

ついに得られたバーンの承諾、一度は断られたバーンとの勝負、その無念は萃香にしこりとして残っていた、バーンと勝負がしたい！それが叶ったのだ！萃香は嬉しさと興奮で目を輝かせている

「チルノ、悪いが用事が出来た、他の者にあたれ」

「えー！あたいが先だったのに？ちよつとあんた！順番は守……」

抗議を萃香に向けた瞬間、萃香の妖力が解放された、回りの妖怪達を吹き飛ばし妖力を風圧と共に二人に浴びせる

「ん？何か言ったかい？」

聞こえていなかった萃香がチルノに聞き直す

!?!?
!?

萃香の異常な妖力に口をパクパクさせるチルノ、だがすぐに気を取り直し

「ま、まあ良いわ、今回はあんたに譲ってあげる!じゃあね!」

ピューッと飛び去っていった、チルノは修行で相手の力量をある程度測る事が出来る様になっていた、それ故に萃香の妖力に圧倒されて萎縮してしまふ、チルノらしくは無
いが少し賢くなったとも言える

「私はステゴロの方が好きなんだけどどうだい?」

「良いだろう」

萃香の提案を受けたバーンも魔力を解放し肉体に行き渡らせる

「もう構わないかい?」

「掛かって来るがいい」

瞬間、萃香が飛び出し、二人の戦いは始まった

「そおら!」

「ぬう!?!」

萃香の拳を防御したバーンの体が地面を深く削りながら後退させる

「はあ!」

飛び込んだ萃香が拳を打ち下ろすがバーンには避けられ地面を殴る

「!!」

避けたバーンが驚いた、地面は轟音を上げ巨大なクレーターを作り上げていた
「あー……避けるから大地に穴が空いちまったねえ」

ヘラヘラと笑う萃香はバーンに歩み寄る

「さあ続きだ」

再びバーンに殴り掛かる

「どうしたんだい？防戦一方じゃないか？まさか私が恐ろしい訳じゃあるまいに」

「フツ……まさか……」

乱打を捌きながらバーンが笑い距離を置く

「いくら余でもその攻撃力は脅威なのでな、様子を見させて貰ったのだ」

「へえ……なら結果を見せて貰おうかね」

また殴り掛かる萃香の攻撃を捌きながらバーンは語り始めた

「お前はその力を過信し過ぎて攻撃が単調過ぎるのだ、隙を見つけるのは容易かった」

萃香の攻撃を避けたバーンが拳を萃香の胸に炸裂する

「これが結果だ」

バーンが誇らしげに語った瞬間、バーンの腕は掴まれる

（何だと!?)

渾身の力で打った拳を受けてすぐに行動出来る萃香に驚愕する

「思った以上の力だね、私に血を出させるとはやるじゃないか」

口から血を垂らしながら萃香は笑う

（離れん……!?!）

掴んだ手を振りほどこうとするが凄まじい力で掴まれ動かせない

「技術はあんたが上だね、でも……これじゃあまだまだ軽いねえ！」

「ちい！」

振りほどくのを諦めたバーンが殴り掛かる瞬間、萃香の拳がバーンを打ち抜いた

「うぐおっ!？」

凄まじい勢いで飛んでいくバーン

「……むん！」

飛翔呪文を唱え勢いを殺し空中で止まる

（この威力……バーンの紋章閃並み……いや、そこまでは無いが素手でこの威力を出し、

そしてあの防御力……）

腹に溜まる痛恨の一撃に萃香の戦闘力の高さを感じる

「さあ体も温まってきた！覚悟良いかい？私は出来てる！」

トルクを上げた萃香がバーンに突進していく、ぶつかり合う余波が波紋の様に広がり

空気を草を揺らす

「ぬう……!?」

萃香の力に手を焼くバーンだが彼に後退は無い、萃香を打ち、萃香に打たれる、いつ終わるやも知れない殴り合いはまだまだ続く

妖怪の山

「射命丸よ、どうだった？」

妖怪の山のトップ、天魔が戻ってきた文に聞いた

「はい、鬼人正邪は紅魔館に匿われ、それを追うハンターや妖怪達を相手に紅魔館の主、レミリアとあの大魔王バーンが仲間と共に暴れまわっております」

文は見てきた事を報告した、鬼人正邪が逃げたであろう紅魔館の赤い霧を不審に感じた天魔が文に命じ様子を探らせていたのだ

「何故あの者を匿うのだ？」

「それは……わかりません、鬼人正邪の入れ知恵かはたまた遊びなのかも知れません」

「むう……」

紅魔館の謎の行動に思考を巡らすが出来ない

「どうしますか？このままですとハンター達の全滅は免れないかと思いますが」

「……私が行こう、文、供をせい」

「えっ!?天魔様自ら出向くのですか?」

自分達の頭が出向く事に驚く文、天魔が動く事など滅多に無い事だから

「そうだ、気になる事もあるのでな、行くぞ文」

「は、はい!」

二人は紅魔館へ向け飛んでいく、はたしてこの二人が戦場に何をもたらすのか……

紅魔館

「ふいー、こっちは片付いたぜー、そっちはどうだ美鈴?」

南側の敵を殲滅した魔理沙が西の美鈴にやってくる

「ハッ!」

妖怪を蹴り飛ばし、2体同時に襲いかかる妖怪の攻撃を捌きながら魔理沙に話しかける

「こっちは後この2体だけです、問題ありません！妹様をお願いします！」

「はいよー！」

東へ向かう途中、中庭の様子を確認する、十数体の妖怪達が倒れておりその中心で咲夜とパチュリーが紅茶を飲んでいる

「そっちは大丈夫そうだなー！」

「ええ、暇になったからお茶してる所よ」

「フラン様へ応援に向かって！」

「はいよー！」

二人に返事した魔理沙は東の戦場に向かう

「おーおー！派手にやったなあ……」

倒れている大量の妖怪達を見ながら呟く、一番数が多かった正門付近の敵がレミリアとバーンの戦いに巻き添えを食らわないように東へ集まっていたのだ

「おーやってるやってる！」

フランを見つけた魔理沙は近付いていく、近付くにつれ罵声がどんどん酷くなっていっていった

「あたいの勝ちよ！このチビ！」

「あたしと変わらないよーだ！この⑨！」

頬をつねり合い罵声を浴びせ合う二人、妖怪達を殲滅したフランにチルノが挑んだのだがいつの間にか子供の喧嘩になっていた

「ハハハ！こつちも問題無いな、後はレミリアとバーンか」

正門へ箒を向け魔理沙は飛んでいった

「お？どうした二人とも？勝負は着いたのか？」

正門へ来た魔理沙が見たのは仲良く並んで座る二人だった

「決着が長引きそうだったんで引き分けにしたわ、それよりあっちの方が面白そうだったからね」

「ああ、バーンか」

二人が見ていたのはバーンと萃香の勝負、未だ殴り合いを続けている

「どうなんだぜ戦況は？流石のバーンも萃香相手じゃ苦戦必至だろ？」

「そうだな、バーンが押されてるよ、肉弾戦じゃやっぱり鬼が強みたいだな」

妹紅が答えた後、二人の戦いを見た魔理沙は二人の傍にやって来て一緒に座って観戦を始めた

「フウー……呆れるわ、その小さい体、細い腕のどこにそんな力があるのだ」

一旦距離を取ったバーンが問う

「それが鬼つてもんさ！それを言うならあんたもちよつと角の生えたガタイの良い兄ちゃんにしか見えないよ！」

萃香が笑って答える

「フフ……萃香よ、少し小細工をさせてもらおう」

「小細工？」

「ああ、何、大した事ではない、呪文を一度唱えるだけだ」

「あんたが小細工う？……まあ良いわ、早くやって続きをしよう」

「フツ……」

笑うバーンは呪文を唱えた、バーンの体を魔法力が包んだ

「終わったようだね、行くよ！」

呪文を唱え終わったのを確認した萃香が飛び込み拳を打ち出す

「何い!？」

萃香の拳は受け止められた

「むうん！」

「っがっ!？」

直後バーンの拳が萃香を殴り飛ばした

勢い良く飛んだ萃香は地面に当たると、地面は爆発したかのように爆ぜ砂埃を巻き上げる

「あんた何をした？力が急に上がってるじゃないか？」

口から垂れる血を拭いながら萃香が姿を現す

「バイキルトと言う呪文を使った、攻撃力を高める魔法だ、余には枷がある、これぐらいは許せ」

「許すも何もこのままじゃ物足りない所だったさ！大いに結構！さあ勝たせて貰うよ！」

更に気を高め笑う萃香にバーンも笑い、二人はまた殴り合う

「おおー！互角じゃねえかアレ？」

「しつかしまあノーガードで殴り合うなんてバカだろあいつら」

観戦する二人が感想を漏らす

「認めたくないけど鬼って格が違うのよ、普通の妖怪と比べて遥かにね、萃香は鬼としての格を、誇りを力で表している、だからバーンもそれに応えて殴り合いを選んだんじゃない

ないかしら？」

「そんなもんなのか……よくわからん世界だぜ」

レミアアの見解に今一つ理解出来ない魔理沙、人間である彼女には種族の格や誇りと
言った考えが無いのだ

「それにしても……ただの殴り合いなのに……泥臭いの……何故か美しいわね、あの
二人だからかしら？」

殴り合う二人を見つめレミアアは呟いた、二人の戦いのレベルの高さなのか、ただの
殴り合いが崇高な物に見えた

「私達はスペルカードルールに慣れすぎてたんだよ、だからあの戦いが純粋な物に見え
るのさ、私はアレを見て思ったよ、これが戦いだってね」

「確かにそうかもね、肉体のぶつかり合い……弾幕の工夫ばかりで久しくやってないわ
ね……」

妹紅に諭されたレミアアは戦う二人を見つめる

(それはそうと勝敗はどうかしらね)

激しさを増す戦いに勝敗の予想がつかないレミアアは観戦に戻った

「ぬああああ!!」

「りやああああ!!」

殴る

「ハアツ!!」

殴る

「オラア!!」

殴る

ダメージも気にせず殴り合う、バイキルトで強化した拳が萃香を打ち血を飛散させる、すぐさま殴り返した萃香の拳がバーンを苦痛の表情に変え血を流させる

「ラア!!」

「ムン!!」

互いの拳がぶつかり合い両者は飛ぶ

「ハハ……ハハハハハ!! 楽しいねえ!」

ヨロヨロと起き上がりながら萃香は笑う

「余も楽しんでる、鬼の力……驚きを隠せん」

スツと起き上がるバーンだがダメージは大きい、それでも余裕を見せるのはこれは死

闘ではないから、死に物狂いで戦う物ではない、それをお互いに理解しているから萃香は笑いバーンは余裕なのだ

「楽しいのと勝敗は別だよ？勝ちは譲れないねえ」

「無論だ、余とて勝ちを譲るつもりはない」

構え合う二人、飛び出さんとしたその時、新たな来訪者が現れた

「双方、止めよ」

天魔が二人に割って入った

「なんだお前は？」

邪魔をされ興が削がれたバーンが睨む

「天魔と申す、鬼人正邪を尋ね者にした者と言えはわかるだろう、これはそなたらが？」

倒されている妖怪達を指差す

(来たか……)

天魔の来訪に笑みを浮かべる

「如何にも……それが？」

「よくもここまで暴れたものよ……まあ良い、鬼人正邪について話がある、聞いて貰える

だろうか？」

天魔が話そうとした瞬間、怒声が響いた

「おい！今はバーンとの勝負の最中だ！後にしな！」

勝負に水を入れられた萃香が叫ぶ、大変ご立腹の様子

「まあまあ落ち着いて下さい萃香さん」

文が怒る萃香に立ち寄る

「引つ込んでるんだね……また妖怪の山を支配されたいのかい？」

「あ、あややや!?天魔様！引つ込みましょう！早く早く！」

萃香の強烈な脅しにトラウマが甦った文が引く事を勧める

「これは悪い時に来たようだ、失礼した、終わるのを待たせて頂く」

そう言うトレミリア達の居る場所へ向かっていった

「さあ邪魔者はいなくなった！決着をつけようかバーン！」

「望む所だ」

気を取り直した二人はまた殴り合う

「ウラァ！」

左腕がバーンの顔を打つ

「もういつ……!?!」

右腕で追撃しようとしたが右腕の初動をバーンの右腕が抑えその状態から右腕で裏拳を放つ

「ツハア!？」

すぐに体勢を立て直しバーンに掴み掛かる、差し出された両手をバーンも掴み手四つの体勢で押し合う

「グヌウ……!!」

「ヌウウ……!!」

互いに力を込めるが腕は動かない

「ん……!!どりゃあ!!」

飛び上がった萃香の頭突きがバーンの顔に炸裂する

「ツガアア!？」

強烈な頭突きに目を閉じ怯む、その隙を逃さず萃香は飛び込んだ

「もらったあ!」

怒濤の連打を浴びせる、ただの連打ではない。発発にしっかりと気を含んでいるその連打はバーンに反撃を許さず一方的に打ちのめす

「うっ!!ぐっ!!がはっ!!」

(お、押し切られる!?)

凄まじい連打に思わず敗北を感じるバーン、さしものバーンでも純粋な殴り合いでは萃香に一日の長があつたのだ

(負ける……余が……う……ありえん！)

受け入れかけた敗北感に突如否定が入った

「ハアアアア!!」

体に力を込め連打を一瞬耐える

「ハアツ!!」

カウンターで放った拳が萃香を打つ

「……ツ!?!」

地面を抉りながら萃香は飛んだ

「……熱いじゃないかバーン……がはっ!?!」

起き上がる萃香は血を吐く、思わぬカウンターは想像以上にダメージを与えていた

「……敗北よりは良い……ツ!?!」

膝から崩れそうになるが堪える、ダメージは深くバーンの体に刻まれていた

「萃香……提案がある」

「何だい？」

「これは余興……引き分けて手を打たぬか？」

出されたのは引き分けの申し込み

「……」

突然の提案に萃香は少し考える

(これ以上は……)

フツツと笑いバーンに返した

「確かにね、これ以上は生き死にに関わる勝負になる、遊びでそこまでやる必要はないさね……いいよ、引き分けで手を打とうじゃないか」

引き分けを承諾した萃香はバーンに向かい歩き出す、バーンも歩み寄る

「楽しかったよ！久々に熱くなれた！」

バーンに手を差し出す

「鬼の力堪能させて貰ったぞ」

バーンは手を差し出さなかったが萃香が無理矢理手を掴み握手する、そしてお互いに笑い合い勝負は終わりを告げた

「余興は済んだ……話を聞こう、鬼人正邪を連れてくるのだ」

「あいよー」

魔理沙が紅魔館の中に入っていく

「天魔と言ったな、雇った妖怪達を相手にしていれば来ると思っていた」

「……つまり雇い主を誘き出す為にこの騒動を行ったと言うのか？」

周囲の惨状を見て天魔が聞いた、自分を呼ぶためにこれだけの事を行ったのかと

「ただ呼ぶよりは面白そうだったのな……見ての通り誰も死んではいない、問題はないかろう」

「しかし……」

天魔が反論しようとしたその時に魔理沙が正邪を連れてやってくる

「連れてきたぜー」

「お、おい……天魔じゃないか……勘弁してくれよ……」

ビクビクと魔理沙の背中に隠れている、自分の殺害を命じた者が目の前にいるのだ怯えるのも無理はない

「お前を呼んだのは鬼人正邪の件でだ、鬼人正邪の幻想郷での安全を保証して貰う為にな」

「……それは出来かねる、鬼人正邪は野放しに出来ん、放っておけばまた幻想郷に仇なすだろう、許す事は出来ん」

「言いたい事はわかる……何もタダでとは言わん、こうするのだ」

バーンが正邪に手をかざすと黒い霧の様な物が正邪に入っていく

「うぎい!？」

正邪が体の異変に声を上げた、立ってられずその場に崩れる

「呪い……」

天魔が正邪を見て呟いた

「そうだ、能力と身体能力を大幅に抑えた、もうこやつは並の妖怪以下、それどころか人間にも苦戦するだろう」

「……断つたらどうされますかな？」

「讓歩はここまでだ……それでも断るなら殺すがいい」

「ういい!？」

満足に動けない正邪の運命が決まりかける

「……」

天魔が正邪を見つめる

「うつ……うつ……」

視線にたじろぐ正邪、天魔は正邪から目を逸らしバーンに向き直す

「……良いだろう、確かにもう何も出来ないだろうな、だからと言って野放しには出来ん、幻想郷の僻地に幽閉させて貰う、あそこだ……そこから出れば命は無い」

天魔が指差したのは遥か遠く、幻想郷の端にある僻地

「わ、わかった！絶対に出ない！」

「見張りもつける、忘れるな鬼人正邪よ」

正邪に言い残すと天魔は紅魔館に散らばる妖怪達を妖力で持ち上げ帰っていく

「それでは私もおいとまさせて貰います」

文も頭を下げ飛んでいった

「……鬼人正邪」

「な、なに……？」

天魔達が去った後バーンが正邪を呼ぶ

「生き残り、そして場所も出来た、充分だろうか？」

「あ、ああ……」

「では行け……」

バーンに命令されトボトボ歩く正邪、急に体に力が振り向いた

「これは……!？」

「呪いを少し緩めた、バレぬようにするのだな……お前の革命を起こそうという考え嫌いではない、革命を成し遂げたいなら力をつけよ……さらばだ」

バーンは身を翻しレミリア達の場所へ戻り、紅魔館へ入っていった

「……ありがとう……バーン……」

一人眩いた正邪は少し笑い身を翻して歩いて行った
彼女が幻想郷に危険を及ぼす事は無くなった、少なくとも今は……だが……

「疲れたわね……」

霧を納め紅魔館戻ったレミリアが眩いた

「でも楽しかったよー!」

フランが笑う

「そうね!今回は引き分けだったけど次は負けないわ!」

チルノも笑う、今回は引き分けだった様だ、みんな引き分けで終わったのだ

「さあ!祭りの後は宴会だ!飲むよバーン!」

いつの間にか一緒に居た大妖精から瓢を受け取っていた萃香が叫んだ

「しれつと紛れ込んでるんじゃないわよ……」

レミリアが眩く

「まあ良いわ、宴会でもしましょうか、咲夜、用意して!」

「わかりましたー！」

準備に取りかかる咲夜

その日の夜は大いに盛り上がった、チルノ、フランがはしやぎ、魔理沙と妹紅は笑う、レミリアとパチュリーも笑う、大妖精と小悪魔も楽しく笑う、萃香の酒乱が場を更に盛り上げる

「フツ……」

その光景にバーンも笑う

今日はほんの少し……ほんの少しだけ慌ただしい日常だったのだ

そして……誰もこれが最後の日常だとは思っていなかった……

第19話 序曲

正邪を発端とした騒動から1週間、幻想郷は何事も無く平和な日々が続いていた。ナイトメアの搜索を続けていたが手掛かりも音沙汰も無く、今日も搜索をしていたが見つからず一旦紅魔館へ全員戻っていた。

「河城にとりが来ています」

図書館に現れた咲夜がレミリアに告げた

「河童が？ 用件は何？」

「渡す物があるらしいです」

「渡す物？……まあ良いわ、連れてきなさい」

咲夜に命じたレミリアは紅茶を飲む

「にとりがねえ……何だろうな」

傍に居た妹紅が呟く

「強くなれるアイテムだったら良いなー！ 変身！ どう！ みたいなー！」

「ガキね！ あたいはロボットだと思おうわ！ 蝶みたいな羽を広げて飛び回るのー！」

「どっちも違うと思うなー……」

フランとチルノの予想を大妖精が否定する

「紫外線照射装置だったりしてな！河童の技術は世界一いい！なんつってよ！」
「作りそうで怖いわね……」

魔理沙の冗談にレミリアは不安になる、河童なら本当に作れそうだから笑えない
「お連れしました」

そこへにとりを連れた咲夜が現れる

「やつ！久しぶり！」

「渡したい物があるって何？」

挨拶するにとりにレミリアが聞いた

「ああ、霊夢に渡そうと思ってたんだけど留守だったからさ、こっちに持ってきたんだ
……これだよ」

リュックから大皿程度の大きさの物を数個取り出す

「なんだこりゃ？投げて遊ぶのか？」

「そんなわけないだろ！」

手に持った魔理沙の問いにとりが怒る

「これは結界の増幅装置だよ、あのドロドロ逃がしただろ？これはあいつ用の装置だ、霊夢の結界の力を増幅して縛る力を上げて更に負担も無くす事が出来る、これを通して結

界を張れば装置が維持して力が切れるまで霊夢も行動出来る品物さ」

「へえースゴイ物作ったな！わかった霊夢に渡しとくよ、ありがたく使わせて貰うぜ！」

装置を受け取ろうとした魔理沙ににとりの手が差し出される

「何だこの手？」

「お金」

「金取るのかよ！」

魔理沙が驚いて聞いた、無償と思っていたから

「当たり前だろ？こちとら遊びじゃねえんだよ！」

「うっ……」

にとりの凄みに思わずたじろいでしまう

「……良いわ、咲夜、払っておきなさい」

やりとりを見ていたレミリアが支払いを承諾する

「流石紅魔館の主、話がわかるね」

「私はナイトメアを良く知らないけど危ない兵器なんですよ？紅魔館に来られても困るから破壊出来る可能性は上げとかないとね」

そしてバーンをチラッと見て続ける

「それに装置が無くても破壊出来る人は気紛れだしね」

「フツ……」

レミリアの皮肉にバーンが笑みを浮かべる、そのバーンを見たにとりが思い出した様にリュックを漁りだした

「ああそうだ！バーン宛の手紙を預かってたんだよ……ほらこれ」

「手紙……？」

手紙を受け取ったバーンはにとりを見る、差出人の事ではない、それは読めばわかるだろう、何故にとりが持っているのかという事だ

「何やら天魔様経由で送られて来たらしいよ、それで私が博麗神社に向かうならついでに渡してくれて頼まれたのさ」

「そうか、どれ……」

手紙の封を切り読み始めるバーンと同時に咲夜がお金を持ってきてにとりに渡した「確かに頂いたよ、じゃあ私はこれで帰るとするよ、あのドロドロは任せたらからな」

背中を向け手を振りにとりは帰っていった

「これは私が霊夢に合った時に渡しておくよ」

咲夜から手提げ袋を貰った魔理沙は装置を詰め込む

「それよりバーン、何の手紙なんだ？まさかラブレターかあ？」

手紙の内容を冷やかしを含んで聞いてみる

「……地霊殿の主からだ、地霊殿に来て欲しいと書いてある」

「さとりがバーンに？……あの引きこもりが何の用かしら……想像もつかないわね……」

会話を聞いていたレミリアが呟く

「どうするんだバーン？行くなら着いていくけど？」

「あたいもー！」

供を申し出たのは魔理沙とチルノ

「……いや、余だけで良い、お前達はナイトメアを探している」

だがバーンには断られる、着いてくるよりもナイトメアを優先しろとの事らしい

「そうだな、バーンなら1人でも大丈夫だろうしな！んじゃ探しに行くか妹紅！チルノ

！大妖精！霊夢にもコレも渡さないといけないしよ！」

「じゃああたし寝るー」

搜索組に入れないフランは寝るために搜索組と一緒に図書館を出ていった

「では余も地霊殿に向かうとしよう、レミリア、パチュリー、留守は任せた」

「バーン！泊まって来ても良いけど明日は早く帰って来なさいよ！」

「何故だ？」

「フフ……内緒♪」

笑みを浮かべるレミリアにわかったと告げ図書館を出ていく

バーンが紅魔館を出た後、図書館に残ったレミリアがパチュリーに話し掛けた

「ねえパチエ？またバーンに内緒でパーティーを予定してるの、参加しなさいよパチエ

！明日よー！」

「それは構わないけどなんでいきなり明日なの？突然過ぎるわよ」

「紅魔館に常駐している貴方達は今日でも問題無いでしょ？それと何故明日なのかと言うと明日は皆既日食らしいのよ、中々面白いパーティーになると思うわ、それに……」

「バーンがここに来てもう半年経つしね、ちょうど良いと思つたのよ」

「良いんじゃないかしら？彼が喜ぶかはわからないけど良いと思うわ」

「でしょ？楽しみね」

計画されていたパーティー、バーンが幻想郷に来て半年経つた記念パーティー、前々から準備を進めていたパーティーはさぞ素晴らしい物になるに違いない

しかし、それは出来るとは限らない……何故なら異変の種子は根付き、そして咲こうとしていたのだから……

博麗神社

「居ませんね霊夢さん……」

博麗神社へやってきた搜索組の大妖精が呟いた、まだ霊夢は帰ってない様だ

「じゃあ後でまた来たら良いさ、先にナイトメアを探しに行こう」

「あたいに命令するなんて生意気よ妹紅！子分のくせに！」

やいやいやい合う二人を他所に魔理沙が紙とペンを用意する

「一応、書き置きだけ残しとくか……渡したい物がある、また後で来る……つと、よし！行くぜ！」

霊夢への渡し物を一旦保留し4人はナイトメアの搜索に向かった

旧都

(……)が旧都……)

地霊殿を目指すバーンは旧都に降りたっていた

(地霊殿はあれか……)

旧都の中央に見える建物を地霊殿と認識し歩きだすバーン、飛べば良いのだが急ぐ必要のなかったバーンは旧都の景色を見ながら歩いて行く

「……………」

歩いてきたバーンは鼻につく臭いに足を止める

(酒の臭い……)

強烈な酒の臭いがそこらを漂っていた、臭いの出所へ視線を送る、宿屋の様な旅館の様な建物の窓際に座り酒を飲む女性を見る

「おや……………? あんたは……………」

女性もバーンに気付き視線を送る

「その風貌……………もしかしてあんたが大魔王バーンかい?」

「如何にも……………余がバーンだ、お前は?」

バーンの返答に女性は嬉しそうに笑みを浮かべる

「やっぱりあんたがそうかい! 一度ツラを見たいと思つてたんだよ!」

笑う女性をバーンは睨む

「ああ悪いね、私の名は星熊勇儀、あんたの事は萃香から聞いててね、興味があつたんだよ! 萃香と引き分けたんだってね、やるじゃないか!」

「星熊勇儀？ならばお前が四天王の一人の……」

「おお！噂の大魔王に知られているとはね……そうさ！萃香と同じ山の四天王と呼ばれている鬼さー！」

盃にある酒を飲み干しながら答える

「なああんた！私と勝負しないかい？萃香とやったんだから構わないだろう？」

ニヤリと笑う勇儀の挑戦、しかしバーンは顔を背け歩き出す

「悪いが先約がいるのだ……そして余と戦いたいなら酒を絶て、萃香との勝負はいわば特例……二度は無い」

「アハハ!!フラれちまったねえ！わかってるよ萃香から聞いてる、あんたが酔っ払いは相手にしないって事はね！冗談さー！」

また注いだ酒を飲み干す

「地霊殿に用があるのかい？」

「そうだ、地霊殿の主が話がしたいとの事だ」

「ふーん……さとりにねえ……」

勇儀の表情が急に曇る

「……気を付けな、少し前からさとりの奴、怖い顔でいるんだよ……余裕が無いって言うのかねえ、何か思い詰めてるみたいなんだよ」

「そうか……留めておくとしよう」

とは言うものの大した事と思っていないバーンは勇儀に見送られながら地霊殿に向かった

人里から少し離れた畑

「ちよつと休憩にしよう!」

「はい!」

畑の手入れをしていた二人の男女、一段落して休憩に入る

「ふう……いくら手入れしても畑荒らしが来るからキリが無いね、昨日は雨も降つてたのに」

「荒らし……つて言うのか? 作物は取られてない、地面が少し荒らされているだけだ、何かが通つた様な……まあ大した事じゃ無い、気にするな」

お茶を飲みながら会話する二人

「ん……?」

男が焔の異変に気付く

「何だ……？あのスライムみたいなの？」

地面からスライムの様なゲル状の液体が浮かび上がってくる、それは逃げていたナイトメアだった

「あ、ホントだ……動かないけどなんか危なそうだね……」

妹紅から慧音に伝えられていたナイトメアの情報は慧音により里全体に伝えられていたのだがナイトメアが1週間以上姿を現さなかった事でナイトメアの存在を忘れていた男女はナイトメアと想像つかなかった

「なんで動かないのはわからんけどヤバそうだ……里へ逃げるぞー！」

女性の手を取りナイトメアに気付かれない様に遠回りに隠れながら人里へ逃げる、幸いナイトメアには見つからず人里へ戻る事は出来た、しかし先日降った雨のせいで地面には足跡がくつきりと残っていた……

地霊殿

「ようこそおいでくださいましたバーン様」

地霊殿に着いたバーンは案内人に部屋を通される、お茶を出した案内人が申し訳なきように話し出した

「お越しして頂いたところ申し訳ありません、さとり様に急な用が出来てしまいました。今、お出になられているのです、お待ちして頂く事になるのですがよろしいでしょうか？」

「構わん、どれ程で帰ってくる？」

「それが……ハッキリとは分からないのです……夜には戻るとは思いますが……なんでしたら泊まって頂いてもよろしいですが……」

「……」

少し考えるバーン

(問題はなからう……)

「わかった、そのようにしてくれ」

「かしこまりました」

頭を下げた案内人は部屋を出ていった

(地霊殿の主……余に何用か……)

静かに目を閉じたバーンは瞑想を始めた

無縁塚・封印の地

「来たわね……」

封印を見ていた霊夢が振り返った

「私達を呼び出すなんて何があったの？」

来たのは幽々子、白蓮、神奈子、そして

「アレに何かあったのですか？」

地霊殿の主、さとり

「見て……封印を破られかけてるの、今まであまり強く破ろうとしてなかったのが急に活発になつてきたの」

「……後どれくらい持ちそう？」

封印を睨む白蓮が聞いた

「持つて3ヶ月……場合によっては1ヶ月つて所ね」

神妙な表情で語る霊夢に時間が残されていない事を悟る4人

「……もう限界ね、幻想郷へ知らせるしかないわ」

「……戦う者を集め残りは避難させないとね……どこへ避難しても無駄でしょうけど……」

幽々子と神奈子が悲痛な顔で話す

「……八雲紫は？」

黙っていたさとりが口を開いた

「藍から聞いているはずなのに来ないって事はギリギリまで探すつもりなんですよ紫は……紫の事は心配してない、その日が来れば紫は必ず来るわ、私達は備えるだけよ」

「……そうね」

霊夢の返答に頷いた一同は今後の事を話し合った、幻想郷の未来が掛かった事だそれは入念に何時間も話し合われた

そしてその日の深夜

「……!!」

動かなかったナイトメアがついに行動を開始する、辺りをゆつくりと動き周囲を探索するように動く

そして

「……」

足跡を見つけ移動を開始した

魔理沙の家

「霊夢どこ行ったんだらうな、大事な用事かな？」

魔理沙が妹紅に聞いた

搜索の後、博麗神社に行ったが霊夢はまだ帰ってなかったのだ

「わからないけどきつとそうだろ、明日パーティーに来た時に渡せば良いんじゃないか？」

スープを飲む妹紅が答える、レミリアからパーティーの事を聞いた彼女は紅魔館に近

い魔理沙の家に泊まる事にしたのだ

「そうだな、しかしナイトメアを片付けていないのにパーティーなんてしてて良いのか？」

ナイトメアの危険性を知っている魔理沙はそんなお気楽な事をしてて良いのかと思っている

「まあレミリアからしたら紅魔館を攻撃されない限りあんまり関係無いんだろ、いざとなればバーンも居るしな」

「でもなあ……」

それでも納得のいかない魔理沙、自分が原因でナイトメアを起動させてしまった責任感もあるのだ

「じゃあ魔理沙一人だけ搜索するか？」

意地悪く笑いながら妹紅が聞いた

「ヤダ！私もご馳走食べたい」

「アハハ！悪かったよ、さっもう寝ようぜ、パーティーは明日の昼頃から夜までぶっ通しらしいからな」

「楽しみだな」

そうして二人はベッドに入り明日のパーティーを楽しみにしながら就寝した

人里

「お疲れさん！交代だ！」

人里の外で見張りをする男に声が掛かった

「待ってたぜ！今のところ異常無しだ」

見張りをするこの者達は里の自警団、ちようど交代の時間だった様だ

「慧音先生が言ってたナイトメアだっけ？ホントに居るのか？どこも襲われてないし目撃もされてないけどよ」

「さあな、けどそのナイトメアが居ても居なくても俺達がする事は変わらんだろ？里を守るだけさ」

「そっだな……ん？」

男は闇夜の中、月に照らされ、怪しく動く物を見つける

「どうした？」

交代に来た男も視線を送りそれを見つける

「……ヤバイ……里の住人と慧音先生に連絡だ！急げ！」

直感した、アレが聞いていたナイトメアだと、そしてすぐに連絡に行くよう促す

「お前は!？」

「俺が抑えとく！早く行け！」

そう言うのとナイトメアへ走っていった

「……死ぬなよ！」

連絡を任された男は里へ走って行つた

地霊殿

コンコン

バーンの居る部屋がノックされる、時刻は午前4時前

「入れ」

「まだ起きてたのね」

ドアを開け入って来たのはさとり

「ようやくご帰還か……随分と待たせてくれたな」

「ごめんなさい、私にも色々あるの」

椅子に座るさとり、その顔は苦い

「……封印の件か？」

「貴方も知っているのね、ええ……また早まったみたい、長くて3ヶ月、早くて1ヶ月らしいわ」

「そうか……」

少し複雑な表情でバーンは目を閉じる

「貴方を呼んだのはその封印の事、協力して欲しいの」

「お前もか……」

うんざりする様にさとりを睨む

「余は幻想郷に干渉はせん、お前達がなんとかしろ」

断るバーンを見つめたさとりは話し出す

「ナイトメアの際は助けたのに？」

「……何故お前がその事を……!!」

さとりが知る筈の無いナイトメアとの交戦の事実、文の新聞にも書かれていない紅魔館のメンバーと霊夢しか知らない事だ

(地霊殿の主は心を読むさとり妖怪……心を読んだか)

「正解」

バーンの心の回答に正解を言い渡すさとり

「……不愉快な」

露骨に敵意を露にする、誰しも心を読まれるのを好む者はいない、バーンとて例外ではない

「ごめんなさい、でも教えてくれないかしら？ ナイトメアの際は助けて何故封印の件はダメなのかを」

「博麗の巫女や神にも言ったが余は掌で踊るつもりは無い、ナイトメアの件は余がナイトメアに興味があり向かった際の産物だ」

バーンの返答を受けたさとりはまた見つめる

「嘘ね……ナイトメアから助けたのは貴方が友人を救おうとしたから、ナイトメアなんて本当は興味無い……でしょう？」

「貴様……」

またも心を読まれ口にされる、自分の腹を探られる、それはバーンにとって耐えがたい屈辱、怒りの瞳でさとりを睨み付ける

「封印が破られれば貴方の大事にする友人も死ぬわ、ほぼ間違い無くね、妖精も人間も魔

女も吸血鬼も皆ね、友人を大事にしているのなら協力してくれても良いんじゃないかしら？」

「……断る」

バーンの返答にさとりの顔が歪む、怒りの様な悲しみの様な悲痛な表情に変わりバーンに叫んだ

「良いから協力しなさい！もう時間が無いのよ！」

さとりに余裕は無かった、幻想郷を守りたい気持ちと何も知らない妖怪達の呑気な心の声、そして早まった時間、それらがさとりから余裕を無くしていた

「友人が死んでも良いの!?!いつまで意地を張っているの!?!貴方はそれを良しとしない程友人を大事に思っているんでしよう!?!」

さとりの怒声が部屋に響き渡る、一瞬の沈黙の後、バーンが口を開いた「貴様に余の何がわかる……心を読めるからと調子に乗るな……」

静かに語るバーンだが全身から言葉から怒りが威圧感となり溢れている「幻想郷に干渉はせん、これは決めた事だ……貴様の戯れ言では変わらん」

「そう……」

威圧を受けても動じないさとりは質問をする

「では貴方は幻想郷の敵ですか？味方ですか？」

「どちらでも……」

「どちらでもない」

バーンの返答を待たずにさとりが喋る

「い……」

「いい加減にしろ？ いい加減にするのは貴方の方、心が揺れているのはわかっています、素直に協力すると言えば良いのです」

心を読み口に出すより先に話すさとり、まるで馬鹿にするように

「……」

バーンはゆっくりと立ち上がる、威圧感を増しさとりを睨み付ける

「!？」

心を読んださとりが驚き立ち上がる

「悟った様だな……そう貴様の敵にならなつてやろう……後悔はもう遅い」

魔力を解放し地霊殿を揺らす、さとりの余裕の無い後先考えなかつた行動がバーンの逆鱗に触れたのだ

「……可能性は無かつた、敵にしかならない可能性しか無いなら貴方は要りません、封印させて貰います」

「何？」

直後バーンを結界と封印式が覆いバーンを抑える

「……ッ!？」

脱出しようとするが身動きが取れない、魔力を用いても破壊出来ない

(強力な封印結界!? 無縁塚の封印に近い物か!)

「無駄です、博麗霊夢と八雲紫の結界と封印術を練り合わせた封印式です、今の貴方では破壊出来ません」

さよりの作り出した強力な封印結界、彼女もその力で封印に協力していたのだ

「……余をどうするつもりだ?」

「貴方が協力するなら解きましよう、嫌だと言うならこのまま全てが終わるまでそのままで、貴方の力は危険、寝返られても困るのです」

「……」

バーンは何も返す事無く抵抗を止め目を閉じた

人里

「大丈夫か！」

自警団に呼ばれた慧音がナイトメアの前に現れる

「うっ……!?」

そこで慧音が見たのは死体、体を何カ所も貫かれ血溜まりを作り倒れている自警団の死体

「間に合わなかったか……クソオ！」

すぐに人里を隠す、避難者最後の一人は彼だったのだ

（君の勇気ある行動で里の住人は無事に避難出来た……礼を言う）

（妹紅から聞いた話だと霊夢の結界が必要……こいつを今逃す訳にはいかない……なら
！）

策を考え、意を決しナイトメアに飛び込んだ

魔理沙の家

ドゴーン!!

「うわっ!?!」

寝ていた妹紅が飛び起きた

「んん? どうしたんだ妹紅?」

妹紅の声に目を擦りながら起きた魔理沙

「今のデカイ音が聞こえなかったのか?」

「いやあ? 聞こえなか……」

ドゴーン!!

「今のは聞こえた……何だ? 人里の方からだけど……」

「人里……慧音か?……まさか!」

気付いた妹紅がベッドから飛び上がる

「ナイトメアか!?!」

魔理沙も気付き飛び上がる

「行くぞ魔理沙! 装置はちゃんと持ってこいよ!」

「わかつてるぜ!」

装置を手に取り家を出た二人は急いで人里へ向かった

隠された人里

「慧音！」

ナイトメアと交戦する慧音の元に駆け付けた二人

「妹紅！それに魔理沙！来てくれたか！」

「あれだけデカイ音がしたらな」

慧音の策とは出来るだけ大きい音を出し妹紅達を呼び出す事だった、結果は見事成功し二人は来た

「遅いわよ！何やってたの！」

「チルノ！来てたのか！」

二人より先に駆け付け交戦していたチルノが叫んだ

「大ちゃんに霊夢を呼んで来るように頼んであるわ！こいつを抑えるの早く手伝って！」

「わかった！」

勢いよく飛び出した二人はナイトメアとの交戦に入る

封印されたバーン、再び動き出したナイトメア

破滅への序曲は止まらない

第20話 復活

博麗神社

「霊夢さん！起きてください！」

霊夢を呼びに行つた大妖精が寝ている霊夢に叫ぶ

「……………何よお……………渡したい物つて今なのお？眠いんだから後にして……………」

再び眠りに着こうとする霊夢にまた叫んだ

「起きてください！ナイトメアが出たんです！」

霊夢を揺り動かしながら伝える

「……………ナイトメアが？……………バーンは？」

ナイトメアと聞いて目が覚めた霊夢はナイトメアを単独で破壊出来るバーンの今を尋ねた

「バーンさんは地霊殿に行つて帰つて来ないんです！今は霊夢さんしか頼れる人が居ません！お願いです早く！」

「……………わかつたわ」

大妖精の必死の訴えにすぐに着替えを始めた霊夢は着替えの後、大妖精と共に人里へ

向かった

地霊殿

「さつきからずっと黙ったままですが寝られた訳ではないでしょう？」

目を閉じ沈黙を保つバーンにさとりは話し掛けた

「……心を読めばよからう」

動きを封じられて約1時間、さとりの問いにようやくバーンが口を開いた

「……どうやったか知りませんが貴方は既に心を閉ざしています、私にも読む事は出来ません、今……何を考えますか？」

「……」

さとりにも読む事は出来ない、それを聞いてバーンは口許を緩めた後、また沈黙に戻った

隠された人里の周辺

ナイトメアは暴れまわっていた、弾幕をもともせず攻撃を繰り返す、一定以上の距離を空けて攻撃してくる少女達を追い回しながら

「クソツッ！ やっぱり効きやがらねえ！ 霊夢はまだか!?」

攻撃を回避しながら魔理沙が叫んだ、一応ありとあらゆる攻撃を試してみた、修理されたミニ八卦炉によるマスタースパークも含めナイトメアにはどれも効かなかった

「霊夢が博麗神社に戻ってるならもう来る筈だ！ 持ちこたえろ！」

応戦しながら妹紅が叫ぶ

「わかってるわよ！」

チルノも叫ぶ

「妹紅！ そいつを遠ざけられないか!? 地形が変わってしまっ！」

1歩退いた場所で様子を見ていた慧音が叫んだ、暴れまわるナイトメアと弾幕のせいで人里周辺の地形が変わり始めていた

「わかった慧音！みんな！無縁塚の方面に誘導するぞ！あそこの手前には広い平地がある！」

「それは良いけど霊夢はどうするんだ！」

妹紅の提案に魔理沙が問う

「霊夢には私が伝える！」

慧音が口を挟む

「里を隠している以上あまり無理は出来ない！すまないがナイトメアは任せる！」

「わかった！行くぞチルノ！」

「わかったわ！……コラア！あたいに着いてきなさい！」

弾幕を放ちながらナイトメアを刺激し誘導していく、その間にもナイトメアの攻撃は止まない、3人は慎重に誘導を行っていった

守矢神社

「……」

神社の外で神奈子と諏訪子は陽が射し始めた幻想郷を見ていた、二人は何も話さずただ苦い顔で睨む

「神奈子様、諏訪子様、起きておられたのですか？」

早朝の掃除の為に起きてきた早苗が二人に気付き話しかけた

「早苗……」

振り向いた二人は早苗を見るとまた幻想郷の景色を睨む

「……どうかされたんですか？」

二人の雰囲気にもいつもと違うものを感じた早苗は二人に聞いた

「何か……とても嫌な予感がするのよ」

背中越しに神奈子が話す

「私達が神だからかな、さつきからずっと予感が消えないの」

諏訪子が話す

「嫌な予感って……異変ですか？」

「おそらくね……早苗、いつでも戦える様にしときなさい、異変はいつ来るかわからないからね」

「はいー！」

元氣よく返事をするが二人の雰囲気は変わらない、その姿を見ている内に早苗も不安

になつてきた

(お二人がここまで思い詰めるなんて……何故だろう……私まで凄く不安になつてきた……)

二人の背中を見つめながら早苗は何事も無いようにと強く願つた

白玉楼

「おはようございます幽々子様、今日はお早いのですね」

起きた妖夢が部屋に居た幽々子に挨拶する、幽々子は暗い顔をしながら妖夢に顔を向けた

「……寝てないのよ……寝れなくてね」

「お体に障りますよ、どうしたんですか?」

妖夢の気遣いにぎこちない笑顔を見せた幽々子

「ねえ妖夢……もし幻想郷に異変が起きたら貴方は幻想郷の為に戦つてね」

「……どうしたんですか急に……」

突然の言葉と幽々子の表情に妖夢は心配気に尋ねる

「言葉の通りよ……幻想郷に危機が訪れたら救いに行つて欲しいの」

「白玉楼……幽々子様は護衛はどうするんですか？」

「幻想郷に比べたら白玉楼なんてただの家よ、重要じゃ無いわ、私も同じ……それより妖夢、約束してくれるかしら？」

「……」

妖夢は考えた、いつもの幽々子のお願ひならば空返事をしながら受けただろう、だが幽々子の表情がそれがいつもの軽いお願ひでは無い事を妖夢に悟らせる、いつものような空返事は出来ない、だから妖夢は考えた

「……わかりました、幽々子様がそれをお望みなら私は幽々子様の剣として幻想郷を敵から守ります」

真つ直ぐ幽々子を見つめ約束する、その言葉に嘘も動揺も無い、ただ主の命に従う武人がそこにはいた

「お願ひね妖夢……」

またぎこちない笑顔を見せた幽々子は自室へ戻つて行つた

「幽々子様……お任せください」

決心を言葉と共に決めた妖夢は刀の手入れを始めた

命蓮寺

「どうですか村紗?」

白蓮が朝早くから作業をしている村紗水蜜に話しかけた

「言われてた通り聖輦船に戦闘機能を付けました、後は微調整だけなのでいつでも大丈夫ですよ」

「ごめんなさいね、無理を頼んで……」

無理を聞いて貰った白蓮は水蜜に感謝を述べる

白蓮が水蜜に頼んでいた事、それは聖輦船の改修、聖輦船に攻撃機能を付け戦闘を行える様に水蜜に頼んでいたのだ

「いやあ良いんですよ!暇だったから丁度良かったんです」

油まみれの顔ではにかむ水蜜

「でも聖輦船にこんなもの付けるなんて何かあるんですか?」

「近い内に必要になります……そうですね、今夜にでも話しましょうか」

「はあ……」

その場から去る白蓮を見送った後、微調整を開始した水蜜

（やはり何か大変な事が起きるみたいだね……安心してください、白蓮様のお心に気付かない私達ではありません、雲山達も気付いています、何かあっても私達は白蓮様のお心と一緒にです！）

不安と決意を秘め聖輦船の改修は続けられた

永遠亭

「師匠！手紙が来てますよ！」

医務室に居た永琳に鈴仙が手紙を持って入ってくる

「ありがとう、誰から？」

「それが差出人不明なんです、封を開けようにも手紙自体に封印がされて開けられな

いんです……」

不思議な手紙を渡すと永琳は術式を展開し手紙の封印を解く

「この封印は貴方には無理ね、それと差出人はわかったわ、大事な用件だから席を外してくるかしら？」

「わかりました、朝食の準備をしてきますね」

医務室を出た鈴仙を確認した後、手紙に目を通す

「……そう、昨日は往診で行けなかったけどもうそこまで……」

手紙の差出人は霊夢、無縁塚の封印の件での連絡だった

「いよいよ時間が無くなった……か」

手紙に再度封印を施し机にしまい窓を開け竹林を眺める

(月に戻る頃合いかしらね……姫様や鈴仙が納得してくれば良いけど……)

1人考える、彼女は現実主義者、封印が破られたら幻想郷の滅びは免れないとわかっている、だから戦う意思は無い、そして自分の故郷へ避難しようと秘密裏に月と交渉していた、永遠亭の者だけを月に移住出来る様に

(もつとも……月の科学力でも勝てるかと言われたら厳しいでしょうけど……)

幻想郷の大地に住まう者達より遥かに強い月の住人でさえ封印された者を相手にするのは分が悪いと感じていた

(可能性があるとすれば今の所……彼だけ……ね、あの様子では協力は無理そうだけど……)

唯一の可能性を思い永琳は移住の件を永遠亭の皆に話す事を決めた

旧都

「勇儀、起きてるかい？」

「萃香じゃないか、どうしたんだいこんな時間に？」

旧都では二人の鬼が合っていた

「妙な胸騒ぎがしてね……私だけかと思ったら勇儀もみたいだね」

「ああ、おかげで寝れやしなしいし酒も旨くないときた、最悪だよ」

不機嫌に酒を飲み干す勇儀は盃を萃香に渡す

「おそらく……だけど、何か起こるね、幻想郷を揺るがす様な何かとんでもない事がさ」

酒を注ぎながら萃香が話す

「だろぅね、あたしもそう感じてる……さとりも何かやつてるみたいだし……でも……」
盃を受け取った勇儀はニヤリと笑う

「その時は暴れさせて貰おうじゃないか！」

酒を半分飲み萃香へ渡す、渡された萃香も笑い返す

「フフ……いつ以来かねえ、私達が二人で暴れるのって……」

残る酒を飲み干しました注ぐ

「覚えちゃいないさね、ともかく今は我慢だね、その時が来れば派手に暴れようじゃないかー」

「楽しみだねえ……」

二人の鬼は酒を飲み時を待つ

太陽の畑

「どうしたの？元気が無いわね貴方達……」

水をやる幽香が花に話しかける、花の気持ちかわかる幽香の問いに花達は答ええないが何かを感じている事は幽香にはわかった

「安心して、貴方達は私が守るわ、大丈夫よ！貴方達を枯らしたりもしないわ、だから安心して」

幽香のかけた声でも花達に元気は戻らない

（この子達がこんなに怯えるなんて……何かが起きる前触れかしら……異変？）

水をやり終えた幽香は家に戻りながら考えていた

（何があっても守り抜くわ）

決意を胸に家に入った

紅魔館

「……」

自室で寝ていたレミリアは不意に目が覚め起き上がる

「何……？この感覚……」

自分の内から感じる妙な感覚に胸に手を当てる

（私の能力が……警告……いや、運命の分岐を示している……）

運命を操る程度の能力がレミリアに未来への分岐を教える

（何の分岐かはわからない……遠い未来の話なのか直近の事か……そして大した事ではないのかはたまた生死に関わるか……）

ベッドの上で考える、彼女の能力は本人にもよくわかっていない能力、他人の血を吸い過去を見たりするのはその一辺、たまにこうしてお告げのようにレミリアに伝える事があるのだ

（……考えても仕方無いわね、私にわかる事じゃないし）

ベッドから降りたレミリアは伸びをして歩き出す

「咲夜！着替えを持ってきて！」

咲夜を呼びパーティーの準備に取り掛かった

無縁塚へ続く平地

そこではナイトメアの誘導に成功した3人がナイトメアと交戦していた

「イツテ!？」

ナイトメアの攻撃がかかる、如何に3人と言えども攻撃を回避し続けるのは困難、集中力が落ち危ない場面も増えてくる

「霊夢はまだか!？」

魔理沙が叫んだ、まだ霊夢は来ていない、焦りとイラつきが魔理沙に叫ばす

「魔理沙！危ない！」

魔理沙の視認出来ない死角からの攻撃にチルノが気付き叫んだ

「チッ!!」

気付いた攻撃を迎撃しようとミニ八卦炉を構える

「!!」

攻撃は横からの弾幕で打ち消された

「霊夢！」

攻撃の出所へ向いた魔理沙が叫んだ

「遅くなったわ」

駆けつけた霊夢が魔理沙へ飛び寄る

「ホントに遅いぜ霊夢！ほら！これが渡し物だ！」

にとりから受け取った装置を手渡す

「何これ？投げるの？……キャ!!」

二人の会話を割ってナイトメアの攻撃が放たれ二人は散る

「ソイツに介して結界を張るんだ霊夢！」

避けながら魔理沙が叫んだ

「……わかったわー！」

装置に霊力を送りナイトメアへ投げつけ結界を発生させる、強い力で縛られたナイトメアは形を固定化させ形態を変える

「なるほどね……これは楽で良いわ」

装置の効果を体感した霊夢はナイトメアを見つめる、ナイトメアは外殻を変形させコアを露出させる

「直ってるわね……」

バーンが痛めつけたコアは完全に修復されていた

「だから前より攻撃が激しいのか……」

ナイトメアの手強さが増したと感じていた魔理沙が呟く、そこに妹紅の激が飛ぶ
「問題はここからだ！気を抜くな！行くぞ！」

妹紅を先頭にコアへの攻撃が開始された

「食らえ！」

弾幕がコアへ集中する、しかしコアは大量の弾幕を受けても停止する事はない

「やっぱり弾幕じゃダメか……」

「どきなさい妹紅！」

コアへのダメージを感じられない妹紅を押し退けチルノが氷弾を放った

「少し効いてる！そうか！氷弾は物理に近いからか！」

氷弾が命中したコアが揺れ動く様を見て妹紅が呟く

「チルノ！そのまま撃ち続けろ！魔理沙！霊夢！援護してくれ！」

叫んだ妹紅がナイトメアの放つ弾幕を避けながら突撃する、意図を理解した魔理沙と

霊夢は妹紅を守る様に弾幕を放ちナイトメアの弾幕を打ち消す

「うおおおお！！」

援護があつても激しいナイトメアの弾幕が身を掠めながらもコアへたどり着いた妹

紅は振り上げた拳をコアへ打ち込んだ

「うらああああ！！」

破片を散らすコアへ更なる追い打ちをかける、コアを滅多打ちにし破片を更に飛ばさせる

「!?」

突然コアが発光し妹紅は思わず防御の体勢に入る

「うわっ!?!」

発光したコアが小さいビームを全方位に放ち被弾した妹紅を遠ざける

「大丈夫か妹紅!」

慌てて駆け寄る魔理沙に妹紅は手をかざし止める

「少し穴が空いただけだよ、大丈夫!それよりも一回行くよ!」

「大丈夫かよそれ……とにかく無理すんなよ!行くぜ!」

再びコアへ向かう妹紅、バーンや鬼程の威力こそ無いがコアへのダメージはチルノの水弾と共に確実に与えられていく、そして幾度かの回避と攻撃の果てにコアを破損させ、ナイトメアの終わりが見えてきた

「もう少し……のまま決める!」

コアを殴り続ける妹紅はコアから感じるダメージに限界を感じる、コアからの反撃を注意しながら更に攻撃を続けるがそこに魔理沙が叫んだ

「離れる妹紅！ビームだ！前より強力な力を溜めてる！」

ナイトメアの前面にある砲台に以前交戦した際に放ったビームの予備動作を行っている事に気付いた魔理沙が妹紅に離れるように言い渡す

「こ、こんなの撃たれたら防ぎきれないわよ！」

チルノが慌てながら叫ぶ、以前のビームでさえ地形を変えてしまう程の威力だったのだ、それが今回は更にそれ以上の力を溜めている、防ぐ事はおろか撃たれたら被害は言うまでも無く甚大だろう、射線上にたまたま居た妖怪や人間を容赦無く飲み込むだろう、そう確信出来る程の魔力を溜め込んでいたのだ

「どうするんだ！撃たれたらヤバイ！」

自分では良い考えが浮かばない魔理沙は霊夢に助けを求め見る様に

「……」

霊夢はジツとナイトメアを見つめ魔理沙への返事はしなかった

（クツ……こうなったらアレに当てるしか……多分持つ筈……！もし破られてもまた張り直せば良いわ！）

意を決した霊夢に魔理沙が怒鳴る

「おい霊夢！聞いてるのか！」

余裕の無い魔理沙へ向き領いた後、霊夢は3人に指示を飛ばした

「協力して！あの攻撃を無縁塚の結界に当てるわ！あそこなら防ぎきれぬ筈よ！」

同時に飛び出す霊夢、無縁塚の封印の側に立ちナイトメアの向きを誘導する

「アレに当てるのか……わかった！」

3人も霊夢の傍に向かう、ナイトメアは身を動かし砲身を霊夢達へ向ける

「ドジるなよ……」

今にも放たれそうなそれを見ながら魔理沙が呟いた

「私はドジっても大丈夫だけどね」

妹紅が軽く笑う、蓬来人故の冗談だ

「あたかもね！」

妖精のチルノも笑う

「……来るわよ！」

霊夢が叫んだ

極大のビームは4人に向かって放たれた、同時に散開した4人にビームは当たらず、

真っ直ぐ無縁塚の結界まで伸びていった

「どうだ!？」

ビームの先を見ながら魔理沙が結界が耐えられるかを霊夢に聞く

「う……くう……!?!」

主に結界を張っていた霊夢が結界から伝わる衝撃に顔を歪める

(も、持たない……!?!)

予想以上の威力に結界が持たない事を悟る

「威力が落ちてきたわ! もう少しよ霊夢!」

「踏ん張れ霊夢!」

落ちてきた威力を確認したチルノと妹紅が鼓舞する

「うう……!?!」

ビームは更に威力を落としていきついに照射を止めた、しかし……

バリッ

結界は耐えきれず壊れてしまう、そして封印の地に溜まる魔力が溢れてきだす

「大丈夫か霊夢!」

傍に寄った魔理沙が話しかける

「大丈夫……結界は壊れちゃったけどなんとか防ぎきれたわ……さあ次を撃たれる前に片付けるわよ！」

「わかったぜ！」

ナイトメアへトドメを刺そうと意気込んだ瞬間、辺りが無縁塚から流れた魔力が覆った

「なんだ……？ 邪悪な……魔力？」

気付いた魔理沙が呟く、妹紅もチルノも不思議そうにしている

「それは後！ コイツが先よ！」

事情を知る霊夢が一喝し全員がナイトメアへ向き直す

「?!?!」

流れた魔力にナイトメアが反応を示した、動き出そうと暴れるが装置により動く事が出来ない

「……何か様子が変だけど今の内ね、一気に壊すわよ！」

4人がコアへ向かい飛び出したその時、装置が力を失い結界が解けてしまう

「霊力が切れた!? こんな時に！」

液化化し始めたナイトメアを見ながら再び装置に靈力を送ろうとする

「!?……………えっ?」

ナイトメアの行動に靈夢が唾然とした、液化化したナイトメアは靈夢達に目もくれず高速で動き出したのだ

(あつちは……………まさか!?)

ナイトメアの意図を予想した靈夢に冷や汗が流れた

「逃げる気ね!」

チルノが叫んだ瞬間、装置を持った靈夢がナイトメアを追いかけ出した

「急いで!」

一言そう言うのと3人を待たず行ってしまう靈夢に3人は頷き合い靈夢の後を追った

無縁塚の結界跡

「入られてる……………」

侵入された形跡を発見した靈夢に不安が押し寄せる

(ナイトメアは封印された者と関係があるの?クツ……………まさかこんな事になるなんて

……)

齒噛みする霊夢に3人が合流する

「ここは……ここの中にナイトメアが逃げたのか!？」

「ええ……急ぐわよ、マズイ事になる前に!」

4人は直ぐ様封印の地へ飛び込んで行った

封印の地へ続く道

「ここは何なんだ霊夢?」

道を飛びながら魔理沙が聞いた

「……ここは化物の封印場所、強大な力を持った悪魔の様な奴を封じ込めてる場所よ」

「化物って……バーンよりもか?」

妹紅が驚き聞く

「ええそうよ、ナイトメアが何故ここに来たのかはわからないけど何か起きる前に片付けないと……」

「……もしそいつが復活したら……?」

不安気なチルノが問う

「……幻想郷は……」

苦々しく唇を噛みながら霊夢は答えた

「滅ぶわね……」

封印の地

「居た！ナイトメアだ！」

封印場所に着いた魔理沙が指を差した

「!?」

ナイトメアを見た霊夢の表情が変わった

「すぐナイトメアを引き離して！急いで！」

直ぐ様装置に霊力を込めて投げた

ナイトメアは封印の球体を覆い魔力による解放を行っていたのだ

「壊れろ！コノヤロー！」

装置により露出したコアに攻撃を加えるが形態変化したナイトメアは封印球に魔力を送り続けている

「退いてろチルノ！パゼストバイフェニックス!!」

不死鳥を纏った妹紅がコアへ向かい突進する

「不死」「火の鳥 鳳翼天翔」!!」

炎鳥を纏った攻撃がコアにビシビシとヒビを入れる

「これで終わりだ!」

コアを貫く瞬間、コアは強く発光し妹紅を弾き飛ばした

「ツアツ!?……………何だ!?!」

弾かれた妹紅は起き上がりナイトメアを見つめる

「……………」

コアは光を失い液体は霧散していき破損したコアだけが地面に転がった

「やった……………のか?」

3人に近付きながら妹紅が尋ねた

「ああ、最後に全魔力を使って封印を解こうとしたみたいだけどダメだったみたいだ」

「そうか……………良かった」

魔理沙の返事に安心した妹紅は息をつく

「これ壊しとくんではよ?」

コアに指を差しながらチルノが聞いた

「そうだな、バラバラにしとくか……」

コアへ1歩踏み出した瞬間、黙っていた霊夢が膝から崩れ落ちた

「霊夢……?」

駆け寄った魔理沙が霊夢を覗き込んだ

「……遅かった」

絶望の表情で霊夢は呟き、同時に封印球が轟音を出しながらヒビ割れていきそして

長年保たれ続けた封印は破られ強大な魔力と共にその者は姿を現した

地霊殿

「!!」

感づいたバーンが突然目を開いた

「どうしました？協力する気になりましたか？」

さとりの問いに笑みを浮かべたバーンは口を開いた

「フフフ……気付いて無いのか？今……封印が破られたぞ？」

「……冗談は好きではありません……!？」

さとりの言葉は途切れた、魔力を感じたのだ

「そんなまさか……早すぎる!？」

狼狽えるさとりに笑いながらバーンは話し掛けた

「さあついに復活してしまったぞ？どうするのだ？行かなくて良いのか？」

馬鹿にするように笑うバーンにさとりは怒りを露に叫んだ

「協力しなさい！でなければ貴方もここで死にますよ！」

死の脅しを込めて協力を強制する、だが

「フフフ……断る」

バーンは首を縦に振らなかった、それどころか更に馬鹿にするように笑っている

「余は一度死んだ身、死ねば本来の運命に戻るだけの事よ、死は余にとって脅しにはならん」

「……………!!」

拳を握り締め身を振るわすさとり、すぐにでも向かう所なのだがさとりが行っても無意味なのだ、アレに勝つにはバーンの協力が不可欠だとわかっているさとりは動けなかった

「フン……………」

また訪れた膠着状態にバーンはまた目を閉じた

紅魔館

「!?!」

その魔力に逸早く気付いたのはレミリアだった

(な……何このふざけた魔力は!?こんな……ありえない!?)
今まで感じた事の無い凄まじい魔力に狼狽する

「レミイ!」

気付いたパチュリーが息を切らしながらやってくる

「わかつてるわパチエ……咲夜!」

パチュリーに頷いたレミリアは咲夜を呼ぶ

「はい、何でしようかお嬢様?」

「パーティーは中止よ! 戦闘の準備をなさい! ゴブリンも妖精も全員ね! フランも起こして!」

「え……? 何故ですか?」

まだ事態を知らない咲夜はキョトンとしながら尋ねる

「良いから早くしなさい! 急いで!」

「は、はい!」

レミリアの怒声に慌てて出て行く咲夜

「……私は行くわレミイ」

咲夜が出て行った後、パチュリーが告げた

「……死んだら許さないわよ」

睨み付ける様にパチュリーを見ながら返事をするレミリアに微笑みながら答えた
「わかっているわ……じゃあ行ってくるわね」

親友に告げた後、パチュリーは紅魔館を出ていく、親友の背を見送りながらレミリアは無事を祈った

気付いたのはレミリア達だけでは無い、各地で魔力を感じた者達がレミリアと同じ様に戦いの準備を始める

白玉楼、命蓮寺、旧都、妖怪の山、守矢神社

そして……

異世界

「紫様ア!!」

藍が式を通じ紫に叫んだ

「どうしたの？そんなに慌てて……」

応答した紫は慌てず藍に詳細を尋ねる

「封印が破られました!!」

「何ですって!?!何故!?!まだ時間はあつた筈よ!」

紫から落ち着きは消えた、一番危惧していた事が起こってしまったから

「以前話したナイトメアです!ナイトメアが封印を外から破つたのです!おそらくナイトメアはアレに関係する物だったので……」

「そんな……なんて事……!?!」

受け入れ難い事実に爪を噛みながら紫は思索する

「……バーンは?」

「今は地霊殿の古明地さとり所に居ます」

「そう……わかつたわ」

決意した紫はスキマを作りだす

「紫様……」

「藍、貴方は幻想郷の民達を守って、私はやる事があります」

「……わかりました、お気をつけて紫様」

そこで通信を切った紫はスキマを前にたたずむ

(時間切れ……後は私に出来る事をするだけ……)

スキマに入り紫はその世界から姿を消した

封印の地

封印が破られると同時に強い閃光が魔界を照らした

「くっ……」

目を覆い閃光と共に感じる強い魔力に全員が震え息を飲んだ

(この魔力……バーンより……)

閃光の最中、感じた魔力がバーンより上だと魔理沙は感じていた

そして閃光が収まると辺りに濃い障気を漂わせ全貌を隠したその者は4人を高くから3つの赤い瞳で見下していた

「良くやったナイトメア」

声が響いた、重く、心にまで響く声だった

「長い……長い時を食わされた……許さん八雲紫……抹殺してくれよう……スパードの血族よりも先にな」

4人の事など眼中に無く話すその者、そこに冷や汗を流す魔理沙が話し掛けた
「よ、よう！お前……何者なんだ？仲良きは……出来ないよなあ……」

魔理沙の問いに間を置いたその者は高笑いをしだした

「フハハハハ！人間よ！死ぬ前に教えておいてやろう」

障気の霧から翼が現れ障気を振り払いながらその者は姿を現した

「我が名は魔帝ムンドウス」

それは幻想郷が孕んでいた果て無き闇

魔を統べし悪魔の帝王……

第21話 幻想大戦

ついに封印が破られ復活を果たした封印されし者

その名は魔帝ムンドウス

異世界の魔界を統べる悪魔達の帝王、巨大な天使を思わせる姿に3つの目を持つその姿は一見彫刻にも似た美しさを感じさせる

しかしその意思は悪魔以外を許しはせず妖怪も人間も全て殺し悪魔だけの世界を作ろうとしている、そしてそれを可能と出来る力を持つていた

「八雲紫へのみせしめだ……まずはお前達を殺し、次いでこの地の者達を皆殺しにしてやろう」

遙か高くから見下しながら死を宣告される、妹紅も霊夢も絶望に震え動く事すら出来

ない

「そんな事は……」

絶望に震える中、声が響いた

「させないわ!!」

声の主は魔理沙とチルノ、震えを止めた二人はムンドウスに向かって言い放った

「魔理沙……チルノ……」

ムンドウスへ啖呵を切る二人を妹紅と霊夢は見つめる、しかし動く事は出来ない

「フッフ……面白い事を言う、スパードの血族ならともかく魔力を少し扱える人間と妖精ごときが我に挑むとはな……」

彫刻の様な顔の表情こそ変わらないがムンドウスは啖呵を切る二人に興味を持った
「……我が力で根絶やしにするつもりだったが……」

赤い瞳を二人に向けムンドウスは話し出す

「お前達に免じて我が動くのは止めてやろう」

その言葉に一瞬安堵する魔理沙だが状況は何も変わっていない、ムンドウスをどうにかしなければ結果は変わらないのだ

「……代わりの者達を送ろう」

「何……?」

魔理沙が声を発した瞬間、ムンドウスの魔力が更に高まりムンドウスの前に黒球と異空間に繋がるゲートが作り出される

「ちよつと！何する気!?!」

チルノが叫んだ瞬間、黒球とゲートから大量の何か放たれる

「こいつら……悪魔か!」

放たれたのは悪魔、黒球とゲート、両方からおびただしい量の悪魔達が放たれる、その数は数百……いや数千以上

「外に……!?!」

放たれた悪魔達は道を通り幻想郷へ送り込まれる

「我が魔力で造り出した悪魔と私の居た魔界から呼び出した悪魔を放った、我とは違い力は弱い……苦痛を味わいながら死ぬがよい……フフフ……」

「フハハハハ!!」

ムンドウスの高笑いが辺りに響く、笑い声が響く中、拳を握り締める魔理沙

「霊夢! 妹紅! いつまで呆けてるんだ! あいつを倒すぞ!」

戦意を失っている二人に叫んだ

「まさか……ここまでの力を持つてるなんて……もうダメよ……幻想郷はおしまいよ……」

膝から崩れている霊夢が悲痛な声で呟いた、予想を遥かに越えるムンドウスの力は霊夢を諦めさせるには充分だった

「フフフ……その者は理解している様だ、我に抗う事の無意味を……この地を滅ぼした後、最後に絶望の内に殺してやろう……」

ムンドウスの楽しげな言葉、ムンドウスは自分に敵う者が幻想郷に居ない事を知っており悪魔を幻想郷に放つという事を行った、ムンドウスにとってそれは死の遊び、死ぬのか早いが遅いかだけの違い

「そんな事……させるか!」

そんなムンドウスの笑いを聞いていた妹紅が叫んだ、皆殺しにする、その言葉に友人

達を思い浮かべた妹紅は怒りで立ち上がり自然と拳を握り締めムンドウスを睨み付ける

「霊夢！立て！私達が幻想郷を守らなくてどうするんだ！」

奮起した妹紅が霊夢に檄を飛ばす、もう震えはない、幻想郷を守ろうとする心が、友を守ろうとする心が震えを止めていた、しかしその妹紅の声にも霊夢は動かなかった

「諦めましょう……私達では……バーンでも勝てないわ……皆も殺されるわ……」

霊夢は諦めを勧める程に戦意を無くしていた、ずっと地面を見つめ微動だにしない

「霊夢！」

その霊夢に魔理沙が叫んだ

「立てよ霊夢！やる前に諦めるなんてお前らしくないぜ！」

「魔理沙……」

顔を上げた霊夢に魔理沙は続ける

「異変を解決するのは博麗の巫女の仕事だろ？その巫女が仕事を放棄してどうするんだよ！」

「それにさ……」

ムンドウスを睨みながら話す魔理沙は霊夢に顔を向け話した

「あいつらがそんな簡単にやられるわけないだろ？それは私とお前が一番良く知ってるだろ？」

微笑む魔理沙、信じているのだ、悪魔ごときにやられる幻想郷の民達ではないと

「……」

またうつむいた霊夢は幻想郷の皆の事を思いだしていた

紅魔館

「来たわね！悪魔どもがうようよと……」

空から、地上から押し寄せる悪魔達を目視したレミリア

「アレ全部壊しても良いのお姉様？」

「ええ、遠慮はいらないわ、好きに壊しなさい」

「でも……太陽が出てるよ？」

「わかってるわ、だからね……こうするのよ！」

レミリアの体から紅い霧が溢れだし幻想郷全体へ広がっていく

「さあこれで自由に動けるわ……咲夜！」

「はい、お嬢様」

「準備は？」

「間に合いました、いつでも大丈夫です」

「わかったわ……紅魔館へ迫る悪魔を殲滅する、来るものは全て殺しなさい！」

レミリアの号令でゴブリンと妖精達は雄叫びをあげる

「フラン！行くわよ！」

「了解お姉様！」

姉妹を筆頭に悪魔達へ飛び込んで行った

「ハッ！」

妖夢の一閃が悪魔を切り伏せる

「ギイイイイ!?!」

切られた悪魔は断末魔の声をあげ生き絶える

「単体では問題ありませんが……この数は厳しいですね」

刀を構えた妖夢の前には今しがた殺した悪魔と同種の悪魔が何十体と妖夢を囲んでいた

この悪魔の名はアサルト、ムンドウスが造り出した下級悪魔、人間大の大きさがあるトカゲの様な悪魔、下級と言えどもその力は並の人間では太刀打ち出来ない力を持つ、更に器用な事に兜や盾を持ち自分の体から生成したトゲを撃ち込んでくるのだ

「六道剣 「一念無量劫」!!」

斬撃と共に放たれた弾幕がアサルトを薙ぎ払う、直撃し虫の息になる者もいるが盾で防いだ者もいる

「フツ!!」

弾幕を防いだアサルトの隙を狙い切り抜ける、数体を切り抜けた後、距離を取り虫の息のアサルトに弾幕を放ちトドメを刺す

「幽々子様には近寄らせません!」

アサルト達の様子を伺いながら刀で牽制する妖夢

「妖夢……」

そこへ幽々子が現れる

「幽々子様！私は大丈夫です！危険ですので中へお戻りください！」

主が危険な戦闘域に姿を現したのを見て退く事を伝える、これは弾幕ごっこでは無いのだ、命のやり取り……殺し合い、そんな危険な事に主を巻き込む訳にはいかないのだ
「ギイイイイ!!」

幽々子に気付いたアサルトが幽々子に飛び掛かる、刀を持つ者より今来た丸腰の方が組みやすしと思ったのだろう

「キイ!?ギイイイイ!!」

飛び掛かったアサルトが突如声をあげ幽々子の前で悶える

「キ……キイ……」

数秒悶えた後、アサルトは動かなくなり、そして生き絶えた

「主に死を操る程度の能力……やはり恐ろしいです……」

生き絶えるアサルトを見た妖夢が呟いた

死を与える能力、言うならばザキである、対象に死を与えるその能力は造り出された悪魔にも有効だった、だがその強力な能力もムンドウスには効かない、それはムンドウ

スの力が能力の許容を遥かに越える化物だからだ、しかし低級の悪魔なら通用する、幽々子の能力は今この場では妖夢より殲滅力があつた

「妖夢、行きなさい……幻想郷を守る為に」

妖夢の横に立ち告げた

「……今がその時なんですわね？」

神妙な表情で主に問う、先に言われた事が今なのかと妖夢は確認する

「そうよ、ここは私に任せなさい、こんな低級の悪魔達にやられる程柔くはないわ」

そう言うのと死蝶を飛ばし、蝶が当たったアサルトは生き絶えていく

「さあ行きなさい妖夢、死んではダメよ？」

ニコリと微笑んだ幽々子に妖夢は頷いた

「わかりました、幽々子様もお気をつけて……魂魄妖夢、行つて参ります」

主に告げた後、妖夢は身を翻しアサルトの集団の中に飛び込んで行く、襲い掛かるアサルトを切り抜けながら

「頼んだわね妖夢、私もここが済んだら向かうからね」

死蝶を大量に展開した幽々子はアサルト達を迎え撃つ

妖怪の山

妖怪の山にも大量の悪魔が押し寄せていた、空を漂う死神を連想させる鎌を持つシンサイズ、大鎌を持つシンシザーズ、その上位の牛の骨を依り代にしたデスシザーズ、鎌を4刀持つデスサイズ、そして白玉楼にも現れたアサルト、道中が長く狭い白玉楼とは違い陸と空から攻められる妖怪の山は白玉楼とは比べ物にならない量の悪魔が押し寄せていた

「う……うわああああ!!」

「ぎゃああああああ!!」

悪魔の大群に1人、また1人と力の無い妖怪達は倒れる、瀕死の状態で放っておかれる者もいれば既に事切れた死体を引き裂かれる者もいる、妖怪の山は今、地獄と化している

「く、来るな！来るなあああ！」

岩壁に追い込まれた妖怪にシンシザーズの鋏がゆつくりと迫る

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」

カン高い狂喜の声をあげながら鋏は妖怪の首を刈り取ろうと迫る

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤ!?!」

首を鋏む瞬間、シンシザーズの依り代の面が割られシンシザーズは断末魔の声をあげ空中に霧散した

「大丈夫ですか!?!」

シンシザーズを倒したのは早苗、恐怖で動けない妖怪に近寄り安否を尋ねる

「む、無理だ……勝てるわけがない!」

助けられた妖怪は戦意の欠片も無くただ脅えるのみ

「臆するな!妖怪の意地を見せよ!我等の居場所は我等で守らねばならん!立て!妖怪の誇りを見せるのだ!」

そこに神奈子が現れる

「し、しかし……」

神奈子の言葉にも動こうとしない妖怪、話を通じず殺意のみでやってくる悪魔達相手に平和に慣れた幻想郷の妖怪には荷が重かった

「ならばそこで震えていろ!居場所も守れず何が幻想郷の民だ!行くぞ早苗!」

早苗を連れ悪魔の撃滅に向かおうとする神奈子

「……お待ちください！」

飛び立とうとする神奈子達を妖怪が呼び止めた

「私も……行きます……戦います！」

拳を握り締め立ち上がる、震えは止まらないが覚悟を決めた目をしている

「……私も悪魔共の相手です！一杯でな、守る事は出来ぬ……抜かるなよ？」

その瞳に笑みを向けた神奈子は早苗と共に飛び立ち他所で戦う諏訪子と同じ様に散っていった

そして残された妖怪も他の妖怪を鼓舞し、一丸となって悪魔達と戦い始めた

妖怪の山は阿鼻叫喚の地獄から猛り狂う戦場になる、神奈子を筆頭に諏訪子、早苗、天魔、文等の鴉天狗達が戦場を駆け巡る

ここにも当然悪魔達の侵攻が行われていた

アサルトやシンやデス、人形を依り代にした悪魔、マリオネットも加わり旧都を荒らし回っていた

かに見えた

「そおらあー！」

萃香の拳がアサルトを打ち、殴り飛ばされたアサルトが他のアサルトを巻き込んで体を千切れさしながら飛んでいく

「悪魔つてのはこんなもんかい？拍子抜けだねえ」

勇儀がマリオネットをバラバラにしながらデスシザーズの依り代を握り潰す

「あんまり大した事はないけど数だけはいるねえ……」

次々と悪魔を葬る鬼の二人を囲む悪魔の大群に勇儀は酒瓶の酒を飲みながら笑う

「食い放題って奴さね、ねえ勇儀？どっちが多く倒せるか勝負しないかい？負けた方が飯を奢るって事でさ」

「良いねえ乗った！そうと決まれば本気で行くよ！他の奴等の獲物も全部あたしが頂いてやるよ！」

「おおー！勇儀が本気になったんならあたしもうかうかしてられないね！あたしも本気で行くよ！」

勝負が始まった瞬間、悪魔達はボロクズの様子に散っていった、二人の鬼の前に低級悪魔だけでは数を集めても無意味だったのだ、旧都に住む他の妖怪達も地上の妖怪達より強く勇ましい者も多い、悪魔達は地霊殿に近寄る事すら出来ず次々と倒されて行った

太陽の畑

「鬱陶しいわね次から次へと……」

アサルトを踏み潰し、断末魔を聞きながら幽香が呟いた、花畑の回りには既にアサルトの死体シン達の碎かれた依り代の山が出来ている、かなりの数を倒したが一向に止む様子は無い

(これ以上はあの子達を守りながら戦うのは難しいわね……)

大量の花を悪魔達から守り抜くのは困難と判断した幽香は花畑から遠ざかる、悪魔達に見えるようゆっくと

(狙いは私の様だし私が離れたら大丈夫でしょう)

花畑からかなりの距離を取った幽香は平地に降り立つ、それに追い付く様に大量の悪魔が幽香を囲む

「さあ来なさい、ジワジワと捌り殺してあげる！一匹たりとも逃がさない……覚悟しなさい」

傘を構えた幽香は飛び掛かってくる悪魔を前に微笑む、悪魔達は知るよしも無いが相手は究極のサディスト妖怪、悪魔達が生きて残る事は不可能だろう

命蓮寺

「収容状況は？」

水蜜が雲山に問う

「大丈夫、今完了したわ、この辺りの妖怪達は命蓮寺に収容出来たわ」

「よし！聖様！何時でも行けます！」

傍らの白蓮に報告すると白蓮は頷いた

「ではこれより命蓮寺は聖輦船となり悪魔達と交戦に入ります！水蜜！」

「了解です！聖輦船！発進！」

形を変えた命蓮寺は船の形になり聖輦船となり空を飛んだ、そして紅い霧の漂う幻想郷の空を我が物顔で飛び回る悪魔達の群れに飛び込んで行く

「これより戦闘に入る！撃ち方用意！」

水蜜の指示で妖怪達は聖輦船に装備された機銃へ向かう、この機銃は河童の協力で作り上げた魔力・妖力を弾にして撃ち出す魔法道具の一種、弾幕に不得手な者でも戦える様にこしらえた武器だ

「てえー!!」

水蜜の合図で一斉射撃が開始された、機銃の威力は凄まじく、悪魔達を次々と葬っていく、だが悪魔達も負けてはいない、機銃の弾幕を避けながら遠距離攻撃を放ってくる

「左舷被弾！損傷は軽微です！」

オペレーター妖怪が被害状況を知らせる

「左舷！弾幕薄いよ！何やってんの！」

通信越しに怒鳴る水蜜

「私達も出ます、水蜜、聖輦船は任せました」

「了解です聖様！お気をつけて！」

敬礼し白蓮達を見送った水蜜はすぐに通信機を取る

「聖様達が出撃される！誤射に気を付けろ！そんで気合い入れろよ！」

水蜜の一喝に聖輦船の妖怪達の士気は上がり、出撃した白蓮達も加わり戦いは更に激しさを増していった

隠された人里周辺

「大妖精！私から離れるな！」

「は、はい！」

慧音と大妖精は悪魔達に囲まれていた

「ハアッ！」

飛び掛かる悪魔に弾幕で向かえ撃つ

「ギユイイイ!?!」

倒された悪魔が断末魔をあげながら肉体を破裂させる

「!?!大妖精!・離れろ!・酸だ!」

破裂させながら撒き散らされる液体が地面を溶かすのを見て離れる、この悪魔はノーバディ、人間が四足歩行をしている様な悪魔、知能は低く同じ悪魔でも攻撃を仕掛ける、その体液は強力な酸で出来ており撒き散らしながら絶命する

（マズイな………私一人ならなんとかなるが大妖精を守りながらでは厳しいか………）

傍らにいる大妖精を庇いながら悪魔を睨む、大妖精も戦えない訳ではないのだがチルノの様な強い力を持つわけでもなく修行もしなかった、だから悪魔を相手にするには力が足りないのだ

「!?!」

悪魔を牽制していた慧音が気付いた

（また増えた………このままでは逃げる事も………）

次々と増えていく悪魔達、既に回りは囲まれ空もシン達が包囲している

（クソツ………満月ならどうにかなったのに………）

歯噛みする慧音、悪魔達が飛び掛からんとした瞬間、空から大量の弾幕が放たれ悪魔達を襲った

「大丈夫ですか？」

「お前達は……八雲紫の……」

悪魔達を蹴散らし二人の前に立ったのは八雲藍とその式、橙

「紫様の命で助けに来ました、澄！蹴散らすわよ！」

「はい！」

言うや否や悪魔達に弾幕を放つ二人に一瞬呆けた慧音だがすぐに持ち直す、そこに背後からアサルトが大妖精を襲う

「ギュー!?!」

アサルトは悲鳴と共に真つ二つになり生き絶えた

「僕も助太刀しよう」

アサルトを切つたのは霖之助、草薙の剣を構え笑う

「霖之助……助かる！食らえ！」

慧音も攻撃に参加し、人里の周辺も戦場となる

幻想郷の僻地

「鬼人正邪！隠れているろ！」

交戦する見張りが正邪に叫んだ

「わ、わかった！」

すぐに物陰に隠れ様子を伺う

（あれは悪魔か？勘弁して欲しいな……折角殺されない様にバーンが骨を折ってくれたのにさ）

正邪は見張りの戦いから目を逸らし幻想郷の景色に目をやる

（幻想郷全体に悪魔がいるな……そうだ、バーンは大丈夫なのか？）

ふとバーンの事を思い出す

（いや、バーンなら大丈夫……か？待てよ……いくらバーンでもこれだけの数の悪魔は無理か？）

少し思案した正邪はおもむろに立ち上がり駆け出した

「鬼人正邪！どこへ行く！戻れ！」

見張りが正邪を呼び戻すが正邪は止まらない

「悪い！少し恩返しに行つてくる！あたしの最初で最後の恩返しさ！終わつたら戻るよ！」

そう言つて悪魔を避けながら正邪は走つていく、恩人の元へ

地霊殿

（数千の悪魔が幻想郷に撒かれたか……アレは動く気がまだ無いと見える……遊んでい
るな……）

身動きの取れない状況からバーンは可能な限り状況を分析していた、もちろんさとり
に読まれぬ様に心に壁を作つて

（こうしている間にも侵略は続いている……私が今為すべきなのはここでこうする事な

のか、それとも戦いに行くべきなのか……)

バーンを抑えるさとりは焦っている、自分の判断は正しいのか？協力を諦め戦いに向かった方が良いのかを考えていた

「どうした？顔色が優れぬ様だが？……迷っているのだろうか？このまま余を縛りあり得ぬ協力を求めるべきか戦いに行くのかを」

そんなさとのり的心境はバーンには見抜かれていた、心を見抜かれたさとりは驚きバーンを見るがバーンは涼しい顔をしている

「何をそんなに驚く？心を見抜かれたのがそんなに驚きか？貴様のその表情を見れば誰でもわかるというものだ」

「……!？」

鼻で笑うバーンにさとりは益々焦りを増していく

(くう……やはり魔族に協力を求めるのが間違いだった……いや！しかしアレに対抗するには幻想郷の者では……)

焦りは思考の進展を阻んだ、結局はもとの位置まで戻り進む事はなかった

(もう来る頃と思ったが……何かあったか、仲間割れか……それとも余を用済みとしたか……)

バーンは待っていた、今この状況でしか会えないであろう待ち人を、待つと言うより

は予想だが読みが外れた事でバーンは自分の利用価値が無くなったのだと思いはじめた

永遠亭

永遠亭には悪魔はあまり現れなかった、回りが迷いの竹林に囲まれているだけあって大量の悪魔が迷い、永遠亭に着けたのは運の良い悪魔か空からたまたま永遠亭を見つけた悪魔だけであった

「何なのこいつらは？悪魔みたいだけど……あつま来た」

アサルトが1体竹林を抜け永遠亭の庭で倒した悪魔を眺める輝夜に襲い掛かる

「姫様！」

鈴仙の弾幕がアサルトを撃ち、アサルトは生き絶えた

「ありがとう鈴仙」

鈴仙に礼を言った後、鈴仙の隣にいる女性に声を掛けた

「何が起こってるか知ってるんでしょ永琳？答えなさい」

「……何故私を知っているとわかるんです？」

永琳が澄ました表情で返した

「貴方がコソコソ何かをしていたのは知ってるわ、内容まではわからなかったけど、この悪魔の襲撃に関係あるんでしょ？ 紅い霧まで出てる、レミリアが霧を幻想郷全体に出すんだこの様子じゃ幻想郷全体に悪魔が蔓延っているだろうしね」

「……わかりました、教えます……」

観念した永琳は話した、封印から始まり封印が破られた事、そしておそらく悪魔はその封印を破った者の仕業だと

「なるほどね……通りで妙な魔力を感じる訳ね、バーンに一瞬似ていると思ったけど全然違うわ、この魔力は殺意が強すぎる」

納得した輝夜は外に向かい歩き出す

「姫様、どちらに？」

永琳の問いに振り返らず輝夜は話し出した

「決まってるわ、悪魔達を倒しに行くのよ」

「姫様がなさる必要はありません、それより月に避難しましょう、話についてはいます」

永琳の言葉に鈴仙は驚愕し、ピクリと反応した輝夜は足を止めた

「……お断りね、あそこに戻るくらいなら私は幻想郷の者達と運命を共にするわ、行きた

「いなら貴方達だけで行きなさい」

再び歩き出す輝夜を見つめる永琳に慌てる鈴仙

「し、師匠！私も月には戻りたくありません！ごめんなさい！私も行きます！」

永琳に告げた後、鈴仙は輝夜の後を追っていく、そして残された永琳は静かに目を閉じる

（例え蓬莱人でも勝つことは出来ないわ……死なないなら封印なり如何様にもやりようがある……精神を壊すなんて方法もね……無理なんですよ姫様……）

封印されていた者に対しての無力を悟っている永琳は二人を見送った後も立ち続けた

「とつくに逃げたと思っていただけ……どうやら貴方も覚悟を決めた様ね」

突然背後から声が掛かった

「こうなつては仕方ないわ、私一人が月に逃げてもね……それにアレには月も例外なんて事はないでしょうから」

振り向く事なく返事を返す、誰が来たのか見ずともわかっている

「……用件はわかっているわね？」

背後の声に永琳は頷く

「わかっているわ、行きましよう」

振り向いた永琳はスキマへと入っていった

封印の地

「そう……そうよね！」

今まで幻想郷で会ってきた者達、皆が簡単に諦める訳が無い、それを思い出した霊夢は拳を握り立ち上がった

「ごめんね、少し弱気になってたわ、もう大丈夫！」

凛々しい顔で3人に告げる、もう絶望は無い、戦う意思を持ち霊夢はムンドウスを睨

み付けた

「だ、そうだぜ？魔帝さんよ？私達は諦めない、例えそれが蜘蛛の糸を掴む様でもな！」
得意面でムンドウスに言い放った魔理沙に3人も強い瞳でムンドウスを睨み付ける

「フハハハハハ!!」

その4人にムンドウスが笑いをあげた

「その意気込みは認めてやろう……だがお前達に勝ち目は無い、それでも来るのか？」
「やってみなきやわかんねえぜ！」

力の差を知って尚その闘志は衰えない、彼女等を動かすのは幻想郷を守る意思、それがムンドウスの力への絶望を消し、戦う道を選ばせた

「フフフ……ならば前座を用意してやろう、前座を倒せれたならば相手をしてやろう」
そう言うのとムンドウスは魔力を集め黒球を作り出した

「出でよ我が部下よ」

ムンドウスが魔力を高めると黒球が膨張し黒球から3体の悪魔が産み出された、巨大な大蜘蛛、巨大な鳥、人間大の黒鎧の剣士

「ファントム、グリフォンそしてネロアンジェロ、かつて我の部下だった者よ、我が魔力

で作り出した模造品よ、更に……」

足下に転がるナイトメアのコアに魔力を送る、魔力を送られ起動したナイトメアは液体を精製し3体の悪魔の横に並ぶ

「……上等だぜ！みんな！覚悟は出来てるな！」

「もちろんよ！」

魔理沙の確認に3人は声を合わせ答え、身構えた

「フッフ……行け！」

ムンドウスの合図に悪魔は飛び出した、だが飛び出したのはグリフォンとネロアンジェロ
ジェロ

「どこに行くつもり!?まさか外へ!？」

グリフォンの背に乗ったネロアンジェロはグリフォンと共に外への道へ向かい飛んでいく

「フッフッフ……何もここで相手をするとは言っておらん、止めたくば追うが良い、外の者が殺される前にな……フハハハハハハ！」

「んの野郎！」

ムンドウスの高笑いにキレた妹紅だがそれを抑え魔理沙が箒に跨がり叫んだ

「アレは私がなんとかする！そいつらを任せた！」

そう言うのと魔理沙はグリフォンを追っていく、残された3人はファントムとナイトメアに対峙する

「ナイトメアは霊夢が相手をしないとダメだな……あの蜘蛛も1人じゃ敵しそうだしどうする？」

妹紅が二人に聞いた

「ナイトメアには妹紅の物理攻撃？が必要なんですよ？じゃあナイトメアは任せたわ！あたいがあの蜘蛛の相手をするわ！」

「1人で大丈夫か？つてもそうなるか……」

チルノの発言に不安な妹紅だが現状を見るにそれしかなさそうだった

「ナイトメアは私が霊夢とやるわ、妹紅とチルノはそっちの化物蜘蛛をお願い」

相手を決めた3人に背後から声が掛かった

「パチュリー！どうしてここに!?!」

そこに居たのはパチュリー、少し息切れをしている

「魔力を辿って来たのよ、魔理沙とは途中で会ったわ、任せる！つて一言だけ告げて鳥を追いかけて行ったわ」

「そうか……よし！頼むぜパチュリー！」

「ええ……しかし……」

パチュリーは相手をするナイトメアを見ずにムンドウスを見上げる

「本当に途方もない魔力ね……何をどうしたらこんな魔力を持てるのよ……」

ムンドウスから感じる魔力に呆れを漏らす、魔法の彼女がそう感じる程にムンドウスの魔力は人智を越えている

「フフフ……魔に長けた者よ、知った所で無意味よ、貴様等は死ぬのだ、我が部下を乗り越えたとしても待つのは我よ、貴様等に明日は来んだ……さあ行けファントム！ナイトメアよ！」

ムンドウスの合図でファントムとナイトメアは動き出す

「行くわよ！幻想郷を守るのよ！」

霊夢の掛け声と共に封印の地での戦いは切って落とされた

幻想郷の命運を掛けた戦いは始まった

ただ一人、バーンを残して

第22話 敢然と立ち向かう

「こつちだ蜘蛛野郎！」

離れて戦うべく二人はファントムと共に広い魔界へ散っていく

「さあて……私達もやるわよパチユリー！」

「ええ、やりましょう」

ナイトメアへ構える二人にナイトメアが攻撃を放ち避ける二人
ムンドウスはその様を楽しげに見つめていた

side 妹紅・チルノ

「さあやるぞチルノ！」

霊夢達からかなり離れた場所でファントムと向き合う二人

「食らえー!」

まずは様子見……では無く倒す気満々のチルノの氷弾がファントムに襲い掛かる

ジユウ

ファントムに命中した氷弾はその身を傷付ける事なく蒸発してしまった

「チルノの氷を……!? あいつ溶岩かよ!」

チルノの強力な氷弾を容易く蒸発させるファントムの温度に妹紅は驚愕する

「……ならこいつはどうだ!」

妹紅が飛び出し拳をファントムの外皮に打ち付けた

（か、硬い……ナイトメア以上か!）

拳から感じる硬度、今まで体験した事の無い硬さに焦りを生みながら妹紅は下がった

「……」

喋らないファントムは手足を大きく上げ威嚇のポーズを取った、もう良いか? と言う
様に

オリジナルのファントムは言葉を喋る事が出来たがこのファントムはムンドウスの

作り出した意思の無いファントム、それ故に何も思わずただムンドウスの命に従う

攻撃体勢に入ったファントムの口内に熱が集まり始める

「……ヤバイ！チルノ避けるよ！」

集まる熱の高さに危機を感じた妹紅の声にチルノも領き距離を取る

そしてファントムから多大な熱量を持つ溶岩弾が二人に放たれた

「ッ!？」

余裕を持って回避した妹紅の顔が歪んだ

(なんて熱量だよ……充分距離を置いて避けたのにここまで熱気がくるなんて……)

地面に着弾した溶岩弾を見ながら妹紅は戦慄した、溶岩弾は地面を溶かしながら熱気を広範囲に広げる様を見て凄まじい熱量の高さを感じた

「チルノ大丈夫……!？」

チルノに振り返った妹紅の言葉が止まった

「うう……熱い……」

チルノは苦悶の表情で悶えていた、溶岩弾の凄まじい熱気は氷精の彼女に取って毒に近い、体からは汗を大量に流していた

「チルノ！大丈夫か!？溶けるのか!？」

氷精だから熱で溶けるのではないかと心配する妹紅にチルノは微笑み返した

「大丈夫よ……それよりどうすんの？あたいの氷も効かない、あんたの攻撃も効かない……勝ち目あんの？」

「……まだ何とも言えないな、とにかく色々やってみて糸口を見つけなきゃな」

「わかったわ、行くわよ妹紅！」

「おう！」

フアントムに向かい二人は飛んだ、それを迎え撃つフアントム

蓬莱人と妖精、そして魔界の大蜘蛛の戦いは熾烈を極める

紅魔館

「粗方殲滅出来た様ね……」

上空から紅魔館を見下ろすレミア、レミア達は紅魔館に攻めいつて来た悪魔達の

大半を片付けていた

「頃合いね」

紅魔館で残る悪魔と戦っている咲夜や美鈴を見ながら呟いた

「咲夜！美鈴！私とフランはこれより打って出る！紅魔館は任せたわよ！」

「お嬢様！それでしたら私もお供します！」

悪魔を蹴り飛ばした美鈴がレミリアに返した、咲夜も同じ様だ

「私とフランで良いわ、それより私が帰って来た時に紅魔館が滅茶苦茶だったら怒るわよ？」

「お嬢様……わかりました！この美鈴の名にかけて紅魔館を守り抜きます！」

大事な用件を伝えられた美鈴は力強く答えた

「紅魔館はお任せください、このナイフに誓い必ずや悪魔から守り抜いて見せます！」

咲夜もナイフを胸にかざし答える

「フフ……パーフェクトよ二人共！任せたわよ！」

二人を見て微笑んだレミリアはすぐに表情を険しくさせる

「フラン……私達は幻想郷に散って行動するわ、貴方へのオーダーは一つ、サーチアンドデストロイ！サーチアンドデストロイよ！悪魔どもを皆殺しにしてやりなさい！」

「了解お姉様！いっくよー！」

見敵必殺！そう命令を下されたフランは嬉々として幻想郷へ飛んでいく、フランの向かった方向を確認した後レミリアもフランとは違う方向へ向かい飛んでいった

「グイグイグイ!!」

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」

見送った二人の前に威嚇するアサルと高笑いするシンサイズが現れる

「死にたい奴……前に出る」

指を鳴らしながら美鈴が悪魔へ宣告する、何かの漫画を見たのだろうか、一瞬服を破りそうになって止めた

「雑魚だけで紅魔館を落とそうなんて……間抜けね……知るが良いわ！私の能力は……まさに世界を支配する能力だと言う事を！」

咲夜も何か読んだらしい、主の目が無くなった二人は吹っ切れた様に悪魔達を殲滅していった

side 妹紅・チルノ

「うらああー！」

ファントムへ大量の弾幕を放つ妹紅

「……」

弾幕をその硬い体で受けながら溶岩弾を放つファントム

「クッソ！効きやがらねえ！」

ファントムの硬さに嫌気がさしてきた妹紅を押し退けチルノが溜めていた力を放つた

「これならどう！」

ファントムの頭上に巨大な氷柱を作り出し落下させる、氷柱はファントムの熱に溶かし切られず炸裂した

「……これでやれたら楽なんだが」

バラバラになった氷がファントムを覆い一見やった様に見えるが氷の隙間から溢れる水蒸気にやっつてない事を悟る

「ヴオオオオオ!!」

雄叫びを上げ氷を弾き飛ばしファントムは姿を現す

「だよな……参ったなこれは……」

元氣なファントムに打開策が思い付かない妹紅は苦い顔で呟く

「ねえ……あいつの背中……傷付いてない？」

気付いたチルノが指を差した

「……本ただ少しだけど傷付いてるな……背中と……後顔か……そこが弱点か！」

妹紅の推察は正解だった、ファントムの弱点は顔と背中、そこは外皮とは違い柔らかいのだ、チルノの放った氷柱が背中に命中し砕けた欠片が顔に傷を付けていたのだ

「なんとかなりそうだな……良し！チルノ行くぞ！」

「わかったわ！」

二人は弱点の顔と背中に集中攻撃を開始する、ファントムも負けじと溶岩弾を連射し反撃する

その戦場は更に熱を帯び燃え上がる

幻想郷・上空

「待ちやがれ！」

グリフォンを追う魔理沙、弾幕を放ちながら空を縦横無尽に飛び回る

「邪魔すんなー！」

魔理沙に襲い掛かるシンを弾幕で粉碎しながらグリフォンに詰めていく

「!？」

魔理沙は驚き目を見開いた

グリフォンの背に乗るネロアンジェロがグリフォンから飛び降りたのだ

「二手に別れるつもりか!？」

すぐさま考える

(どうする?どつちも危険だ……)

埒の開かない選択に頭を掻いた魔理沙は叫んだ

「あの鳥からだ!死ぬなよみんな!」

幻想郷の民達がネロアンジェロに殺されぬ様願った魔理沙はグリフォンを追って

いった

白玉楼

「どれだけ居るのよ……いい加減うんざりしてきたわ……」

白玉楼に大量の悪魔の死体を積み上げている幽々子はまだまだ現れる悪魔達に呆れ顔で呟いた

「そこ危ないわよ?」

突撃してくるアサルトに忠告する

「ギイ!?ギイイイイイ!」

アサルトが勢い良く倒れこみ幽々子の前で生き絶えた

「その拙い知能じゃ分からないでしょうね、これ、触ったら死んじゃうわよ?」

死蝶を周囲に停滞させている幽々子が死蝶を指差して教えてあげる、先のアサルトは死蝶に突っ込み自滅に近い形で死んだのだ、だがアサルトに死蝶が危険だと認識する知

能は無い、アサルト達は漂う死蝶に触れ次々と死んでいった

(流石にここまで倒せば目的は明確ね……この悪魔達は人や妖怪を殺すだけみたいね、建物には無関心……そうとわかれば……)

その場に浮いていた幽々子はフワフワと白玉楼の門へ向かう、その間にも襲い掛かる悪魔は死蝶により幽々子に触れる事なく生き絶えていく

「悪魔を葬りながら向かいましようかねえ……私が行つても無意味かもしれないけど足掻いとかないとね……」

ゆつくりと白玉楼を出た幽々子は悪魔を葬りながらかの場所へ向かい始めた

旧都

ここにも悪魔の死体は積み上げられていた、旧都の猛者達が悪魔を相手に優勢を保

つ、中でも鬼の二人の力は凄まじく、悪魔すら泣き出す程の膂力で逆に蹂躪されていた
「取り敢えずはこんなもんかね、萃香！数はいくらだい？」

旧都に現れた悪魔の大半を始末した場で勇儀が聞いた

「百から先は数えて無い！」

フンと鼻を鳴らした得意面の萃香

「なんだいそりや……まああたしも三百くらいで数えなくなっただけだよ……まっこの勝負あたしの勝ちだね！百と三百じゃ結果は見えてるね！奢りよろしく！」

勇儀も得意面で萃香へ視線をやる

「んなつ!?何言ってるんだい！私だってそれぐらい倒してるさ！いやそれ以上さ！私の勝ちさ！飯を奢るのは勇儀の方さね！」

慌てて反論する萃香、何故彼女がここまで反論するか？それは鬼の負けず嫌いもあるが彼女にはお金が無かった、天界や博麗神社で居候に近い生活をしている彼女にお金など必要なかったのだ

「なんだい……あんたまた文無しかい？」

勇儀にはバレていた

「な、何を言うか!?私の勝ちだから主張しているだけだ！お、お金ならたんまり持つとるわい！」

あたふた喋る萃香、バレバレである

「まあ良いさ、勝負はまだ続いてるしね、地上にはまだ悪魔は沢山いるだろうからそこで白黒着けようじゃないか！」

「フン……良いのかい？私の圧勝に終わる事になるよ？」

「上等！その酔っぱらい面を泣き顔に変えるのもまた一興さ！行くよ萃香！」

「あ、勇儀待った！」

地上へ向かう勇儀を止めた、勇儀は怪訝な顔で振り向く

「あんた地上に出ないんじゃないのかい？」

「今は非常事態、そんな事言ってる場合かい？」

「それもそうね……じゃあ行こうか勇儀！」

旧都に残る僅かな悪魔を旧都の猛者達に任せ二人は地上へと向かって行った

side 妹紅・チルノ

「うらあ!!」

「やああ!!」

二人の弾幕がファントムの顔と背に直撃する

「ぬう……りやあああ!!」

怯んだ隙にファントムの顔面に飛び込んだ妹紅が顔を滅多打ちにする

「ぐあつ!？」

爪での反撃に胸を切られた妹紅が下がる

「はあ……はあ……まだくたばらないのかよ……タフ過ぎるだろ……」

かなりのダメージを与えた筈だ、空を飛ばないファントムにほぼ一方的に弱点の顔と背中、弾幕と殴打を与え続けている、妹紅なら二桁は死んでいる量のダメージを……しかしファントムは倒れない、空を飛ぶ二人に溶岩弾を隕石の様に落としたりするが二人には易々と避けられるが徐々に体力を削り今の様にダメージを与えたりしていた

「弾幕はあんまり効かないから……こうなったらダメージ覚悟で殴り続けてやる!

……チルノ!」

意を決した妹紅はチルノへ振り向いた

「!?……チルノ!？」

妹紅はすぐ異変に気付いた、チルノが大量の汗を流しフラついている

「チルノ！」

墜落しそうになったチルノに飛び寄り支える、同時にファントムの注意を逸らすために弾幕をファントムの回りに放ち煙幕を作る

「クソツッ！この熱気か！」

辺りを充滿する熱気、ファントムが大量に連射し隕石の様に落とした溶岩弾が辺りを異常な熱気のフィールドを作り出していた

（私は平気だけど……チルノには地獄か……）

妹紅は炎を操る故に熱には耐性があるので溶岩弾が直撃しない限りは熱気の影響は受けない、しかし氷精のチルノは別、熱は天敵なのだ、チルノ程の力があれば多少の熱は問題は無いがファントムの作り出した熱はチルノの許容を越える熱を出していた

「あ、あたいは大丈夫……もう少しなんでしょ？やるわよ……」

なんとか意識をハッキリさせたチルノが言うが誰が見ても強がりでは明らかだった

「辛いんだろ？離れてろよ……後は私がやる！」

「こ、自分が生意気言うんじゃないわよ……」

今にも倒れそうなチルノだがそれでもやろうとする、退くつもりは無い

「たまには子分の言うことも聞いてくれよ親分……子分の言うことも聞いてくれなきや

嫌われるぜ？任せてくれよ」

優しく話しかけた、親分子分の前に友人であるチルノの苦しむ顔を見るのが辛いのだ、だから妹紅も退かない

「……わかったわよ、今回は自分に手柄を譲ってあげるわ！ちゃんと仕留めなさいよ！」
退く事を了承したチルノはフラフラと離れていく

「任せてくれ親分……必ず倒すさ！」

決意を言葉にした妹紅は煙幕から出てきたファントムの前に立つ

「ファントムだっけな……覚悟は決めた！もう私に後退は無い！根比べと行こうか！」
体に炎を纏い妖術を込めた両腕を構えファントムに殴り掛かった

「ぬあああああ!!」

ファントムの顔を殴る、鬼気迫る顔で

「ツグツ!!……ラアツ!!」

爪が体を裂くが構う事なく殴り続ける

「かつ……!!……このヤロオオ!!」

ファントムの蠍の様な尻尾が肩を貫く、それでも妹紅は止まらない

「グオ……グオオオ……」

止まぬ殴打に遂に呻き声をあげて下がるファントム、その顔は既に原型を留めておら

ずグチャグチャ

「ぜえ……ぜえ……逃げるんじゃねえよ」

歩む血塗れの妹紅にファントムは口内に熱を溜め溶岩弾を放とうとする

「させるかよー！」

飛び込んだ妹紅の肘打ちがファントムの脳天を打ち抜き溶岩弾は発射される事なく

口内で爆発した

「ハッ……ザマアないなあ」

自分の溶岩弾にダメージを受けたファントムは怯みまた下がる

「終わりにしてやるー！」

終幕の言葉と共に飛び込んだ妹紅はファントムを殴る、今度は乱打ではなくゆっくりと1発1発に力を込めて

「カツ……カオオオオ……」

段々とファントムの抵抗が弱くなっていく、だがそれでも油断無く殴る、油断も慢心も無い、ただ勝つために力は緩めない

「ぜえ……ぜえ……ッッ!!」

右腕に渾身の力を込める

「ウラアア!!」

会心の一撃がファントムに炸裂しファントムの顔を割った

「グオ……オオ……オオ……」

ファントムはその場に倒れた

「やったぜ……」

ニヤリと笑った妹紅はファントムの様子を暫し見つめ動かない事を確認すると振り向き歩き始めた

「グオオオオオオ!!」

「なっ!?!」

向き直した時には遅かった、爪でガツチリと拘束されてしまう

「しっこい……ぞー……コノヤロウ!」

拘束から抜け出そうとするが強い力で抑えられ抜け出せない

「ッ!?!」

抜け出そうとした妹紅が見たのはファントムの大きく開いた口、それを見て何をしようとしているのかをすぐ理解する

(食べる気か!?!ヤバイ!!)

「離せえええ!!」

爪を押し広げようとするが動かない、そして近付く口

(クソオドジった……癩だけど諦めるしか無い……悪いみんな、一旦リタイアだ……後は任せる……)

一時の死を受け入れた妹紅は抵抗を止め迫る口を前に目を閉じた

(冷たい!?)

食べられる刹那……身に感じた冷気にハツと目を開けた妹紅は爪を見た

自分を抑える爪の片方が根元まで凍りついていた

「早く逃げて妹紅!!」

「!!」

背後から掛かった声で我に返った妹紅が凍った爪を砕き脱出し振り向いた

「なんで来た!?!」

妹紅は思わず怒鳴ってしまった、助けしてくれた者にとって耐え難い地獄の空間に戻ってきたのだから

「何言ってるのよ……子分を守るのは親分の務めでしょ……それに……」

離れて多少回復したとは言えやはり辺りの熱気はチルノにはかなり辛い、それでもやって来たのは……

「この程度で逃げたんじゃ……バーンに……」

溶岩弾を放とうとするファントムに手をかざす

「一生勝てないじゃない!」

能力を使ったチルノの冷気はもう片方の爪と前足の2本を凍らし、脆くなった足が自重に耐えきれず前のめりに崩れ溶岩弾は不発に終わる

「チルノ……それ……」

妹紅が気付いた、チルノの行った行為の意味を

そう、チルノが行ったのはバーンとパチュリーが教えた能力の使い方の応用、全体ではなく局所を凍らせる使い方、そして全力のチルノは熱く煮えたりするファントムを凍らせる程力を上げていた、バーンとの修行の成果が表れたのだ

「これが……あたいの全力よ!!」

鍛え上げた能力を最大限に高めたチルノはファントムに向かい両手をかざす

「うう……だあああ!!」

ファントムの周囲に発生した氷はファントムの熱に負けず徐々にファントムに迫っていく

「イケるぞチルノ！そのままやっちゃまえー！」

更に力を高めたチルノの能力はフアントムを凍らせていき顔を残すだけとなった

後一息、と妹紅が感じた瞬間だった

「悪足掻きか!？」

フアントムの口内に熱が溜まり溶岩弾を生成していた、そしてその銃口はチルノへ向
けられている

「チルノ！攻撃が来るぞ！避け……」

注意を促した言葉が止まった

妹紅の言葉に朧な瞳のチルノは反応を示さなかったからだ

（私の声が聞こえないくらい集中してるのか……この熱気の中で……アレを凍らせるの
も相当な力がある筈……動けないのか!？）

チルノの様子に察した妹紅がフアントムに目をやる、溶岩弾の発射に猶予は残されて
いない、今から止めるにも間に合わない

（なら私のやることは！）

成すべき事を悟った妹紅は炎鳥を纏いチルノの前に立った

「こいよ！チルノはやらせない！」

「ヴオオオオオ!!」

言葉の終わりを待っていたかの様に溶岩弾は発射された

「ハアアアアアア!!」

溶岩弾に飛び込み拳で迎え撃った妹紅の叫びが響き、衝撃で散らした破片が体を穿つ

「…………!!やあああああつ!!」

背後のチルノが叫んだ

「ヴオオオ…………オオ…………オ…………」

フアントムの顔を氷が覆い

「…………」

フアントムは完全に動きを止めた

「ハアアアア!!」

だが溶岩弾は止まった訳では無い、撃った本人が止まってもチルノを滅しようと止ま

る事は無い

「ま…………」

破片が身を穿ち血を蒸発させながらも妹紅は力を決して緩めない

「負けるかああああ!!」

吼えた

猛る叫びと共に溶岩弾を打ち砕く、この状況は奇しくも以前バーンと対峙した時と似ている、だが今回の勝者は妹紅、体は傷だらけだが炎鳥は消えず氷付けのファントムに向かい優雅に羽を飛ばたかし飛んだ

「これで……最後だああああ!!」

凄まじい勢いでファントムとぶつかり合う

ギャン

炎鳥と氷塊がぶつかった音、衝撃音を欠き消し風切り音が響く、ファントムを粉々に粉碎し、不死鳥は高く舞い上がった

「よし……よし……よし……やったぞチルノ！」

勝利の喜びを言葉で表しながらチルノのもとへ向かう、チルノの冷気で温度の下がった場所に降り立つ

「うっ……っ!?……」

地に足が着いた瞬間、よろけて膝を着いてしまう、激戦に傷付いていた体の悲鳴、緊張が切れた事が出てきてしまったのだ

「あたいならまた復活出来るのに……怪我してるのに無茶するからよ……」

チルノの微笑みが迎えた、チルノも憔悴している、熱気のダメージとファントムを凍らせる為に能力を酷使した為だ

「だからって見殺しに出来なかつたよ……だつて私達は親分と子分、それだから不死コ
ンビだろ? 相棒をやらせられるかよ……」

妹紅も微笑んだ、二人とも一先ずの安堵に笑った

「まだ終わってないわよ……さあ行くわよ」

そう、まだ終わってないのだ、ムンドウスを始め敵はまだ大勢いるのだ

「チルノ……お前はバーンを呼んで来てくれ……きつと地霊殿にまだ居る筈だ」

しかし妹紅はチルノと向かおうとせずバーンを呼びに行くことを頼んだ

「なんでよ! あたいじゃ役に立たないって訳!？」

チルノが食いかかる、なんで私だけと言った思いがあるのだ

「わからないのか！私達で勝てると思うのか！あの化物に勝つにはバーンの力が必要なんだ！お前にだってわかるだろ！」

妹紅が怒鳴る、わかっているのだ幻想郷の者では勝てないと

「でも……」

怒鳴られても渋る、チルノにもわかっている、勝てないと、それでも渋るのは仲間達と運命を共にしたいから、自分だけ比較的安全な事をするのが我慢ならなかった

「頼むよチルノ……私は満足に動けない、チルノだから頼むんだ、仲間外れじゃない……幻想郷を守る為だ！」

必死の妹紅にチルノは暫し見つめ合う

「終わったら……」

「えっ？」

紡ぎかけた言葉

「飯……奢りなさいよ」

そう言うのと身を翻した

「あ……ああ！みんな……みんなで行こう！」

妹紅は笑った、チルノも見ずとも笑っているのがわかっていた、そしてチルノは飛ん

で行く

「頼むチルノ……イテテ……さあ私も行かなきゃな」

血塗れの体を起こし、足を引きずりながら歩き出した、仲間との戦う死地へ

幻想郷のとある平原

「きゅとして……」

「ドカーン！」

悪魔は粉微塵になり生き絶えた

「よーし！この辺りも殲滅完了！次はどっちに向かおうかな」

辺りの悪魔を殲滅したフランが飛び立とうと地を蹴る

「!?」

飛んできた攻撃に気付いたフランは回避し攻撃の方向に振り向いた

「うわっ!?!」

振り向いたフランの視界は黒で覆われていた

「ッ!?!」

その黒に何かさされたらしくフランは吹っ飛び木に叩きつけられる

「誰よ……うぐっ!?!」

首を持ち上げられ木に押し付けられる

(く、黒い……剣士?)

首を絞められながらフランが見たのは黒い甲冑を纏う剣士、ネロアンジェロ

「フオフオフオ」

不気味な笑いをあげたネロアンジェロは手にする大剣をフランに突き立てる

(ヤバイ!?!)

剣を刺されると直感したフランだが遅かった、剣はフランの心臓目掛け直進する

「待ていっ!!」

声と共に斬撃がネロアンジェロを襲い、ネロアンジェロはフランを離し飛び退き周囲を見回した

「神を信じて生きている人々や妖怪を脅かし、幻想郷を地獄に塗り替える悪魔たちよッ！！たとえ神が現れずとも、いつか必ず心ある者が、神に代わって悪を裁く……！！」

どこからか声が聞こえる

「人それを……「天誅」と言う！」

「フオ!?!」

「ゴホッ……この声は……誰!?!」

声の主を探すネロアンジェロに声の主に問うフラン

「白玉楼、劍術指南役兼庭師！魂魄妖夢！幽々子様の命に従い……貴方に天誅を下します！」

今ここに吸血鬼と劍士対魔劍士の戦いが始まる

第23話 血路を開け

「大丈夫ですか!」

咳き込むフランに刀をネロアンジエロに向けたまま近寄る妖夢

「……何さっきの?」

「はい?」

息を整えたフランが訝しげに聞いた

「さっきの登場の仕方!」

「あー……あの、その……ちよつとやってみたかったです……あんな登場の仕方……変でしたか?」

少し恥ずかしそうに照れる妖夢は頭を下げ震えるフランに目をやる

「か……」

震えていたフランがポツリと呟いた

「カッコイイ!!ヒーローみたい!」

目をキラキラと輝かせ妖夢を見つめた

「!？」

フランの反応に一瞬驚いた、そこまでの反応をされるとは思ってたから（やった！こんなに喜んで貰えるなんて……やってみた甲斐がありました！）

しかしすぐに悦に浸り満足気に微笑む

「フフ……さあ成敗してあげ……うわっ!？」

調子に乗った妖夢の口上はネロアンジェロの剣撃により中断されてしまう

「ッ!？」

刃を交える妖夢の顔が歪む、弾き合い距離を取った妖夢の顔は先程までの余裕は無かった

（強い……あの太剣で私の速さに着いてこれるなんて……）

構えるネロアンジェロを見て実力の高さを感じとる

（尚且つ剣術も相当な物……何か違和感を感じますが……模倣の様な……何にせよ油断は禁物ですね）

ネロアンジェロの剣技に違和感を感じるも実力の高さに妖夢の顔は真剣になりネロアンジェロただ一人に集中する

「あたしも手伝う！」

そこにフランが協力を申し出る

「……すいませんが私だけでやらせて貰えますか？相手は剣士……私の領分ですの」

「……」

断りを入れた妖夢は返事の無いフランに了承したと受け取り刀の構えをより鋭くする

「……参ります！」

勢い良くネロアンジェロへ飛び出して行った、二人は切り合いをしながら移動していく、残されたフランは呆れた様に溜め息を吐いた

「これはね……決闘じゃ無いんだよ半霊さん……戦争なんだよ……」

切り合いを始めた妖夢に向かい眩いたフランは移動しながら戦う二人を追って歩いて行った

隠された人里周辺

「ふう……」先ずは落ち着いたかな？」

剣の血を拭き取りながら霖之助が呟いた、人里周辺の悪魔は殲滅出来た様だ

「慧音さん……大丈夫ですか？」

大妖精が傷付いた慧音を気遣う

「ああ平気だ……そっちは大丈夫か？」

藍と橙に向かい尋ねる

「こちらも軽傷です、では私達は他の戦場へ……」

式の二人が飛ぼうとした時、森から飛び出てくる者がいた

「アリスさん！無事だったんですね！」

飛び出てきた者の名を大妖精が叫んだ、所々傷を負っているアリスは5人に合流する

と謝りだした

「ごめんなさい！私一人じゃ無理だったの！」

「えっ？」

「……なるほど、想像がついたよ」

アリスの謝罪に困惑する大妖精の横で霖之助が察し、次いで慧音、藍、橙が察してアリスの現れた森に視線をやった

ドドドドド

地鳴りが聞こえてくる、それはドンドン近付いてくる

「キシヤアアア!!」

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」

「オツオツオツ!!」

森から大量の悪魔が現れた、アサルトにシンやデス、ノーバデイも加え更にシャドウと呼ばれる黒い何かが猫の様な猛禽類の形をしている悪魔も加え飛び出してきた

「ふう……団体様の御到着だ、まだまだ休憩時間には程遠いらしい」

草薙の剣を構えた霖之助の言葉に全員構える

そしてまた人里の周辺は戦場へと戻っていく

妖怪の山

「このっ！死ぬ！死ぬえ！」

ステルス状態のにとりが何かを踏み潰している

「気持ち悪いんだよ！死ぬえ！」

にとりが踏み潰しているのはフアントムベビーの大群、このベビーが数百年の時を掛けフアントムになるのだがまだこの状態では幻想郷の蜘蛛と大して違いは無い、踏むだけで死んでしまう

「ひゅい!？」

フアントムベビーを踏み潰していたにとりが驚いた、ベビー達が一瞬で全て弾けたのだ

「遊ぶでないにとり」

「別に遊んでる訳じゃないんだけど……」

神気でベビーを殲滅した神奈子が現れた

「被害はどれくらい？」

「鴉天狗の伝令によると半数近くやられたらしいですよ」

「ちっ……わかったわ、私はこれから悪魔を放った敵の大将の所へ向かうわ、ここは任せ
たわよ、諏訪子達と連携して」

「わかりました、じゃあ行きます」

足音だけが響き山の中に消えていくにとりを確認した神奈子は紅霧漂う空を見上げる

（これは言わば前奏、曲が終わった後に残るのは我等の喝采か悪魔の喝采か……………）
幻想郷の未来を思い神奈子は飛んで行った

sideフラン・妖夢

「くっ……………」

ネロアンジェロと剣技を交える妖夢の表情は優れない

（大剣で二刀と渡り合う力と剣技……………なんとという手練れ！しかし……………）

ネロアンジエロの剣閃を受けながら妖夢は更に違和感を感じていた

(やはり剣技に模倣を感じる……積み上げた物では無く見様見真似の様な……剣に魂を感じない……)

妖夢の感じる違和感は模倣、自らが鍛練の果てに培った技術では無くそれを扱う者の真似、それをネロアンジエロの剣技から感じていた

この妖夢の模倣という考えは正しかった、ムンドウスの作り出したネロアンジエロ、元はバージルと呼ばれる半人半魔の魔剣士を改造して作り出した者だ、だから剣技もネロアンジエロ独特の物、ムンドウスはネロアンジエロの外見にただで模倣する悪魔を融合させネロアンジエロ擬きを作ったのだ

「せあっ！」

ネロアンジエロの剣を二刀で押し飛ばす

「!!」

ネロアンジエロの構えにピクリと反応する

(居合い……)

ネロアンジエロの構えは居合いの際に使う構え、腰を落とし脇に剣を構えている

(居合いは迎撃向きの剣技……私が飛び込むとでも?)

弾幕を発生させた妖夢は発射する為に刀を構えた

「!?」

撃つ刹那、ネロアンジエロの体が膨張した様に見えた

「くあつ!?」

ネロアンジエロの大剣をかるうじて受け止めた妖夢だがあまりの威力に飛ばされる

「くっ……」

(まさか疾走しながらの居合いとは……)

妖夢の受けた攻撃、それは疾走居合い、居合いの構えのまま敵に高速で接近し居合い切りを行う元になったネロアンジエロの剣技

「!!」

立ち上がろうとした妖夢にネロアンジエロが拳から何かを放った

「くっ!?これは……」

横転しながら避け、弾幕を放つ

(魔力弾……連射こそ出来ない様ですが威力に優れている……遠近に死角無し……)

弾幕を切り払ったネロアンジエロを見据えながら分析する、質こそ違うが二人は同タイプ、剣技を主とし遠距離もこなせる

(来る!)

動き出す気配を察知したと同時にネロアンジエロは妖夢に接近し剣撃を繰り返す

「ハアツ!!」

二刀を使い渡り合う、ネロアンジェロの剣技にも妖夢は負けていない

「…………!!」

ネロアンジェロの剣撃を一刀を使い受け流す

「…………ふっ!」

もう一刀で切りつける、しかしギリギリで剣を戻し防がれる

(今!!)

体を1回転させ遠心力を利用した一刀を剣に浴びせる

「!?!」

ネロアンジェロの剣は離れこそしなかったが頭上に弾かれる

「ハアアアツ!!」

弾いた一瞬の隙を見逃さず二刀で切りつけた

ドン

響いたのは剣撃の音では無かった

「かつ……はっ!?!」

そして攻撃を受けたのはネロアンジェロでは無く妖夢だった、妖夢の腹にはネロアンジェロの膝が埋まっていた、そしていつの間にか大剣は消えている

「くっ……はあ!!」

痛みに一瞬怯んだがすぐに1歩下がり刀を振るう

「なっ!?!」

刀を振るよりも早くネロアンジェロが妖夢に詰め寄り拳を顔に打ち込む

(た、体術!?)

ネロアンジェロの怒濤の体術が妖夢を襲う、殴り、蹴られ、反撃を許されない

「がっ!?!」

連撃の最後に回し蹴りを受けた妖夢は吹き飛び岩壁に叩きつけられる

「かはっ……うぐう!?!」

そこに歩みよったネロアンジェロが首を捕まえ壁に押し当て手を掲げる、手に紫炎が走ると大剣が現れた、この大剣は自由に出し入れが可能なのだ、先程も弾かれた剣を消し体術に移行したのだ

「かつ……!?!」

苦しみに刀は手から離れ足下に落ちる、空いた手でネロアンジェロの手を引き離そうとするがびくともしない

(殺られる!?)

突き出された大剣に己の未来を予知し咄嗟に目を閉じた

「禁忌 「レーヴァテイン」」

声が聞こえた瞬間、轟音が妖夢の前を通り過ぎ、苦しさが消えた

「ごっ!?!……ごっほっ!?!……今のは誰……が?」

目を開いた妖夢は呼吸を整えながら自分を助けてくれた者を探した、首を絞められ苦しんでいた妖夢に声はよく聞こえていなかったし目も閉じていたから

「感謝してよー? あたしが助けなきや死んでたんだよ?」

妖夢の前にヒタヒタと歩く音と共にフランが現れた

「そうですか……」

助けてくれたのがフランだと確認した妖夢はすぐにネロアンジェロが飛ばされた方向に目を向ける

「……」

吹き飛ばされたネロアンジエロは大剣を携え遠くから歩いて来ていた、レーヴァティンを大剣で防いだのだろう、大剣に大きな穴を空けている

「助けてくれた事は感謝します……ですがアレは私が倒します」

刀を杖代わりに起き上がりながらフランに告げる、これは私の戦いだと

「ねえ……う？この戦いつて誰の戦いだと思う？」

そんな妖夢にネロアンジエロを見ながらフランは問うた

「……おつしやる意味が良くわかりませんが……」

質問の意図が掴めない妖夢はフランに目をやる

「これはね……幻想郷の戦いな、貴方の決闘じゃ無いの……わかる？」

「……」

フランの言葉に妖夢は返せなかった

「だから2体1が卑怯だとかそういう話じゃ無いの、あたし達は幻想郷が好き……だから幻想郷の為に戦う、ううん……戦うだけじゃない、勝たなきゃ……なら協力しないとダメだよ！」

「……」

何も返さないが妖夢は内心驚いていた、幼く見えるフランがここまで幻想郷を想い、考えていた事を……そして……

(その通りです……幻想郷を守る為の戦いなのに私は相手が剣士だからと私闘を持ち込んでしまった……幽々子様の命も忘れて……)

(すいません幽々子様……私はまだまだ未熟です……しかし……もう忘れません!)

自らを戒め、フランに向き直した

「貴方の言う通りです、これは私の戦いでは無く幻想郷の戦い……力を貸して貰えますか?それと改めて助けてくれてありがとうございます」

「良いよ!あたしも助けて貰ったしね!」

妖夢の願いにフランは笑って応えた

「さあいつくよー!」

「はい!」

構えた二人は場に戻って来たネロアンジエロに向かい駆けた

太陽の畑から離れた平地

「グギャアアアアアア!？」

アサルトの悲鳴が木霊する

「痛い?……でしようねえ……」

アサルトの手足を引きちぎり、捨てながら幽香は笑う

「フフ……」

アサルトの顔を踏み潰し傘を構え、発射された魔力弾がシンの依り代を砕く

「あら……新しいのが来たわね」

悪魔を惨殺していく幽香の前にシャドウが現れ、形を巨大な口に変化させ襲い掛かっ

てくる

「遅い遅い……」

スツツと避けた幽香の拳がシャドウに炸裂する

「へえ……」

幽香の拳は魔力の防壁に阻まれる

「少しは強いみたいね……本当に少しね」

言葉と同時に流れる様に傘をシャドウに向け弾幕が発射される

「なんだ……弾幕には弱いよね、簡単に弱点がちゃったわね」

弾幕がシャドウの影を痛め、弱点の球体を露出させる

「これでおしまい」

球体を殴り飛ばす、同時にアサルトが飛び掛かってくる

「ハイハイ……」

避けた幽香はアサルトの尻尾を掴み地面に叩き付ける、何度も何度も

「あら？まだ生きてるの？……死にかけね……道ずれにする気かしら？」

既に死体のアサルトを捨てた幽香が見たのは先程のシャドウ、赤く変色し死にかけたとわかった、そのシャドウが幽香を道ずれにするべく襲い掛かる

「必死ねえ……でももう良いわ、じゃあね」

傘から放たれたビームがシャドウを飲み込み跡形も無く消し去った

「流石に飽きてきたわね、こんな雑魚ばかりじゃ……」

デスサイズの鎌を奪い依り代に突き刺した幽香が呟いた、今のデスサイズを最後に花畑から引き連れた悪魔と増えた悪魔は全滅した

「あれは……何かしら？」

紅霧漂う幻想郷の空を見上げた幽香は何かを見つけた、紅霧により何かは良くわからないが巨大なシルエットとそれを追う小さなシルエットが見えた

「あれも悪魔？……面白そうね、行ってみましょうか」

好奇心を胸に幽香は飛び立った

隠された人里周辺

「キシヤアアア!!」

アサルトが奇声をあげて爪弾を大妖精に向け発射する

「させないよ」

霖之助が草薙の剣で切り払う

「しかしこれは参ったね……」

周りを囲む悪魔の集団、大妖精を中心に陣を作ってはいるが多過ぎる悪魔に疲弊と怪我が溜まる

「霖之助さん……こうなれば一点突破で一旦退避しましょう、このままでは全滅です」

傍らの藍が進言する、疲弊した彼女等には今の悪魔の数は余りに多勢に無勢と感じていた

「私も賛成だ、私がやられたら人里が危険に晒される」

「そうね、不本意だけどこの場は戦略的撤退と行きましょう」

慧音とアリスも賛成し霖之助を見る

「……そうだね、僕も同じ事を考えてたよ」

戦う者が全員承諾し一番手薄な場所を探す、そこで守られる大妖精が気付いた

「……もしかしたら逃げなくても大丈夫かも知れません」

「何故だい?」

大妖精の言葉に振り向いた霖之助は大妖精がある空の一点を見ているのに気付き同じ方向を見た、そして微笑んだ

「どうやら大丈夫らしい、みんな、助かったよ」

えっ? つと皆が空を見上げた瞬間、シンやデスを依り代ごと霧散させながら2名の救世主が降り立った

「遅れてごめんなさいね、後は任せといて」

現れたのは輝夜と鈴仙、凜とした瞳で悪魔を睨み付ける

「まさかお前が来るとはな……永遠亭に結界を張って籠つてると思ってたよ」

「そうね、私もそう思っ……」

慧音に続き話し出した藍の言葉は輝夜に止められる

「今はそんな事を言ってる場合じゃないでしょう？下がつてなさい、私がやるわ」

「貴方もよ……下がつてなさい」

1歩前に出た輝夜に歩み寄ろうとした鈴仙に手をかざし下がらせる

輝夜の周囲には数百の悪魔が囲い今にも飛び掛かっている、その悪魔達に向かい輝夜は静かに語りだした

「まったく……数ばかり集めて……死ぬ前に教えてあげる、数で囲めば勝てるでも……？バカじゃないの……？そういうこざかしい事と無関係な所に……」

「強者は存在する……!!」

同時に悪魔は飛び掛かった

アサルトの爪がトゲが！シンやデスの鎌や鋏が！マリオネットのナイフが！

目前に迫った攻撃に輝夜は一瞬、口を吊り上げた

「終わったわよ」

一瞬の出来事だった、大妖精達が気付いた時には悪魔は全てバラバラにされ大量の死体が積み上げられていた

「ハハ……もう全部彼女一人で良いんじゃないかな？」

その光景に霖之助が呟いた

輝夜が何を行ったのか？それは彼女の能力の1つ須臾（しゆゆ）一瞬を集めその一瞬の中を自由に動き回れる能力、この能力を使い認識出来ない一瞬の間に悪魔を殲滅したのだ

「鈴仙、悪魔はまだ幻想郷に蔓延っているわ、貴方は慧音に付いて彼女を守りなさい」

鈴仙に告げた輝夜は踵を返し飛び立とうとする

「姫様はどこらに？」

「私は行く所があるわ……しっかり守りなさい、もし慧音に何かあれば妹紅が黙ってないわよ?」

そう告げると輝夜は飛び立っていった

「よし、僕達は博麗神社に向かおう、あそこなら悪魔は神聖な気によつて入つてこれない筈だ」

霖之助の提案に頷いた一同は悪魔の襲撃に注意しながら博麗神社へと向かった

sideフラン・妖夢

「ハッ!」 「うりゃー!」

協力した二人の攻撃がネロアンジエロを襲う、フランが弾幕で牽制し隙を見た妖夢が斬撃を浴びせる

「……!?!」

二人の連携に押されるネロアンジエロ、如何に手練れの真似をしても二人の強者を同時に相手にするには厳しいものがあつた

「禁忌「フォーオブアカインド」!!」

4人に分裂したフランがネロアンジエロを囲い弾幕を放つ、弾幕が集中し爆発を伴い轟音があがる

「半霊さん後ろ!」

フランの1人が叫んだ、離れている妖夢の背後にネロアンジエロが上段に大剣を構えていた

「わかつてます!」

背後からの上段切りに二刀を交差させ背を向けたまま受け止める

「くはっ!」

その状態から背を蹴られフランの居る位置まで転がる

「大丈夫?」

分裂を戻したフランが歩み寄る

「ええ大丈夫です、それよりわかつてますか?」

立ち上がった妖夢は刀を構えながら聞いた、理解しているかを

「わかつてるよ!さっきのはワープだね、見た感じポンポン使える技でもないみたい、出

来るならもつと苦戦する筈だし」

「……」

「どうしたの？」

フランの説明に意外そうにしている妖夢にフランが尋ねた

「いえ……貴方はもつと大雑把なイメージがあつたので……分析しているとは思ってなかつたんです」

「……半年前のあたしならそうだったんだけど……ね！」

ネロアンジェロの魔力弾を回避しながらフランは嬉しそうに語りだした

「バーンにね！もつと考えて戦えって言われたの！だからあたしは頑張った！そしたらバーンは笑ってくれるの！」

「あたしはそれが嬉しくてもつと頑張った！初めてだったの！あたしの事を真剣に考えてくれて褒めてくれたのが！」

魔力弾を回避しながらフランは優雅に舞う

「それからね……」

妖夢の横に降り立つ

「あたしの中の狂気をバーンは抑えてくれた……それからは外に遊びに行ける様になつた……友達もいっぱい出来た！バーンのお陰であたしは幻想郷が好きになつたの！」

「だから……あたしは悪魔を許さない！悪魔なんかにはここはやらせないよ！」
幼い外見に似合わない強い瞳を妖夢に向けた後、フランは笑った

救われていたのだ……フランはバーンに

「そうですね……私も幻想郷が滅ぶのは遠慮します、バーンさんとの再戦もまだですし……」

フランを見つめていた妖夢はネロアンジェロへ向き直し刀を構えた

妖夢もまたバーンとの再戦に強くなる目的を与えられた者、バーンに勝つ為に鍛練する気力を貰っていたのだ

「行きますよ！それと私の事は妖夢と呼んでください、半霊ではありません」
「うん！じゃああたしもフランって呼んで！行くよ妖夢！」

二人はネロアンジェロに駆けた、妖夢の剣がネロアンジェロを切り、フランの弾幕が甲冑越しにダメージを与える、二人のまるで長年コンビを組んでいたかの様な熟練した

連携にネロアンジェロは反撃もままならず打ちのめされる

そのまま勝負は着くと思われたが

「オオオオオオ!!」

突然ネロアンジェロが咆哮し魔力が高まる、宙に浮いたネロアンジェロが更に激しく咆哮するとネロアンジェロの肉体は肥大化していく

「大きくなったよ!」

「ただ大きくなっただけとは思えません……注意しま……!」

注意を促す妖夢の眼前にネロアンジェロが疾走してきた

「つう!」

疾走居合いを刀で受けた妖夢は予想以上の力に踏み止まられず吹き飛ばされてしまう

「妖夢! キャン!」

飛ばされた妖夢に目を向けた瞬間ワープしたネロアンジェロの裏拳がフランを殴り

飛ばす

「なんて豪剣……っ!」

起き上がった妖夢が顔を上げ見たのは駆け寄ってくるネロアンジェロ
「このっ!!」

ネロアンジェロの剣撃を流すように捌く妖夢、豪剣を掻い潜り剣閃を浴びせようとしたりその時

「……………!?……………!?」

妖夢の体が切り裂かれた

「……………っあっ!!」

咄嗟に爆発性の弾幕を地面に放ち爆風を利用して飛び退く

「魔力の剣……………」

ネロアンジェロの周囲を滞空する剣を視認し顔を歪めた

(傷は……………致命傷ではありませんが深い……………しかし、まさかあんな奥の手があるとは誤算でした……………)

ネロアンジェロの作り出した魔力の剣、名を幻影剣、元はネロアンジェロの改造される前のバージルの使う技

「フォッフォッフォ……………」

幻影剣を滞空させながら妖夢に迫るネロアンジェロ、しかしダメージが深い妖夢は刀を杖代わりに立つのが精一杯だった

「やらせるかコンニャロー!」

そこにネロアンジェロの背後からレーヴァティンを構えたフランが飛び込んでくる
投合されたレーヴァティンはネロアンジェロに向かい背から貫いた

「うぐつ!」

レーヴァティンはネロアンジェロを貫かず地面に刺さった、そしてフランはネロアン
ジェロの拳を腹で受けていた

「……またワープ……うあつ!」

頭を掴まれたフランは上空に投げ飛ばされる

「何をする気……まさか!」

妖夢が逸早く感づいた、魔力の剣、ワープ、これらから導き出された答えは一つだつ
た

「止めろ!」

妖夢が叫んだ瞬間ネロアンジェロの周囲を滞空していた幻影剣が消えた

「ヤバッ……」

空中で体勢を立て直したフランが呟いた、周囲には幻影剣が刃をフランに向け囲んで
いた

「フラン! 避けてください!」

ネロアンジェロがかざしていた手を握り締めた
「あっ!!」

ザンツ

妖夢の目の前で惨劇は起きた、フランは数本の幻影剣に串刺しにされ落下していく
「フラン! フラン!!」

地面に落下したフランに叫ぶ、だがフランから返事は無い

「フォツフォツフォ」

静寂を壊す様にネロアンジェロの笑い声が響く

「キサマアアアア!!」

笑い声をかき消し怒声がネロアンジェロを射抜く

「許さない……絶対に許さない!!」

刀を構えた妖夢が血を飛散させながら駆けた

「ハアアアアッ!!」

剣閃が血と共に走る、傷の痛みなど怒りで忘れて妖夢の剣がネロアンジェロに向かう
「くああっ!!」

だが妖夢の剣がネロアンジェロを切る事は無く逆に切りつけられ小さい切り傷が無
数に出来ていく

「はあ……はあ……必ず倒す……!!」

最早二刀を持つ力すら無い妖夢は白楼剣を納刀し楼観剣を構える

「必ず……守る……命を賭してでも!!」

意識すら朦朧としながらもネロアンジェロに立ち向かおうとする、彼女は言葉通り命
を賭けてでも倒すつもりなのだ

「ヤダよ妖夢……死んじやダメだよ……」

朦朧とする妖夢に聞こえる筈の無い声が聞こえる、声に導かれるまま顔を向ける

「フラン……フラン!!」

声の主を見た瞬間、意識は鮮明になった

「吸血鬼って頑丈なの……流石にこれは死ぬかと思ったけどね」

身に幻影剣を刺したまま、血を噴き出しながらフランが微笑んだ

「……」

ネロアンジェロが妖夢を無視してフランに歩み寄る、まだ反撃の余力がありそうな妖夢より今にも死にかけんとしているフランにトドメを刺す事を優先したのだ

「フォツフォツフォ……」

大剣を上段に構え、トドメを刺さんと振り下ろす刹那

「……妖夢!!」

友の名を呼んだフランが体当たりを食らわせる、ネロアンジェロはよろけて後退り、フランは高速で飛び距離を取ってネロアンジェロの背後に回る、ネロアンジェロは二人に挟まれる形になった

「……!ーフラン!!」

フランの意図を理解した妖夢は残る力を振り絞り集中する

(集中しろ……フランの作ってくれた最後の好機を無駄にしないために……! 限界を越える!)

「……!?!」

妖夢から危険な物を感じたネロアンジェロはワープを行おうと魔力を集中する

「フォツ?!」

背後から攻撃を受けよるける、フランがワープをさせまいと弾幕を放ちながら突撃し

てくる

「ううりやああああ!!」

よろけたネロアンジェロの背中に体当たりを食らわせそのまま妖夢に向かい突進する

「……………奥義 「西行春風斬」!!」

その場に風圧を残し消える

「成敗っ!!」

剣閃はフランを紙一重で避け、切り抜けた

「かはあ……………はあ……………」

膝を着いて苦しさに喘ぐ妖夢

「はあ……………はあ……………うぷっ?!?はあ……………はあ……………」

ネロアンジェロの腰を掴んだまま地面を滑ったフランは血を吐きながらネロアンジェロに振り向いた

「オオオオオ!!」

ネロアンジェロが咆哮した、胴を真つ二つにされたネロアンジェロの上半身が苦しみと怒りを混じらせた様な声で咆哮していた

「貴方の負けです……貴方が本人なら私達は敵わなかったかもしれません……如何に剣技や技を真似ようとも魂の無い剣に私達を倒す事は出来ません!」

ズルズルと下半身に向かうネロアンジェロに告げた、魂、信念の差だと

「……しつこいよあんた」

よろけながら上半身を見下すフラン、その冷徹な瞳にネロアンジェロは恐怖を感じたのか下半身へと急ぐ

「きゅつとして……」

掌に目を作り出す

「ドカーン」

目を握り潰した

「オオオオオ!!」

咆哮を最後にネロアンジェロの肉体はバラバラに飛び散り、下半身も連動し霧散していく

「大丈夫？ 妖夢う？」

「私はなんとか……フランの方が重傷でしょう？ フランの方こそ大丈夫ですか？」

ネロアンジェロが死んだ事でフランを貫く幻影剣が消え、栓が無くなった為に血を大量に流しているフラン

「かなりキツイけど大丈夫だよ、言ったでしょ？ 吸血鬼は強いのに！ 傷もすぐ塞がるから大丈夫！」

笑みを向けたフラン、友達を守る事を成し遂げた彼女は嬉しそうに笑う

「1つ……聞いて良いですか？ 何故能力を使わなかったんですか？ 使えばもつと楽に勝

てたのに……」

フランの能力でトドメを刺したのを見た妖夢が聞いた、戦闘中は必死でそこまで頭が回らなかったのをトドメを見て思い出したのだ

「確かにあたしの能力を使えばもつと簡単に勝てたかもしれないね……」

「バーンがね……修行してる時に言ったの、あたしの能力が効かない敵も現れるかもしれない、だからお前は能力に頼らない戦い方をしろって」

妖夢の手を取り起き上げる

「ごめんね……あたしが能力を使っていれば妖夢はこんなに怪我しなかったのに……」

申し訳なさそうに頭を下げた、幻想郷を守る為なら問答無用で能力を使えば良い、妖夢に始めに言った事を自分が行えていない事がフランは恥ずかしかった

「気にしないでください、私もこれを修行と思えば良い経験です、それにフランが居なければ私は死んでいたので……」

しかし妖夢は怒らず、それどころか感謝した

「ありがとうございますフラン」

フランに笑顔を向けた

「……うん！あたしもありがとう妖夢！」

フランも笑って返した

「さあまだ悪魔は居ます……申し訳ありませんが肩を貸して貰えますか？」
「うん！一緒に行きこ！妖夢！」

二人は肩を組み合い、より魔力の濃い場所へ向かいフラフラと飛んでいった

幻想郷・上空

「いい加減止まりやがれー!!」

魔理沙の弾幕がグリフォンに炸裂し爆煙を発生させる

「グオオオオオ!!」

爆煙を吹き飛ばしたグリフォンが魔理沙に向き直し威嚇する

「ようやくヤル気になったか！来いよ！焼鳥にしてやるぜ！」

人間の魔女と魔鳥、
幻想の空にて対峙する

第24話 おおぞらに戦う

「まったく好き勝手暴れやがってこの野郎……」

魔理沙は怒っていた

「よくも私達の暮らす幻想郷を荒らしてくれたな！」

怒りのままグリフォンに怒鳴る

「グオオオオオ!!」

グリフォンも負けじと威嚇し体に電撃纏わせる

魔理沙がグリフォンを追う最中、幻想郷の空を飛びながらグリフォンは電撃を無差別に撃ち続けていた、そのためグリフォンの通った道は電撃により穴だらけになり更に被害者まで出ていた

「お前は許さないぜ！絶対になだ！覚悟しやがれ！」

魔理沙は空を駆けた、そして弾幕を展開しグリフォンに放つ

「グオオオオオ!!」

電撃を棒状に縦に並べて放つ、それは電撃のカーテンの様になり魔理沙の弾幕を消し

ながら迫る

「おっと！力だけで雑な弾幕だぜ！この間から避けてくださいって言うてる様なもんだ！」

電撃の隙間を抜けた魔理沙はグリフォンへ一直線に向かい、擦れ違い様に弾幕を浴びせる

「効いてるのかよくわからないな……ナイトメア程耐性があるわけじゃなさそうだけど……」

手応えはあるがピンピンしているグリフォンに渋い顔で呟き一旦距離を取る

「こんなボスキャラは弱点があるのが相場なんだが……」

グリフォンの電撃を回避しながら注意深く観察してみる

「……よくわかんねえや、まあ良いか！撃ち続けたらその内死ぬだろ！」

弱点の発見を諦めた魔理沙はグリフォンへ弾幕を放ち続ける事を決め飛び込んで行く

「魔符「スターダストレヴアリエ」!!」

星形の弾幕を展開しグリフォンを囲む

「私の弾幕は痛いぜえ？」

魔理沙の合図で星弾はグリフォンに向かう

「グオオオオオオッ!!」

電撃で打ち消そうとするが数が多過ぎて消しきれず星弾はグリフォンに命中し爆煙があがる

「さあてどうだ……?」

今度も手応えはある、爆煙を眺めながら呟く魔理沙

「!!」

煙が揺れるのを見逃さなかった

「なんだあ!」

煙の中から赤い何かが魔理沙目掛け突進してきた

「なんだこいつは!?!電気の鳥か!」

逃げる魔理沙に何かは追従してくる、赤い電撃を鳥の形にした電鳥をグリフォンは放ったのだ

「妹紅の不死鳥みたいなものか……これでも食らいな!」

逃げながら後方に弾幕をバラ撒く、弾幕は追う電鳥に命中し電撃を発しながら薄くなっていく

「そらー!」

最後に強めの弾幕を放ち電鳥に命中させる

「つしやー！」

消し飛んだ電鳥を見てガッツポーズを決めた魔理沙は前に向き直す

「!？」

眼前にはグリフォンが待ち構えていた、電鳥を囮に魔理沙の前に回り込んでいたのだ
「グオオツ!!」

体から放電しながら電撃のカーテンを放つ

「くおおっ!？」

箒を力ずくで強引にルートを変え電撃のカーテンをギリギリで回避した魔理沙とグリフォンが擦れ違う

「あああっ!？」

魔理沙が悲鳴をあげた、グリフォンの纏う電撃が擦れ違い様に一瞬だが魔理沙に触れていた

「かっ……こんの野郎……」

体の痺れとダメージを感じながら一瞬ふらつきながらも飛行を続ける魔理沙はグリフォンを睨む

(魔力で体を覆ってなきや黒焦げだったぜ……攻撃用の電撃じゃなかったからこれで済んだけど……流石にアレを直接は食らいたくないな……)

ただ身に纏う電撃でさえダメージがある、それを攻撃用の電撃で受ければ間違いなく高いダメージ、若しくは重傷は免れない

(近付くのも危険……かといつて遠距離から弾幕でも効いてるかわからない……さてどうするか……今マスタースパーク撃つても避けられるのがオチだし……)

「!!……ちっ!」

模索している魔理沙にグリフォンが電撃を放つべく魔力を口内に溜め始める、それを見て回避すべく身構える魔理沙

だが……

「グオオ!」

電撃を放つ間際、グリフォンを謎の弾幕が襲い攻撃は中断される

「……あのシルエットは……まさか……」

紅霧の中に見える何かを構えたシルエットに魔理沙は見覚えがあった

「あら……魔理沙だったのね、あの異常にバカでかく育つたスズメを追いかけてた小さいのは」

「幽香!」

紅霧から現れたのは風見幽香、幾多の悪魔の返り血を浴びているがキズは皆無

「無事だったんだな幽香!」

幽香の無事に笑顔が出た魔理沙だが幽香は不機嫌そうに顔をしかめる

「誰に向かつて言ってるの……あまり私を舐めないで……殺すわよ?」

睨み付ける幽香、自分が雑魚の悪魔にやられていると思われるのが感に触ったようだ

「殺されるのは勘弁だけど無事で良かったぜ!よし幽香!やるぜ!」

グリフォンに向き直し突撃しようとした魔理沙だが前方を傘で遮られる

「なんだよ!!」

幽香の謎の行動に抗議を入れるが幽香は見下す様に言った

「私一人で充分よ……貴方はそこで見てなさい」

「ああ!?!」

幽香を睨み付けるがフツと笑った幽香は魔理沙を置いてグリフォンに向かう

「ちえ……相変わらず自信過剰な奴だよ……」

不機嫌な魔理沙だがすぐ思考を切り替える

(幽香一人に任せるのは心配だけど他の奴等も気になる……特に魔界にいるあいつらだ

……あそこにはムンドウスもいる……どうするべきか……)

眼前で繰り広げられる激戦を眺めながら今自分に出来る最良の選択を考える

だがその間にも時は進む、時間は残されてはいない……

博麗神社

「もうすぐだ」

博麗神社へと向かう大妖精達6人は神社目前まで来ていた

「あまり襲撃はありませんでしたね」

周囲の警戒を行う藍が話す

「そうだな、途中いくつも悪魔の死体があった、誰かこの辺りにいるのだろうか」

中央で守られる慧音

「……！誰か居ます！」

先頭の鈴仙に促され博麗神社へ続く階段の前に居る誰かに注意する

「そこに居るのは誰なのだー？」

「この声は……ルーミアちゃん！」

聞き覚えのある声に大妖精が飛び出した

「ルーミアちゃん無事だった……ん……ん……」

大妖精の笑顔がみるみるうちに曇る、遅れてやって来た5人がルーミアを見ると5人も顔が曇った

「悪魔を……食ってる……」

慧音が唾然として呟いた、ルーミアはアサルトの死体を食べながら笑っていた

「……どうしてここに？」

「悪魔がいっぱい現れたから異変だと思って霊夢を呼びに来たのだから、でも居なかったけど悪魔が入ろうとしてたから守ってたのだから、それでお腹が空いたから食べてるのだ……」

霖之助の問いに血塗れの笑顔で答えるルーミア、彼女は食人妖怪、人間が好物だが別に他の物が食べられない訳ではない、戦闘でお腹が空いた彼女は悪魔を食べて空腹を凌いでいたのだ

「そ、そうか……ありがとうルーミア、さあ僕達と博麗神社へ入ろう、博麗神社の聖気を強化して強力な結界にする、ここは幻想郷の中でも大事な場所でもあるからね」

「わかったのだ」

「それと悪魔は食べない方が良いと思うよ……体に悪そうだ……」

「そーなのかー」

ルーミアを加え博麗神社に辿り着いた7人は霖之助の先導のもと博麗神社を守るために結界の作成に取りかかった

永遠亭

「あつ、また掛かった」

縁側から眺めていた少女が呟いた

「やっぱり悪魔って言っても低級じゃ簡単に嵌まるなあ」

庭に空いた穴に向かい見下ろす、アサルトが落とす穴に嵌まり、穴の底に仕掛けられた槍で串刺しになっている

「ほいっと」

まだ息のあるアサルトにトドメを刺し穴を埋めてまた縁側に戻る

少女の名は因幡てる、永遠亭に住む妖怪兎、たまたま外出していたてるは悪魔の襲撃に永遠亭に帰ったが誰も居らず、悪魔が竹林を抜け次々と来るので独断で永遠亭に部下の兎を匿い、罾を張りやって来る悪魔から永遠亭を守っていた

「おわあ!?なんだこりゃあ!!」

縁側に戻ったてるに叫び声が聞こえた

「また嵌まった奴がいるね、今度は悪魔じゃなさそうだけど……どれどれ……」

声が聞こえた方向に向かう、作動している落とし穴に向かい見下ろす

「これは珍しい奴が掛かったもんだ……あの悪名高い鬼人正邪が掛かっているよ」

掛かっていたのは鬼人正邪、僻地から悪魔をやり過ぎしながら来た彼女は迷いの竹林で迷った末に永遠亭に辿り着き罾に嵌まったのだ

「コリアア!見てないで助けるよ!」

ギリギリ槍の手前で踏ん張る正邪は必死に助けを求める

「飛ばば良いじゃん」

「あ、そうか」

槍に刺さらぬ様で必死で飛ぶ事に気付かなかった正邪は穴から浮いて落とし穴から

脱出する

「ふう……死ぬかと思った」

「あんた何してんの？逃げてきたの？」

「あー……うん、まあ逃げてた訳じゃないよ、ちよつと行くところがあつてさ」

「それで永遠亭に迷い混んで来たつて訳？ここは目的の場所じゃないだろ？逃げてるじゃん」

「うつ……確かに私じゃ悪魔に敵わないから逃げながら来てここに辿り着いたけどさ……でも目的からは逃げるつもりはないよ！」

「ふーん……あんたの目的つて？」

「あ、いや……それは……」

話しずらそうにモジモジとしている正邪、似合わない事をしようとしているのが自分でもわかってるから恥ずかしいのだ

「あんたの目的によつちや協力してやらんでもないよ？今は非常事態だしね」

「ほ、本当か？いやでも……」

協力は嬉しいがやはり恥ずかしさがある正邪は渋る

「じゃあもう良いよ、あたしや別にあんたがどうなろうと知つた事じゃないしね、勝手に行って食い殺されて来な」

踵を返し縁側に戻ろうとする、てゐからすれば正邪が何かしたところで現状が変わるとは思えない、だから別に絶対に協力しなければならぬ必要は無いのだ

「ま、待つてくれ……わかつたよ、話す……」

正邪もこのままでは目的を達成出来ないと感じていた、自分に協力してくれる者はこの幻想郷にいないと思っていた正邪にはこの申し出はありがたかつたからだ、だから観念して目的を話す事にした

「バーン……知つてるだろ？」

「ああ、あの大魔王つて奴ね、見た事無いけど」

「そのバーンにさ、私は助けられたんだ……私が悪いんだけど敵しか居なかつた幻想郷でただ一人……バーンだけが私を助けてくれたんだ……だから……」

「私は恩返しがいんだ！」

てゐに話した、自分に生まれた感謝の気持ちを返す目的を……

「アハハハハ!!」

それを聞いたてゐは突然笑い出した

「可笑しいかよ！」

顔を真っ赤に怒る

「ああ！可笑しいさ！あんたが恩返しなんてね！笑わせてくれるもんだ！アハハハハハ

「！」

「くっッ!!もういい!!」

てゐに背を向け怒りのままに竹林に向かう

「ふう……まあ待ちなつて」

その正邪を笑いを止めたてゐが呼び止めた

「あたしやが笑つたのはあんたが似合わない事をしようとしてるからよ……あんたの目的を笑つた訳じゃない」

「……」

立ち止まる正邪にてゐは歩み寄っていく

「良い目的ね、気に入ったわ、その目的に力を貸してあげる……手を出して」

差し出された手を両手で包むと光が正邪を包んでいく

「本来は人間にしか使わないんだけど今回は特別……持続するように強くしといてあげる」

「これは……何を？」

「あたしの能力は人間を幸運にする程度の能力……でもそれは私のこだわりがあるから人間を……なの、本来は誰でも効果はあるの」

光が正邪を強く包み、正邪の中へ入っていく

「これでよし、これであんたは竹林を悪魔に出会わず迷う事無く抜かれるでしょう、それから先の事は保証は出来ないけどかなり持つ筈さ……行ってきなよ」

「あ……ありがとう……」

「慣れない感謝は別にしなくて良いよ、それより早く行かないと間に合わないかもしれないよ？そこまでは責任持てない」

「……わかった！行ってくる！」

てゐに笑顔を見せた後、正邪は走り出した、その目的を果たすために

「……さて、あたしも頑張らないとね」

縁側に戻ったてゐはまた永遠亭を守るため戦いに戻った

「被害状況を報告！」

水蜜の声が響く

「全体損傷率3割！まだまだ大丈夫です！」

「よし！砲撃主！まだまだ聖輦船は大丈夫だ！撃って撃って撃ちまくれー！」

聖輦船は幻想郷の空を駆け悪魔を駆逐していく

「はっ!!」

白蓮の蹴りがシン、デス、蠅の悪魔ベルゼバブ、電気を集合体の悪魔プラズマを纏めて葬る

白蓮の魔法は肉体強化、バーンの居た世界で言えばバイキルト、スカラ、ピオリムを重ね掛けしている様な物、肉体的な強さは妖怪にこそ劣るが肉体強化により並の妖怪なほど寄せ付けない強さを誇っている

他の者も負けていない、弾幕や能力を駆使し悪魔の大群を葬っていく

（悪魔はかなり減りましたね……他の場所でも戦ってくれているのでしよう……今、幻想郷は目的の為に1つに……）

思わず口元が緩む、嬉しいのだ皆が幻想郷の為に戦っているのが……だがそんな嬉しさは聖輦船からの通信で止められる

「白蓮様!!レーダーに巨大な魔力反応があります！それと交戦する者が2つ……この識

別反応は風見幽香と……」

「霧雨魔理沙です！」

「魔理沙が……!?!」

自分の気に入る魔理沙が謎の、おそらく悪魔と交戦しているのを聞いた白蓮は表情を引き締める

「救援に向かいます！総員、悪魔を撃滅しつつ魔力反応の元へ！」

「了解!!」

白蓮の号令の元、聖輦船は悪魔を駆逐しながら魔理沙達の元へ向かう

side 魔理沙・幽香

「おい幽香！無茶すんなー！」

グリフォンと戦う幽香に魔理沙が叫んだ、幽香はグリフォンの背に乗り殴り付けている、纏う電撃を妖怪の強靱な肉体で耐えながら

「うるさいわね！でしゃばるんじゃないわ！黙って見てなさい！」

怒鳴った幽香はグリフォンを殴り続ける、纏う電撃が体を蝕もうとするが妖力を纏う幽香の体にはあまり効果が無い

「グオオオオオ!!」

耐えかねたグリフォンが体を回転させ幽香を引き離す

「ちっ……なかなか頑丈な奴ね、誰かを思い出すわ」

再びグリフォンに突撃する幽香

「危なっかしくてハラハラするぜ……考えるどころじゃない」

幽香の強い身体能力に任せた攻防に封印の地に向かおうかと考えていた魔理沙だが幽香に付く事を決める

「加勢するぜ幽香！食らえ！」

幽香を追い越して弾幕を放ち飛び回る

「邪魔しないで！でしゃばるなど言った筈よ！」

幽香も魔理沙に負けじと弾幕を放ち飛び回る

「うわっ!?!危ねえだろ幽香！」

幽香の放った弾幕が魔理沙の眼前を通り過ぎたまらず抗議する

「邪魔だつて言ってるのよ！引っ込んでなさい！」

「なんだとお!?加勢してやってるのになんて言い草だ！」

戦闘の最中、喧嘩を始めてしまう、他の部下達を相手にした組は連携が取れていたがここは違った、幽香のプライドの高さが災いし更に魔理沙も我が強い為に連携が上手く取れない、互いの弾幕が邪魔し合い中々グリフォンに効果的にダメージを与えないでいた

「あーもう！構うか！こいつで吹き飛ばしてやる！」

なかばヤケクソ気味に懐からミニ八卦炉を取り出した魔理沙はグリフォンに照準を合わせる

「食らいやがれ！マスター……」

撃とうとした瞬間、魔理沙の目に信じられない者が映る

「はあああつ!!」

幽香がグリフォンに突撃し傘で顔を殴打したのだ

「撃てねえじゃねえかバカヤロウ!!」

撃てば幽香も巻き込んでしまう、撃つ寸前で止められた魔理沙は思い切り叫んだ

「くっそ……なんだつてあいつはこんな時にも協調性が無いんだ……」

頭を掻きながらグリフォンの胴体に接近し弾幕放つ

ダメージが積み重なっていきグリフォンの体が一度フラついた

「グオオオオオオオオオオン!!」

咆哮と共に纏う電撃を広範囲に拡げ二人を引き離す

「またこれか!?!」

電鳥を放ち魔理沙を遠ざける

「先に私を仕留めるつもりね!」

残る幽香にカーテン状の電撃を放ち、更に2本の線状の電撃を左右に放ち鉄の様に閉じる

「っ?!?!……この程度じゃまだまだね」

電撃を紙一重で回避していく幽香、だが彼女は電撃に気を取られ過ぎて迫るグリフォンに反応が遅れた

「がっ?!」

電撃を回避している最中、グリフォンの体が見えた時には遅かった、突進を受けた幽香はそのまま飛ばされそうになるがグリフォンの肉を掴み堪える

「やってくれたわね……ふん!」

グリフォンの肉を拳分引き千切り、背に乗った幽香は傘を突き刺しビームを放とうと

妖力を高める

「風穴を空けてあげる」

バチツ

バチチチチチ

ビームを放とうとした瞬間、幽香に激痛が走った

「うあああああ!?!」

激痛に身を震わせビームを撃つのを止められる

激痛の正体はグリフオンの電撃、身に纏う電撃を最大にして放電したのだ、その威力は幽香の肉体を持つてしても耐えられる物ではなかった

「幽香!!」

電鳥を始末し戻ってきた魔理沙が叫んだ、だがそんな叫びも聞こえないほど幽香は苦しんでいた

「この鳥野郎!それをやめろおお!!」

幽香を救うべく弾幕をグリフオンに浴びせるがグリフオンは意に介さず放電を続ける

(ヤバイ……このままじゃ幽香が……こうなったら一か八か……)

意を決した魔理沙は呪文の詠唱を始める

「……マジックバリアー！」

魔理沙の体を魔法力が包み込む、マジックバリアー、攻撃魔法に対する耐性を付加させる呪文、バーンから教わった魔法の1つ

「あの電撃も魔力だから効果はある筈だ……行くぜ！」

グリフォンの背に居る幽香に向かい空を駆ける

「うぎぎぎぎい……!!」

電撃の中を突き進む魔理沙、マジックバリアーは効果を發揮した、しかしそれでも苦痛が襲う、スピードは落ち、苦痛に顔を歪めながら幽香に近付いて行く

「幽………香………!!」

苦痛に歯を食い縛り、幽香へ手を伸ばす、グリフォンの体が動く度に少し離れては近付くのを繰り返す

「う………おとおお!!」

全身に力を込め一気に幽香の元へ駆け、幽香を掴む事に成功する

「よっし………んう!!」

電撃地獄の中を幽香を連れて抜け出した、脱出した魔理沙は幽香を掴んだままグリフォンから距離を取る

「はあ……はあ……助けてなんて……言っていないわ……よ……」

体から黒い煙をあげ、力無くうつむき魔理沙の肩を借りる幽香、肉の焼ける臭いがする、強力な電撃が肉を焼いていた

「そうだな……これは私の勝ちさ……お前が気にする事は無いぜ……」

微笑む魔理沙だがダメージは浅い物ではない、体が焼けてこそいないがダメージと痺れが体に残っている

「ゴオオオオオ!!」

脱出した二人を発見したグリフォンが二人に向かい咆哮する

「……絶体絶命のピンチってヤツだなこれは」

「そうみたいね……」

電撃を纏い突撃してくるグリフォンを前に二人は動けなかった、ダメージと体の痺れが体を動かせずにいたのだ

「幽香……逃げろ」

「何を言ってる……!?!」

幽香は突き飛ばされて落下していく、浮遊の力が痺れにより上手く出来ない幽香は落ちるスピードを緩める事しか出来ない

「魔理沙!!」

落下しながら叫んだ、幽香を見て微笑んだ魔理沙は八卦炉をグリフォンに構える
「こうなったらお前も一緒に地獄へ道連れだ!」

相討ちに持ち込もうと決めた魔理沙は八卦炉に魔力を込める

(!?魔力が……上手く込めれない!痺れのせいか……)

痺れが八卦炉に充分な魔力の注入を妨げ、八卦炉には全力の半分以下しか込められて
いない

「ハッ……悪運尽きたな私も……」

目前に迫るグリフォンに一言漏らすと手を下げただグリフォンを見つめた

「撃てー!!」

巨大な音声と共に大量の弾幕がグリフォンの側面を襲い、グリフォンの突進は中断さ
れる

「あれは……白蓮の船?」

その光景に呆気にとられている魔理沙の前でグリフォンに走る閃光が1つあった

「せあああ!!」

グリフオンを殴り怯ませる、足に渾身の魔力を込め蹴り抜いた

「グオオオ!!?オオオオ!!」

凄まじい威力の蹴りに数メートル飛ばされるグリフオン、そして……

「無事でするか魔理沙!!」

「白蓮!!」

危機を救ったのは白蓮と聖輦船、悪魔を引き連れて来てはいるが魔理沙にとってはそんな事はどうでも良いくらい嬉しかった

「……怪我をしていますね魔理沙、私達に任せて休んでいなさい」

魔理沙の状態を一目で見抜いた白蓮は下がるよう促し聖輦船や仲間と共にグリフオンと悪魔を相手にし始める

「助かったぜ白蓮……でもこれじゃあ格好つかない、もう痺れも治る……加勢するからな」

体の痺れが無くなってきた魔理沙は白蓮達の戦いを見ながら焦燥感で箒を強く握り締める

「やめときなさい」

焦る魔理沙に声が掛かった

「幽香……」

声の主は幽香、痺れもほぼ無くなり満足に動ける様になった彼女は戦線に復帰する前に魔理沙の元に来ていた

「いくら軽減したって貴方は人間、その弱い体じゃ次は死ぬわ」

幽香が止める理由、それは人間、如何に魔力で覆っても妖怪に比べ遥かに弱い人間の体、平気な振りをしているが実は魔理沙の体はかなりのダメージを受けていた、それを見抜いた白蓮はこれ以上無理させないように下がらせたのだ

「……私がさ……なんで人間のまま魔法使いでいるかわかるか？」

幽香の制止に空を見上げながら問うた

「……わかるわけないじゃない」

訝しげに魔理沙を見つめる、どうやら最後まで聞いてくれる様だ

「私にもわからなかったんだよ……なんとなくなってしまうか気紛れみたいな感じでさ……それが今やつとわかったんだよ」

「……何なの？」

「誇りだぜ！お前も持つてる誇り……それが私が人間でいる理由だったんだぜ」

「誇り……」

「気付く切っ掛けはバーンと萃香の勝負だ、あの時レミアアが誇りについて言ってたんだけどその時はピンと来なかった……それから色々考えてたんだよ、それで白蓮を見て幽香のさっきの言葉でやつとわかった」

一呼吸置いて幽香に向き直す

「私は人間である事に誇りを持つてたんだってさ、確かに本物の魔法使いになれば寿命とか体とか色々良くなる、でもそれを良しとしなかったのは私の中に人間としての誇りがあったからなんだ……好きだったんだな、人間って種族が……」

「だからこそ私は人間のまま誇りを抱いて戦う、仮にそれで死んだってそれは私の中で満足な誇り高い死なんだ」

「だから……心配してくれるのは嬉しいけど気にしないでくれ幽香」
「……」

魔理沙から目を逸らさずにいた幽香は話が終わっても見つめ続ける何も返す事なく（貧弱な人間が生意気に誇りを語るなんてね……でも言う通り……私にも誇りはある……誇りの有無に種族は関係無い……か……）

思わず口元が緩む、精神的な意味で魔理沙は自分と対等になったのだと感じていた
しかしそんな思いは轟音によりすぐ掻き消される

「聖輦船が!？」

グリフオンの電撃が聖輦船に直撃していた

「損傷率5割超えました!これ以上は避難者も危険です!」

オペレーターの報告が船内に響く

「白蓮様あ!」

それを聞いた水蜜が通信越しに白蓮に指示を乞う

「下がってください!避難者の安全が最優先です!後は私一人で構いません!他の者も聖輦船の直衛に回ってください!」

悪魔と戦う一輪達に指示を飛ばした後、魔力を全開にした白蓮はグリフオンに対峙する

「これ以上はやらせません!」

「グオオオオオオオオオオ!!」

電撃を最大に纏ったグリフオンは聖輦船に突撃する、回りを飛ぶ悪魔を殺しながら「ぐうううううう……ああつ!？」

その突撃を止める白蓮、突撃は止まったが電撃が白蓮を襲い苦痛に喘ぐ、グリフオンの電撃は白蓮が肉体強化をしても耐えられる威力ではなかった、徐々に押され、まだ避

難しきれていない聖輦船に近付いていく

「私は行くぜ！止めても無駄だからな！」

白蓮と聖輦船の危機に飛び出そうとする魔理沙、それを聞いた幽香は魔理沙の横に並んだ

「少し待ちなさい……白蓮!!」

魔理沙を止めた幽香が白蓮に叫んだ

「それをこっちに!!」

「お前何を……」

突然の行動に幽香を見るが説明は無い

「……!!」

グリフォンを抑えている白蓮は幽香の声に振り向き、その瞳に強い意思と勝機を感じ微笑んだ

「……ハアアアッ!!」

抑える力を全て拳に込めグリフォンの顔を殴った、殴られたグリフォンは自身の勢いと殴打の勢いで真つ直ぐ二人へ向かう

「そういう事か！」

意図を理解した魔理沙は懐から八卦炉を取りだしグリフォンにかざす

「!!」

傍の幽香も傘を構えた

「……今回だけ貴方に付き合っただけあげる」

無愛想に一言告げる

「私のスペル名……覚えているか？」

にやけながら魔理沙は返す

二人は構えたまま魔力と妖力を全て解放する

「マスタアアアア!!」

八卦炉と傘に力が集中していく

「スパアアアアア!!」

絶叫と共に撃ち出された2つの極大のレーザー、それは途中で絡み合い、巨大なグリフォンを超える1つの超大のレーザーとなりグリフォンに向かった

「グオ!?グオオオオオ!!」

レーザーに飲み込まれたグリフォンは身を徐々に崩壊させていき胸の中にある弱点を露出させる

「グ……………オオ……………オオオオオオオ!!」

エネルギーの奔流が弱点を砕き、飲み込まれ、消える、弱点を壊されたグリフォンは急速に全身を崩壊させていき、そして全てがレーザーの海に消えた

「フン……………品の無い名ね……………」

傘を下ろしながら呟く、しかし顔は魔理沙には見えないが笑っている
「言ってる……………」

顔を背けた魔理沙も笑っている

奇妙な感覚が二人を笑わせていた、力を合わせる事の未知なる感覚が孤高の強者だった幽香を笑わせ、その強者から協力を得たことが魔理沙を笑わせ

そして何より勝利が二人を笑わせた

「よくやってくれました二人とも」

体を労りながら白蓮が二人の前に現れる、グリフォンの電撃を受けた彼女も相当のダメージを受けている、3人に現れるダメージがグリフォンが如何に強敵だったのかを示していた

「傷だらけのところ悪いんだけどさ……着いてきてくれないか?力を貸してくれ!」

勝利の余韻に浸る間もなく魔理沙は二人に協力を求めた、そう、まだ戦いは終わっていない、他にも戦っている仲間がいる、そしてこの戦いの元凶ムンドウス、戦いは寧ろこれからなのだ

「何があるってどういうの?」

3人の内、ただ1人事情を知らない幽香が尋ねた

「悪魔を幻想郷に放ったクソ野郎がいるんだよ!魔帝ムンドウスって奴だ!私が感じた限りじゃバーンより力は上だ……」

「バーンよりですって……?」

幽香の顔が引き吊る、バーンの力を知っている幽香はその瞬間、敗北感を感じたが頭を振り思考から消した

「わかっていきます……私も微力ながら協力しましょう、最後まで希望を捨ててはいけません、諦めたらそこで幻想郷は終わりです」

「私も行くわ……魔帝？……上等じゃない！相手にとって不足はないわ！」

白蓮に続き幽香も同意した、傷だらけの二人だが闘志にダメージは無い

「……よし！行くぜ！」

魔理沙を筆頭に封印の地に向かう3人

このグリフォンとの戦いを最後に幻想郷に放たれた悪魔はほぼ殲滅されていた

ある幻想郷の平地

「……通しなさいよこのバカ！」

封印の地、魔界から外に出て地霊殿に向かうチルノは行く手を3体の悪魔に阻まれて

いた

「キシユウウウ……」

悪魔の名はフロスト、アサルトを強化した悪魔であり余り数はいない悪魔だ

「凍ってなさい！えいつ！」

チルノが能力を使いフロストを凍らせようとする

「こいつ氷の悪魔!？」

しかしフロストを凍らせる事は出来なかった、フロストは氷を操る能力を持つ悪魔、チルノの能力は得意属性故に効かなかった

「キシユウ!!」

フロストが冷気を放ちチルノを凍らせようと3体で攻めてくる

「く……うう……」

チルノも能力を使い対抗する、フロストの冷気はチルノに向かう途中で止まるがチルノの顔は辛そうにしている

(疲れてなきやこんな冷気なんてへっちゃらなのに……!?)

ファントムとの戦いで消耗していたチルノの力はかなり落ちていた、全快ならフロストが3体居ようとも冷気を押し退け凍りつかせる事が可能な程チルノの冷気の力は強い、しかし消耗した今はフロストの冷気を抑えるのが精一杯だった

「くっそー……」

こんな所で時間を取られている暇は無い、それがわかっていいるからチルノはこの状況が腹立たしかった

フロストの1体が冷気を放つのを止め爪を突き立て迫ってくる、チルノを刺すつもりだ

その瞬間、一陣の風が辺りを襲いフロスト達を切り裂いた

「あやや!? チルノじゃないですか! 危ないところでしたね!」

フロストを切り裂いたのは文、数カ所に傷はあるがまだまだ元気だ

「ありがと……あたいは行くわ……じゃあね」

文の顔をろくに見ずにチルノは飛んでいく

「フラフラじゃないですか!? そんな状態で行くなんてどうしたんですか!」

スピードも出ずフラフラと飛ぶチルノに文が詰め寄り掴んだ、フロストとの小競り合いでいよいよ体力にも限界が来ていたのだ

「バーンに……地霊殿に居るバーンを呼ばないと……」

文の胸に寄りかかりながら話した、その辛そうな表情は今にも倒れてしまいそう

「……わかりました！地霊殿ですわね！」

チルノの言葉を聞いた文は詳細を尋ねず決めた

「私が送ります！掴まってください！」

がっちり掴んだ文がチルノに告げた、自分が送ると

「なんで……？」

「貴方がそんな状態でも呼びに行こうとするって事は余程の事態なんでしょう？それにバーンさんの力が必要と思うのは私も同じだからです！」

「……ありがと文……」

文の力強い言葉に安堵したチルノは文の服を強く握った

「さあ飛ばしますよ!!」

掛け声と同時に文は空を駆けた、悪魔も目にくれずただ一点、バーンの居る地霊殿へ駆けた

封印の地

「ちよつとパチュリー！いい加減にしなさいよ！効かないって言ってるでしょ！」

ナイトメアと交戦する霊夢が叫んだ

「日符「ロイヤルフレア」!!」

霊夢の叫びを無視してパチュリーはナイトメアのコアに弾幕を放ち続ける

「だから効かないって言ってるでしょ！」

霊夢が怒りを混じらせ詰め寄った

「……こんな所かしらね」

パチュリーは攻撃を止めた

「何がしたいのよあんたは……」

漸く止まった攻撃に呆れている、パチュリーはコアに対してずっと弾幕を撃ち続けていたのだ、多種多様の弾幕を惜しみ無く

「弾幕がかなり効きづらいのは知ってたわ、でも有効な弾幕もあるかも知れない、だから属性を変えたりしながら攻撃してたんだけど……」

「結果はアレよ……」

元気に攻撃してくるナイトメアを指差した

「大した成果は無しね……でも一応無駄にはなつてないわ、ダメージは入ってるから、少
しだけどね」

「……なんであんたがナイトメアに来たのよ……格闘出来ないくせに……妹紅が残るべ
きだったのよ……」

はあつと溜め息をつきながら攻撃を回避する霊夢

「じゃあとつておきを見せてあげるわ霊夢」

「……期待して良いんでしようね？」

霊夢の疑心に満ちた問いに頷いたパチュリーは霊夢と共にナイトメアへ向かう

（フフフ……足掻け……その小さき力で必死に……その先には絶望と死しか無いがな
……フフ……フハハ!!）

その様を観賞するムンドウスは不気味にたたずむ、仮にナイトメアや他の悪魔を退け
たとしても後に控えるのは自分、その圧倒的な力への自信がムンドウスの内心を笑わせ
る、どう足掻こうとも絶望だと……

残すは悪夢との決着、魔女と巫女は戦う、例えその先が絶望だとしても彼女達の歩み

は止まらない

第25話 戦火を交えて

封印の地

「……中々やりおるなこの地の者は」

突然、霊夢達の戦いを鑑賞しているムンドウスが呟いた

「何よ今更！自慢のナイトメアが壊されるかも知れないって言うのに随分と余裕ね！」

ナイトメアの攻撃を避けながら叫ぶ霊夢

「お前達では無い、この地、全体の者の話だ、我が放った悪魔の大半がやられた様だ」

「当たり前よ！そんな簡単にやられるもんですか！」

したり顔でムンドウスに語る霊夢にムンドウスは笑い出した

「フハハハハハ！なんともめでたい奴等よ！この程度で終わりだと思ったのか？フハハ

！ならばもう一度絶望を見せてやろう！」

そう言うともンドウスはまた黒球とゲートを作りだし悪魔を大量に解き放った、今度

は魔界に一旦降ろした後でゆっくりと進ませる

「なっ!?まだ出せるの!?!」

驚く霊夢にパチュリーが口を挟んだ

「当然よ、魔法を使えない貴方にはわからないでしょうけどアレぐらいの事2、3回やつても余りある魔力をあいつは持つてる」

「そんな……」

告げられた事実には絶望がまた胸を埋めそうになる、しかし

「フフフ……やったと思つたか？希望を感じたか？どうだ今の気分は！ハハハハハ!!」

「黙りなさい！負けないわ！みんな必ず乗り越える！だから私達も諦めない！」

パチュリーの事実とムンドウスの笑いにも霊夢の心は折れなかつた、否、もう二度と折れる事は無いだろう、幻想郷を信じる心が霊夢を折れる事を拒んだのだ

「そうね……じゃあ私達も頑張らないとね」

霊夢の力強い言葉に微笑んだパチュリーと共にナイトメアとの交戦は続く

無縁塚に続く平地

「……」

そこに佇む者が1人、名はレミリア・スカーレット、かつて幻想郷に紅霧異変を起こした齡500を超える吸血鬼、永遠に幼い紅き月

「……」

彼女はそこから封印の地を見つめていた

(あそこに全ての元凶が……)

その体は血に染まっていた、その血の量と傷の少なさが彼女の強さと倒した悪魔の数を表していた

(赴きましようか……死地へ……)

誰に見られる事は無かったが1人笑みを浮かべ歩きだす

「おやあ？そこにいるのはレミリアじゃないか！」

そこに背後から声が掛かった

「萃香……それに勇儀……」

現れたのは鬼の二人、彼女等も悪魔を葬りながら来たので血にまみれ、そして酔っていた

「あんたもあそこに？」

勇儀が問う、地上に出た二人は悪魔を倒しながら魔力の濃いこの場所にやって来ていた

「そうよ、元凶を叩かなければこの戦いは終わらないわ」

勇儀の問いに結界跡を見ながら答えた

「……あそこに行く意味はわかってるのかい？」

酔い顔から一変、鋭い瞳になった萃香が尋ねる

「愚問ね……もう覚悟は出来てる」

「これはすまないね……そうか……あんたも同じ想いなんだね」

萃香も結界跡を見ながら横に並んだ

わかつている、あそこへ向かう事、それは死と戦う事……結界跡から感じる異常な魔力に3人は決して容易ではないとわかつていた

「ん？……誰か来たね」

迫る気配に気付いた勇儀が空を見上げる、それにつられて二人も空を見上げた

「遅くなったわあ」

「お前達も来ていたのね」

やって来たのは幽々子と神奈子

「おお！あんた達も来たか！」

萃香が嬉しそうに手をあげる

「当たり前よ、やるだけやらないとねえ」

「当然ね、信仰を得る代わりに守る、それが神の役目よ」

二人も覚悟は決まっている、幻想郷を守る為にやって来たのだ

「あら？お揃いの様ね」

そこに輝夜が合流する

「幽々子様〜！」

「お姉様〜！」

更に妖夢とフランが降り立ち、主と姉の所へ向かう

「目的は同じみたいね……」

集まった仲間を眺めながらレミリアが嬉しそうに呟く

「そうさ！やってやろうぜレミリア！」

「魔理沙……貴方達も来たのね」

そして最後に魔理沙、幽香、白蓮の3人が合流する

「案外……なんとかなるかもしれないわね……」

集った強力な仲間達に僅かながら勝機を感じる

「えらく弱気じゃないかレミリア！かも……じゃないだろう？する……だろう？」

「フフ……そうね」

萃香の陽気な、されど意思の感じる言葉に思わず笑顔が出る

「じゃあ行きましようか」

レミリアの言葉に頷いた一同は封印跡を見つめ歩きだす

「……!!?魔力が高まって……!!?」

封印の地から感じる魔力の高まりが一同の足を止めた

ドンツ

爆発音と共に封印の地が爆ぜ、大穴を作る

「ギイイイイイ!!」

その大穴から大量の悪魔が現れ幻想郷に散ろうとしている

「まだあんなに!!?これ以上は幻想郷が持たないわよ!!」

先の悪魔の襲撃で幻想郷はかなり疲弊している、その上から悪魔の二陣、レミリアでなくとも幻想郷が持たない事はわかりきっていた

「ハアアアアアッ!!」

その様を見た神奈子がすぐに動いた、全身から神気を高め拡散させていく、神気は無縁塚全体に広がり誰も通さぬ結界となり悪魔を閉じ込める

「これで一先ずは悪魔が幻想郷に散る事は無い、後は……わかるでしょう?」

一同に微笑みながら問うた、やるべき事は一つだと

「わかっている! やつてやるぜ!」

「しようがないわね、付き合っただけあげるわ」

「みなさん! 気を抜かないように!」

「勇儀! 決着をつけようじゃないか!」

「望むところさ! 行くよ萃香!」

「あらあら……これは骨が折れそうねえ」

「また数ばかり集めて……まったく」

「妖夢! じっくりよ!」

「はいフラン! 幽々子様、気を付けてください!」

全員が襲い来る悪魔の大群に構えた

「行くわよ!」

レミリアの号令の元、集った戦士達は悪魔の大群へ飛び込んで行く
千を超える悪魔の大群、迎え撃つは幻想郷の強者11人
数は足りない、圧倒的に……しかしそれは問題ではない
埋めれば良いのだ、数を覆す圧倒的な力で、魂で
想いは1つ、ただ幻想郷を守る為に……

地霊殿

ざわつく……

(また再び魔を幻想郷に……調子に乗りおって……)

拘束されるバーンは悪魔の第二波を感じ、自ら意図せぬ内に拳を握っていた

酷く嫌悪感が襲う……誰かが幻想郷を荒らしているのが気に入らない

(あやつらなら乗り越えられる筈だ……それだけの事はしてきた……だが……)

酷く心がざわつく……あの者達の事を思えば余計に……

(余は……余はいつたいたいのだ……幻想郷に干渉はしない……そう決めた筈だ……なのに……なのに何故、余の心はこんなにもざわつくのだ……)

バーンは心を感じる謎のざわつきに悩んでいた

幻想郷への不干渉、それはバーンの決めた自分に対する約定、変わる事の無い決定事項だった筈……

なのにそれを心が圧力を掛ける、それがバーンにはわからなかった
(何故……)

バーンは気付いていない、いや、気付いていながら目を背けているのだ、その得体の
知れない感情を認めてしまうのが怖くて……

既に一度干渉した事に矛盾を感じながら……

side パチュリー・霊夢

「パチュリー！とっておきってまだなの!？」

「……ちよつと待ちなさい」

ナイトメアの止まない攻撃を避け続ける二人、パチュリーが何かをしようとはしてい

るがナイトメアの攻撃がそれをさせて貰えなかった

「このままじゃダメね」

ボソリとパチュリーが呟いた

「はあ!?!ふざけてる場合じゃないのよ!早くやりなさいよ!ぶっ飛ばすわよ!!」

それを聞いた霊夢の怒声が浴びせられる、期待していたのにこれではしようがないと言え

「まあ落ち着きなさい、私がダメって言ったのは切り札を出す機会が無いって事よ、出来ない訳じゃないの」

理由を話し霊夢を落ち着かせる

「……じゃあどうすれば出せるのよ?」

不満な霊夢の問いにパチュリーは事も無げに告げた

「使うにはかなりの集中力があるの、だからその間私は無防備だから守って欲しいのよ」

「はああ!?!あのナイトメアから守れですって?あんた本気で言ってるの!?!」

霊夢の不満が爆発した、あの凶悪なナイトメアから動けないパチュリーを守れと言うのだ、誰がやっても難易度は高い

「出来ないなら諦めるしかないわね、妹紅が来るのを待つしかないわ」

霊夢の不満にパチュリーは試すように笑った

「……それが出来れば勝てるのね？」

「ええ、それは保証する、出せれば勝てるわ……絶対！」

自信満々に言い放った、出す事さえ出来れば勝てる、そう断言した

「……わかったわ、そこまで言うなら信じてあげる……」

その自信を信じた霊夢がパチュリーに印を結んだ

「防御用の結界を作ったわ、これで少しなら耐えられる……でもあくまで保険、あなたの切り札みたいに絶対じゃないわ……だから……」

ナイトメアへ向き直し祓い棒を構えた

「私が時間を稼ぐ……さあ早くやって！」

パチュリーを残し、霊夢はナイトメアへ弾幕を放ちパチュリーへの注意を一身に引き受ける

「頼んだわ霊夢……」

残されたパチュリーは地に降り掌を上に向け魔力の球体を2つ作り出す

(……)からね……やってみせるわ……バーン！)

フウーと息を吐き精神を統一させたパチュリーは切り札の作成に取り掛かった

無縁塚

オオオオオオオオオオオオ!!

雄叫びが響く

結界を壊さんとする勢いで悪魔は暴れまわる

そこは今や悪魔の巣窟、結界の中を黒く染め不可視の領域を作り出している
そしてその黒の僅な隙間から光が出ては消えていた

「神槍「スピア・ザ・グングニル」!!」

レミリアの投合した魔力の槍が悪魔を幾多も貫き葬る

「四天王奥義「三步必殺」!!」

勇儀の放つ三重の弾幕が悪魔を文字通り必殺していく

「萃鬼「天手力男投げ」!!」

掴んだ悪魔を弾とし投げつける、萃香の怪力も合わさり悪魔の弾丸は大量の悪魔を道連れに突き抜けていく

「死蝶「華胥の永眠」!!」

永久の眠りへと誘う死蝶を大量に展開し解き放つ、触れた悪魔は一切の抵抗なくその場で覚めぬ眠りへと堕ちていく

「神祭「エクスパンデッド・オンバシラ」!!」

神気を込められた御柱が触れる悪魔を滅していく、直接触れずとも付近にいるだけで強力な神気と神奈子自身から発せられる神気が悪魔を消し去っていく

「新難題「エイジャの赤石」!!」

群がる悪魔に全方位にレーザーを放ち大玉弾幕を撃ち込む、運良く潜り抜けた悪魔は能力により認識出来ない内に倒される

「人符「現世斬」!!」

悪魔の隙間を縫う様に走り抜け切り伏せる、悪魔はその速い動きについていけず次々とバラバラにされていく

「禁弾「カタディオプトリック」!!」

反射しながら自在に動き回る大小合わせた弾幕が悪魔の逃げ道を無くしその体を破壊していく

「超人「聖白蓮」!!」

肉体強化を駆使し悪魔の中へ飛び込み格闘戦を行う白蓮の拳と脚は悪魔を容赦無く打ち砕く

「幽香!やるぜ!」

「……しようがないわね」

背を合わせた魔理沙と幽香はミニ八卦炉と傘を構える

「恋符「マスタースパーク」!!」

同時に極大のレーザー放った二人は背を合わせたまま回転し悪魔を殲滅していく

数で勝る悪魔だったが為す術無く倒されていく、戦いは決して数だけでは勝てないと
言うかの様だ

だが数に限りはありと云えど圧倒的な物量を前に無傷とはいかない、傷と疲労は溜まる、先に悪魔を殲滅するか力尽きるかの勝負

だが彼女達ならやってくれる筈だ、幻想郷を守る意思がある限り彼女達に敗北は無い

sideパチュリー・霊夢

「そらそらそらー！どうしたの!?その程度!？」

声をあげナイトメアに弾幕を放つ霊夢、ナイトメアの周囲を飛び回り注意を引き付ける

「!!」

ナイトメアも霊夢を攻撃する、しかし攻撃の全てを霊夢に向けている訳ではなくパチュリーにも少量の攻撃が向かう

(ちっ……挑発も効果無し、兵器相手じゃ仕方ないけど……それより結界が持つかか問題……)

横目でチラリと結界を見る、ナイトメアの攻撃が結界に当たっている

(もう持たないわね……しようがない……か)

結界の耐久力があまり残っていないのを確認した霊夢は一定を保ち続けていた距離を止めナイトメアの至近距離に向かう

「!?」

霊夢の接近にナイトメアはパチュリーへ向けていた攻撃を霊夢に向ける、兵器の性質がより近く危険な方を先に排除しろと選択したので

「さあ来なさいよ！グレイズで稼ぎまくってやるわ！」

威勢良く構えた霊夢は弾幕を放ちナイトメアの攻撃を一身に受ける

「んう〜……!!」

紙一重でナイトメアの攻撃を回避していく、身に被弾するか否かを瞬時に見極め寸前で避ける、ナイトメアとの距離が僅か数メートルの距離で

「イツツ……!!」

霊夢は全神経を集中し回避に専念する、しかし避けきれない、回避が数瞬遅れ掠め始める

「うっ!?くう……!!」

徐々に、徐々に当たりが深くなる、掠めるだけだったのが皮膚を切り、しだいに抉る様になる

「まだ……まだあー！」

体にくつつもの傷を作りながらも霊夢は避け続ける、信じた者の願いを叶える為に

「そんなのじゃ拍子抜けする……あつ!？」

左の上腕を撃ち抜かれた

「……全然効いてないわよ?……ツ!？」

次は右足を撃ち抜かれる

「うああ……ああつ!？」

肩が撃ち抜かれた

「……まだ……よ……さあ……掛かって来なさい……よ」

至る所を撃ち抜かれた霊夢だがそれでもまだ立ちはだかる、もはや動く事すら怪しい

その体で

「……………」

ナイトメアが霊夢の眉間に目掛け魔力弾を放った、息の根を止めるために

「うっ……………あつ……………」

魔力弾は眉間を貫く事無く霊夢の頭上を過ぎ去っていった、ダメージによるふらつきで前に倒れたのだ、狙った事ではなかったが結果的に霊夢は命を拾う

だがそれでは終わらない、魔力弾が回避されたと認識したナイトメアは確実に仕留めべく砲口に魔力を溜め始める、相手に回避する力が無いなどわからない故のビームの充填、撃たれれば回避出来ない霊夢は間違い無く幻想郷から消えるだろう

しかしそこに鑑賞していたムンドウスがナイトメアに命令を与えた

「それは最後に殺すと決めている……………ナイトメアよ、先にその魔女を殺せ」

「!!」

ムンドウスの命令に反応したナイトメアがパチュリーに砲口を向ける

「ま……………ちなさいよ……………私が……………相手……………よ!」

倒れたままの霊夢がナイトメアに叫ぶ、だが命令に従うナイトメアは反応を示さず魔力を溜め続ける

「そんな……………(っ)までして……………ダメ……………なの……………?」

守り切る事に失敗したと思う霊夢、だが

「いえ……まだ……間に合うわ……!!」

ナイトメアのビームはまだ撃たれていない、ならば発射を防げば守れる
そう考えた霊夢は傷だらけの体を必死に起こす

「うう……うう……!!」

だが限界間近の体はすぐには起き上がらない

(間に合わない……)

今にも撃たれんとする砲口に間に合わない、そう感じた時だった

「待たせたわ霊夢」

絶望を消し去り、希望の言葉が霊夢に掛けられた

「遅いわよ……パチュリー……死ぬかと思ったじゃない……」

苦痛に歪む顔を微笑ませ、切り札の準備を終えたパチュリーを見つめた

「まだ慣れてなくてね……後は任せて」

凛々しい表情のパチュリーはナイトメアへ向く

前に出されている両手には始めは2つだった魔力が今は1つになり両手を覆って

た

「……………んっ!!」

右手を引き魔力を引き絞る様に構える、弓を引く様に

「火と氷……………熱を操る魔法を融合させスパークさせる……………」

バーンに教えられた事、そして練習過程で得た事を口ずさむ

「その果てに作り出されるのは熱の無……………つまり消滅の力……………」

呪文の原理を語るパチュリー、そこに天から声が響く

「撃てナイトメア」

ムンドウスの発射命令、パチュリーの言葉など聞こうともしない

「!!」

溜め込まれた魔力はムンドウスの合図で撃ち出された、無縁塚の結界を破壊した時と同じ威力のビームを

「……………これが！私の切り札！名を極大消滅呪文……………」

ビームは霊夢の張った結界を容易く破壊し迫る、だが目前に迫ったビームを前にしてもパチュリーは動じない、それどころか一層体に力を込め……そして叫んだ

「メドロア!!」

パチュリーから放たれた呪文、メドロア、原理は熱を操る火と氷の魔法を融合させ消滅の魔力を作り出す、バーンの居た世界で大魔道士マトリフが作り出した魔の深淵、1つの魔の極致

それをパチュリーは半年の間必死に練習し習得したのだ、知識のみの手探りだったがパチュリーは成し遂げた、バーンに師事し修行を怠らなかつた成果が今ここに具現される

「ナニ？」

ムンドウスは眼下に広がる光景に驚いていた、ナイトメアのビームはパチュリーの

放ったメドローアに消滅させられていく、メドローアの勢いすら抑える事も出来ずに「その兵器が動けたなら勝つのは難しかったでしょうね……」

ムンドウスに語るパチュリーはナイトメアの周囲にある装置を見つめる、そう、ナイトメアはにとりの作った装置により固定化されている、動こうにも動く事が出来ない「まあこれさえ当たれば液体だろうと何だろうと関係無いんだけどね」

パチュリーは歩き始める

「この呪文に耐性だとかそんな事は関係無い……当たれば問答無用の消滅よ……じゃあね」

光矢がビームを消し去りナイトメアを貫いた

「……」

ナイトメアは動かない、攻撃もせず佇むだけ、置物の様に……しかしナイトメアには本来あるべき筈の物が消えていた

「……コアと消滅させたのか……」

ムンドウスの眩き、そう……メドローアはナイトメアのコアを消滅させていた、ナイ

トメアの体につくつて

「……」

コアが無くなったナイトメアは体が崩れていき魔界の大地に広がり、そして蒸発していった

「損な役回りをさせちゃったわね……ありがとう、お陰で倒せたわ」

霊夢を抱き上げながら感謝を述べる、パチュリー1人では不可能だったのだ、霊夢が身を呈してパチュリーを守ったからこそメドロアは撃てたのだから

「良いのよ……倒せたんだから構わないわ」

パチュリーの肩を借りて起き上がる霊夢はやり遂げた思いで少し笑っている

「ご自慢のナイトメアはぶっ壊してやったわ！次はあんたよ！」

ムンドウスに言い放つ、体は満身創痍、しかし闘志は些かも衰えない

「……ナイトメアは確かに傑作ではあった、だが同時に失敗作でもあった……」

ナイトメアはムンドウスの作り出した兵器の中では最高傑作とも言える力を持つ、そして同時に最大の失敗作でもあった、高い戦闘能力と無限に高まる魔力は侵略した地を破壊しつくすばかりかムンドウスの居る魔界さえ破壊する危険な兵器だった、だからム

ンドウスは拘束紋様とセットで運用していた程だったのだ

「いずれは破壊するつもりだった……手間が省けた……が……」

ムンドウスの3つの赤い瞳が怪しく光る

「つまらんな……不愉快だ……」

ナイトメアがパチュリーを殺す事が出来なかったのが気に入らないムンドウス、思うようにいかない事態に不機嫌になっていく

「ハッ……所詮兵器だろうと悪魔だろうとこんなもんだらうさー！」

その場に3人以外の声が響く

「妹紅……!!」

現れたのはファントムを始末し終えた妹紅、ムンドウスを見上げ勝ち誇る様に笑う

「……チルノは？まさかやられたの？」

「チルノは大丈夫だ！今はバ……」

チルノの今を紡ぎかけて止めた

(バーンは来るかわからない……変に期待させるよりかは黙ってた方が良いか……)

「どうしたの？」

「あ、いや何でもない！チルノは無事だ！心配するな！」

とにかくチルノの無事を伝えるとムンドウスに向き直す

「次はお前だ！覚悟しな！」

指を差すと高らかに告げた、次はお前の番だと

「……勝てると思うのか？」

「思ってるんじゃない！勝つんだよ！私達はお前に勝つ！」

「愚かな者よ……」

飛翔していたムンドウスが高度を下げようと僅かに下がったその時、聞き覚えのある声が一帯に響いた

「その通りだぜ妹紅！私達はお前を倒す！必ずな！」

響く声に振り向く3人、そこには……

「魔理沙！レミリア！フラン！みんな!!」

11人が立っていた、結界内の悪魔を全て殲滅し封印の地・魔界にやって来たのだ、その光景に妹紅の歓喜の声がある

「ファントム、グリフォン、ネロアンジエロ……そして放った悪魔を退けたか……」

集った者を見つめムンドウスは悪魔達の敗北を悟る

「よもやこの地の者がここまでやるとはな……些か遊びが過ぎたか……」

呟くムンドウス、だがその言葉はただ事実を述べただけ、感情は一切籠っていない、怒りも焦りも反省も無い

「私達を舐め過ぎたみたいだな！」

「許さないぜお前だけは！」

「次はあんただよ！」

「やるわよパチエ！」

「ええレミイ！」

妹紅、魔理沙、フラン、レミリア、パチュリー、バーンに深く関わる5人はムンドウスを前に先頭を切る

「フフ……」

「フハハハハハ!!」

5人の布告を受けたムンドウスが高笑いをしだす、見下す様に高々と

「愚かな……愚かな者達よ……我が配下を退けた程度で我に勝つとは……フフフ……」

不気味な笑いと同時に魔力が高まっていく

「少々腕の立つ雑魚の力を集めたとしてこの我を越える事は出来ぬ……」

高まりと共に更に更に降下していく

「冥土への土産だ……次は我が遊んでやろう……我が力を思い知り……そして絶望の内
に……」

「死　ぬ　が　よ　い　!!」

大地ギリギリに降りたムンドウスは掛かって来いと言わんばかりに降りたまま動かない

「雑魚の力を集めただけじゃ勝てない? そんな事はやってみなくちゃわからないぜ!!」

「そうだ! それに死ぬのは私達じゃない……死ぬのはお前だ! ムンドウス!!」

魔理沙と妹紅の叫びに全員が構える

「行くぞみんなああ!!」

猛る号令と共に全員が飛び出した

魔帝との戦いが今、開戦した

地霊殿

(魔力が高まった……先程より高く……!?)

バーンを抑え続けるさとりは悪魔を放った時より強くなった魔力に気付きバーンを
見た

「……」

バーンに変化は感じられない、いや、変化はある、拳を握り表情は先程に比べ苦いだがさとりは焦り故にその変化に気付かない

(ツ!!もう限界……もう……待てない!!)

遂にさとの我慢が限界に達した、神妙な顔付きでバーンの前に立った

「これが最後です……協力してください」

バーンへの最後通達が行われた

「……」

聞こえてはいる、しかし反応を返さない

「聞こえませんでしたか? 答えてください」

再度の問いにバーンはようやく口を開いた

「断る……と言ったら?」

やはり出されたのは拒否だった、たださとりを試す言い方になっている

「断るなら貴方の拘束は封印になります、先程も言いましたが手を組まれるのは避けなければなりません、封印をした後だれもわからない異空間に幽閉させてもらいます」

「……」

さとの返答にバーンは更に拳を強く握り己の中で葛藤する

「さあ返答は如何に?」

さとのりの再三の催促に遂にバーンは答えを出した

「好きに………するが良い………」

バーンの出した答え、それは拒否、封印でも何でも好きにしろと言ったのだ

「………残念です」

無表情のさとりはバーンの封印に取り掛かる

(これで………良かったのか?)

施される封印の力を感じながら答えの出ない問答を行った

「それをされては困るわさとり………」

バーンの問答を声が引き裂いた

「………今まで何をしていたのですか?」

声に振り向く事なく返した、声の主をさとりは知っている様だ

「博麗大結界の強化にね……今は博麗神社を守ってくれる者がいるから大丈夫でしょう

……」

スキマから出てきた彼女はバーンの前に向かう

「……お前が？」

眼前に立った女性に問う、そうなのかと

「ええ、初めまして……私が八雲紫、貴方を幻想郷に連れてきた者よ」

動き出した魔帝、それと戦う者達、そしてバーンを幻想郷に連れてきた賢者との邂逅

今、全ての運命が重なった

第26話 魔帝

「もうすぐ着きますよー！」

チルノを抱えて飛ぶ文、旧都の寸前まで辿り着いていた

「このまま一気に……ッ!？」

高速で飛ぶ文の視界に何かが映る

「オッオッオッオッ！」

ノーバディが2体飛び掛かって来ていた

「突き抜けますー！」

構ってられない文はそのままノーバディに体当たりを食らわせた、かなりの速度を持った体当たりはノーバディをバラバラにし体液を撒き散らしながら絶命させる

「!？」

文の体を異変が襲った

「あうっ!?!痛い……!?!」

抱えたチルノが苦痛に喘ぎ、文も体に痛みを感じて速度が落ち、地に降り立つ

「つう……!?!酸の……体液?！」

体に掛かった体液が皮膚を溶かしていた、ノーバディの体液は酸、それを被ってしまつただ

「チルノ……！大丈夫ですか!？」

身を溶かす酸を風で吹き飛ばしチルノへ安否を確認する

「なんとかね……それより早く……」

早くバーンの所へ、そう言いかけた時、大量のノーバディが現れ二人を囲んだ

「まだこんなに悪魔が……」

チルノを庇う様に文は構える、ノーバディは知能がアサルトより更に低い、このノーバディ達は旧都へ続く道が居心地良かったのか攻めに行く事なく潜んでいたのだ

(今の酸で上手く飛ぶことが出来ませんね……)

体のダメージを確認した文は傍のチルノにしゃがみながら告げた

「行つてください、私が道を作りこの場を受け持ちます」

「あたいも戦う!」

「今はバーンさんが最優先です、ここで時間を取られる訳にはいきません……ハアツ!!」

鎌鼬を発生させ旧都へ続く道のノーバディを切り刻む

「今です!早く行つてください!」

チルノの返事を待たずに文は襲い来るノーバディに対抗する

「……!!」

文の行動を無駄に出来ないと感じたチルノは旧都へ向かい飛び出していく

(頼みました、私が行くより貴方の方がきつと良い筈です)

チルノが行ったのを確認した文は構え直す

「……」から先は行かせません！」

残る文は悪魔の残党との戦いに身を投じる

地霊殿

「会いたかったぞ八雲紫……いつまでも来ぬから逃げたとばかり思っていたが……どう

やらまだアレに抗う意思はあるようだな」

「私は失望したわ……まさかこの程度の結界で動けないなんてね……貴方の力を見誤ったかしら？」

遂に出会った二人、そこに喜びは無かった、感慨深さも無く互いに挑発し合う

「フン……」

紫の挑発に鼻を鳴らしたバーンは体に力を込め魔力を高める

「ッ!？」

ざとりが顔を歪ませた瞬間、拘束結界は一気に爆ぜる

「へえ……やるじゃない」

その様に紫が感心の声を漏らす

「この程度の拘束など外そうと思えばいつでも出来た……それをしなかったのは幻想郷がどうなるうと知った事ではなかったからだ」

表情を変えず語るバーンは続けて紫へと話し出した

「聞かせて貰おうか、おおよそわかつてはいるが余を連れてきた真意をな……お前の口から」

「……貴方の想像通りよ、私が探しだす事が出来なかった時の保険……アレに届きうる

刃として貴方を連れてきた」

「それだけではあるまい？余に枷を付けて幻想郷に放つたのは何故だ？幻想郷の者と関わらせる事で愛着を持たせ幻想郷を守る様に仕向けていたのだろうか？」

「……それもある……でもそれは理想、そうやって欲しかったからそうしてみたの」

「……余が幻想郷を荒らすとは考えなかつたのか？」

「無論考えていたわ、もしそうなった時の為に貴方の魔力に細工をしてあるの、私の能力に反応して貴方の魔力と肉体を切り離しスキマ送りにする秘術をね」

「成る程な……余が幻想郷を荒らせば肉体と魔力を切り離されそのスキマとやりに幽閉される訳か、その上で……」

幻想郷での自由の理由を知ったバーンは見透かした様に紫へ微笑した

「上手くアレと余を対峙させ倒せたならそれでよし、だが余の力も危険、細工を利用し余を始末すれば幻想郷に平和が訪れる、例え倒せずとも弱らせる事は出来る筈、その時はアレに再び封印を施し搜索の時間を稼ぐ事が出来る……そんな所だろうか？」

「……御明察……力だけではなく頭も切れるみたいね」

思惑を見抜かれていた紫は面白くなさそうに扇子で口元を隠す

「フン……その程度の思惑が見抜けぬと思うか？賢しいだけの妖怪が考えそうな事など知れている」

「……普段ならそんな事を言われて黙ってはいないのだけど……」

扇子越しからバーンをじつくりと鑑賞する

「まあ良いでしょう、それより協力して貰えるかしら？もう何度も聞いていますでしょうけど」

挑発には乗らない、今はそんな事態ではない、ここでバーンと争つてしまえば協力を得る事は限りなく不可能になる、そのため紫は怒りを抑え冷静に協力を求めた

「断る……幾度言われても変わらん、お前達でなんとかするのだな」

だがやはり出るのは拒否、現状バーンに協力を求めるのは不可能とも思えた

「何もタダとは言わないわ、貴方は幻想郷の民と上手くやっている……もし協力してくれたなら枷を外し、更にアレを倒せれたなら細工を外し貴方に真の自由を約束しましょう、アレと戦うだけで自由を得られる、どうかしら？」

そこに出されたのは交換条件、協力すれば枷を外し更に秘術を外してくれる、つまりバーンの完全な自由を提示した

「断る……如何に条件を出そうとも余の考えは変わらん、失せろ」

それにもバーンは頷かなかつた、それどころか嫌悪感を露に紫を見ている

「……何故？貴方にとつても悪い話ではない筈よ？」

考えられる最高の条件を出した筈、それでも首を縦に振らないバーンを紫は信じられ

なかった

「気に入らんのだ、八雲紫……貴様がな」

瞳を冷たくし紫を見下した

「私が……？」

首を縦に振らない理由が自分にあると知った紫、だが何故かわからない

「貴様の何でも思い通りに出来ると勘違いしている性根が気に入らんのだ……」

「……そこまで自惚れてはいないわ」

「ならば聞くが余に掛けた秘術とやらを外す保証がどこにある？外したと嘯きアレを倒した後に危険な余が目障りなら無力化する事も可能な筈だ、違うか？」

「……」

紫は返せない、そんな事をするつもりは彼女には無かったがバーンの言う通り保証が出来ない、そんな事はしないと信じてくれる保証も無い、だから黙るしか無かった

「貴様は余の居た世界のザボエラと言う者に似ている……自分が頭の良い者だと自惚れ他を利用する事しか頭に無い……貴様は賢し過ぎるのだ、だから臆面も無く他を利用し、すぎる事しか考えない、この数百年間も……」

「ッ……!!？」

バーンの指摘に紫の表情が歪む、内面を見抜かれ更に貶された事が紫には耐えがたい屈辱を与えた

「なら……どうすれば良かったの？ 私にはこうするしか考えなかった、幻想郷を守る為にはこれしか思い付かなかった！」

感情を露にしてバーンに食いかかる、愛する幻想郷を守る為にしてきた事が貶されたのだ、紫にとつてそれは今までの苦労が否定されたと同じだった

「愚か者が……だから貴様は賢しいだけの妖怪なのだ！ アレを封印している間に貴様は何をしていた？ アレを瀕死にした者を探すだと？ それが貴様が愚かだと言う理由だ！」

声を荒らげ紫に怒鳴る

「居るかもわからん者を宛も無く探すだと？ そんな不確かな事をするより何故その間に力を上げて対抗しようとしな！ 貴様は成すべき事を誤り楽な道に逃げただけの腑抜けよ！ それで幻想郷の賢者だと？ 笑わせるな！」

「……ッ!!」

紫はただ拳を握り怒りを抑えている、怒りを抑えるのはバーンに言われた事が的を得ていたから、それを知った紫は反論も出来ず震えるしか出来なかった

その様を見ながらバーンは目を閉じ、呟く様に語った

「今も悪魔と戦っている者達が居る、貴様の様な腑抜けより、あやつらの方が強く……そ

して気高い……」

そう語った後、今も戦う者達の事を想っていた

封印の地

「食らいやがれえ!!」

ムンドウスに向け13人が一斉に弾幕を放つ

強者達の放つ強力な弾幕は幾重にも重なり巨大なムンドウスを覆い隠す程の密度で直撃した

凄まじい爆音が鳴り爆煙があがる、並の……いや、幻想郷最上位の鬼でさえ軽く倒せてしまうだろうと思える威力の弾幕

しかし……

「フッフ……」

ムンドウスには効いていなかった

「バリアかい……」

ムンドウスの前面に展開される物に萃香が呟いた、ムンドウスは自身の前面に魔力によるバリアを作り先の弾幕全てを防いでいた

「あれだけやってヒビすら入らないなんてね……冗談キツイわ……」

強力な弾幕を易々と防げるバリアにうんざりするように呟くレミリア、その横から魔理沙が箒に跨がり飛び出そうとしていた

「あたしがやる！」

その魔理沙を抑え萃香が飛び出した

「鬼神「ミツシンググパープルパワー」!!」

能力を使いムンドウスと同じ大きさに巨大化した萃香がムンドウスに殴り掛かる

「そおらあ!!」

巨大な拳が唸りをあげ振り抜かれる

「フフフ……」

しかしまでもやバリアに阻まれる、しかも萃香の拳打でさえバリアはヒビすら入らない

「つちい……!!」

バリアの防御力に舌打ちしながら下がった萃香、その直後パチュリーが声をあげた
「その4つの白い魔球を壊せば破壊出来るわ!」

冷静に分析していたパチュリーはバリアの要であり急所を見抜き皆に伝えた

「ハアアアツ!!」

「せああああつ!!」

「ハツ!!」

「うらああああ!!」

その瞬間に飛び出した勇儀、白蓮、妖夢、妹紅の4人が魔球に直接攻撃を仕掛けた
バリン

魔球を破壊しバリアを破壊する事に成功する

「今だ!!」

再び13人が弾幕を一斉にムンドウスに浴びせる

また爆音と同時に爆煙があがる

「やったか!？」

魔理沙の希望に満ちた言葉が出た、これだけの弾幕を浴びせたのだ、やっつけていれば最

良、やっていなくてもかなりのダメージはある筈だ、そんな思いが言葉には籠っていた
事実、守るバリアは無い所に強力無比な弾幕を浴びせたのだ少なくともダメージはあ
る筈だ

しかし……

「フッフッフッフ……」

悪魔の帝王、効かず

倒すどころかダメージすら皆無だった

「嘘……だろ……」

全力の弾幕を放った筈だ、それも1人ではない13人の弾幕を……なのにダメージす
ら無い、嘘みたいな光景に魔理沙が啞然としてしまった

「……終わりか？ならば次は私の番だ」

佇むだけだったムンドウスが構えを取り始める

「させないよ！そらあ！」

萃香がそれを防ぐべく殴り掛かる、ムンドウスの顔面を吹き飛ばさんとする勢いで炸裂する

「まずはお前か」

鬼の本気の殴打を受けてもムンドウスを揺らす事も出来なかった、構え掛けた手を萃香にかざし大型の魔力弾を萃香に放った

「う!?があ!?!」

魔弾を受けた萃香が巨体を浮かし魔弾ごと吹き飛んでいく

「萃香!!」

叫んだ勇儀が萃香に目をやった瞬間、目の前にムンドウスが現れる

「次はお前だ」

勇儀に向かいその巨大な拳を振り落とした

「ううらああああ!!」

力を発動し殴り返す、強力な力のぶつかり合いは衝撃となり拡散する

「フフフ……中々だ」

押し合うムンドウスが笑った

ドン

直後、魔界の大地が爆ぜた

「カツ……ハツ……!?!」

ムンドウスが大地にめり込ませた拳を引き抜くとそこには血を吐きながら立ち上がる勇儀がいた

「ほお……」

「この……程度じゃ!まだ……!?!」

ドン

再び地が爆ぜる

「舐めるなああああ!!」

ムンドウスの拳を投げ上げた勇儀の怒声

「怪！力！乱！神！！」

能力を発動しその全てを力に変え右腕に込める

「らあああああッ！！」

また振り上げられた拳を迎え打つ

「があああああッ！！」

ぶつかり合う力と力、衝撃が辺りを走り周囲の者は見守るしか出来ない

「フフフ……フハハハハ！！」

高笑いが響いた

ドン

大地が爆ぜた

「……………ッ……………カッ……………」

爆ぜた大地からムンドウスの手が引き上げられた後に映されたのは倒れ、意識を失った勇儀

山の四天王、力の勇儀、自身の領域である力で敗北し地に伏せる

「この野郎!!」

直ぐ様、魔理沙と妹紅がムンドウスに向かうが

「フン……」

風圧の様に出された魔力が二人を吹き飛ばす

「……!!」

次の標的は妖夢、圧倒的な威圧感を出し妖夢に迫る

「ハアツ!!」

妖夢を掴もうとする手を飛び避け腕に切りつけた

ギンツ

聞こえたのは切る音ではなく弾かれる音、妖夢の剣閃はムンドウスの強靱な体に弾かれる

「我を切れるのは魔剣スパードのみ……そんなナマクラでは木の棒と何も変わらん」
「そ、そんな……う”っ!?”

唾然とする妖夢にムンドウスの手の払いが襲い防御ごと吹き飛ばされ大地にまた爆ぜさせる

「……」

既にダメージを負っていた妖夢は倒れたまま起き上がる事はなかった

白玉楼の剣士、信じる剣を振るうも通用せず、倒れる

「妖夢！コンニャロー!!」

妖夢をやられたフランが怒り、飛び掛かろうと足に力を込める

「よくも妖夢を……!!」

フランより更に怒る幽々子が飛び出した

「死を持って償いなさい!!」

怒りのままに弾幕をムンドウスに撃ちまくる、いつも冷静な彼女なら効きはしない攻撃などしない、だが妖夢をやられた事が彼女の冷静を怒りに変えていた

「ん……!!」

一心不乱に撃ち続ける、怒りを込めた弾幕はいつも以上の威力でムンドウスを襲う
「効かぬ……なあー！」

弾幕を撃ち消しながら出た指が人間大の魔力弾を放つ

「こ……こんなものお……!!」

魔力弾を受け止めた幽々子は全霊を込めて止め、押し返し始める

「凄まじい気迫を感じる……フッフ……」

押し返される様を見たムンドウスは笑いながら指を突き出した

「フッフッフ……」

指から同じ魔力弾が撃ち出され幽々子の押す魔力弾に重なる

「くッ!!」

耐えた

「ああっ!？」

耐えたのは一瞬、二重の魔力弾に押された幽々子は彼方へ飛んでいき、遠くの空で魔力弾は弾けた、爆煙から幽々子が現れ落下していく

白玉楼の主、忠臣の仇を討とうとするも一矢報いる事叶わず地に伏せる

「せあつ!!」

白蓮の正拳が胸の亀裂にある赤い球体に炸裂する

「!?!」

その赤い球体から何かを感じた白蓮はムンドウスから離れようとする

「気付いたか……しかしこの程度では無意味だがな」

自身の事を知られたムンドウスは好きにさせても良いと考えたが遊び故の気紛れは白蓮を黙らす事に決めた

「皆さんーむ……ああつ!?!」

感じた事を話そうとする白蓮にムンドウスの魔弾が放たれる

「くっ……うう……み、皆……さん!」

喋れるかどうかギリギリの威力に調整し白蓮をいたぶる

「む……ぐう……!?!む……むう……!?!」

「頑張ったではないか……褒美だ」

必死に攻撃に耐え伝えようとする白蓮に大玉の魔弾が当たり、墜落していく

「まだあるぞ、受け取るが良い」

落下する白蓮に魔弾を撃ち続ける、白蓮が地面に落ちるまで

「皆……さん……ぐめ……ん……な……さ……い……い……」

弱く、小さく眩かれた謝罪は誰にも聞こえる事はなく目は閉じられた

聖白蓮、魔帝の弱点に気付き伝えようとするも伝えきれず、地に伏せる

「……………」

ムンドウスの背中を弾幕が襲う

「火水木金土符「賢者の石」!!」

「魔符「フィットフルナイトメア」!!」

「禁弾「スターボウブレイク」!!」

パチュリー、レミリア、フランの同時攻撃がムンドウスを攻撃していた

「……………」

攻撃されるがままのムンドウスは攻撃する事なく顔だけを3人に向け眺めている

「随分余裕じゃない?」

そこに輝夜が正面から頭に向け弾幕を放つ

「……………」

輝夜の攻撃に二人を見ていた顔を戻し輝夜に視線を移す

「次はお前と遊んでやろう」

二人の攻撃を受け続けながらも何故か3人を攻撃せず輝夜を標的にするムンドウス、

それを受けて輝夜は構える

「私と遊ぶのは高くつくわよ?」

そう告げた瞬間、能力を発動する

刹那の一瞬を集めた輝夜はムンドウスに向かい認識出来ぬ間に数百、数千の攻撃を浴びせる

幻想郷屈指の強能力を存分に発揮し悪魔の帝王に立ち向かう

「はあ……はあ……」

能力を限界近くまで使用した輝夜が疲れを露に睨み付ける

「何か………したのだろうか、余りに弱過ぎて感じなかったがな」

ムンドウスには数千の攻撃も意味をなさなかった

「はあ……はあ……ッ!」

ムンドウスの魔弾を回避しながら能力を使い攻撃を続ける、しかし幾度やってもダメージが無い

「ッハアッ……ハアッ……!」

能力の使い過ぎが先に輝夜の限界を越えた、息を荒げ肩を落としムンドウスの放つ拙う様な裏拳をただ睨むだけ

「化物が……」

当たる直前に眩いた後、裏拳を受けた輝夜は飛び、地に叩きつけられまた地を爆ぜさせた

「我が化物……？違う、我は悪魔よ！悪魔の帝王よ！」

永遠を生きる姫、その能力で善戦するも圧倒的な力を前に力が及ばず、地に伏せる

「この野郎!!」

「くたばれー!!」

戻ってきた魔理沙と妹紅の弾幕が浴びせられ、5人の弾幕がムンドウスに浴びせられる

「……」

5人の攻撃にムンドウスは何故か動かない、ただ弾幕を受け続けながら5人を眺めているだけ

「私を無視するなんて……殺してやるわ……!!」

関心どころか自分を見もしないムンドウスに殺意をたぎらせ幽香はレーザーを放つ「意気込みだけは買ってやろう、フフフ……だが滑稽過ぎて笑いが出るわ」

「つう……!!?」

ムンドウスの放った赤い針の様な魔力弾がレーザーを突き抜けながら幽香の腹に刺さった

「どうした？我を殺すのではないのか？その程度の方でか？」

激痛に膝を着く幽香にそれはそれは楽しそうに問う

「舐めー……………ぐっ……………かぁ……………はっ……………!？」

幽香の返事に合わせ針の魔力弾を数発放ち発言を妨げる

「どうした？」

針を打ち続けながら聞く、それどころではないとわかっているのに

「……………ブツ」

全身を串刺しにされ、倒れ、口から血を止めどなく吐く

「フッフッフ……………」

次の標的を決めようと顔を背けた瞬間だった

「ウアアアアアアアアア!!」

意識を飛ばし、肉体と妖力の限界を越えた幽香がムンドウスに殴り掛かった

ドン

ムンドウスから放たれた魔力弾が幽香を撃ち、大地で爆ぜた

「ウウ……ガアアアアアア!!」

耐えた幽香が爆煙を払い咆哮した

ドドドドドドドド

直後、大量の魔弾が幽香を襲う

「魔弾は魔界の大地に巨大なクレーターを作る程撃たれた、巨大な爆煙が上がり、すぐ消え去る」

「……………う……………あ……………」

意識はまだあった、だが体はピクリとも動かせず、そして唯一動いた首はすぐ力無く落ち、目を閉じた

風見幽香、限界を越え挑むも倒れる

「さつきはよくもやってくれたねえ……!!」

戻った怒り心頭の萃香がムンドウスの前に立った

「なまじ中途半端に強いと難しいものだ……」

「何だつてえ？」

余裕を感じさせる言葉に萃香の表情が更に怒りで満ちる、そこにムンドウスは言い放った

「蟻を潰さぬ様に踏むのは力の加減が難しいのだ……フフフ……」

「舐められた……もんだねえ!!」

ムンドウスの発言にキレた萃香は力任せに殴りまくる、しかし、やはりムンドウスには効いている様子は見受けられない

「おおお！つらああ!!」

萃香の渾身の拳がムンドウスの胸を打った

「もう良い」

ムンドウスが萃香に手をかざし魔力を浴びせようとした時、萃香の前に霊夢が立ちほだかった

「はあ……はあ……ハアツ!!」

ナイトメアからつい先程受けたダメージを僅かに回復させた霊夢は無理を押しムンドウスに向かい弾幕を放つ

「……フツ」

ムンドウスが笑うとかざした手から魔力が放たれた

「……!?!」

放たれた魔力は霊夢を避け後ろの萃香にだけ直撃し声も出せぬ間に萃香を衝撃が襲った

「……」

衝撃に意識を飛ばされた萃香は能力が解け、縮みながらその場に倒れた

幻想郷最上位の鬼であり勇儀と同じ四天王、小さな百鬼夜行、伊吹萃香、その力を振るうも太刀打ち出来ず、倒れる

「なんで萃香だけ……」

霊夢は自分が攻撃されなかった事が解せずムンドウスに問い掛けた

「お前は最後と言った……そして……」

霊夢から視線を外したムンドウスは異常な力を感じる方向へ視線を向けた

「残るは……」

弾幕をその身に受けながら見回す、ムンドウスの目がある一点に向かう前にフランが

叫んだ

「あたしの能力でバラバラにしてやる！」

掌に目を作り出す

「これで終わりだー!!」

作り出した目を握り潰そうと力む

「きゅつとして……」

しかし……

「きゅつと……!!して……!!」

目は握り潰せなかった

「な、なんで……なんで潰せないの!？」

邪魔をされた訳ではない、こんな事など今まで無かったフランは理解出来ない事態に動転する

「フフフ……」

そこへムンドウスの笑いが向けられた

「潰せぬのは能力のせいではない、お前の力が足りないからだ……我が力の全てが籠るそれを潰す力量がお前には無い、己の無力を呪え……力無き者よ」

そう語るとムンドウスはフランから視線を外し一点を睨み付けた

「残るはお前だ、自身では満足な力も出せん脆弱な神よ……」

その3つの赤き瞳は神奈子へと向けられた

「……遊びが過ぎたな!既に力は溜まっておる!」

神奈子は身に凄まじい神気を宿していた

最初に弾幕を放ったのは13人、そう、神奈子1人だけが攻撃に参加せず今の今まで力を溜めていたのだ、ムンドウスを倒せるだけの威力を

「皆……ようやってくれた……!」

力を溜める時間を稼いでくれた事を感謝し、溜め込んだ全ての神気を御柱に注いだ
「これで終わらせてくれよう！」

御柱を構えた神奈子はそれをムンドウスに向ける

「神祭「エクスパンデッド・オンバシラ」!!」

撃たれた御柱がムンドウス目掛け直進していく

「フフフ……」

その御柱をかざした手で迎え撃つ

重なりあつた衝撃がバリバリとエネルギーの拡散に変わり辺りを荒れ狂い大地を削る

「ぬう……ああああ!!」

そして神奈子は御柱に最後の命令を与える、かつてバーンと対峙した時と同じ命令を
カッ

閃光を発し爆発した御柱が神気の奔流を起こし荒れ狂う

「よし！バーンだつてタダじゃ済まなかつたんだ！それにあの時よりもっと強い！これなら……!!」

爆発を眺めながら魔理沙が呟いた、これは希望ではない、ムンドウスの強さを知った
上で神奈子の繰り出した攻撃の威力なら倒せると見たのだ

ただ一つ誤算があれば……

「……おのれえ!!」

神奈子が忌々しく叫んだ、それにつられ気付いたのはパチュリーとレミリア
「なんだよ? やったんじゃないの……ッ!?!」

魔理沙も気付いた、魔力が全く衰えていない事に、そして高まった事に

キンッ

金属を叩いた様な音を出し爆発が止まった

ブワッ

煙を払う様に神気は消し飛ばされた

誤算、それはムンドウスの力を今が全てだと思っていた事

「曲がりなりにとも神は神……流石の我も無傷とはいかんか……」

姿を現したムンドウスは健在、神気が右腕を消し飛ばしているが魔力も衰退せず余裕の態度は崩れない

「ぬう……!？」

姿を確認した神奈子がすぐにムンドウスに向かい駆けた、狙いは右腕の付け根、そこから攻撃しようとしていた

「フハハ!!……フン!!」

ムンドウスの魔力が更に高まる、高まった魔力が消し飛んだ右腕に集まり瞬時に再生する

「ハアツ!!」

再生した右腕から大量の黒い魔力を放ち神奈子の周囲を囲む

「……チイ!？」

その状況で察した神奈子が舌打ちした瞬間、魔力は神奈子を覆い球体の形になる

「アアアアツ!!ウアアアアアアアアアア!？」

球体から悲痛な叫びだけが響く

何をされているかはおおよそ想像がつく、悲痛な叫びが苦痛を与えられているのだと容易に想像出来た

「やめろおおお!!」

神奈子を救うべく6人は魔球の破壊を試みる

「ダメツ!!強過ぎて壊せない……!!」

ビクともしない魔球はパチュリーの知識、5人の力でも壊せなかった

「アアツ!?アアアアアアアツ!!」

叫びだけが木霊する

「ツ!!……クソオ……クソオオオ!!」

神奈子の叫びを聞く事しか出来なかった

「フフフ……ハハハ……ハーツハツハツハ!!」

2つの叫びにムンドウスの高笑いが混じり場は狂喜と苦しみが染めた

「……………」

場を静寂が包む、魔球から声は聞こえなくなり、誰も喋らない

「フッフ……………」

ムンドウスが魔球を消すと神奈子は現れた

「か、神奈子お……………」

受け止めた魔理沙が嘆きの声をあげた

「……………」

神奈子の体は見るも無惨だった、全身をズタズタに引き裂かれ

左腕が肩から無くなり、右腕は捻れ切れる寸前、そして……………下半身が全て無くなっていた

想像を絶する地獄を与えられた神奈子は眠るように目を閉じていた

幻想郷の神、八坂神奈子、神の力を全て込めた乾坤一擲の一撃は帝王に届くも滅する
事叶わず……………倒れる

「フフフ……どんな気分だ？力が通じず仲間を1人、また1人と倒される気分は？フハハハハハ!!」

笑うムンドウスに全員が拳を握り締める

「……どうして私達は攻撃されなかったの？」

レミリアが感情を抑え先程から疑問だった事を聞いた、ムンドウスは幾度も攻撃する機会があつた、なのに攻撃してこなかった事を

「その女は最後に殺すと決めている……お前達5人を相手にしなかったのは……」

霊夢を除く5人を見つめる

「お前達から僅かに感じる魔力の事を聞く為だ」

「魔力……？」

「そう、お前達からは我に近き魔力を感じる……我に匹敵しうるかもしれない魔力を……」

そう語るムンドウスに余裕は感じられなかった、その言葉からは警戒が感じられる

（あいつが言ってるのはおそらくバーンの魔力……あいつと長く一緒に居たから体に魔力がこびり付いていたんだな）

そう推測する妹紅は4人を見る、4人も同じ考えだった、妹紅を見て頷く

（チルノは無事にバーンに会えたかな……）

そう思っている妹紅にレミリアが首を振った

(わかってるさレミリア……幻想郷の事は幻想郷の者が……だろ？でもな……もう頼っちゃまつてるんだよな……でもさ！)

「お前には紹介出来ないな！アイツは私達の大事な友達だからな！」

チルノを向かわせているが断られるかもしれない、例え断られてもバーンは大事な友達、妹紅は友を売る事はしなかった

「そうね……まあお前はここで死ぬんだ、知らずとも問題あるまいよ」

微笑むレミリアが続く

「貴方って彼と比べて品が無いわよね、ゲスな臭いしかないわ」

パチュリーはとても嫌そうにしている

「あたしも一緒だよ！あんたなんかに教えないよーだ！」

フランもあつかんべーつとムンドウスを挑発する

「私は別に教えても良いけどね……あんたが死ぬならね！」

霊夢も続く

「そんな訳だぜ！アイツもお前なんか眼中に無いだろうさ！悪いがお引き取り願うぜ！」

「この世からな！」

箒を突き立てた魔理沙の担架で締められる

「……吐かせてやろう、その身に絶望を刻んでな、それよりだ……」

魔力を溢れさせ、凄味を増していくムンドウス

「何故お前達は戦おうとする？力は通じず、仲間も倒れた、そしてその魔力の主を庇う……まさか自暴自棄ではあるまい？後は何がある？」

充分な絶望を与えたにも関わらず折れぬ6人に問うた

「何も無いさ……後は……」

妹紅が自嘲気味に笑う

「勇気だけだ!!」

残るは意志を支える勇気だけ……幻想郷の運命は岐路に向かい進む

第27話 大魔王

「勇気ときたか……」

ムンドウスは冷めた瞳で妹紅を見下した

「大層な事を我に言うからには何か秘策でもあるのかと思えば……勇気とは……フッフ
……」

次いで笑いが響く

「それで勝てるんでも？」

「勝つさ……勇気さえあればお前になんか負けるか！」

ムンドウスの問いに妹紅が拳を握り力強く答えた

「だが勇気で我は殺せんぞ……！我を殺したくば勇気など言わず力で殺せ！」

赤く光る眼が更に強く光る、怒鳴る様に語るが怒りは無い、策も無く、出たのはただの精神論に嘲笑を込め皮肉った

「やってやる!!見せてやるよ……」

「本当の勇気のを!!」

妹紅の言葉に傷付いた体を押しながら残る全ての力を解放しムンドウスに挑む6人

死は……近い……

地霊殿

「確かに貴方の言う通り……私はアレを倒すのに他にすがり自己の研磨を怠った……言われて初めて気付いたわ……余程余裕が無かったのね私は……」

紫は後悔していた

「愚かね私は……そう……本来なら私がやらねばならなかった……その責務から逃げ、民を危険に晒し、何が幻想郷を愛していると言うのか……」

今この事態を招いた責任を感じ顔を伏せる

「貴様に全ての責がある訳ではない、だが対応は間違いなく失策だった……今更遅いがな……」

全てが紫のせいでは無いとバーンは言うが紫はその場で考え込むだけ

数瞬の沈黙の後、紫は動いた

「……何の真似だ？」

「八雲紫……」

紫の行動にバーンの冷めた瞳、さよりの驚きの目が向けられる

「そんな事などしても余の心は動かんぞ……う？」

紫はバーンの前で膝を、手を着き、頭を下げていた

「この事態を招いたのは全て私の責……私を好きにしてくれて構いません、幻想郷を守る為なら私は何でもしましょう……だから……」

「何卒……何卒その力を貸して貰えないだろうか……」

紫はひれ伏し、バーンに協力を願った、恥も外聞も捨て去り一心に願った

全ては愛する幻想郷の為に……

「……」

暫しの沈黙が流れた

その打算無き姿と願いに何も返す事無く紫を見続ける

(ダメ……か……)

長い沈黙が紫に拒否だと悟らせた

「……もうここに用は無いわ……貴方は好きにすると良い……」

ゆるりと立ち上がった紫は身を翻し背を向けた

「どうするつもりだ……？」

「決まってるでしょう？アレの所に行くのよ」

「死を覚悟の上か……」

紫の背から感じるのは死の覚悟、挑むつもりなのだ……敵わぬと知りつつも……

「……」

能力を使いスキマを作り出す

「行きましようさとり……」

紫の誘いに頷いたさとりがスキマの前へ立つ

死地へ繋がるスキマへ足を踏み入れるその時だった

「バーン!!」

辿り着いたチルノが現れた

ドクン

心臓が……強く鼓動した

封印の地

「まだ吐く気にならんか？」

ムンドウスは見下ろしていた

「ガハッ……!？」

「ハアッ……ハアッ……!？クソオ……!？」

痛めつけた6人を

「生き地獄を味わい苦しみ死ぬよりは潔く吐いて楽に死ぬ方が良いとは思わないか？」
痛めつけても吐かない6人にムンドウスの気は変わり始めていた、吐かないなら拷問の末に殺してやると

「……言つたら！死ぬのはお前だつて！」

「そうだけ……誰が言うかよ！お前なんかにさあ！」

妹紅と魔理沙は弾幕を放つ、力もろくに入らない体で

「フン……」

軽く放つた魔力は殴る様な動きをし二人をまた痛めつける

「誰が貴様なんぞに話すか……ハアツ!!」

「こんのおー!!」

レミリアとフランの魔力による攻撃、しかしムンドウスには効かず二人の様に痛めつけられる

「パ、パチュリィー！ナイトメアを倒したアレやりなさいよ！」

「無駄よ……私では無理」

「なんで!？」

ナイトメアを仕留めたメドロアを撃てと言う霊夢だが即答で拒否される

「巨大過ぎるのよアレは……私にアレを消し去る程の大きさのメドロアは作り出せない

い、魔力も技術も全く足りないの……」

自分の力量の無さを悔しげに語るパチュリーに会話を聞いていたムンドウスが口を挟んだ

「フフフ……それにお前は作成に時間が掛かり過ぎる、それまで我が待つと思うか？」

「思えないわね……だから！こうするしかないのよ！」

魔法を放つパチュリーに霊夢も加わり攻撃する

「オラアアア!!」

4人も攻撃を加える

「あくまで喋らぬつもりか……」

その折れない意思にムンドウスの気は完全に変わった

「ならば……死ね！」

致死量を遥かに越えた魔弾を6人に放った、最後に殺すと決めた霊夢の事など構い無

く

(ハッ……死んだな……)

迫る魔弾に6人は恐怖も後悔も無かった、ただその魔弾を茫然と見つめ死を悟るだけだった

ブウン

空間の裂ける音がした

「来たか……」

魔弾はスキマへと送られ6人に命中する事は無かった

「八雲……紫イ……!!」

見覚えのあるスキマに憎むべき者の存在を感じ取る

「随分とマシな姿になったわね……前はあんなに醜い姿だったのに……」

スキマから現れたのは八雲紫

「皆大丈夫!?」 ……」

そしてチルノときとり、スキマは3人が出た後も開いたまま

「チルノ……!」

チルノの健在に嬉しく名を魔理沙が呼んだ

「無傷って……何をしていたのチルノ?」

パチュリーが傷一つ無いチルノに問う

「そんな事は後だ!チルノ!どうだった!」

妹紅が会話を割り、目的が遂げられたかを問う

「バー……!」

チルノが結果を伝えようとした瞬間だった

ムンドウスの魔力が高まり暴風のように全員を襲う

「貴様だけは許さん……八雲紫……！その体に恐怖と絶望を刻み殺してやろう……魂ごととな……!!」

怨敵を目の前にしたムンドウスが怒り露に紫を威圧していた

「許さないのは私の方……よくも愛する幻想郷を荒らしてくれたわね……貴様は許されざる存在、貴様は幻想郷に要らない……美しく残酷に……」

魔力の暴風の中毅然と佇む紫は告げた

「この大地から往ね！」

ムンドウスへの布告、同時に妖力を解放する

「……天子以来じゃないか？紫があんなに怒るなんて」

紫の怒りを見た魔理沙が呟いた、いつも掴み所の無い飄々としている紫が感情を表に

出すのは珍しい、その紫が怒っているのだ、幻想郷が本当に危険なのだと再認識する
「強い……」

妹紅が紫から感じる力に声を漏らした、確かに紫は強い、幻想郷で最強の妖怪と呼ばれる一角なのだ、弱い訳が無い

「……でも……」

フランが不安気に呟いた

「そう、足りないわね……圧倒的に力が……」

レミリアが答えた、例え幻想郷で最強の一角だとしても力が抜き出ている訳では無い、鬼等の妖怪とほぼ同等なのだ、違いは能力の差異くらい

「……どうする気かしら？」

パチュリーが紫の真意を計りかねて呟いた

「紫の事よ……何か秘策があるのよ、きつとね……」

紫を良く知る霊夢は紫がただ無謀な戦いに来た訳では無いと推測していた、内容までは予測出来ないが

「貴方達は下がってください、後は私達がやります」

6人を下がらせさとりが前に出た

「そうよ！あたいも疲れてるけどあんた達よりはマシね！そこで休んでなさい！」

チルノはそう告げると6人の返事も待たずさとりと共に紫の横に並んだ
「……今は信じるしかないか」

満身創痍の6人は現れた3人を信じその戦いを見守る

「死ね」

ムンドウスの無数の魔弾が3人に放たれる

「……」

表情険しく無言の紫が魔弾を全て開いたスキマで迎え、送る

「やあああつ!!」

「ハッ!!」

その隙に散った二人が弾幕を浴びせる

「蠅が……」

二人に向かい魔力の針弾幕を放つ

「ふん……」

紫が鼻を鳴らすと二人に迫る弾幕は命中する直前にスキマへと飲み込まれる

「相変わらず鬱陶しい能力だ、八雲紫!!」

二人への攻撃を止め紫一人に狙いを定め攻撃する

「結界「光と闇の網目」!!」

攻撃をスキマ送りにしながら弾幕で攻撃を加える

「効かんとぞー！」

攻撃を意に介さず攻撃を繰り返す

その間にも二人の攻撃は続くがムンドウスを傷付ける事が叶わない

「ハアア!!」

魔力の波動が3人を襲う

「ツウ……!?!」

波動の当たる範囲をスキマで防いだ紫だが顔色が優れない

「……ツアッ!!」

波動を全てスキマへ吸い込んだ紫は直ぐ様攻撃を仕掛ける

「無駄だ、あの時とは違う……：貴様の攻撃など既に通じん、足掻きは止めて死を受け入れろ」

「無論……死ぬより先に地獄を見せてやるがな」

怒りの中に悦を混じらせ紫に魔弾を放ち続ける

「やってみなさい……この八雲紫に対して！」

スキマの力を最大限に利用しムンドウスの攻撃を捌きながら攻撃を続ける

「凍れー！」

「これならどう!？」

チルノがムンドウスを凍らせようと能力を使い、さとりが練り合わせた弾幕を放つ

「鬱陶しいぞゴミ共……」

チヨロチヨロと攻撃をしてくる二人を目障りだと感じたムンドウスは体から全方位に魔弾、針の弾幕、ビームを波動と共に放った

そのどれもが死に到る威力を秘めている、そしてそれらは3人と6人はおろか倒れる者達にも容赦無く降り注ぐ

(これは……持つ……? いや! 持たせなければならぬ!)

全神経を能力へ向けた紫はスキマを全員に行き渡らせる

「これは……スキマの壁?」

体を囲むようにスキマが覆う、スキマを盾にし攻撃を無力化する壁を作り出した

(ダメツ!? どうしても後1人が補えない!?)

紫の力を持つてしても17人全てを守るスキマは作り出せなかった、つまり誰かが犠牲になるのだ

「八雲紫!!」

さとりが叫んだ

「私は大丈夫です! 約束を思い出してください!」

「……!!」

さよりの頷きに微笑んだ紫はさとりだけを残しスキマを全員に行き渡らせた
(そう……約束……必ずやり遂げて見せます! さとり……ごめんなさい……)

ムンドウスの攻撃が辺りを薙ぎ払った

「……くはっ!」

苦悶の表情の紫が息を荒げた

(なんとかスキマは持った……あれだけの力をスキマに送るのは賭けだったけどなんと
か凌げたわね……)

周囲を見回し全員の無事を確認する紫

彼女のスキマも万能ではない、紫しか知らぬ事だがスキマにも限界はある、スキマは
風船の様な物、一度に送れる量と質は決まっており、入った後に抜けていく、許容を越
えると破裂し能力者に多大なダメージを与えてしまうのだ、ムンドウスの攻撃はまさに
許容範囲ギリギリ、もし後僅かでも強ければスキマは壊れ紫に甚大なダメージを与えて
いた

「大した能力だ……だが……」

その紫にムンドウスが愉快気に語り掛けた

「1人……守れなかったな」

ムンドウスの視線の先、そこには倒れるさとりの姿

(防御結界を幾重にも張っていたけど防げなかったのね……いえ、結界を張っていたからそこであれで済んだ……張っていなければ即死だった……)

さとりの姿にキュッと唇を噛む

(ごめんなさい……ごめんなさいさとり……)

力が足りず犠牲にしてしまった事を心から悔やむ

「……」

その紫にムンドウスが魔弾を放つ

「……」

魔弾はスキマへ送られる

「1人やられた？それが何？その程度で私が動揺するだけでも？笑わせるわね！私が守りたいのは幻想郷！民の一人や二人構わないわ！」

心を押し殺しムンドウスに強く告げた

「…………いや…………そんな訳は無い、貴様は民も愛している…………何かを隠しているな八雲紫」
ムンドウスは紫の行動に言動に疑問を感じていた

「さつきから効かぬ攻撃を繰り返し、我を挑発し攻撃を凌ぐ…………まるで…………そう、時間稼ぎの様に…………」

「!?!」

ムンドウスの言葉に紫は反応してしまった、それを強く意識している余り突然の指摘に平静を装う事が出来なかった

「凶星か…………貴様を時間稼ぎに使う…………考えられるのは魔力の主か」

紫の背後に居る存在を紅魔館のメンバーから感じた魔力の主と同一だと推測する

「興味はあるが…………やはり危険な芽は摘まねばなるまい、スパードの血族の二の舞はもうせん」

かつて敗北した経験が危険を早く摘めと考えさせた

「貴様等は後だ、先に始末する」

紫達を無視し飛び上がろうと羽を動かす

「ムツ…………」

攻撃がムンドウスに加えられた、方向は誰も居ない筈の場所から

「まあまあゆつくりして行きなよ悪魔の大将さんさ？」

「……死に損ないが」

攻撃をしたのは萃香、ボロボロの体で立ち上がっていた

「私達は死に損ないけどお前は損なわない、何故つて？ 私が殺すからよ……」

次に幽香の攻撃

「私も……まだやれます！」

妖夢も立ち上がる

バーンと戦った事のある3人が立ち上がった

「私達もやるぜ！」

そこに6人、11人がムンドウスに立ちはだかった

「皆！力を貸して！」

紫を中心に攻撃を開始する、ムンドウスの攻撃を紫が防ぎ攻撃が加えられる

「後で殺してやろうと思っただが……」

魔力の主を始末する事より目の前の煩わしい虫を先に殺す事に決める

「今殺してやろう!!」

殺意を込めた魔力の散弾を撃つ、それは一番厄介な紫に向け撃たれた

「ちっ……!!」

向けられた魔弾をスキマへ送りながら自身も回避する、その間にも他の者は攻撃するがムンドウスは意に介さず執拗に紫だけを狙った

「まだ……この程度なら……!!」

回避し続ける紫、スキマを利用した回避はムンドウスの攻撃を全て捌いている
「……」

紫への攻撃の最中、無造作に撃たれた高速魔弾がレミアとフランに向かった

「!?……くっ……!!」

意表を突かれた紫が慌てて二人をスキマで守る

「ハアッ!」

二人の防御は成功した、しかし一瞬の隙を突いたムンドウスの威力より速さを重視した波動が紫を襲った

「アッ!?アアッ!」

魔力の波動が全身を痛め通り抜けていく、いくら速さに重点を置いているとはいえ元々の力が強いムンドウスの波動は紫を容易く傷付ける

「あうっ!?うぐうううああああっ!」

波動は紫より離れていた10人をも飲み込んでいた

「うっ……くう……!!」

全身を激しく痛められた紫が辛そうに、悔しそうにムンドウスを睨む

「良い様だ……フフフ……これで溜飲も少しは下がった……終わりだ八雲紫……死ね」

紫にトドメを刺すべく魔弾を放とうと構える

(ダメだった……ごめんなさい民よ……ごめんなさい……バーン……)

死を悟った紫は幻想郷を守れなかった事、そして約束を守れなかった事を心から謝罪した

パスツ……

「魔弾を放つ寸前のムンドウスを攻撃とは呼べぬ攻撃が当たった

「……まだ生きていたのか！死に損ないがあー！」

攻撃者を確認したムンドウスがイラつきを露に叫んだ

「へへ……」

攻撃したのは魔理沙、辛うじて……本当に辛うじて生きていた魔理沙は心奮わせ立ち上がったのだ

「何故……何故そこまでする……我が力に絶望し死ぬ方が楽に死ねたものを……」

「これは……私の誇りの為さ……お前には……わからんだろうさ……」

押せば倒れる、軽く突けば死に絶える、そうとしか見えない魔理沙

「誇り……だと？くだらん事を……魔力の主もこんな愚かな者なのか？」

一笑するムンドウスの言葉に魔理沙はハツと思いつ出した

（バーン……バーンか……）

友を思い出した魔理沙は眩きだした

「そーいやあいつも似たような種族だっけ……あいつ何年くらい生きれんのかな？ああ……一応寿命はあるなんて事言ってたな……でもきつと何万とかなんだろうな……」

「魔帝さんよ……あなたは何年生きられるんだ？あいつと同じ万年か？それとも死なないのか？まあどちらにしる寿命は相当長いんだろうな……」

「死を前に狂ったか……」

突然語り出した魔理沙に死を前にした際の奇行と感じるムンドウス

「あいつがいつだったか言ってたっけ……私と同じ魔法使いの話を……」

ムンドウスの言葉を気にせず話を続ける

「あの時は良くわからなかったけど……誇りを知った今なら良くわかるよ……」

「人間は誰でもいつか死ぬ……だから……だから一生懸命に生きるんだ!」

「お前等みたいな雲の上の連中に比べたら私達人間の一生なんてどのみち一瞬だろう!!?
だからこそ結果が見えてたつてもがきぬいてやるぜ!! 一生懸命に生き抜いてやる!!! 残
りの人生が50年だって5分だって同じ事だっ!!」

魔理沙は死力を振り絞る

「一瞬……!! だけど……閃光のように……!! まぶしく燃えて生き抜いてやるっ!!!」

「それが私達人間の生き方だ！ 良く目に刻んどけよ！ このバカヤロー!!」

強く……強く叫んだ……

死を前にしても魔理沙は絶望せず前を向いた

よくファンタジーなどではこういった場面で秘められた力が覚醒したりだとか窮地を助けてくれる者が居たりする

しかしそんな物はない、あればどんなに……どんなに楽な事か……

それを魔理沙もわかっているからこそムンドウスに告げたのだ、最後の最期まで抗うのだと……それが人間の生き方であり魂、誇りなのだ……

「いくら吠えても覆らん……誇りや生き方で我は殺せん！ 力だ！ 力を持つ者が正義！ 弱者は死ぬだけだ！」

高々と魔理沙に語る、力こそ全てと考えるムンドウスにとって魔理沙の話は聞くに耐えない戯言と同じだった

「私も付き合ってあげるわ魔理沙……閃光になりましょう……」

魔理沙の背後から声が聞こえる

「私は蓬莱人だけどき……その考えは染みたよ……閃光のように……!!」

また違う声が聞こえる

「あたいだってやってやるわ！閃光にね！」

幼い声が聞こえる

「あたしも……なれるかな？閃光みたいに……」

また違う幼い声が聞こえる

「なれるわよ……皆でなりましょう……閃光のように……!!」

聞こえる

「貴方達……」

紫が見たのは魔理沙を中心に歩み寄るレミア、妹紅、チルノ、フラン、パチュリー
他の者が倒れる中で5人だけが立ち上がり魔理沙に並んだのだ

「不愉快な……」

力の差を見せても絶望せず、いくら痛めつけても向かってくる者達にムンドウスの余
裕が怒りに変わる

「もうよい……茶番は……終わりだ……!」

終わりを告げたムンドウスは両手を拳で胸の前で構える

「帝王の力の前に……」

魔力が両手の中心に凝縮されていく

「消え去るが良い!!」

拳を合わせると凝縮された魔力が弾けドーム状で拡がっていく

「ハアアアアアアアッ!!!」

6人が魔力に向かい突撃する、力を体から溢れさせた突撃は閃光のように見えた

だが向かう先は死への闇、その闇を前に閃光は一瞬輝く流れ星と同じ、如何に輝こうとも落ちる運命にあった……

パキン

ムンドウスの魔力が止まり弾け飛んだ

「そうだ……それが余が畏怖すら抱いた人間の強さ……閃光のごとき一瞬に全てを賭ける……見事だ……」

聞き覚えのある声が6人を包んだ

「貴様が魔力の主か……何者だ？」

6人から感じた魔力と同じ魔力を持っていると感じたムンドウスは何者であるかを

問うた

「捨てた名だったが……今だけ名乗ろう……余は……」

ムンドウスを見据えながらその者は告げた

「余は大魔王バーンなり!!」

絶体絶命の危機を救うのは勇者の役目だ、ファンタジーではそれが多い、だがここにそんな都合の良い者はいない、いや、勇気を持つ者が勇者であるならばムンドウスに立ち向かった者達は全員勇者であると言える

勇者が敵を倒す、そんなありきたりな運命は幻想郷に無い、魔に対するは魔、力には力

対峙したのは人間でも妖怪でも勇者でもない

大いなる魔の王、ここに降り立つ

真
大
魔
王
バ
ー
ン

降
臨

第28話 ただ友の為に

とても……とても懐かしい声が聞こえた

「バーン……!!」

6人の視線がスキマへ向かう

「……」

そこに立っていたのは大魔王、バーン、半年を紅魔館で共に過ごした異世界の友人
「来て……くれたのか!!」

とても懐かしい感じがした、6人の死闘が僅かな時間を凝縮したたった1日会わなかっただけなのにもう何年も会ってないかの様な錯覚を覚えた

そして、喜んだ

「……来るんならもつと早く来なさいよ、折角格好良く決めるつもりだったのに……」

紅魔館の主が口元を緩ませる

「本当だぜ……これじゃあ体張った甲斐が無い」

魔法使いの少女も微笑む

「遅いわよバーン！」

事情を知る妖精も笑みを向ける

「全く……狙った様にやって来ちゃって……」

魔女の微笑

「もおー遅いよバーン！」

吸血鬼の妹も笑う

「本当だよ……でも来てくれて嬉しいよバーン!!」

不死の少女の願いが叶う

「フン……」

笑みを受けたバーンは目を閉じ微笑んだ

「……」

ムンドウスは現れたバーンを見つめていた

(こいつが魔力の主……大魔王……バーン……)

その身から感じる魔力に警戒を強める

「間に合った……」

7人の様を見ながら紫が呟いた

(これで約束は果たしたわ……次は貴方の番……お願い……)

紫はバーンを見ながら約束を思い出していた

時は少し戻り・地霊殿

部屋に入ってきたチルノを見たバーンは表情険しく名を呼んだ

「チルノ……!!」

怪我をしたチルノの姿に何故か自然と足が進んだ

「……」

自然と動いた手がベホマを掛ける

「あ、ありがとバーン……」

淀みも言葉も無く行われた行為に戸惑いを隠せないチルノ、傍の二人も同じ思いで見ている

(!?……何故余は今チルノを見て心がざわつき、ベホマを掛けるのに何の躊躇も無かったのだ……)

自身の行動に疑問を感じ一人考えるバーンに我に帰ったチルノが叫んだ

「そ、そうだ！バーン！ムンドウスって変な奴が幻想郷を荒らしてるの！助けて！お願いー！」

助けを求めた、戦う仲間を、友を、幻想郷を守る為に

「……ッ！」

また心がざわつく、チルノの助けを求める瞳がバーンの心を揺さぶる

「……それは……出来ぬ……！」

「絞り出す様に返事を返す、だが明らかに動揺している

「なんで?! バーンは幻想郷がメチャクチャになって皆が死んだって良いって事!?!」

バーンの拒否にチルノが食い掛かる

「良くは……無い、だが既に決めた事、お前の願いでも聞けん」

「何よ決めた事って!」

「余は幻想郷に干渉をしないと決めていたのだ、分かれチルノ」

論す様にチルノの頭に手を差し伸べる

「……わかんないよ!!」

手を払ったチルノが怒鳴った

「あたいは賢くないからバーンの考えなんてわかんない! わかんないよ!!」

「……」

チルノの叫びを黙って聞き続ける

「バーンは友達を助けようって気持ちは無いの?! ナイトメアの時を助けてくれたのにな

んで今はダメなの?!」

「なんでよバーン!!」

「ツ!?!」

チルノの叫びに顔が歪んだ

「黙れ……チルノ……!!」

苦悶の表情でチルノを睨む

「黙らない! 答えてよバーン!」

睨みつけるバーンに一步も退かず食い下がるチルノ、その目にはうつすらと涙が浮かんでいた

「あの時……はナイトメアを見る……ついだ……助けに行つた訳では……無い」
訳を話す、まるで自分に言い聞かせる様に……

「もういい!!」

チルノの怒声がバーンを打った

「難しい事ばかり言つて! 友達は助け合うものなんだよ! あたい達の事なんてどうでも良いなら最初から……!!」

「最初からバーンと友達になんかならなきゃよかった……!!」

涙を溢れさせ言つてしまった、バーンとの関わりを否定する言葉を……

「……………そうか」

泣くチルノを見ながら呟いた

(そうだ……………余に友など不要だったのだ……………どのみち皆殺しにされれば無に帰る……………なんの事は無い、戻るだけよ……………あの時に……………)

バーンは受け入れた、友の否定を、そして配下は居れど孤独だったあの頃に戻る事を

……………

「あたいは行く……………待ってる友達が居るから」

チルノはバーンから目を背けると紫の方へ向かう

「あんたも行くんでしょ？一緒に連れてって」

「……………良いのね？」

紫の確認が入る

「良いに決まってるでしょ！」

「違う、バーンの事よ」

「!!……もう……良いの……」

悲しく項垂れてチルノはスキマへ近付いて行く

「お前では無理だ、行つても返り討ちに合うだけ……その後自然は壊されお前は甦る事は出来なくなる……それでも行くのか？」

バーンが止める様に聞いた

「だから!?それがどうしたのよ!!あたいが行つてもダメなのはわかつてる!!でも行かないきゃ!!あたいは幻想郷が好きだから……皆が好きだから行くの!!」

「あたいは幻想郷の為に戦うの!」

背を向けたまま叫んだ、チルノの幻想郷を友を想う気持ちが声を荒げさせる

(幻想郷の為……)

チルノの気持ちに心が揺れる

(余も……魔界を背負い戦った……形は違えど想いは同じ……)

(余は……どうしたい?見殺しにするのか?友を……友……)

その時バーンはレミリアから聞いた言葉を思い出した

(愛……友愛……か……そうか……ようやく……ようやく理解出来た、余の心がざわつく訳が……)

(余は友を守りたかったのだ……友愛を真に理解していなかった……だから得体の知れぬざわつきにイラついていたので……このざわつきは友を救えと言う余の心の叫び……)

「……」

目を閉じ考え込む

「紅魔館での毎日……楽しかった……あたいを鍛えてくれてありがとう」
涙を溢し床を濡らしながらチルノは言う

「じゃあね……バーン」

二度と会えないと悟っている、だから言ったのだ、別れの言葉を……
そして振り向かずスキマへと足を伸ばした

「待て」

制止に足が止まる

「余はお前を……お前達を死なせる訳にはいかん」

「余に……任せろ」

「!!」

掛けられた言葉に振り返るチルノ、そのチルノにバーンの憑き物が落ちた様な優しい瞳が向けられる

「バーン!!」

駆け寄って抱きついたチルノの頭を撫でながらバーンは紫へと視線を向ける

「八雲紫……協力してやろう」

「……」

紫は内心驚いていた

（私達がいくら頼んでも首を縦に振らなかつたバーンが……たかが……たかが妖精の言葉に……）

驚くのは無理は無い、幻想郷の長が、博麗の巫女が、神が、自身が平伏して頼んでも動かなかつたバーンを妖精が動かしたのだ、信じられない思いで一杯だつた

「聞いているのか八雲紫？協力してやると言っている、枷を外せ」

「……わかつたわ……永琳」

バーンの言葉に我に帰つた紫はスキマに向け声を掛けた

「驚きね……貴方が協力するなんて……その妖精は何なのかしら？」

スキマで待機していた永琳が姿を現した

「そんな話をする猶予があるのか？早くするがいい」

「それもそうね……やりましょう八雲紫」

永琳の言葉に頷いた紫はバーンの枷を外す作業に取り掛かつた

「どうした？早くしろ、何を手間取っている八雲紫？」

開始から暫く経つたにも関わらず枷が外れる様子が無い事にバーンが催促する

「私の魔力の枷は終わっているわ」

「……外れていないが？」

「魔力の枷は永琳の枷と連動しているのよ、肉体の枷を外すと魔力も戻る様になっているの」

「面倒な事を……永琳まだか？」

「……厄介な事になってるわね」

肉体の枷を外している永琳の表情が曇る

「枷を付けたのは貴方があの状態の時なの、その後で戻した、問題はあの状態から戻った肉体が変質して枷の解錠を難しくしている……」

「そのせいで枷自体も緩くなってる、本来なら貴方の身体能力は半分程になる筈なのに落ちたのは攻撃力と速さ、防御力はあまり落ちなかった様ね」

「御託はよい、どれ程掛かる？」

「2, 30分くらいかしら」

「えー！皆やられちゃうじゃない！」

時間にチルノが叫んだ、ムンドウスを間近に見ているチルノはその僅かな時間が命取りになると思っていたのだ

「……八雲紫、何でもすると言ったな？」

「……ええ」

「時を稼げ、そしてあやつらを守れ、誰も死なせるな……蓬萊人であつてもな」

「……信用して良いのね？」

紫の言う信用とは協力の事、用心深い紫は確認の意味でも聞いた

「余の言葉を信用出来ぬなら枷は外さずともよい、行つて死ぬが良い」

「……わかつたわ、約束しましょう、必ず守り抜いて見せると」

スキマを開いた紫はさとりと共に向かおうとする

「あたいも行く！」

チルノも向かう

「チルノ……頼んだぞ」

「わかつた!!」

バーンの言葉に笑顔を向けた後、スキマに入った3人は消える

そして今に繋がる

「……」

周囲を見渡す、バーンの目に入るのは倒れる仲間の姿

「バーン……来て……くれたのね……」

霊夢が起き上がる、ボロボロの体を押して、飛ぶ事すら出来ず足を引きずりながらバーンに寄る

「……」

バーンの第三の目、鬼眼が光り閃光を幾つも飛ばす

飛ばされた光は倒れる仲間達に当り瞳と呼ばれる球体に変化させた
(神には効かぬか……)

神奈子だけが光を弾き瞳にはならなかった

「……」

魔力を放ち神奈子と瞳を持ち上げると目の前の霊夢に渡す

「それを持って下がっている……お前達もだ、巻き込むかもしれんからな……」

霊夢と擦れ違いながらレミリア達にも下がる様に告げたバーンは少し嬉しそうに笑う

「急に力が戻ったのでな、少々……やり過ぎてしまうかもしれん……」

唇を上げたままムンドウスの眼下に立つ

「……」

バーンから感じる魔力に明らかにムンドウスは警戒していた、何も語る事無くおもむろに黒球を作り出す

「フン……創造神気取りか」

大量に産み出された悪魔の前に鼻を鳴らす

「我は悪魔の創造主にして帝王……大魔王、その力、見せてもらおうか」

ムンドウスが悪魔達に攻撃の合図を出した

ドン

繰り出した掌圧で数体の悪魔は一瞬でバラバラに肉を散らす

「枷も悪くはなかったが……やはり良いものだ、全力を出せるというのは……」

ゴウツ

バーンの体から魔力が溢れ出す、可視化した魔力は黒く禍々しくオーラの様に出ている

「あれが……バーンの全力……」

パチュリーが呟く、その圧倒的な魔力に思わず息を飲む

「はは……参ったなこれは……凄過ぎるぜ……」

魔理沙の呆れる様な感嘆の声

「どう見るレミリア？ムンドウスと比べて？」

「わからないわね……既に私達の理解の範疇を越えている……化物よ……どっちも！」

妹紅とレミリアはバーンとムンドウスを比べるがレベルの違いに正確に測る事が出来ない、わかるのは二人が強過ぎる事だけ

「やっちゃえー!!」

チルノとフランの嬉しそうな声

それを受けてバーンは構えた

「妹紅」

迫る悪魔を見ながら友の名を呼んだ

「見るがいい、これが……余の真のメラゾーマだ……」

魔力を集中させた手が激しく炎上する

「カイザーフェニックス!!」

全力のメラゾーマ、真のカイザーフェニックス

放たれた炎鳥は以前よりも大きく、強く、そして美しかった

その炎鳥は悪魔の群れに羽を広げ優雅に飛び回る、炎鳥が過ぎ去った跡には何も残らない、肉体も灰も断末魔すらも燃やし尽くし、皇帝の名を冠した炎鳥は舞う

「ちえ……なんだよアレ……凄過ぎて何も言えないじゃねえか……」

華麗に舞うフェニックスを眺めながら悔しく呟く

「でも……負けるかよ!! いつか……いつか必ず越えて見せる! 私不死鳥で!!」

拳を握り新たに決意する

枷の無くなったバーンの全力のカイザーフェニックス、その優雅なる姿と想像を絶する威力に妹紅はそれを越えると自らに果てしなく高い目標に決めた

「チルノ」

炎鳥を消したバーンは次の友を呼んだ

「お前は器用では無い、パチュリーの様に様々な事が出来る訳でも無い……だが冷氣、その一点のみならお前は誰の追従も許さん、鍛え上げよ……この様に！」

かざした手から極冷が広範囲に一気に放出される

マヒヤド、冷氣系の最上位呪文、平均的なマヒヤドなら数体を凍りつかせる程度だがバーンが使えば話は違う、バーンの魔力から放たれるマヒヤドは半径数十メートルに居る悪魔を一瞬にして凍りつかせる、体の芯ごと……命ごと……

「腹立つわねー！わかってるわよー！」

これ見よがしのマヒヤドにブンブン怒りながらチルノはバーンに宣言した
「絶対にバーンに勝って見せる！見てなさいよ！」

力の差を見せられてもチルノは越えると言った、初めて二人が出会った時の様に

「フツ……」

宣言に薄く笑うとバーンは次の友を呼ぶ

「魔理沙」

「おう！」

バーンの呼び声に嬉しく応える

「弾幕は力……その考えは正しい、振り伏せろ！障害は全て力で！」

バーンの体から暗黒闘気が溢れだし手に収束されていく

「魔符「闘魔滅砕砲」!!」

撃ち出された暗黒闘気は凍りついた悪魔を薙ぎ払い、更に後方に居た悪魔をも薙ぎ払う

「簡単に言ってくれるぜ……そこまで辿り着くの何百……何千年掛けたんだよ……」

ビームの威力を感じながら掛けた年月の長さを感じる

「わかってるよバーン！私の寿命は短い、でもやるさ……閃光のように……!!」

ただの人間である魔理沙は決意する、限られた命の長さを懸命に生きると決めたから

「パチュリー」

そしてまた次に

「メドロアを会得出来た様だな、見事……だがまだ教えていない事がある」

悪魔の放つ魔力弾を前に語る

「メドロアとて魔法……全てを消滅させるが例外がある、それは……」

呪文を唱えたバーンの前に光の壁が出現し魔力弾を全て跳ね返した

「マホカント……魔法を反射させる呪文だ、こればかりは魔法であるメドロアも消滅

させる事は出来ん、更に……」

マホカンタを消したバーンにまた魔力弾が迫る

「フェニックススウィング!!」

凄まじい速さで出された掌底が魔力弾を弾き返す

「この様な技もある、メドロアを使う時は相手の事を良く吟味してから使え」

炎上した手を払いながらパチュリーに向く

「わかった、気をつけるわ」

頷くパチュリーにバーンは嬉しそうに微笑む

「お前の成長を嬉しく思う……だが魔の深淵はまだ深く広い、研鑽を怠るな」

「わかってる!」

パチュリーも笑みを向けた、師事するバーンに褒められた事が堪らなく嬉しかった、そして尚精進すると約束する

「レミリア、フラン」

最後に二人の友を呼んだ

「お前達は身体に恵まれている、弾幕や能力を否定する気は無いがもう少し己の肉体を

鍛えるのも良いだろう」

手刀を構えたバーンは悪魔の群れに腕を振り切る

「カラミティエンド！」

悪魔を抵抗無く両断した手刀は更に斬撃を飛ばす、飛ばされた斬撃が悪魔を両断しながら飛んでいく

「弾幕に美しさを求めるのも悪くはない、だが本質は攻撃……ならば圧倒的な力で敵を砕け！」

バーンのかざした手から魔法弾が連射される、イオラ、爆発の中間呪文だがバーンの高過ぎる魔力はイオラの1発をイオナズン級に押し上げる、それをバーンの技量でガトリングの様に連射する、爆発が絶え間なく広がり悪魔の肉片を飛び散らせる

「鬼との格など凌駕しろ、それでこそ誇り高い吸血鬼であろう？」

挑発する様に二人を見る

「フン……言われなくてもそのつもりよ！まったく……生意気な客人よ本当に……」

「わかった！あたしもつと頑張る!!」

嫌味を言いながらも笑うレミアアに伝えるフラン、吸血鬼の姉妹は高い能力を持ちながらも更に上に向かう事を約束する

「さて……いい加減うざったい悪魔共だ……磨り潰してやろう」

手刀を構えたバーンは前面に薙ぐ様に振り払った

「カラムィティウオール!!」

衝撃の壁が出現し悪魔を粉微塵に磨り潰していく、いつかの時の様に遅くなく凄まじい速さで拡がっていく

「……」

悪魔を殲滅しすまし顔で見ってくるバーンにムンドウスはまた黒球を作り3体の悪魔を造り出した

「バーン！気をつけろ！強いぞそいつらは！」

造り出された3体に魔理沙が叫んだ、3体は魔理沙達を苦しめたファントム、グリフォン、ネロアンジェロ、新たに造り出された3体はムンドウスの命で同時にバーンに向かう

「この様な雑魚に出す技ではないが……特別だ、目に焼きつけて……死ぬが良い」
迫る3体に呟いたバーンは瞳に顔を向ける

「妖夢、幽香、萃香、起きているのだろう？見よ……これが余の最大の奥義……」
瞳の3人に告げるとバーンは構えを始める

「あ……あれは!？」

瞳の中で意識を取り戻していた妖夢がかつて経験した事のある構えに目を見開く
「あれがバーンの奥義……力の結晶……」

構えを見た幽香はバーンの全身から感じる凝縮された力と隙の無さにその奥義の凄味を感じ取る

「あたしとの勝負で使われてたら勝てなかったらうねえ……」

萃香もその構えの凄まじさを感じ息を飲んだ

「お前達も刮目して見よ！これを天地魔闘の構えと呼ぶ……」

霊夢含む6人にも告げると3体を迎え撃った

「ヴオオオオオオ!!」

「グオオオオオオ!!」

「フオオオオオツ!!」

3体の上級悪魔がバーンに襲い掛かった

天
地

魔
闘

3体の悪魔は地に伏していた

ファントムはバラバラになりグリフォンは炎に身を焼いている、そしてネロアンジェ
口は真つ二つに両断されていた

「い、今のは……!?!」

一瞬の内に3体の悪魔が倒されたのを見た妹紅が驚愕しバーンを見つめている
「悪魔がバーンと交差したと思ったらいつの間にかやられてる……」

レミリアも起こった現象を理解出来ない

他の者も同様に啞然としている、その中で経験した事のある妖夢だけが何が起こったかが見えていた

(み……見た！蜘蛛の溶岩弾を掌圧で弾き返し！魔鳥をカイザーフェニックスで撃墜！更に剣士を大剣ごと手刀で切った！)

全てを見ていた妖夢は震えていた

(あの刹那に3動作を同時に……それだけじゃない、溶岩弾にはバーンさんの魔力も上乘せされて弾き返されている、カイザーフェニックスは狙いを狂う事無く直撃させその上に大剣ごと切り裂く手刀……)

震えが止まらない

(か……勝てない……)

戦っているのは悪魔、なのに端から見ていた妖夢が戦慄し勝てないと思わせる程バーンの構えは強く、凄まじく、完成されていた

天地魔闘の構え

バーンの誇る最強の奥義、体に力を溜め相手の攻撃に合わせ刹那の三連同時攻撃を食らわせる受けの秘技

天とは攻撃、地は防御、そして魔は魔法

そのどれもが必殺級の威力を持つ技を同時に放つのだ、誰であろうとただでは済む筈が無い、如何に強く造られた悪魔と言えどバーンの構えの前には無意味だった

(いやーそんな弱気でどうする！越える！必ず破って見せる！)

バーンの構えにムンドウスとはまた違う絶望を感じた妖夢だがそれを越えるべき目標と定め心を震わせた

(その前にまずあいつを倒さないといけません……)

戦いはまだ終わっていない、いや始まってすらなかった、ムンドウスを見上げながら動けない妖夢はバーンの勝利を祈る

「力試しはもう良いだろう？ムンドウス……と言ったか？」

悪魔を殲滅し終えたバーンがムンドウスを見上げる、けしかけられた悪魔は自分を試す為だとバーンはわかっていた

「強い……王の名を冠するだけある」

バーンを見下ろしながらその高き力を認める

その力を認めた上でムンドウスはバーンに聞いた

「我と手を結べ」

なんとバーンと手を組む事を求めた

「……何？」

予想だにしない言葉に疑心を含んだ目で説明を促す

「そう警戒するな、簡単な話だ、我等が手を組み世界を支配するのだ、我と主が組めば忌々しきスパードの血族も根絶やしに出来よう」

「復讐に手を貸せと？」

「そうだ、だがそれは一端に過ぎん……その後には我等魔の世界を造るのだ！魔帝と大魔王が世界を魔に染める！」

「まずはこの地からだ！！力で全てを滅し！力の法を作る！弱肉強食の魔の世界を作り上げるのだ！」

高らかに唱えられた、バーンと共に世界から魔以外を滅ぼし魔だけの世界を作ろうと言うのだ

「バーン！耳を貸すな！」

「そうよ！聞いちゃダメ！」

妹紅とチルノが叫ぶ、そんな事を許す訳にはいかない、バーンを信じていない訳では無い、バーンをたぶらかすムンドウスの発言が許せないのだ

「……」

だが二人の声を受けたバーンは考え込んでしまう

そこに

「グオオオオ……オオ……」

グリフォンが現れた、カイザーフェニックスに体の大半を焼かれ頭と首だけのグリフォンはムンドウスに助けを求める様に地を這って来ていた

「役立たずが……死ね」

ムンドウスがグリフォンに指を向けるとグリフォンの周囲に魔力が集まりグリフォンの頭を振動させる

「オオ……!?オオオオオオ!?」

魔力がグリフォンを崩壊させていき断末魔と共にグリフォンは消滅した

「あの野郎……躊躇無く殺しやがった……!!」

何の躊躇すら無い非道に魔理沙は嫌悪感露にムンドウスを睨む

「……それはお前の配下ではないのか?」

消滅したグリフォンの跡を見たバーンがムンドウスに問うた

「関係無い、役立たずは我が配下に要らん……それに我が造った物をどうしようとするの勝手ではないか？」

「……」

ムンドウスの返答にバーンはある事を思い出し考え込んだ

「して……返答は如何に？大魔王よ」

「バーン!!」

ムンドウスの後に妹紅の叫びが響いた

叫びが響いたすぐ後にバーンはムンドウスへ語りだした

「魅力のある話だ」

静かに話し出した

「……バーン？」

まるで興味があるかの様な言葉に妹紅の表情は不安に変わる、他の者も同様だった、1名を除いて

「余と貴様が組めば容易くそれは叶うだろう……それに余を倒した者にも勝てるだろう

な……」

「ほお……主にも怨敵が居たか……良いぞ、我等で抹殺してやろうではないか」
淡々と話すバーンに愉快気なムンドウスは手を差し伸べる

「さあ！我と共に！」

この手を掴めと更に強く差し出す

「バ……!?!」

妹紅が叫ぼうとした瞬間、肩に手を乗せられ止められた

「大丈夫よ……バーンを信じて……」

「レミリア……」

止めたのはレミリア、心配要らないと妹紅に語りバーンを見つめる

「よかろう」

バーンの返事が決まった

「フッフ……これで我等魔族に敵は無い！今ここに……魔の時代来たり!!!」

ゴウツ

バーンの魔力が高まった

「余が引導を渡してくれよう……帝王の名を着た小物よ……」

強大な魔力と威圧感を出し蔑んだ目でムンドウスを睨んだ

「……」

ムンドウスも何も語らないが3つの赤き瞳でバーンを睨む

「世界を魔で染めるだど？ 程度の低い事を大層に語りおつて……」

「貴様の考え全てに虫酸が走る……下衆が……!!」

ムンドウスを否定する言葉は次第に怒りを滲ませていく

「力が全て……そこだけだ、貴様と考えが合うのはな……」

共感する部分はある、だが同じ考えを共有する事すら御免だとバーンの表情が物語る

「配下すら躊躇無く殺すその冷徹……貴様は知らんだ、幾多の失敗を重ね……その度に命を拾い、そして化ける者が居る事を……」

（なあハドラーよ……）

目を閉じ、誇り高き武人にまでなった漢の名を思う

「そして……！何より……！！」

まるで大地を怯えさしている様な怒り、今までの理由などほんの一部でしかないと言わんばかり

そんな事は大事の前の小事、言ってみればどうでも良い事だ
この理由は何よりも優先する事だったから

「余の友を殺そうとした貴様が許せんのだ!!!」

それが……

バーンがムンドウスに敵対する最たる理由

友の為に……ただ、それだけ……

「覚悟は出来ていような……」

告げられたムンドウスへの布告、同じ魔に属する二人だが決定的に考えが、美学が合わなかった

そして初めてバーンの口から告げられた友、今までぼかしてきた感情が今ハッキリと言葉に表れた

「バーン……!!」

喜びに震える6人が居た、バーンの口から初めてハッキリと友と呼んでくれたからだ……堪えようのない嬉しさが内から溢れてくる

「相容れぬか……」

「その様だな……」

睨み合う二人の魔力が徐々に……更に高まりゆつくりと飛翔していく

「我に勝てると思うか……」

「小物が余に勝てると思っっているとはな……」

高まる魔力が地を揺らす

「ま、まだ本気じゃなかったのかよあいつら!？」

「……もう私達がどうにかできるレベルなんて遥かに越えてる……」

地鳴りを伴う力の高まりに妹紅が驚愕しパチュリーが諦めに似た目で2体の魔を見つめる

(私の魔力の何千? 何万倍? 桁が違い過ぎる……量も、質も……)

遙か、遙か高みにいる魔力は測定すら出来ない、魔の頂点とも言える2体の魔力はせめぎあい大地の岩片を浮かせる程に高まった

「王は1人で良い……」

「そうだ……1人で良い……」

宙の一点で止まった2体は互いの意見が合致する

ムンドウス!!

貴様が消えろ

バーン!!

王と帝、決して出会う事の無かった2体の王は幻想の特異点にて雌雄を決す

第29話 決戦

ゴゴゴゴゴゴ

揺れていた

バーンとムンドウスの居る魔界だけではない

幻想郷全体が……

妖怪の山

「なんて……なんて魔力の攻めぎ合いなの……魔界から幻想郷全体を揺らすなんて一体どれ程の魔力を持ってば……」

鳴動する山の中で諏訪子が揺れる原因である魔力の攻めぎ合いに気付き力の出所が魔界に居る2体の魔だと知る

(神奈子の神気も感じられない……多分神奈子は……)

感じられぬ同胞の気に敗北を悟る

(この魔力の片方はバーンの物……上手く対峙させられたのかそれとも何かあったのか

……)

思考は続く

(何にせよ、今……幻想郷の運命は大魔王に懸かっている……神が祈るなんて許されな
い事だけど……)

手を合わせ膝を着く

(お願いバーン……勝って……幻想郷を救って……!!)

神が魔族に祈るなど許される事では無い

しかし祈ってしまった、祈らずにはいられなかった

その行為が自身への冒涇だと分かっても祈ってしまったのだ……

自分では勝てないから……自分では民を守るのが精一杯だったから……

祈るしか……

無かったのだ……

妖怪の山に居る神は願う、幻想の郷を救えるなら何者でも構わない
例えそれが滅ぼす者と同族であつても……

紅魔館

「咲夜さん……」

「わかつてるわ美鈴……」

悪魔を殲滅し主の帰還を待つ二人が空を見上げる

「霧が……紅霧が消えて暫く経ちます……そしてこの地鳴り……」

美鈴が紅霧の消えた空、先程から始まった地鳴りに表情を険しくする

（紅霧が消えたという事はお嬢様が維持する余裕の無くなる程の相手なのかもしれない）
……既に……既に倒されたか……こゝ、殺されたか……

悪魔こそ殲滅したものの好転しない状況、帰らぬ主とその妹、戻らぬ主の親友、そして信頼する客人の不在

考えたくないのに悪い方ばかりに思考は寄る

「咲夜さん！」

そんな咲夜を察した美鈴が力強く名を呼んだ

「大丈夫です！お嬢様と妹様、パチユリー様は必ず無事です！」

グツとガツポーズをした美鈴が笑いながら咲夜に向けた

「負けませんよ！御三方がやられる訳がありません！私達はただ帰ってくる御三方の為に紅魔館を守り抜くだけです、帰って来た時に紅茶を淹れて待っていきましょう！」

「美鈴……」

励ます美鈴にまだ咲夜の表情は暗い、だが美鈴は更に続けた

「それに……」

また空を見上げる

「バーンさんが助けてくれますよ！バーンさんはお嬢様達を見捨てる様な人ではありません、多分この地鳴りはきつとバーンさんが戦っているんです……そうに違いありません！」

また咲夜に向けた美鈴ははにかんだ笑顔を向ける、彼女もまた信じているのだ半年を共に過ごしたバーンの事を

「そうね……」

咲夜の表情が明るくなっていく

「お嬢様達は負けない、バーンさんだつて居る……私がまず信じなくちゃメイド失格ね！」

よし！つと声を出した咲夜は美鈴と小悪魔、妖精にゴブリンに命令を出した

「悪魔の片付けよ！お嬢様達が帰ってくる前に紅魔館を綺麗にして出迎える為にね！」
「わっかかりました！」

信じると決めた二人は皆が帰る場所の掃除に取り掛かる、不安は無いとは言えない、でもそれ以上に信じているから主達の為に居城で待つ事に決めた

博麗神社

「悪魔は来なくなつたけど次は地震か……」

霖之助が周囲を警戒しながら呟く

「さつき魔力の高まりを感じた……バーンの魔力ともう一体の者の魔力……みんな……
覚悟だけしといて……」

アリスが表情険しく告げた

「多分バーンが戦っていると思う……でももしバーンが勝てなかったら幻想郷は滅ぶわ
……間違いないかね」

「まあ間違いないでしょうね」

「……八雲藍？ どうした？」

皆が覚悟を決める中、表情の苦しい藍に気付いた慧音、その慧音の声にも藍は気付かず
ブツブツと何かをしている

（やはりダメか……紫様と連絡が取れない……私が生きているから死んでいる訳では無
いが……）

紫との交信を行う藍だが無い返事に不安は募る

「大丈夫なのだー！ バーンは強いからきつと勝つのだー！」

「気楽な物ね……死ぬかもしれないって言うのに……」

ほとんど事情を知らないルーミアの無邪気な言葉に冷めた目で返す藍

「大丈夫です！」

そこに大妖精の声、皆を励ます様に笑顔を作っている

「馬鹿ね……根拠の無い励ましなんかするより自分の身を案じなさい」

大妖精にも冷めた目を向ける藍、緊迫した状況に余裕が無いのだ

「大丈夫です……よー！」

藍の辛辣な言葉にうつむく大妖精はスカートを握りながら呟く

「だから何を根拠に……」

「大丈夫なんです!!!」

藍の反論を遮り大妖精が叫んだ

「チルノちゃんが……皆が頑張ってるんです！バーンさんだって絶対戦ってくれてます!!!」

大妖精は信じている、皆が勝つと、バーンがいるから大丈夫なのだ……

「だからあ……大丈夫なんですよおお……」

幼い顔を涙で濡らし訴えた、7人の中で唯一バーンと長く過ごしている大妖精だけが信じているのだ

皆の強さを、バーンの強さを……

「……そうね、私達がここでいくら考えたって無意味……出来るのは信じる事だけ……」
大妖精の訴えに考える事の無意味を悟った藍

「ごめんなさいね……祈りましょう……それしか私達には出来ない……」

大妖精に謝ると藍は橙と共に目を閉じる

(紫様……どうかご無事で……)

(勝ってください……)

空を見上げ主の無事を祈った、また橙も祈る

(魔理沙……無事で帰ってくるんだ……)

霖之助も無事を祈る

(姫様……待っています)

鈴仙は不死の姫の帰りを信じる

(妹紅……お前なら心配はいらない、なら私がするのはお前の勝利だ！勝て妹紅!!)

慧音は友の勝利を信じる

(また皆で楽しくパーティーしたいのだー！)

ルーミアは楽しき時が来る事を願う

(勝って！幻想郷を……守って！)

アリスも勝利を願う

(勝つって信じてます！勝って……また明日から紅魔館で皆で遊べるって信じてます)

！)

(チルノちゃん、レミリアさん、フランちゃん、パチュリーさん、魔理沙さん、妹紅さん……それで……とつても強いけど素直になれない優しい……)

(バーンさん……!!)

紅魔館のメンバーの中で唯一戦う事の出来ない大妖精、だからこそ誰よりも皆の強さを知っている大妖精は勝利を確信し明日を想うのだ

明日からも変わらない日々が来ると信じて

「死ねバーン!!」

「来い……ムンドウス!!」

魔界上空にて遂に2体の王はぶつかり合った

「又ウン!!」

巨大な拳がバーンに迫る

「ハアッ!!」

衝撃波に変えた魔力をムンドウスに浴びせる

ドウッ

「ツ!?!……ムウ……」

衝撃が上半身を打ちムンドウスを怯ませる

「オオツ!!」

直ぐ様また殴り掛かる

「フェニックスウイング!!」

拳を掌底で弾く

ドウッ

魔力を込めた拳がムンドウスの腹を打つ

「ッ……………!?!」

腹を打った瞬間に弾いていない拳を受けバーンは後退する

「フフフ……………」

「フン……………」

軽い攻防に互いに笑い合い頂上戦は開始される

「なんて戦いだよ……………ただの殴っただけでここまで威力が出せるなんて……………」

遙か高みの戦いは妹紅を唾然とさせる、魔力は攻めぎ合い、攻撃は衝撃を伴い余波を離れる妹紅達にも届ける程

「これが王の戦い……………」

凄まじいを通り越し幻想かと思わせる程にレベルが違っていた、幻想郷の戦いが見戯に見えてしまうその戦いにレミリアはただ見つめるだけしか出来ない

「始まったみたいね……………勝てるかしらね彼は……………勝ってもらわないと困るけど」

6人の背後のスキマから永琳が現れ2体の戦いを見上げる

「勝つに決まってるでしょ!バーンがあんなのに負ける訳ないじゃない!」

「そうだよ!バーンが勝つよ!絶対!」

永琳の言葉に即答で答えるチルノとフラン、即答は無邪気故では無い
(信頼しているのね……他の者も同じ顔をしている)

信頼しているのだバーンの強さを、ムンドウスになど負ける筈が無いと、それは他の
4人も同じ、時を過ぎしていない霊夢でさえそう感じている

「魔理沙……」

「わかつてるパチュリー」

顔を見合わせ頷いた二人が永琳に詰め寄る

「私達を少しでも動ける様にしてくれないか？」

「……なんの為に？彼を信頼しているなら勝った後で回復呪文でも掛けて貰えば良い
じゃない」

永琳の言う通りバーンを信頼しているならそうすれば良いのだ、わざわざ今僅かに回
復させる必要は無い

「信頼してるさ、なあパチュリー？」

「ええ、でも万が一……」

「そう、万が一バーンが危なくなるかもしれないだろ？」

「その時は私達が助けてあげないとね」

「だから頼むよ永琳、その万が一に備えてたいんだ！その時に動けなくて友達を助けら

れないなんてのはゴメンだからさ」

二人は頼む、だが力の差は歴然、行った所で無意味に違いない、でも行く気なのだ、友が自分達の為に戦ってくれているのだからただ見ているだけなのは耐えられない、充分に戦ったにも関わらず友の為に備えようとしているのだ

(思いは同じみたいね皆……)

二人以外も同様の表情で永琳を見ている、その表情に皆が同じ考えであると感じた永琳は6人へ歩み寄る

「霊夢は諦めなさい、その傷はすぐには無理、6人は善処してみるけどあまり過度な期待しないようにね」

「わかったわ……皆、お願い」

回復を断念した霊夢は瞳と神奈子を余波から守る為に结界を張り後を皆に託す

「後は任せときなさい霊夢！」

「永琳早く!!」

「早くやりなさい永琳」

「頼むよ永琳」

霊夢の願いを託された6人の催促で治療は開始される、バーンの戦いを彼方に見ながら

ドウツ!!

「つく……!?」

「ヌウ……」

魔力の衝撃波が互いを打ち怯む

「……ハツ!!」

バーンが魔力を集中させるとバーンの周囲に爆発性の球体が大量に展開される
「余のイオナズンの弾幕……受けてみよ!!」

大量に展開された球体はイオナズン、本来ならバーンでもイオナズンを連射するのは不可能だったが幻想郷の魔方式を応用する事でイオナズンの弾幕を撃つ事すら可能にしていた

枷の外れたバーンのイオナズン、その威力は計り知れない、それを大量に展開し全てをムンドウスに放った

極大の呪文は爆発が爆発を呼び巨大なムンドウスを全て覆い尽くし尚も爆発を続ける、最後に共鳴爆発し爆煙でムンドウスの姿を隠した

「!!……………ぐう!!」

爆煙から現れた巨大な拳がバーンを打ち弾き飛ぶ

「大した威力だ……………」

爆煙から姿を現したムンドウス、体の数カ所に穴が空き肉が抉れている

「フッフ……………」

ムンドウスが笑うと傷に魔力が集まり瞬時に再生される

「だがこの程度では我は倒せん、バーン……………貴様はどうだ?」

「……………まさか今の攻撃……………全力か?」

ムンドウスの余裕に対しバーンも含んだ笑いで挑発する

「フハハ!!それは貴様が一番わかっているだろう?」

「……………やはり気に食わんな貴様は……………その余裕がいつまで持つか見物だ」

また2体はぶつかる

「オオオオツ!!」

魔力を放ち合い互いが衝撃によるめく

「ハアアアツ!!」

肉体の衝突が互いの肉を抉る

互いに傷を再生させながら決戦は続く

「フハハハハハ!!」

バーンの攻撃で受けた傷を再生させながら笑うムンドウス

「耳障りだあ!!」

ムンドウスの笑いがバーンをイラつかせる

「カラミティエンドオ!!」

バーンの手刀がムンドウスの腕を切り飛ばした

「グヌウ!?……フハハハ!!」

直ぐ様傷を再生したムンドウスが笑いと共にバーンに攻撃を加える

「ヌグアツ!」

強烈な波動がバーンを打ちのめす

「ハアツ!!」

魔弾を連射し全てをバーンに食らわせる

「どうした?この程度で手も足も出ないか?」

針弾幕も追加し愉快な口調で問う

「その名は飾りか?大魔王?」

「この大魔王バーンを舐めるでないわーっ!!」

魔力を放出し弾幕を払ったバーンは炎上する手を構える

「カイザーフェニックス!!」

炎鳥が弾幕を焼き払いながらムンドウスに直撃する

「ウオオオツ!!」

業火を纏い体を焼かれる、魔炎は全てを焼き尽くさんと燃え上がる

「余の炎に抱かれて消えろ」

悶えるムンドウスを眺めながら告げる

ドウッ

「ツ!?!カアツ!?!」

バーンの顔を衝撃が襲う

「まだだ!この程度の炎ではまだ我を滅する事は出来んぞ!!」

炎に身を焼かれながらムンドウスが怯むバーンを手刀で払う

「…………ツ!?!」

払いを受けたバーンは顔を歪ませ後退する、同時にムンドウスの攻撃により制御を失った炎が消える

「フン!!」

身を回転させながらバーンへと突進する、巨大な質量が暴風の様な魔力を纏い襲い掛

かる

「フェニックススウィング!!」

掌底を繰り出し迎え撃つ

「ぐっ……!!?」

フェニックススウィングはムンドウスを弾く事なく止まり互いに押し合う形になる

「オオオオツ!!」

「グウウウツ!!」

一歩も退かぬ押し合い、互いに後退は無い、王のプライドは退く事を許さず押し勝てと全身に力を込める

「フフフ……」

押し合うムンドウスが笑った

「グウ!!?ヌアアアアツ!!」

ムンドウスの押す力が強まりバーンの掌底を押し始める

「フハハハハハ!!」

高笑いを出した瞬間バーンの掌底は勢いよく弾かれた、ギガストラッシュすら容易く受け止めた掌底はムンドウスの力の前に敗北を喫してしまう

「……カツ!？」

突進を受けたバーンは飛んでいく

「!？」

止まったムンドウスは自身の胸部の前にある複数の魔球に気付く

魔球から閃光が迸り大爆発を起こした

バーンは接触する刹那、イオナズンを五芒魔方陣に配置し起爆していた、並の戦士なら技を破られた事で隙が生まれるがそれは流石にバーン、かつての経験が技を破られても自失する事無く攻撃を行っていた

「ゴハツ!？」

爆発から離れた場所でバーンは血を吐いていた

(チィ……やはり……)

ムンドウスの攻撃の威力を身に感じる、気を抜いていた訳では無い、戦いが始まってから常に体には気を巡らせ攻撃に備えている

それでもダメージは高い、それはムンドウスの強さを表す、それに……

「フフフ……今のも効いたぞ……」

まだムンドウスは健在だから……

五芒イオナズンを受けたムンドウスは肉体の半分を消し飛ばしていた、しかし耳障りな笑みは消えない

「カアアツ!!」

魔力がムンドウスを包むと消滅した肉体が再生される

「やるではないかバーンよ、よもやこの廃れた地にこれ程の力を持つ同族と出合い雌雄を決する事になるとは思わなかった……だが……」

3つの瞳が妖しく光る

「フッフッフ……」

何かを含む笑いがバーンに向けられる

「……何か可笑しいか？」

その笑いにバーンが冷たい瞳を向ける

「フッフ……貴様は気付かぬ程愚かでは無い……言葉にしたくないなら代わりに答えてやろう……」

「勝てない……だろう?」

語られたのはバーンの非勝利、敗北の言葉

「何を言うかと思えば……どうやら長年の封印で狂っていた様だな、フン……所詮は小物の絵空事か……」

その言葉を鼻で笑う

「絵空事とは……滑稽だなバーン……虚勢もそこまで行くと笑えるものだ……フッフッフ……」

そのバーンを嘲笑う

「絵空事よ……貴様に余が負けるだど? 笑えもせんし呆れさえするわ」

睨み付ける、笑いも怒りもせずに冷静にしているのはムンドウスの言葉が真故か偽故か……その表情からは窺い知れない

「フハハハハハ!! ならば幻想を抱いたまま死ぬしかないぞバーン? いや! それが幸せかも知れんな! 真実を受け止められず勝利の幻想を抱いて死ねるのだからなあ!!」

「フハハハハハハハ!!」

高笑い、それもバーンを完全に舐めた嘲笑の高笑い、余裕を感じさせる笑いはバーンを通り過ぎ遙か下の8人にも届いていた

「あの野郎……馬鹿笑いしやがって……!!」

勘にさわる笑い声に妹紅が拳を握り締める

「でも……バーン苦しそうだよ?」

フランが心配気にバーンを見ている、表情からは出ないか雰囲気そう感じさせていた

「大丈夫よ、それでもバーンなら……バーンならきつと何とかしてくれる……!!」

パチュリーは感じ始めた不安以上に更に信じる

「そうよ！バーンにはアレがある！えーと……」

チルノはバーンの技に勝機を感じている

「天地魔闘の構え……」

レミリアがその技の名を呟く

「そうだぜ！バーンには天地魔闘の構えがある！負ける訳無い！」

魔理沙の技への信頼、完全に把握している訳では無いが勝機を見出させる程のものを感じていた

「バーンが勝つわよ……絶対に……」

6人の眩きはバーンに届きはしなかったが想いは届いていた

「貴様の耳障りな笑いもここまでだ……これを前に尚笑えるか？ムンドウスよ？」

スウーつと動いた腕が一点で止まり構えは完成される

「……その構え……」

笑みは消えた、バーンの構えがムンドウスの余裕を崩し去り体を強張らせた

「これを破って初めて笑え……破る事は叶わんがな」

構えたまま挑発する、掛かって来いと

「……試してみるとしよう」

構えに対し直接攻撃を仕掛ける為に体に魔力を行き渡らせる

「行くぞお!!」

バーンの奥義、天地魔闘の構えに魔力を存分に込めた拳を仕掛ける

「天地……魔闘!!」

巨大な拳を前に構えたバーンが動いた

「フェニックススウィング!!」

拳を掌底で迎え撃つ、凝縮された力は掌底の力を更に引き上げムンドウスの拳を手首ごと弾き飛ばす

「カラミティエンド!!」

交差した瞬間にもう片方の腕を肩から切り飛ばす

「カイザーフェニックス!!」

交差の終わり際に炎鳥を放ちムンドウスを背から焼く

「グオオオオオツ?!?!」

一瞬の交差が終わる、刹那の結果は手首を腕をやられ全身を焼かれる苦痛に喚くムンドウスの声

「オオオオツ!!」

バーンの攻撃は終わらなかった、直ぐ様イオナズンを連射しながら追撃せんとムンドウスに迫る

「グウウウ……オオオオツ!!」

魔力の波動を全身から放ち炎ごとイオナズンの魔球を消し去る

「ムハアア!!」

手首から先の無い腕でバーンを打つ

「くはっ!？」

腕はバーンを飛ばす事ではなく体で止まるが血を吐く

「又ウン!!」

腕から衝撃波を出し吹き飛ばす

「ぐっ……………!!?ぬう……………」

体勢を立て直したバーンは血を拭いながらムンドウスを睨む

「フフ……………フフフ……………」

肉体を再生しながらムンドウスはまた意味深に笑いだした

「素晴らしい……………実に素晴らしい技だ……………それ故に残念でならんなあバーンよ……………」

先程の強張りから一変、再び余裕を取り戻すムンドウス

「……………余の奥義を破つてから笑えと言ったが?」

余裕に対し冷静に返すバーン

「フフフ……………ならばもう一度挑むとするか」

再生を終えたムンドウスは構える

「破る算段でもある様な物言い……………余の構えを破った者はいまだかつてただ一人!だが

貴様では破れぬ！何度来ようとも結果は変わらん！！」

強く叫ばれたそれは誇りの象徴、確かにバーンの語る通り天地魔闘の構えは一度破られていて、しかしそれでも尚この構えはバーン最大の技であり誇るべき奥義なのだ

王の誇りを賭けた奥義を帝王に対し構える

「フッフッフッ……」

その王の誇りに帝王の邪悪な笑みが向けられ笑い声が辺りに響く……

第30話 歩めぬとしても……

「ハアアアッ!!」

溢れんばかりの魔力をたぎらせムンドウスは構えるバーンに向かう

「天地魔闘!!」

攻撃をフェニックスウイングで弾き、両手を構えカラミティエンドとカラミティウオールを放つ

「ゴオアッ!?!」

カラミティエンドが銅を切り裂き、カラミティウオールの衝撃の壁がムンドウスを磨り潰さんと削る

「魔符「闘魔滅砕砲」!!」

カラミティウオールの上から暗黒闘気のビームを放ち追撃を行う

「ヌウウウウ……アアッ!!」

衝撃の壁と共に暗黒闘気はムンドウスの腕に払われる

「フウム……やはり素晴らしい技だな、どれ……もう一度試すか」

またバーンに向かう、魔弾を放ちながら

「結果は変わらない……何度やってもだ!」

向かってくるムンドウスに破られる事は無いと告げまたその奥義を構える

天地 魔闘

三度炸裂するバーンの奥義、放たれた魔弾を返しカラミティウォールと極限に高めた熱、氷、風、炎、爆発の弾幕を同時に撃ち込む

「ハアアアアアッ!!」

硬直の切れた瞬間に再び弾幕を放ち続ける、五属性の弾幕は衝撃の壁と重なり異常とも言えるエネルギーの奔流を起こす

「ハアッ!!」

奔流の中にカイザーフェニックスが放たれる、奔流は炎鳥を象った炎の渦となりムンドウスを覆い焼き尽くす

「…………チイ!!」

渦を見ながら舌打ちが出た

「ズアツ!!」

渦の中から声が響くと渦は止まり弾き飛ばされた

(やはり…………か…………)

再生を始めたムンドウスを見ながら確信はより深くなる

「…………これは破る事は叶わんな」

再生を終えたムンドウスがまた構えるバーンに呟いた

「当然だ…………この天地魔闘の構えは余の誇る最大の奥義、先程は破られた事があると

言ったがそれは偶然が産んだ奇跡の産物故よ……この構えを真つ向から破った者は誰一人としておらん」

バーンの天地魔闘の構えは確かに破られている、しかしそれはある大魔道士が勇者と組み偶然の果てに出来た奇跡の所業、バーンの言う通り天地魔闘の構えを真つ向から破った者は天地魔界に誰一人として存在しなかった

「どうした……臆したか？臆したならそう言え、やめる事も考えてやろう」
構えながらムンドウスに笑みを向ける

「いや……その必要は無い……」

静かに魔力を高め始める

「そのままだ……その構えのままにいろ……ヌン!!」

ゴゴ……ゴゴゴゴゴ……!!

高まる……魔力が高まる……まるで際限が無いように……

「見せてやろう……これが……我が魔帝たる由縁……」

魔力が体から稲妻の様に迸り何かとてつもない事が起きようとしているのだと見る者全てに頭で考えるより先に体が感じる

「他を遥か凌駕する……圧倒的な……」

力を……!!

バウツ!!

ムンドウスの魔力が爆ぜる様に一気に高まった、その高まりは全身を黒く覆い、赤く光る3つの瞳と胸の球体だけしか視認出来ない程強く、濃く、禍々しく、凶悪だった。全ての不吉を含んだかの様な魔力は近付くどころか常人なら見るだけで発狂してしまふ恐怖を孕み、そして……

真なる絶望を感じさせた

「!!!?」

驚いたのはバーン、そして彼方に見る8人

「なっ?!嘘だろ……そんな……そんな……」

信じられない……それを見た魔理沙はそう思うしか出来なかつた

「こんな……こんな事が……」

それを見たパチュリーも恐れおののく、何故なら……

「えっ……これってバーンより……」

チルノにもわかっていた

「嘘……だよな？」

チルノに同じくわかっていたが皆同様に信じられない

「私だって嘘だと思いたいさ……なあレミリア……？」

「そうね、でも……ありのままを受け入れるしか無い……認めたくない……認めたくない

いけどムンドウスは……」

妹紅とレミリアは認めざるを得なかった

「バーンより強い……」

語られた事実、ムンドウスの方が上だと認める

認めざるを得なかったのだ、先刻までのバーンとムンドウスの力が幻想……夢の様な力だとすれば今のムンドウスの力は神話……それも幻想郷のお伽噺で語られる様な誇張を含んだ話……

神話で語られる他を圧倒する神のごとき力をムンドウスから感じたから信じられず認められなかった

「……よもやこれ程とはな……」

全ての力を解放した真の力に思わず眩いてしまう

「フツフツフツ……我が力の深淵を感じていながら挑む貴様の姿は実に滑稽だったぞ
バーン……」

バーンは薄々感じていた、数度の攻防でムンドウスに余裕がある事を、そして内に
更なる力を秘めていた事を……

「黙れ……」

その秘めたる力を解放したムンドウスにそれしか返す言葉が無かった

「貴様の技は素晴らしい……効果もさることながら何より美しい……思わず見とれてし
まうまでに……な、だが……」

バーンの技を褒め称えつつ最大の弱点を告げた

「力が足りないのだ……我を倒せる力だけが足りない……圧倒的に!!」

弱点、それは威力の無さ、バーンの技はムンドウスに届きうるがムンドウスの命には
届かない、威力、それが致命的に足らなかった

「だが悲観する事はない……相手が我だからこそよ……フフフ……」

そうなのだ、相手がムンドウスだからこそ弱点なのだ、相手がムンドウス以外なら弱

点になり得ない、カイザーフェニックスは瞬時に敵を焼き、カラミティエンドは命を刈り取り、フェニックススウィングは力負けしない、他の技、呪文も同様、全てが必殺の威力を持っている

だ
ムンドウスを相手にしたからこそ威力の無さは弱点……弱き点になってしまったのだ

「……!!」

魔力をたぎらせたバーンは体に全ての力を凝縮する、奥義に全てを注ぎ對抗するつもりなのだ

「ならば……掛かって来るが良いムンドウス……!!余の天地魔闘に敗北は無い……これで終わりだ……!!」

「フハハア!!」

構えるバーンに黒き力を溢れさし特大の魔弾を放ち突撃するムンドウス

「天地魔闘!!! 灰になれッ!!!」

魔弾とムンドウスを目前に目を見開いたバーンは叫んだ

「……………」

刹那の衝突の後に写されたのはぶつかり合う2体の姿

半身を消し飛ばされ炎に身を焼かれ、右脇腹から入った手刀が胸の球体で止まってい

る

「フフフ……灰にはならなかったなバーンよ……」

「グツ!? ウオオオオオオッ!?」

魔力を体から放ち弾いたバーンを残る半身の拳が打った

強力な魔力を込められた拳は打った後に衝撃と魔力を波動砲の様にしてバーンを飲み込み吹き飛ばした

「……………グヌウ!?……………!?」

波動を魔力を集中し抜け出したバーンだが空中で膝を着いてしまう

「カハッ……………!? ハアッ……………ハアッ……………!?」

（余の……………全てを注いでも……………届かなかったか……………）

炎を消し再生を始めたムンドウスに悔しく睨み付ける

真の力を解放したムンドウスとバーンの天地魔闘の構え、魔弾と共に突撃してきたムンドウスにフェニックススウィングで魔弾を返すと同時にカイザーフェニックスを放つ、返された魔弾が半身を消し飛ばし炎鳥が身を焼く、そして目前に来たムンドウスに弱点である胸の球体目掛けてカラミティエンドを繰り出したのだ

「その技を破る事は叶わなかった……素直に負けを認めよう……」

ムンドウスの言う通り天地魔闘の構えを破る事は出来なかった、その究極に完成されていた技はムンドウスの力を持ってしても破る事は叶わなかった

バーンの生涯を賭けて生み出された誇りは二度折れる事は無かった

「だが……勝敗は別だ……足らなかつたな……力が……」

そう、そうなのだ……天地魔闘の構えを破る事は出来なかつた、それだけで言えばムンドウスの負け

だがこれは互いの存在を懸けた戦い、試合では無い

殺し合い……

いくらバーンの構えが凄まじかろうと命を消せなければムンドウスに勝つ技に成り得ない、再生が出来るムンドウスは全てを受けきり相撃ちに持ち込んだ、ダメージと引き換えにバーンに多大なダメージを与えたのだ

「フッフ……面白いなあバーンよ……」

ダメージに膝を着くバーンに語り始めた

「貴様がどれ程の時を掛けて鍛えあげたかは知らん……その態度から察するに長き時を掛けたのだろう……そうして身につけた強大な力が通じず弱者に成り果て思うようにあしらわれる……貴様の今の胸の内を思えば気持ちが良い……優越を感じる……!」

表情は変わらないが愉悦感を全面に押し出した語りは止まらない

「力ほど純粋で単純で美しい法律は無い、生物はすべからず弱肉強食……強きが生き弱きが死ぬ……」

「力こそが全てを司る真理……貴様も同じ考えだったなバーン?」

力の演説はバーンの考えと同じ、それをわかっている上で崩れるバーンに問う

「黙れ……!! 貴様と……同じにするな……!!」

息を荒げるバーンは睨み付ける、ムンドウスの演説は正にバーン自身と言えた、それはかつて勇者達に語った内容と酷似していたから……既視感にとらわれたバーンだがムンドウスに対する嫌悪が否定の言葉を返させる

「力があるものが正義とするなら今この場の正義は我……とすると貴様は悪か……フフ……」

バーンの否定を無視し笑うムンドウスは今一度問う

「どうだ？ 我と手を結ばぬか？ 今ならまだ間に合う、我と共に魔の世界を造ろうではないか」

仲間になる様に今一度聞いた、力の優劣がハッキリした今、この誘いはムンドウスの最大の譲歩だった

「……」

誘いを受けたバーンは黙し考える

（まだ……余の心が決めかねている……決意が固まらない……この心の揺らぎの理由はわかっている……）

バーンが考えていたのはムンドウスの誘いの事では無かった、横目でそれらを確認す

る

(……余は弱くなつたのかもしれない……かつてなら躊躇こそしたがここまで心が揺らぐ事は無かつた……)

体にベホマを掛けながら立ち上がる

「黙れムンドウス、貴様と歩む事は無い……未来永劫にな！」

体を全快させたバーンは構える

「……まだやる気か？その構えで根比べでもするつもりか？勝てぬとわかっているも尚やるのか？」

「当然だ……それより誰が勝てぬのだ？貴様か？ならば納得だ、今より貴様は余によつてこの地から消えるのだからな」

その姿を見てムンドウスは半ば諦めた様に告げた

「フム……死ね」

バーンの返事に仲間を誘う事を諦めたムンドウスはバーンを殺すべく殺意を剥き出し攻撃を開始した

「これが最後の機……」

目前に迫る力に一言呟いたバーンはムンドウスを迎え撃つ

「バーン……!!」

治療を受ける6人が拳を握り戦いを見ていた

拳を握るのはバーンの苦しさを感じ共有しているから、友の苦しみを救う事の出来ない自身の無力に腹が立つから

「……」

黙々と治療を続ける永琳、彼女も治療を続けながらもその戦いの凄まじさ、バーンの劣勢を感じていた

(……揺れている……私の助言が新たな枷になってしまったのね……)

バーンの心の揺らぎを理由を彼女だけが知っていた

(もし貴方がそのままで居ると決めても私達は責めはしないわ……貴方に全てを背負わせたのだから……)

(でも……もし貴方が決意したのなら……)

治療する手が一瞬止まる

(それは敗北よりも残酷な結果になるかもしれない……)

永琳は幻想郷の、バーンの先を思い静かに治療を再開した

「カアハッ?!」

2体が交差した後バーンが血を吐いた、天地魔闘の構えで挑むがダメージも同時に受ける

「……ッ!!」

力を振り絞る様に腕を上げ構えを取る、優雅に構えるのでは無く振り絞る様に構えるのはムンドウスから与えられたダメージが高過ぎるから……

体を全快させてからこれで三度目の激突だった

「まだ続けるか……」

バーンから受けた傷を再生したムンドウスは尚も構えを止めないバーンに呆れる様に言い放った

「もうその構えは飽きた……構えすら取れぬ様にしてやろう……」

天地魔闘の構えに突進する

「……天地……魔闘!!」

振り絞る様に出した声と共に迎え撃った

「又ガアアアア!!」

バーンの叫びが響く

「ガアッ!?!……ツウッ!?!」

痛みに悶える、バーンの左胸に赤い魔力の針が刺さっていた

「今までの戦いで貴様の心臓は3つある事は気付いた……そして1つでも潰せば再生は出来ぬ事もな」

ムンドウスは知っていた、バーンに3つの心臓があり1つでも潰せば再生は出来ない事を、幾度となく行われた攻防がムンドウスにその事を気付かせていた

「ぬう……ぐっ……!!」

針に手を掛け抜こうとするが抜けない

「無理だ、貴様の力では抜けず、消せない様にしてある」

バーンの狼狽える様を見たムンドウスは拳を構え殴り掛かる

「くっ……」

痛みを耐えながら針を抜こうとしていたバーンは構えをする機を失い左手に力を込める

「フェニックススウィング……!?!」

迎え撃った掌底は弾く事叶わなかった

ドン

「ウグオオオオッ!?!」

バーンの左腕が消し飛ぶ

掌底が弾ける許容を遥かに越えた一撃はバーンの技ごと腕を粉碎し消し飛ばした

「これで……もう構える事は出来ん……」

冷たく告げられた、天地魔闘の構えを封じた事実を

「後……貴様に残されたのは我が力による……」

ムンドウスの言葉に徐々に愉悅が混じる

「蹂躪のみよ……!?!」

発し終わった瞬間、魔弾を放ちながらムンドウスはバーンに攻撃を開始する

帝王による蹂躪が始まった

「バーン!!」

蹂躪の開始に6人が叫んだ

「永琳! まだか!? 早くしないとバーンが死んじゃう!!」

友の窮地にいても立ってもいられない魔理沙、声を荒げ永琳に応急治療の完了を促す

「早く!! バーンが……バーンが……!!」

フランも急げとせつつく、バーンの傷付く姿が堪らず目を背ける

「永琳! 急いで!!」

普段冷静なパチュリーですら焦燥し声を荒げる

「……もう待てないわ……」

「そうだな……私も我慢の限界だ……」

レミリアと妹紅がバーンを見つめながら決意する

「あたいは行く!!今行くから!バーン!!」

友のもとへ向かわんとチルノは叫んだ

チルノの言葉に6人は示し合わせたかの様に傷で痛んだ体を起き上がらせようと力を振り絞る

「待ちなさい!!」

6人を永琳が止めた

「待てないわ……もう決めたの、邪魔しないで」

止める永琳を見ずバーンだけを見つめるレミリアが制止を拒否する

「悪いな永琳……今行かないと絶対に後悔するからさ……私は死なないけど死ぬにしても死に場所は選びたい……死ぬ時は皆と一緒にが良いんだ、だから……止めないでくれ」

複雑な感情を混じらせた妹紅は痛みで体を震わせながら立ち上がろうとする

他の4人も同様、二人の言葉に触発され徐々に体を起き上がらせる

死ぬならばせめて自分達の為に来てくれたバーンと共に……

6人は同じ想いで向かおうとしていた

「……もう少し……もう少しだけ待ちなさい、可能性はまだ……ある」

永琳が苦い顔で告げる

「可能性……？貴方何を知っているの？」

何の可能性なのか……それは勿論バーンが勝つ可能性、既にそれを見出だせないレミリアは詳細を問う

「それは言えない……でもその可能性を0にするかの鍵を握っているのは貴方達……今行けば0になりかねない、だからもう少しだけ待って」

「……」

頼みに沈黙をせざるを得なかった、何故ならそれを頼んだのが他ならぬ永琳だったから

レミリア達が敵わなかった月の住人、その月の頭脳と言われ噂では幻想郷最強は彼女ではないかと言われる永琳が頼んだのだ、信頼に足る事なのだと6人に思わせた

「……わかった、後少しだけ待ちましょう、皆もそれで良いわね？」

従う事にしたレミリアは皆に確認を取る、5人も静かに頷く

「治療を続けて」

永琳も静かに頷き治療は再開された

友の地獄を見ながら……

「……カアツハツ!?!」

防御ごと殴り飛ばされ大きく後退するが踏み止まる

「!?!……グヌツ!?!」

直ぐ様詰め寄られ裏拳で打ち抜かれる

「フン!!」

吹き飛ばしたバーンに特大の魔弾を放つ

「フハハハハ!!」

魔弾を放ち続ける、優越感に浸りながら

「又ウリャア!!」

連弾の締めにもまた特大の魔弾を放つと自身も飛び込む

「……………ッ!? ハアッ……………ハアッ……………!?……………グガアッ!?」

魔弾を耐えきったバーンを殴り飛ばす

「カア……………ア……………ハアッ……………ハアッ……………!?」

飛ばされながら追撃せんと迫るムンドウスに気付く魔力を右手に集中する

「ハアアアッ!!」

体勢を立て直しカイザーフェニックスで迎撃を行う

「フン……………」

炎鳥はムンドウスの手で受け止められ羽ばたきを止められる

「……………ムン!!」

手に力を込め炎鳥を握り潰す

「クッ……………おのれえ……………グアッ!?」

散らされた炎鳥の残り火を掻き消し魔力の衝撃がバーンを打つ

「ハアッ……………ハアッ……………!! ハアアアアアアッ!!」

右腕の手刀に力を注ぐ

「又アアアアアアアア!!」

目前に迫った拳に渾身のカラミティエンドを切り入れる

「ヌウウ……!!アアアアア!!」

攻めぎ合う手刀と拳、ムンドウスの力に打ち勝たんと吼える

「フフフ……」

グシャ……

「ガ……ハッ……!?!」

手刀を砕き拳がバーンを打った

「フハハハハ!!」

打った拳を振り上げ鉄槌を食らわせる

鉄槌を受けたバーンは凄まじい勢いで地に叩きつけられ大地を爆ぜさせた

「カッ!? ガハッ!? ゴ……ゴフツ……!?!」

バーンは夥しい量の血を吐き仰向けに倒れていた、左腕は無くなり、右腕は砕かれ、全身は酷く傷み血塗れ、そして貫かれた針により再生は望めない

死に瀕するダメージ……生きながらに地獄を味わっていた

「フフフ……まだ生きているか、やはり強いな貴様は」

降りてきたムンドウスがその様を見て笑う

「我が力をあれほど受けてまだ原形を留めているとはな……流石王と名乗るだけあったな」

「……黙れ」

一人喋るムンドウスを睨み付ける

「そのザマでまだそんな事が言えるとはな……腕は消され手は砕かれ体は傷付き……もう貴様には何も残ってはいない……命乞いぐらいしかな」

何も残ってはいない、誇りは封じられ、不死鳥の羽はもがれ、不死鳥も通じず、最も強き剣すら砕かれた

もう何も残ってはいない……

「最後に聞いておいてやろう……我と来る気は無いか？来るなら歓迎しよう……」

最後の誘いがあつた

「我が配下としてな」

誘いは仲間ですらなかつた

「……ムンドウス……先に1つ聞いておきたい事がある」

返答の前に質問が行われた

「貴様は……かつては余と同じく人に近い姿だったのか？」

「……そうだ」

質問に応えが入り2体の王の会話が始まる

「我が魔界ではアルゴサクス、アビゲイルと言った者達と覇権を争っていた……その者達に勝つ為に我はこの姿になったのだ」

「やはり……勝利の為にその姿になったのか……」

「当然だ、勝つ為の力を得られるなら姿など些細な事よ、気にするにも値せん」

「そうか……」

「もう良いだろう……返事を聞かせて貰えるか？バーンよ……」

「少し……考えさせろ……」

目を閉じたバーンは思いを巡らす

（魔界の神とさえ謳われた大魔王の名は地に墜ちた……）

（奴の言う通り何も残ってはいない……いや……残ってはい……残ってはい……残ってはい……だがそれには……）

ある会話を思い出していた

「……言っておく事があるわ」

「よい、早く枷を外せ」

「貴方にとって重要な事よ、外しながら話すわ」

「……何だ？」

「今、枷を外しながら体を見たけど貴方の体はおかしくなってる」

「……先程話した変質の事か？何も変化は感じぬが……」

「普段の生活や戦闘において気になる類いじゃないの、貴方が掛けられていた呪いの副作用なのかあの状態から戻したからなのかはわからない」

「……何が言いたい？」

「……次にあの状態になったら私でも戻せないって事よ、原因がわからないからどうしようもないの」

「……そうか」

「それと……あの状態になったらおそらく貴方はここに居られなくなる」

「……何故だ？」

「あの状態で共に歩めると思う？ あんな……」

「それに強過ぎる力が博麗大結界に干渉してしまうのよ、強過ぎる力は結界をいずれ破壊してしまう、そうなれば幻想郷は滅ぶのと同義になる……」

「……そうなれば余はあやつらと……」

「……貴方がそのまままで倒せれば問題は無い、でも気に止めておいて欲しいから話したの、貴方は幻想郷を滅ぼすつもりは無いでしょう？」

「……わかった」

「良かった、さあもうすぐ終わるわ……」

(……やむを得ん……か……)

決意は固まった

「ムンドウス……」

そう言うのと砕けた右手に回復呪文を掛ける、ベホマではないホイミを

「……？何のつもりだ？」

回復させるなら先に行った全快させる呪文にすれば良い、僅かに手を回復させ指を動かせる程度の回復を行ったのが解せない

「掴める指が必要なのでな……」

倒れたまま手を掲げる、ムンドウスに向ける様に

「フツフツ……歩むか魔道を……」

出された手を見て愉快に笑う

（残されたのは……余の心に生まれた……）

この感情だけ……

顔を向けた、感情を生ませてくれた者達に

「バー……ン……？」

今にも飛び出さんとしていた6人は自分達を見るバーンの瞳に動きを止めた
その瞳が余りにも悲しみに満ちていたから

(……そんな顔をするなお前達……安心しろ……余がお前達に与えよう……例え共に歩
む事叶わずとも……友に……)

勝利を……!!

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

指が鬼眼を引き抜かんと掴み上げる、血飛沫が舞い顔に血が流れる
流れる血が目から頬を伝う、まるで泣いている様に……

「又ウウウ……この凄まじい波動……!?まさかバーン貴様……!?」

感じる力の増大にたじろぐムンドウスを前に変化は始まった

バーンの肉体の下半身と腕を覆い更なる肉体を形成していく、徐々に巨大化する肉体
と魔力はムンドウスの刺した針を消滅させ尚も続く

「バー……ン……バー……ン!!」

その変化に6人は叫んだ、それが見るからに異質な変化だったから……何か大事な物が壊れる様な気がしたから

カッ

閃光を放った肉体は黒い魔力の霧を漂わせバーンの姿を隠す

「貴様……獣に……」

ドゴオ!!

「ウガアツ!？」

霧から飛び出た巨大な拳がムンドウスを打ち吹き飛ばす

「その通りだムンドウス……獣……化物よ……貴様以上の……な!!」

霧を払い姿を現したのはムンドウスに匹敵する巨大な姿、生物的な外皮に覆われ、岩の様な肩、力の源である鬼眼は肥大化し胸の中心に来ている

そして決意を具現化した姿は肉体、魔力共に今までの比ではなかった

勝利

その二文字を渴望する友に与える為に今、王は……

鬼と成る

鬼眼王再臨

全てはただ友の為に……

例え二度と共に歩めぬとしても……

第31話 死を賭して

「な、なんだ!? 地鳴りに私でもわかる魔力の次はまた魔力かよ!」

走る少女は感じた魔力に立ち止まる

「!? ヤバツ!!」

すぐに木に隠れた、木の前を悪魔が通り過ぎて行く

(立ち止まらなかつたら見つかったな……運が良い……幸運がまだ続いてるって事か……)

悪魔をやり過ごした少女は空を見上げる

(そういえば霧は晴れたんだつたな……太陽と月があんなに近くに……バカツ!! そんな事考えてる暇なんて無いだろ!)

周囲を警戒しながらまた走り出す

(この魔力はバーンの魔力だ! 何が起きてるのか想像もつかないけどこの魔力を辿ればそこにきつとバーンは……)

少女は走る、目的を果たす為に

鬼眼王

バーンの持つ力の源、鬼眼の力を開放し肉体に上乘せした姿、それは人の形を棄て魔なる獣、魔獣となる事を意味する

力は上がり魔力も高まる、それも少々どころではない圧倒的に！

代わりに代償は人の形を棄てる事、そして……

友との……

「くっ……!!?」

猛烈な魔力の波動に顔をしかめる紫、攻撃の為の波動ではないのに浴びるだけで痛々しい

（先に博麗大結界を強化して正解だったわね……一時的な強化だけど何とかあの二人の力にも耐えた、でも……）

バーンを見つめながら瞳を悲しくさせる

（すぐにあの姿にならなかつたのはおそらく永琳でも戻せないから……だから限界までならずあんな悲しい目を……友と歩む道を捨てたくなかつた為に……）

（最低ね私は……利用する事だけを考えて結果的に幻想郷を救おうとしてくれている彼を……勝つたとしても私は退去を命じなければならぬ……こんなにも……こんなにも幻想郷の民の事を思っている彼を……!!!）

悔しくて自分に腹が立つ……全てをバーンに任せ、ただそれを見ているだけの自分が勝利の際には去れと言わなければならない無力に……

(ごめんなさい…………ごめんなさいバーン…………それでも私は貴方に勝てと願わなければならない…………ごめんなさい…………ごめんなさい…………)

唇を噛み、拳を握り締める、唇と拳から血を滴らせながら紫は懺悔する、何度も…………何度も…………

「何だよ…………何だよそれは!!」

妹紅は怒る、それは

「バーン!?それはやつちやいけないものなんじゃないのか!!?」

バーンの姿と感じる魔力に何か取り返しのつかない代償の様な物を感じていたから他の5人も同様、強くなったバーンを見て喜ぶ者はいない、皆不安な気持ちで一杯だった

「あ、あれは…………!?バーンあんた…………」

瞳の中に居る萃香がその代償を知った

(あれは呪術に近い……それも禁呪……多分もう二度とは……)

「そこまでしてあいつらを助けたかったんだねえ……妬けちゃうよ本当……」

軽口を吹きながらバーンを見つめる瞳には涙が浮かんでいた

(それがどれだけ辛い選択だったか……勝つ為に鬼となるほどの決意をしたあんたにあたりは何も言えない……勝てバーン！私にはそれしかあんなに掛ける言葉が無い……)

心情を察した萃香は勝利を願いバーンを見るしか出来ない、それだけバーンの覚悟を理解し同情したからだ、バーンの先を思うと悲しくて涙が流れた

「永琳!!」

魔理紗が永琳に掴み掛かる

「何なんだよあれは!!あれが可能性なのか!?ふぎけるな!!」

「私にだってわかる!あれは一時のものじゃない!二度と戻れないんだろ!?!あんなバーンをいくら幻想郷でも受け入れてくれる訳が無い!」

「バーンが幻想郷に居られなくなるのを知って……黙ってたのかあ!!」

揺さぶりながら問い詰める魔理紗に永琳は目を閉じ黙って聞いていた

「答えろよ!!ぶっ飛ばすぞ!!」

今にも殴り掛からんとする魔理紗に目を開いた永琳は搾る様に話し出した

「…………ごめんなさい、黙っていて…………ツ!?」

殴り飛ばされた

「謝って済むかあ!!知らなかったの私達だけか!なんで黙ってた!!なんで教えてくれなかった!!!バーンがあんな事になるなら死んだ方がマ…………!?!」

怒り狂う魔理紗が自暴自棄な言葉を出し掛けた所をレミリアが止めた

「魔理紗…………あのバーンを見てわからない?」

「わかるわけないだろ!!」

「そう…………なら貴方はバーンの友人じゃないのかもね」

「何だとお!」

怒りを更に増した魔理紗にレミリアはバーンに指差し見るように促す

「バーンはね…………私達の為…………に、あの姿になったのよ…………」

「…………私達の為?」

「バーンは幻想郷を救う気なんて無い、私達の為だけに来てくれたの…………何の為でもない、私達の為だけに…………」

「…………」

それを聞いた魔理紗は沈黙する

彼女もわかっているのだ、わかっているが激情を押さえきれなかった

「その私達が住む場所が幻想郷、だからバーンは私達の住む場所を守る為に戦ってくれているの……化物になってもただ私達の為だけに……」

「あ、諦めたっ……て……良かったの……に……ね……」

声に嗚咽が混じりそれを見られぬ様に魔理紗から顔を背ける

「ああ……わかっているよ、わかっているけどさ……これじゃあんまりだぜ……バカヤロー……」

帽子でそれを見せぬ様に顔を隠した魔理紗は掠れる様な声で呟いた

「レミィ、魔理紗……ダメよちゃんと見なきゃ……私達は見届けなければならぬ……最後まで……」

うつすらとそれを浮かべているパチュリィはそれでも見る様に促す、それが友人であるバーンに出来る唯一の筋だったから

(そこまで覚悟したお前を止めるのは失礼……だな)

そう考える妹紅に声が掛かる

「フラン！わかっているわね！！妹紅も！！」

「うん！わかっているよ！！」

「ああ親分！！行くぞ！！」

3人はわかっていた、バーンの覚悟の重さを、それを否定する事はその覚悟に水を差すのと同じ、だから言うのだ

「イケー!!バーン!!」

その覚悟を肯定し進むように叫んだ、それがバーンの覚悟に対する礼儀だから

6人の目にそれはあった、浮かぶ者、流す者それぞれだが顔は前を向き微笑んだ

バーンに向けて……

(成った……もうこれで戻る事は出来ん、後は……)

佇むバーンは友の視線に気付いていたが目を逸らせなかった

「貴様がそれを出来るとは思わなかった……あの姿は気に入っていたのだろうか？魔獣と成り果ててまで我を殺す気概、その原動力は何だ？王故か？」

舞い戻るムンドウスがバーンに問う

「王だからではない、王の名は既に無かったのだ……幻想郷に来た時から……」
「ならば何が貴様をそこまで……」

ムンドウスはまた問う、既に答えは聞いている筈なのに問い直すのはムンドウスにはそれを理解出来ないから、理解出来ないから記憶から消えていた

「友だムンドウス……友を救う為に余は鬼と成ったのだ」

「……友……だと？」

「そうだ、貴様には理解出来まい」

「フフ……」

答えを聞いたムンドウスが笑い始めた

「フハハハハ!!何を言うかと思えば友だど!?貴様本当に魔族か!?そんな実体の無い物の為に!貴様はその姿になったのか!例え我を倒したとしても自身が滅ぼすと知ってか!!皮肉よなあ!我を倒す為に魔獣になったと言うのに!!ハハハハハ!!」

ムンドウスもわかっていて、自分の力が結界に干渉していた事を、だから仮に自分を

倒したとしても滅ぼす役目はバーンが引き継ぐ事になるから面白く笑った

「それを心配する必要は無い……ムンドウス……」

笑うムンドウスに悟った瞳で告げた

「貴様を倒して……余は幻想郷を去る……」

決意と覚悟、それは先の話、友との永遠の別れを意味していた

「ハアーツハツハツハ!!笑わせるなバーンよ!そのあまりのいじらしさに笑いが禁じ得ぬ!よくもそれで大魔王などとほざけたものだ!恥ずかしくないのか?ククク……」

「ハアーツハツハツハツ!!」

同じ魔族の、それも強大な力を持つバーンが友の為に戦うなどムンドウスからすれば愚かな動機であり行為、それが面白くて笑うのだ

「それが……」

笑いにバーンが静かに怒りを溜める

「それがどうしたアアッ!!」

凄まじい怒りを怒声と共に浴びせた

「黙れムンドウス……!!もう貴様と話す事など無い!!余は貴様を殺すだけの……魔獣だッ!!」

鬼の肉体に力を込める、高まる魔力がムンドウスを押し、それを受けたムンドウスから笑みは消え臨戦態勢に入る

「……先程は我以上と言ったな……それは違うぞバーン……これで同等……我も死を覚悟せねばならん……殺してやるぞ……!バーン!!」

高めた魔力で押し返し魔力は攻めぎ合う

ゴゴゴゴゴゴ……ゴウツ!!

攻めぎ合う魔力が混ざり合い異様なフィールドを作り始めた

「あれは……!?まさか!」

その光景にパチュリーが目を見開いた

「知ってるのかパチュリー!」

それに魔理紗が聞いた

「ええ……おそらくあれは……真竜の戦い……」

「真竜の……戦い?」

「そう、真竜の戦い、私も異世界の本の伝承を読んだだけだからハッキリとは言えないけどアレは多分間違いないと思う」

「……何なのよその真竜の戦いつて?」

二人の会話にレミリアが入り、促されたパチュリーは説明を開始する

「伝承では強大な力を持った二頭の竜が雌雄を決する際に出来たお互いの力が作りだした戦闘領域、中に居る者はそれだけで生命を削られ、近づく者も容赦無く生き絶えたらしい……」

「力のみが勝負を決める究極の決闘……戦う両者のレベルが最強かつ極めて等しい時にしかこんな状態にはならないらしいわ……」

パチュリーの説明で現象を理解した5人はまたそのフィールドに顔を向ける

「つまり……今バーンとムンドウスの力は……」

「互角……って事ね、なら勝つのは……」

妹紅の言葉にレミリアが続く

「バーンだよ!!」

フランが力強く答える

「当然ね!だってバーンよ?あんな奴軽くくぶつ飛ばしてまたいつもみたいは無愛想に帰ってくるわよ!」

「絶対……絶対……」

チルノも軽口で皆に語る、二人が励ます様に語ったのは自分にも向けていた、そうでもしなければ耐えられないから、堪えきれない感情を誤魔化すしか出来なかったから、でなければバーンに負担が掛かるから……

6人の見つめるフィールドが形成を終えた瞬間、咆哮が響き、戦いは始まった

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」
「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

2体の魔が拳を振りかざし殴り合った

「グウオ!!」

「又ガツ!!」

互いに怯み、後退する

「……ハアアツ!!」

バーンの拳が打つ

「ツ!!……フンツ!!」

ムンドウスが打ち返す

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

互いに力のみで相手を殺さんと打ち合う

技など無い、あるのはたった一つ、純粹な力

権謀術数も配下も小細工すら無い、残ったのは力

その力を駆使し鬼は戦う

勝利の為に

その先にある道を見据えながら……

「……チツ！」

瞳の中で舌打ちするのは幽香

「何が友の為よ……そんな事の為に誇りを捨てて……そんな姿になってまで……」

イライラが止まらない、友の為に姿はおろか誇りすら捨てたバーンが理解出来ないから

（そんな理由がなければ少なくとも誇りを持ったままそう成れた……自分の為にだけ戦

うから……今の貴方はとても弱く見える……あれが私に勝った奴だなんて!!)

瞳の内側を殴る、孤高の幽香にはバーンの理念が理解出来ない、彼女には友と呼べる者がいないから、いないから友の為にと言うバーンの行動が理解出来ない、だから精神が未熟に感じ弱く見えた

(……私も友人が出来たらあんな風になれるのかしら……)

同時に憧れもした、誇りを捨て弱く見えるのに何故か強くなつたと感じる、それは力ではない、同じ孤高の幽香だけがそれを感じ、そう有りたいと思わせた

「貴方は私が殺す……だから……」

バーンを見つめながら初めて本心から言った

「勝ちなさいよ……」

小さく呟かれた応援の言葉は瞳に遮られ独白に終わる

そして皆に見守られながら真なる魔の戦いは更に激しく、苛烈に、熾烈を極める

「ヌアアアア!!」

バーンの膝蹴りが腹を打ちムンドウスが怯む

「アアツ!!」

顔面に拳を叩き込み更に怯んだムンドウスに殴打を浴びせる

「オオオオツ!!」

地面に叩きつけ馬乗りで殴りまくる

その戦いは単純、肉体の強さに魔力を込め殴り合う原初の戦い

美しくもなく、泥臭いとも言える戦い

だがそれはある意味で魔の深淵、魔の極致、力を突き詰めた先が今の2体だからだ
違いがあるとすればそれは一点のみ……

「ツガアツ!？」

殴り続けるバーンの腕が消し飛ぶ

「バアアアン!!」

撃たれたビームで怯んだバーンに回転しながら突進をかます

「ゴオア!？」

体に亀裂を作りながら後退するバーンだが体はすぐに再生する

「又ウウ……!?!」

同じく体に亀裂を作り大量に抉られた傷を再生させながらムンドウスは睨む

「シネエ!!」

ビームを放つ

「ウオオオオ!!」

バーンも魔弾を放つ

「オオオオツ!?!」

「ウガアアツ!?!」

エネルギーが弾け互いの体を傷付け消す

「ヌガアアアアアアアア!!」

息もつく間もなく衝突する、破壊と再生を繰り返す2体はいつ終わるやも知れない死闘を続ける

だがいずれ終わりは来る、魔力は無限では無い、いくら量があろうと有限な限り終わりは来る

尽きる前に終わるかもしれない

「ウオオオオオオ!!!」

それでも全力で戦うのだ、終焉の時、勝利の天秤が自分達に傾くように

ドゴオ!

「ガッ!?!」

ボゴオ!

「アガアッ!?!」

ドン!

「ツハッ!?!」

ドン！

「オグツ!!」

ドウツ!!

「……ガハアツ!!」

ズドオツ!!

「カアア……アアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

「頑張れ……！頑張れバーン……!!」

殴り合いながら徐々にフィールドごと飛翔していくバーンにフランが拳を握り締め
声援を送る

「……揺れてきたわね」

皆が見守る中、殴られて以降ずっと沈黙していた永琳が口を開いた

「揺れてる？」

妹紅が詳細を尋ねた

「真竜の戦い……さっきの説明で合ってるけどまだ続きがあるの」

「続き？」

「あのフィールドは両者の力が互角だから相手に届かず蓄積していった物なの、だから
両者の均衡が崩れた時全てのエネルギーが弱い方へ注がれていく……」

「弱い方……つまり敗者に……」

真竜の戦いとは完全決着のフィールド、戦いに敗れた者が即死したなら肉体は崩壊
し、例え生きていてもエネルギーがトドメを刺す、つまり死以外の決着は無い

「……なら尚更バーンの勝ちを信じなきやな！」

それを聞いた妹紅は更にバーンの勝利を願ひ皆に顔を向ける

「そうね、バーンには勝つて帰つてきて貰わないといけないもの……何が去るよ……認めないわよそんなの！」

「あの姿だつてどうにかすれば戻るかもしれないしな、ダメでも工夫すれば幻想郷でも一緒に住めるだろ！」

レミリア、魔理紗二人は諦めていない、歩む道を諦めたバーンに最初は悲しみこそしたが今は逆に怒りすら感じている

「そうよ！これがその時なんて絶対あたいは認めないわ！大ちゃんだつて一緒よ！」

かつての約束を思いだしチルノは叫ぶ

「あたしだつて認めないよ！バーンはずっとあたし達と一緒にだもん！」

「そうね……私もまだまだ教えて貰いたい事が山程あるし……逃がさないわ」

フランもパチュリーもバーンを去らせるつもりは一切無い

それだけバーンを想っている

絆、かつて吐き捨てた物がバーンと6人にはあつた

勇者達が持つていた物を……

「ハアツ……ハアツ……!?ヌアアツ!!」

「ゼエ……ゼエ……!?ハアアツ!!」

「…………ガハアツ!」

長き戦いの果て、2体に遂に限界が見えて来た

破壊と再生を繰り返した2体の再生能力は落ち、抉られた傷を、亀裂の入る体を満足り再生出来なくなっていた

攻撃に込める魔力の量も膨大だが、再生させる魔力は更に膨大だった

魔力のフィールドが体にダメージを与え続けるからだ、そこに受けるダメージも相まり限界は思ったよりずっと早く訪れた

「ハアツ……ハ……アツ……!？」

「ゼエ……ゼエ……!？」

ダメージに後退し手を止め睨み合う

「このままでは……死ぬかもしれんな……」

そう言ったのはムンドウス

「かもではない……死ぬのだ貴様は……!余の手によつてな!!」

返すのはバーン

「怖いな……本当にそうなりそうで怖い……貴様の気迫に押し切られそうだ」

そう思わせるバーンの気迫にムンドウスの言葉が弱くなる

「貴様は言っていたな……友の為だと……」

そう言うのと突然ゆっくりと回りだした

「……」

その奇妙な言葉と行動に警戒しながらもムンドウスから目を放さない

(……あそこか)

それを確認したムンドウスはまた話し出す

「それが貴様の強さか……我には理解は出来ん物だ……だが我に敗北は無い！何故かわかるかバーン？」

急に強気になるムンドウスにバーンは怪しみながらも告げる

「……聞く気は無い、消えろムンドウス……!!」

拳に強力な力を込め、ムンドウスを葬らんと構える

「まあそう言うな……簡単な事よ……貴様が先程言っていた……友を……」
力を溜めながら呟き

それを見た！

(なっ!!)

ムンドウスの視線の先にある者！思惑に逸早く気付いたバーンはその瞬間飛び出していた

「利用するからだアア!!!」

溜め込まれた極大のビームを撃った、バーンではなくフィールドの外から見守る者達に向かつて

「ッ!?!」

突然の攻撃に皆が反応出来ず身構えるしかなかった

「ガッ!?!アアア……アアアアアッ!?!」

ビームは届かなかった

バーンが身を呈してビームから皆を守ったから

「そう来ると信じていたぞ!フハハハ!!」

ビームを浴びせ続けながら愉快に笑うムンドウス、バーンの弱点を見抜き、それを利

用し成功した快感がムンドウスを笑わせた

同等の力を持つ2体の違い、それは友の有無

バーンは友の為に戦いムンドウスを追い詰めた、しかし皮肉にもバーンを追い詰めたのもまた友だった……

「あのままいけば勝てたのに……」

「体が勝手に動いた……って感じだったね」

「去るつもりだったバーンだから例え私達が死んでも勝って去るつもりだったでしょうね……それがバーンだもの……」

「守られる私達がバーンの枷になっちゃうなんて……バカね……本当に……」

「みんな……準備は良いか？」

「永琳のお陰でちよつとくらいならいつでも大丈夫だぜ！」

6人の意思は揃い、その時が来ても遅れぬように体勢を整え不可侵のフィールドを見つめる

「フッフ……勝負あつたなあ……バアアアン？」

ビームの照射を止め、背を向けて崩れるバーンに笑みを向ける

「グウヌ……ウ……」

バーンは生きてはいた、だが継続的に与えられたダメージが凄まじく肉体を再生させるのがやっとだった

「天秤は傾いた……このエネルギーは全て貴様に流れる、敗者は貴様だ！バーン!!」

叫ばれた勝利宣言に呼応し周囲のエネルギーが弱き方へ、バーンの方へ流れていく

「……」

流れてくるエネルギーにバーンは黙するのみ

「魔族の恥晒しがあ！消え失せろ!!」

黙するバーンに告げると高らかに笑いだす

「フハハハハ!!湧いてきた！また湧いてきたぞ！魔獣と化した同族は我が力の前に死ぬ

……！これが……!!完全勝利だ!!」

勝利を実感し高らかに笑うムンドウス

「安心しろバーン！すぐにこの地の者も向かわせよう……貴様の守りたかった友ごと
なあ！ハハハハハ！！」

勝利を確信した時、それは意識が最も緩む時

ドゴオ！！

「やはり貴様は生かしてはおけん……！！」

「グオオツ!?バ、バーン!!?」

その意識の緩み、油断をバーンは見逃さなかった、エネルギーの奔流に飲まれる刹那、
一気に詰め寄ったバーンの渾身の拳がムンドウスの胸の球体に炸裂しそのまま掴んだ

「貴様も道連れだムンドウス……我等は消えねばならん……それが余の友が生きる幻想
郷にとって最良だからだ……」

「ヌグオオオツ!? 離せ! 離せえええ!! バアアアン!!」

バーンを引き剥がそうと殴りつけるがバーンは決して離す事はなかった

(……後僅か……間に合わなかったか……やはり余ではダイの様にはいかんものよ……)

目を閉じ忘れたくとも忘れ得ぬ勇者と自分を比べ、苦笑した

「ウグアアアアツ!? アガアアアアツ!?」

2体はエネルギーの奔流に飲まれていく、2体の魔力の蓄積は幻想郷を数度滅ぼせるまでに溜まっていた

全てのエネルギーが2体の居る中心に注がれるとイオナズンなど比較にならない黒の結晶を越える大爆発を魔界の遥か上空で起こした

その爆発の後に生き残れるのか?

生き残ったとしてもどちらなのか？
広く濃い爆煙が結末を覆い隠していた……

第32話 終曲

爆煙は中々納まらなかつた

純粹な魔力故なのか煙すら魔力を放ち2体の魔力を隠し中の様子を探る事が出来ない有り様だった

「…………!!」

煙を見る6人の体に力が入る、声を出さないのは余りの爆発に声を失ったのもあるが何より信じているから、あの煙が晴れたらバーンの姿が現れると信じているから声を出さず見守る

バキイ

煙の中から妙な音が聞こえる、数回鳴った後、煙は遂に晴れ始めた
「ゴ……ゴアツフ……」

晴れ始めた煙から声が聞こえ、シルエットを写し始めた

「バ……」

写されたシルエットに希望を感じたチルノの言葉は遮られた

「フ……フフフ……フハハ……ハハ……!!」

遮ったのは笑い声、そして

「我……の……勝ちダアアア!!」

写されたのはムンドウスと

「……………ガ……………フツ……………」

首を掴まれたバーンだった

「バーン!!」

衝撃的な光景に6人は叫んだ、生きていたバーンが敗北し今まさにトドメを刺されようとしていたから

死に至るエネルギーを受けて2体が生きていたのはその強靱な肉体と再生能力のお陰だった、肉体が爆発のダメージを抑え、耐え、再生する、それで生きれたのだ、片方でも無ければ間違いなく即死、強過ぎた力が真なる竜の戦いの常識を覆した

「ダガ……………死オ……………覚悟したゾオオ!!このクスガアアア!!」

手に持ったバーンの腕を握り潰し捨てる、煙の中で聞こえた音は掴んでいたバーンの腕を引き千切る音だった

「ガアアアアア!!」

掴んだバーンに腕を振りかぶり、打った

「カアツ?!?!……ハツ……?!」

力の源である鬼眼を

打たれた鬼眼は亀裂が入りそこから全身に広がっていく

「終わりダバーン!……死ネ!!」

掴んでいた手を離すとバーンは落ちていく、長い距離を落下し轟音をあげて大地に衝突した

「我ノ……勝ちダ!フハハハハハハ!!」

帝王は笑う、勝利に！しかしそれを聞いていた者は誰もいなかった

「バーン……！！バーン！！」

6人が落ちたバーンに駆け寄る

「ツ！お、おい……生きてるのかバーン？」

6人は思わず目を逸らしたくなるのを抑えバーンに問いかける

バーンの肉体は上乘せ部分の四肢がもがれ達磨の様になっており更に穴や火傷の様な傷もあった、全身に走る亀裂のせいで触るだけで崩れてしまいそうに見える

源である鬼眼が損傷した事で再生も不可能になっており、そして本体のバーンは目立った外傷は無いが目を開く事は無かった

「起きろよバーン……そ、そうゆうのは洒落になってないぜ？今なら許すから起きろよ！な？」

魔理沙は事実を受け入れられなかった

きつとだとかもしかしてだとかそんな曖昧な考え、と言うより願いを捨てきれずバーンが起きる事を促す

「嘘……だよね？バーン……？」

横たわるバーンを茫然と見つめるフラン、心が受け入れを拒んでいる

「何やってんのよバーン……こ、これからアイツをぶつ飛ばすんでしょ？なら早くやりなさいよ……」

チルノは起きている前提で話し掛ける、しかし反応が返らない

「チルノ……行くぞ」

「フランも……行くわよ」

「魔理沙……行きましよう」

茫然とする3人に妹紅、レミリア、パチュリーが促した

敵を討つ為に

「待つてお姉様！バーンは起きるから！絶対に起きるから！もうちよつと待つて!!」

「そうよ！す、すぐに起きるに決まってんでしょ！それぐらい待ちなさいよね!!」

フランとチルノはまだ事実を受け入れられず食い下がる、幼いのもあるがそれだけバーンとの絆が深かったのが最大の理由

受け入れられる訳がないのだ、普通の友人でさえ受け入れ難いのにそれが半年と言えど掛け替えのない時間を過ごしたもはや友以上とすら言える存在だったのだ、心が事実を直視する事を拒んでいた

「わかってるさ二人共……今バーンは寝てるだけだぜ、そのうち起きるさ……今私達がやる事はバーンが気持ち良く起きれる様に回りを綺麗にしなくちゃな……」

諭す様に魔理沙が二人に話し掛けた、彼女は受け入れた、受け入れる他無かったから、その証拠に……

「……」

妖夢、萃香、幽香の3人が立っていた

バーンの魔力が途絶えた事で瞳が解除され意識が戻っていた3人は自然とバーンのもとに来ていた

「……ヤダ!!バーンは絶対起きるもん!!」

「バーン!!起きてよ!!起きてよお……!!」

それでも二人は食い下がる

信じる心は何度も問い掛ける

「起きてよおお……!!!」

だが……

「……………」

返事が無い、ただの……

「耳障りな声が聞こえると思えば……ゴミ共もいたんだっタナ」

絶望の帝王が舞い降りた

「……醜い姿ね、貴様にはそれがよく似合ってるわ」

レミリアの言うムンドウスの醜い姿、死闘によるダメージとエネルギーの爆発によるダメージがムンドウスの彫刻の様な体は崩壊させ正体を現していた、消え失せた顔面から3つの目玉が眼球ごと露出し外皮が崩れた箇所から無数の触手が生えている

まさに異形のモンスター、威厳を感じさせた面影は既に無かった

「今なら私達でも倒せそうだな、覚悟しな！お前を倒す……必ず！敵は討つ……!!」

正体を現したということは弱っている事、かつてムンドウスが出現した時とほぼ同じ状態だった

「まだ挑む気でイルのか……聞かせて貰える力？頼みノバーンも死んだイマ……お前達は何故絶望せずまだ戦おうとスル？勝てる見込みは無いのニダ……何故ダ？フツフツフ……教えてくれ……」

「皆殺シにする前に……!!」

魔力が溢れる、多大なダメージを受け、体が崩壊していて尚ムンドウスにはまだ余力があった、肉体を再生させるのは無理だが皆殺しに出来る力は残っていた

「言ったところでお前に理解出来るのか？出来ないよな？お前は力だけのクズだもんな、皆殺し？やってみろよ！お前なら出来るかもな！でもタダじゃくたばらないぜ！」

魔理沙を中心に6人が並び立つ

「……でやらないきゃ……！バーンに……」

「バーンに合わせる顔が無いんだよ!!」

叫ぶ魔理沙、他の5人もムンドウスを睨む、挑む気だ、力は落ちたと言えどいまだ強大な力を持つムンドウスに傷付いた体で……

「飽きたワその戯言は……死ネエエエ!!」

ビームを放とうと身を強張らせた

キュドツ!!

ムンドウスを誰かが攻撃した

「!?ヌウウ……何モノダアア!!」

攻撃の出所へ眼球を動かし攻撃者を確認する

「永琳……」

攻撃者は永琳、矢を横した力を命中させ衝撃でムンドウスを怯ませたのだ

「マダこれ程の力をモツ者がいたの力……」

受けた力の高さから永琳の実力を知る

「今なら私でも充分倒せるわね……フツ!!」

解放される力

幻想郷最強と噂されていた永琳の力が今明かされた

「強いナ……ダガア……それでもバーンの半分以下……勝てんゾオ?それでハナア?」

永琳の真の実力は相当な物だった、しかしそれはあくまで幻想郷の中での話、永琳の真の力でさえ枷の付いていたバーンと同程度でしかなかったのだ

「死ネー!ムシケラガ!!」

魔弾を永琳に向け放つ、だが永琳は微動だにしない

ブウン

魔弾はスキマへ送られた

「一寸の虫にも五分の魂……ムシケラの一刺しで死に絶える事もある、往ねムンドウス、ここは貴様の居る場所では無い……」

スキマから現れた紫が永琳の横に並ぶ

「貴様モカア!!ヤクモユカリイイ!!」

ここまで来て尚も諦めない雑魚共に抵抗する怨敵、怒るには充分だった、そもそもバーンさえ居なければ楽々と幻想郷を滅ぼし終えて魔に染め上げていた頃、それが怒りに拍車を掛け問答無用に二人に攻撃を開始した

「……さて、私も行こうかしらね」

フワツと浮かび上がった幽香は振り返りバーンを横目で見るとムンドウスへ向かって行った

「フウー………よし!!」

刀を構え深呼吸をした妖夢は同じくバーンを一目見た後幽香の後に続いた

「先に行くよ………整理がついたら来なさいな」

萃香は6人に告げるとバーンを見る事無く飛び出して行った

「……いつまでそうしてるんだ、行くぞ、皆戦ってる」

未だバーンに話し掛け続けるチルノとフランに妹紅が歩み寄る

「でも……でも……!!」

諦めきれないフランは尚も呼び続ける、友の名を

「わかってるだろ？バーンはもう……」

気持ちは痛い程良くわかる、気持ちは同じだからだ……それでも受け入れなければならぬ

バーンの死を……

「……わかった、チルノ……行く」

「うん……わかったフラン」

立ち上がった二人はバーンを見つめる、その瞳から涙が一筋流れると二人は振り返り歩きだした

流れた涙はバーンの頬に落ち、流れていく

「さあ……行くか!!」

集まった6人は戦闘を続ける5人とムンドウスを見上げ身構えた

(待て……)

声が聞こえた、聞こえない筈の……聞きたかった声が……

「!?バーン……?バーンか!」

魔力による念話、振り返った6人がバーンを見る、目を開けたバーンが6人を見ていた

(余の傍に来るのだ……急げ)

促されるままにバーンに駆け寄る

「バーン……良かった……生きてて……」

「死に体だが……な、もう声すら満足に出せん……」

掠れる様な小声、魔力を使わねばまともに話す事すら出来ない、本当に目覚めた事が不思議な程の……

「お前達の言葉と涙が……余を目覚めさせた……余にも起きるのだな……奇跡が……」

そう、奇跡……確かに死んでいたのだ、皆が完全に諦める程確実に……

それは友の呼び掛けが起こしたのかはたまた涙が神の涙の様に起こしたのか、それはわからない、だが確かに起きたのだ……

奇跡が……

「へへっ……よし！喜ぶのは後だ！待ってろバーン！お前の代わりに倒して来てやるよ！！」

嬉しさに鼻を吸りながら魔理沙は5人を見る、5人も闘志を燃え上がらせ頷いた

「待て……お前達では勝てん、だが余が勝つ道を示す、協力しろ」

6人をバーンは止めた

「勝つ道って……どうするの？」

レミリアは問う、もう動く事すら出来ない満身創痕のバーンがそれでも勝てるという

のだ、その言葉を信じて方法を聞いた

「凍れる時の秘法を使う」

バーンの口から告げられたのはパチュリーすら知らない単語だった

「凍れる……時の秘法？何よそれ？」

レミリアの催促を受けてバーンは説明を開始した

「凍れる時の秘法、これは使用した対象の時を停止させる術だ、成功すればムンドウスにも防ぐ事は出来ん」

「そこまでの術を使わなかったのは何か条件があるのね？若しくは代償が……」

効果の説明にパチュリーが問う

「安心しろこの術に代償は無い、条件があるだけだ、その条件とは今日この日……太陽と月が重なり合う一瞬……」

「皆既日食か!？」

気付いた妹紅が声を出した

「そうだ、皆既日食の時に起こる特異な魔力と余の魔力を使いこの秘法は使用出来る……その時まで後僅か、これが最後の機だ、これをしくじれば滅びを待つより他は無い」

そう語るバーンは視線をムンドウスに向ける

「ウアツ!?……ツウ……!?!」

魔弾を受けた永琳が痛みに顔を歪める

「勝テルと思うナア!ゴミ共ガアア!!」

ムンドウスが魔弾、ビーム、レーザーなど乱射し5人を相手に弱りながらも優位を保っていた

「急ぎましょう……どうすれば良いの?」

切羽詰まる状況、猶予は残されていない、6人はすぐに行動を開始した

「チルノ、来い」

まずチルノを呼んだ

「この術は凍れるとある様に本質は冷気、マヒヤドなど比較にならぬ突き詰め下げられた冷気だ、それは時すらも凍らせるある意味での極大氷結呪文と言える……」

「だからチルノ……お前がこの秘法の基点となるのだ」

「そ、そんなのあたいたいじゃ無理よ!?!バーンがやれば良いじゃない!」

そんな大層な術をいくら冷気が得意だからと出来る訳無いとチルノは思い反論する

「余の力の源である鬼眼が損傷し魔力は出せるが上手く扱えないのだ……頼むチルノやってくれ、お前しか出来んだ……」

「で、でも……」

それでも渋る、自信が無いのだ、初めての、しかも聞くからに極めて高度な術を自分が出来る自信が無かった

「案ずるな、お前一人ではない……パチュリ、魔理沙」

次にパチュリと魔理沙を呼んだ

「お前達二人はチルノを補助しろ、魔力と大筋の道は余が作る、お前達でチルノが振り回されぬ様、迷わぬ様に誘導してやれ、魔法を扱うお前達しか出来ぬ事だ、頼む」

「わかったわ、任せて！」

「任せろバーン！よしやるぜ！」

二人はチルノの傍に来て肩に手を置く、魔力を巧みに扱う魔法使いだからこそこの役目は出来る、だが責任はチルノ並みに重い、誘導を間違えば術は完成しないからだ、二人はその責任の重さを感じながらも信用し任せてくれた事が嬉しくて意気を高まらせた

「よし……レミリア、フラン、妹紅」

最後にレミリア、フラン、妹紅

「お前達には……時を……稼いで欲しい……秘法が完成するまでの間ヤツに気付かれな
い様に……」

任せたのは危険な役目、死ぬ可能性が一番高いムンドウスとの対峙、それを友に任せなければならぬ悔しさがバーンの言葉に滲んでいた

「なんだ簡単じゃない……わかったわバーン」

「いいよバーン！良かったあ……難しい事だったらどうしようかと思ってたの！」

レミリアとフランは即断で了承してくれた、それは絆が成し得る信頼、無理難題だとしても快く受ける絆があった

「まあそんな所だろうと思ってたからな、覚悟はとづくに出来てるよ」

それは妹紅も同じだった

「……死ぬなよ」

振り絞った願いを3人に向けた

「私の事は気にするなよ！命なんて安いもんさ……特に私のはな！」

微笑む妹紅、不死の蓬莱人だからこそ言える冗談をバーンに話す

「皆は死なないよ！あたしが守るもん！」

意気込むフラン、3人はおろか今も戦う5人全員を守りながら戦うつもりだ

「時間を稼ぐのは良いけど……別にアレを倒してしまっても構わないんでしょう？」

邪悪な笑みを向けるレミリア、秘法の完成前に倒すつもりなのだ

「フツ……要らぬ心配だったか」

3人の強い瞳と言葉に心配は杞憂と感じ

「始めるぞ」

秘法の作成を開始した

「じゃあ行つてくるわね」

3人も動き出した、ムンドウスに向かい飛び出して行く

今、最後の戦いが始まった

「シネエ!!」

ビームを永琳に撃つ、この場で一番力のある永琳を先に始末するつもりなのだ

「させない!」

紫がスキマを使い永琳をビームから守る

「ジャマを……スルナアア!!」

紫を捕まえようと触手を伸ばす

「神槍「スピア・ザ・グングニル」!!」

「禁忌「レーヴァテイン」!!」

ドウツ!!

そこに姉妹の同時攻撃が炸裂しムンドウスをよろけさせる

「キサマラアアア!!」

「不死「火の鳥ー鳳翼天翔」!!」

ダウンツ!!

不死鳥の突進がムンドウスを押し飛ばす

「コノ……ムシケラガ!!ゴミガア!!」

怒りで正常な判断が出来なくなったムンドウスは暴れる様に攻撃を乱射する

ズドドドツ!!

「私達も忘れてもらっては困りますね」

妖夢、幽香、萃香の3人も攻撃を加える

「又ガアアアア!!」

8人を相手に弱るムンドウスは倒されはしないが倒すことも出来ず膠着状態では進む
進む

「ん〜……くう……!?」

道を進むチルノは苦戦していた、ただでさえ長く険しい道を膨大な魔力を持ちながら進むのだ、誤らない様に必死だった

(これは難儀ね……少しでも道を間違えば完成しないどころか私達が逆に凍らされる……)

(それに魔力だつて暴発しない様に抑えなきゃならない上に皆既日食の瞬間に合わせなきゃならない……大変だぜこれは……)

パチュリィと魔理沙も苦戦している、バーン程の技量が無い二人は協力しても一歩を確実に進ませる事しか出来ない

(この調子なら間に合う……後はムンドウスが気付きさえしなければ……)

魔力を出し道を作ったバーンは進行状況を見るしか出来ず懸念される最悪の事態を考える、抗う術は無いのだが……

そしてまた時は進む……

「ガアア!!ヌガア!!」

永琳を捕捉したムンドウスが殴り付ける、回りの攻撃を意に返さずひたすら永琳を殴り続ける

「ムンドウス!!」

紫が弾幕を撃ちながら永琳のもとに飛ぶ

「ヤクモユカリイイイイ!!」

永琳への攻撃を止めたムンドウスが魔弾とレーザーを紫に放つ

「くっ……うう……」

スキマで防御したが絶え間無く撃たれる攻撃にスキマが限界を迎える

「……アウツ!？」

破裂する寸前にスキマを閉じた紫をムンドウスが殴り飛ばし魔弾を撃ち直撃させる

「……」

「……」

永琳と紫は意識こそあるが動けず地に倒れた

「ハアア!!」

「ハツ!!」

「そおらあ!!」

すかさず幽香、妖夢、萃香の攻撃が入りムンドウスの体を削り体液を撒き散らす

「ハアツ……ハアツ……キエウセロオオ!!」

魔力を波動に変え3人に浴びせる

「ウアアッ!？」

波動を浴びた3人は墜落していく

「我ながら情けない威力ダ……死にかけのゴミすら今ので殺せんトハ……」

度重なる戦いで弱ったムンドウスの力は永琳と紫により更に削られ威力を大きく落としていた、そうでなければ3人はおろか永琳と紫すら軽く殺せているのだから

「ハアッ……ハアッ……」

大地に落ちた3人にトドメを刺すべくビーム放とうとする

「待てよクズ野郎……まだ私達がいる、トドメは私達に勝てたらしろよ……オラア!!」

不死鳥を纏う妹紅が触手を焼き払いながら発射を阻止する

「我ヲ舐めるでナイワアアア!!」

突進してくる妹紅に腕で払う

「負けるかああああ!!」

ぶつかり合った不死鳥と腕は押し合う

バチィ!

不死鳥と腕は弾き合い妹紅の不死鳥は消える

「シ……ネエエエ!!」

動きの止まった妹紅に魔弾を放つ

「きゅつとしてドカーン!!」

魔弾は妹紅に当たる前に破壊される

「あんたは無理でもそれぐらいなら壊せるもんね!」

能力を使い妹紅を守ったフランだが顔は怒っている、他の5人を守れなかったから

「行くわよ二人共……ハアアアッ!!」

レミリアの号令で妹紅は再び不死鳥を纏い、フランは体に力を込めて3人は一斉にムンドウスへ体当たりを食らわせる

「又ウグオオッ!?!」

強烈な攻撃に堪らず下がったムンドウス、3人の力は弱ったムンドウスに届いた

しかしそれがムンドウスの怒りを鎮める原因にもなった

(何ダこいつらハ……理解できる……何故ここまでやるのダ……勝てるハズがナイノニ……)

「!?!」

その瞬間気付いた、この地の遥か上空から感じる特異な魔力に

(これは皆既日食ノ……!!?)

感じた……その特異な魔力を利用してゐる者を……

ギョロ

3つの眼球が一斉に動いた

「キサマカア……バアアアン!!」

また湧いた怒りを全開に睨み付けた

(気付かれたか!!ええい!後一步の所で……!!)

何とか体を動かそうと試みるが鬼眼の体はピクリとも動かない

「皆既日食ノ魔力を利用して何力を企んでイタようだナア……バアアアン?」

企みが何かはわからないがバーンのする事だ、自分にとつて危険な事なのは間違いない、そう感じたムンドウスはバーンにトドメを刺すべく手をかざす

「させるかあああ!!」

その手に妹紅が突進し撃たれた魔弾は逸れてバーン達の後方で爆発する

「邪魔はさせないよ!」
「もう少し付き合つて貰うわ」

姉妹がバーン達を守るように立ち塞がる

「みんな!!」

肩に手を置く魔理沙が叫ぶ、気付かれた今ムンドウスは死に物狂いで阻止しに来るだろう、それから守るのだ、危険度が更に増した不安が声に出た

「魔理沙!!」

傍らのバーンが出ない声を振り絞り叫んだ

「集中しろ！パチュリーの補助だけでは辿り着けん！お前の力も必要なのだ！」

「あやつ等を信じろ……大丈夫だ……!!それはお前も良く知っている筈だ魔理沙!!」

傍らでなければ聞こえない弱々しい声だったが強い意思を放っている

「……悪い！後少しだ！続けるぜ！」

バーンの言葉に感化され気を取り直した魔理沙は後僅かの道を進むチルノの補助を再開する

皆既日食まで後5分を切っていた

「ツアアツ!!」

レミリアがムンドウスの放つ魔弾に弾幕を当て軌道をずらす

「ム……!!」

ずらせれなかった魔弾や針をフランが能力で破壊する

「セアアアアアッ!!」

妹紅がバーン達に向かうムンドウスを押し留める

「ジャマヲ……」

魔力を集中し

「スルナアアアアア!!」

衝撃を変えて全方位に放った

「……ツアグツ!!?アガアアア!?!」

その衝撃に妹紅が吹き飛ばされ大地に落ちる

「ぐうううう……!!?クソオオ……!!」

立ち上がろうとするが腕と足に力が入らない、右腕は神経をやったのか上げる事が出来ず左足は曲がらぬ方向へ曲がってしまった

「これぐらいで……諦める……かよー負けられないんだアアア!!」

炎を燃やして立ち上がる、立つことすら出来ない筈の傷で何故立てるのか?

それは意志、絶対に勝つという意志がダメージに悲鳴をあげる体を凌駕した

その姿はまさに炎の中から甦る不死鳥、傷付きながらもその美しき炎翼を広げ飛び立たんとする

「強くなったわね妹紅、バーンの影響かしら……」

そこに背後から来た者が妹紅に並ぶ

「輝夜……」

並んだ者は輝夜、ムンドウスから受けたダメージでボロボロだが澄ました表情でムンドウスを睨む

「寝てても良かったんだけど……あんたの必死な姿を見たら体が勝手に動いちちゃってね……」

そう言うと輝夜は飛び上がる

「お、おい輝夜!!」

返事を返す暇もなく飛び上がった輝夜に慌てて呼び掛ける

「見てなさい妹紅……あんたが不死身なら……」

バーンに向かい魔弾を放とうとするムンドウスに

「私もまた不死身だアア!!」

凄まじい力を込めた弾幕を撃ち込んだ

「又グオオオッ!?!」

弾幕を一身に受けたムンドウスはダメージを受け怯む

「オオオ……オアアアオア!!」

弾幕を受けながら突進し

「カハアツ……!?!」

輝夜を殴り飛ばした

「輝夜ア!!」

殴り飛ばされた輝夜は徐々にスピードを緩め、地面を擦り落下した

「ジャマばかりシオツテエエ!!」

攻撃するレミリアとフランに針弾幕を放ち回避している隙にレーザーを薙ぎ払う様にバーンに撃った

(限界を……!!ダメ!防げる力を溜める時間が……)

離れて見ていた霊夢は守る為に限界を張ろうとするが力の充填が間に合わない

スツ……

霊夢のかざしていた手に添う様に手が置かれる

「やれ霊夢、我が力を貸す」

「……わかったわ!!」

霊夢は限界を張るために霊力を放った

(この気は……!?!)

目前に迫ったレーザーに3人は思わず目を閉じた、だがバーンだけは唇が緩んだ

バチツ

レーザーは3人を薙ぐ事はなく結界で防がれる

「助かったわ……神奈子！」

霊夢に手を貸したのは神奈子、唯一残る腕を動かされる程に回復させ霊夢の結界の強度を上げたのだ

「イツタイ!!ドコモデジャマをスル!!死に損ナイドモガアア!!」

二人に向かい魔弾を連射する、レミリアとフランの援護虚しく逸らし、破壊しきれなかった魔弾数発が二人に向かう

「……ウ……ウウ……」

結界を張って軽減はしたが二人は今度こそ完全に動くことすら出来なくなつた
「後は私達だけか……」

仲間は倒され、残るはレミリア、フラン、妹紅の3人、ムンドウスをバーン達のもとへ行かさぬ様に死力を振り絞り立ち塞がる

「ドケエエエエエ!!」

皆既日食まで後……

「ゼエツ……ゼツ……ハアツ……!?アアアアツ!!」

3人は奮闘する、任された役目を果たす為に、それ以前に守る為に

「グガアアアアアツ!!」

与えられたダメージが響き3人を突破出来ない

(ナゼダ!!ナゼ死ナン!?ナゼこんなヤツらニイイイイ!!)

3人の粘りに帝王は焦る、何がここまでさせるのか、瀕死の体で粘り続ける3人に恐怖にも似た感情が生まれてくる

「ウツ……ウウウ……」

ズルツ

一步、ムンドウスは後退した

「おやおや……まさかあんなに強かった魔帝ともあろう者が怯えてるの？こんなちつぽけな私達に……お笑いねえ」

そこに鬼の首を取ったかの様なレミリアの邪悪な、されど誇らしげな言葉と表情が贈られる

「……モウココマデダ……ノコルワガチカラデ……」

そのレミリアの言葉がムンドウスに決意させた

「コロシテヤルゾオオオ!!」

残る魔力を集めたムンドウスは特大の魔弾をバーンに向けて放った

「ウウウグツ……グググググ……!!」

3人は魔弾を防ぐべく受け止めるが徐々に押されてしまう

「ウアアアアアアアアアッ!!」

意志は気迫を内包し一瞬、されど閃光の様に光り輝く

ズギャア!!

魔弾は3人の閃光のごとき一瞬の力の前に消滅する

「よ……………し……………」

それが最後の力だった、3人は飛び続ける事すら出来ず緩やかに落下していく

守りきれた

そう安堵しながら3人は結末を見届けるべく希望の友を見つめていた

「オワリダアアアアアアアアア!!」

希望を砕く絶望の音が響いた

魔弾が最後の攻撃ではなかった、残る魔力を使うのは嘘、魔弾は囷だった

魔弾は邪魔な3人を引き付ける為に放った、バーンに当たればよし、防がれても3人を殺せればよし……結果的にはバーンに当たらず3人も殺せなかったが3人の無力化に成功した

そして最低でも防がれる事は今までの様子を見ればわかる

だから間髪入れずにムンドウスはビームを撃ち込んだ

障害はもう無い……全てを終わらせる一撃が撃たれた

「ウグツ……クツ……!?!」

迫るビームから何とか3人を守ろうと身を動かそうとする

しかし……

(無理か!? チルノ……パチュリィ……魔理沙……!!)
体は動かない

奇跡は……二度起きなかった……

ドオオオオオオオ……

着弾したビームは大地を深く抉り、何も残されなかった

「オノレエエエエエエエエエエ!!!」

ムンドウスの憎悪の叫びが木霊した

「ハッ……ハッ……ま、間に合った……」

ビームは当たらず

バーンの背後に少女が立っていた

（お前は……鬼人……正邪……）

少女をバーンは知っていた

鬼人正邪、最後の日常でほとんど気紛れに助けた幻想郷に仇なした者

それがバーン達の最大の窮地を救った

「何故お前が……」

バーンが不思議に聞いた、命令した訳では無い、そこまでの事をした覚えも無い、来る筈の無い者が来たのだ疑問しか浮かばなかった

「バーン……!?!」

答えようとした直後正邪の表情が引き締まり上空を睨む

「ハアアアッ!!」

飛来したビームはバーン達を避けて背後に着弾する

正邪の能力、何でもひっくり返す能力、それを使いムンドウスの照準を反対にひっくり返したのだ、だが弱っていてもムンドウスの強い力は正邪の全力を持つてしても着弾点をずらす事しか出来なかった

(そう……私の力は弱い……呪いで私の力は更に落ちた……普通は大人しく震えてろつて所だよな……でも……)

次々と撃たれるビームを必死に逸らし続ける

「逃げ続けてた私を助けてくれ……た!バーンに……!何でも良いから……!!」

「恩返しがしたかったんだああああ!!」

体から血を噴き出しながら叫ばれた

バーンにとっては単なる余興だったかもしれない、でもそれは正邪にとっては大恩、死から逃げ続けていた正邪を幻想郷で生き延びらせてくれた事は生きる事に必死だった正邪にとって叶わぬ願いだったからだ

その大恩を少しでも返しなくて正邪は危険な道を進んで来た

報われるとは限らない道を……

「うう……ああ……あ……」

正邪の力が弱くなっていく、ビームは急速にバーン達に迫り、掠めるまで迫っていた
「もう……よい……！止める鬼人正邪……死ぬぞ!!」

掠れる声でバーンは呼び掛ける、バーンは正邪の力の秘密を知っていた

いくら弱っているとは言えムンドウスの攻撃を力の弱い、尚且つ呪いを受けた正邪が
逸らせる訳が無い、それを出来た訳は……

「バーンは幻想郷を敵に……回すかもしれないなかった……のに！私を助けて……くれた!!
なら私の命くらい……掛けなきゃ!!返せないだろお!!!」

正邪の顔が痩せていく

生命、正邪の力の秘密は自分の生命力を能力に注いでいた

確かに命を使えば力は飛躍的に高まる、だがそれは諸刃の剣……力は高まるが命を
削っていた

「正邪……」

その覚悟にバーンは名を呼ぶしか出来なかった

「又グアアアアアアアアアアアア!!!」

ムンドウスが尚もビームの連射を続ける、近づく等の冷静な判断が出来ず怒りのままに撃ち続ける

「あう……!!?うう……ううー……!!」

絶えないビームの連射に膝を着く

そして遂に限界が来た、正邪の衰弱で能力がムンドウスに効かなくなりビームがバーン達目掛けて直進する

「……!!」

正邪がビームを止めた、体で

ギャウツ!

ビームは上空に消える、ビームが消えた後、舞い上がった正邪がバーンの傍に落ちた
「正邪!!」

バーンが名を呼ぶと正邪はバーンに向け笑顔を作る

「……少しは……役に立てた……かな？」

一言告げるとゆつくりと目を閉じた

「馬鹿者……」

眩いた後バーンも目を閉じた

(役に立った所では無い……最後の……決め手になってくれた……!!)

太陽と月が重なる

キイイイイン

地を裂くかの様な絶叫を出したムンドウスは3つの瞳を強く発光させた
「……………!?」

バーンは何かを感じた

(……………いずれにせよ……………か……………)

意味の無い事だと考えムンドウスの最期を見届ける

「バアアアン!! 所詮は我ヲ封印シタに過ぎン!! 我ハ必ず復活スル!! その時にお前ハ生き
てはイマイ!! フハハハハハハハハ!!」

「……………やれ」

ムンドウスの最期の言葉を聞いたバーンは秘法の完了を命じる

「イッケーー!!!」

キンッ

乾いた音が響きムンドウスは全ての時を止められた

「やったな……」

バーンのもとにやって来た妹紅が眩いた

「まさか生きてるなんてね……奇跡よこれは……」

レミリアも眩く、まだ実感が湧いていない

「だな……でもまあ……なあパチュリー？」

言葉に困った魔理沙が振る

「これをやってないなんて言われたらお手上げね」

パチュリーも困った様に手を上げる

「何言ってるのよ!! あたい達の勝ちに決まってんじゃん!!」

チルノは笑顔満点に飛び回る

「でも……封印でしょ? 倒せて無いよ?」

フランの指摘に5人は困った様に顔を見合わせる、ムンドウスは封印されただけで死んだ訳では無い、いずれ復活する、だから根本的な解決にはなっていないのだ

「心配は要らん……奴の時は止まったままだ、弱った状態でな……余が回復すれば間違いない、奴を仕留める事が出来る」

「それに……」

「勝ったー!!!」

バーンの言葉を遮ってチルノとフランが大声で宣言した、懸念していた事が解消され一気に実感が湧いてきたのだ

(それに……宛も有る……)

友の喜ぶ様を見ながらバーンは名を呼んだ

「……八雲紫」

「……何かしら?」

スキマから現れた紫はバーンと少し話し込む、紫の驚愕の表情が出た後に何かを受けとると紫は無言でスキマを開き消えていった

「!?……又……ウウ……」

突然体に異変が起きた

(眠気が……する……鬼眼王の状態で魔力を使い果たした……影響……か?……いかに……寝ればもう起きれぬやもしれん……)

未知の現象に最悪の事態を考えながら落ちる臉を抑えながら見つめた

「バーン!!」

守りたかった友を……

集まった6人が話し掛けるがバーンは声すら出せず臉はゆっくりと、ゆっくりと落ちていく

(勝ったなお前達……お前達が生きてくれるだけで余は満足よ……良い気分だ……)
(こんな気持ちで眠るのも……悪くない……)

バーンの瞼は落ち

目の前は真っ黒の闇となった……

第33話 余韻

謎の事務所

「……………ね」

スキマから出てきた紫が事務所の中を見回した

お世辞にも綺麗とは言えない内装、埃が溜まり物は乱雑に置かれている、化物を剣で突き刺したオブジェが飾られていたり事務所と言うよりは物置に近かった

(まさか香霖堂に手掛かりがあったなんて……灯台もと暗しとはまさにこの事ね……)

そんな事を考えながら事務所を歩き回り机の上にある食べかけのピザを見つける
(まだ温かい……奥にいるのね)

事務所の主が居る事を察知した紫は奥に続く部屋のドアノブに手を掛け開けた

「ハイ！ストロベリーサンデーの宅配は頼んでないぜ？」

ドアを開けた瞬間に眉間に拳銃を突きつけられた

「……………宅配に見えるかしら？」

拳銃を突きつける男を睨みながら返した、拳銃にも物怖じは全くせず

「……見えないな、こんな美人が宅配員な訳が無い」

男はそう言うが銃を下ろさない

「人間でも無いけどな」

男は紫が人間では無いと見抜いていた

「……どうでも良いでしょうそんな事」

「いや、俺にとつちや重要な事さ、あんたが悪魔なら撃たなきゃならない……どんなに美人でもな！」

スチャ

男は着ている赤いコートのホルスターからもう一挺の銃を取りだし紫に突きつけた

「……」

「……」

その状態で睨み合う二人

「……フツ」

男が銃を下ろし微笑んだ

「冗談さ……あんたは変な力を持つてるが悪魔じゃあない、何か用か？トイレなら奥だ、急ぎな！」

机の椅子に座りピザを一切れ掴むと食べ始めた

「……」

紫は軽口を叩く男を凝視していた

(これが……?こんな軽薄な男がアレを……瀕死に?)

目の前の男を怪しみ始めた

「どうした?早くしないと事務所に大変が起きる!立て直さないといけない位のな!」

ハツつと紫を見ずに笑い、ピザをまた一口食べる

「……ねえ貴方……」

紫が話し掛けた瞬間だった

「やめときな……その気なら美人だって容赦しないぜ?」

話を遮り男が話しだした

「……何の……」

ダウン!

紫の持つ傘が弾き飛ばされた

「なっ!」

紫は驚愕していた、意識はしつかりと男に向けていたにも関わらず男の銃を持つ動作を察知出来ずに傘を撃ち抜かれたから

「……………どうするんだ？」

男が構えた拳銃越しに問い、引き金に力を込める

（この男は全く本気を出していない!?これぐらいはさも当然の様に私を上回った……………それによくよく感じれば内に秘めてる魔力が…………計り知れない!?王に並ぶ程の…………）

沈黙の後、紫は話し始めた

「ごめんなさい、争う気は無いの…………これは消すから許して欲しい…………」

謝った紫は男から見えない机の死角に設置した弾幕を持ち上げて消した

「試す真似をしてごめんなさい…………お陰で確証が持てたわ…………」

頭を下げた後、弾かれた傘を拾いながら紫は確信した

この男が長年探し続けていた者なのだ…………

「どうやら訳ありみたいだな」

拳銃を納めた男が紫に呟いた、どうやら事情を聞いてくれるらしい

「貴方に化物の始末を頼みたいの、私達の世界で弱った状態で封印された…………化物を

…………」

「……そいつはあんたと似たような種族か？」

「いえ……私は妖怪、でもアレは妖怪では無い……人間とは異なるって意味では同じでしょうけど」

「……帰んな」

紫の事情を聞いた男はそっぽを向いてまたピザを食べ始めた

「妖怪だかなんだか知らないがそれは俺の専門外だ、ただでさえこっちは自称神様を倒したばかりで疲れてるってのに……他を当たんな、俺の仕事は週休6日なんだ休日出勤はゴメンだし何より興味が無いんでね」

ピザを食べ終わった男は横にあるトマトジュースの瓶を掴み飲もうとしたが空だった

「……チツ」

立ち上がり様に瓶を瓶ケースに投げる、空中で回転しながら瓶は見事にケースに納まる

そして男は奥にある冷蔵庫から新たなトマトジュースを取りに行くため紫に背を向けた

「ムンドウス」

ピタッ

男の足が止まった

「……………ムンドウス……………だど？」

男は振り向き紫を見た、紫の目は真っ直ぐな目をしておりそれが罨や利用の類いでは無いと男に悟らせた

「そうムンドウス……………封印された者の名よ、悪魔の……………帝王……………」

「奴は俺が魔界に送り返した筈だ……………何故あんたの世界に？」

「おそらく送り返す際の力が次元に干渉して壁を破り私達の世界に来たのね、時を越えて数百年前の幻想郷に……………」

「……………迷惑掛けちゃったようだな」

「そうね……………貴方のせいではないけど幻想郷は滅びの危機だったわ」

「……チツ」

男はまた舌打ちをした、だが今度の舌打ちは怒りと憎しみが籠っている

「貴方もアレに……?」

「ああ……母と兄貴を殺されてる」

「そう……それで引き受けて貰えるなら報酬は……」

「引き受けてやるよ、報酬は無しで良い」

紫の提示の前に男は答えた

「奴は仇なんですね、それにあんた達にも迷惑を掛けた……サービスしといてやるよ」

怒りと憎しみを抑えて先程までの調子に戻って男は紫に微笑む

「ありがたいわ……早速行きましょう、でもその前に……」

スキマが開くと中から剣が現れる

「アラストル!」

男が剣を見て叫んだ

「やはり貴方のだったのね、私達の世界に来てたのよこの剣は、ずっと貴方を探してたみたい、刃にこびりついたムンドウスの魔力でこの剣がムンドウスを弱らせた者の持っていた剣だと知ってようやく貴方に会えたの」

紫が男のもとに来たのはアラストルのお陰だった、主人を探すアラストルを手掛か

りに紫は探し当てたのだ、長年探し求めていた者を

(それに気付いたのはバーンだけだね……私がもう少し早くバーンの前に現れていたらあそこまでの事態にはならなかったかもしれない……)

アラストルが男の持ち物だと気付いたのはバーンだった、以前アラストルと呼ばれたバーンは刃に付いたムンドウスの魔力を知りアラストルが探す主こそムンドウスを打倒し弱らせた者なのだと思った

その事をムンドウスを封印した後に紫はバーンに知らされて紫は遂に念願の探し人を見つけたのだ

「諦めてたんだがね……こいつは親父の形見とは違う最初の魔具で愛着があったんだ、心臓を貫かれた仲でね」

アラストルを華麗に振り回し背に携えた

「案内してくれ、奴の居るその幻想郷って所にさ、台詞を決め直さなきゃならない」

「台詞？」

「俺の決め台詞さ……さっへ行こうぜ」

「わかったわ」

紫はスキマを開くと男と共に入っていった

封印の地

「ハイハイよ……」

スキマから出てきた紫が男に話す

「ここが幻想郷だつて？魔界の間違いだろ？」

次いで出てきた男が周囲の光景を見て聞いた

「幻想郷で合つてるわ、ここは幻想郷の魔界よ」

「へえ……異世界にも魔界があるのか」

興味深気に幻想郷の魔界を見回した男は戦闘の跡に気付き視線を巡らしていく

「……居たな、間違いない……ムンドウスだ」

時が止まり、大地に落ちオブジェの様に佇むムンドウスを見つけた

「ハッ……相変わらず醜い野郎だ」

ドウン！

男は瞬時に拳銃を構えムンドウスを撃った

キンッ

乾いた音を出し銃弾は弾かれた

「……ヘーイ、これじゃあいくら俺でも始末は無理だぜ？見たところ時を止められてんだ

ろこいっただけ……どうするんだよ？飾っとくか？魔除けにはなるだろ！なんせ魔帝だからな！ハハッ！」

拳銃を持つ手を上げてお手上げのポーズをしながら男は笑いながら紫に軽口を叩く
「安心して、ちゃんと手はあるわ」

そう言うとき紫はスキマから掌程の球体を取り出した

「これは時を止める秘法を解除する魔力の鍵、ムンドウスを追い詰めた者から託された物よ」

「ムンドウスを追い詰めた？あんた達がやったんじゃないのか？」

「馬鹿言わないで……私達が束になってもムンドウスに敵うわけ無い、最後こそ協力したものの追い詰めた大半はバーンの功績よ」

「バーン？何者だそいつ？こいつを1人でここまで追い詰めれるのは俺や親父位だと思ってるんだが」

男はムンドウスを追い詰めたバーンと言う者に興味を持った、魔帝と畏れられ自分でも追い返すに留まったムンドウスと少なくとも互角に渡り合った者が気になった

「バーン……大魔王バーン、魔族の王よ」

「魔族……？」

男の顔が緩んだ

「ハハハッ！なんだ！共食いしてたのか！王様同士で！王冠の取り合いか？お似合いだぜ……ハハッ！」

男は笑った、どうも魔族同士の争いが面白かったらしい

「笑うな!!」

紫の怒声が男に浴びせられた

「……」

笑いを止めた男は顔を真剣に戻し紫を見つめる

「彼を……バーンをムンドウスと同じにしないで！バーンはそんな物に興味は無い！ただ友の為に……ムンドウスと戦ったのよ！彼の侮辱は許さないわ!!」

感情を露に男を睨む

形はどうあれ愛する幻想郷を救ってくれたバーンに紫は深い感謝と恩、それに尊敬に

近い思いを持っていた、だから冗談とわかっているのにバーンを貶す軽口が我慢ならなかった

「……悪かった、軽口が過ぎたな……バーンつてのをバカにするつもりはなかった……許してくれ」

男は素直に謝った、自分の心にも無い軽口が冷静そうに見える紫を激昂させたのだ、彼女達にとって大事な存在なのだと認識し非礼を詫びた

「……ごめんなさい、私の方こそ頼む立場なのに……」

紫も頼む立場故に怒ったのが恥ずべき行為だったと反省し謝る

「いや、今のは俺が悪い……やってくれ」

再度非礼を詫びた男は秘法の解除を促した

「わかったわ……お願い」

頷いた紫は球体をムンドウスに向けかざし、バーンから託された呪文を唱えた

シウウウウウ……

球体が凍れるムンドウスに取り込まれると氷を溶かす様な音と共に秘法の解除は進む

キイイイイ……キンツ!!

「……ハハハハ!!」

時が動き出したムンドウスは止められた際の高笑いを続けていた

「御機嫌だなムンドウス！息子によく言つといたのにまた俺と出くわすなんて運の悪い奴だ！」

「ダン……!?!ナゼココニイイ?!!」

掛けられた声に気付いたムンドウスが驚愕し叫んだ

スツ……

男は二挺の拳銃を構える

「!?」

構えられた拳銃を見たムンドウスとハツと気付いた紫

「……決め台詞は？」

「Jackpot!!」

「オオツ!?オオオオオオオオオツ!?」

撃たれた銃弾がムンドウスに炸裂すると込められた魔力が解放され肉体を崩壊させていく

「オノレエ……スパードノ血族メエエエ！オノレエ……!!」

「バアアアアアアアアアアアン!!!」

怨念の籠る絶叫、この結果を作ったのはバーン、バーンさえ居なければ弱った状態で怨敵に出くわす事は無かった、怨敵は勿論憎いが今はそれ以上にバーンがこの上なく憎かった

「オアガアアアアアアアアアア……」

「無念の内に散っていった民の魂の安らぎの為に……往ね！ムンドウス!!」

バシユ……

肉片の欠片さえ残さず

ムンドウスは消えた、命ごと……

完全に……

「フウ……依頼はこなしませ？これで良いかい妖怪さん？」

男が硝煙の出る拳銃を肩に乗せながら紫に聞いた

「……ッ！」

「……どうした？」

男が紫の様子に内心驚きながら問い掛けた

「ようやく……ようやく幻想郷に……平穩が……」

紫は涙を流していた

数百年

紫は悩まされ続けていたのだ、幻想郷の黎明期に現れたムンドウスを封印してから
ずっと……

宛の無い探し人を諦めずにずっと……ずっと……

幻想郷を愛するが故に苦惱し続けていたのだ、幻想郷で起きる異変に関与している時も頭から離れる事は無かった不安が……

それが今、ようやく報われたのだ、安堵と歓喜が混ざり合い涙が溢れ、止まらなかった

「ヘイ……そのバーンって奴はどんな奴だ？」

湿っぽい雰囲気苦手な男が聞いた、彼にとつてもムンドウスを追い詰めた者は興味があつたから

「……威厳があつて、誇り高く、何より強い……人よ」

人、紫は敢えてそう言った

「そして……友達想いな人ね」

涙を拭きながらバーンを語る

「……俺なら勝てると思うかい？」

「どうでしょうね……普通にやれば貴方が勝つかもしれないわね……けれど今の彼の本気は友人を守る時、その状態なら勝てないと思うわ、ムンドウスすら気迫で押していたもの」

「守る強さ……悪魔にはない心の力か……一度会ってみたいね、そのバーンって人間に
さっ」

「……人間とはかけ離れてるけどね」

「人間さ……心が……魂がな、あんたも同じさ」

「私も？」

「ああ……悪魔は泣かないもんだ、泣く事の出来るあんたは人間なのさ、魂がな」

「……彼は泣かないと思うわ」

「そうかもしれない、でも友人の為に体を張る心は間違いなく人間のそれさ」

「そうね……もう彼は大魔王では無いもの……今はただのバーンとして……」

紫は目を閉じてバーンを想う

「さて……俺は帰らせてもらう、そろそろ神様を倒した報酬が来る時間なんでね」

「わかったわ」

男の住む事務所へ繋がるスキマを開く

「ありがとう」

スキマへ入ろうとした男に礼を告げる

「俺は後始末しただけさ、大した事はしてない、礼を言うならバーンって奴にしな」

スキマへ足を踏み出す

「貴方の名前……教えて貰えるかしら？」

「トニー・レッドグレイブ」

足を止めた男が答えた

「……そう、さよならトニー」

紫の別れの挨拶に背を向けたまま指で返事をした男はスキマへ消えていった

「もう会わないからって偽名を名乗るなんて……失礼な男ね」

スキマを閉じた紫は男の名乗った名前が偽名であると知っていた

（ムンドウスが彼を見て言ったのはダン……一文字も合っていないじゃないまったく……）

（ダン……何かしら……神曲の作者の名が確か……）

（ダンテ……）

答えのない予想をする紫は溜め息をつく

（まあ良いわ、不安の種は消えた……後は……）

紫の表情が悲しみに染まっていく

（バーン……ね）

スキマを開き中へ消えた

「……………は？」

気付くと周囲は真つ暗な闇に覆われていた

「……………」

周囲を見回し一呼吸置く

(そうか……………)

「余は死んだか……………」

バーンは自らの死を悟った

(……………ここは魂の牢獄、ヴェルザーの様に復活出来ぬ魔族の魂を転生させないように閉

じ込める神の作りし魔族の墓場……)

(良かったのだこれだな……余が生きればあやつらを殺す事になる、どのみち去るつもりだったのだ……それに仮に歩めたとしても……)

闇を見つめながら1人物思いに耽る

(……静かだ)

ここには何も無い、図書館も魔導書も……

ここには誰も居ない、住んでいた館の主も友も……

あるのは闇と静寂しかなかった

(後はこの魂が朽ちるのを待つだけ……)

そう考えたバーンは考えるのを止めようと目を閉じる

「!?」

バーンの体が光を放ち始めた

(これは魔力……これだけの量を……それにこの魔力を余は知っている……これは

……)

(パチュリー……魔理沙……)

感じた魔力は二人の友の物

(まだ……行くなど……そう言うのか……)

バーンの体が引つ張られる様に浮かび上がり始める

(まだ……生きろと……)

「……余の眠りを妨げるのは貴様等か……フッ……」

目覚めると見知る赤い天井、すぐに察した紅魔館の自室だと

「まだ行くには早いぜ？バーン……」

冗談を言える友が居る事を

「余を目覚めさせる為に魔力を送っていたのは知っている、だがあれだけの量の魔力をどうやった？」

「幻想郷の皆に協力して貰ったのよ、唯一貴方が受け付けたのは私と魔理沙の魔力、だから皆の魔力や妖力を私達の魔力に変換して貴方に送ったの」

「そうか……」

目覚めれたのは絆の成し得た信頼、そして……

「神奈子も協力してくれたのよ？魔力を貴方に届ける為の隙間を開けてくれたの、諏訪子と早苗と協力して守矢神社で……嫌な顔一つせずね」

レミリアが神奈子の協力を知らせる

「バーン!!」「バーンさん!!」

目を向けた瞬間抱きつかれた、チルノとフランと大妖精に

「……この体はお前達が？」

3人を撫でながら聞いた、体が人の姿に戻っていたから

「それは永琳さ、1週間もつきつきりであの状態から治してくれたんだ」

体の事は妹紅が答えた

「なるほどな……」

(気を利かせてくれたか……)

体の調子を感じながら永琳の気遣いを感じ取った

「さて！悪魔の残党の処理も死者の鎮魂も済んでる、バーンも起きた事だし始めるとしましよう！」

意気揚々にレミリアが始まりを宣言した

「何をだ？」

不意の開始宣言にバーンは何をするかを聞いた

「そうか、バーンは異変解決は初めてだったな」

「幻想郷で異変が解決された時にする事は決まってるんだぜ！」

妹紅と魔理沙が答える

「宴会だよ!!」

フランが元気良く跳び跳ねた

「異変の前に貴方の記念パーティーも計画してたから祝勝会も兼ねて行うのよ、場所は
ここ紅魔館、皆集まってるわ……主役の登場といきましょう！」

そう言うレミリアはバーンに向かう様に促す

「バーンさん早く早く！」

「そう急くな……主役は優雅に場に出るものだ」

3人に引つ張られながら歩き出したバーンの表情は明るく微笑んでいた

今また8人は揃い、歩み始めた

幻想の郷を……

第34話 終わりの始まり

「カンパーイ!!!」

宴は始まった

「飲め飲めー!!」

「今夜はとことん飲むわよー!!」

「アハハハハハ!!」

あちこちで喜びの声があがる

戦いは終わった

だが多くの犠牲が出た、妖怪は3分の1にまで減少し人間も大きな犠牲は出なかったが悪魔の凶刃に倒れた者は少なくない

大地は削れ、住み家は戦いの余波で傷付いた

悔やんでも悔やみきれない犠牲の上に立った生きる者達は笑う

その犠牲があったから生きるのだと、死んでいった者達がこれ以上悲しくならない様に笑うのだ

そうしないと前へ向けて進めないから、死者が浮かばれないから……だからこそ生きる者は楽しむ、死んでいった者達の分まで……

「勇儀！悪魔退治の結果は引き分け……こいつで決着をつけようか!!」

萃香が巨大な杯を勇儀の前に叩きつける

「ほほう……あたしに飲み勝負を挑むとは正気かい？勝てない勝負はするもんじゃないよ萃香？」

「あまり強い言葉を使いなさんな……弱く見えるよ勇儀？」

火花を散らし二人の鬼は睨み合う

「そろそろどっちが上か決めとかないとねえ……まつ！結果は見えてるけどね」

「上等……！勝負だ勇儀!!」

二人が杯に酒を注ぐ

「面白そうな事をしている……私も参加しよう」

「負けるんじゃないよ神奈子！」

そこに杯を並べ神奈子が参戦する、諏訪子は応援

「これはこれは……酒豪と名高い神様の参戦とはね……さしずめこれは……」

「幻想郷酒豪決定戦って訳かい……」

「お前達に格の違いを教えてやろう……」

周囲が見守る中、開始された酒豪対決、果たして勝つのは誰か！

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「なにい!?残り一枚のキングを引き当てるだとお!?そんな薄い確率で何故引く!?フラッシュは出来てただろ！」

違う場所では輝夜と水蜜や一輪達がカードゲームを興じている

「あんたはフルハウスでしょ?そっちは4カード……フラッシュじゃ勝てない、なら勝つにはどうするか?それはもう狂気に頼るしかない……クク……狂気の沙汰ほど面白い……!!」

ざわ……ざわ……

空気が変わる

「チツ!ほら一円だ!絶対取り返すからな！」

投げる様に一円札を投げつける、どうやら賭けてるらしい

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「ふざけんなあ!!イカサマだ!!」

輝夜の連続ロイヤルストレートフラッシュに水蜜が怒った

「イカサマだなんて……証拠は？無いでしょ？言い掛かりは見苦しいわよ、それにもし飯にイカサマをしているとしてもあんたは見抜けなかった……される方がマヌケなのよ」

ニヤリと輝夜は笑う

「~~~~ツ!!」

イカサマだとは思いますが輝夜の言う通り証拠が無い、水蜜は怒りを抑えるしかなかった

「ロイヤルストレートフラッシュ」

ぐにゃあっ……

水蜜の顔が歪む

（ククク……気付かないわね、いや、気付ける訳が無い！私のイカサマはね……今夜は稼ぐわよお!!）

輝夜はイカサマをしていた

カードを配られる、ここまでは何も無い

チェンジ、ここも何も無い

コール、ここで動く

(はい！能力発動！)

一瞬を集めた輝夜は皆が認識出来ない内に手札を山札に戻し役を自由に作っていた、わざわざ作れる最高の役を、これが彼女のイカサマ、誰にもバレない必勝法

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「バカなああああああ!!？」

水蜜は全財産を失った

「さて次は誰が相手？」

「私がお相手しましょう」

ドドドドドドドド

現れたのは咲夜、威圧的な効果音と共に登場する

「…………!!」

輝夜に電流走る

(不味い…………)

「少々派手にやり過ぎた様ですね、ここからは私が相手です！幾多の敗北を覚悟してく

ださいー」

(時を止める能力…………これは私の能力とかなり近い！ならやる事は同じ…………決着がつかない…………ヒラに持ち込まれた!?)

イカサマが使えないなら純粹な運と心理戦、勝つ確率は100から一気に落ちた

「強敵ね、でもこれはお金の勝負ではない……プライドの戦い……賭けましよう魂を……！」

「good！」

二人の勝負師は笑う

「ヒラ勝負なら参加させてもらおうか！」

にとり参戦！

「ほお……伝説のギャンブラー降臨ね、数多の妖怪の財布をかつぱいだその実力見せてもらいましよう！河童だけに！」

「……財布は出しときな、もう使う事はない」

輝夜の挑発に睨み付けるにとり、そして3人は威圧し合う

「勝ち続ける……灰になるまで……」

「貴方達……背中が煤けてるわよ……？」

「勝ち続ける？煤けてる？あんた達……嘘つき……だね！」

誰が望んだ訳ではないが勝負師の戦いが始まる

「妖夢〜！フランから聞いたんだけど貴方フランを助ける時に格好いい台詞言ったんでしょ？やってみて」

幽々子が一緒に食事をしている妖夢に頼んだ

「ええ!?ここですか!?恥ずかしいですよ!」

「良いでしょ?やつてよ妖夢〜!」

「わ、わかりました……お、オホン!」

促されるまま妖夢は咳払いして叫んだ

「待ていッ!!」

「おおっ?なんだなんだ?」

人が集まってくる

「どんな夜にも必ず終わりは来る、闇が解け、朝が世界に満ちるもの……人、それを……」

『黎明（れいめい）』という!」

「カツコイー!!」「サマになつてるなあ」

妖夢の凛々しい姿を褒め称える

「悪の暴力に屈せず、恐怖と戦う正義の気力!人、それを……『勇気』という!」

「オオオー!!」「イイゾイイゾー!!」

人が更に増えてくる

「地上に悪が満つる時、愛する心あるならば、熱き魂悪を絶つ……人、それを……『真実』
という!」

「キヤー! 妖夢ー!」「アハハ! 国語辞典かよ!」「正義の国語辞典! アハハハ!!」

笑いが起こる

「うう……恥ずかしい……」

顔を赤くしながら俯く妖夢、そこに忍び寄る陰が一つ

「格好良かったよ半霊さん! これは奢りさ! 飲みなよ!」

「あ、ありがとうございます……」

ウサ耳の幼女から受け取った飲み物を一気に飲み干す

(よーし……次は……)

妖夢が飲み干したのを見ると幼女は次の一手に掛かる

「変な味ですね……」

飲んだ液体が妙な味をしていたのを感じグラスを睨む

「何ですかこれは……アレ? いない……」

飲み物を渡した幼女は消えていた

「うっ!?……頭が……ボーツとして……」

妖夢に異変が起きる

「……へえ……面白そうね、早速試してみましようか」

幼女の次なる一手は幽香、少し雑談を行った後、幽香はご馳走を食い漁る幽々子のもとへ向かった

「ねえ幽々子、野球拳って知ってる？」

「ふぁい? ひらないふぁ?」

「簡単よ、ジャンケンで負けた方が罰ゲームを受けるの」

「んく……ゴクン、面白そうねえ! やりましょう!」

始まった野球拳

(思い通り!!)

陰から見守るウサ耳の幼女は素晴らしい悪党面で笑った

「あらく私の負けねえ……」

幽々子、敗北

(最初は絶対パーを出す……何回か試したらしいけど本当だったわね)

「それで罰ゲームってなあに?」

何も知らない幽々子、軽いものだと思っている

「服を脱ぎなさい」

「ふえっ!？」

幽香の楽しげな表情が向けられ幽々子は驚く

「い、嫌よ服を脱ぐなんて……きやあ!」

「敗者は脱ぐ決まり……諦めなさい!」

嫌がる幽々子の服を引っ張る

「あゝれ〜!」

今まさに幽々子の……

「チエストー!!」

凄まじい速さで二人に割って入る者がいた、幽香の服の袖を切り裂き二人を引き離す

「我が楼観剣に……断てぬ物あんまり無し!」

「……誰かしら?」

邪魔者に問うた、わかっているが一応

「我が名は妖夢！魂魄妖夢！幽々子様を守る剣なり!!」

刀を構えた妖夢が立ち塞がった、何故か顔が蕩けている

「……酔ってるわねこの子……幽々子はゲームに負けたの、貴方は引っ込んでなさい」

「黙れ！そして聞け！幽々子様を辱しめる輩は許さない！」

幽香の言葉を一蹴した妖夢は剣をより鋭く構える

「この切っ先に、一擲を成して乾坤を賭せん!!」

力を込める、妖夢は切る気だ

「誰だ妖夢に酒飲ましたのはー!!」

「妖夢殿ご乱心!!」

周囲は騒然として睨み合う二人から離れる

「良いわ……相手してあげる、でも周りが危ないからそれはしまいなさい妖夢」

幽香が剣を納めるように促す、流石に幽香もこのままでは惨事が起きかねないと考え

素手での戦いを促した

「……」

酔った妖夢は睨みながらまだ離そうとしない

「来なさいよ妖夢……刀なんて捨てて掛かって来なさい」

手招きしながら挑発する

「来なさい妖夢……怖いのか？」

幽香の問いに震えながら妖夢は剣を納刀する

「け、剣なんて必要ない……貴方なんか怖くない……怖くない！」

急に動いた為に酔いが更に回った妖夢はフラフラになりながら叫んだ

「ヤローブツコロシテヤルウー!!」

仕組まれた喧嘩が始まった

「アーツハツハツハ！」

陰で酒を飲みながら笑うのは仕掛人の幼女、上手くいったのでご機嫌だ

「コラー！何やってんのよてゐ！」

仕掛人に怒ったのは鈴仙

「なんだ鈴仙か、良いじゃん！宴なんだし少々の悪戯じゃ誰も怒りやしないさ」

「もお……姫様も博打なんかしてるし師匠はどこかに消えたし……もう知らない！」

鈴仙はやけ食いを始めた、そこに背の小さい女性が並ぶ

「大変ね貴方も……」

「本当！大変ですよ！博打でお金稼ぐなんて……信じられませんよ！一回痛い目にあえば良いんです！」

「……その願い叶えてあげましょう」

「えっ？」

鈴仙が気付いて顔を向けて見たのは輝夜と咲夜に向かう一人の女性の姿

「あれは確か地霊殿の……心を読む妖怪……」

狂気渦巻く賭場に最強の刺客が差し向けられた、河童と二人の夜に凶星が降り注ぐ

「あーあ……暴れちゃって……お酒はもう少し静かに飲む物よ、ねえアリス？」

椅子に座り喧騒を眺めながら霊夢は隣のアリスに語りかけた

「そうね……でも暴れる事が出来るって素晴らしいとさえ今なら思わない？死んでいたら暴れるどころかお酒すら飲めないのよ？」

「そうね……確かにそうよね……これが生きてる実感……か……」

手に持つお猪口を眺めながら呟く、下手をすれば死んでいた事実が生の実感をより強くさせる、今回の異変はまさに死と隣り合わせだったから

「混ぜてくればっ？」

「嫌よ、面倒臭い」

かと言つて混ざるつもりは無い

「あぁー！これはこれは霊夢さんじゃないですかぁー！」

そこに酔つた早苗が現れる

「信仰はどうですかー！相変わらずお賽銭箱は空ですかー？」

悪気は無い、悪気は全く無いのだ……だが……

「んだとコラぁ!!」

少し酔つていた霊夢の逆鱗に触れて霊夢は鬼と成る

「霊夢さんが怒つたー！逃げろー！」

「サナエエー!!」

逃げた早苗を霊夢が追いかける

「フフ……」

その光景をアリスは微笑んで見守る

「うーん……」

悩みながら美鈴は歩き回っていた

「誰とご一緒しましたようか……お嬢様達はバーンさんから離れなくてなんか入り辛いし
咲夜さんはさつきなんか青ざめてたし……文さんはなんかカメラが無くなったー！」と

か言つて探し回つてるし……一人は寂しいなあ……」

一人寂しく徘徊を続ける美鈴に声が掛かる

「なら一緒にどうだい？」

「ご一緒にしましょう」

「霖之助さん！白蓮さん！」

ペアつと美鈴の表情が明るくなる

「僕も白蓮も魔理沙にフラれた口でね、君が良ければ一緒に食べないかい？」

「是非！喜んで！」

「私も妹紅にフラれたからご一緒にさせてくれ」

慧音もまじえ4人は楽しく会話しながら食事を楽しむ

「一緒に食べようなのだー！」

「カメラ見つかりませんでしたあ……バーンさんを撮ろうと思つて近づいたら無くなつてましたあ……あややあ……」

ルーミアと文も交え仲良く宴を楽しむ

「あの……さ……私も入れてもらつても良いかな？」

そこに恥ずかしそうに正邪がやってくる、特例で参加を許可された彼女は輪に入れずにいたのだ

「正邪さん……どうぞ！一緒に食べましょう！」

「ありがとう！」

至る場所で会話に、喧嘩に、遊びに花を咲かす

そして今回の宴の主役達はと言うと

「お前達……少し離れろ、これでは満足に食事も出来ん」

バーンは少し困っていた

「良いじゃん別に！」

「そうだよ！良いでしょ今日ぐらい！」

「わーい！バーンさん♪」

3人に引つ付かれていた、頭にチルノ、腕にフラン、膝には大妖精が正座している

「大魔王と恐れられたバーンも3人の友人の前じゃ形無しねえ……」

その奇妙な光景を見ながら話すレミリア、だがしつかり隣をキープ

「本当はお前もしたくないんじゃないのかレミリア？」

「なっ!?馬鹿言わないで！そんなはしたない真似が出来る訳ないでしょ！」

魔理沙の指摘に慌てて反論

「無理するなよレミリア……今日くらいれみりやになっても誰も気にしないさ」

妹紅、援護

「誰がなるか！」

怒るレミリア

「良いのよレミィ？」

パチュリー、更なる援護

「しない!!」

拒否！

「来んのかレミリア？」

意外！それはバーンから！

「し、しないわよ！からかわないで！」

「顔が赤いぜレミリア？あれれ？もしかしてやりたいのかあ？」

「……なら一緒にしましょうか魔理沙、妹紅、パチエ」

「「ファツ!」」

レミリア反撃

「よかろう……余に触れる事を許してやる」

バーン微笑む

「あー……いや、流石に恥ずかしいぜ……」

「だよな……」

「私もそれはちよつと……」

それは厳しいと3人は顔をしかめるがあまり嫌そうではない

「……小悪魔!」

「ハイ!レミリア様!」

呼び掛けに応えた小悪魔がパチュリーを持ち上げバーンへ渡す

「こあ!なんでレミイの言うこと聞くのよ!?!」

「面白そうだったので♪嫌ですか?」

「嫌かパチュリー?」

「嫌とかそんなんじゃないけど……もうっ!……むきゅー……」

観念したパチュリーは顔を赤らめて伏せるが指はしっかりとバーンの服を握っていた

「イイナ……じゃなくてお似合いだぜパチュリー!」

「あー私ももう少し若かったらな」

「そうねえ……」

そうは言うが3人は羨ましそうに見ていた

「……フツ」

バーンは微笑むと魔力を放つ

「わっ!?バーン!?!」

持ち上げた3人を自らに手繰り寄せる

「ど、どうしたんだよ?らしくないぜバーン?」

「気にするな魔理沙、今はこうして居たいのだ……」

確かに以前のバーンなら考えられない事

バーンがそれをしたのは友愛

守りきれた友が堪らなくいとおしかったから

だからそれをするのに恥は無かった

「額の眼……無くなったままね」

レミリアが指摘した、額の第3の目、鬼眼が無い事を

「……心配は要らん、何も問題は無い」

バーンはそう答えた

「明日からもよろしく頼むよバーン！絶対越えてやるからな！」

「……そうだな、明日からも鍛えてやろう」

妹紅の笑顔に無表情で返す

「これからもずっと一緒よバーン！」

「そーだよ！バーンはあたし達とずっと一緒に暮らすんだよ！」

「バーンさん♪バーンさん♪」

3人の幼い無垢な笑顔が向けられる

「そうだな……ずっと……一緒に……」

バーンが緩やかに話だした時だった、顔を真っ赤にした魔理沙が叫んだ

「あー！こうなったらヤケだ！おーいみんなー！！」

宴会場に魔理沙の声が響き皆が振り向く

「みんな来いよ！バーンを押し潰してやれ！！」

照れ隠しに皆を巻き込んだ

「おおっ！面白そうだね！行くよ勇儀！神奈子！勝負は後だ！」

「よっしやー！！」

「やれやれ……私もするのか？」

「行こうか神奈子！二人で潰してやろう！」

鬼と神

「……今日だけは付き合っただけ、行くわよ幽々子、妖夢」

「はあ〜い！」

「イテテ……私は何を……」

妖怪と幽霊と半霊

「明日からどうしよう……」

「お嬢様に前借りしなければ……」

「貯金も無くなった……」

「またいつでも御相手しましょう」

月人とメイドと河童と妖怪

「師匠いませんね……」

「そんな事より行くよ鈴仙！」

月と地上の鬼

「来なさい早苗！バーンの角に刺してあげるわ！」

「霊夢さ〜ん！勘弁してください〜い！」

「フフフ……」

巫女と魔法使い

「これは滅多に無い機会だね、行かないや損だよこれは」

「行きましようか」

「こんなにたくさん……バーンさんでも耐えられるかなあ？」

「頭突きを食らわせても良いのか？」

「それは止めといた方がいいですよ？焼かれます」

「バーン！今行くのだー！」

「早く行こう！みんな待ってる」

人間と魔法使いと妖怪

出会った仲間達

「覚悟しなバーン！」

魔理沙

「こんなに月も紅いから……本気で潰すわよ？」

レミリア

「紅くないよお姉様？」

フラン

「これならバーンにも勝てる！あたい達ったら最強ね！」

チルノ

「バーンさんを倒しちゃえー！」

大妖精

「バカね……そんなので勝てる訳ないじゃない……やるけど」

パチュリー

「アハハ！やろうやろう！」

妹紅

初めて出来た7人の友

「よかろう、掛かってこい！お前達に潰される程余は柔くはないぞ！」

他にも集まった者達を相手にバーンは微笑む

「イケーーーー!!」

号令と共にバーンに飛び掛かる

「フン……」

鼻を鳴らしたバーンは飛び掛かる者達に魔力を放つ

「なっ!?!全員止めたあ!?!」

飛び掛かった者達は空中で固定される

「……」

魔力を操り固定した者達を自分の回りに降ろす

「まだやるか?」

バーンは聞いた、笑顔で

「勝てるか!!クツソー!ダメかあ!」

魔理沙が返すと皆は笑った、バーンを囲んで

カシャ

「あやや!?今シャッター音が……」

「えーい!みんなもう一度だ!文!ポケットとすんな!行くぜー!!」
文の眩きは喧騒に消える

「アハハ!アハハハハ!!」

勝利の宴はまだ終わらない

紅魔館・バルコニー

「……」

宴は終わり、皆寝てしまった紅魔館のバルコニーの椅子でバーンは1人月を眺めていた

「……始末は済んだのか？」

不意にバーンは聞いた

「お陰様でね、今来たのは博麗大結界の強化維持に行ってたの、宴には参加出来なかったけど仕方ないわね」

闇に紛れていつの間にか居た紫が姿を現した

「お前も気付いていたか……」

「……少しでも貴方の懸念を消してきたかったの」

「そこまですれば問題あるまい……礼を言う八雲紫」

「御礼なんて言わないで……私は貴方に返しきれない恩を感じている……こんな事で御礼なんて……」

「よい、これでもう余に恩を感じる必要は無い……それでもお前が恩を感じると言うなら力を上げろ、幻想郷に危機が起きても自力で解決出来るだけの力をな、余ではもう不可能故に……な」

「……約束しましょう」

紫の約束を受けたバーンは視線を闇に隠れる柱へ向ける

「……そろそろ出てきたらどうだ？」

「……気付いてたのね」

柱から出てきたのは永淋

「宴には来ていたのだろうか？何故姿を消していた？」

「……貴方の楽しそうなところを見るのが辛かったのよ……」

「気にせずともよいものを……まあ今の余ならわからなくてもないがな」

「……」

「この体はお前がやってくれたと聞いた、上手く型どれたな」

「……皮肉はやめて、あの状態から戻せなかった私が出来たのはあの状態から人の形に切って動ける様にしただけ……」

「そして一時的にだが鬼眼を体内に移し力を体内で留める様にして外に影響が出ない様にしてある……流石天才と言われるだけある、気遣いに感謝しよう」

「私ではその強過ぎる呪いは解呪出来ない……本来6日で死ぬ呪いを出来る限り引き延ばすしか……」

腕を強く握り、唇を噛み締めながら永淋は告げるしかなかった、死の宣告を……

「……私も探し回ったんだけどその呪いを解呪出来る者は居なかったの……ごめんなさい」

紫も無力に俯くしか出来ない、バーンを前に二人は沈黙した

「人は何かを成す為に生を受け、成し終えた時、死んでいく」

二人の沈黙を破りバーンが話しだす

「余は成す為に生き長らえていたのだ……友を作り、守る為に……それが成せたから死ぬのだ……余を人とするなら……な」

「そんな……」

紫が反論しようとしたが手をかざされ止められる

「八雲紫……今では感謝している、お前が余を見つけたから余はこうして今を迎えられている」

「……ッ!?!」

紫にとつては辛い言葉、利用して最悪始末するつもりだった彼女はバーンに感じる恩も相まりその言葉がとても辛く感じた

「私は……!!」

叫ぼうとした紫はまたバーンに止められる

「わかっておる……何も言うな八雲紫」

「……」

涙を堪えながら紫は頷く

「バーン……貴方の残された時間は……」

悲痛な表情の永淋が教えようとするが止まってしまふ

「……自分の体だ、言われずともわかる」

「後……4日だ」

(歩み続ける事は叶わん……許せ……友よ……)

今また8人は揃い、歩み始めた

幻想の郷を……

共に歩める僅かの道を……

バーンの命、後4日

第35話 回帰

「4日……それが余に残された最後の時間……」

眩く、確認する様に

「……結界も10日は持つようにはしてある、力の制御も同じくらい持つでしょう……幻想郷の事は心配要らない……どうするの？残る時間を……」

紫は聞いた、残りの時間を如何にして過ごすのかを

「お前はどうぞすればよいと思う？八雲紫？」

バーンは問い返す

「そんな事私が決めれる訳ないじゃない……」

その通り、紫の言う通りバーンの時間の過ごし方を決めるのは紫ではない、それを決めるのはバーン本人しか決めれないから

「余も……迷っているのだ」

苦々しく心情を語る

「このまま残る余生を幻想郷で過ごしあやつらに遺恨だけを残し死ぬか、今の内に幻想郷を去りあやつらが何も知らぬ内に死ぬかを……な……」

「……」

二人は何も答えなかつた

どちらが良いか？と言われれば後者だろう、何故なら何も知らない内に去れば混乱と怒りが残るだけ、時が過ぎれば風化するかもしれない

しかし前者なら目の前で親しき友の死を目の当たりにしなければならぬ、それは心に深く刺さる楔……時が過ぎようとも風化しない呪いとも言えるトラウマを植え付ける事になる

バーンがそれを迷うのは……

(一緒に……居たいのね友と……最期の時まで……)

友と居たいから、紫はそうであると確信していた

(でもそれが友人にとって負を背負わす事になるから迷ってる……)

永淋も悟っていた

(なんて……なんて残酷な……)

友の為に戦い、友の為に勝った

全てはただ友の為に

友に殉ずる余りに深い愛、それを持つ者が死を間近に迫っても尚も友の事を考え、想い、悩んでいる

その姿がとても悲痛でもう紫はまともにバーンを見る事が出来なかった

「意地の悪い問いをしてしまったな……許せ」

バーンもわかっている、これは他人に決めさせる事柄ではないと

そしてバーンは沈黙し思いを巡らす

（やはり何も知らぬ今の内に去るべき……か）

そう考えたバーンはふと以前交わしたある約束を思い出す

『その時が来る迄はお前達と共に居よう……それで許せチルノ……』

『うう……約束……だからね！』

半年前に交わした約束

（約束……か……）

（そう……だな……約束は守らねばなるまい……すまんナチルノ……お前との約束を利用させてもらおう）

「これがその時……その時が来るまで……余は幻想郷に居よう」

「そう……それが貴方の出した結論ね」

紫はバーンの答えに悲しく返した、どちらの選択も肯定出来ないから

「そうだ、例え友が悲しもうとも約束は守らねばならん」

それは約束と言う名の免罪符、共に居たいと思うバーンは約束を理由に自分を無理矢理納得させた、それが友を想うなら間違っているとわかりながらも……

「そうなればこの4日……」

バーンは残された時間の過ごし方を暫し考える

(あやつらにも何かを……だが4日では……いや、八雲紫の力を借りればそれ以上に……)

考えを纏め、過ごし方は決まった

「力を貸せ八雲紫、八意永淋」

二人に協力を求める

「……何でも言ってくれて構わない、私に出来る事なら何でもしましょう」

「私も協力は惜しまない……」

二人は承諾してくれた、死ぬ者の最後の願いだからではない、バーンだから、バーンだから承諾した

「よし、ならば……」

バーンは内容を語る、月に照らされた3人の会話はすぐに終わった

「……わかったわ、すぐに手配しましょう」

「私の方は紫に渡しておくわ、その方が早いから……」

そしてすぐに動こうとした

「それと……」

バーンが二人の足を止める

「あやつらには……黙っておけ」

口止め、内容の事ではない、呪いの事

「わかっているわ……言われなくても……」

紫と永淋が友に話す事は無い、それがわからないバーンではない、しかし想う心が念を押させた

「貴方を見るのはこれで最後……」

永淋は告げた、会うのはこれが最後だと、協力はするがバーンの最期を見るつもりは

無いと、そう言った

「良き幻想の旅を……」

それを最後に永淋は闇に溶けバーンの前から姿を消す

「フツ……幻想の旅……か、なるほどの的を射ている……」

永淋の最後の言葉に僅かに微笑む

「では私も……」

「頼んだぞ……」

スキマを開らき閉じる瞬間に紫はバーンを見た

「……!!」

月に照らされながら椅子に座り、夜の虚空を睨む表情はなんとも言い難い悲壮感を紫に感じさせ、紫は目を反らしスキマを閉じきった

バーン最後の4日が始まる

「おーいパチュリー！」

翌朝、皆が起きて解散した後、妹紅と魔理沙が図書館に訪れた

「おはよう二人共、チルノ達はどうしたの？」

眠いのか目を擦りながらパチュリーは聞く

「チルノと大妖精とフランはまだ寝てるよ、レミリアは自分の部屋で寝てるんじゃないか？」

妹紅が答えながら椅子に座る

「バーンは？」

魔理沙も椅子に座りながら聞いた

「まだ見てないわね……その内来るでしょう」

魔導書の解説をしながら答えた時と同時に図書館の扉が開いた

「おっ！来たかバーン！」

姿を確認した魔理沙、入ってきたのはバーン

「言っておく事がある、余はする事がある故部屋に籠りその後暫し出掛ける、その間お前達の相手は出来ん、すまぬな」

顔を見るや否やそう告げると踵を返し部屋に戻ろうとする

「それは構わないけどさ……バーン！」

妹紅が呼び止める

「明後日とか空いてるか？」

「明後日は……無理だな」

「じゃあ明後日は？」

「……大丈夫だ、どうした？」

「いや、チルノと約束したんだよ、みんなで食事をする約束さ！だから予定合わせとこうと思つて聞いてみたんだよ！」

ニコツと妹紅が微笑んだ

「……わかった、その日は空けておこう、だが昼間はわからん、現地に集合で良いか？」

「なんだ忙しいのか？ならそうしようか、前に行った人里の所だよ、日が沈んでから集ま

ろうー！」

「ではその様にしよう」

悟られぬ様に表情を作りバーンは図書館を後にする

「なんだバーンの奴？一段落したっていうのにどうしたんだぜ？」

様子からはわからないが用事が出来ているバーンが魔理沙には不思議に感じる

「わからないわね……永淋が治したから幻想郷から去る事は無くなった訳だけど……何
でしようね」

永淋の優しい嘘を信じているパチュリーはバーンの用事の内容を思案するがわから
ない

「まあバーンの事だ、私達が心配する必要は無いさ」

妹紅は全く気にする素振りを見せず立ち上がった

「さあて！やるか魔理沙！」

「よし！やるぜ！」

「私も先にメドローアを完全にしましょうか」

3人は鍛練に励む、何も知らぬまま、バーンの背を追いかけて……

その日、バーンは部屋に籠ったまま出てくる事はなかった

受け入れた運命は死への道、問題は道をどう彩るか……

残された時間は余りに少ない……

バーンの命、後3日

紅魔館・バーンの私室

(これで準備は整った……後は……戻るだけ……)

全ての準備を終えたバーンは部屋で目を閉じていた

(行くとするか……最後の……旅へ)

目を開けたバーンは歩き始めた

真つ直ぐに続く道を

紅魔館の廊下に出たバーンは外に繋がる通路を歩く

(さてまずは……)

既に予定を決めていたバーンだったがそこに声が掛けられる

「あ、バーン様！お出掛けですか？」

掛けたのは咲夜、偶々通りかかったバーンを見つけ声を掛けたのだ

「早速逸れたか……中々思い通りにはいかんものよ」

「えっ？どうかしましたか？」

バーンの呟きに少し困惑気味に咲夜は問う

（まあ順序が変わっただけよ、最初は咲夜か）

「いや、気にするな……それより咲夜」

「はい？何ででしょうか？」

「これをやろう」

そう言ったバーンは懐から豪華な彩飾が為された鞆に納められた物を渡した

「こ、これは……ナイフですか？み、見てもよろしいですか？」

バーンから贈り物など想像していなかった咲夜は戸惑いながら聞いた

問いにバーンが頷くと咲夜はゆっくりと丁寧に鞆からナイフを抜き出した

「綺麗なナイフ……」

手にしたナイフを見つめ思わず声が漏れた

「それはパプニカのナイフと言う、余の世界であったナイフを模して余が作った」

「……どうりで刀身から魔力が滲んでいる訳ですね」

ナイフからは人間からすれば邪気とを感じるバーンの魔力が滲んでいた

「パプニカのナイフには太陽、海、風の3種類ある、それに倣えばこれは魔となるな」

それを示す様にナイフの柄の宝玉は黒く染まっていた

「これは戦闘には使えませんね……」

ナイフの美しさとバーンからの贈り物という事実が咲夜に戦闘への使用を躊躇させる

「使った方がよいぞ？それは余に傷を付けた唯一のナイフを做った物……伝説のナイフと呼べよう、フフ……」

バーンは薄く笑う

「もう！恥ずかしい事を思い出させないでください！」

かつてしたり顔でナイフをバーンに当てて無傷だった事を思いだし赤面する

「でも本当に頂いてもよろしいのですか？」

「よい、世話になった礼だ、遠慮なく受け取るが良い」

バーンは歩きだし咲夜と擦れ違う

「……皆を頼む」

「えっ？バーン様今なんて……」

小声で呟かれたバーンの言葉を咲夜は聞き取る事が出来ず聞き返したがバーンは返す事無く咲夜の前から消えていった

「……どうしたのかしらバーン様……」

バーンの様子がおかしい事を感じながらも咲夜は気にする事を止めナイフを見つめ直した

「……家宝ねこれは」

ナイフを鞘に納め大事に懐へしまい仕事へと戻った

地霊殿

「まさか貴方から来るとは思いませんでした」

さとりはバーンの訪問に少々驚いた

「私は貴方に良い印象は与えてないので驚きました」

心を読みバーンを不快にさせ更に拘束し協力を無理強いていたのだ、バーンでなく

とも良い印象は持たれない

「あれがお前の本性なら来る事は無かった」

「寛容ですね……てつきり敵と思われたままと思つてました……それで何の用ですか？」

「顔を見に來ただけよ……残念ながらお前には何も無い」

「……」

何かを感じさせる行動と表情にさとりはバーンを凝視するが

(読めませんね……心が閉ざされている)

バーンの心中を読む事は出来なかつた

「……さらばだ」

さとりの沈黙に会話の終わりを見たバーンは帰ろうと足を動かそうとする

「お待ちください」

さとりが呼び止めた

「……何だ？」

足を止めたバーンが理由を促す

(さて彼が引つ掛かるかどうか……)

「友人」

「…………？」

突然の眩きに意図が掴めないバーンはさとりを見つめる

「仲間」

「……」

（この辺では無い様ですね……彼の様子からすればこつち？）

「ムンドウス」

「……！」

（今僅かに反応した！）

「死」

「…………やめよ」

（ムンドウスの死の事とは言っていない……なのにまた僅かに……ムンドウス……死

…………まさか……）

「…………呪い」

「！」

（これは……ムンドウス、死、呪い、ならまさか、まさか……）

「…………別れ？」

「!？」

その一言がバーンを一瞬動揺させた

(!!……………そんな事に……………)

動揺が心を一瞬だけ開かせさとりはバーンに何が起きているかを知った

「……………申し訳ありません」

さとりは直ぐ様謝る

「よい……………読んだのならわかるだろう？他言は無用」

謝罪の言葉だけで意図を理解したバーンはさとりを背を向ける

「貴方は……………それで……………」

「……………そこまで話せる程親しくなつた覚えは無い」

バーンは地霊殿の出口へと歩き出しさとりの前から、地霊殿から去つていった

「……………」

バーンが去つた後、暫くさとりは沈黙していた

(何故でしょう……………全く役に立てず、足さえ引つ張つていた私が死なずに何故バーンが

……………)

生き長らえる自分に溜め息を吐いた

「私もあんな友達欲しかった……………」

もう叶う事の無い願いは想いだけを胸に残し地の底で虚しく響くだけだった

旧都

「おや！そこを歩くのはバーンじゃないか！」

旧都を歩くバーンに声を掛ける者がいた

「変わらず酒か星熊勇儀」

相変わらず強烈な酒の臭いを漂わせる勇儀にバーンは微笑む

「ん……？なんかあんたおかしくないかい？」

バーンを凝視しながら勇儀は問い掛けた

（完全に気付いている訳では無いが呪いを感じたな……呪術を扱う鬼故か）

「そう感じるのには酒の飲み過ぎだ、そこまで飲めば正常な判断など出来まい」

「……ああん？何言ってるんだいバーン！あたしがこれぐらいで酔うわけないだろ！あんまり鬼を舐めなさん……!!」

勇儀は何かを感じ言葉を止めた

「どうした？」

「いや……何でも無い……」

「そうか、ではさらばだ星熊勇儀」

「またな……バーン」

「……」

無言で立ち去るバーンを見送った勇儀は面白くなさそうに酒を注ぎ始めた

「次は無いのかい……ならさつき感じたのはやっぱり……」

(死の臭い……)

勇儀だけが感じていた、呪いまではわからなかったがバーンから僅かに臭う

死臭を……

「チツ……酒が不味い……」

飲み干した杯を持ったまま勇儀は項垂れ暫く動く事は無かった

幻想郷の僻地

「鬼人正邪！面会だ！」

見張りが正邪を呼んだ

「面会？私に？」

宴の後再び僻地へと戻っていた正邪、嫌われ者の自分に面会など有り得ないと首を傾げつつ面会者に会いに行つた

「傷は癒えたか正邪？」

「バーン!!」

そこに居た者の名を叫ぶ、面会者はバーンだった

「あんたが来るなんてどうしたんだよバーン？」

「お前にまだ礼を言つてなかつたのでな」

「礼？」

「ウム、助けて貰つた礼を伝えに来た」

「はあ？礼!?何言つてんだよバーン!!」

驚きふためきながら正邪は首を振る

「私はほとんど何もしてない!勝つたのはバーンのお陰さ!止してくれよ恥ずかしい!」

「そんな事は無い、お前は最後の決め手になつてくれた……お前が居なければ余等は死に、幻想郷も滅びていた……お前が居たからこそ勝てたのだ」

正邪の謙遜にバーンは事実で返した

実際、あの場で正邪が現れなければバーンの言う通りとなつていた、秘法を作る3人

ごとバーンは殺され残りの者も皆殺しにされた後幻想郷は滅んでいたので

「で、でもそれは皆が居たから出来た訳だろ？私が決め手なんて言われても困る……」

「そうだ、余には仲間が居たからあの結果に繋がった、だがその結果に繋がる最後の決め手がお前だった、お前でなければならなかった……と言うべきか」

その結果に繋がる道を皆で作った、だがそれだけでは完成しなかった、最後の工程は選ばれた者にしか成し得ない、それがバーンの運命に触れた正邪の役目だったのだ

「でもさ……」

そうは言われてもやはり正邪には受け入れ難い事、戦っていた誰よりも力の弱い正邪はそう言われる事に負い目を感じている

「誇れ正邪、お前は大魔王の窮地を救った者だ、なんの負い目を感じる必要がある？それとも皆が信じてくれぬと思うのか？もしそうならば余がお前を愚弄する者を皆殺しにしてくれよう」

「オイ!?正気かバーン!?!」

過激な発言に正邪は驚きオロオロとしだす

「当然だ、お前を愚弄する事は余を愚弄するのと同義、許す事は出来ん」

(一)、この目は本当に私の事をそう思ってる目だ……そうか……本当に役に立てたんだな……恩返しが出来たのか……)

「わかったよ……あんたを救ったのは私だ！私が居たから勝てた!!……これで良いか!!」

「そうだ……それでよい……」

正邪の強い瞳に満足したバーンは見張りへと足を運び懐から書状を手渡した

「天魔と八雲紫の認可だ、文句あるまい？」

「……わかりました」

書状を受け取った見張りが正邪へ向けて告げる

「鬼人正邪！釈放だ！二度と悪さをするなよ！」

「?!?!……は？」

突然の宣告に頭が混乱した正邪は見張りを見つめるが見張りはすぐに帰っていつてしまう

「……何したんだよ？」

佇むバーンに問う

「余が八雲紫を通じて天魔に掛け合った、そしてお前の幻想郷での自由を認可させた」

「……なんでそこまでしてくれるんだよ……」

「問題無いからよ、お前が自由になった所だな」

「また幻想郷をひっくり返すかもしれないの？」

「それをするのもお前の自由、だが気をつけるが良い……あやつらは強いぞ？これから更に強くなる」

「ああ、あいつらか……確かに骨が折れそうだ、止めどころ……」

（あれ？それ以前にバーンが居るんじや……）

敵の中にバーンが居ない事に気づく

「そうか……ならば……」

疑問を浮かべている正邪に手をかざすと正邪の体から黒い霧が溢れ消えていく

「!!」

（これは……死ぬ程の……）

解けていく呪いがバーンと共鳴し正邪にバーンを感じさせた

「……バーンあんた……」

呪いが解けた正邪は信じられない顔でバーンを見つめる

「……誰にも言うな正邪、それはお前の胸の内に留めておけ……わかったな？」

「……良いんだね？」

「愚問だ、あやつらには余から伝える」

「わかった……」

頷いた正邪を見たバーンは身を翻し立ち去り始めた

「……バーン!!」

去るバーンに正邪が叫んだ

「ありがとう!!」

感謝をバーンに送った

だがバーンは振り返りも立ち止まりもせず歩み続ける

でもそれで良かった、振り返られると辛いからそれで良いのだ

もう会えないと知ってしまったから……

「グツ……ウウ……」

夜が訪れた幻想郷の空を飛ぶバーンに痛みが襲う

「カツ……ハアツ!？」

堪らず眼下の森に降り木に寄り掛かる

(チィ……ただ死なすのではなく苦痛の末に死ねと言うかムンドウス……)

ムンドウスの掛けた呪いは時が来れば死ぬ呪いではなかった

死の寸前まで定期的な激痛が起きる呪いとなっていた

ムンドウスの憎悪の呪いはただ死を与えるだけでは足らず最後までバーンを苦しめる

(今日はこれ以上は無理か……いや……!!)

激痛を堪えながら歩き始める

「間に合わせねばならん……」

成そうとする意思が痛みで動けぬ体を突き動かす

「次は……太陽の畑……」

時は流れる、止めようもなく……

それはそれは残酷に……

第36話 夜に想う

太陽の畑

夜になっても彼女は居た

「ふう……こんな所かしらね」

悪魔の襲撃で踏み荒らされた花を手入れする為に

「これで大体終わり……今日は帰りましょうか、また明日ねみんな」

手入れの目処がつき嬉しそうに微笑む幽香は家路を進む

「……何の用かしら？」

家路の途中、気配を感じ目付きを鋭くした幽香が木陰を睨む

「そう邪険にするな風見幽香……」

木陰から現れたバーンが幽香へ近付く

「……何の用？」

面白くなさそうに再度問う

「聞けば魔理沙を助けてくれたらしいな」

「そんなつもりは無いわ、帰るから退いて」

バーンを避けて擦れ違い歩いて行く

「……待て幽香」

名で呼び止めた

「気安く呼ぶな!」

振り向きざまに傘を構えた幽香が叫ぶ

「少し馴れ合っただけでもう仲間の気分!? 調子に乗らないで!!」

敵意を露にバーンを睨み付ける、何故かとても機嫌が悪かった

「……なら風見よ、聞け」

「チツ……何?」

よそよそしく姓で呼ぶバーンに機嫌は更に悪くなる、自分に勝ったバーンが自分の言葉素直に聞いたのが腹立たしかった

それでも用件を聞いたのはバーンが素直に聞いたのが疑問だったから

「ムンドウスは強かった……余だけでは勝つ事は難しかった……勝てたのはお前達との絆があつたからこそよ」

「絆……?」

「そう絆……かつて余に勝利した者達が持っていた物だ、今ならそれが余にもあるとわかる」

「その絆が私とお前にあると？ハッ！笑わせないで……そんな物は無いし私には必要無い」

「いざれお前にもわかる時が来れば良いがな……」

「ッ!!」

幽香はイラつく、傲岸不遜だったバーンが絆等と甘い事をほざいているのが幽香には堪らなく不快だった、傘を握る手に力が籠り今にも撃たんとしている

「まあそれはよい……お前への真の用は別にある」

「真の用……?」

バーンの言葉に傘に入る力を緩めながら聞いた

「お前は魔理沙を助けてくれた、そしてムンドウスに勝てたのもお前の協力があつてこそ成し得た、だからな……」

「褒美を取らせよう……と思つてな」

真の用とは幽香への褒美だった

「……種なら要らないわよ?」

「そうだろうとは思っていた、そこで余は考えた……お前が余から一番欲する物……それは……」

「余の生命……であろうな？」

幽香が欲する物、それは自分の命、バーンはそう考えていた

「あら……わざわざ殺されに来たの？その情けない考えごと消して欲しいのかしら？」

少し溜飲を下げた幽香、笑える冗談だと鼻で笑っている

「お前に消せるならこの命くれてやろう」

「……本気？」

バーンの目が言葉が冗談では無いと幽香に感じさせ始める

「無論だ、余は何もせん、攻撃も防御も……な、それが褒美だ、素晴らしいであろう？」

「……そこまで馬鹿にして今更訂正は聞かないわよ？」

最後の意思確認をしながら緩めた力を込め直す

「安心しろ、余に二言は無い、それにな……」

含んだ笑いを幽香に向ける

「お前では無理だ」

「舐めるなアア!!」

否定と同時に傘で殴りつけた

「!？」

殴った幽香は目を見開く

「どうした？それで終わりか？」

バーンは微動だにしていなかった

「……………ツ!!ハアアアアアアアアツ!!」

傘を捨てた幽香は持てる力を全て込めバーンを滅多打ちにする

何度も、何度も拳を振り上げバーンを殴った

「ハアツ……………ハアツ!!……………ハアアツ!!」

どれだけの時間殴り続けただろうか、どれだけの数の拳を食らわせただろうか

殺意を込めた拳をバーンに打ち続けた幽香は息を切らしながら渾身の一撃を食らわせる

「……………」

だがバーンは無傷だった、それどころか揺れる事すら起きずただ幽香の攻撃を一身に

受け続けた

「ハアツ……ハアツ……」

打った拳をゆっくり引きながら後退する幽香、息は上がっているがまだ強く睨み付けている

「もうよいだろう風見……」

殴られる間ずっと目を閉じ沈黙していたバーンが告げる

「今の余はいわば小さき鬼眼王……枷の付いていた余に敵わぬお前が何をしようとも余に傷を付ける事すら叶わぬ……」

バーンの語る通り今のバーンは鬼眼王そのもの、ムンドウスに匹敵する力を持つ鬼眼王の肉体なのだ例え体に力を込めなくとも幽香では何千、何万打とうが効く事は無い

「黙れ……黙れえええ!!」

再び傘を取った幽香がバーンに突きつける

「殺す……!!殺してやるわ……バアアアア!!」

妖力を一気に解放し傘に注ぎ込む

(ほお……自我を無くす事無くその力を操れるまでになったか……成長したな幽香)

幽香の力に内心喜んだ

幽香もまた紅魔館の5人と同じくバーンを越える為に力を磨いていた、そしてムン

ドウスとの戦いを経て限界を突破していたのだ

「ハアツ……ハアツ!!」

更に力を込め続ける幽香、これが最後とばかりにありつたけを傘に注ぐ
(だがな幽香……それでも……)

「ウアアアアアアア!!」

それは撃たれた、傘から出たのはバーンの体数倍にもなる極大のレーザー

それはバーンを飲み込み幻想郷の空に向かう架け橋の様に伸びていった

「……ッハアツ!?ハアツ……ハアツ……」

ありつたけを注いだレーザーを撃ちきった幽香は腕を下ろし頭を下げ息を荒げる

「……クソオツ!!」

煙の上がる眼前を見る事無く幽香は叫んだ

「素晴らしい威力だった……お前はあの時より強くなった、だが……」

煙からバーンの声が聞こえ姿を現す

「効かぬ……効かぬのだ幽香……」

現れたバーンに傷は無かった

「くっ……!?!」

身構える幽香

「お前の全てを込めても無抵抗の余を殺すのは叶わなかった……褒美はこれで終わりだ」

その幽香に論す様に話しかける

「まだ……まだよ!!」

睨み付けた幽香がバーンを殴りつける

「もう……やめよ……」

力無く殴り続ける幽香に唇を噛む

「黙りなさい……私が……殺す……今……ここで……!!」

それでもやめようとしないう幽香だがもはや殴る力すら出せずバーンの胸に置くように拳を振るう

「やめよ!」

バーンが幽香の腕を掴んだ

「離……して……」

抵抗する幽香だが軽く掴んだ手すら振り払えず項垂れる
「もうよい……これ以上は……」

幽香の姿に苦き表情で目を閉じる

「余も辛い……」

「聞かせなさい、なんであんな真似を？」

落ち着き息を整えた幽香が問うた、馬鹿にしているつもりは無いとわかる、だが効かないとはわかってたとはいえ自殺紛いの行為をしたバーンの真意を知りたかった

「……いつそ消してくれれば……と、そう思ってしまったのだ……お前を見た時にな……全てを終える前にこの胸の苦しみごと何もかも消してくれと……」

自分に殺意持つ幽香を見て思ってしまった意思の反逆、しかし同時に悟った、消される事はないと、だから戒めに自虐に及んだ

「何よそれ……この後死ぬみたいじゃない」

言い回しからまるでバーンが死に向かっている様に感じる幽香は聞いてしまった

「……そうだ」

「……冗談じゃないのね」

バーンの表情に真実を見た幽香はそのまま見つめる

「私のこの恨みはどうするつもり？」

「これで許せ」

バーンは幽香に一粒の種を手渡す

「……結局は花なのね、芸の無い奴……」

「お前にはこれしか無いと思ったので……お前にはやはり花が似合う」

「……これは……ヒルガオ……確か花言葉は……」

「絆」

二人の声が重なる

「フフ……」

「フツ……」

何故か可笑しくて二人は笑う

「それには余の魔力が込めてある、決して枯れる事は無い……が、要らぬなら捨てろ、余は気にせん」

「しようがないから育ててあげる、まだ理解は出来ないけど……絆は確かに貰ったわ」
そう言うのと幽香は笑った、何十年か振りの笑顔をバーンに向けて

「次に会うのは地獄か……さらばだ……幽香……」

「ええ……次は地獄で会いましょう……その時こそ殺してあげる……」

魔力を纏ったバーンに別れを告げるとバーンは一瞬で幽香の前から消え去って行った

「またね……バーン……」

魔力の残り香を見つめながら呟くと幽香は家路を再び歩きだす

絆を握りしめて……

バシユ

「……クツ!？」

ルーラで降り立ったバーンはよろけた

(ようやく痛みは収まってきたが……)

よろけを戻し体を確認しながら眼前の建物を見上げる

(痛みを見せぬ為の咄嗟のルーラはここを選んだか)

眼前に立つ寺、命蓮寺の敷地にバーンは立っていた

幽香と過ごした時間の間も激痛は襲っていた、それを悟られぬ様に気丈に振る舞ってはいたがそれがルーラの場合指定の選択を行わず意図していない命蓮寺へと来る事になった

(所々明かりは点いているが起きているかはわからんな……ここはやはり予定通り明日

に……)

身を翻し飛翔しようとするバーン

「あら……？ 貴方は……」

そこに声を掛けられ振り向くと

「どうしました？ こんな時間に？」

そこには白蓮が居た

「起きていたか……お前と話に来た」

バーンは白蓮に会うつもりだった、偶然だが白蓮は一旦去ろうとするバーンに出くわした

「私と……？ 構いませんよ、丁度散歩に出ようと思っていた所でしたので」

「では余も付き合おう、たまには月夜の散歩も良いものだ」

二人の散歩は始まった

「こうして貴方と話すのは初めてですね」

「確かに、余とお前は面識こそあるがまともに話をしたのはこれが初めて……」

「そして最後になる」

歩きながら話す二人、表情は変わらない

「……………何か事情があるのですね？」

「そうだ……………もう……………止められん」

散歩は続く

「そうですか……………それはわかりました、貴方がそれを享受している事も……………ですがそれだけを伝える為に来たのではないでしょう？」

白蓮もわかつている、バーンがただそれを伝えるだけに来たのではないと

「……………魔理沙」

「……………魔理沙がどうしました？」

「アレは才能が有り努力もするが時折感情に任せ思慮に欠ける部分がある……………ナイトメアの時の様にな、あれでは短い寿命を更に減らしかねん……………心配なのだ……………魔理沙が……………」

話したのは友である魔理沙の事、魔理沙の性格がいずれ災いの火種になり危険になるのではとバーンは考えていた

「そこで仲の良いお前に導いて欲しい、大魔法使いと呼ばれるお前に魔理沙が危険を回避出来る様に」

「……………それは杞憂ですよバーン」

白蓮は微笑みを返した

「魔理沙は強い女性です、危険なんて跳ね返す力と意思を持っています……貴方なら良くご存知でしょう？」

「……それは知っている」

「なら貴方は信じるべきです、魔理沙の力を意思を……貴方が信じなくてどうするんですか」

「……」

「それに私から魔理沙に教える事はありません、もう魔理沙は見つけています……力と意思を与えた……」

「貴方を……」

「……」

「以前魔理沙が話してましたよ、貴方は魔理沙にとって友達であり越えるべき壁でもあり良き師でもあるのだと……」

「そうか……そんな事を……」

唇が思わず緩む、そう思ってくれていたのを知ったバーンの表情は意図せずに自然と笑みが浮かんだ

「……………心配は無くなりましたか？」

「正直言えば不安はあるがな……………」

「心配要りません、もし魔理沙がダメな時は……………その時は私達が助けます、ムンドウスの時の様に……………だから……………」

「貴方が信じる魔理沙を信じてあげてください」

「……………よかろう」

そこでバーンは足を止め月夜の散歩は終わりを告げる

「行くのですか？」

「……………礼を言う、魔理沙の友がお前で良かった……………」

「さらばだ……………」

ゆつくりと飛翔しながらそう言うどバーンは白蓮の前から飛び去って行く

「悲しい人……………誰よりも愛深き故に……………」

森の中で一人残された白蓮は眩き、夜の散歩を再開する

「む……あれは……」

次の場所に向かうバーンは途中、夜の闇とはまた違う宙に浮かぶ黒い球体を発見する
(これは能力か……闇を作る能力……確かそれを扱う者が居たな……)

黒球を前に思案していると黒球から声が聞こえた

「そこにいるのは誰なのさー?」

「やはりお前かルーミア」

聞き覚えのある声、中に居たのはルーミアだった

「その声はバーン!」

ルーミアも聞き覚えのある言葉に反応し能力を解除した

「やっぱりバーンだ!」

「変わりない様だなルーミア」

微笑み合う二人だが内心バーンは苦笑していた

（予定が狂い続けているな……いや、これこそが本道か……宛無くルーミアを探すには今の余では時間が足らん、最悪諦めるつもりだった事に比べれば今この時に会うのは最良……）

「ルーミア……余の傍に來い」

「何なのだー？」

横にやって來たルーミアはバーンを見上げる

「チルノと大妖精は好きか？」

「好きなのだー！」

「これからも二人の友で居てくれるか？」

「もちろんなのだー！」

「これからあの二人に辛い事が起こる……」

「そーなのかー？」

「その時はお前が慰めてやってくれ」

「わかつたのだー！」

「フツ……ならば……」

微笑んだバーンは指先に魔力を集中させルーミアの髪をなぞっていく

「何してるのさー?」

「少し待て……よし、これでよい」

指を髪から離すとすぐにルーミアは手をあて確認する

「これは……リボン?」

ルーミアの髪にはリボンが付いていた、もとから付いていた方に寄り添う様に

「そうだ、そのリボンが余とお前の約束の証、二人を頼んだぞ?」

「うん! わかったのさー!!」

リボンのプレゼントに喜んだルーミアは約束は守ると笑顔で答えた

「……ではなルーミア、さらばだ」

バーンは飛んでいく、次なる場所へ

「バーン! ありがとうなのさー!!」

ルーミアは感謝を叫ぶ、何も知らない故に強く感謝を叫ぶ、後で知る方が良いのか今知る方が良いのかはわからない

だがバーンは話さなかった、それはルーミアが幼い二人と重なったから話せなかった

そしてバーンは今日最後の予定の地へ向かった

守矢神社

「はーい、どなたですかあ？」

訪問者が戸を叩いたのを聞いて早苗が向かう

（こんな遅くに誰かしら？もうすぐで日が変わるのに……また妖怪が暴れてるのかしら？）

夜の来訪者は珍しい事ではない、早苗達を頼ってくる者がたまに居るので早苗はあま

り気にはしていなかった

「はいはいどちら様ですかあ？」

「八坂神奈子に会いに来た、通させてもらおう」

「バーンさん!?!ちよちよちよつと待ってください!いきなり困ります!」

言うや否や直ぐ様入ってくるバーンを慌てて抑える早苗

「早苗!」

そこに奥から現れた者が一喝する

「通してあげなさい」

「諏訪子様……」

諏訪子の承認に頷いた早苗はバーンの前から退き道を開けた

「神奈子は突き当たりの部屋に居るよ」

「……わかった」

バーンは奥へと歩いて行く

「……良かったんですか諏訪子様?大魔王を神聖な神社に入れてしまって……」

不安気な早苗が問う

「良いんだよ早苗、もうバーンは大魔王じゃない……それに……」

(もう長くない……好きにしたら良い……それぐらいの事は誰も責めはしないしね

……)

神である諏訪子はバーンの呪いを知っていた、だからバーンが時間が無く急いでいるのを悟り無理を通してやったのだ

「来たか大魔王」

「邪魔させてもらう神よ」

部屋に居た神奈子が入ってきたバーンに驚きはしなかった

(夜の女王の次は大魔王か……)

心当たりがあつたから

「来る様な気はしていたがまさか本当に来るとは……変わったのう大魔王」

「気に入らんなら帰つてやろう」

「そうは言つておるまい、むしろ知りたい、呪いで死が間近の大魔王がそんな事をしてい
る理由をな……」

神奈子も諏訪子同様呪いを知っていた、神である二人はその能力の高さからバーンを
蝕む邪悪な力を感じ取っていた

「まあ言わずともわかるがな、あの宴の時を見ていればわかる」

二人が知つていながら知らぬ振りをして宴に参加していたのは永琳と同じくバーンを思つての事、永琳は見るのが辛くて消えていたが二人はバーンを、バーンを囲う友を思つて参加した、要らぬ勘繰りをされぬように呪いを気付かぬ振りをして楽しく……

「……その通りだ、仲間の為よ……笑うか？」

「笑いはせんが……その中に我も入るのか？」

「加えてやらんでもない」

そう言われた神奈子は苦笑する

「抜かせ大魔王……神が大魔王と仲間だと？ふざけた事を抜かすな」

「フツ……そうだろうな、神が魔族と仲間などと……あつてはならん事か……」

同じく苦笑するバーンに神奈子は酒を注ぎ差し出した

「そう、あつてはならん事だ……が、まあ飲むが良い……」

「……頂くとしよう」

机を挟んで二人は座り酒を飲む

「思いもせなんだわ……まさか大魔王と酒を飲み交わすとはな……我自身驚いておる」

「余も驚いている、あれだけ憎かつた神と酒を……とな」

一口ずつ飲んだ二人に沈黙が訪れる

沈黙はあつたが二人は笑つていた

神と大魔王が飲み交わす、その奇妙な感覚が二人を笑わせた

「さっきの……我を仲間とする言葉だが……」

「ほお……まさか受け入れるのか？」

「馬鹿を言うな……さっきも言ったがそれは出来ん、我にも面目がある、だが……」

神奈子は少し迷った末に話しだした

「神としてではなく……ただの八坂神奈子としてなら……」

「考えてやらんでもない」

そう言った神奈子にはにかんだ、皆には内緒だぞ？つとと言う様に

「どう大魔王？やはり自分より弱い私では不服？」

口調が普段に戻った神奈子はバーンの反応を見るように微笑む

「……抜かせ神……いや……」

微笑みを受けたバーンは苦笑しながら

「神奈子よ……」

仲間の名を呼んだ

「……一献注いでやろう」

「んっ……大魔王の酌なんて二度と無い機会ね」

「余はもう大魔王では無い……今はバーンよ」

「そうだったわね……失礼したわ」

「よい……それより神奈子よ、これをお前に託す」

「貢ぎ物？何をくれるのかしら？」

バーンが取り出して机に置いた物を見て神奈子は目を細めた

「これは……爆弾、それもとてつもなく強力な……何のつもり？」

机に置かれたバーンの掌大の物体に危険を感じつつ問うた

「黒のコアと言う……余の世界に伝わる爆弾だ」

バーンが取り出したのは黒のコア、禁呪を扱う者さえ使用を避ける太古より魔界に伝

わる超強力爆弾

「これは小型だがそれでも鬼眼王の魔力を凝縮させた物だ地上で使えば幻想郷の半分以

上は楽に灰に出来る威力はある、使うなら遙か上空で使え」

「そんな物騒な物を何故私に？」

神奈子の疑問は最も、下手をすれば幻想郷を滅亡さしうる代物を託そうとしているの

だから

「これから先……幻想郷に何が起きるかわからん……またムンドウスの様な者が現れるやもしれん、これはその時の切り札として使え」

「滅多な事では誘爆しない様にしてある、そしてこのコアはお前の神気にのみ反応する様にしておいた……」

バーンの説明を静かに聞いていた神奈子は黒のコアを自分の前に置きバーンを見つめる

「良いでしょう……これは確かに私が託された……必ず幻想郷の為だけに使うと約束しましょう」

バーンの思いに嘘偽り無く答えた

「それでだ神奈子……代わりと言ってはなんだが頼みを聞いてくれるか？」

「ええ良いわ、私に出来る事ならね」

「……神の加護を与えて欲しい」

「貴方じゃ……ないわよね」

「そうだ……与えて欲しいのは余の7人の友……全てに平等に与えられる神の加護を少しばかり鼻頂して欲しいのだ」

「無茶を言うわね……」

バーンの頼みは無理難題、本来神の加護とは等しく与えられる物、偏りがあつてはい

けない、それを曲げろと言うのだ、神である神奈子にとって無茶以外の何物でもなかった

「やはり厳しいか……」

神奈子の渋い表情に頼みは不可能だと悟る

「今のは忘れろ、流石に余も無理を言い過ぎた」

「あつ……ま、待て！」

立つて去ろうとするバーンに神奈子は思わず呼び止めてしまった、何故思わずなのか？

それはバーンの無理だと知った表情がとても悲しげで掛ける言葉も無いのに咄嗟に口に出てしまったから

「どうした？」

「お、お前の頼みは聞けないけど……の……」

何も考えていなかった神奈子は慌てて言葉を紡ぎだす、それは……

「呪いなら解く事が出来る……」

微かに光が見えた

第37話 半分

バーンが神奈子との対話を行っていた頃

一人の少女は洞窟に居た

「なんて複雑な洞窟……」

広大かつ迷路の様に入り組んだ内部を進んでいた

「それに……」

少女は陰から現れた者を睨む

「こんなのがウヨウヨしてるし……」

現れた異形な者が少女に突撃してくる

「ヴオオオオ!!」

「フン……」

異形者を払い除けた少女、払われた異形者は壁に叩きつけられ血肉を飛ばし生き絶えた

「雑魚に構ってられないわね……」

浮いた少女は洞窟内を駆け巡る

「!?」

地下に降り開けた空間に出た瞬間少女は止まった

「キシヤアアツ!!」「ヒュヒュヒュ!!」

「ゴオオオオツ!!」「ピキイイイー!!」

空間には異形が犇めいていた、飛び避ける隙間も無く空間を埋め尽くしている

「チツ……」

苛立ちに舌打ちが出る

（時間が無いのに!!まだ31階……半分も行つてない……急がないと間に合わないのに!!）

少女は異形の群れの前に魔力を高める

「通して貰うわ……邪魔するなら殺す!」

高めた魔力で威圧するが異形は構わず襲い掛かって来る

「ハアアアアア!!」

少女は異形の群れへと飛び込んで行く

想いを胸に1人孤独に……

守矢神社

「……呪いが解けるだど？」

死の呪いが解ける、その神奈子の言葉にバーンは訝しげに問う

「あつ……」

バーンの問いにしまったと言う表情の神奈子

「本当か？」

僅かな期待の瞳で神奈子を見る

「それは……」

話し辛そうに口ごもる神奈子、何らかの事情が話すのを躊躇わせる

「……はつきりと言ったらどうだ神奈子？」

口ごもる神奈子にバーンは悟った

「気休め……なのだろう?」

バーンにはわかった、仮に呪いが解けるとしても今この場で教えるのはおかしい話、解けるならすぐに伝えるはずだからだ、呪いを知る神奈子なら尚更

つまり神奈子の呪いが解けると言う意味は本当に気休めなのか若しくは方法はあるが不可能か手遅れの状態に近いのだと考えた

「……悪かったわ、一瞬でも期待させてしまって……」

「よい……余を思つての言葉だ、すまぬな神奈子……氣を使わせた」
「ッ!?!」

謝る神奈子は顔を歪めた、希望から落胆、怒りを買つてもおかしくない事を言つてしまったのに許されるどころか謝られた事は刺す様に心に響いた

「解けるのは……!!……本当よ……」

言い訳をするように神奈子が話しだした

「早苗の能力……知つてるでしょ?」

「知らぬ……生憎と守矢の巫女は興味が無いのでな」

「そう……早苗の能力は奇跡を起こす程度の能力、本来は天地海を操る奇跡だけど他に応用すればそれは文字通り奇跡を起こせる、強力な呪いを解く事すらね」

「で？それがどうした？間に合わん事を言っても仕方あるまい？」

「……そうね、私と諏訪子の助力を入れても最低1週間掛かる……それに貴方に魔力を送る為の穴を開けてたりもしてたから……」

1週間、それが神奈子が口ごもった理由、3人の力を合わせれば解呪は出来る
だが時間が足らなかつた

ムンドウスとの戦いの後すぐに始めても間に合わない、呪いは本来6日だったしそれ以前にバーンを起こす為の穴を作るのにも協力して1週間掛かった、永琳が呪いを遅らせながらなら間に合ったがしかしそれではバーンの魂が先に死を迎えてしまい起きる事が出来なくなるから先に蘇生をするしかなかった

死を先伸ばしにする無意味とも思える蘇生をしたのはバーンの7人の友に頼まれたからだ

どうかかして助けてくれないか

お願いだから助けて

助けて……

必死に願う7人に神奈子は話さなかつた、話せなかつた

蘇生しても呪いで死んでしまうとはとても……

そして神奈子は永琳と協力してバーンを蘇生した、何も知らない友の願いを叶えたのだ、罪悪感を胸に秘めて

その罪悪感と間に合わないが解呪自体は出来る、それに加えバーンの見せた表情が咄嗟に呪いは解けると神奈子に生ませた

「どの道間に合わんのだ、そこを気に病む必要は無い」

バーンは何も感じていなかった、確かに一瞬は期待したが聡明過ぎる思考はすぐに悟っていたから心は落ち着いていた

それに既に死は受け入れていたから

「こんな体たらくで神とは情けない……私にもっと力があれば……」

神奈子は本気で悔しく思っていた、魔族など関係無しに救いたかったからだ、バーンを、仲間を……

「……余は感謝しているぞ神奈子」

目線を下げていた神奈子へバーンが告げた

「お前が……そうしてくれたから余は楽しき時を過ごせた、それだけで価値はあったのだ、充分過ぎる程にな」

「故に気にするな、死ぬ者にいくら想ってもそれは無駄な事よ」
去ろうと障子を開ける

「……」

しかし立ち止まる、何かを考えている

「……神奈子」

振り返ったバーンが名を呼んだ

「神奈子……！幻想郷の神よ……！！」

「……！！」

その真剣な表情に神奈子は息を飲んだ

「魔族の余が……初めて祈る……！！」

「加護が与えれないのなら……！せめてこの幻想郷を守ってくれ……！！自然を！人を！

妖怪を！あらゆる災厄から守ってくれ！その限りない慈悲で……！！」

「それが死に行く余の願い……頼んだぞ、余の生涯で仲間と認めた唯一の神……」

「神奈子よ……」

それだけ言うとバーンは去っていった

「ふう……」

去った後残された神奈子は息を吐き、注がれた酒を飲み干した

（呪いを解くのは他にも方法があるけどこれも不可能に近いからねえ……奇跡が起きなければ無意味なくらいだし、それに今のバーンには話せない、そこまであいつには余裕が無い……）

何かの事情を知る神奈子だがすぐに思考を切り替えバーンの想いを思い出す

「……わかってるわバーン、貴方が守り通した幻想郷は私が責任を持つて守る、だから……」

（その時は安心して逝きなさい……）

例え信仰が無くなり存在が無くなるうともその時まで願いを叶え続ける、そう決意した神奈子は唯一の魔族の仲間には任せろと約束した

「今日はこれまでか」

妖怪の山の山中で木にもたれて座るバーン

(なんとか予定の人数はこなせた……)

持たれた状態のバーンは動けない

(呪いの痛みを堪えながらなら上出来と言えよう……フツ……やっつけてくれるわムンドウス……余に辛酸を舐めさせたのは貴様の他にダイだけよ……)

バーンは限界だった、呪いの痛みに防御力は関係無いからだ、いくら鬼眼王の肉体、力でも内から蝕む呪いには無力、想像を絶する痛みはバーンの体力を著しく削っていた

「フツ……フツ……」

自分の今に笑いが出る

(似合わない事をしているな……余ともあろう者が……)

似合う似合わないで言えば確かに似合わないだろう、かつて世界を震撼させた大魔王が位を捨て、友や仲間の為に奔走しているなどと誰が思うだろう、想像するだろう……

(心地は良いがな……本音を語り、笑い合える、余にはあり得ぬと思っていた……仲間……そして友……)

木の隙間から夜空を見上げ想いを巡らせる

(2日、僅か2日で会いたいと感じている……フフ……そう急くなバーン……上手くいけば明後日には会える、まずは先にする事があるだろうに……)

言い聞かせながらバーンは目を閉じた

(友よ……お前達は今、何をしている……?)

想いを夜空へ向けて飛ばし

眠りについた

バーンの命、後2日

紅魔館・図書館

「ヤッホー！来てやったわよ！」

「おはようございます皆さん」

図書館に訪れたチルノと大妖精の挨拶に集まっている4人も顔を向ける

「おはよう大妖精……それと親分」

「ついでみたいに言うな！」

妹紅へ食つて掛かるチルノ、二人はそのまま言い合いに発展していく

「明日ですよね？バーンさんの用事が済むのって？」

「らしいぜ、何やってんだらうなあ」

大妖精の質問に魔理沙が答える

「そういえばお姉様も居ないよ？2日前に皆でご飯食べに行くの伝えた後から」

「レミイも？」

フランの言葉にパチュリーが返した、4人の様に図書館に常駐している訳ではないレミリアだからいつもの事と誰も気にしていなかった

「あ、そういうえば……」

思い出した様に小悪魔が話しだした

「レミリア様が宴会が終わった後にここで調べ物をしていましたよ?」

「調べ物? 何の?」

「えーと……あ、コレです」

本棚から持ってきた数冊の本を机に並べる

「……何コレ? 呪いの本ばかりかしらん」

口喧嘩を止めたチルノが覗きこんだ

「呪いに関係する本だけ……どれも高度な物ばかりね」

パチュリーが本を並べながら呟く

「体に制限を掛けたりする類ではないわね……主に殺す方、呪殺に関する物ばかり……」

呪いを掛ける方法から解呪まで……」

「なんでレミリアはこんな物を?」

妹紅が不思議に首を傾げる

「ですよね……レミリアさんなら呪い殺すなんてそんな事する人じゃないです」

大妖精も不思議に思っている

「……萃香を呪う気なんじゃないか？あの二人ちよつと因縁があるしさ」

冗談気に魔理沙が呟いた

「いやいや、それは無い！あのプライドの高いレミリアがそんな陰険な真似するかよ、それに萃香は呪術も得意だろ？弱ってるならまだしも普通にやって効くかよ」

「だよなあ……」

妹紅の指摘に首を傾げる魔理沙、いくら考えてもレミリアの意図が読めない

「まあレミィの事だし心配はいらないでしょう、帰ってから聞けば良いしね」

同じく意図の読めないパチュリーが考えるのを諦めた

「そうだな、明日にはバーンと同じく来るだろうさ……それよりさみんな」

妹紅が少し気恥ずかしそうに切り出した

「バーンにさ……何かプレゼントしないか？」

頬を赤く染めて提案した、バーンへの贈り物を

「突然どうした？……って気持ちはわかるぜ妹紅」

お前もか、と言う様な魔理沙

「貴方達も考えてたのね、わかるわその気持ち、感謝を形にしたいのよね」

パチュリーも同じだった

「じゃあさ！香霖堂で探して見ようよ！」

「バカねフラン！買った物じゃダメなのよ！プレゼントは手作りじゃないと！」

「じゃあみんなで作りましたよ！」

幼い3人をきっかけに何が良いかを口々に話し合う

（楽しそうですね〜）

その様子を見ながら離れる小悪魔は本棚に並べられるある本を見て立ち止まる

（あ、確かコレもレミリア様が見てた本だ……）

本を手に取り表紙を向ける

（神々の遺産……伝承系の本ですか、えー……神の涙……真魔剛竜剣……ミナカトール

……最後は……）

（破邪の秘法……）

「……うん、どうでも良さそうですね！さっとお仕事お仕事〜」

本を戻した小悪魔は仕事へ戻り、後には友の声だけが響いていた

妖怪の山

「……バーンさん！」

「……バーンさん！」

「むっ……」

声にバーンは目覚めた

「やつと起きましたねバーンさん！」

「お前か射命丸」

バーンを起こしたのは文だった

（寝てしまっていたのか……睡眠の必要が無い余が眠るとは……それほど体を酷使していたと言う訳か）

無防備にも寝ていた事が呪いの凄まじさを物語る、襲われかねない山中で寝ていたのだ、いくらバーンの世界より安全だとしても襲われる危険はある

もつとも今のバーンを傷つける事が出来るのは極一部しかないのだが

「見回りに来たらバーンさんがこんな所で寝てるなんて……カメラがあつたら撮つたのに……」

悔しそうにしている文

「焼かれないのならそう言え、これが……余のメラゾー……」

「あやや!?止めてください死んでしまいます!!」

恐れおののく文は後退り逃げようと羽を広げる

「逃がさんぞ?」

しかし、回り込まれてしまった

「甘いですね!」

ヒラリとバーンの脇をすり抜け森を駆ける、見知る森だ素晴らしい速さで木々を抜けていく

「覚えてなかったのか……?」

全力疾走の文の横から声が聞こえる

「大魔王からは逃げられない……!」

文は捕まえられてしまった

「やっぱりダメですか……フッフ!」

首根っこを掴まれている文は笑う

「ダメに決まっておろうに……フッフ」

バーンも笑う

「あの、バーンさん……取材させてもらえませんか?」

文は唐突に切り出した、何故か、何故かはわからないが今しか無いと直感したから

「……考えさせろ」

待つ様に促す

(やっぱり何か違いますね……いつもなら即答で断られるのに)

バーンの様子が違うと感じながら見ている文、そこに茂みから音が聞こえてくる

「誰だよ朝っぱらから五月蠅い……ぎったんぎたんにしてやろうか!」

「あ、にとりじゃないですか、おはようございます」

「なんだ天狗か……」

まだ寝起きで若干瞼が落ちているにとりが現れた

「尻子玉抜かれたいの?………つたく気持ち良くきゆうりの夢見てたのに………文だけじゃないだろ?そいつに安眠妨害の落とし前つけてやる、どこに居んの?」

文に促すと文はにとりの横を指差す

「………お前も尻子玉抜いてやろうかあ!」

横に居る不屈き者に凄んだ

「やってみろ………このバーンに対して」

「ひゅい!」

不屈き者に凄み返されたにとりは飛び上がった、何せ相手はバーンだったから

「こんのかにとり?なら余から行くぞ」

構えた手刀に力を込める

「受けよ………最も強き鬼の剣を………カラミティ………!!」

「マテマテ!マツテ!!止めて!いや!止めてください!スイマセンスイマセン!!ごめんなさい!!」

凄みから一変、涙目で必死に命乞いするにとり、鬼に支配されていた頃のトラウマに

似た感情がにとりを慌てさせた

「冗談だ、そう怯えるな河城にとり」

バーンは手刀を納める

「じよ、冗談でもそ、そんな事するなよ!?マジで三途の川が見えたじゃないか……」

「にとりなら泳いで帰って来れるでしょう?問題無いじゃないですか!」

文の見下す様な謀る様などともうぎそうな笑顔が向けられる

「ほう……河童とはそんな能力があるのか、知らなかったわ……なら一度くらい問題あるまい」

また手刀を構える

「んな事出来るわけない……え……?」

文に反論していたにとりがゆっくりとバーンへ振り向いた

「安心しろ、一瞬だ」

「ヤメテエエエエエエエエ!!!」

「射命丸……」

落ち着いた場でバーンが話しだした

「取材だが……止めておけ」

「えっ!? 受けてはもらえらるって事ですか!？」

「それでもよいと思っただがやはりよす事にした、辛い記事になるのな」

意味深な言葉に首を傾げる文、そこににとりが口を挟む

「取材くらい受けてやりなよ、辛いつて何さ死ぬ訳じゃないだろうに」

「……」

「まさか……本当に……?」

無言のバーンに嫌な予感を感じる

「……記事を書けばそれは幻想郷に余が居た最後の記事になる、出来るだけ痕跡は残したくないのだ……見知る仲間と友にだけ別れを告げ……何も無かった幻想郷に召喚された時に戻り……」

「消えるつもりなのだ……」

バーンは最後の旅の目的を語った

幻想郷の仲間と友に別れを告げ最初に戻る

帰郷の旅

全てを終わらせた後は人知れず、誰にも悟られず

死ぬつもりだった……

「それでもよいなら取材を受けよう、余の友を悲しませ、怒りを買う覚悟があるならな」
悲しみと怒りを滲ませるバーン、それはしないでくれと言っている様だった

「……これで記事にしたら私はブン屋以前に妖怪として終わってしまいます」

文は静かに開いていたメモ帳を閉じる

「へえ、意外だね、あんたが書かないなんて……嬉々として書くと思ったのに」

「私にだってそれぐらいの分別は出来ますよ、バーンさんや皆が怖いとかじゃないんです、これは書いてはいけない……苦しませる真似は出来ない……そう思ったんです」

文も想いを理解していた、記事にしたくないと言えば嘘になる、バーンが死ぬなど特ダネに違いない

しかしそれを上回る絆が文に記事を作る事を止めさせた

「代わりと言ってはなんだがこれをやろう」

異空間を作りだし中から大きな布を取りだし文に渡した

「……マントですか？」

布を広げた文が聞いた

「そうだ、名は無いが名付けるなら風のマントと言った所か」

「……ただのマントではないですねコレ」

羽織った文がマントから感じる力に特別な細工があると見抜いた

「そのマントには余の風の魔力、つまりバギクロスが込められている、それを羽織った状態だと飛ぶ力を助け更に速く飛べよう、風属性の攻撃も高める事が出来る、風を友とするお前には似合うだろう」

「凄い……」

その効果に感嘆の声が漏れた、効果の体感はまだだがバーンが作った物ならほんの僅かの助力などとは思えない、文は凄い物を貰ったと本気で思っていた

「それと忘れ物だ」

「あつ！私のカメラ！」

投げられた物は文のカメラだった

「紅魔館に落ちていたぞ……そして河城にとり、お前にはコレだ」

「あたしにもくれるの?……!!こ、これは……!?!」

目の前に積み上げられた物に目を見張った

「部品!!しかも物凄く高度な!!」

目を輝かせたにとりが部品を手に取り眺める

「キラーマシンと言う魔物が居る、高度な機械のモンスターだ、その部品はキラーマシンの中核を担う部品と装備一式よ」

「つて事はコレは自分好みにカスタマイズ出来るつて事か!」

バーンの説明に機械類に察しの良いにとりが声を上げた

「そうだ、まさにお前好みであろう?」

「そりゃあ大好物だけど……こんな高度な部品どうやって用意したんだ?」

「そこは問題ではあるまい?不満か?」

「いや!大満足さ!」

喜ぶにとりにバーンは内心苦笑する

(それは月の文明を解体し作製した物だ、永琳の協力でな……バレぬ様にしておいたがバレた時は知らんぞ?)

「売れば金にもなろう……では余は向かう所がある……」

背を向けたバーンに声が2つ掛かった

「ありがとうございます！」

「ありがとう！」

文にとりの感謝の言葉、二人共今悲しみで見送るのは違うとわかっていた

「お前達には友を助けられた……それは礼よ……」

「また……助けてやってくれ……さらばだ」

飛翔したバーンは二人の前から消えて行く

「……大きな人を失いましたね」

「……そうだね、でも受け入れなきゃ……」

遠目のバーンを見ながら二人は話す

「やっぱりこうなると問題は……」

文が不安気に呟く

「あいつらだろうねえ……」

不安はバーンの7人の友、7人がバーンの死を知った時を想像して二人は不安になっていた

「不安ですけどあの仲には入れませんね」

「そう、コレはあいつらの問題だからね」

ふうつと息をついた二人は贈り物を抱き締めバーンと7人を想いながら森へ消えて

いった

永遠亭

「あ、バーンさん」

出迎えたのは鈴仙

「蓬莱山輝夜は居るか？」

「姫様なら自室で居ますよ」

「よし、案内を頼む」

廊下を歩いてしているとバーンはふと目に入った部屋が気になり戸を開ける
(最後と言ったのは本当だったか)

バーンが開けたのは永琳の診察室、今は誰も居ない

「師匠ですか？師匠なら宴会の次の日に書き置きを残してどこかに行っちゃいました、
10日程遊んで来るって」

「そうか……いや、よい、永琳はもうよいのだ」

「?……そうですか」

診察室を後にしバーンは部屋を指す

「姫様、お客様ですよ」

「どうぞ〜」

許しが出たバーンは戸を開け中に入る

「相変わらずだな輝夜、暇を持って余していると見える」

「おおっバーン！珍しいじゃない、どうしたの急に？」

鈴仙が去った後横になっていた輝夜はバーンに声を掛けられて飛び起きた

「約束を果たしに来た」

「約束？何かしてたかしら？」

覚えが無い輝夜にバーンは置かれてある遊具を指差し答えた

「碁を打ちに来た、約束だったであろう？覚えておくと」

「ああ……妹紅の時はルール教えたただけだったものね、つて言うか覚えてたのね、半年も前だから忘れてたわ」

「少し悩んだがな……得意の碁でお前を負かせば立つ瀬が無いのではないか……とな」

約束を気にしていない輝夜にバーンの見下す視線が送られる

「……本気……の様ね、まさか私に碁で勝てると思ってるなんて……尊大なのは変わらないわね」

自信溢れる表情に輝夜は睨み返す

「まあ良いわ、ハンデはあげる、5個ぐらい石を置きなさい」

碁盤を持ってきた輝夜が促す

「要らん、互先だ……負けた時の言い訳にされるのは迷惑なのでな」

「……若僧が」

睨み合う二人は石を握り盤に置く、先手は輝夜

「……行くわよ」

「来い……輝夜」

対局は始まった

「……っう……!?!」

表情険しい輝夜

「むう……!?!」

バーンも表情は優れない

(本当に半年!?強い……初めてよ私と碁で互角なんて……)

(輝夜の力量を見誤ったな……まさかこれほどとは……)

戦況は互角だった

(これで……終局か……)

互いの終手でヨセに入る

(これは……勝ってる?負けてる?)

整地する輝夜にも曖昧だった、拮抗した戦いは戦局を読ませぬ程複雑だったのだ

「半目差……勝ちだ……」

「お前のな……輝夜」

激戦を制したのは輝夜

「勝ったけど……ギリギリも良いところ……素直には喜べないわね」

勝ったのは輝夜、だがプライドは傷ついた、自信のあった碁で僅か半年のバーンに敗北寸前まで追い詰められたから……勝つには勝ったが内心はとても複雑だった

「喜べ輝夜、これでも余はお前を完膚なきにまで叩きのめすつもりだったのだ、掛けた時間に関係無い、勝った、それだけで充分だろうか？」

「……そうね、チェスの雪辱は晴らしたからよしとしましょうか」

微笑んだ輝夜はすぐに言葉を紡いだ

「それで？」

それは碁以外の事

「察しが良いな……」

「乙女の勘よ」

一瞬の沈黙の後バーンは話しだした

「余は死ぬ、呪いでな……お前には皮肉だろうか」

「そう……寂しくなるわね」

そう言うが輝夜の心に揺らぎは感じられない、死ぬ事も老いる事も無い輝夜は精神

が死にかけていた、だからバーンの死を告げられても動揺が無い

（余は不老の時を自分で作っていた、止めれば寿命へ近付く……止める事すら許されん輝夜にとっては不老不死は生き地獄に感じるか……）

「生まれ……」

「ん……？」

不意に呟いたバーンを輝夜は見つめる

「生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く……死に死に死んで死の終わりに冥し……」

「妹紅ね」

「そうだ、あやつと違いお前は生と死の境界が無くなった事で精神が衰弱し死に向かっている……このままではお前は生き仏と相違無くなる」

「そうね……でもどうしようもないの、それでも良いとさえ最近思ってるしね」

「なら余がお前に生の実感を与えてやろう」

「……？ どうやって……わっ!？」

魔力を放ち輝夜を手繰り寄せたバーンは懐から取り出した薬を見せる

「これは永琳の協力で余が作った薬……如何に余でも蓬萊の薬を中和させる事は出来んが……死を与える事ならば出来る」

「これを飲めば永久に覚めぬ眠りにつける、何をされても、殺されて転生しても眠りは覚めぬ……」

「飲むが良い……」

口に振じ込もうと薬を近付けていく

「!?……あつー……ちよーま、待ってー!」

バーンの手を抑えた輝夜、焦っている

「どうした?もう不死に飽きたのではないのか?遠慮するな余が飲ませてやる」

輝夜の手を押しながら薬は口へ更に近付いていく

「い……嫌っ!!」

手を払い除けた輝夜、はつきりと出た

死を拒絶する言葉が

「……死ぬのは嫌らしいな」

「……そうみたいね、何百年?何千年振りかしら……死にたくないって思ったのは……」

バーンの手から離れた輝夜は床に落ちた薬を拾い上げる

「……まさかただの薬なんて事はないでしょうね?」

「そんな下らん真似はせん、それは飲めば本当に死が訪れる」

「そう……」

薬を持つ手が震える、死を目の前にした輝夜は恐怖を感じていた

「薬一つで……たったそれだけでこんなにも死が怖い……生きていたい……」
「死にたくなったらいつでも飲むが良い……」

バーンは真つ直ぐに輝夜を見つめる

「余は逆にお前が羨ましい……」

「……でしようね」

バーンの羨望の眼差しに輝夜は言われずともわかった

（生きたいのよね？ そうでしょバーン？ 皆と……一緒に……）

暫しの沈黙の後バーンは身を翻した

「輝夜」

「……何？」

「妹紅はお前を越える為に努力している、そう易々と越えさせるな……」

「……ふう」

バーンの言葉に呆れた輝夜の溜め息が出る

「わかってないわねバーン……もうあいつは私なんて眼中に無いの、戦ったって能力がないと絶対勝てないくらいあいつは強くなってる」

バーンの背に近付く輝夜、僅かな空間を空けて二人は並ぶ

「あいつが越えたいのはバーン……貴方……」

「……」

バーンは何も返さない、返せない、それが不可能だから

「今なら私も……貴方と一緒に……幻想郷で……」

「……さらばだ」

「あ……」

バーンは去っていった、掴もうとした輝夜の手は虚しく空を切る

（そうよね……いくら想っても……いくら止めようとも……もう……）

（行くしか無いのね……）

バーンの向かう先を思い、決着の着いた碁盤を眺め続けていた

(次は……白玉楼か)

道中バーンは次の場所へ向かう前に止まった

(もうここまで予定が狂ったのだ……今更なぞる必要もない)

そう考えたバーンは次なる場所を思案する

(香霖堂にするか)

気紛れに決めたバーンは飛んでいく

気付けば残る時間は半분을切っていた……

第38話 そこに居た証

香霖堂

「いらつしやい、ここは道具屋だよ」

入ってきた訪問客に霖之助は本を読みながら話した

「暇そうだな霖之助、やはり趣味ではそうなるか」

「おや、バーンじゃないか、どうしたんだい？君も八雲紫と同じく盗みに来たのかい？」

本を下ろした霖之助はバーンへ含んだ笑みを向ける

「フツ……対価は払っておるだろう？幻想郷の平和をな」

「わかってるさ、だから気にしてないよ」

品を眺めながら話すバーンを眺めながら霖之助は返す

「何だろうね……こうして見ていると君が大魔王だったなんて嘘みたいだ」

「……何に見える？」

「何にも見えないよ、今の君はただの幻想郷の住人……他より少し強い幻想郷の住人しか見えないよ」

「そうか……」

バーンの表情に変化は無い、一言そう言うのと無言でまた品をゆっくりと見て回る
「何か……あるみたいだね」

バーンの様子から何かがあるのだと察した霖之助は聞いた

「まあ……な……」

「そうかい……まあ詮索はしないけどね」

また本を読み始めようと手に取った瞬間、香霖堂へ新たな来訪客が現れる

「お邪魔するわ」

「アリスじゃないか、どうしたんだい？」

来訪客はアリス

「新しい物が入ってるか見に来たの……って……」

「バーンじゃない」

店に居たバーンを見つけて声を掛ける

「お前は確か……魔法使い、アリス・マーガトロイド……だったな？」

「アリスで良いわ、それより私の事知ってたのね、話した事も無かったのに」

「一応はな、前の宴でお前が魔理沙と共にいるのを見て友だと知った、話した事はなかったが片隅にはあったのだ、それに……」

「お前は大妖精を守ってくれたと聞く、だから礼を言いたかった……霖之助と同じくな」

「そんな、礼だなんて……貴方の方が余程凄い事をしてる、礼を言うのは私の方なのに」
困惑するアリス、そこに霖之助が口を開いた

「そうだよ、君のしてくれた事に比べれば僕等がした事は些細な事さ、礼には及ばないよ」

霖之助もアリスと同じ意見、だがバーンはそれを聞いて首を振った

「そうではない、事の大きさは関係無いのだ」

「余は大妖精を大切な友と思っている、それこそお前達が幻想郷を想う以上に……」
「……」

二人は言葉が出なかった、あのバーンが幻想郷よりもそこに住む住人、妖精の方が大事だと言ったのだ、聡明で威厳がありそして何よりも強いバーンがそう言ったからだ

だが二人が黙ったのはそれが信じられないからではなかった

(なんて想いの重さと深さ……ここまで他人を想う事が出来るものなの……!?)

他人に余り関心の無いアリスはバーンの個人に向ける想いの強さに絶句していた
(参ったねどうも……彼がそう言うのとそれが正しい事だと思ってしまう)

幻想郷と友、危険の際にどちらを選べと言われれば幻想郷を選ぶだろう、中には友と答える者もいるだろうがバーンの様にそれがさも当然の様に答えられる者はそうは居ない

バーンの威厳も相まりその言葉を正しいと感じてしまった霖之助は「そうだね」と言いかけて咄嗟に口を閉じていた

「フツ……すまぬな、幻想郷もお前達も軽く見ている訳ではないのだが……どうしても……な」

「ええ……」

「わかつてるよ」

バーンの謝罪に二人はようやく口を開いた

「さて、余は向かう所がある故これで失礼するが……霖之助」

「何だい？」

「アラストルの代わりをやろう」

そう言ったバーンは異空間から頭ほどある大きさの物を取り出し霖之助に手渡した

「美しいな……盾かなこれは？名は……シャハルの鏡か」

受け取った霖之助は能力を使い物の名を口にする

「模倣品だがな、オリジナルは余が砕いてもう存在せん」

「そうなのかい？でも模倣とは思えない、凄いな……用途は……魔法の反射か、これはまた凄いな」

シャハルの鏡を手に持ち眺めながら鏡の美しさと効果に感嘆の声を漏らす

「余のマホカントタを込めてある、魔法の反射率は100%だ、戦闘に使うなり売るなり好きにするがいい」

「いや……売る気は無いよ、これは贈り物……売り物にする為にくれた訳じゃない、非売品にするよ……ずっとね」

「これからも魔理沙を見守ってやってくれ」

「……? わかったよ」

不思議な言い方に疑問を浮かべるが事情を知らない霖之助はとりあえず了承した

「アリス、お前にはこの指輪をやろう……はめてみる」

「ありがとう……」

贈り物に困惑気味に受け取ったアリスは指輪を促されるままはめてみる

「えっ……これって……」

指輪をはめたアリスは魔力が回復したのを感じバーンを見た

「その指輪には魔力回復の効果を与えてある、回復する魔力は微量だが壊されぬ限り装備者の魔力を回復し続ける、名は……そうだな……魔王の指輪とでもしておくか」

「こんな凄い物ホントに貰っていいの?」

「無論よ、代わりにお前には今後起きるかもしれない異変の際には本気で戦ってもらおう」

「……気付いてたのね」

「お前を見た時から強い力を秘めていると感じていた、そして大妖精から聞いたが悪魔に苦戦していたらしいな、本気を出せば苦も無く殲滅出来たにも関わらずだ」

「……そうね」

「お前が何故本気を出さないのかは知らん、だが今後それでは済まぬ事態が起きないとは言えん……無理強いはせんがお前が幻想郷を想うなら考えておいてくれんか？」

「……前向きに検討しておくわ」

「アリスはバツが悪そうに答えた、彼女も思うところがあり反省しているようだ
「でも貴方が居れば……」

「私は必要無いでしょ？」

「そう言おうとしたアリスの言葉はバーンの手に止められる

「……さらばだ」

「止めた理由も話さずバーンは香霖堂から去っていった

「何なのよ……」

「消化不良な事に溜め息をついたアリスは霖之助に視線をやった

「さあね、僕も彼の意図はわからないけど……」

「霖之助は感じたままを言葉にする

「別れの挨拶……に感じたよ」

「帰るかもしれないって事？自分の居た世界に？」

「違うと思う、あれは多分もつと……」

（二度と会えなくなる様な……そんな感じに見えた）

そして二人はまたいつもの生活に戻る、バーンの頼みを胸に残して……

（香霖堂でアリスに会えたのは幸運だったな、お陰で一番時間の掛かる白玉楼に時間を割ける様になった……行くとしよう）

「その前に……」

行き先を決めたバーンはルーラを唱え飛んで行く

紅魔館・正門

「暇ですねぇ……」

仕事の門番をする美鈴が一人呟く

（誰も来ませんし何か必殺技でも考えましようか……）

周囲に誰も居ないのを確認した美鈴は拳に気を溜めて構えた
「私のこの手が真つ赤に燃えるう！勝利を掴めと轟き叫ぶう！」
声を張り上げて更に拳に力を込める

「ばあくねっ!!」

気が熱を持ち赤熱する

「メイリーンフィンガー!!」

グワアつと空を切った指が何かを掴んだように持ち上げる

「ヒイイトオ……」

フィニッシュを決めようと美鈴は指に力を込める

「愉快な事をしているな美鈴」

そこに掛けられる声

「エン……へっ!？」

掛けられた声に美鈴はすぐに振り向いた

「ば、バーンさん!？」

声を掛けたのはバーン、微笑んでいる

「……い、いつから見えました？」

「勝利を掴め……の辺りからだ」

「恥ずかしい……死にたい……」

顔を真っ赤にした美鈴は体育座りでその場にうずくまった

「そんな暇は無いぞ? 行くぞ美鈴」

「はい? どこへですか?」

「白玉楼へだ」

「何で白玉楼へ……私、仕事なんですが……」

「行くのか? 行かんのか? 早く決めろ、次は無い」

「次は無い?」

美鈴は首を傾げる、紅魔館に住むバーンに次は無いと言われたからだ、今日しか出来ない大事な用なのかと考える

(まっいいか!)

「行きます！暇ですしね！お嬢様も留守ですし今日くらい大丈夫でしょう！」

ピヨンと立ち上がった美鈴はバーンに並ぶ

(レミリアが留守……？まあ気にする事はなからう)

レミリアの留守が弱冠気になったがすぐに気を取り直し美鈴に手を差し出した

「掴まれ」

「はいっ!!」

元気良く返事した美鈴はバーンの手を掴むと二人はルーラで白玉楼へと飛んでいった

白玉楼

「!?」

庭を手入れしていた妖夢は気付いた

(侵入者……方法はわかりませんが門前に突然現れた、力量を察するにかなりの手練れ……)

獲物を構え開きかけた門の前に立つ

「成敗っ!!」

開くと同時に神速の一刀を放った

「!?」

瞬間目を見開いた

眼前に映ったのは白刃取りを行おうと構える美鈴と何故か動かない剣

「警戒心を持つのは良い事だがせめて相手を確認してからにしろ、美鈴を切つてからでは遅い」

視界の外から聞こえる声

「バーンさん!?!」

剣を止めていたのはバーン、妖夢の剣をなんと指一本で止めていた

「す、すいません!!またやっちゃいました……」

直ぐ様剣を納めた妖夢は深々と頭を下げた

「以後気を付けろ、美鈴とて女だ、傷付くのは好ましくはない」

「とてつて何ですかとてつて……そんなに私魅力無いですかあ……？」

一応な女扱いに肩を落とす美鈴を他所にバーンは話しだした

「妖夢、お前と西行寺幽々子に用があるのだが先に西行寺幽々子を済ませたい、話が済むまで美鈴と待つていろ」

「あ、はい、幽々子様ならいつものお部屋に居ますのでどうぞ」

「わかった、では暫し待て」

白玉楼へ入っていくバーンを見送った後、二人は顔を見合わせる

「……どうしますか？」

妖夢が聞いた

「そうですね……ただ待つのも退屈ですし……」

美鈴が構えた

「よろしければ……組手でもしませんか？」

「良いですね！では……よろしくお願いします！」

剣を峰にし妖夢も構える

「ハッ!!」

組手をしてバーンを待つ事にした二人は楽しげに拳と剣を重ねる

「失礼する西行寺幽々子」

「あらあ？バーンじゃない」

部屋に入って来たバーンを幽々子は見た

「どう……した……の……？」

何かを感じた幽々子はバーンを凝視する

「……そうゆう事だったのね、あの子がき……」

ハツつと気付いた幽々子は言葉を紡ぐのを止める

「何だ？」

「……何でもないわ、ちよつとお腹が減ったの」

バーンの問いに濁した返事を返す

(思わず口走る所だったわあ……危ない危ない、バーンには話すなって言われてるものね)

交わした約束を思い出した幽々子は逸らす様に話題を変えた

「ねえバーン……貴方……死ぬでしょ？」

「……」

変えた話題は先に感じた事

「答えなくてもわかる、貴方は今まさに死の淵に居る……幽霊の私が居る冥界の一番近い所に……」

幽霊である幽々子が感じたのは死、既に死んでいる自分と限りなく近い位置にバーンは居ると感じたのだ

「ただし……貴方が行く場所は冥界ではない……」

「わかっておる……余は魔族、死んでも幽霊になる事は無い」

バーンは既に理解している、死んでも幽霊になり幻想郷に居座れる事は出来ない

「貴方が幻想郷で生まれた魔族ならまだ可能性はあったけど……でも貴方は異世界の魔族、死んだ後の魂は貴方の居た世界のルールによって決められるから……」

(これを話すのは二度目ね……)

幽々子は以前この事を誰かに話していた

「それもわかつている、余が死ぬればまた魂の牢獄に閉じ込められるだろう……次の死は先に肉体が滅びた後だ、蘇生は出来ん」

「……ごめんなさいね、力になれなくて」

無力に幽々子は顔を伏せた

「よい、余は助けを求めに来た訳では無い」

「……じゃあどうしたの？」

救いを求めているのでは無いと知った幽々子は何をしに来たのか疑問にバーンを見た

「お前の忠臣を借りに来た」

「忠臣？妖夢の事？」

「そうだ、少しの間妖夢を預けて欲しい、お前にとつても有益になる筈だ……出来るか？」

「それは構わないけど……何をするの？」

「再戦の願いを叶えるのと……」

承諾を受けたバーンは部屋から出ながら答えた

「少し手解きをするつもりだ」

「やりますね!」

「妖夢さんこそ!」

組手を続ける二人は微笑み合う、峰を返している為普段とは勝手は違うが二人の實力は伯仲していた

「待たせたな」

そこへ幽々子を引き連れたバーンがやってくる

「幽々子様への用件は終ったんですね」

「それで私達への用って何ですか?」

用が済んだバーンに二人は聞く

「まず妖夢、お前の願い……余との再戦を叶えてやる」

「本当ですか!」

嬉しく目を輝かせる妖夢だがすぐに顔を苦くする

「でも未熟な私ではまだバーンさんには……」

苦くしたのは己の力不足、今戦つても善戦すら出来ないとわかっている妖夢は嬉しいがまだ早いと思つていた

「妖夢……気持ちにはわかるけど今しかないのよ」

バーンの後ろに居る幽々子が悲しげに話した

「今しか……？それはどうゆう……」

理由を聞こうとした妖夢へバーンが告げる

「やるのか？やらんのか？」

「……やります！」

何か話せない事情があるのだと察した妖夢は理由を聞くのを止めバーンとの再戦を望んだ

「次に美鈴」

「はい！」

「お前は以前教えて欲しいと……そう言ったな？」

「えっ……えっ!?何をですか？」

心当たりの無い美鈴は困惑している、完全に忘れている

「余は聞いていたぞ、天地魔闘の構えを教えてください……とな」

「……!!まさか……妖夢さんを倒したあの時の構えですか!？」

名を聞いた美鈴はすぐに以前見た構えを思い出し名がそれなのだと察した、枷の付いていたバーンが繰り出した完全ではないがそれでも圧倒的な強さを見せたあの構えを「だから特別に余の秘技を教えてやろうと思つてな」

「本当に……本当にですか!!」

弱冠顔を紅潮させる美鈴、あのバーンが見せた構え、不完全だったがそれでも美鈴の記憶には鮮烈に刻まれていた、それを教えて貰えるのだ、興奮で声が荒くなる

そして何より

(バーンさんが私なんかの事を覚えてくれた……!!その上叶えてくれた!!)

バーンが紅魔館のただの門番である美鈴をちゃんと認識してくれていた事が嬉しかった

「教える……と言っても手取り足取り教える時間は無い、それにそれで修得出来るほど余の秘技は軽くは無い……」

「だからだ、身に刻め、そしてそれを基に自らで完成させろ」

「……望む所です!!」

意気込む美鈴、苛烈な方法に美鈴は嫌な顔一つせず寧ろ更に意思を高める

「妖夢、お前もだ、余の秘技を破りたいなら破る為に身に刻め」

隣の妖夢に挑戦的な目で微笑む

「気付いてましたか……」

「お前の目を見ればわかる、天地魔闘を破り余に勝つ野心がな」

「そこまでお見通しですか……なら遠慮なく胸を貸して貰いますバーンさん!!」

美鈴と同じく意気込む妖夢、定めた目標を前にその意思の高揚は最高潮になる

「よし……まずは妖夢、お前からだ、気遣いは無用……殺す気で来い」

「わかってます！ 行きますよバーンさん!!」

美鈴が幽々子と共に退いた瞬間に妖夢は攻撃を仕掛けた

「ハッ！」

弾幕を牽制に一気に距離を詰める

「セヤツ!!」

剣の一閃をバーンの胸へ放つ

「ほう……以前より速く鋭くなった、悪魔との戦いで更に経験を積んだようだな」

軽々と指で受けたバーンが微笑む

「……バーンさんに言われると皮肉に聞こえます」

殺す気で放った一閃を受け止められた妖夢は苦笑う

「フツ……そうか、それはすまぬな」

ガギイン!!

「くううう……!?!」

謝罪の直後に放たれた手刀を二刀で受けた妖夢が後退する

「これで全く本気じゃないんですから困り物です全く……」

腕の痺れに苦笑する妖夢、だが何故か今は痺れすら嬉しかった

「ハアアツ!!」

二刀で斬りかかる妖夢、長刀と短刀を巧みに扱いバーンを追い詰める

「……」

だが無言の涼しい顔のバーンに全てを受けられる

「ハアアアツ!!」

「……ハアツ!!」

二刀を手刀が捉え、二刀は妖夢の頭上に弾かれる

ピタッ

「死んだな妖夢、剣を放さなかったのは見事だ、剣士として最も大事な事を守ったな」

手刀が妖夢の首で止まっていた

「相手にすらなりませんでしたね……」

「少々強くなった程度で相手になられると余の沽券に関わる、当然の結果だ」
決着にバーンは次の仲間を呼ぶ

「来い美鈴」

「はいっ！お願いします!!」

妖夢が下がり美鈴がバーンと対峙する

「加減はしてやる、目に焼き付け、身に刻め……これが……」

力を凝縮しながら手は定位置へ移動する

「……!!」

構えの完成に顔を強張らせる

(対峙して初めてわかる……凄い……なんて完成された技でしょう……私では一生無理
かもしれません……)

冷や汗をかきながら構えを睨む

(ありがとう……ございますバーンさん……)

機会を与えてくれた事に深く感謝し

「紅美鈴……参る!!」

バーンへ駆けた

天 地 魔 闘

「……カハツ!?!」

美鈴は地に伏せていた

「どうだ?これが余の誇り……魔帝すら破れなかった余の力の極致だ」

仰向けに倒れる美鈴に話し掛ける

「ぐっ!?!くっ……!?!」

(何をされたかわからなかった……わかったのはおそらく3回何かをされた……と思うだけ……)

起き上がりながら美鈴は天地魔闘の構えを僅かに感じた

バーンは美鈴の拳を掌底で弾き、手刀を切らぬ様に打ち、弾幕を浴びせていた

(そして優しい手加減ですね、しかし加減してもこの強さとは……)

美鈴の感じる様にバーンは手加減していた、それも余り怪我をしないようにされど身

に刻む強さで

(本気なら今私は灰になってますね……)

バーンが本気なら美鈴は跡形も無く消えていた、本来の威力なら美鈴が耐えられる訳がない、まさに必殺の威力を持った技なのだ、更に今は鬼眼王の力だ、その威力は推して知れる

(本当に……ありがとうございませうバーンさん……今私は歓喜で胸が一杯です!!)

「もう一度お願いします!!」

美鈴は闘志を燃え上がらせ構えた

「何度でも来い……悔いの無いよう存分に掛かって来るがいい……妖夢、お前もだ」

美鈴の闘志に微笑んだバーンは妖夢にも向けて微笑む

「ハイッ!!」

妖夢も嬉しく返事を返した

だが二人は気付いていなかった

バーンの言動の端々に出る別れの意味を……

(貴方はそれで良いのね……想いだけを残して……それが貴方なりの別れの餞別……)

(でもそれは別れを知った時の傷を増やす事……それを知っていて残すのね……)

(痛み以上の絆を……)

幽々子だけは二人に見えない様に顔を逸らした

「掛かって来るがいい！妖夢！美鈴！」

二人の挑戦はまだ始まったばかり……

「ハア……ハア……」

「ゼエ……ハア……」

長い時間が過ぎ二人は膝をついていた

何度も、何度も打ちのめされ、その度に立ち上がったからだ

服は破れ体の至る所に痣や傷が出来ている、それでも挑み続けたのは……

「限界……だな、お前達は良くやった……もう休め」

二人の姿に限界を見たバーンが終わりを告げる

「まだ……です！」

妖夢が立ち上がる

「私も……やれます！」

同じく美鈴も立ち上がる

「お願いします!!」

立ち上がるのは、今この時がかけがえない時だと思っただけ

二度とこんな機会が無いと闘う内に感じたから二人は限界を迎えても立ち上がったのだ

「……よかろう、これをもって最後とす……る……!?!」

(グウウ……!?!今……か……!!)

一瞬間を歪めたバーンは直ぐに顔を戻して二人に構える

天地魔闘の構えを

(少しは天地魔闘の構えは理解したけど……ダメだ、突破口が見当たらない……クソツ
!最後に!!こうなったら……)

「こうなったら背水の陣だ!!」

玉砕覚悟の特攻をするべく美鈴は力を振り絞る

「……お前一人で陣なのか？」

「うう……突っ込まないでください……」

バーンの指摘に顔をしかめる

「心配ありません……私が……居ます!!」

「妖夢さん……!!」

美鈴の隣に妖夢が並んだ、美鈴と同じく玉碎覚悟の特攻を決めるべく
我が儘を聞いてくれたバーンに応える為に……

「華符 「彩光蓮華掌」 !!」

「奥義 「西行春風斬」 !!」

二人の全てを込めた奥義

「天地……魔闘……」

名残惜しく迎えた

「回復はしておいた……直に目を覚ますだろう、後は任せた」

「ええ、任せて……ありがとねバーン、妖夢はこれでまた強くなれるわ」

傍らで寝る妖夢を撫でながら幽々子は感謝を述べた

「見られぬのが残念だ、いずれ美鈴と共に幻想郷に名を轟かせるだろう姿を……」

抱き抱える美鈴を覗きながら答える

二人は満足そうに寝ている

「じゃあねバーン……成仏したらまた会いましょう」

「たわけが……する気などあるまいに」

苦笑し合うとバーンは背を向け白玉楼から去っていった

「ウフフ……その内するわよお……ねえ妖夢？」

妖夢に語り掛けるが返されない返事に幽々子の語りは独白に終わった

「すまぬな美鈴……(´▽`)で許せ」

紅魔館の門前に美鈴を寝かせたバーンは飛翔する

(夜か……あやつが博麗神社に居れば良いが……)

ゆっくりと飛びながら時折ふらつくバーンは博麗神社へと向かって行った

謎の洞窟

「ハア……ハア……!!……ハアアッ!!」

少女は洞窟を進んでいた、異形を退けながら地下へ

(今……何階……?もう……わからなくなったわね……100は越えてる筈だけど……)

「キシャア!!」

急ぐ少女を異形の爪が襲う

「ッ!?!……このお!!」

爪に服と肌を切り裂かれた少女の拳が異形に風穴を空け吹き飛ばす

「待つてなさい……もう少し……もう少しだから……」

疲労とダメージで最初程のスピードが出なくなった少女はそれでも一心に地下へと

進む

「!?……また……」

少女の羽が止まる、眼前にはもう何度目かの異形の大群が犇めいていた

(大丈夫……こんな程度で諦めない……だから……)

(待って……バーン……!!)

「神槍「スピア・ザ・グングニル」!!」

群へ飛び込んで行った

少女は幼い外見だが年齢は500を越える

少女は吸血鬼と呼ばれる種族

少女はバーンを助けたかった

少女の名はレミリア・スカーレットと言った

幻想郷のとある丘

バーンはそこに腰掛けていた

(居らぬか……博麗神社に居ないとすれば神出鬼没のあやつを探すのは不可能……時間
が足りん)

探し人は見つかっていなかった

博麗神社に居るとふんで向かったバーンだが気配を感じれず、探し回ったが見つけれ
ずにいた所を適当な丘を見つけたので降りたっていた

(それに呪いの痛みで満足に飛ぶ事も叶わん……口惜しいが仕方あるまい)
会うことを諦めたバーンは呪いの痛みを耐えながら月を見上げる

(明日……明日だ……)

友に会える喜びを感じながら同時に残る時間を感じ無表情に月を眺める

(月……そうだな、こんな風に月を眺めているといつもあやつが来るのだった……)

月に一人の友を思い出す

(レミリア……お前が居たから余は……)

「おやおや……そこに居るのは幻想に名高い大魔王バーンじゃないか、どうしたんだい
こんな所で？探し物かい？」

馳せる想いを声が遮った

「お前から来るとはな……探したぞ？」

声は知る者の声、バーンの探し人だった

「萃香よ……」

第39話 紅の狂想曲

「あんたも探してたんだね、通りで何処に行っても居ないわけだ」

呆れた様な顔でバーンの横へやってくる萃香

「お前も探していたのか……見つからぬ訳だ」

萃香へ微笑むバーンは急に身を強張らせた

「苦しいのかい？」

萃香が問う

「星熊勇儀は……わからなかった……が、お前は気付くか……」

「呪術に関しては勇儀より上だからね、それと酒もね」

ニコリと笑う萃香

萃香は呪いに気付いていた

「本当は宴会の時に気付いてたんだけどね……あんたの死を受け入れた顔を見て覚悟しているかわかった、だから合わせてやったのさ」

「そう……か……それは……すまぬ……な……」

痛みにスムーズに話せない、呪いの痛みは昨日より増していた

「…………ほら、飲みなよ」

隣に座った萃香が小さい包みを手渡した

「これ…………は…………？薬…………か？」

包みの中には数粒の薬らしき物があった

「私が作った薬さ、私ではその強過ぎる呪いは解呪出来ない…………でも痛みくらいなら和らげられる…………それを渡す為に探してたのさ」

萃香がバーンを探していた理由はこれだった、解けぬならせめて身を蝕む痛みくらいは取り除いてやりたい…………

その思いで萃香は持てる呪術の限りを尽くして薬を作り、バーンに飲ませる為に奔走していた

「頂こう…………」

バーンは薬を飲んだ

(…………だろう…………な…………)

薬の効果を感じ心を奮い立たせた

「楽になった萃香…………礼を言う」

薬のお陰で楽になったバーンが萃香へ礼を述べる

「…………」

だが萃香はうつむき身を震わせていた

「……………どうした？」

様子が変わった萃香へ問う

「……………カ……………」

小声で呟き

「バカ!!」

叫んだ

「……………何だ？一体どうしたと言うのだ？」

怒る理由がわからないバーンに萃香は続けた

「効く訳ないだろ!!」

「……………」

萃香の指摘にバーンは喋らない

「私程度の呪術で……………!!痛みが和らげられる訳がないだろ!!」

「言えばいいじゃないか！効かないって……………無駄だって……………そう言ってくれる方が良かった……………!!」

うつむく萃香から水滴が落ちる

「そうやって嘘をつかれる方が……気を使われる方が……堪らなく……」

「堪らなく辛い……」

顔を上げた萃香の目からは涙が流れていた

萃香は知っていた、自分の呪術の限りを尽くしても痛みすら和らげれないと、どうしようもないのだと

それを知っていたから萃香は軽い冗談、気休めのつもりで薬を渡した、気でも紛らわせれたらと思って、バーンなら効かぬと一笑してくれると思っただけだ

だがバーンはそうしなかった、萃香の心遣いに気を使い嘘をついたのだ
鬼は嘘が嫌いだ、本来なら怒るべき事だがバーンの自分を気遣う優しい嘘が逆に萃香の心を痛めた

萃香はそれが堪らなく辛かったのだ

「…………鬼は嘘が嫌いだったな」

最後まで黙って聞いていたバーンが口を開いた

「余は…………お前に嘘はつかん、お前の薬は確かに効いた」

「…………もういいよバーン」

まだ嘘をつくバーンに萃香は頭を振った、これ以上は聞きたくなかった

「何なら試してみるか？」

「もういいって言ってるだろ!!」

止めようとしないうちに萃香が怒鳴った

「萃香」

バーンの瞳が怒りを抑えた

「お前の薬は確かに効いた、それが真実だ、それとも何か？余を疑るのか？」

「…………」

諭す瞳に萃香は黙りバーンを見つめる

見つめ合う二人、少しの間を置いて萃香が溜め息を吐いた

「…………わかった、あんたは嘘はついてない…………全く、鬼の私にこうまで言わせるなんて

…………本当に呆れるわ…………」

諦めた萃香がバーンへはにかんだ

「萃香……お前はこれから先、どうするつもりなのだ？」

「さあね……先の事はわからないよ、ただ言えるのは私は私の思うままに生きるだけさ……」

夜空を見上げ、萃香は呟いた

「伊吹萃香として生き……伊吹萃香として死ぬ……それだけさ」

そしてバーンへ振り向き

「あんたと同じ様にね」

そう言った、他人に左右される事なくただ自分が自分らしく生き、自分らしく死ぬ

バーンが命令ではなく本心からくる生き方と同じなのだと言った

「そうか……やはりお前は心配要らんな、まあ元より心配などお前にはしておらんが」

バーンは萃香への心配などしていなかった、強さなどではない、萃香の逞しい生き方に心配など大きな世話だからだ

「萃香……これを受け取れ」

異空間から取り出した物を萃香へ投げた

「私の瓢とそつくりだね……これは何の酒が出るんだい？」

渡されたのは瓢、萃香の持つ伊吹瓢の色違い

「名は知らぬ……余が飲んだ事のある中で一番美味しい酒を再現した、お前の持つのと同

じく尽きぬ酒だ……好きなだけ飲め」

「ふーん……そうかい……あんたから貰った酒だ、名付けるならやつぱり大魔王かねえ」
瓢を眺めながら酒に名付けた萃香だが

「でも……」

瓢をバーンに差し出し

「要らないね、こんな酒」

不要と言った

「私より大事に想う奴等が居るだろう？ 私なんかが受け取ったらあいづらに嫉妬されちまう」

私より友を大事にしてやれ

そう軽口に含まれた萃香の気遣いだった

「貰ってくれねば困るのだから……」

瓢を受け取ったバーンが呟いた

「お前には悪いがお前の言う通り余は友の方が大事だ……だが萃香、お前も大事な仲間……受け取ってくれんか？」

「……そこまで言うなら構わないけど……」

少し考えた萃香はバーンへ切り出した

「条件がある！おまけとしてなら貰ってやるよ！」

「おまけ……？お前はこれ以上何を望む？」

条件とは萃香の望みを叶えろとの事だった、叶える気のバーンは詳細を聞く

「繋がりだよ……そんな酒なんかじゃない、あんたが私と仲間だった証……繋がりの証が欲しい」

萃香の望みは繋がり、バーンとの仲間の証が欲しかった、友とまでは言わない、でも自分が満足するだけのバーンとの繋がりの証が欲しかった

「証か……」

望みを聞いたバーンは考え込む

様々な事を考え萃香との繋がりに相応しい事を探した

(……霧……か……)

「霧……ミストバーン……」

眩きながら思いを巡らせ褒美は決まった

「ミスト」

「ん……？」

告げた名に知らない萃香は続きを促す

「そう呼ばれる魔物が居た……余の最も信頼のおける配下だ」

「それがどうしたんだい？」

「魔符「闘魔滅砕砲」……これはミストにあやかり名付けた技だ……良い配下だった」
「そうみたいだね」

言葉から滲む信頼に萃香は真にそう思っていると感じる

「今思えば余にとつてはある意味最初の仲間と言える……だからだ萃香……」

バーンの瞳がまつすぐ萃香を捉えた

「名をやろう」

「名を？二つ名つて事かい？」

「そうだ、お前にはミストの名をやろう……霧の……これからは霧の萃香と……そう名乗れ」

「霧の……萃香……」

貰った名はバーン一番の忠臣の名、ミスト、バーンに絶対の忠誠を誓ったバーンが体を預ける程に信頼を置いた者の名

「まあ何者でもない余から名を貰ったところで価値は無いが……」

自嘲気味に苦笑するバーンに萃香が寄った

「……バーン、それを寄越しな」

萃香が瓢を引つたくる

「霧の萃香……うん！氣に入つた！これ以上無い物を貰つたね！」

萃香はそれで満足だった、最も信賴を置いた者の名を貰えたのだ、それは自分をあくまで仲間の内で一番と言われた様な氣がして嬉しかったから、勿論バーンに仲間の内で誰が一番かなど聞くつもりも無いし知りたくも無い

でも萃香にとってはそれが誰よりも上等な物だと感じたから受け取つた、誰が認めるでは無い、バーンとの最高の繋がりだったから

そしてどこからか取り出した盃をバーンに渡すと瓢から大魔王を注ぐ

「別れの酒さね……あんたと私の……別れの……」

しんみりと酒を注ぎ終えるとバーンに飲む様に促した

「二度目の酒が別れの酒とはな……名残惜しい事よ……」

別れが飲むのを躊躇わせる、飲もうが飲まないが別れが来る事は変わらない、だがやはりわかつていても飲みたくなかった

理解していても……受け入れていても……

納得出来ないから……

生きたい……

言葉にこそ出さないが生きたい氣持ちは消えない

それどころか仲間に会うたびに氣持ちは強くなる

「……吐き出しても良いんじゃないか？私で良けりや聞いてやるよ」

萃香の微笑んだ優しい瞳が向けられる

「……いや」

クツつと酒を飲み干した

「それには及ばん……大丈夫だ萃香」

バーンは話さなかつた

「そうかい……」

(やっぱり私じゃ無理……か……バーンの最後の壁を破れるのはやはりあいっらしか……)

自分ではバーンの心を全て開かせるのは無理だと知つた萃香は瓢を差し出した

「今夜はとことん飲もうじゃないか！付き合つて貰うよ！」

無理ならせめて楽しく、笑つたまま別れたかつた

「よかろう、今日はお前が最後だった……付き合つてやろう」

名を捨てたバーンと名を貰つた萃香

二人の別れの酒は朝まで続く

「なんで……」

バーンが萃香と別れの酒を飲み交わしていた頃

「神奈子の言う通り……ダメだって言うの……!?!」

レミリアは打ち拉がれていた

「(ハ)い(ハ)まで……(ハ)い(ハ)まで来たのに……!!」

祭壇の上で震える

レミリアは辿り着いていた、目的の場所、地下150階に

「あっ……!!?」

ふらついたレミリアはそのまま祭壇の上に倒れた

よく見ると体は全身血で濡れ尚も流れていた、魔力も使い果たし既に限界などとうに越えていた

「このままじゃ……このままじゃバーンが……バーンが……」

来れたのはバーンの為、バーンを救いたい想いがここまで限界の体を突き動かして来た

なのに目的は遂げられなかった

「お願い……お願い!!何でもする!後で死ぬと言われれば喜んで死ぬ!!」

「助けたいの!どうしても救いたいの!彼を……バーンを!」

「私の……大事な人を!!」

祭壇と異形の死体しか無いその場所でレミリアは叫んだ

何としても……何としてもレミリアはバーンを救いたかった

自分の命すら顧みず願った

心の一番を占める者の運命を変える為に……

だが……何も、誰も応える事はなかった

「応えて……」

「助けてよおおおおおおお!!」

慟哭が……響き渡る……

バーンの命、後1日……

「……」

昇る朝陽をバーンは見つめていた

(太陽……やはり素晴らしい力だ……)

かつて望んだその力を感じ手を伸ばした

(いくら余の魔力が強大でも……鬼眼王の力をもつてしても太陽だけは作りだす事が出来ん)

どれだけ力が上がっても太陽は作れない、それはバーンはおろか創造神を気取ったムンドウスにも不可能な事

魔界に太陽を与えようとしたバーン、数千年を懸けて手に入れようとしたそれを見る今のバーンは微笑んでいた

(あれほど欲した太陽だが、今は何も思わん……)

本物の太陽などどうでも良かった

(代わりの太陽を既に得ているからか……)

太陽に背を向けたバーンは歩きだした

「……………行くのかい？」

背を向け寝ていた萃香が聞いた

「……………達者だな」

立ち止まり萃香に返したバーンはまた歩きだす

「……………」

萃香は何も言わなかった、言いたかったが言えなかった

行くなど……………

そう言いたかったのを押し殺した萃香の顔の付近の土は濡れていた

「せつかくの酒が抜けちまったよ……………」

誰に聞かれる事はない愚痴を言った萃香は笑った

(じゃあねバーン……………あんたから貰った名に恥じない様に生きるよ……………)

自分の生にバーンとの繋がりを刻み、萃香はこれからも生きる

紅魔館・図書館

「ふんふんふん♪」

大妖精は鼻唄を歌いながら何かを編んでいた

「ハイ！次はチルノちゃんの番だよ！」

編んでいる物をチルノに手渡す

「任せときなさい！あたいが最強に編んであげるわ！」

意気揚々と編み始めるチルノ

「おいお母さん！チルノ見といてくれよー滅茶苦茶になっちゃまうからさー」

魔理沙が母親に言った、同時に大妖精がクスクスと笑う

「誰がお母さんよ……」

お母さん、もといパチュリーが呆れながらやってくる、だがすぐにチルノに向かう辺り満更でもないらしい

「お姉様はどうするの？」

フランが聞いた

「レミリアは今日集まった後に最後を編んで貰おうか」

妹紅が答える

「さあ皆さん時間が無いですよ！急ぎましょう！」

大妖精の指揮の元、6人は和気藹々とプレゼントの製作に励む

博麗神社

「あらバーンじゃない、どうしたの？」

庭掃除をしていた霊夢が現れたバーンを見つけた

「傷はもう良い様だな博麗の巫女よ」

「……その呼び方は止めて、私は霊夢って名前があるのよ大魔王さん？」

少し不機嫌気味に言った

死線を共に越えた霊夢にとつてのバーンはただの顔見知りではない、魔理沙等に感じる感情と同じになつていた、だから名ではなく通称で呼ばれるのが嫌だった

「大魔王は止める……霊夢」

バーンも今は大魔王と呼ばれるのがあまり良く思つていなかった、名を捨てたバーンは今はただのバーン、それ以上でもそれ以下でもない

だから嫌味に大魔王と呼ばれたバーンは霊夢の気持ちを察し、仲間の名を言った

「それで？どうしたのよ？」

名前を呼んでくれた事に満足した霊夢が目的を問うた

「博麗大結界を見せて貰えるか？」

「……無理、結界は極一部しか近寄れない決まりなの、いくら幻想郷を救つたあんたでも例外じゃないわ」

掃除を止めた霊夢が睨んだ

博麗大結界とは幻想郷の要、最も大事な部分、結界の要所に入れるのは博麗の巫女や八雲紫の様な限られた者しか入れない、如何に功績を作つても結界に関しては別の話

だった

「フム……そうだろうとは思っていた……」

「ちなみに目的は？」

予想がついていたとばかりに含んだ笑いをするバーンに、霊夢は詳細を尋ねる

「ならば無理にでも通らせて貰おう」

「……はあ?」

返事は力ずくの正面突破だった、一瞬理解が遅れた霊夢を他所にバーンは神社の中に
向かい歩きだした

バチツ

バーンの歩みは結界に阻まれた

「何が目的か知らないけど通さないわよ!」

結界の前に飛び出した霊夢が立ちはだかる

「……退け」

「退くわけないでしょ」

バーンの冷たい瞳を受けても霊夢は引き下がらない

「時間が無い……」

「時間……? 何の話よ!」

バーンの意味深な言葉に霊夢は考えるが通すつもりは無い

「それを話す暇があれば話してやろう……今は退け」

「……嫌だと言ったら？」

「寝てもらおう」

「ッ!!」

退くつもりの無いバーンの宣言に霊夢は飛び退き霊力を高めた

「夢符「夢想封印」!!」

放たれた弾幕がバーンに炸裂し結界と相まり更に強力な封印結界を作り出した

「嘘……」

結界を作り終えた霊夢が唾然とした

「……」

バーンは歩いていたので、動きを抑える事など出来ず、結界など何処吹く風と言わんばかりに涼しげに進むバーンに霊夢は顔を苦くする

(ムンドウス並みとはわかってたけど1秒も足止め出来ないなんて……これじゃ私が遊んでるみたいじゃない……)

止められるとは思ってなかったがそれでも足止め程度なら可能と思っていた霊夢は改めてバーンの強さを再確認し止めるのは不可能と悟った

「……………行かさない！」

目前に迫ったバーンを睨み付ける霊夢、止められないとわかっていても行かせる訳にはいかない、体を張っても止めるつもりだ

「……………許せ」

指を突き出すと霊夢は急にふらつき臉が下がる

「くっ……………!? バー……………ン……………」

崩れ落ちる霊夢

掛けられたのはラリホーマ、鬼眼王の強大な魔力により耐性を無視して霊夢を眠らせたのだ

「……………」

倒れる霊夢を受け止めたバーンはそのまま抱き抱え縁側に寝かせ、神社内へ入る
(さて……………見てみなければわからん、仕込みが出来れば良いが……………)

神社から要所に繋がる隠し部屋を探り当て一瞬で開いたバーンは部屋の中へ消えて行つた

とある王国

「連れて来たぜ先生」

謁見の間に青年が入ってきた、側には二人の女性と

「……」

レミリアが居た、虚ろな瞳で青年に抱き抱えられている

「その魔物……いえ彼女が破邪の洞窟の侵入者ですか」

王座に座る先生と呼ばれる者がレミリアを見つめた

「凄いなんでもんじゃないですよ先生……こいつは破邪の洞窟を3日で150階に辿り

着いてたんですよ、魔物をほぼ全滅させながら……そんな事おれだって無理なのに」

青年が話した後、傍らの肉体派の女性が続けた

「そうなんですよ先生、お陰で私達は死体の道標を辿るだけでしたのですぐ追い付けま

した」

「……道中の宝箱はどうなっていましたか？」

先生の質問にもう一人の僧侶風の女性が答えた

「どれも開けられた形跡はありませんでした、それに宝箱に入っていないアイテムや魔物の落とし物も手付かずでした」

(物盗りではないようですね……)

「……彼女は150階で何を？」

「祭壇の前で倒れてたよ先生、150階と言やあ確か先生が……」

青年が何か心当たりを思いだした

「ええ……150階は破邪の秘法がある場所です」

先生が答えた

破邪の秘法

邪悪な力に対抗する為に神々が残した遺産、他の呪文の効果を大幅に増幅させる秘術「やっぱりそうか、こいつには契約出来なかったみたいだけどさ」

青年は納得した様にレミリアを見た

「それで彼女はどうしますか？」

「危険だし放つちや置けないよなあ……」

女性の質問と青年の言葉に先生はレミリアを暫く見つめた

「そうですね……」

立ち上がった先生はレミリアへ近付いて行く

「まずは彼女の話を聞いてみましょう、後の事はそれからでも遅くはないでしょう」

そう語った先生は青年にレミリアを床に寝かせる様に指示するとベホイミを唱えた

「……まさか人間に助けられるなんてね、末代までの恥を搔いたわ」

「なんだあ？えらく生意気な奴だな、見た目は可愛いのにさ」

話せるまで回復したレミリアの悪態に青年が顔を歪めた

「フン……お前に私の魅力がわかるものか、黙っている三下」

「三……!?んだとコノヤロー!!」

レミリアのキツイ物言いにキレた青年だが二人の女性と先生に抑えられる

「貴方は何者ですか？何の為に破邪の洞窟へ行ったのですか？」

「貴方はそちの三下より話せそうね……私の名はレミリア・スカーレット、吸血鬼よ、

何の為かは……」

先生の問いに答えるレミリアは目的を話す瞬間に止まった、そして震えだした、思いだしたからだ、ダメだった事を……

「バーンを……助ける為……」

皆が見守るなか搾る様に呟かれたそれは名と目的

「バーンだつて……!?!」

名を聞いた3人が動揺した

(いや……偶然一緒の名前なだけさ、生きてる訳が無い……そんな訳あるかよ!)

青年には聞き覚えのある名だった、他の者も同様、だがそれは無いと考え口には出さなかつたが先生だけは聞いた

「そのバーンとはまさか大魔王バーンですか?」

知る者の名を、かつて地上の存亡を賭けて戦つた大いなる魔の王の名を

「ああ……ここがバーンの居た世界だったのね、そう……」

先生の問いに納得した様子のレミリアは先生に告げた

「そうよ、バーンは大魔王……」

「大魔王バーンよ……」

異界の地はバーンの居た世界だった
運命を受け入れたバーンと運命を変えようとするレミリア
両者の想いは擦れ違いながら未だ時は進む

物語は最後の時を迎えようとしていた

外伝～大の大冒険～

バーンの命が尽きるその時を間近にした紅魔館・図書館の一時

「♪」

和気藹々と談笑するなか機嫌良く編み物をする大妖精

「大妖精って編むの早いし上手いよなあ……どうしたらそんなに早くて上手いんだ？何か秘訣があるのか？」

妹紅が聞いた

「うふふ……それはですねえ……」

編みながら大妖精は微笑み

「贈りたい人の事を想うからです！」

そして笑った

「相手の事を想いながら編むから上手に編めるんですよ、早くバーンさんに贈りたい……喜んでくれるかなあ……とか考えながら編んでるんです！」

「へへ……その気持ち、まさしく愛……ってやつだな！」

「そうですよ！」

「!?」

茶化す言葉に大妖精は即答し妹紅は仰天する、流石に即答で肯定されるとは思ってたかったからだ、そして何故か恥ずかしくなって顔が赤くなる

「聞いたぜ大妖精〜!」

耳敏い魔理沙が楽しげにやってくる

「あたしもバーン大好きだよ!愛してるよー!」

「何言ってるのよ大ちゃん!フラン!あたいが最強に愛してるに決まってるでしょ!!」

フランとチルノも聞いていた、何だか良くわかっていないが自分の方が上だと言い張っている

「貴方達3人じゃ親子にしが見えないけどね」

本を下ろしたパチュリーが言った

「そうだねお母さん」

にやけながら魔理沙は茶化す、いつの間にかパチュリーは3人の母親の様に扱われていた

「お母さんじゃないわよ……」

パチュリーの呆れに皆は笑う、本当に楽しそうだ

「ふふ……♪」

一緒に笑いながら大妖精は編み物を続ける

(皆バーンさんが好きなんですわね！)

このメンバーの基礎を担うのはバーン、バーンが居るから皆は笑い、皆が居るからバーンは笑うのだ

(あ、バーンさんで思いでした！そういえば前に冒険した事があつたつけ……あの時は大変だったなあ……)

ふと思いだした大妖精はかつての出来事を編みながら思い返し始める

3ヶ月前 紅魔館・図書館

「チルノちゃん休んでた方が良いよ〜」

「大丈夫って……言ってるでしょ!」

朝、図書館にやって来た大妖精とチルノ、だが何やら揉めている様子

「どうした?……って顔が赤いぞ親分?大丈夫か?」

既に居た妹紅がチルノの異変に気付いた

「本当だぜ……何か変な物食ったのか?」

同じく居た魔理沙が聞く

「チルノちゃん熱があるんです……寝てようって言っても聞かなくて……」

大妖精が心配そうに答えた、確かにチルノの顔は赤くなりふらついていた

「熱?まさか……チルノだぜ?バカは風邪ひかないって言うだろ?変な物食ったんだろ

どうせや!」

「なんだとー!!」

魔理沙の馬鹿にした発言にいきり立つチルノ、だが力が入らず更に苦しそうになる

「本当に大丈夫かチルノ?」

妹紅がチルノの様子に心配になり話しかけるが

「大丈夫だって妹紅!すぐ治るからほっとけて、それにバカにつける薬は……」

ゴーンッ！

「くイッテー!!」

魔理沙の後頭部を何かが殴った

「いくらなんでもそれは酷いわよ魔理沙」

「何すんだよパチュリー！」

殴った者を睨み付ける魔理沙、殴ったのはパチュリー、手には大きな魔導書が握られていた、どうやら角で殴ったらしい

「ちよつと見せてみなさい」

魔理沙へ返す事なくチルノに近寄りパチュリーは診察を始める

「……妖精風邪ね」

診察を終えたパチュリーが呟いた

「妖精も風邪ひくんだな」

妹紅が珍しそうにパチュリーを見る

「勿論よ、妖精だって風邪をひくわ、人間とは異なるから年に1回あるかないかくらいの頻度だけどね」

「なん……だと……!?!」

パチュリーの診察結果に魔理沙は狼狽えた

「誤診……だよなパチュリー？チルノが風邪ひくなんてありえな……イテツ!？」

魔理沙はまた殴られた

「魔理沙しつこい！」

殴つたのはフラン、いい加減にしろとご立腹だ

「……悪かったよ、調子に乗り過ぎた」

皆の冷たい視線にようやく魔理沙は茶化すのを止める

「だからあたいは大丈夫だって！」

「ハイハイわかったから寝てろよ親分、な？」

妹紅が抑えてチルノは半ば無理矢理寝かされる

「それで……治るんですか？」

パチュリーに大妖精が聞いた

「放つておいても治るけど他の方法は二つあるわ、一つ目は薬を飲む事、飲めばすぐに治るわ、二つ目は一回休みになる事ね、簡単なのは二つ目、バーンにメラでも当てて貰えば後は明日まで待つただけだから」

そう言ったパチュリーは魔導書を読んでいるバーンを見た

「……」

バーンは魔導書を読みながら指先をチルノに向ける、いつでも良いぞ？との事らしい

「……………一つ目をお願いします」

「フフ……………わかったわ」

簡単だからと言っても親友のチルノがやられるのは見たくない、だから大妖精は一つ目の方法に決めた

「じゃあ永遠亭に行つて永琳から薬を貰つてきなさい、彼女なら調査出来るわ」

「はい！」

元気良く返事した大妖精は出口へ向かう

「着いて行つてやろうか？」

魔理沙が問いかけた

「大丈夫です！それくらい一人で出来ますよ！」

そう言つて大妖精は飛び出して行つた

「なあ妹紅……………」

「どうした魔理沙？」

「いやあ……………こんな時つてお決まりのパターンがあるよなあ……………つて思つてさ」

「ああ……………私も同じ事考えてたよ、私の予感だと……………無いね」

「同じく」

二人は見合い苦笑った

永遠亭

「ごめんなさいね、切らしてるの……」

まさに予想的中だった

「そうですかあ……」

目的の薬が無い事にガツクリ肩を落とした大妖精は永琳に背を向ける

「妖精風邪の薬を欲しがる人は殆どいないのよ、だから私も作ってなかったの……」

「……材料が後一つあればすぐ出来るのだけれど……」

「!?どこにあるんですか? 私が取って来ます!」

永琳の呟きに希望を見た大妖精が申し出た

「無縁塚にある結界の場所はわかる?」

「わからないです……」

「行けばわかるわ目立つから、それでその結界の更に奥に様々な薬草が生えてる場所があるの、そこから……この薬草を取って来て」

凶鑑を取り出して大妖精に見せる

「毒消し草って言うの、妖精風邪はある種の毒からくる病気なんだけどこの薬草は妖精風邪くらいしか使い道が無くてね、だから調達してなかったのよ」

「わかりました!行つてきます!」

薬草の外見を記憶した大妖精は意気揚々と永遠亭を飛び出して行った

紅魔館・図書館

「遅いな大妖精……」

「そうだな……て事はパターン入ったか」

「帰りを待つ妹紅と魔理沙が呟いた

「この流れだと材料探して所か」

魔理沙の予想、正解

「まあ大妖精が探しに行ける場所なんだろうから危険な場所じゃないだろ」

妹紅が眠くなって寝たフランの髪を撫でながら返す

「確か薬の材料は毒消し草ね……場所は無縁塚の奥地だった筈よ」

パチュリーが魔導書を読みながら答えた

「無縁塚かあ……ん？待てよ……」

魔理沙が何かを思いだした

「文の新聞で最近無縁塚に危ない妖怪が出るって書いてたような……」

「ああ……確かそんな事書いてたな……」

「でもあの文の新聞よ？」

魔理沙の発言に二人が続いた

「そうなんだよ……文の新聞だから嘘臭いんだよなあ……」

「でももし本当だったら？」

「……」

妹紅の言葉に二人は急に不安になってくる

「……行くか」

「……だな」

「……私も行くわ」

3人は頷き合うとバーンとフランを残し紅魔館を出発した

「……」

（妖怪か……）

残されたバーンは文文。新聞と妖怪図鑑を手に取り読み始める

「遠いなあ……」

ふよふよと無縁塚を目指す大妖精だがあまり強くないからスピードが出ない
「あー!!」

突然声が掛けられる

「大妖精なのだー!!」

「ルーミアちゃん!!」

大妖精の前に現れたのはルーミア

「何してるのだー?」

「無縁塚に毒消し草を探しに行ってるんだよ」

「一緒に行くのだー!!」

ルーミアが仲間になった

ルーミアを仲間は無縁塚に向かう大妖精

その途中、茂みから何かが現れた！

「こんにちは、死ね」

妖怪が現れた！妖怪はいきなり襲いかかって来た！

「きゃあっ!?!」

大妖精は目を閉じ身構えた

しかし攻撃は来なかった

「大丈夫なのだー!」

ルーミアの声に目を開くと妖怪はルーミアに殴られ倒れている

「ありがとうルーミアちゃん!!」

「良いつて事なのだー!」

妖怪を蹴散らし二人は進む

無縁塚に続く平地

「うわわ!?また出たよルーミアちゃん!?」

二人はまた妖怪に絡まれていた、今回は数体居る、幼い外見のせいかわ妖怪も組み易しと感じたのだろう

「任せるのだー!!」

大妖精を下がらせルーミアは飛び出し妖怪を蹴散らしていく

妖怪を粗方片付けた時だった

「!!待つのだー!!」

ルーミアが逃げ出した妖怪を追いかけて行き視界から消えていつてしまう

「ルーミアちゃん待ってー!!」

大妖精は取り残されてしまった

「こんには、死ね」

大妖精は目を閉じ持てる限りの弾幕を放った

ドウツ!!

弾幕を放った大妖精が目を開くと目の前から妖怪は居なくなっていた

「……やった! 奇跡かもしれないけどやったよチルノちゃん!」

妖怪を倒したと思った大妖精が笑顔で喜ぶ

「この調子で行くぞー!」

気分良く先に進む大妖精

その大妖精を上空から見守る3つのシルエットがあつた

「奇跡も魔法もあるのよ大妖精」

「魔法少女魔理沙ちゃん参上!」

微笑む二人の魔法使いと

「……僕と契約して魔法少女に……ってなんだこれ」

蓬来人だった

無縁塚

「うー……やっぱり怖いなあ」

大妖精は怖がっていた、無縁塚の独特な雰囲気がか何か出そうな気がしてしょうがないのだ

「あ、あれが結界だ！」

無縁塚の奥にある結界を発見し近寄った

「スゴいなあ……中に何かあるのかな？」

結界をまじまじと見つめる大妖精

結界の中は魔界に繋がっておりその魔界には魔帝が封印されている
その魔帝が復活し幻想郷を荒らすのだがそれはまだ先のお話

「あーそれより毒消し草だ！」

目的を思いだした大妖精は結界の更に奥にある場所を目指し進み始めた

「……今度こそ」

その大妖精を背後から狙う影が一つ

「……………こんにち……………ぶっ!」

影は襲い掛かる前に蹴り飛ばされる

「?」

声に振り向いた大妖精だが誰も居ない

「……………気のせい?」

そう呟いた大妖精は進んで行った

「奇跡も魔法もあると言ったな……………アレは嘘だ」

二人に合流した妹紅が微笑んだ

「嘘じゃねえよ、魔法はあるし奇跡も早苗が出来る……………幻想郷に住むくせにバカだろ妹

紅……………そう思うだろ?なあお母さん?」

「そうね、そこに異論は無いわ……………って誰がお母さんよ」

魔理沙とパチュリーが小馬鹿にする様に言った

「……………お前ら後で焼き土下座な」

妹紅が炎を燃え上がらせて怒る

「おい……………」

3人に妖怪が話しかける

「あーん？焼き土下座だあ？やれんのかお前によ？」

「焼き土下座なんて程度の低い事言っちゃって……せめて火炙りぐらい言ってみなさいよ」

「……お前から覚悟は出来てるんだろうな？」

妖怪は無視された

「お？お？やるのか？」

「勝ち目の無い勝負はするものじゃないわ」

「上等……！」

バチバチと睨み合う3人

「……おい!!」

妖怪が叫んだ

「「あ”あ”ッ!?!」」

3人が妖怪を睨み付ける

「お前らさつきから邪魔ばかりしやがって！落とし前つけてもらおうぜ！」

妖怪はさつきから大妖精を襲っていた妖怪だった
妖怪が合図をすると大量の妖怪が現れ3人を囲む

「降参するなら今の内だぞ?」

得意顔の妖怪が告げた瞬間だった

ゴゴゴゴゴゴ

3人の魔力と妖力が上がっていく

「何が邪魔だよ……邪魔なのはお前らだろうが!」

魔理沙、吼える

「あの子を襲おうとするなんて……トイレはすませたかしら? 神様にお祈りは? 部屋の隅でガタガタふるえて命乞いする心の準備は出来てるかしら?」

お母……パチュリー、睨む

「お前ら……誰の友達に手を出そうとしたかわかってるのか?」

妹紅、激昂

「!」

3人の怒りに一瞬たじろいだ妖怪だがすぐに命令を下した

「やっちまえ!!」

号令で妖怪達は3人に襲い掛かる

「行くぜー!!」

3人も魔理沙の合図で迎え撃った

「何か騒がしいなあ……まさかゾンビ!？」

遠くから聞こえる音に身震いした大妖精は奥へ急いだ

「おととい来やがれ！」

妖怪達を蹴散らした3人、妖怪達は3人に全く敵わず全滅させられていた

「まあこんな所か」

手に付いた汚れをパンパンと落としながら妹紅

「そうね……もう大丈夫でしょう、帰りましょうか」

パチュリーへの促しに妹紅は頷き帰ろうとするが

「なーんか違うような気がするぜ……」

魔理沙は違和感を感じ首を傾げる

「違うって何が？」

「いや、妖怪はこんな奴じゃなかった様な……」

思い出そうと頭を捻る

「早く戻らないとバレてしまうわ、急ぎましよう」

パチュリーに催促されて魔理沙は違和感を覚えながらも飛び立ち3人は紅魔館へと

帰って行った

永遠亭

「あら？」

居間にやってきた永琳が文文。新聞を見つけた
「無縁塚の奥地に凶悪な妖怪現れる……」

記事を見て眩き書いてある妖怪の特徴を読んだ

(単独妖怪……この特徴って……)

材料から永琳はある結論に辿り着いた

「妖精食い……」

妖精食い

妖精を主な主食とする妖怪、妖精は1回休みになると元となる自然の付近で復活するが妖精食いは特殊な術で復活場所を好きに移動させられる、この妖怪に捕らわれた妖精は最後、復活する毎に食べられる運命に堕ちる

(確か異世界から落ちて来た魔物が幻想郷に適応して妖怪と呼ばれる様になった者ね、元はトロルだったかしら)

(まあ食べられたからと言って私には関係無い事、あの子達がなんとかするでしょう) そこまで干渉する気の無い永琳は新聞を放ると診察室に戻って行った

無縁塚奥地・薬草の草原

「着いた！」

目的地に着いた大妖精

「どれかなあ？」

すぐに毒消し草を探し始める

「ん〜……無いなあ……」

薬草を掻き分けながら探す中々見つからない

「……あー」

少し離れた場所に目的の毒消し草を見つけた

「見つけた！」

急いで毒消し草へと飛ぶ大妖精

「あっ!？」

草に絡まり速度が落ちた

ブウン

大妖精の目の前を腕が通り過ぎた

「えっ……何……?！」

啞然とする大妖精は腕の先へ視線を送る

「ひっ!!」

全体を捉えた大妖精が飛び上がった、自分の5倍以上はあろうかという妖怪の巨体を見たからだ

「旨そうな妖精だ……」

妖怪は大妖精を見て舌を舐めずる

「わああああ!!」

恐怖を感じ一目散に逃げ出す大妖精

「逃がさん」

追い掛けた妖怪が叩こうと腕を振る

「きゃっ!?!」

避けようとしたが避けきれず肩に指が当たり大妖精は地面を転げる

「イタ……わっ!?!」

起き上がった大妖精は目前に迫る手を転がって避ける

「わわわ……」

そしてまた逃げる

何度か傷付きながらも逃亡を繰り返した大妖精だが逃げ切る事は出来ず岩壁に追いやられてしまった

「もう逃げ場は無い」

大妖精へと歩を進める妖怪、口からは涎が出ている

「嫌……」

食べられると直感した大妖精は顔を背ける

（ゴメンねチルノちゃん……やっぱ弱い私じゃダメだったよ……）

（明日……明日になったらお見舞い行くからね）

目の前の妖怪が復活場所を変えられるなど知らない大妖精は明日を思う
だが捕まったら最後、明日は妖怪の前など露知らず……

（!!）

チルノの事を思っていた大妖精は昔に二人で交わした会話を思い出す

「ゴメンねチルノちゃん……また助けて貰っちゃって……」

「大ちゃんは弱いんだからしょうがないよ！あたいが守ってあげるから大丈夫！」

「……チルノちゃんはこんな弱い私と居て楽しいの？」

「?……楽しいよ?なんで?」

「だって私チルノちゃんに守って貰ってばかりだし……」

「何言ってるのよ大ちゃん!あたい達友達じゃん!」

「!!」

「友達は助け合うものでしょ?大ちゃんが弱いならあたいが守る!それだけよ!」

「……うふふ」

「どしたの大ちゃん?」

「なんでもないよチルノちゃん!ありがとう!」

「変な大ちゃんだなあ」

「アハハハハ」

(そうだよね!友達は助け合うものなんだよねチルノちゃん!)

瞳に意思が溢れてくる

(チルノちゃんが苦しいなら助けるのは私の番だ!)

怯えは消えた

「私がやるんだ！チルノちゃんの……為に！」

傷付いた体を起き上がりさせ妖怪を睨んだ

「ええーい！」

弾幕を妖怪に撃ち込む

「抵抗するな！」

弾幕を受けた妖怪が捕まえようと腕を伸ばす

「やああっ!!」

腕を避けた大妖精が弾幕を撃ち続ける

「グブウ!!」

一転して攻撃を仕掛けて来た大妖精に妖怪は手に持つ棍棒を振り回す

「えいー！」

ギリギリで避けながら弾幕を当て続けるが徐々に回避の割合が多くなる、更に力の弱い大妖精の弾幕は効いてなかった

「うー……やああああっ!!」

このままでは駄目だと感じた大妖精は持てる力を全て弾幕に変えて放った

ゴツ

「あうっ!？」

弾幕を打ち払った棍棒の一撃が大妖精を打った

「い…………痛…………」

吹き飛ばされた大妖精は痛みで起き上がれなかった

「手間取らせてくれたな…………」

妖怪が大妖精を掴んだ

「ようやく食える」

口を開ける、涎がボトボトと下に落ちている

「ヤダー・ヤダーヤダ!!」

必死に抵抗するが振りほどけない

絶体絶命のピンチに恐怖がまた大妖精を支配する

「イヤ……………!!」

悲痛な絶叫が木霊する

ザンツ

「ぐあああああつ?!」

妖怪の絶叫が響いた

「誰の知り合いを食おうとしている……」

絶叫の後に静かに語る者が居た

「誰ダア!!」

腕を切り飛ばされた妖怪が睨み付ける

「今より死に行く貴様に名乗る名は無い……」

大妖精を抱き抱える者は冷たく睨み返した

「ウガアアアアアアア!!」

妖怪は棍棒を振りかざし痛恨の一撃を放った

「フン……」

鼻を鳴らすと現れた者は片手に大妖精を抱えもう片方の手を手刀に構え魔力を込める

手刀に炎が宿る

「フェニックスエンド!!」

放たれた炎刀は棍棒を無かった様に切り裂き妖怪を両断した

「ギヤアアアア!」

両断された妖怪は燃え上がり瞬時に燃え尽きた

(魔法剣を真似てはみたが……)

威力の高さを実感するが気分は良くない

(やはりダイやバランの真似など性に合わない)

新たな技は封印され二度と使われる事は無かった

「……」

現れた者は大妖精を寝かせ回復呪文を唱える

「見事だったぞ」

そう告げた後、現れた者は魔力の残光を残し消えていった

「うーん……」

目を覚ました大妖精は辺りを見回す

「あれ？ 妖怪はどこに行っただんでしよう？」

起き上がり更に見回すが誰も居ない

（居ないなあ……それに体があんまり痛くない……）

体の調子を確かめる大妖精は目的に気付く

「そうだ！ 毒消し草だ！」

すぐに毒消し草の生えている場所に向かい遂に手に入れる

「やったよチルノちゃん！ すぐ行くからね！」

達成感に笑う大妖精は永遠亭へと飛んで行った

紅魔館・図書館

「ただいま帰りました！」

「おかえり大妖精」

帰ってきた大妖精を皆が迎える

「作って貰えました！」

薬を掲げて大妖精が満面の笑みを見せる

「やったな大妖精、早く飲ませてやんな」

「ハイッ！」

妹紅に促されチルノに早速薬を飲ませる

「あたいふっかーっ!!」

「早っ!？」

飲んだ瞬間に快復したチルノに皆は笑った

そんな穏やかな雰囲気の中、大妖精が3人に言いだした

「妹紅さん、魔理沙さん、パチュリーさん、助けてくれてありがとうございます！」

突然の感謝の言葉に目を白黒させる3人

「気付いてたのか……」

魔理沙が照れ臭そうに鼻を搔く

「勿論ですよ！私があの変な妖怪を倒せる訳ないじゃないですか！それに3人共服が汚れてますよ！」

「……アハハ、これは気付かなかったな」

3人は暴れた事で服がかなり汚れていた

それを指摘された妹紅は苦笑する

「ごめんなさいね、心配だったの」

「いえ！嬉しかったです！」

大妖精の笑顔にパチュリーは微笑んだ

そして3人に改めて礼を言うと大妖精はバーンの元に向かった

「ありがとうございますバーンさん！」

「……何の話だ？」

魔導書を読みしらばつくくれるバーン

「わかつてますよ私は！助けてくれたんですよね！」

「知らんな」

否定するバーン

「あ、バーン……どこ行つてたの？」

そこにフラン起きて来る

「……どこにも行つておらん」

「えー！あたしが1回起きた時居なかったよー！嘘つきー！」

「知らんな」

フランの指摘に表情を変えず否定するバーン

「……」

ガシッ

「どうした大妖精？」

いきなり抱きついてきた大妖精にバーンは視線を送る

「うふふ……何でもないですバーンさん♪」

「可笑しな奴よ……」

大妖精を見つめてバーンは微笑んだ

(やっぱりバーンさんは優しいなあ)

追想を終えた大妖精は改めてバーンを想う

(次は皆で冒険したいなあ)

そんな事を考えながら編み物は進む

「ハイ！次はチルノちゃんの番だよ！」

まだ異変が起きていなかった紅魔館の一時

妖精が体験した小さな大冒険

妖精はまた冒険をしたいと心から願う

しかしその願いは限りなく薄い望みだとはまだこの時は知るよしも無かった……

第40話 運命

3日前

バーン最後の宴が終わり皆が寝静まった後、レミリアはふと目が覚め館内を歩いていった

(良い気分ね……)

楽しい時間を過ごしたレミリアは酔いも手伝いとても良い気分でバルコニーに向かっていた

(バーンが居たら申し込んでみようかしら……)

期待と少しの不安を感じながらバルコニーを目指す

(いたいた……あら?)

バルコニーに居るバーンを遠目に見つけたレミリアは違和感に気付く

(誰かと話してる?)

バーンは誰かと話している様だった、内容は聞き取れないが話しているのは間違いなさそうだ

(いったい何を……)

気になったレミリアは物音を立てない様に宙に浮き、気取られぬ様に近付いて行った

「よい……お前のお陰で楽しき時を過ごせた」

レミリアの耳にバーンの声が入る

（話してるのは永琳と……紫ね、何の話かしら？宴の話？）

気取られないギリギリの距離で様子を窺う

レミリアが更に聞き耳を立てたその時だった

「呪いを受けた余がまだ生きている……これも余の運命か……」

（え……）

聞いてしまったレミリアは驚く、まだ全容は理解出来ないが呪いを受けている、それだけはわかった

「私ではその強過ぎる呪いは解呪出来ない……本来6日で死ぬ呪いを出来る限り引き延ばすしか……」

(嘘……)

次に聞いた言葉がレミリアに全てを理解させた

バーンは死ぬ運命だった、引き延ばすと言う事は死ぬ運命には変わりないという事を
(そんな……そんな事って……)

信じられない

せつかくムンドウスを封印してバーンも起こしてこれからだという時に聞かされた
バーンの死

信じられる訳がなかった

「余は成す為に生き長らえていたのだ……友を作り、守る為に……それが成せたから死ぬのだ……余を人とするなら……な」

(バーン……)

だがバーンの口から語られる死を含む言葉にレミリアは信じざるを得なかった

「……自分の体だ、言われずともわかる」

「後……4日だ」

(……4日)

そして知った呪いの期限、それを知ったレミアアにある考えが芽生えはじめていた

「このまま残る余生を幻想郷で過ごしあやつらに遺恨だけを残し死ぬか、今の内に幻想郷を去りあやつらが何も知らぬ内に死ぬかを……な……」

(自分が死ぬって時まで……私達の事を……)

バーンの想いを知ったレミアアの目からはいつの間にか涙が流れていた

「これがその時……その時が来るまで……余は幻想郷に居よう」

(なら……まだ4日……)

バーンの選択に僅かな可能性を見る

「あやつらには……黙っておけ」

(……)

また涙が頬を伝う

二人がバーンの前から去った後、紫と同じくバーンを見たレミリアは決意した

(死なせない……絶対に貴方を救ってみせる！待ってなさいバーン！私が必ず運命を変えてみせる!!)

バーンの呪いを解く事を決意したレミリアはバーンに気付かれぬ様静かにその場を離れた

紅魔館・図書館

「……違う」

本を読むレミリアが呟いた

「こんなのじゃバーンの呪いは解けない!!」

本を叩きつけた

(ダメ……死の呪いはある種の運命決定、生半可な事じゃ解けない)

他の方法を探そうとしたレミリアは乱雑に放られた本を見てバーンの言葉を思い出
す

(黙っておけ……か)

知られるのをギリギリまで避けるバーンの言葉を思いだし本を片付ける

この時に小悪魔に見られていたがレミリアは気付いていない

「ん……う？」

片付けが終わり図書館を出ようとしたレミリアの目に気になる背表紙が見えた

(神々の遺産……)

それを見たレミリアはもしかしてと思った、神の残した物なら、神の力なら何かある
のではないかと感じたからだ

本を手に取りページを捲る

「違う……違う……」

「!!」

ある項目で手は止まった

(破邪の秘法……)

その項目を読んでみる

(これなら解呪の呪文と組み合わせればもしかして……)

効果に僅かな希望を見たが確実とは言えない

だからレミリアは破邪の秘法を一旦頭の隅に置き、まず一番一緒に居れる可能性が高
そうな方法を確認しに行った

次の日・白玉楼

「幽々子、聞きたい事があるわ」

既に帰っていた幽々子を朝一番に訪ねていた

「魔族って幽霊になれるの？」

聞いたのは魔族が幽霊になれるかどうか、魔族とは勿論バーンの事

「ふあく……何よお朝から……」

無理矢理起こされた幽々子は少し不機嫌気味だ

「いいから答えて！」

レミリアの怒声、余裕など無かった

「……魔族だってなれるわよ、生前に強い想いを持っていればね」

鬼気迫るレミリアの表情に気圧された幽々子は話しだした

まだこの時はバーンの死は感じれていないので幽々子には質問の意図がわからない

「そう……」

レミリアの表情が緩んだ

(ならばバーンさえ強く生きたいと願えば幽霊になって一緒に……！)

希望が現実味を帯びてきた

だが希望は幽々子の一言で脆く崩れ去る

「異世界の魔族なんかだと無理だけど……」

「!?」

幽々子の悪気の無い一言はレミリアを落胆させるには充分だった

「そう……ありがと……この事はバーンには黙っておいてね」

悲しくそう言うのとレミリアはすぐに白玉楼を出ていった

「わかったけど……何だったのかしら……?」

幽々子は眠気も相まり深く考えるのを止めた

守矢神社

「神奈子！」

次にやって来たのは守矢神社、その前に一度紅魔館に戻り日焼け止めなどの準備をしている時にフランから食事の事は聞いた、友人を無下には出来ないレミリアは更に時間が無くなったと思いうう日が出ているが準備を止め体のダメージなど気にする事なく急いでやって来ていた

「……バーンの事ね」

神奈子はレミリアの様子にすぐに察した、バーンの呪いの事だと

「そうよ、何故黙ってたの？」

神奈子にバーンを起こす様に頼んだ友、レミリアもその内の一人、呪いの事を黙っていた神奈子が許せなかった

「……」

神奈子は押し黙る、弁解などするつもりは彼女には無かった、責めは覚悟していた
「……まあ良いわ、貴方の気持ちはわかる、それより……」

自分達の事を想っての事だとわかっているレミリアは許せなかったが責めるのは止

める、そんな事より優先する事があるから

「破邪の秘法……どうすれば契約出来るの？」

「……無理よ」

「なんで!？」

神奈子の答えに息を荒げさせる

「確かに破邪の秘法なら私や早苗達と組み合わせれば半日もあれば解呪は出来る、例え間に合わなくてもシヤナクと言う解呪呪文と組み合わせれば死ぬ事はないわ」

呪いを解く事は可能だと告げる

「でも……」

しかし

「無理よ」

可能性は否定される

「だからなんで!!」

更に声を荒げるレミリア、そのレミリアに神奈子は渋々と語り始めた

「神の遺産って言うのは文字通り神が遺した物、でもそれはその世界の神がその世界にのみ許した物なの……ここまで言えばわかるでしょう？」

「……私、いえ私達幻想郷の者では契約出来ないって言いたいなの？」

「そう、道具や既に修得している者が幻想郷に来る分には問題は無い、だけど私達幻想郷の者が異世界の神の遺産を契約する事は出来ないの」

「……………どうやっても?」

「無理よ、神である私でさえその理には干渉出来ない、簡単に干渉出来るなら世界の法則なんてとつくに乱れているし私も迷い無く破邪の秘法を得ているわ」

「……………」

不可能を聞かされたレミリアは黙する

(……………でも今はこれしか…………… 縫れないのよ!!)

決意は完全に決まる

「神奈子……………紫を呼んで」

「何をするつもり?」

「決まってるわ……………破邪の秘法を契約しに向かうのよ」

「無理よ……………諦めなさい」

「いいから早く呼びなさい!!」

神奈子へ怒鳴りつける、最早レミリアに余裕など全く無かった

無理だと告げられても

諦めろと言われても

その決意は折れなかった

バーンを救いたい……

それを成就させる為に不可能だと言われた道を進む事を決めたレミリア

もうそれしか方法が無いから

無理でも行かなければならない

バーンを想うが故に奇跡を信じて向かう

「……わかったわ」

レミリアの折れぬ心に神奈子は承諾する

そして神気を飛ばし紫に呼び掛けた

「……何かしら?」

呼び掛けに応えた紫が姿を現す、紫はレミリアを一瞥し様子を見るとすぐにバーンの事だと察した

「私を破邪の秘法がある世界へ連れて行きなさい」

「……それを彼が望むとでも？」

紫の論す言葉、バーンの想いを知る紫だからこそレミリアの行おうとする行為がバーンの望む事では無いと知っているからこそ掛けた制止の言葉

「そんな事は関係無い!!私がバーンを助けたいから行くのよ!!バーンの意思是関係無い!!」

だがレミリアは止まらない、既に諦める事は諦めていた

(バーンが想う様に彼女もまたバーンを……)

レミリアの想いを受けた紫は目を閉じ考え込む

(……断れば私を殺しかねない目をしている……そこまでバーンの事を……想いの高は同じ……しようがないわね)

そう思うと紫はスキマを開いた

「貴方の意思を尊重しましょう……神奈子、どこの世界か教えなさい」

「……最後に確認しておくわ、破邪の秘法は破邪の洞窟と呼ばれる場所の地下150階

にあるの、その世界の實力者でさえ150階に辿り着くのに3ヶ月掛かっている、それでも行くの?」

神奈子の聞いた内容は要約すれば絶対に間に合わないと言う事だ、レミリアがいくら強くても残りの日数で辿り着き契約して帰ってくるのは不可能だと言ったのだ

「いいからさっさと教えなさい!下らない御託を並べてないで早く!!」

また怒鳴る、時間が無いなど百も承知している、今さらそんな事を言われてもレミリアは止める気など毛頭無い

「……良いでしょう」

観念した神奈子はスキマへ標の光を放つ

「これに着いて行けば破邪の洞窟の前まで行けるわ、あそこは邪気が強過ぎてスキマスら拒絶する場所なの、自力で行くしか無い」

「わかったわ……ありがと神奈子、紫」

道が拓けた事でようやく落ち着いたレミリアは二人に礼を言う

「……気を付けてな」

神奈子の見送りを受けたレミリアに紫が話し掛ける

「もし貴方が間に合わず洞窟の中に居たままだと迎えにも行けないから仕掛けをしておきましよう……今から3日後の正午、夕暮れがリミットよ、わかったかしら?」

「……………わかったわ」

それを最後にレミリアはスキマへと足を踏み入れ標に導かれバーンの居た世界へとやっ来て、破邪の洞窟に入ったのだ

そして今に到る

「ふぎけんな!!」

青年が怒鳴った

「ふぎけてなどいらない……余り私を侮辱するなら命は無いぞ小僧」

青年の怒りを受けたレミリアが不機嫌に睨み返す

「うるせえ! バーンが……あの大魔王バーンが生きてる訳ない……!!」

レミリアの睨みに怯まず青年は怒鳴り返す

「生きてる訳ないんだ!!」

傍の女性の制止を振り払いレミリアに詰め寄る青年

「嘘だつて言えよ!」

掴みかかる青年、レミリアは振り払おうとしたが青年の手の震えに気付きそれを止める

「これじゃあ……何の為にあいつが居なくなつたのかわかんねえじゃねえか……」

「……」

青年の言葉に宿る悲痛な想いを感じたレミリアは暫し青年を見つめた後、口を開いた
「貴方……名は？」

突然の問いに一瞬戸惑った青年だがすぐに気を取り直し告げる

「……ポップだ」

「そう、ポップ……貴方達とそのあいっつて奴がバーンを倒したのね、他の方の名は？」
レミリアの問いに他の3人は名を告げる、先生と呼ばれるのがアバン、二人の女性は
マアムとメルルと言った

「……それでもう一度聞かせてくれないか？」

口調の変化と少しの友好的な態度に怒気が下がり冷静さを取り戻したポップと名乗
る青年はレミリアに問う、今最も気になる事を

「バーンが生きてるってのは本当なのか？」

「本当よ、バーンは生きている……この世界ではなく私の住む異世界……幻想郷で」
「やっぱり嘘じゃないのかよ……」

再度答えられたバーンの生存に深く溜め息を吐くポップ、本来なら焦るべき事態な
に焦らなかつたのはこの半年間にバーンが現れなかつたのとレミリアの存在があつた
から

「何があつたか聞かせてくれ、この半年の間に生きていたバーンに何があつたかを……」

ポップは冷静に現状を理解する事にした、ここで混乱しても何も意味は無いと考えたからだ

「……失礼だけど貴方ってお気楽でバカに見えたのに意外にクールね……見直したわ」
「……いいから話してくれ」

レミリアの小馬鹿にした言葉を流したポップは促す

「良いでしょう……」

そしてレミリアの語りは始まった

「……これで全てよ」

「「……」」

全てを語り終えたレミリアは感想を聞こうと4人を見るが皆言葉が出なかった

(信じられないぜ……あのバーンが……)

ポップは苦い顔で下を向く

(友人を作って……)

マアムは驚きを隠せない

(その友人の為に戦って……)

メルルも複雑な表情で顔をしかめている

(友を……幻想郷を……世界を守ったのですか……)

アバンは静かに目を閉じている

とてもではないが到底信じられなかった

あのバーンが

人間を最低と罵り皆殺しにしようとしたあのバーンが

他人に迎合する事無く、配下にすら心を開かなかったあのバーンが

友を守る為に戦い

友の為に小さき世界を救い

今、死の淵に居るなどと

「……間違いないんですね？」

最初に口を開いたのはマアム、まだ信じられない思いが強い

「信じる信じないは貴方達の自由……でもこの私、レミリア・スカーレットの誇りに懸けて嘘は言っていないと断言するわ」

真つ直ぐにマアムを見つめるその瞳はマアムを信じさせるには充分だった

「いつそ……あなたの作り話だったら良かったよ……」

肩を震わせ喋ったのはポップ

「作り話じゃないわ」

「わかっている！」

レミリアの否定に声を荒げた

「わかっているだよ……！……あなたは嘘をついていないって……だから……どう考えたら良いかわかんねえんだよ!!」

「バーンが生きてるだけだったらおれが倒しに行くさ！でもバーンはただ生きてるだけじゃなくてあなたを、あなたの世界を救った……バーンがやった事はおれ達……ダイがやった事と同じ……」

「それで今呪いで死にそうだなんて言われて……」

「どうしたら良いんだよおれは!?!全部かなぐり捨ててまで倒したダイの想いを汲んでトドメを刺すべきなのか！知らない顔して死ぬのを待つのか！それとも……」

「バーンを……助けるべきなのか……!!」

ポップは葛藤していた

バーンの幻想郷での所業、それは自分の知るバーンとは全く異なる物

その強大な力を守る為に使ったバーンにポップは勇者と同じ心を感じた

だからこそ葛藤した

それはかつてある漢に感じた感情と似た物を感じたから

「ポップ……」

「ポップさん……」

マアムもメルルもポップの心情の吐露に掛ける言葉が無い、ポップと違い二人は漢との間にそこまでの感情が無かったから

「私にとっては過去のバーンはどうでも良いの、私は大魔王じゃ無い、今の……位を捨てて、何者でもなくなったバーンを救いたいから来た、それだけよ」

レミリアに再度告げられた目的に誰も喋らない

その言い様の無い空気が漂う中、ずっと黙したまま話を聞いていたアバンが口を開いた

「ポップ……」

静かに語り始めたアバンに皆は注目する

「貴方の気持ちはわかります、私とて今だ複雑な思いでいるのですから……」

「あのバーンが誰かを守る為に戦った……にわかには信じられない話です……」
「ですがレミリアさんの目が……想いが真実だと私に思わせるのです……」

レミリアに目をやるアバンは更に続ける

「確かに彼は私達と存亡を賭けて戦いました、そして倒したと思っていた彼は生きていた、力は抑えられていましたが……」

「それでも強大な力を持つなら私達の世界に戻り復讐する事だつて出来た筈です、でも彼はそれをしなかった、そしてレミリアさん達と出会い……変わったのでしよう」

ポップ達に目を向ける

「彼のこの世界で行った事は許す事は出来ません、ですが今の彼は違う……大魔王は死に、バーンとして生き、バーンとして死のうとしている……話を聞く限りもうこの世界には現れないでしょう、ですから……」

アバンは少しの間を置いて告げた

「彼を……バーンを助けてあげませんか？」

博麗神社

「……………」

縁側で霊夢は目を覚ました

「起きたか霊夢」

「バーン……………」

傍に居るバーンを見ながら起き上がった霊夢は周囲を見回す、もう陽が沈む頃だった
「手荒な真似をした事を詫びよう……………すまなかつた霊夢」

謝罪に周囲を見回していた霊夢はバーンに向き直す

「別に良いわ謝らなくて、博麗大結界に異常は無いから」

そう言うのと立ち上がり

「時間はまだあるの？」

「少しならな」

バーンに聞いた後

「ちよつと待ってなさい」

台所へと向かった

「はいお茶」

湯呑みをバーンに渡すと隣に座る

「それで？」

霊夢は問う、理由を

「余は明日死ぬ、だから出来る限りの事をしておきたかったのだ」

「死ぬ……？あんたが？」

聞かされた死に霊夢は驚きはしたがバーンの諦めた瞳に追求を止めて聞きたかった事を聞いた

「結界で何をしていたの?……悪意が無いのはわかってるけど一応ね」

「少しばかり細工をな、何、心配するな、結界に悪影響を与える類いでは無い」

「わかっているわよ、そうでなきゃ許す訳ないじゃない、本来ならあんた死刑よ?」

霊夢の言う通り博麗大結界に干渉する事は重罪にあたる、何故なら博麗大結界は幻想郷の要だからだ、だから定められた者以外は余程の事がない限り入る事すら許されない、破れば死罪、良くて幻想郷外へ追放

それ程大事な物なのだ、なのに霊夢が怒らないのは相手がバーンだったから

「あんただだから許すのよ?あんたなら私は許す、他は知らないけどね……建前上は止めさせてもらったけどあんたを止めれる訳ないし」

霊夢はバーンなら大丈夫だと思っていた、明確な理由がある訳ではないが霊夢の心が大丈夫だと感じていたから怒らないし許した

「それで何の細工をしたの?」

「これから先の幻想郷の為……とだけ言っておこう」

「何よそれ……」

ぼかす言い方に不貞腐れてお茶を啜る

「願わくばそんな事態にならない事を祈っている、何度持つかわからんから……」

同じくお茶を飲む

「霊夢……これをやろう」

懐から取り出した小さい棒状の者を渡す

「髪留め？……なんか邪気が凄いけど……」

渡された髪留めを渋く睨む

「それには一種の呪いが込められている、着ければお前の霊力と身体能力に負荷を掛ける呪いがな、それを着けて生活すればお前の力は自然と高まる」

「要らないわよこんな物……私は修行なんてかつたるいからしないのよ」

髪留めを返そう差し出した霊夢をバーンは睨みつけた

「自惚れるなよ霊夢……」

その怒りを含む言葉に霊夢は圧倒されてたじろいでしまった

「それでもお前は幻想郷を守る博麗の巫女か！持ち前のセンスに頼るのもいい加減にしろ！」

「自惚れてなんかいいわ！私は修行なんてしなくても大丈夫なのよ！」

バーンの怒声に気の強い霊夢も返す

「それが自惚れていると言うのだ!!」

更なる怒声が霊夢を黙らせた

「お前がムンドウスとの戦いで死にかけたのは何故だ!?力が足らなかつたからだろうか

！

「ッ!？」

バーンの指摘に顔をしかめた霊夢は精一杯の反論を返した

「……それを言うならあんたもでしようが」

「そうだ、余も含めあの場の者は力が足らなかつた……だがあやつらは強く有る為に研鑽を怠らなかつた！お前と違って！」

反論はバーンに即座に一蹴される

「研鑽の結果の敗北ならまだ許せよう……だが元からあつた力に胡座を搔いているお前に余等を非難する資格は無い！」

「……」

霊夢はこれ以上の反論が出せなかつた

強くなろうとしていた仲間らに比べて自分は元から持つていた強い力の為に修行をしてこなかつた、今までの異変はそれで充分事足りたからだ

だがバーンの言う通り今回の異変は違つた、自分の力など全く通じず死にかけた

「そうね、あんたの……言う通りよ」

それでも霊夢が修行をしようとしなかつたのはバーンの存在だった

自分が頑張らなくてもバーンが居れば大丈夫、そんな他人任せな考えが霊夢に修行を

するという行為を行わせなかった

「自覚が足りなかつたわ……博麗の巫女としての自覚が……あんたの死を聞いても私が強くなって代わりに守ろうって気持ちがあつた、甘えてたのね……自分の力に……あんたに……」

自分が如何に甘く、自惚れていたかを悟る

「ありがとバーン……お陰で目が覚めたわ」

礼を言うと手に持つ髪留めを着けた

「……うっ!?……ツウ!？」

呪いが発動し顔を歪める

「……これで良い?」

苦しみながらも微笑んで見せた

「もうお前に心配は無い、これからの幻想郷は任せたぞ霊夢」

「任せときなさい!」

バーンの微笑みに力強く返した

「そろそろ時間だ……さくらばだ霊夢」

「時間って……何の?」

死は明日、まだ猶予があるのに時間と言うバーンが霊夢にはわからなかった

「約束があるのだ……」

沈む間際の太陽を眺めながらバーンは言った、無表情だが嬉しさが滲んでいるのを霊夢は感じる

「そう……楽しんで来なさい」

霊夢は何故かすぐにわかった、約束とは7人の友の事だと、最後を共に過ごすのだと直感し、精一杯の笑顔と言葉で見送る事にした

飛んでいくバーンを見ながら霊夢は博麗の巫女として幻想郷を守るのだと心に誓った

カール王国

バーンを助ける

アバンから告げられた言葉に場はざわめいていた

「ですが先生……！」

マアムは意見しようとするが口ごもる、彼女もまた葛藤していた

「わ、私は反対です！あれだけ人間を殺したバーンを異世界を救ったからと言って私は許す事は出来ません」

メルルは反対だった

「これで賛成が1、反対が1、保留が1ですね、ポップはどうですか？」
「……」

ポップは悩んでいた、ダイを汲むのかバーンを汲んでやるのかそれともいつそ知らない顔をするのかを

「ポップ……貴方はもう答えを出しているんじゃないですか？」

そんなポップにアバンは告げる

「……」

黙るポップにアバンは心を読んだように話しだした

「貴方の選択肢にバーンを助けるとあつた時点で答えは決まっていた、そうでしょう？
貴方はバーンに……」

「ハドラーと同じ思いを持つてしまったから……」

ハドラーへポップが持つていた思い、それは仲間意識

ハドラーが誇りを賭け、仲間と協力し、努力して、正々堂々と戦う為に必死に頑張りぬいて……

その姿にポップはハドラーを自分達と同じだと感じ他人とは思えなくなった

今のバーンに対する感情はハドラーへ向けた物と同じなんだとアバンは言ったのだ
「……やっぱ先生には敵わねえな」

ポップは苦笑した

「そうだよ先生……先生の言う通りおれはバーンにハドラーと同じ思いを持つちまつて
る……二人には悪いけどさ」

マアムとメルルに謝るとポップは二人に告げた

「おれはバーンを助けたい、でもこれはおれの勝手な行動だ、だから二人が嫌なら止めてくれて構わない！」

ポツプの宣言を受けた二人は驚き、複雑な顔をしながらも答えた

「好きにしなさいよ、私だつて迷つたけど今のバーンなら助けてあげたいし……」

「ポツプさんがそう言うなら……」

二人の了承にポツプは笑うとレミリアに向いた

「これが答えだ、助けてやるよバーンをさ」

レミリアに誇らしげに語るポツプ、だがレミリアの表情は変わらない

「茶番が終わつたのは良いけど、助ける方法は？まさか助けたいだけなんてオチはないでしょうね？」

「……やっぱ口が悪いなこの吸血鬼のお嬢ちゃんは……まあいい！アバン先生なら……」

ポツプが口にしようとした瞬間だった

ブウン

レミリアの回りをスキマが覆う

「なんだ!？」

身構える4人だがレミリアだけは悟った顔をしていた

「時間切れね……」

レミリアはすぐにわかった、これは紫の仕掛け、時間が来ればスキマがレミリアを強制的に送り返す仕掛けなのだ

「待ちなさい!!」

すぐに悟ったアバンが叫び、懐から金色の羽を取り出し投げた

「じゃあね……バーンの事は任せて……」

ブウン……

スキマが閉じきりレミリアはこの世界から消えた

(間に合わなかったか……)

アバンは悔しくレミリアの居た場所を睨み付ける

レミリアの居た場所には黄金の羽が静かに床に刺さっていた

「先生!」

ポップが詰め寄る

「……帰ってしまったのでしよう、彼女の世界、幻想郷に……」

眩きながら床に刺さる羽に歩む

「この破邪の秘法を……救う手段を知らずに……」

レミリアの消えた後を眺める4人はもう自分達ではバーンを救う事が出来ないのだと

レミリアに任せるしかないのだと

顔を伏せるしかなかった

幻想郷・無縁塚

「……」

そこに立ち尽くすのはレミリア、戻って来た、夜を迎えた幻想郷に

(あの人間……ポップは何か手が有る様な事を言いかけた……そしてアバンは何かを渡そうとしていた……)

ポップの最後の言葉とアバンの行動を思い出す、それに何かを感じていれば運命は変わったかもしれない

(……無理ね、少々の事で死の呪いは解けない……あいつ等が破邪の秘法でも持つてない限りは……)

しかしレミリアは感じなかった、その訳はレミリアの持つ誇りのせい、人間を下に見る彼女は人間では役に立たないと思ってしまうのだ

それは運命の悪戯

バーンを救える者はレミリアの前に確かに居た

しかしそれを手に出来なかった

運命を変えようとしたレミリアを嘲笑うかの様な

悲しき運命の擦れ違い……

「ふう……」

息を吐いたレミリアは宙に浮かぶ

(もう残されたのはこれしか……)

約束の場所に向かうレミリアはある手段を行う事を決める
(貴方が命を賭して私達を守ったのなら……次は私の番……)

確固たる決意を内に秘めレミリアは向かう

バーンとの時間を最後にしない為に……

第41話
前夜

最後かもしれないでしょ……？

だから……

全部伝えておきたいの……

人間の里

(……人が居らん)

里の前に降り立ったバーンは視界に映る景色に人間が居ない事に気付いた
(何故だ?)

里の中に入るも人は居ない

（何かあったのか？）

考えられるのは妖怪の襲撃、だが戦闘の形跡は無い

（……あやつらは！）

不審な里の様子に歩みは早くなる、バーンは友との約束の場所へ急いだ

「!!」

約束の場所が見えたと同時にそれらは見えた

（集まっていたのか……）

人間の姿を

（今日は祭だったか……？）

一先ず安心して大勢が集まる場所に近付いて行く

「あー！バーンだ！」

集まった人混みの中の一人がバーンに気付き声を上げる

「本当だ！」「来たぞ！」

「おおバーン！」「早く早く！」

バーンを視認した者達がバーンを囲む

(な、なんだ!?)

その光景に思わずたじろぐバーンを他所に人々は次々とバーンの周囲に集まってい

く
「ありがとうバーン!!」

誰かが言った

「幻想郷を守ってくれてありがとう!!」

次々と浴びせられる感謝の言葉

(この人間達は余に……感謝しているのか……?)

バーンは不思議だった、何故自分がここまでの感謝をされるのかわからなかったのはバーンにその気が無かったから

「すまないバーン、驚かせてしまったな」

人混みを掻き分けて現れたのは慧音

「なんだこれは？」

バーンの問いに慧音は呆れながら話した

「なんだバーン、自覚がなかったのか……お前は幻想郷の救世主なんだぞ？」

「余が……救世主だと？」

慧音の答えをバーンはまだ信じていない

「お前は幻想郷を救ったんだ、だから里の皆はお前に感謝している」

「……そんなつもりは無い」

「お前にそのつもりが無かろうと結果は幻想郷を救ったんだ、受け入れるしか無いぞ？」

大魔王は幻想郷の救世主だと

「……」

慧音の言葉にバーンは黙り、周囲を見回す

ありがとう！

ありがとうございます！

ありがとう……！

止まない感謝の言葉

(まさか余が勇者の様に扱われるとはな……だが不思議と嫌悪は無い……)

初めての……

初めて受けた純粹な心からの感謝

軍を率いていた頃は畏怖と上辺だけの感謝だった

言葉は有れど心は無かった

いつも感謝の中には黒い感情が籠っていた

利用や機嫌を伺うだけの感謝

だが今のは違う

本当に心から感謝の気持ち伝わる

打算も計略も無い

真に感謝する心を……

(しかしこれでは……)

その様子にバーンは諦める

「あ、あの……!!」

幼い少女がバーンの前に立った

少女は勇気を振り絞りその手を差し出す

「握手……してください!!」

精一杯の声で叫んだ

「……」

少女を見るバーンは動かない

（余の旅は失敗に終わったか……これでは……）

スツ……

少女の手に自分の手を重ねる

（これでは余の痕跡を残すだけではないか……）

少女の手を握りながらバーンは旅の失敗を悟り

微笑んだ

「時間を取らせて悪かった、妹紅に今日来ると聞いたから里の皆に知らせたんだ」
里の人間が帰った後に残った慧音がバーンに微笑む

「よい……お前は妹紅の友……上白沢慧音だったな？」

「そうだ、お前は妹紅の友人だから私にとつても友人みたいなものだ」

「そうか……一応礼は言っておこう、余計な事をした礼をな……」

バーンの言葉に一瞬キョトンとした慧音だがすぐに微笑んだ

「……その割には嬉しそうな顔だぞ？」

「フン……戯言を……」

顔は笑っていた、人間を蔑んだ頃が嘘の様に

「おっと！あいつらを待たせたままだな」

思い出した慧音が道を譲る

「行って来い、お前の到着を心待ちにしているぞ？」

「…………さらばだ」

店に入るバーンを見送った慧音は首を傾げていた

(さらば…………？そこはわかった！とかだろ？)

去り際の言葉が気になったが

(まあ気にする事無いだろう！)

考えるのを止め

(…………良い事をしたな)

満足に家路を歩いて行った

「来たよ！バーンが!!」

姿を見つけたフランが席を立った

「遅いわよ!!」

続いてチルノ

「バーンさんこつちです！早く早く!!」

大妖精が手招きする

(ようやく……ようやくか……)

その光景に堪えきれない歓喜を感じる

これに比べれば今まで行った仲間との時間が取るに足らないとさえ感じる程に

「待たせた様だな」

会いたかった

「用は済んだの？」

食前酒を出しながらパチユリー

「ああ、済んだ」

「そう……良かった」

席に座る

「嬉しそうだなバーン？」

頬杖をついた妹紅がニヤけている

「フツ……お前程では無い」

「ハツ……言つてろ」

互いに笑う

「そんで？何してたんだぜ？」

魔理沙が尋ねる

「そうだな……余が思うままに旅をしていた……と言つた所か」

「なんだそりゃ……」

苦笑に微笑む

一通りの会話をを行った後、バーンは最初から気になっていた事を聞いた

「レミリアはどうした？」

一人の友の不在を

「もう来るんじゃないか？レミリアもなんかしてみたいだしな」

「そうか」

一先ずは来る事に安心する

「私達を待たせるなんてふてえ奴だぜ！」

「まあまあ魔理沙さん」

「お腹が空いてるからって摘まみ食いはダメよ魔理沙？」

「えっ!? まだ食べちゃダメだったの!? あたいもう食べちゃったよ?」

「ダメに決まってるだろ親分……」

「あたしも食べちゃった……」

「お前もかフラン……」

和やかな食卓

「フツ……」

自然と笑みが浮かんだ

「あ、レミリアで思い出したけどあいつ恐ろしい本を読んだみたいだぜバーン」

不意に魔理沙が話した

「恐ろしい本……?」

「ああ、使う気なのかはわかんないけどあいつのろ……」

その瞬間だった

「待たせたみたいね」

レミリアが現れた

「あーレミリア……さ……ん……?」

声を出した大妖精はレミリアの異変に気付きトーンが下がり、他の者もそれに気付き席から立った

「レミィー! その服は!? 何があつたの!？」

パチュリーが詰め寄る

慌てたのはレミリアの服のせいだった、至る所が破れており全てが血に染まっていたから

「大丈夫よパチエ……少し冒険してきただけだから……不思議なダンジョンをね」
「もう……心配させないでよ」

血の割には元気なレミリアに安心したパチュリーは魔法を使い服を修復する

「破けた箇所は塞いだわ、ダメよレミィ、あまりはしたない格好で来ちゃ」

「ありがとパチエ、たまには私の高貴な肌を見せるのも良いと思つただけどね」

そう言いながらバーンの隣に座った

(!? ……この匂い……この魔力は……!)

レミリアから感じる匂いと魔力の残滓にバーンは反応した

「どうしたの？」

「いや……何でもない」

だがレミリアの何も言わないでと語る瞳に追求を止める

「おっし！レミリアも来たし始めるか！」

開始の言葉と共に乾杯し食事は始まった

友との最後の晩餐が……

「おい！それは私のだろ！」

「へっへーん！名前書いて無いんだから知ーらない！」

「食べ物に書けるか!!」

「ほら、口に付いてるわ」

「ありがとうございますお母さん！」

「だから違うって言ってるのに……」

「食べさせてあげる！口あけて！」

「しようがないな……あーん」

「美味しい？」「うん！美味しいな！」

（これが……そうこれが……）

穏やかな表情のまま皆を見つめる

（余の太陽達……）

それはバーンに与えられた太陽

悲願は荒野に変わった後、友と言う名の花を咲かせ

太陽に形を成した

（この時を永久に刻もう……死して魂が朽ちても永劫に……）

ミシツ……

『フッフ……』

(カッ!?……グウウウ……!?)

痛みがバーンを襲った

(何故……何故今なのだ……!!)

箸を持つ手が震える

(この時すら……!?邪魔をするか!!おのれえ……!!)

(ムンドウスウウウ……!!)

最早殺意すら抱く、もう死んでいるにも関わらず

最後の友との晩餐

心待ちにしていた僅かな一時

だがそれすらも許さないバーンを嘲笑う魔帝の無慈悲な呪い……

(堪えろ……)

のたうち回る程の激痛を耐える、堪え忍ぶ

(この時を壊さぬ為に……!!)

堪えるのは友の為

太陽を心配で曇らせない為にバーンは堪え、平静を装う

(……くっ!?)

だが昨日より更に増した痛みは堪える事を困難にさせ手に持つ箸の片方がテーブルに落ちる

「……堪えて」

隣のレミリアが皆に気付かれない様に落ちた箸をバーンに渡した

「……すまぬ」

箸を受け取ったバーンは無理矢理微笑む

(バーン……!!)

バーンの心の内を察するレミリアは笑顔を作りながらも内心は泣いていた、テーブルの下では拳を握り締めながら……

バーンの最後の晩餐は皆に気付かれる事無く無事に終える事が出来た

「あー楽しかった！なあ皆!!」

食事が終わり店を出た8人は里の中を歩いていた

「そうね！また皆で行くわよ！妹紅の奢りでね！」

「お願いしまーす！」

「やったー！ありがと妹紅！」

「良いわね……じゃあ明日もお願ひ」

「よせ!?貯金が無くなる!!……まあ良いけどさ……」

「良いのかよ！」

他愛の無い話をしながら里を出る

「……お前達、今日は泊まってゆけ……構わんなレミリア？」

「……ええ構わないわ」

レミリアの承諾に皆は喜び紅魔館を目指す

「なあレミリア、紅魔館に戻ったらちよっと……」

バーンに気付かれない様に小声で妹紅が耳打ちする

「……ええ……わかったわ……」

内容に複雑な思いがあつたが表情には出さない

しかし声には滲んでいた

紅魔館前

降り立った8人は中に入る為に歩き始める、しかしバーンだけは立ち止まっていた

「どうしたバーン？」

魔理沙の問いを受けてバーンは話しだす

「……明日、明日の朝……図書館に来い、全員だ……必ずくるのだ、わかつたな？」

そう明日、告げなければならぬ

己の死を

言わずともレミリア以外は皆来るだろう、だがこれは大事な事、来ないでは困るのだ

……バーンにとつても友にとつても……

「ああわかった！私達も明日バーンに用があるんだ！必ず行くよ！」

妹紅の返事、レミリアを除きバーンが明日死ぬなど誰も思っていない

「トランプするわよ！」

「あたしもやるー！」

「パチユリーさんもやりましょう！」

「いいわよ、やりましょうか」

「私もやるぜ！」

樂しげに入って行く5人

「レミリア……」

「ええ……」

妹紅に促されレミリアと妹紅も中へ歩きだす

「入らないのかバーン？」

まだ立ち止まっているバーンに妹紅が聞いた

「少し散歩してから入る……先に行っていろ」

「そうか……じゃあ後でな」

二人を見送った後、暫くしてバーンはおもむろに呟いた

「出てこい……」

だが返事も無く誰も現れない

「出てこい八雲紫ッ!!」

怒りを込めた言葉と共に高まる魔力が紅魔館だけを避けて膨れ上がる

「止めて……結界が壊れてしまう……」

出現したスキマから声が聞こえると

「……なにかしら?」

紫が現れた

「なにかしら……だと? 貴様……余を愚弄するか!」

「ッ……!?!」

圧倒的な威圧感に紫は気圧されてしまい思わず扇子で口元を隠してしまう

「何故レミリアを危険な目に遭わせた!!」

「……」

バーンの問いに紫は答えない

グンツ

魔力を放ち紫を引き寄せ首を掴まえる

「答えよ！レミリアに付着していた匂いは余の世界にいた魔物達の物！そしてあの魔力の残滓は……アバンの物！」

「あれだけの血を浴び……傷付き、自らの血に濡れていたのだレミリアは！死んでいた……アバンが回復させなければレミリアは死んでいた！」

「貴様が送ったのだろうか！余の考えを知っていて何故レミリアを危険な目に遭わせた！」

バーンの怒声に紫はただ震えているだけだった

「答えよ!!」

言わぬなら殺害も辞さない、そう思わせるバーンの気迫に紫は絞る様に叫んだ

「貴方の……貴方の為よ!!」

その言葉がバーンの首を掴む手を緩めさせた

「レミリアは……貴方の事だけを想って、貴方の為だけに危険な道を行く事を決めたの

よー」

頬を涙が伝う

「どうすれば良かったの！貴方の想いを汲んで止めるのが良かったの!?!レミリアの想いを無下にして！」

顔が下を向く

「……私にはわからない、どちらが正しいかなんて……想う心に優劣なんてつけられない」

「……」

バーンは首を放す

「……すまなかった八雲紫、お前はレミリアの想いに応えただけなのにな……」

先程の怒りから一変、冷静になったバーンは紫へ謝った

わかっていて、レミリアがそう決めたのなら止める権利など有りはしないと

怒ったのは想いが強過ぎるからだった

「いめんさい……」

紫も謝った、バーンの想いを知るが故に紫も苦しかった

無下に出来ない想いに挟まれて……

「紫……これを渡しておこう」

異空間から2つの物を取りだし紫へ手渡す

「これは私が取ってきたよくわからない葉と……扇子ねこれは」

渡された物は何かの葉と扇子

「扇子はお前にだ、何の施しもしておらんが余を幻想郷に連れてきてくれたせめてもの礼よ」

「私になど……」

紫には受け取り難い贈り物、自分の都合で連れてきて責を負わせた紫にとってこれを受け取るには罪を感じ過ぎていた

「よい……もうお前は充分過ぎる程償った、これからはお前の愛する幻想郷の為に尽くせ、それは余との約定の証とでもしろ」

「……わかったわ」

扇子を握り締め紫はバーンとの約定を深く胸に刻む、二度と幻想郷を滅びの脅威に晒さない様にと

「その葉は永琳に渡せ、世界樹の葉と呼ばれる葉だ、死んだ者も肉体が無事なら甦らせる

事が出来る、天才と呼ばれるあやつなら増やすなり可能かもしれん」

「何から何まで……本当になんて言えば良いか……」

「構わん……余が勝手にやっている事だ、気にする事は無い」

バーンの言葉にこれ以上の会話と引き留めは野暮だと察した紫はスキマを広げる

「ありがとう……貴方を連れてきて良かった」

「……さらばだ」

別れの言葉を掛けると紫はスキマを閉じバーンの前から消える

(旅は失敗に終わったが……まだ最後にする事が残っている)

消えた紫の後を見ながら数瞬間を置くと振り返った

(……紅魔館でな……)

最初はここから始まった

ここから始まりここで終わる

バーンはゆつくりと入っていった

始まるの場所、紅魔館に

紅魔館・バルコニー

バーンはそこに居た

バーンが戻った後、用事を終えたレミリアと妹紅も加わり皆で最後の時を過ごした、幸運な事に呪いの痛みは治まりその時は邪魔されずに済んだ

そして遊び疲れた皆が寝静まった後にバーンはバルコニーで一人月を眺め待っていた

今宵は満月だった

(明日……………か……………)

静寂が時間を感じさせる、もう残された時間は少ない

「満月……………最後の夜を飾るには御誂え向きだな……………」

語り掛ける

「そうは思わんか……………?」

それは月にはなく

「レミリア」

友に向けてだった

「そうね……………」

月明かりに照らされ待ち人は姿を現す

レミリアはそう言うどバーンの隣に並んだ

「明日死ぬんでしょ?」

「そうだ、もう手遅れよ」

まるで他人事のように言うバーンにレミリアは顔を伏せる

「……………貴方は……………それで良いの?」

「……………これが余の運命、自ら決めた道だ……………後悔は無い」

バーンは空を見上げる

「いや……お前に決められたのかも知れんな……」

「何の事？」

バーンは続ける

「余は……ムンドウスに成り得た」

「……」

静かに聞くレミリアに語り続く

「お前達に会わなければ余はムンドウスと同じく幻想郷を滅ぼすか支配していたかもしれん、そしてその後には余はムンドウスによって殺されていただろう……」

「そうならなかったのは余が最初にここ紅魔館を訪れ……レミリア、お前と出会ったからだ」

レミリアに向いたバーンは微笑む

「お前は余に友愛を教えてくれた、余の荒野にお前が花を植えてくれたのだ」

「……思えばその時からなのだろうな、お前に運命を操らっていたのは……」

「そんな……私にそんな力は無い……」

否定するレミリアをバーンは真つ直ぐに見つめる

「わかっておる、しかしな……そう思いたいのだ……」

「そう……思わせてくれ……」

ここまでこれたのはレミリアのお陰だと、例え終着が死でも感謝していると、そう言った

「そう……」

レミリアの様子が変わる、バーンの言葉がレミリアの決意を後押しした

「私が貴方の運命を操ったと言うなら……」

レミリアの体から得体の知れぬ紅い力が溢れ、高まっていく

「何を……何をする気だレミリア!」

その力に混ざっている力を感じたバーンが叫ぶ

「私が貴方の運命を変えて見せる!!」

紅い力を飛ばしバーンを覆う

「これは……」

力を感じたバーンの顔が歪む

(これは死の運命を変える為に能力で解呪を……!!だが能力を高める為に正邪と同様に……)

(生命を……!!)

レミリアの決意

それは自分の命を使ってバーンの運命を変える事だった

自分の能力を把握していないレミリアだったが満月の力を借り、更に生命を使う事に
よりその名の通り運命を操る力を引き出した

だがこれは賭け

解呪に使えるかもわからなかったし使えなくても止められない

そしてどの道を進んでもレミリアの命が消えるのは間違いなかった

「止めるレミリア!!」

バーンは止める様に促すが

「止めないで!!」

レミリアは拒否する

どうしてもバーンを助けたかった
自分の命を捧げても助けたかった
それはバーンを……

「バーン……今……助けるから……!!」

全ての力と生命を能力に注ぐ

「レミリア!!」

バシユ……

レミリアの能力は解除された

「……レミリア……」

地に手足をついたレミリアにバーンが寄って行く

「なんで……」

地に顔を向けたままレミリアが呟いた

「なんで止めたのよ!!」

能力が解除したのはレミリアのせいではなかった

「お前に……生きていて欲しいからだ……!!」

解除したのはバーン、鬼眼王の魔力を使い強引に能力を解除したのだ

「余がお前の命を貰って喜ぶと思うのか!!」

「思わないわよ!!」

バーンの叫びにレミリアも叫ぶ

「そんな事言われなくてもわかってるわよ!!」

バーンの怒りすら凌駕する叫び

もういつからだったかなんて覚えて無い……

「でも私は!! 貴方を救いたかったから!!」

気付いたらその想いは既にいっぱいだった……

「貴方に生きていて欲しいから!!」

死ぬにしてもこの気持ちは伝えたかった……

「貴方を……」

愛してるから……

「……」

その想いにバーンは言葉が出なかった
愛していると言われたから

王の時代にも同じ言葉は何度も聞いた
だがそれは感謝と同じ偽りの愛

少しばかり上品になっただけでバーンに取り入ろうとする事
に変わりなかった

しかし今のは違う

本当に、心の底から愛していると伝わった
真の愛を受けた

(今わかった……お前に対する感情……それが友とはまた違う物になっていた理由が……)

バーンも理解した

いつの間にかレミリアに対する感情が変わっていた理由を
感情が込み上げてくる

「レミリア……!!」

手繰り寄せ

「レミリア……!!」

抱き締めた

王は位を捨てた代わりに、友を得て、仲間と絆を手に入れ

最後に愛を知る

暫くの間抱き合った後、バーンはレミリアを離すと懐から真紅に輝く宝石を取りだし差し出した

「レミリア、これをお前に受け取って欲しい」

「綺麗な宝石ね……」

「それに魔力を込めてみる」

促されるままにレミリアは宝石に魔力を込める

「これは……曲……」

宝石から曲が流れ始める

「お前を想って作った」

「……良い曲ね」

流れる曲は優美なれど気高さを感じさせ、その中に悲壯を滲ませる曲だった
「なんて曲名なのこの曲は？」

曲が流れ終えた後にレミリアが曲名を聞く

「曲名は考えていなかった……だがお前の想いを知り、今……曲名は決まった」

レミリアを見つめたままのバーンは言った

「亡き王女の為のセプテット……だ」

「……亡き王女……？」

聞かされた曲名にレミリアは疑問だった

「私死んでないわよ？」

バーンが自分の為に作ったのなら生きている自分を死んでいるとする曲名の意味がわからなかった

「……死後の世界と言う言葉がある、死んだ後に向かう世界だ、冥界もその内の一つ……」

「死を生とするなら明日……お前は死ぬ事になる」

「王の妃としてな」

バーンが語ったのは死生観

死後に生きるとするなら生きるレミリアは死ぬ事になる

死後も愛するレミリアを想い続ける

だからこれは、明日亡き王の女レミリアにバーンが贈る、亡き王女の為の……

セプテット……

「う………」

弱々しい声でバーンに抱きつく、目から涙がポロポロと落ちる

それはレミリアがバーンにだけ見せた弱さ、自分の思いが叶った事への嬉しさと死んでしまう悲しさが吸血鬼の誇りを砕いた

「なんで死んじやうのよお……」

バーンの胸で泣きじやくる、想いを遂げた今、バーンが死んでしまう事だけが納得出来ない

「すまぬレミリア……許せ……」

バーンも抱き締めただだ詫びる事しか出来ない

「今夜だけは……一緒に居て……」

「よかろう……」

月は雲に覆われ二人の姿を闇に隠した

歩んだ道は美しくも残酷に彩られた

運命のその先は何も無い

何も無い場所に進むしか無い

もう充分に救われた

虚無だった心に花と太陽が与えられ愛すら得た

想いを残した後、王は今最後の時を迎える

バーンの命、後……

最終話　　さらば……愛する幻想郷よ……

紅魔館・図書館

「バーンの奴遅いな……」

魔理沙は読んでいた魔導書を机に放りながら呟いた

「そうね……朝って言ってたけどもう10時だし……」

魔導書を読みながらパチュリー

「忘れてるんでしようか？」

「まさか……あのバーンが忘れるわけないだろ」

大妖精の疑問に答える妹紅

「あたし眠くなってきた……」

「寝たらダメよフラン！まだバーンに渡してないでしょ!!」

眠気に襲われるフランにチルノが渴を入れる

「なあ……この半年色んな事があつたよなあ……」

「なんだ魔理沙いきなり？」

不意の魔理沙の発言に皆が顔を向ける

「ああ……ふと思つてさ、お前等もそう思うだろ？」

「そうね……バーンが来てから本当に色んな事があつたわね……」

「まずあいつの印象は無愛想で近寄りがたい奴だつたな」

「私はまずおかしい、からだつたわね……あれが始めてだつたわ、魔力を感じて戦慄したのつて……」

「そうですね、チルノちゃんなんか何回休みにされたか……100回くらいかな？」

「あ、あれはあたいがバーンに花を持たせてやっただけよ！本気出せばバーンなんかイチコロだし！」

「よく言うぜ親分……その後だろ？私がバーンに挑んだのは？」

「その前に妖夢とチェスだけど輝夜が挑んでるわね」

「あの時は痛かつたなあ……だつていきなり殴るんだもん」

「……あれは本当に悪かつたよ、許してくれ」

「そんでその後には神奈子とバーンがやりあつたんだよな、あれは凄かつたなあ……今の方が強いけどあの時も仰天したもんだ」

「確かその前くらいからでしょ？バーンの態度が変わり始めたのつて」

「そうそう！チルノが仮病使つて大妖精がお使い行つてきた辺りからなんか優しくなつ

て来たよな！」

「えへへ……あれは嬉しかったなあ」

「それでナイトメア異変だったな、魔理沙とバーンが喧嘩してそりやあ大変だった……」

「うっ……あれはしようがないだろ！」

「確かにバーンの言い方も悪かったけどバーンの考えをわからずに感情的になったお前も悪いと思うぞ？」

「まあまあ！仲直り出来たんですからもう良いじゃないですか！」

「そうだな、それでナイトメア異変の最中にバーンが幽香とやりあったんだよな？私は見てないけど」

「私も最後しか見てないからよくわからないけど見た感じは善戦してたみたいだぜ幽香」

「流石USC……実力も高いわね」

「そんで逃げたナイトメアを探してる時に正邪が来たのよね！」

「あの時は参ったわよ……まさかレミイがバーンに唆されて紅魔館が戦場になるなんて夢にも思わなかったわ……」

「萃香との勝負も凄かったな！そりやあバーンが殴り合いしなけりやバーンの勝ちだったろうけどさ」

「あー……あれはなんか私も年甲斐もなく熱くなったよ」

「そういや妹紅は歳がよくわからないバーン除いて私達の中で一番歳上だったな……見た目は私と変わらない歳なのに……詐称すんなよな、犯罪だぜ妹紅」

「トラウマにしてやろうかお嬢ちゃん？」

「それ魔理沙以外全員に当てはまるわよ？私も加勢するわ妹紅」

「おーおー！やってみやがれ！」

「誰がロリババアですってー!!」

「あたしもやるー！」

「もお!!やめてください!!」

「「ハイ」」

「それでなんだっけ……ああその後だったな、ムンドウスが復活したのは」

「今思い出してもマジでよく生きていたなって思うぜ……」

「本当ね……でもあの時は幻想郷が1つになってた……」

「だな……じゃなきや勝てなかつたよ絶対に……」

「閃光のように……魔理沙のあの叫びがなかったら私は諦めてたかもしれないわね」

「あの時の魔理沙かつこよかつたねー！」

「恥ずかしいからやめてくれ……結局バーンが来て助けてくれたんだし……」

「まあそう不貞腐れるなよ、でもバーンが来てくれたのは本当に嬉しかったなあ……しかも枷の無い全力で！思わず抱き締めるところだったよ！」

「大胆な発言ですね……」

「そっか、大妖精は居なかったもんな、いやあ最高に格好良かったぜ？あの時は流石の私も妹紅と同じく抱き締めたかった！なあパチュリー？」

「そうね……私なんかなのであの時抱き締めなかったのか後悔してる……わけないわよ？」

「すごく……手遅れです……」

「まっ！本気のバーンはまあまあだったわね！あたいの次くらい！」

「カイザーフェニックスからマヒヤド、闘魔滅砕砲にフェニックスウイング、そしてカラミティエンドー！その強さまさに大魔王！！って感じだったな！」

「悪魔なんてものの数分で全滅だもんなあ……」

「つてもやっぱアレだぜ！アレ！」

「ああ……天地魔闘の構え……だな」

「アレだけは私がいくら強くなっても破れない気がするわ……」

「まったくだぜ……」

「ムンドウスでも破れなかったもんなあ……」

「私も見たかったです……」

「でもムンドウスは倒せなかった……」

「そうだな……それでバーンは成ったんだよな……」

「鬼眼王……だっけ？ムンドウスと同じ化物になっちまったんだよな……そんでトチ狂って幻想郷から去るなんて言いだしてさ」

「私達の為だったんですよね？私達を守る為にバーンさんは……」

「それでもムンドウスには勝てなかった……私達のせい……」

「バーンが死んだ時は信じられなかったよ、チルノとフランがいくら呼び掛けても返事がなくてさ……」

「でも復活したじゃん！」

「まあな、結果的には凍れる時の秘法で勝ったけどあの時程自分の力の無さを恨んだ事はなかったな」

「そうね……でも勝って、バーンも起こして……これからでしょ？」

「わかってるさ！これからもっと強くなって……カイザーフェニックスに！バーンに勝つ！！」

「正直途方もない目標だけどな……でも頂への道を見つけたんだ！険しくたって自分に向いてなくなつて不可能だつて……そんなもん関係ない！ただ登る！もう憧れじゃな

い……越えてやるぜー！」

「あたしも！それがバーンが一番喜ぶと思うから！」

「あたいだって負けない！バーンを最初に倒すのはあたいたいよ!!」

「私も負けません!!」

「頑張りましょう……バーンもきつとそれを望む筈……!」

6人の意気は高まる

バーンが居たから強くなり、強くあろうと出来る

全てはバーンが居たからこそ

これまでがそうであった様にこれからもそうあり続ける

それがバーンとの約束

交わした約束ではないが不思議とそれがバーンとの暗黙の約束になりそれをバーンとの絆としていた

キィ……

ドアの開く音が聞こえる

「来た！準備出来てるな大妖精！」

「ハイッ！」

「大ちゃんやっぱりあたいにやらせてくんない？」

「ジャンケンで負けただろ？諦めろって親分」

「大ちゃんいーなー……」

「……静かに！来るッ！」

期待を胸に秘める6人の前に二人は現れた

「……」

「……」

バーンは現れた、レミリアと共に

「遅いわよバーン！」

笑顔のチルノの言葉

「……遅くなつた」

普通に返した筈だった

(なんか暗い……?)

なの感じられてしまう

「ようレミリア!二人で仲良く来るなんて珍しいな!まさか一緒に寝てたのかあ?」

無論冗談、それぐらい皆ならわかる

「……そうね」

「……どした?なんかあつたのかレミリア?」

いつもなら怒って否定する筈なのに肯定、しかもなげやりな感じがする

魔理沙の問いにレミリアは答えず沈黙したまま

(……?何だ?)

皆も二人の様子に首を傾げる

そして少しの間を置いた後、バーンが口を開いた

「……今日呼んだのはお前達に褒美をやろうと思ってな」

バーンの言葉に6人は驚いた

「なんかくれるの!?やったー!!」

喜ぶチルノは同じく喜ぶ大妖精とフランと共に目を輝かせている

「なんだなんだ？珍しいキノコでもくれるのか？」

魔理沙も嬉しそうだ

（あー……まさか被って先にやられるとは……）

妹紅は少し悔しげに苦笑する

（でもこれはこれで良い感じになりそう……）

パチュリーも苦笑の後、笑顔を作る

「……」

6人の笑顔とは対称にどこか寂しげな顔のバーンとレミリア

「……パチュリー、魔理沙」

始まった

「少し……いやかなり期待してしまっわね」

「何くれるんだ？」

二人を呼んだバーンは目の前に来た二人に懐から2冊の本を渡した

「これ……魔導書？」

「えらく質素な魔導書だな……何の魔導書だ？名前も書いてないし……」

渡された魔導書は二人が見た事も無い物だった

「それは……余の魔導書だ」

魔導書を眺める二人にバーンが告げる

「バーンの……？つて事は……」

「つまりこれつて……」

二人はすぐに言葉の意味を察した

「それには余の生涯を賭けて蓄えた魔を記してある、魔法使いのお前達には最も適した物だ」

二人に贈ったのは魔導書、バーンが今までに培った力の全てを記した本

「パチュリーには多彩な魔法を記した、それを読み更に励め、魔の深淵へ向かつてな」

「わかったわ……!!」

自分にとつて最高の贈り物と言える物を貰ったパチュリーは満面の笑みでバーンに約束した

「魔理沙の方は主に力を記した、力を高める方法をな」

「良いのかよ？こんな貫つたら私がバーンを越えるのも時間の問題だぜ？」

「……そうならねばくれてやった意味があるまい」

「へっ……そうだな！ありがとうバーン！大事にするぜ！」

冗談混じりに礼を言った魔理沙は更なる向上を心に刻む
これで二人に心配は無い

「妹紅」

次に呼んだのは妹紅

「私は別にいいのに……」

少し照れくさそうにバーンへ向かう

「お前にはこれだ、御守り……と言う物になる」

「これ……香霖堂にあった紋章と同じだな……鳥か？」

渡されたのは掌大の円形の物

「そうだ、調べてみたがロトの紋章に描かれているのは不死鳥を象った物らしい、その世界ではラーミアと呼ばれる不死鳥が存在する、それを象ったのだろう」

「へえ……不死鳥って色んな世界に居るんだな」

手にした御守りを掲げながら呟く妹紅にバーンは続ける

「それには耐性を付加してある、不死のお前に一番怖いのは精神破壊や封印の類……だからそれにはそれに対する耐性を施してある、肌身離さず持つていろ」

バーンが御守りを贈った理由は妹紅の戦い方にあつた

不死故に死を軽く見る妹紅はダメージ覚悟の特攻をするなど自己を省みないくらいがあった

その為一番それらを受ける可能性が高い妹紅にバーンは安全を贈ったのだ、仮に受けても大丈夫な様に

「……悪い、気をつけるよ」

妹紅は謝った

「確かにそうだよな、私は不死だからって自分を軽視してた……皆が危ない時は私が助けなきゃならないのに……」

長い時を生き、戦い続けていた妹紅はバーンの考えを言われる前に理解し反省していた

「わかったならよい、お前は皆の中では年長者、お前が守ってやれ」

「わかった！ありがとうバーン！」

その上でバーンの気遣いに深く感謝した

「不死鳥を象る事にしたのは余とお前の共通する象徴だからだ」

「不死鳥を誇りとしろ……死ぬ事は許さん、わかったな？」

「任せとけ！」

力強く答えた妹紅

もう彼女に心配は無い

「チルノ、大妖精、フラン……来い」

最後は幼い3人

「なになに？なによ！なにくれんの!？」

「はいバーンさん!!」

「やった！なんだろなんだろ!!」

とても嬉しそうにやってくる3人にバーンは3つの球体を差し出した

「お前達にはこれだ」

「……なにこれ？ボール？」

「金属……ですか？」

「大きい飴？」

渡されたビー玉程の小さな球体を訝しげに眺めた

「それはマネマネ銀を加工して作った物だ、それには仕掛けを施してある」

「爆弾とか？」

「それはないんじゃないかなチルノちゃん……」

「なにににー? 教えてよバーン!」

無邪気な3人にバーンは微笑みながら話した

「仕掛けとはお前達が成長した時に装飾品になる仕掛けだ、成長したお前達に合う装飾品になる様にしてある」

「装飾品? アクセサリーの事?」

「そうだ」

「本当変わるんですか!?!」

「無論」

「嬉しいけどなんであたし達はアクセサリーなの?」

「……」

フランの問いに一拍置いて話しだす

「お前達が心身共に成長した時に……飾り気がなければならぬからだ」

「いつかお前達にも好意を抱く者が現れよう……その時に着飾る物がなければ恥を晒す事になる、醜態は晒すのは好ましくない、故に嗜みとしてそれを持ち女としての品位を上げておけ」

元よりこの3人には心配しかない

頭の悪いチルノ、力の弱い大妖精、いつまでも幼さが抜けないフラン

この3人は今すぐにどうこうではない

だからそれは諦めてこれにした

これもまた先の為だから

「ありがとうバーン！」

フランが言った、意味がわかっているのかはわからないが感謝の気持ちは籠っている

「バーンさんお父さんみたいです」

少し赤面しながら大妖精

「バーンじゃダメなの？」

わかっていないチルノ、いやわかった上か

「……」

3人には何も言わない

(お前達の無邪気さにも救われた……特にチルノ、お前にな……)

3人を見つめる瞳に輝きは無かった

「……以上だ、レミリアには昨日渡してある、そして……お前達に言わねばならん事がある」

「その前にちよつと良いかバーン？」

終わりを告げようとしたバーンを妹紅が止めた

「……大妖精」

「ハイッ!!」

トコトコと大妖精がバーンに歩み寄り

「私達からのプレゼントです!!」

満面の笑みでバーンに包みを差し出した

「……余にか?」

「勿論です!」

戸惑いながらもプレゼントを受け取る

「何してんだよバーン!開けろって!」

受け取ったまま動かないバーンに魔理沙が促す

「……」

促されるままに包みを開け、中身を取り出したバーンは固まった

「着けてあげなさい、チルノ、フラン」

「うんっ!!」

プレゼントを奪った二人がバーンに着せる

「中々似合うな」

着飾ったバーンを見た妹紅が満足気に微笑む

「これは……スカーフか？」

着せられた物を触りながら聞いた

「おっ！知ってるのか！そうだぜ！スカーフだよ、良いだろ？」

「皆で編んだのよ」

魔理沙とパチュリーも笑って答えた

バーンに贈られたのはスカーフ、バーンの服装に合わせ、映える様に見せる赤いスカーフだった

「……何故余に？」

貰ういわれが無いバーンは問う

「バーンいつもありがとーって事だよ！」

「それには皆の気持ちが籠ってます！」

「感謝しなさいよ！」

そう感謝……

バーンが居たから楽しくて、生きられ、強くなれた
その想いが形となってバーンに贈られたのだ

「…………ツ!!」

それを見たレミリアは苦悶の表情で顔を伏せる

(「こんな……………こんな惨い事があつて良いの……………」)

無知とは罪なのかもしれない

バーンが死ぬ事を知らないが故に皆は笑顔で贈り物を渡す
辛過ぎて見るに耐えなかった……………

「…………」

沈黙するバーン、スカーフを触りながらたたずんでいる

「……………気に入らなかつたか？」

その様子に不安気に妹紅が尋ね皆の顔が曇りかける

「……………いや」

バーンの声が響く

「そうではない、感謝する……お前達」

礼の言葉を贈った

だが笑う事は出来ない

無表情で礼を言う

それしか出来なかった

「へへへ……それはいつかバーンを越えるぜ！つて約束の証でもあるんだぜ！」

いつかなど無い……

「これからもよろしくお願いするわ」

これからも無い……

「ずっと一緒ですよバーンさん！」

一緒には居られない……

「あたしもっと強くなるから!!」

言わねばならない……

「バーンを倒してあたいがサイキョーになってやるわ!」

約束は果たせないと……

「てな訳だよ、今日から大丈夫なんだろう? 早速頼むよ!」

すまぬ……

「無理だ……」

「別れの時だ……」

それは告げられ

始まった

「どうゆう事だ？別れって？」

6人は意味がわからず問う

その中で一人だけ青ざめる者が居た

「その時が来たのだ」

「なんだその時って？」

魔理沙が聞いた瞬間だった

「やだ!!」

図書館にチルノの声が響き渡る

「やだ!!絶対やだっ!!」

必死にダメだと叫ぶ、最初にわかったのはチルノだった

「落ち着きなさいチルノ」

パチュリーが抑えるが

「やだあああ!!」

制止を聞かず喚く

「落ち着けチルノ!!」

「どうしたのチルノちゃん!!」

妹紅と大妖精も加わりようやくチルノは少し落ち着く

「それで……どうゆう訳なんだバーン? チルノがここまで乱すなんて普通じゃない、別れって、その時ってなんだ?」

睨み付ける妹紅、彼女はまだあの時には居なかった、だから何の事か知らない

「……帰るつもりか?」

魔理沙、彼女はあの時に居た、だからチルノが叫んだ時に薄々わかった

「違う……」

帰るのは否定された

「まさか去るつもり……」

パチュリーもわかっていた

「そうであり、そうではない……」

まさにその通り

「嘘……ですよね？」

大妖精、受け入れたくない

「嘘では無い……」

そう、嘘では無い

「えっ？えっ……？バーン……？」

フラン、混乱している

「もうお前達と歩む事は叶わん」

道は無いのだ

「なんのことだあ!!!」

痺れを切らした妹紅が叫んだ

「バーン!! 一体何の事だ! その時って何だ!?!」

自分だけ蚊帳の外に居ると感じた妹紅が机を殴って立ち上がった

「答えろよバーン!!」

妹紅の怒りに皆は黙った

静かになったその場でバーンは静かに語りだした

「余は死ぬ」

一瞬だけ時間が止まった

「……冗談か?」

「違う」

「……死ぬってどうゆう事だ?」

「ムンドウスから死の呪いを受けた、もう幾許も時は残されておらん」

「んだとお……!!」

拳を握り締める妹紅、許せれなかった

「なんで言ってくれなかったの？」

「言う必要が無かったからだ」

「皆で協力すれば解けたかもしれないのに？」

「それは無い」

「……ッ!？」

顔を歪ませるパチュリ

「私達じゃ役に立たないって事か？」

「そうゆうつもりでは無い……が、意味は同じか」

「ならなんでッ……!？」

魔理沙も顔を歪ませた

「もうバーンの好きにさせてあげて……」

ずっと黙っていたレミリアが話しだした

「なんでお姉様!!」

フランが食って掛かる

「バーンはね……頑張ったのよ、私達の為に……激痛に耐えながら……死ぬってゆうの

に……」

レミリアは諦めていた

もう運命は変えられない

ならばせめて最後は愛するバーンの好きな様にと……

「これも運命よ、知りながらも突き進んだ道だ……後悔など有ろう筈も無い」

レミリアを庇う様にバーンが告げた

これは自分が望んだ事、だからレミリアを含め誰も責めるなと

「余は……異変だったのだ……この幻想郷で、バーンと言う名の幻想……」

「そう……思え……」

その上でもう自分の事は忘れろ

過ごした日々は全て一時の幻……幻想だったのだと

永琳の幻想の旅と言う言葉でそう考えた

そうすれば傷は少ないのではと考えて

「もう……バーンを休ませてあげて？」

だからバーンの死を受け止めて認めて欲しい

そう皆に願った

「嫌です……」

大妖精が俯きながら呟いた

「なんで……なんで言ってくれなかったんですか!!」

顔を上げた大妖精がバーンに叫ぶ

「苦しいなら苦しいって言ってくださいよ!!」

「つらいならつらいって言ってくださいよ!!」

涙が頬を伝う……

「言ってくれなきや……わかんないじゃないですかあ……」

その場でへたりこんで泣きだした

「あたい達……友達でしょ!!」

またチルノが叫んだ

「なんでバーンだけつらい思いすんのよ!!なんでバーンだけ傷だらけになんのよ!!」

「友達は……助け合うもんでしょ……!!」

必死に堪えながらバーンを睨み付けた

「……」

二人の言葉に感じる物があつたバーン

「……今更無意味だ、お前達はただ余の死を受け入れるだけでよい」

だが壁はまだ壊せない

「いい加減にしろ!!」

破壊音と共に妹紅の怒声が響く、皆が目をやると妹紅は炎をたぎらせ机を殴り壊して
いた

「勝負だバーン……逃げるなよ!!」

告げながら近付いていく

「……やめておけ、勝負にすらならん」

「それに……意味が無……」

「意味が有る無しじゃないんだよ!!」

遮る怒声、それはいつかの時と同じ激しい怒り

「私はお前が許せないんだ!!」

怒りを炎に変えて睨み付けた

「……私もやるぜ」

「……私もやるわ」

妹紅の横に魔理沙とパチュリーが並び立つ

「あたしも……!!」

その後にはフランも

「あたしもやるわ!!」

「私だって……!!」

チルノ、そして大妖精すら並び

バーンに立ちはだかった

「お前達……」

それはバーンにすら予想出来ない事態だった

死を告げた後に起きるのは悲しみだけだと思っていた

それしか無いと思っていた

が見えるのは激しい怒りで睨む6人の姿だったからだ

「勝負だ……！私達が勝つたら言う事を聞いて貰う!!」

その言葉にずっと考えていた者が動いた

スツ……

「レミリア……」

傍に居たレミリアが6人に並んだ

「悪いわねバーン……私も気持ちは皆と同じなの……」

諦めていた、諦めていたがそれは言い聞かせていたに過ぎなかった
気持ちの上では皆と同じ

許せなかった

だから6人に並んだ

この行為が無意味と知っていても許せれなかったから

「……」

7人の瞳を受けるバーンは考えた末に……

「お前達がそれを望むなら……かかってくるがいい」

勝負を受けた

「わかってるな皆!!」

「勿論だぜ!!」

「ええ……これは……」

「これだけは譲れません……!!」

「絶対……」

「絶対に勝つわよ!!」

「行くわよ……バーン!!」

「……来るがいい」

最期の戦いは始まった……始まってしまった

「ハアツ……ハアツ……ッアア!!」

妹紅の炎がバーンを襲う

「……」

焼く事は出来ない、火傷どころか衣服すら焼けない

「やああつ!!」

大妖精の弾幕

「……」

効かない

他の者も攻撃を繰り返すがダメージが全く無い

「クソオオ!!」

それでも攻撃は止めない、だが効かない

「……!!」

堪えかねたフランが目を作り出す

「……やめろ」

「ウルサイ!!」

バーンの制止を聞かずフランは腕に力を込める

「きゅつとして……!!」

「やめろフラン!!」

妹紅の大声にビクツつと反応したフランは目を消して妹紅を見た

「それはやっっちゃダメだフラン……」

「でも……勝たないと……」

「わかってるさ……でもな、バーンは敵じゃない」

止めたのは相手がバーンだから

「それをやったらバーンとは友達でいられなくなる……」

敵ならフランの能力を使っても問題は無い

だが相手はバーン、敵では無い

殺し合いではないのだこれは……

効く効かないではない、殺意が籠るのがダメなのだ

フランにその気が無くても殺しうる力はこの戦いでは禁じ手
「それは嫌でしょ？」

パチュリーが聞いた

パチュリーもバーンを殺しうる魔法、メドロアがある、だがそれは使わない、絶対に使わない、パチュリーはわかっているから

それを使ってしまうのはバーンを殺す気があるとなる、そうなればそれはもう友とは呼べなくなる

だから怒りに燃える妹紅でもその一線は越えない様にと考えていたからこそフランを止めた

「…………ごめんなさい」

フランも理解し謝った、自分が如何に考えていなかったかを悟り謝った

「いいさ…………行くぞフラン!!」

「うん!!」

まだ戦いは続く…………

「クソツ……」

息を切らせ、攻撃を止めた魔理沙が呟き

「コノツ!!コノオオオ!!」

攻撃を続けるチルノを見上げる

(わかってたけど化物過ぎる……)

攻撃は効かない、誰の攻撃も

それもその筈、今のバーンは全く敵わなかったムンドウスと同等、勝てる訳が無い
(でもな……今はあの時以上に負けられない!!)

魔力を高めまた攻撃を開始する

(やっぱり貴方は変わったわ……ゴメンねバーン……)

レミリアはバーンの心中を察し謝罪しながらも攻撃する

「ふぎけるなよ……!!」

妹紅が言った

「ふぎけるなよバーン!!」

更に怒りを燃やし睨む

「ふざけてなどいない」

バーンは目を閉じ答える

「それがふざけてるって言ってるんだよ!!」

身を震わせながら叫んだ

「なんで攻撃しないんだ!!」

妹紅含め誰も傷は無かった

疲れこそあるが体に傷は無い

バーンは戦いが始まってから一切の攻撃をしていなかった

「……お前達を傷付ける意味を感じないからだ」

「ふざけんな!!」

「お前言ってたじゃないか! 勝つ事に優越を感じるって……楽しいって……!!」

「……」

「やれよバーン!! これは勝負なんだ!! 撃てよ!!」

炎を纏い飛翔する

「お前のカイザーフェニックスを!!」

炎を更に燃え上がらせ頼んだ

(楽しくなど……)

その頼みに手に魔力を込める

「これが最後だ……これがお前の望む余の不死鳥……これが……余のメラゾーマ……」

「オオオオツ!!」

「……カイザーフェニックス」

撃たれた炎鳥は突進してくる妹紅を迎え撃つ

炎鳥と妹紅の衝突は炎を一瞬周囲に撒き散らし

「……ツカア!？」

妹紅を破った

(諦めてくれればと思っただが……致し方あるまい)

床に落ちる妹紅を見ながらバーンは攻撃を決意する

「……」

かざした手から冷気が生み出されチルノに向かう

「うう……うぎぎぎぎ……!!」

自身の冷気で対抗するチルノ

フツ……

限界を迎え冷気が止まり妹紅と同じく床に落ちる

「……」

暗黒闘気を圧縮した弾を1発撃ちだす

「コノヤロー!!」

魔理沙も弾幕を撃つが弾は逸らされる事もなく真つ直ぐに魔理沙に向かう

ドウツ……

衝撃が体を貫き魔理沙は床に落ちる

「負けないよ!!」

フランが凄まじい速さでバーンに突っ込む

吸血鬼の身体能力を駆使し力任せに体当たりを仕掛けた

ガァン……

衝撃音と共に辺りを風圧が襲う

「……気が済んだか？」

「……バーンが一番わかってるでしょ!!」

体当たりを微動だにせず受けたバーンの問いにフランが叫んだ

「……」

手刀を振る

「あぐっ!?!」

防御した腕ごとフランは吹き飛ばされる

「……まだあ!!」

体勢を立て直し再び突撃する

「……」

「あうっ!?!」

また手刀に払われる

「負けない!!」

魔力をたぎらせ三度突撃する

「……」

体当たりを受けとめ

「……」

掌底で浮かし

「……」

手刀で払った

「う……ああ……ああ……」

壁に衝突したフランは床に立つも膝から崩れ落ちた

「これが私の成果!!」

その言葉に振り向いたバーンの前には巨大な10の火球

「フィンガー・フレア・ボムズ!!」

パチュリーの指の動きに合わせ10の火球はバーンを襲う

「……マホブラス」

眩きと共に前面に魔方阵が展開される

「そんな……!?!」

火球は全て魔方陣に止められ1つに集束していく

「……」

バーンが指を弾くと集束され圧縮された火球がパチユリーへ向かう

「くう……!?」

高速で迫る火球に回避が出来ず身構える

ピタッ……

火球はパチユリーの目の前で止まった

「……お前の負けだ」

火球を消したバーンが告げる

「……ッ!!」

力の差を感じたパチユリーは床に崩れた

「えいつーえーい!!」

大妖精が攻撃を続けている

「よせ……」

効かぬ攻撃を繰り返す大妖精に止める様に告ぐ

「やめません!!」

でも攻撃は止めない

「力の弱いお前が敵う筈なからうが……」

「わかってます!!」

そんな事は重々承知している

それでもやらねばならない

力の有る無しは関係無い

気持ちは皆と同じだから

自分だけ戦わないなんて選択肢は無い

だから止める事など有りはしない

「……バギクロス」

強烈な風が大妖精を吹き飛ばし壁に叩きつけた

「あうう……」

叩きつけられた大妖精は起き上がれず床に倒れた

「流石ね……」

6人を倒したバーンにレミリアが話し掛けた

「当然の結果だ」

レミリアを見ずに返す

「どうやっても勝てる筈がないのだ……」

そう、勝てる筈が無い、例えフランの能力やメドロアを使ったとしてもバーンから受け入れない限り勝つ事は不可能な事

「そうね……絶対に勝てないでしょうね、でもねバーン……」

レミリアはバーンへ微笑み、バーンは震えた

「わかっていて……何故!!」

唇を噛み

「何故立ち上がる……!!」

拳を握り締め

「何故だ……お前達……」

それらに目を向けた

「お前風に言えば愚問だな……ってやつだぜ!!」

「負けられないからな……!!」

「こんな程度であたい達は諦めないわよ!!」

傷つきながらも立ち上がった6人を見た

「まだ私達は負けてない……勝負はこれからよ」

集まった7人の意思が向けられる

「……よせ」

「嫌です!!」

「よせと言っている……」

「ヤダよ!!」

「やめぬか……!」

「……やめない」

「やめろと言っている!!」

バーンが叫んだ

「……これ以上、お前達を傷つけさせるな……」

力を抜き、頼んだ、これ以上友を痛めたくない

「……じゃあ負けを認めるか?」

妹紅が悲しげに聞く、バーンの心中は察しているがそれでもこれだけは譲れないから

「勝敗は既に決しているだろう……」

「なら勝負は続行だな」

「余の意思を汲んでくれ……」

「だったら!!」

怒声、それも今までで一番感情の籠った

「だったらなんで言ってくれなかった!!友達だろ!!お前にとっては違うのか!?!それが私達を傷つけるってなんでわからない!!」

抑えきれない感情が目から溢れてくる

「私達これからだっただろ!!」

許せなかったのはバーンが一人でそれを抱え込んでいたから

言ってくれば皆で協力して助けるのにそれをしてくれなかったから

バーンが自分達を想つての事だとはわかる、でもこれからを見ていた6人は例え自分達を想つてだとしても許す事は出来なかった、相手がバーンでも

友達だから……

「……」

バーンは何も語らない、その想いを受けてもまだ壊せない

(……これならば諦める筈だ)

だがヒビは入った

「……やめぬならこれを食らわすまでよ」

力を凝縮し

構えた

天地魔闘の構えを

「！！！！」

構えに皆の体が強張る

「……行くぞ皆！！」

だが天地魔闘の構えを持ってしても7人は止められなかった

構えを前に力を最大に高める
勝つ為に

(折れぬか……)

7人の意思が決して折れないと知ったバーンは

(これをすればあやつらは……)

心を揺さぶられた

「……よし!!」

全てを込めた

最大まで高めた力はまさに閃光

バーンにたった1回勝つ為だけに閃光のように力を振り絞り

スペルは宣言された

「不死」「火の鳥——鳳翼天翔——!!」

「凍符」「パーフェクトフリーズ」!!」

「日符 「ロイヤルフレア」!!」

「恋符 「マスタースパーク」!!」

「風符 「ウインドフォール」!!」

「禁忌 「レーヴァテイン」!!」

「神槍 「スピア・ザ・グングニル」!!」

7人の力はバーンに向かう

「……天地……魔闘!!」

友の力を前にバーンは叫んだ後に沈黙し

目を閉じた

ドウツ!!

集まった力は紅魔館を揺らし少ない窓を全て破壊した
力の余波が館内を駆け巡り紅魔館全体を力が覆う

図書館の本は吹き飛び、撒き散らされ、爆煙が舞う

その爆煙が収まると爆発の中心には二つのシルエットがあった

「……」

立ち尽くすバーンと

「……クソオ!!」

拳を打ち付ける妹紅の姿

「ダメか……」

そして周りには6人

バーンは倒せなかった

7人の力を集めてもバーンに傷をつける事すら叶わなかった

しかし誰も倒されていない

何故なら……

「……」

バーンは構えのまま動かなかったから

「どうしたバーン!!なんで天地魔闘をしないんだ!？」

拳を胸に置いたまま顔を下げた妹紅が叫ぶ

「もうよい……」

構えを解いたバーンが告げる

「よくないんだよ!!」

拳を振り上げ打つ

「もう……よいのだ……」

拳を受け止め、認めた

「余の……負けだ……」

バーンには出来なかった、脅しに手加減無しの天地魔闘を見せたがそれでも誰も諦めなかった

放てば皆死ぬ

だから出来なかった

折れない心を前に……

殺したくないが故に……

遂に生まれて初めて心の底から

敗北を認めた

「納得のいく結果じゃない……けど勝ちも勝ちだ！言う事を聞いてもらおうぞバーン!!」

「……生きろとの願いは叶えられんぞ？」

「そんな事わかってるさ……だから私達の願いは……」

妹紅は今、最も皆が望む事を言う

「お前の！本当の気持ちだ!!」

「余の……気持ち？」

「そうだ……お前の本当の気持ちを教えてくれないか？バーン……お前の本当の気持ちを……」

望みはバーンの本音だった

「生きたいんだろ？」

「……死の運命は受け入れている」

「そうじゃないだろ!!」

バーンの返事に感情がぶつけられる

「そうじゃない……そんな気取った言葉じゃない……お前の……」

「バーンの本当の気持ちだよ!! 気取らないでさあ! 今の気持ちを教えてくれよ!」

魂の叫び

「本当に受け入れてるのかよ!!」

心が揺れる

「言えよバーン!!」

「……」

「余とて……」

死にたくはない……

生きたい……

出た、本当の気持ち

生きたいと……

7人の想いがバーンの心の壁を壊した

「決まっておろうが……!!」

堰をきつた感情が溢れてくる

「幾度も……幾度も願った……生きたいと……!!」

止まらない

「お前達と……これから先も……この幻想郷で……！生きていたかった……!!」

スウー……

一筋の涙が流れた

「バーン……」

流れた涙はバーンのもの

（余が……涙を……）

初めての経験に戸惑いが隠せない、何故なら魔族の王だったものが涙を流した
（余が涙など……これではまるで……）

人間の様に……

「うう……あうう……バーン!!」

堪えきれなくなったチルノがバーンに抱きついた

サラツ……

「えっ……えっ!？」

チルノの手は粉を握っていた

「……時間だ」

バーンは告げた

呪いの期限が来た事を……死を迎えた体が灰になっていくのを……

「やだっ!!ダメッ!!」

必死に頭を振るチルノ、もう顔は涙でいっぱい

6人も同様、溢れる涙が止まらない

「別れの時が来たのだ……許せチルノ……」

少しずつ、少しずつ体は灰になっていく

「妹紅」

「なんだバーン？」

「すまなかつたな、余は初めて友を持ったが故、お前には苦勞を掛けた……」

「気にするなよ、私も気にしてない」

「……皆を頼んだぞ」

「任せてくれ!!」

「パチュリー」

「何？」

「もうお前に教える事は出来ん……許せ……」

「いいのよ……もう貴方からは沢山教えて貰ったから」

「尚も精進せよ……余の愛弟子よ」

「はい……!!」

「魔理沙」

「……おう」

「あまり破天荒はするな……お前はそこだけが気掛かりよ……」

「……わかったぜ」

「強くなれ……お前もまた余の愛弟子だ」

「わかったぜ……師匠ツ!!」

「フラン」

「うう……」

「泣くな……お前も誇り高い吸血鬼だろうに……」

「でも……でも……!!」

「だが、今日くらいは咎めはせん……レミリアと仲良くするがよい」

「うん……わかった……!!」

「大妖精」

「グスン……なんですかあ？」

「チルノとフランに比べればお前は賢い、力はなくとも二人を導いてやれ」

「はい……はいっ……!!」

「いつかの時の様に無茶はせんようにな」

「……!!うえええん……」

「チルノ」

「何よバーン……」

「お前の友にならなければよかった……あれは効いたぞ?」

「ごめん……ごめんなさいバーン……!!謝るから……!謝るから死んじややだあ!!」

「……許せ最初の友よ」

「やだああ……!!」

「レミリア」

「……行かないで」

「すまぬ……」

「わかってる……でもこれだけは言わせて?」

「なんだ?」

「愛してる」

「余もお前を愛している」

「……ありがとう……ッ!!」

別れの言葉を交わした時には既に体の大半が灰になっていた

「間もなく余は死ぬ……」

優しい瞳が皆に向けられた

「そんな顔をするな……それでは心配で死ぬにも死にきれん」

バーンを見送る7人の顔は涙で濡れていた

「……私達と居て楽しかったか？」

「無論だ、そこに一切の疑問は無い」

「これで……お別れなんだよね？」

「余は死ぬ……だがこれは別れではない」

悲しむ友にバーンは言った

「死は別れではない、どこしえに想う事こそ……本当に共に在るといふことなのだ……」

これは別れではない、ただ離れているだけ、想い続けていればそれが真に共にあると意味を込めた

「じゃあ……また会えるよな？」

「お前達が想い続ければあるいはな」

そして灰は足から床に落ち始めた

「……太陽」

消え行くバーンが呟いた

「余は太陽となりてお前達をこの幻想郷から照らそう……」

「だから……強く……」

「強く生きろ……」

残るは顔だけになったバーンに皆は涙に濡れながら笑った

さよなら……バーン……

それが余の聞いた最後の言葉……

紅魔館・バルコニー

「いつまで泣いてんだチルノ」

7人はバルコニーに出ていた、一人一人が瓶を持って

「だって……だってバーンが……」

立ち直れない、それだけチルノの中でバーンは大きな存在だったから

「チルノ!!」

魔理沙が叫ぶ

「バーンは死んだ!!もういない!!」

「だけど私達の心に……魂に生き続ける!!」

「泣くなチルノ!!強く生きろって言われただろ!!」

「だから泣くな!!胸を張れ!!これからは私達が幻想郷を守らなきゃならない!!」

「バーンの意思を継いで……!!」

涙は止まっていない

でも意思を継いだ顔は前を向いていた

「……わかった!!」

強く生きろ

バーンの想いは確かに魂に刻まれた

「やるぞ!!」

瓶を構えた7人は一斉に振り撒いた

バーンの灰を

その時、一陣の風が吹いた

「バーン……またな」

舞い上がる灰を見上げながらまたの再会を強く願う

灰は流れていく

白玉楼、妖怪の山、永遠亭、守矢神社、人間の里、太陽の畑、旧都、地霊殿

幻想郷を流れていく

至る場所に流れ、スキマをも通り過ぎ灰は流れる

灰が過ぎ去った後に仲間はバーンの死を悟る

最後に灰は紅魔館へ戻り、友に少しだけ身に纏わせると

博麗神社へと向かった

灰となったバーンは幻想郷に消え、
戻る事はなかった

そしてかつて王だった者の残した道具はバーンの遺産として後の幻想郷に伝えられたという……

そして、
幻想へ……

エピローグ

～亡き王の為のレクイエム～

その昔、幻想郷をかつてない異変が襲った

後に魔帝異変と呼ばれるその異変は幻想郷を滅びへ導こうとしていた

幻想郷の民達は1つになりこれに立ち向かった

しかし誰も倒すことは出来なかった

滅びへの道を進むしか無いかと思われたその時

魔帝に対峙した者が居た

強大な力を持っており、かつて大魔王と呼ばれていたその者

彼もまた幻想郷を滅ぼしうる力を持っていたが

彼はそれをしなかった

それどころか友の為に戦い

友を、友の生きる幻想郷を救った

そしてその後、彼は友と仲間と道具と想いを託した後

幻想郷から消える事になる

彼の名はバーン

歴史に記されたその大いなる能力は

友を守る程度の能力

人間の里・寺子屋

「……以上が魔帝異変及びバーンについてだ、何か質問はあるか？」

生徒に慧音は言った

今は授業中らしい

「怖いですね魔帝って……」

「そうだな、悪魔を放って幻想郷を荒らしたんだ、私も戦ったんだぞ？」

「バーンって人はどんな人なんですか？」

「ん〜……私にわかるのは強い、ただひたすらに強い……！って事くらいだな」

「強いつて先生より？」

「ああ勿論！」

「満月の先生でも？」

「満月の私でもだ！」

「マジで強いんですね……先生が何人分くらい？」

「マジでヤバイ！どれくらい強いかと言うと先生が100人分くらい？そんなレベルじゃない！仮に私が万人いても勝てないだろう」

「頭突き先生にそこまで言わせるなんて……」

「……何か言ったか？」

「いえ何も」

「……頭突き先生と聞こえたが？」

「滅相もございません、そのような事がある筈がございません」

「……まあいい、話を戻そう、と言っても私にわかるのはそれだけだ、興味があるなら私の友人に詳しい奴がいるから呼んでみよう」

「あっ！もしかして妹紅さんですか？」

「そうだ、あいつはバーンにとって大切な友人だったから私なんかより余程バーンの事を知っている」

「本当ですか!?!あの妹紅さんが歴史に残る人と友達だったなんて!?!」

「本当だ、他にも居るぞ? バーンの友人は7人居る、それと仲間もな」

「誰なんですか!?!」

「仲間は沢山居るな……妖怪から始まり幽霊、半霊や鬼に神、人間も居る」

「鬼に神様!?!凄……」

「改めて考えると仲間も凄い面子だが……友人はもつと凄いぞ?」

「誰ですか!!」

「私の友人、皇帝不死鳥の妹紅に魔女の二天、最強と大いなる妖精、王女に王の妹だな」
「……嘘ですよ？ 幻想郷の頂点の7人ですよ？」

「残念ながら本当だ、ちなみにバーンはもつと強いと思うぞ？」

「どんな人なんですか!! 写真とかないんですか!？」

「写真は無いんだ、射命丸が書いたこの下手くそなイラストだけしか残されていない」

「……こんな感じの人なんですか？」

「……全く似ていない、誇張が過ぎて怪物になつてるからな」

「一目見たいなあ……」

そんな幻想郷のとある風景

(年に1回のこの授業……)

慧音は窓から太陽を見上げる

(これで50回目か……)

バーンが消えてから50年が経っていた

紅魔館・周囲の平地

天候満る所に我は在り……

「黄泉の門開く所に汝在り、出でよ……神の雷……!!」

紫の女性が高らかに詠唱を唱えると白黒衣装の女性の頭上に巨大な魔法陣が展開される

「何!?!それは!?!」

白黒女性が身構える

「これで最後よ!!」

詠唱の完了と同時に魔法は撃たれた

「インディグネイション!!」

魔法陣に蓄積された魔力が雷鳴を轟かせる

「そんな……そんなバカな!？」

その魔法にたじろぐ白黒、だが

「……なんちゃって!」

白黒の女性は雷が落ちる前に既に構えていた

「恋符 「マスタースパーク」!!」

八卦炉から撃たれたレーザーは雷とぶつかる

数秒押し合った後、白黒の女性の口角があがると

レーザーは雷を貫いた

「ふう……こんなもんだろ」

八卦炉をおろした女性が呟いた

「そうね、それにしてもまた威力が上がったんじゃない？アレを貫くなんてまずあり得ない筈なんだけど……」

紫の女性は呆れながらお手上げする

「私にはこれしかないからな、弾幕はパワーだぜ!!」

白黒の女性が力強く答えた

「もう歳なんだし隠居すればいいんじゃない魔理沙?」

白黒の女性は魔理沙

今やすっかり歳をとり、お婆ちゃんと呼ばれる年齢

「まだまだ!私は生涯現役って決めてるんだよパチュリー!」

紫の女性はパチュリー

こちらは魔法使い故にあまり変化は無い

「……いつの間にか50年ね」

「そうだな……いつの間にか魔法の二天なんて言われるようになったってさ」

「そうね……」

50年の月日は二人を魔法の二天と呼ばれるまで高めていた

「パチュリーは呪文ばかり覚えたんだよな、アルテマとかマダンテとかさ、あれも魔の深淵か？」

「そうよ、他には今のインディグネーションもそうだし……結構覚えたわね」

「流石技のパチュリー！賢者って呼ばれるだけあるな！」

「でも一番はやっぱりメドローアね、メドローアだけは今も磨き続けてるし……これも魔導書のお陰」

パチュリーはこの50年間魔の深淵に挑み続けていた、魔導書には他の魔導書の解読の方法も書かれておりその成果は多彩な魔法として昇華され数々の魔の深淵と呼べる魔法を会得していた

その最中にいつの間にか賢者と呼ばれ始め、彼女に師事を乞う者まで現れるまでに成長していた

「メドローアだけは私にはどうしようも出来ないからなあ……私は力を高めてるだけだから応用が利かない」

「魔の深淵をただのスペルで撃ち勝てる時点で応用なんて必要無いと思うけどね……ねえ力の魔理沙？」

「私は細かいのは苦手なんだ、私にはこれが一番合ってる」

「魔理沙も賢者並みに色々出来るのにどうしても力に目がいくのよね、もういつそ賢者を名乗ったら？」

「よせよパチュリー、私は賢者なんて柄じゃない……私を呼ぶならせめて……大魔導士……!!」

「そう……私を呼ぶなら大魔導士と呼んでくれ」

魔理沙はひたすらに、ただひたすらに力を磨き続けた、その過程でいくつもの魔法を会得したが一番心血を注いだのは力

ただ弾幕の力を上げる為だけに時を過ごし

気がつけばその弾幕はスペルのレベルを遙か超越していた

50年の月日は同じ魔法使いのアリスを越え、大魔法使いの白蓮をも抜き去り

二人は魔法使いの頂点となっていた

「……そろそろ皆来る頃ね」

太陽を見上げながらパチュリー

「そうだな……なあパチュリー？」

「何？」

「私達強くなったよな？」

同じく太陽を見上げながら魔理沙が聞く

「それで強くないなんて言ったら大妖精にどやされるわよ？」

「……そうだな……うん！強くなった!!」

太陽に向かって叫ぶ

「今なら……今なら勝てる!!」

友を想い叫んだ

今も約束は忘れていないと

だから会いたい……

ならばかかつて来るがいい……

「ハッ!？」

背後から声が聞こえて反応する

「バー……!!」

振り向いた魔理沙の動きは止まった

(……幻聴……か……)

そこには誰も居なかった

幻聴……

それはとこしえに想うが故に聞こえた

悲しい幻聴……

(……この時期になるといつもだぜ……)

誰も居ない場所を見ながら帽子を下げて目を隠す

(いつまで経つても消化出来てないって事か)

毎年この時期になると魔理沙はいつもバーンの声が聞こえていた

そしてその度に在りし日を思いだし目線を下げていた

「バーンの声が聞こえたんでしょ？」

一瞬驚いた魔理沙

「……私だけじゃなかったか、パチュリーも聞こえるんだな」

すぐに苦笑した

「私だけじゃないわ、妹紅もチルノも聞こえるって言うてる……皆聞こえてるのね」

その言葉に目線が下がる

「……いまだに後悔してるよ、なんで気付いてやれなかったんだ……って……」

「しょうがないわよ、レミイでさえ気付かなかったんだから……」

「わかってるよ、でもさ……やっぱり後悔が消えないんだよなあ……」

二人が黙った瞬間だった

「それは言わない約束だろ？」

「軟弱者めー！」

声が聞こえたと同時に二人を炎と冷気が襲う

「おっとー！」

「ふん……」

魔理沙は軽く飛び避け、パチュリーは防御壁を作り防いだ

「随分なご挨拶ね妹紅、チルノ」

防ぎきったパチュリーが顔を向ける

「これが私達の挨拶だろ？」

「あれぐらい凌げなきゃ話にならないわよー！」

妹紅とチルノ

「お久しぶりです皆さん」

そして大妖精

「来たよ！」

遅れてフラン

「集まったか！」

6人が集合した

妹紅は変わらない

「やっぱ似合ってるなソレ」

3人に指差しながら魔理沙

「へっへーん！良いでしょ！」

チルノは成長した、心は大した成長はないが体は幾分成長している、今は15前後くらいだろうか

その耳には青いイヤリングが着いていた

「これだけあれば何もいりません！」

大妖精も成長した、体はチルノと同じく15前後、心は大きく成長した

その首には緑のネックレスが着いている

「あたしもこれ以外のは着ける気になれないな」

フランは変わらない、成長の遅い吸血鬼故に体は変わらないが心は成長した、口調も変わってないが確かに成長している

その腕には赤黒いブレスレットが着いていた

「レミリアは相変わらずか？」

魔理沙がフランに聞く

「うん……どうしてもこの時期はね……お姉様は特に想いが強かったから……だからバーンの命日が近付くといつも部屋に籠るの……」

レミリアは出てこなかった、だからいつも6人

「まあ良いさ……よし！集まったし始めようか！」

妹紅が開始を宣言する

「よっし！やるぜ!!」

魔理沙の返しに皆は張り切り

「勝負だ!!」

始まった

6人は毎年バーンの命日になると集まって勝負をしていた

あれから図書館にはあまり皆は出向かず各々が研磨した力を命日になると競いあう様に勝負をしているのだ

まるでバーンに見てもらおう様に……

「これが……私の不死鳥……その想像を絶する威力と優雅なる姿から太古より幻想郷ではこう呼ばれる……」

「やあああつてやるぜ!!」

「魔の深淵を見せてあげるわ」

「豚の様な悲鳴をあげさせてあげる！」

「私の力は風を友とし、風の中に真空を走らせます！」

「幻想郷氷の支配者、あたいこそ最強……見事越えて見なさい！」

バーンの意思を継いだ6人はその想いを忘れる事はなかった
強くなる

それは終わりの無い道なのかもしれない

でもそれだけは止められない

それが交わした約束だから

バーンの想いは消えない……

「あー負けた！ちくしょう!!」

ボロボロになった魔理沙が草原に寝転がりながら叫んだ
「あたいつたら最強ね!!」

イヤリングを弾きながらチルノが得意気に指差す

「今回はいけると思っただけだな……」

魔理沙の隣の妹紅、凍りついた腕を溶かしている

「去年は誰が勝ったつけ？」

フランもポロポロ

「去年もチルノね、その前もその前もチルノよ」

バーンの魔導書に付いた汚れを落としながらパチュリー

「まさかチルノちゃんが一番強くなるなんてバーンさんも思わなかったでしょうね」

ポロポロながら苦笑する大妖精

「あたいが本気でしたらこんなもんよ!!」

「そのうち凍れる時の秘法の領域まで行きそうね……」

この50年で皆強くなった

皇帝不死鳥の妹紅

カイザーフェニックスの名を冠した妹紅は今や伝説の妖怪ハンターとして名を轟かしている

彼女を怒らせたら最後、灰になるしか道は無いとさえ言われている(文文。新聞より)
カイザーフェニックスの名にしたのはバーンを忘れない為

いつかカイザーフェニックスを越えて真なる皇帝不死鳥になるとの想いを込めてい
る

魔女の二天

魔理沙とパチュリー二人を指してそう呼ばれる

もはやスペルのレベルではない威力の弾幕を持つ魔理沙と数々の魔の深淵を会得し
尚も研鑽を怠らないパチュリー

二人もまた形は異なるがバーンの意思を継ぎ自己を高めた

大いなる妖精、大妖精

一番弱かった彼女も今や皆に肩を並べる強さになった

そして強さ以上に賢くなった大妖精はチルノと並び、妖怪を代表するまでになった
ちなみに発育は胸に集中した模様

王の妹、フラン

元々吸血鬼故に強かったフランは更に実力を上げ、太陽すら克服し日中でも活動出来
る様になっていた

その力はバーンの助言通りに身体能力を鍛え攻守共に素晴らしい成長を遂げた
速さは文を越え、勇儀に殴り勝てるまでになった

王とは姉ではなく勿論バーンの事、バーンを想う誰かが言い始めいつの間にか呼ばれ
始めた、フラン自身も義兄同然のバーンの妹としてそれを受け入れ喜んだ

最強、チルノ

成長した彼女は意外にも誰よりも強かった

長所である冷気を高め続けた結果、彼女のそれは冷気を超越した何かになつてい
た、彼女の意思一つで瞬時に好きな場所、好きな物を凍らせる

魔法はおろか妹紅すら凍らせるその冷気は彼女を名実共に最強まで押し上げた
バーンの意思を最も顕現したのが彼女だった

だが発育は非常に残念な模様

誰もが一騎当千と呼ばれる強さになった

だが誰もその力を悪用したり私欲に使っていない

それどころか満足すらしていない

それはまだ未だバーンの背を追いかけ続けているから

遙か先に朧気に見えども追い付けない

強く大きな背を……

「紅魔館はどうだ？ 咲夜と美鈴はどうなんだ？」

談笑に入った魔理沙が聞く

「咲夜は変わらず……いえ今年でまた一歳歳をとったわね」

パチュリーが含み笑いをしながら紅茶を飲む

「薬の実験に飲ませたら10年で一歳しか歳を取らなくなったんだろ？ 酷い事するなよパチユリー」

「あれは魔理沙が変なキノコを入れたからよ、本来は胸が大きくなるかもしれない薬だったのに……」

「無理だろ！ それに巨乳の咲夜なんて私は見たくない！」

「わからなくはないけど本人あれで気にしてるのよ？」

「ホントかよ!？」

「いつかバーンのナイフで刺されるかもね」

「その時は返り討ちにしてやるぜ！」

咲夜は今も紅魔館で働いている

バーンから貰ったナイフをいつも離さずに

「美鈴はまだやってるのか？ なんだっけ……流派……」

「流派東方不敗でしょ？ やってるわ」

「面白いよな！ あの門番が今や幻想郷で格闘戦なら無敗の武道家なんだからな」

「弟子までとって門の前で遊んでいるわ、でも応対はしっかりするからレミイも文句言わないの」

「天地魔闘の構えに似た技が最終奥義なんだろう？」

「ええ、弾幕をあらかじめ展開して2回行動と併用して疑似的な天地魔闘を再現してるわ」

「凄いな美鈴！」

「いずれは天地魔闘を完成させるつもりみたい、でも私じゃ無理かもしれない、あれはバーンさんだから出来る技だって言ってたわ」

「でもやるつもりなんだろう？なら大丈夫さ！」

「その前に東西南北中央不敗になる！って言ってた」

「スーパー美鈴か!!」

美鈴は自らの武技を流派東方不敗とし日夜鍛練している

不敗を名乗るのは自らを背水に追いやる為、バーンに託された技で絶対に負けない

勝手に決めたバーンとの約束

天地魔闘の構えをいつかものにし、格闘戦は絶対に負けない

美鈴は自らにそれを課し、バーンとの絆として生きている

「天地魔闘って言えば妖夢だよ！」

「ああ！妖夢！あの時は凄かったな！あの魔族との勝負！」

「ロン・ベルクさんですね、お弟子さんが隠居して旅に出たら幻想郷に迷い混んだつてい
う」

「そうそう！強かったのもあるけど私が一番驚いたのはバーンの事を教えた時だよ」

「大魔王バーンだとお!!」だろ？あのリアクションはヤバイ!」

「あれは確かにヤバかった！でも話を聞いたなら納得だったよ」

「バーンは地上を破壊しようとしてたんだよね……」

「でもあたいは幻想郷のバーンしか知らないから別人みたいに感じたよ」

「私もです」

「あまりに違い過ぎたからね……それより妖夢でしょ?」

「そうだった!あの二人の戦いは凄かった!試合だったけどお互い本気になってさ!」

「永琳が治した腕に弟子が作った完成した星皇剣!かたや幻想郷最高の剣士妖夢!奇しくも同じ二刀流!実力は互角だったけどあの技で勝負が決まったんだよな!」

「ロン・ベルクは星皇十字剣、あれはとんでもない技だったよ」

「対する妖夢は磨き続けた天地魔闘破りの一刀!ただ純粹に力を込めて攻撃も防御も貫く乾坤一擲の一撃!妖夢が出した天地魔闘に勝つ為の答えはカラミティエンドを振じ伏せ、フェニックスウイングにも防がれない一撃を決める事だった!」

「そして勝ったのは妖夢！星皇剣を弾き飛ばして見事勝ったんだよな！」

「妖夢も強くなったよね！」

妖夢は天地魔闘を破る為に力を磨き続けている、いまだに辻斬り癖は直ってないが今や美鈴と並び弾幕に頼らない戦いではフランと同じく知らない者はいないほど

「幽々子や白蓮、さとりと勇儀にアリス……そんでルーミアは大して変わらないな」

「そうですね、幽々子さんは妖夢さんの成長だけが楽しみみたいですし白蓮さんは妖怪を守る為に頑張ってます」

「さとりは昔より積極的になったくらいか、心を読まない様になって親しみやすくなった」

「勇儀は変わらず鬼って感じね、フランにこそ負けたけどやっぱりその力は強大」

「アリスは隠さなくなっただけ、力とか本音をさ、それと他人に関心を持つ様になった、良い事だぜ」

「ルーミアちゃんも元気ですよ！リボンを大事に毎日楽しそうにしています！」

仲間は今も元気に生きている

「変わったで言ったら幽香だろ！」

「あー！確かに！あれはビックリしたよね！」

「笑ったのよね……私達に、とても素敵な笑顔で……昔の幽香からしたら信じられないけど」

「典型的なツンデレみたいな奴だったのにな、「貴方を助けた訳じゃないわ……貴方を殺すのはこの私だからよ」とか言いだしそうな奴だったのに」

「でも私達は大丈夫ですけどあの花を触ったら虐められるらしいですよ？」

「バーンが贈った花だろ？気持ちちはわかるぜ、私も怒ると思う」

「……ねえ皆なんの話してんの？」

「なについて……幽香が笑う様になった話だよ親分」

「あたい笑った所見てないよ？」

「……プツ！」

「アハハ！そりやチルノ、お前見下されてんだよ！バカには見せられないってさ！ハハハ！」

「……あいつにも味あわせてやる……あたいの恐ろしさをねえ……!!」

「やめとけて、花を全部凍らせたらたぶん泣くぞあいつ」

幽香は笑う様になった、少しだけだが打ち解ける様になり幻想郷の暮らしが前より楽しくなっただけらしい

る
絆の花は今も大事にされておられ、幽香の中で自分と同価値となるほど大事にされてい

「文は変わらず嘘臭い新聞ばかり書いてるな」

「マント着けてる時だけは最速なブン屋か、あれも変わらないな」

「にとりは星降りの大会に出るんだ！って言ってキラーマシン改造してるし」

「キラーマシン type 非想天則だっけ？何を目指してんだろうなああの河童は……」

文にとりも遅しく生きています

「永遠亭はどうなんだ妹紅？」

「輝夜は相変わらず引きこもりさ、でも氣力に満ちてて密かに修行してるらしい……私に勝てないのが悔しいんだろうな」

「へえ……あの輝夜がねえ……永琳は？」

「永琳も変わってない……相変わらずさ、もう幻想郷は私達に任せるからただの医者として生きるってさ」

「世界樹の葉を増やせたのは凄いわね、手間が掛かるけど今は4枚出来てるみたいね」

輝夜は与えられた死を糧に生きる事に楽しみを見つけ、永琳は永琳なりに幻想郷を

想って生きている

「あつ！この前正邪さん見ましたよ！」

「何してたんだ？」

「無縁塚で一人修行してました」

「なんで？」

「いつかこの力の序列をひっくり返す！らしいです」

「おー！言う様になったなあいつも」

「抜かれない様に気を付けましょう！」

正邪も今や幻想郷に再び受け入れられ打倒7人に燃えている

「霖之助は魔理沙？」

「香霖はこの前、客と喧嘩してたぜ、シャハルの鏡を譲ってくれて客と」

「譲ったのか？」

「まさか、一番大事にしてる物なんだぜ？勿論断つたらしいけどしまいにや殺してでも奪い取る！なんて客が言い出してさ」

「それで？」

「二人でぶっ飛ばした」

「ラブラブアタックですか？愛の心にて悪しき空間を断つ！みたいな」

「なわけないだろ」

「えっ!?!結婚してなかったんですか!?!」

「……知ってるだろ大妖精……私が独身って……お前も言うようになったな……」

「えへへ……」

霖之助も変わらず趣味人

しかしバーンの頼み通り魔理沙を見守っている

「守矢は何もしなくなつたな」

「そういえばそうだね」

「早苗は現人神だからか何故か歳取らないからって怠けてるし」

「諏訪子は信仰を集める為だと言って自分をプリントした販売してるし……あれ見たけど喋りだしそうで怖いよ」

「知ってる？神奈子は幻想郷全てに目を光らせているのよ?」

「なんで?」

「危険から守る為よ、妖怪も人間も自然も全て守る為に」

「慧音が言つてたけど私達は特に目をかけてくれてるらしい、理由はおそらくバーンだろうつて言つてたけどなんか言われたのかな？」

「そこは私達が聞くべきじゃないわ、もしバーンとの事であつてもそれは二人の事、詮索は無粋ね」

「だな」

守矢も波風立てず日々を過ごしている

唯一の神の仲間、神奈子だけはバーンの願いを叶え続けていた

「そう言えば萃香さんは？」

「萃香も変わらないな、好きなように生きてる、ただバーンから貰った霧の名を少しでも貶したらヤバイ事になる」

「あの名は萃香の誇りだからな、一回誰かが貶して大暴れしたもんなあ」

「あの時は大変でした、殺すつて言つて聞かないんですもん、「この名は私の一番大事な仲間から贈られた名だ、貶すのはバーンを貶すも同じ……」つて言つて」

「完全にキレてた萃香は強くなつたのもあつて止めるのに苦労したもんだ」

「最後はチルノちゃんが頭冷やせつて氷付けにしてやつと治まつたんですね」

「エターナルフォースブリザード……相手は死ぬ」

「いや殺すなよ」

「まあでも萃香は幽香と同じね、バーンから貰ったものを大切にしている」

「それを自らの誇りにしてそれ以上にバーンを想う……か」

萃香は萃香として生きている、だがその内にはバーンの想いを片時も忘れない強い絆を秘めている

「紫は今は何処に行ってるんだ？」

「今は異世界の魔界にいるらしい、軀だか黄泉なんて言うS級妖怪と修行中って霊夢が言ってた」

「そーいや昔に紫が言ってたよ、中々良い事言ってた」

「なんて？」

「修行で得た力は他人の為に使うもの……だから私は得た力を幻想郷の為に使う……変わったなあ紫……バーンの叱責が余程効いたらしいな」

「守る為に自らが戦う……ですか、私達もうかうかしてられませんね！」

「あたいには勝てないけどね！」

紫は生きている、守る為に

愛する幻想郷を

バーンが守った幻想郷を守る為に

「あ、そろそろ代替えじゃないのか？」

「ああ霊夢か、もうすぐ霊夢も先代になる時期か」

「言つてましたよ霊夢さん、髪留めは次代の博麗の巫女に受け継がせていくつて」

「あれ取つた霊夢は強いもんなあ……一時だけ幻想郷最強は霊夢だったくらいだし……
反則だぜあれは……」

「そういえば霊夢が言つてたあの白者異変の時の意味わかつた？」

「わからないんだよな……霊夢に聞いてもバーンが守つてくれたとしか言わないし
……」

「確か……「細工つてこの事だったのね」でしょ？」

「なんだろうなあ」

魔理沙と同じく人間の霊夢も今やおばあちゃん

バーンとの約束を守り通し歴代最強の博麗の巫女として幻想郷に名を知らしめてい
た

信仰は相変わらずだが賽銭は少し増えたらしい

バーンに触れた仲間達

各々にバーンを想い

幻想郷を生きている

今日は幻想郷は平和だった

「白者異変で思い出しただけどあの化物妖怪はどうなったんだ？」

妹紅は気になり聞いた

幻想郷が平和なのは今日は、であっていつも平和だったわけではなかった

「紫は心配無いつて言ってたから大丈夫なんでしょうけど……」

些か不安なパチュリー

「白面の者……だったわねあの妖怪」

「あんな妖怪見たことなかったです……」

「紫の式が言ってたけどあれも九尾の狐らしいね、規格外の化物らしいけど」

3人も苦い顔で見合わせる

白者異変

バーンが消えてから起きた異変

幻想郷の外の世界で生まれたその大妖の名は白面の者

憎しみが生んだ恐怖を餌とする妖怪

外の世界で長らく結界に封印されていたが封印を破り、外の世界の妖怪や人間達と決戦を繰り広げていた所に、決戦領域を作る強大な結界と博麗大結界が共鳴し幻想郷全てを決戦の場にしてしまったのだ

幻想郷の民は外の世界の者達と協力し、これと戦い、退ける事に成功していた

「あーもしかしてあれじゃないか？」

「何？」

「あいつ言ってたろ？結界を壊して幻想郷ごと私達を滅ぼすって」

「言ってたわね、でも尾の力を8本使っても壊せなかった……誰だ！誰が邪魔をする!!」……なんて言ってたけど」

「それだよ！結界が壊せなかったのはバーンのお陰じゃないか？」

「……そう言われれば確かに白面の力は結界を壊せた筈……それだけの力はあつたし霊夢と紫の慌て様からして間違いないでしょうね、私はあの槍を持った子と字伏が何かをしたんだと思ってたけど……」

「……いや！絶対にそうだ！そうに違いない！」

魔理沙は断言した

幻想郷が無事だったのはバーンのお陰だと

それは正解だった

バーンは灰になった後、最後に博麗神社へと向かった

灰の行方は博麗大結界

強大な魔力を含んだ灰は博麗大結界に同化していた

バーンが行った細工とは死後に灰を博麗大結界に同化させ結界を守る事

死後もバーンはその身を捧げたのだ

幻想郷に……友の為に……

「……そうだな、私もそう思いたい」

妹紅もそうであると思った

今も見守ってくれているのだと

「……よーし！そろそろ行くわよ！」

チルノが飛び上がった

「……よし！行くか！」

その言葉に6人は立ち上がり、歩き始めた

紅魔館の中へ

紅魔館・レミリアの私室

部屋から声が聞こえてくる

「散り逝くと知る花はそれでも強く生きてる……色鮮やかに……」

一人歌を口ずさむ

虚空を眺めながら

月の欠片を集めて

夢を飾り 眠る

時の砂散りばめても

あの頃へ 還れない

逢いたくて 愛おしくて

触れたくて 苦しくて

届かない 伝わらない

叶わない 遠すぎて

今はもう 君はいないよ……

「……」

歌い終わったレミリアは大事に飾られている宝石に魔力を送る

魔力が送られた宝石から曲が流れだす

亡き王女の為のセプテット

バーンから贈られた曲を聞きながら目を閉じる

(貴方が居なくなってから……もう50年……)

月日はレミリアに想いを募らせるだけだった

忘れる事など出来ない、出来る筈が無い

誰よりも想いが強いが故に命日が近付くといつも心が潰れそうになる

「強くなったわよ……」

心とは裏腹に月日はレミリアを強くさせた

高めた力がかつて敵わなかった月の姉妹にも勝てるまでになった

想いは確かに紡がれている

愛する者の願いを叶え続ける為に……

(ねえバーン……私ね、ずっと考えてた事があるの……)

曲が終わり目を開けたレミリアは返事の返らない考えを聞いてみる

(区切りをつけないといけないと思ってるの、貴方の事を忘れるわけじゃない……でも貴方はいつまでも引き摺るのは望まないでしょ?)

(だからね、想いはそのまま強く生きる……太陽になった貴方が曇らない様に……涙を流さない様に……)

(でも安心して? 私が愛するのは貴方だけだから……)

バーンにそう話したレミリアは歩きだした

(だからバーン……最後に一目でいいから……)

ドアノブに手を掛け

(貴方に逢いたい……)

溢れそうな想いを抑え

レミリアは向かった

紅魔館・図書館

「久しぶりだな……バーン」

図書館に祀られている物に話し掛けた

皆が話し掛けたのはバーンの墓

7人の強い要望でバーンの墓は図書館に置かれる事になっていた
僅か半年、だけど一番長く共に過ごしたこの場所に……

「綺麗にしてくれてるな。パチュリー」

「勿論よ、私とこあが毎日欠かさず掃除してるもの」

墓とは言ったがそれはとても質素な物

小さな墓に小さい瓶に入ったバーンの灰を置き、皆が贈ったスカーフを置いていた

(私達は元気だよバーン……)

一人一人が黙祷する

在りし日を思いだしながら

「……さてと皆で食事でも行こうか」

黙祷を終え、妹紅が言った

「今日はあたいが出してあげる！」

「あたしが出す！」

「私が出してやっても良いぜ！」

「いえ、私が出しますよ！」

「たまには私が出しましょうか」

誰がお金を出すかで言い合う

「私が出すよ」

「「「どうぞどうぞ」」」

「お前等なあ……」

笑い合う6人

「いいわ、私が出してあげる」

そこにレミリアが現れた

「大丈夫なのかよレミリア？」

「大丈夫よ、それより食事に行く前に皆に提案があるの」

「何ですか提案って？」

レミリアは一瞬だけ間を置いて話しだした

「バーンを自由にしてあげないかしら？」

告げられた言葉に6人は意味がわからず問う

「自由って何よ？」

「その僅かに残したバーンの灰を振り撒くのよ、幻想郷に……」

「……」

皆は黙った

レミリアと違い6人はバーンへの想いに区切りをつけている

否定も肯定もしなかったのは誰よりも強い想いを抱いているレミリアがそう言った

から

友の気持ちを察し、各々で考えた

「……わかった、レミリアがそう言うなら私に異論は無いよ」

妹紅は賛成

「だよな、バーンの彼女にそう言われちゃ尊重してやらないとな」

魔理沙も賛成

「あたいは……嫌……かな」

「あたしも……」

チルノとフランは反対、僅かな灰でさえ置いておきたい

だがこれは間違いでは無い、この選択に正解は無いからだ

「チルノちゃん、フランちゃん……良いんじゃないかな？」

大妖精が言う

「そうね、バーンの意思は私達の中にある……絆は不滅……それだけあれば充分でしょ？」

パチュリーが諭す、二人は賛成

二人の考えを聞いたチルノとフランは少し考えた後

「……わかったわよ」

「うん……」

澁々ながら賛成した

「ありがとう皆……」

礼を言った後、レミリアは瓶を手に取り皆に並ぶ

ボウ……

灰が突然光を放ち始めた

「なんだ!？」

今までこんな事はなかった

だから皆は焦る、危険は無いとはわかるが不思議な現象に戸惑いが隠せない
「私達の道具から光が集められてる……」

パチュリーが光の原因を見つけた、7人に与えられたバーンの遺産から出た光が灰に送られていたのだ

「レミリアが居るからか？」

今までバーンの命日にレミリアが皆と集まる事など無かった

「それだけじゃないと思います、私達3人の変化したアクセサリーも原因じゃないですか?」

変化したアクセサリーも原因の1つなのではと言った

「何にせよこれはバーンが何かをしたんだよ!」

この光はバーンが何かをしたんだと、私達に何かをしてくれようとしている

「蓋を空けるレミリア!」

光が灰に集まっているのなら灰が何かをするのだと思った魔理沙は空ける様に促す

「わかったわ!」

レミリアが蓋を空けると灰はひとりでに飛び出し7人の周囲を囲む
周囲に浮いた灰は7人の頭上に集まると小さい異空間の穴を開けた

「……何か出た」

穴から1枚の小さな紙の様な物が落ちてくる

「……」

それはレミリアの元に落ち、レミリアはそれを掴んで、見た

「嘘……」

それを見たレミリアからそう呟かれると

「うー……」

涙が溜まり

「……あああああん……!!」

一気に流れだした

「どうしたレミリア！なんだそれは!!」

急に泣きだしたレミリアに魔理沙が聞く

「……見たらっ……グスツ……わかるわ……」

涙を拭いながらそれを魔理沙に渡した

「……!!」

それを見た魔理沙も抑えきれない涙が流れる

「バカヤロウ……私はもうおばあちゃんだぜ……こんな歳になって……泣かすなよ……」

写る者に悪態つく

「……やってくれたな、もう泣かないって決めてたのにさ……」

妹紅も自然と涙が伝っていた

「もう……卑怯よ……反則よ……」

涙で顔をいっぱい濡らしながらも笑うパチュリィ

「バーンだ……!!」

それを覗きこむフランが眩き

「バーンが……バーンが居るよ……!!」

チルノと共に泣きだす

「バーンさあああん……!!」

大妖精は大声で泣いた

出てきたのは写真

在りし日に友と仲間、皆が写った写真

バーンを中心に笑う皆の姿

宴会の時に文のカメラを拝借したバーンは1枚だけ撮っていた
そしてそれを異空間に封じ、成長した7人の力が集まった時に道具を介して封印が解
ける様にしていただけだ

逢いたかった者はそこにいた

逢いたくて……逢いたくてしようがなかった

望む形の再会ではないがそれだけで充分だった

感じれたから

大好きだったバーンを……

「……裏に何か書いてる」

レミリアが写真を裏返す

この時を永久に刻む

余は此処に……

此処にいる……

最愛の友と共に……

